

遊戯王ARC—V 光紡ぐ意思

シューティング☆

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「揺れる、魂のペンデュラム！天空に描け光のアーク！ペンデュラム召喚！！現れる、我がしもべのモンスターたち！」

榊遊矢：彼が行った新たな召喚方法、ペンデュラム。ペンデュラム召喚が行われたその時、5つの欠片から光が放たれる。

…そして、選ばれしものたちを、大いなる意思との戦いへと、導く。

※この小説においては、ハーピイの羽箒は禁止、大嵐が制限、ということにします。また、一部OCGの現行レギュレーションとは違う場合がございます。ご了承ください。

## 目次

プロローグ

第01話	偉大なる者達の進撃	4
第02話	繰り出される竜の星々	17
第03話	重なる剣	28
第04話	ぬいぐるみ遊び	36
第05話	動き出した反逆者	52
第06話	反逆の翼、広がる	56
第07話	現れる光	65
第08話	光の使者	73
第09話	メカニック師匠	90
第10話	隼と社長とのお話し	104
第11話	開幕！舞網チャンピオンシップ！！	111
第12話	咲き誇りし華、そして…	119
第13話	反逆VS翼	128
第14話	話し合い	138
第15話	黒きもの	142
第16話	天より降りしもの達	152
第17話	次へ向けて	171
第18話	覇者たる星VS新たな眼	178
第19話	迫る融合次元の影	198
第20話	相対する2体の竜	218
第21話	星を司る戦士VS偉大なる英霊と精霊	235
第22話	勲章おじさん出没	250
第23話	融合次元	269

第24話 生き残れ！舞網バトルシティを！ | 283  
第25話 ある意味の師弟対決！弟子の弟子はつまり弟子…？

308

第26話 不穏な影 | 320

第27話 恐怖の恵み | 333

第28話 強襲！オベリスクフオース | 353

第29話 怒りの共鳴 | 369

第30話 人を怒らせると碌なことにならない | 381

第31話 恐怖の機械軍団 | 402

第32話 輝きを放つ竜と全てを飲み込む者 | 419

第33話 貪り喰らうものVS光の使者 | 454

第34話 引き裂いた絆 | 475

第35話 終息する戦い | 493

第36話 新たな兆し | 506

第37話 対決 遊矢VS零児 前編 | 520

第38話 対決 遊矢VS零児 後編 | 532

## プロローグ

アクションデュエル、それは…質量をもったソリッドヴィジョンの実現により可能となった、進化したデュエル。モンスターとともに、地を蹴り、宙を舞う…そんなデュエルに、人々は魅了されていた。…そして…。

「オレは、スケール1の星読みの魔術師と、スケール8の時読みの魔術師を、ペンデュラムゾーンにセッティング！」

2つの光の柱が、現れる。

「これにより、レベル2から7のモンスターを、同時に召喚可能！」

それは、アクションデュエルに次いで、革新であった。

「揺れる！魂のペンデュラム！天空に描け光のアーク！」

今までになかった、そのシステム。

「ペンデュラム召喚!!」

しかし、デュエルディスクは、反応した。…その理由は、まだ定かではない。

「現れる！我がしもべのモンスターたち!!」

榊遊矢…彼はその、新たな力を…ペンデュラムを発現させた、最初の人間である。そしてペンデュラム召喚が行われた頃、5つの欠片が…虹、青、黒、緑、黄色…それぞれの光を放っていた。

「え?! な、何これ…なんで、いきなり光って…」

「うおお?! な、なな、なんだ?!」

「…? これは、いったい…」

「え?... 光が…」

「! こんなところで光られても、困るな…」

セフィラの欠片…そう呼ばれる石が光を放ち、そしてその光は、それぞれの持ち主のデッキに宿る。…そして、これは…運命の始まりであつた……。

「…始まつたか、愚かな物語が」

とある場所…そこでは、榊遊矢とその対戦相手、ストロング石島とのアクションデュエルが映し出された画面が…暗い空間の中、空中に浮いている。

それを見ているのは1人の少女。フードを深く被り、その表情は窺い知れない。

「…長かった…あれからどれほど経ったか…ふふふ…全ての準備は整いつつある…後はそれを完了させるまで…タイミングは逃せないな」  
その声には明らかな喜びが含まれているが、どこか邪悪だ。

「…だがセフィラの欠片…あれは厄介だ。放置し過ぎれば妾にとって障害となりうる…さて、いつにするか…」

何かを考えるように顎に手を置くが、すぐにやめる。

「…その期はまだまだ、見極める必要があるか。だが…もうすぐ…も

うすぐ、待ちわびた時が…世界の再製の時が、やっと訪れる…それまでの茶番を、じっくり楽しもうじゃないか。フッフッフ…ハハハハハハハ!!」

「…もう、戻れないんだな、あの頃に。…頼む…早く、早く来てくれ」  
そして、どことも知れぬ場所で、誰かがそつと呟いた。

ペンデュラムの出現…これは、始まりにしか過ぎない。…避けることはできない、戦いの。

## 第01話 偉大なる者達の進撃

~~~~~ LDS ~~~~~

「え？社長が、ですか」

「ああ、そうだ」

…榊遊矢がペンデュラムを使ってから数日後…レオ・デュエル・スクール…通称、LDS…その建物。そのロビーにて、白い髪をポニーテールにした少女と、スーツを着てサングラスをかけた男性…中島さんと呼ばれる人物が話しをしていた。

「社長が、お前に話しがあるとのことだ。すぐに社長室に行くように」

「ほ、ほんとに私ですか？」

「…巳柳遊華は、塾生は多くとも君だけだ」

「確かに…まあでも、今日は時間が空いていますのでいいですが…でも、いったい何のお話で」

「行けば分かることだ」

中島さんにそう言われ、白いポニーテールの少女…巳柳遊華は、社長のところへ…レオ・コーポレーション社長室へと、向かう。

そしてなぜ、遊華が呼ばれたかと言えば、それは数日前…榊遊矢がペンデュラム召喚を行った頃に遡る。

「？…社長！」

「なんだ」

「ペンデュラムと思われる召喚反応が、微弱ながら他にも確認されました」

「何…場所はどこだ」

と、司令室のような場所にて社長と呼ばれた人物…赤いマフラーを身につけたこの人物は赤馬零児。レオ・コーポレーションの社長である。未成年で社長、そしてプロデュエリストというのだから、凄腕であることは間違いない。

「はい。舞網市の住宅地と…高架下です。どちらも遠く離れていま



す」

「住宅地：詳しい位置は分かるか？」

「少々お待ちを……モニターに出ます」

その声とともに、大型のモニターに、住宅地の詳細な地図と、おそらく召喚反応を示す印が点滅している。点滅している位置は家のようだ。

「…それぞれ召喚反応付近の、監視カメラの映像を映せ」

「はっ！………民家、及び高架下の詳細な映像は映せませんが…」

「…高架下に関しては、監視カメラの増設を依頼しておこう…とにかく、映せ」

「はっ！」

…映像を見た結果、それぞれの位置からはそこにある照明では出せないような光が放たれ、うち民家のほうに関しては調査の結果、白いポニーテールの少女が住民で光の元が彼女の部屋であったことが判明した………ん？なんで分かったのか？それに関しては、少女が毎朝、部屋の窓を開けて顔を覗かせていたからだ。

そういう経緯があり、赤馬零児は社長命令で、LDSの塾生である遊華を呼びつけた、という訳であった。そして呼びつけた本人は…社長室にて、静かに考え事。そんな考え事をしている最中、ノック音が聞こえた。

「…入れ」

「失礼します！」

入ってきたのは、白いポニーテールの少女、遊華。…緊張しているのか、動きがぎこちない。…そして、現在零児が座っている位置からは、少々離れた位置で止まる。

「…もう少し近くで構わない」

「は、はい！」

…やはり、緊張のせい動きがぎこちない。右手と右足が一緒に動いている始末だ。

「…それほどまでに緊張してもらっても、少々困るが…」

「い、いえ！そ、その、呼ばれるなんてそんなにないので」

「できれば楽しんでもらえれば、ありがたい」

「は、はい…スウー…ハア…スウー…ハア…よ、よし」

よしと言っているが、彼女の緊張が解かれている…という訳ではない。少しマシになった程度である。

「…ではさっそくだが…榊遊矢を、覚えているか？」

「え？はい。ストロング石島とデュエルを行って、新しい召喚方法、ペンデュラム召喚を使ったデュエリスト…ですよね」

「その通りだ。そしてここからが本題だ。…君は、ペンデュラムカードを…このようなカードを、持っているか？」

というと、1枚のカードを見せた…それは、縁の色が、下が緑、上が橙となっているカード…そう、まさにペンデュラムカードである。

「?!しや、社長も?!」

「…その反応を見るからに、君も持っている…そう考えていいか？」

「は、はい…えつと…あ、これが、それです」

というと、遊華は自分のデッキから、2枚のカードを取り出した。

…それは零児が見せたカードと、縁の色が同じであった。

「では、そのカードを入手した経緯…できれば詳しく、話してもらえるか？」

「は、はい…ちょうど、榊遊矢と、ストロング石島とのデュエルで、ペンデュラム召喚が行われたときに、なんですけど…テレビを見ていたら、急に…この石が光って…」

「ほう…その石が」

彼女の言う石とは…首から下げているペンダントについている、虹色の石。だが、不思議な形をしており、まるで何かの欠片にも見えなくもない…そんな形をしている。

「あ、このペンダントは、私の母がプレゼントしてくれたもので…この石が光って、その光が、デッキに入ったと思ったら、このカードが…」  
「なら、できればそのペンダント、少し調べたいのだが…構わないか」

？」

「え？で、でも…調べるってことは、渡す、ってことですよね」  
「できる限り早めに返すことを約束しよう」

遊華は悩んでいる。母からのプレゼント、ということもあって大切なものなのだろう。…数分考えて、遊華は答えを出した。

「…わ、分かりました…なんで光ったのか分ければ、それはそれでうれしいですし…」

「感謝する。…それともう一つ、頼みごとがある」

「？な、なんでしよう」

ペンダントのこともあって、心の中で思わず身構える遊華。だが零児から出てきたのは…無理難題、という訳でもなかった。

「私とデュエルをしてもらいたい」

「……え？でゆ、デュエル？」

「そうだ」

「…それなら喜んで！」

デュエルのこととなればテンションがあがる、デュエルバカなのだろうか…固かった表情が、一気に緩んで笑顔に。

「ならば、さっそく向かおう」

「はい！」

…なお、デュエルフィールドへ向かう道中、中島さんと合流し、遊華はペンダントを中島さんに預けたのであった。

そしてLDSのデュエルフィールド…メインコートに到着。

「それでは始めよう…私の都合でアクションデュエルとなるが、いいか？」

「いえいえ構いません！」

「そうか…アクションフィールドは君の自由で構わない」

「え？いいんですか？…それじゃあお言葉に甘えて……アクションフィールド、雲海大平原！」

ということで、アクションフィールドを決定した。メインコートの

風景が一変し、白い大地が広がる青空へと変化した。上空には少々傾き気味だった太陽が、さんさんと輝いている。そう…この雲海大平原は、雲の上でアクションデュエルを行うのだ。

「戦いの殿堂に集いしデュエリスト達が」

「モンスターとともに！地を蹴り！宙を舞いー！」

「フィールド内を駆け巡る」

「見よ！これぞデュエルの最強進化系!!」

「アクション…」

「デュエル！」

YUKA LP 4000

VS

LEIZI LP 4000

練習しただろと言いたくなるぐらい息ピッタリな、アクションデュエルの開始前の定番口上。デュエルの声とともに、雲海庭園にアクションカードが散らばる。…アクションカード…アクションデュエルの重要要素の1つ。アクションカードは質量を持ったソリッドヴィジョン…リアルソリッドヴィジョンで構築されたカードであり、それを使うことで、スタンディング形式のデュエルより、幅広い戦術を行える。

「それじゃあ、先攻後攻は、社長からどうぞ」

「そうか…では、先攻は私がもらおう。私のターン。…私は手札から、DDゴブリンを召喚！」

DDゴブリン ATK 1400

現れたのは、小柄な人型のモンスター…ゴブリンである。

「DD…さっきのカードと同じ…」

「そうだ。そしてDDゴブリンの効果！このカードが召喚に成功したとき、デッキから契約書を1枚、手札に加える。…私が手札に加えるのは、地獄門の契約書」

DDゴブリン 悪魔族・効果 闇属性 星4 ATK 1400  
DEF 1000

「DDゴブリン」の①の効果は、1ターンに1度しか発動できない。

①このカードが召喚に成功したとき、発動できる。デッキから「契約書」カードを1枚を手札に加える。

「契約書…?」

「続いて永続魔法、地獄門の契約書を発動!このカードは自分のスタンバイフェイズごとに、自分のライフに1000ポイントのダメージを受ける」

「え?!ノーマルルールならともかく、アクションルールで、そんなライフダメージの大きいカードを…」

ライフに関して言えば、ノーマルルールとアクションルールの2つがある。ノーマルルールが8000、アクションルールが4000である。何故分けられているのかと言われれば…やはり、スタンディング形式よりも危険だからだろう。

「これでいい。地獄門の契約書には、もう1つの効果がある。1ターンに1度、デッキからDDモンスター1体を、手札に加える。この効果により、私はデッキから、DDリリスを手札に加える」

「サーチ効果…(レベル指定がない…)」

「続けて手札から魔法カード、ワンフォー・ワンを発動する。先程手札に加えたDDリリスを墓地へ送り、デッキからDD魔導賢者ケプラーを特殊召喚する」

DD魔導賢者ケプラー DEF 0

「…さっきのペンデュラムカード…」

先ほど見せたペンデュラムカード…いくつかの球体が本体となる部分を中心に回っているのを見てみると、恒星の周りを回っている惑星にも見える、そのようなモンスターがフィールドに現れる。

「DD魔導賢者ケプラーは召喚、特殊召喚に成功した場合、このカード以外の、自分フィールドのDD1体を手札に戻すか、デッキから契約書を手札に加える…その2つのうち、1つを使える。これにより私は

デッキから契約書を手札に加える効果を発動し、魔神王の契約書を手札に加え、そのまま発動。この魔神王の契約書にも、地獄門の契約書同様のダメージ効果を持つ」

「……このまま処理をしなければ、2000ポイント……」

「そしてこの魔神王の契約書は、手札、フィールドのモンスターを使い、悪魔族融合モンスターを、融合召喚する。DD融合モンスターの場合、墓地のモンスターを除外することで、融合素材にできる」

「融合の魔法カードなしで、融合を……」

「私が融合するのは、フィールドのDDゴブリンと、DD魔導賢者ケプラー。闇に蠢く小鬼よ、星を見し賢者よ！冥府に渦巻く光の中で、今ひとつとなりて新たな王を生み出さん！融合召喚！」

2体のDDモンスターが渦の中へと吸い込まれ、そして渦からは……茶色い鎧の体をし、赤い盾と剣を携えたモンスターが現れる。

「生誕せよ！レベル6、DDD烈火王テムジン！」

DDD烈火王テムジン ATK 2000

「そして私は、カードを3枚伏せて、ターンエンド」

零児 手札0 LP 4000 EX 16 (ケプラー)

モンスター DDD烈火王テムジン×1 (攻)

魔法・罫 「地獄門の契約書」「魔神王の契約書」×1、セットカード×3

「(セットカードが3枚……でもここは、ガンガン攻めてみよう!) よーし……それじゃあ私のターン、ドロー……それでは手札から、カードガンナーを召喚！」

フィールドに現れたのは、キャタピラの上に人間の上半身を模したロボ部分が合体したモンスター、カードガンナー。

カードガンナー ATK 400

「ほう……墓地肥しか……」

「はい！カードガンナーの効果！デッキの上からカードを3枚まで墓地へ送って、その数×500ポイント、攻撃力をアップする！墓地へ送る枚数は、3枚！」

墓地へ送られたカード

竜星の輝跡

竜星の極み

水竜星―ビシキ

よりにもよって汎用性の高い制限カード、死者蘇生が落ちるという事態が起きたが、遊華は、仕方ないと、心の中でつぶやいた。

カードガンナー ATK 400↓1900

「それじゃあ…よっ、ほ！とっ！よっ…うん。アクションマジック、気流雲を発動！自分フィールドのモンスターの攻撃力を、500ポイントアップさせる！そしてこのカードが攻撃する場合、相手はこのカードに対してカードの効果が発動できない！」

「ほう…」

素早くアクションカードを入手し、発動した。そしてカードガンナーが宙に浮いた…のではなく、地面となっている雲の一部が、浮き出しただけである。

気流雲 アクション魔法

①自分フィールド上のモンスター1体を対象に発動できる。そのカードの攻撃力は、ターンの終わりまで500ポイントアップし、このターン攻撃するとき、相手はダメージステップ終了時まで、このカードに対しカードの効果が発動できない。

カードガンナー ATK 1900↓2400

「バトル！カードガンナーで、DDD烈火王テムジンを攻撃！」

「ならば永続トラップ、戦乙女の契約書を発動！このカードも地獄門、魔神王の2枚の契約書と同じダメージ効果を持つ。そして発動時に発動できる効果があるが、それは使わない…そして戦乙女の契約書は、相手ターン中は悪魔族モンスターの攻撃力が、1000ポイントアップする。烈火王テムジンはもちろん、悪魔族モンスターだ」

「え?!な、なら…」

DDD烈火王テムジン ATK 2000↓3000

攻撃力がカードガンナーを超えたことにより、600のダメージを

受け、モンスターを破壊される…カードガンナーの場合、特典としてデッキから1枚ドロウができる。だが…このままやられるほど、彼女は弱くはない。周辺を見て、アクションカードを見つけ、一直線に突っ込み、手にした。

「…よし!!アクションマジック、かみなり雲!相手モンスター1体の攻撃力を、800ポイントダウンさせる!」

かみなり雲 アクション魔法

①相手フィールド上のモンスター1体を対象に発動できる。そのカードの攻撃力は、ターンの終わりまで800ポイントダウンする。

テムジンの上空に積乱雲が発生し、雷がテムジンに落ちる…人間に落ちたら助からないであろう雷だが、テムジンは破壊されるといったことはされず、黒焦げにはなった。

DDD烈火王テムジン ATK 3000↓2200

「よし、そのまま突撃―!!」

「…」

だが、零児も瞬時に動いた。すでに目をつけていたアクションカードの元へと素早く移動し、そして回収し、発動する。

「アクションマジック、奇跡。これによりテムジンは破壊されず、私が受ける戦闘ダメージは、半分となる」

奇跡 アクション魔法

①自分フィールドのモンスターが、相手モンスターと戦闘を行う場合、発動できる。自分のモンスターはその戦闘では破壊されず、その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは、半分になる。

零児 LP 4000↓3900

「あー、破壊できなかった…カードを3枚伏せて、ターンエンド…そしてこの瞬間、カードガンナーの攻撃力上昇効果は全て終了」

カードガンナー ATK 2400↓400



遊華 手札2 LP 4000 EX×15

モンスター カードガンナー×1 (攻)

魔法・罨 セットカード×3

「では私のターン、ドロロー。そして私はトラップカード、ダメージ・ダイエットを発動。このカードを発動したターン、私が受けるあらゆるダメージは、半分になる」

「半分…ってことは」

「スタンバイフェイズに受けるはずだった合計3000のダメージはその半分となり、1500に減少する」

零児 LP 3900↓2400

本来なら3000という、凄まじいほどのダメージが半分になり、一気にダメージが減る。

「…そしてメインフェイズ：地獄門の契約書の効果を発動し、デッキから…DDナイト・ハウリングを手札に加える。そして私はリバーズカード、オープン。トラップカード、契約洗浄。フィールドの契約書全てを破壊し、破壊した数だけカードをドロローし、その数×1000ポイント、回復する」

「げーは、破壊した枚数って…さ、3枚?!」

零児 LP 2400↓5400

「…行くぞ。私は手札からチューナーモンスター、DDナイト・ハウリングを召喚し、ナイト・ハウリングの効果発動！墓地のDDモンスターの1体を特殊召喚する。ただしこの効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力、守備力は0となり、破壊された場合は1000ポイントのダメージを受ける」

「チューナー…ってことは!」

「何もないなら、続けさせてもらおう。DDナイト・ハウリングの効果により、DDリリースを、特殊召喚する!」

フィールドに現れたのは、ヘビのように細長い下半身を持つ女性型のモンスターが現れる。…そして、ナイト・ハウリングはチューナーだ。

DDリリース DEF 0

「そして私は、レベル4のDDリリースに、レベル3のDDナイト・ハウリングをチューニング！闇を切り裂く咆哮よ。疾風の速さを得て、新たな王の産声となれ！シンクロ召喚！」

ナイト・ハウリングが飛んで透明となり、3つの歯車に変わる。その中にリリースが入り、4つの光に変わる。そして歯車の中から光が溢れ出し、そこから現れたのは、白銀の鎧の体に緑のマントを身に纏い、銀色の剣を携えたモンスターが現れる。

「生誕せよ！レベル7、DDD疾風王アレクサンダー！そしてDDD烈火王テムジンのモンスター効果発動！DDモンスターが特殊召喚されたとき、墓地のDDモンスター1体を、特殊召喚できる！現れろ！DDゴブリン！」

DDD疾風王アレクサンダー ATK 2500

アレクサンダーの風により、テムジンの炎が勢いを増す。そしてテムジンが剣を掲げ、勢いの増した炎が剣から放たれ、零児のフィールドに広がる。…そしてその炎が一点に集まり、DDゴブリンが現れる。

DDゴブリン ATK 1400

「そしてDDD疾風王アレクサンダーのモンスター効果発動！DDモンスターが特殊召喚されたとき、墓地からレベル4以下のDDモンスター1体を、特殊召喚する！現れろ！DDリリース！そして、DDリリースが特殊召喚されたことにより、効果を発動する！」

DDリリース DEF 2100

ここは雲の上…雲の成分は水であり、ソリッドヴィジョンも先ほどのテムジンの演出の影響か、一気に上昇気流が吹き上がり、雲が巻き上がる。その雲がリリースの形となり、リリースとなる。

「DDリリースって特殊召喚されたときに効果が発動するんだ…」

「ああ。DDリリースには召喚、特殊召喚されたとき、墓地のDDモンスター1体を手札に加えるか、エクストラデッキのDDペンデュラムモンスター1体を手札に加える効果がある」

「え？……あ、そういえばなんでペンデュラムモンスターは、エクストラデッキに？」

「試験の際、フィールドから墓地へ送ろうとした際、エラーが出た：様々な場所に置いた結果がエクストラデッキだ。だがそれは、フィールドから墓地へ行く場合の状況だけだった。おそらくだが、ペンデュラムカードは、フィールドから墓地へ送られる状況の場合は、代わりにエクストラデッキに表側表示で置かれるのだろう」

「なるほど…」

「では、続けよう。私が手札に加えるのは、エクストラデッキのDD魔導賢者ケプラーだ」

フィールドで融合素材となっていたため、ケプラーはエクストラデッキに置かれた。そしてフィールドのモンスターは………レベル4のモンスターが、2体。

「私は、レベル4のDDゴブリンとDDリリースで、オーバーレイ！」

「！オーバーレイ……ってことは！」

「2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚！この世の全てを総べるため、今世界の頂に降臨せよ！エクシーズ召喚！」

DDゴブリンとDDリリース、その2体が紫色の光となり、フィールドに現れた穴の中へと飛び込む。そして穴から光が溢れ……膨大な水とともに、テムジン、アレクサンダーの2体よりも大きい、紫色の鎧の体をし、巨大な剣を携えたモンスターが現れた。

「生誕せよ！ランク4、DDD怒濤王シーザー！」

DDD怒濤王シーザー ATK 2400

「……ターンで、シンクロにエクシーズを……」

融合、シンクロ、エクシーズ……これらを同時に使えるデッキは、数少ない。そしてDDが例え複数の召喚方法を行うことを得意としていても、こういうことは早々にできないであろう。……それを、零児はやり遂げた。

「すごい……」

そんな零児に対し、遊華は尊敬の念を強める。若くしてプロデュエリストに加え、社長にまでなった人物……そして自分の目の前で、融合、シンクロ、エクシーズをやったのけた。そんな人物に対する尊敬の念

が、弱まるはずもない。  
「でも…負けません!!」

次回へ続く

## 第02話 繰り出される竜の星々

フィールドの状況

遊華 手札2 LP 4000

モンスター カードガンナー×1(攻)

魔法・罫 セットカード×3

零児 手札3 (DD魔導賢者ケプラー) LP 5400

モンスター DDD烈火王テムジン×1(攻)、DDD疾風王アレク

サンダー×1(攻)、DDD怒濤王シーザー×1(攻) O U × 2

魔法・罫 なし

ターン状況：零児のターンのメインフェイズ1

「では、バトル。まずはDDD烈火王テムジンで、カードガンナーを攻撃する！」

「じゃ、社長勇気ありますね…くっ…」

遊華 LP 4000↓2400

テムジンの炎を纏った斬撃により、カードガンナーはあっさり破壊される。…このダメージは、とても大きい。でも、彼女は負けるつもりはない。

「く…カードガンナーの効果で、1枚ドロー！」

「…では、DDD怒濤王シーザーで、ダイレクトアタック！」

「リバースカード、オープン！リミット・リバース！墓地のカードガンナーを、特殊召喚！」

「…モンスターの数に変化が起きたことにより、攻撃が巻き戻る。改めて私は、DDD怒濤王シーザーで、カードガンナーを攻撃する」

シーザーの巨大な剣が、カードガンナーに迫る。…だが。

「リバースカード、オープン！永続トラップ、竜星の具象化！自分のモンスターが戦闘、または効果によって破壊されたとき、デッキから竜星モンスター1体を、特殊召喚する！」

「ほう…攻撃はもう止められない…だが、ダメージは大きいぞ」

「それなら、これを。リバースカード、オープン！トラップカード、

ガード・ブロッカー！ダメージを受けるとき、戦闘ダメージを無効にして、デッキからカードを1枚ドロウする！」

「なるほど…ダメージを防いだ上に、手札補充か」

ダメージはバリアによって完全にシャットアウトされ、後続が呼び出されることになった。その後続とは…。

「(ここは…)デッキから…チューナーモンスター、光竜星―リフンを特殊召喚！」

「(チューナー……ほう)メインフェイズ2」

「(あー、ダメだったか…)えーつと…」

後続として呼び出された黄色い東洋龍とともにアクションカードを探す遊華。期待としては、リフンを攻撃させ、竜星の共通効果であるリクルート効果を発動し、あるモンスターを呼び出そうとしたが、失敗してただいま、雲海大平原にあった、とあるアクションカードを探している。

「カードを2枚伏せ、ターン」

「!とりやあー!!!……よつしやー!アクショントラップ、雷気流!自分フィールドのカード1枚を、破壊する!」

「ほう…それにより、リフンのリクルート効果を発動するか」

「はい…私が破壊するのは、光竜星―リフン!…ごめんねリフン」

リフン目掛け、電撃を含んだ乱気流が突撃し、リフンが破壊された…が。

「そしてリフンの効果!リフンは戦闘かカード効果で破壊された場合、デッキから、リフン以外の竜星モンスター1体を、特殊召喚できる!私は、闇竜星―ジヨクトを特殊召喚!」

「……!…どうやら君は、これを特殊召喚したかったようだな…私はこれで、ターンエンド」

リフンの後続として現れたモンスターは、黒い……竜……とはあまり呼べないモンスターであった。

零児 手札3 (DD魔導賢者ケプラー) LP 5400

モンスター DDD烈火王テムジン×1(攻)、DDD疾風王アレク

サンダー×1(攻)、DDD怒濤王シーザー×1(攻) OU×2

魔法・罨 セットカード×2

「それでは私のターン、ドロロー！…私は、闇竜星―ジヨクトの効果を発動！手札の竜星を2体墓地へ送り、デッキから攻撃力が0竜星と、守備力が0の竜星を2体、特殊召喚する！」

墓地へ送ったカード

風竜星―ホロウ

炎竜星―シユンゲイ

「中々強力だな…」

「それではつと…うん、特別にこれ！さあ来て、秘竜星―セフィラシウゴ！地竜星―ハイカン！」

「ペンデュラムモンスターが1体か」

現れた2体は、ジヨクトよりも竜と呼べる姿をしている。

秘竜星―セフィラシウゴ DEF 2600

地竜星―ハイカン ATK 1500

「はい！それじゃ次に、手札からチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚！」

現れたのは、オレンジ色の小柄な戦士。しかしながら、なんだか愛嬌を感じる見た目のモンスターだ。

「さらにチューナーを増やしてきたか…」

「それでは、ジャンク・シンクロンの効果！ジャンク・シンクロンは召喚に成功したとき、墓地のレベル2以下のモンスター1体を、効果を無効にし、表側守備表示で特殊召喚できる！さあ来て！水星ビシキ！」

ジャンク・シンクロンの隣には…カメにも似た青いモンスターが現れた。…こちらも幻竜族である。

ジャンク・シンクロン ATK 1300

水竜星―ビシキ DEF 2000

「それで、何をシンクロ召喚する」

「社長相手なら、妨害覚悟でも行かせてもらいます！私はレベル2の水竜星―ビシキに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

ジャンク・シンクロンがレバーを引くと、背中のようにあるエンジンがかかり、ジャンク・シンクロンが3つの歯車に変わる。その中にビシキが入り、2つの星に変わる。そして、輪から光が溢れる。

「数多の英知を集め、その本に全てを記せ！シンクロ召喚！」

輪から光が放たれ、現れたのは…本を持つ、見た目的にもインテリ系の魔法使いだ。

「レベル5、シンクロモンスター、TG―ハイパー・ライブラリアン！」

TG―ハイパー・ライブラリアン ATK 2400

「……この効果…シンクロを多用するのなら、とても利便性があるな」  
「はい！あ、それとビシキをシンクロ素材としたシンクロモンスターは、罠カードを受け付けないので。…それでは私は、レベル6の秘竜星―セフィラシウゴに、レベル2の闇竜星―ジヨクトをチューニング！」

ジヨクトが飛び、透明となる。そして2つの歯車へと変化し、その中にセフィラシウゴが入る。そして6つの星になる。

「煌めく光を纏い、天空より舞い降りよ！シンクロ召喚!!」

歯車から光が溢れだし、現れたのは…光り輝く、黄金の東洋龍。

「レベル8、シンクロモンスター…黄金の竜の星、輝竜星―シヨウフク！そしてシヨウフクとハイパー・ライブラリアンの効果！シヨウフクはシンクロ召喚に成功したとき、シンクロ素材になった幻竜族モンスターの属性の種類だけ、フィールドのカードを、デッキに戻す！そしてハイパー・ライブラリアンは、自分か相手がシンクロ召喚に成功した場合、デッキから1枚ドロ―する！」

「デッキバウンス…相手にするなら厄介だな。それも種類となると、低レベルの幻竜モンスターも駆使すれば、より多くのカードのバウンスが可能、という訳か」

輝竜星―シヨウフク DEF 2600

「はい！そして素材にしたモンスターの属性は、地属性と闇属性の2種類！2枚戻せるから、私がデッキに戻すのは…怒濤王シーザーと、右のセットカード！」

「…的確と言えるが、こうさせてもらおう。シヨウフクの効果に



チェーンし、選択されたカードを発動する！」

「！く…」

「私が発動するのはトラップカード、DDDの人事権！自分の手札、フィールド、墓地のDDモンスター及び、ペンデュラムゾーンのDDペンデュラムカードを合計3枚デッキに戻し、デッキからDDモンスター2体を手札に加える！私はフィールドのDDD怒濤王シーザー、墓地のDDナイト・ハウリング、DDゴブリンをデッキに戻す。そして手札に加えるのは…このカードだ」

シーザーが消え、2枚のカードが手札に加えられる。その加えられた2枚は…。

「！ペンデュラム…」

「そうだ。さあ、どうくる」

「なら、シヨウフクのもう1つの効果！自分フィールドのカードを1枚破壊し、墓地のレベル4以下のモンスターを、特殊召喚する！私が破壊するのは、地竜星―ヘイカン

！そして呼び戻すのは…炎竜星―シユンゲイ！そして、ヘイカンとリフンと竜星の具象化の効果発動！リフンは竜星モンスターが破壊されたときに墓地から特殊召喚し、ヘイカンは戦闘及び効果で破壊されたとき、デッキから竜星1体を守備表示で特殊召喚できる！」

「…その効果…やはり厄介だな」

炎竜星―シユンゲイ ATK 1900

と、零児は、何度も相手にしたことのある、リクルーターが活躍するデッキを思い出して呟く。…確認したら、モンスター効果による特殊召喚は、同名モンスターの効果が1ターンに1度のみ。その分、リクルートの幅が広いのはこちらだが、あのカードたちは効果制限がないことに加え、あるモンスターの存在が厄介だ。そのモンスターのせいで負けたことは、苦い記憶だ。

「それでは、ヘイカンの効果でビシキを特殊召喚！」

光竜星―リフン DEF 0

水竜星―ビシキ ATK 0

「そして私は、レベル4のシユンゲイとレベル2のビシキに、レベル1

のリフンをチューニング！」

リフンが飛び、透明となる。そして1つの歯車へと変化し、その歯車の中に、シンクゲイとビシキが入る…なんだか狭そうにも見えるが…その2体が合わせて6つの星に変わり、直列になる。

「禍々しい雷を纏い、暗闇より現れるー！シンクロ召喚!!」

歯車から光が溢れ、現れたのは…赤い雷を纏った、黒い竜。

「レベル7、シンクロモンスター…黒き竜の星、邪竜星ーガイザー！リフンは自身の効果で特殊召喚されたときに除外されて、ハイパー・ライブラリアン、そして、シンクロ素材となったシンクゲイの効果！シンクゲイはシンクロ素材になったとき、攻撃力が500ポイントアップする！そしてハイパー・ライブラリアンの効果で、1枚ドロー！」

邪竜星ーガイザー ATK 2600↓3100

「……この効果…竜星限定のスクラップ・ドラゴンというべきか…スクラップ・ドラゴンと比べ、相手にしたとき、防ぎづらいな」

「味方になったら心強いですよ！魔法カード、死者蘇生を発動！墓地のホロウを特殊召喚！」

風竜星ーホロウ DEF 1800

「それじゃあさっそく、ガイザーの効果！私の竜星モンスター1体と、相手フィールドのカード1枚を選んで、破壊する！私が選ぶのは、ホロウと、残りのセットカードを破壊！」

「ならばその効果にもチェインし、選択されたカード、DDリクルートを発動。相手フィールドのモンスターの数が、自分フィールドのモンスターの数より多い場合、その差の数だけ、墓地の契約書かDDモンスターを、手札に加える。私のフィールドには、DDD烈火王テムジンと、DDD疾風王アレクサンダーの2体。そちらはTGーハイパー・ライブラリアン、輝竜星ーショウフク、邪竜星ーガイザー、破壊されようとしているホロウの4体。その差は2。よって私は墓地の契約書を2枚、手札に加える」

「げー！ということは…」

「私が手札に加えるのは、地獄門の契約書と、戦乙女の契約書」

レベル制限のないサーチ効果を持つカードを手札に加えられることは、かなり厄介なため、露骨に嫌な顔をする遊華。さきほど手札に加えたカードは、レベルの高いペンデュラムモンスター。次のターン、このままだと厄介なことになるのは明白だ。

「で、でも、破壊されたホロウの効果で、シユンゲイを特殊召喚！」

炎竜星―シユンゲイ ATK 1900

「バトル！まずは邪竜星―ガイザーで、疾風王アレクサンダーを攻撃！牙竜魔雷撃！」

「……いいだろう」

零児 LP 3900↓3300

アレクサンダーに、いくつもの雷が当たり、破壊される。…ちなみにアクションカードを見つけ、回収したのだが、使わなかった。

「そして、ハイパー・ライブラリアンで、烈火王テムジンを攻撃！ブツクアタック！」

「それにはこれを使わせてもらおう。アクションマジック、サンダー・ストーム。自分フィールドに1体しかモンスターが存在しない場合にしか発動できないが、相手フィールドの、表側表示モンスター全ての攻撃力、守備力を1000ポイントダウンさせる」

「げ！」

サンダー・ストーム アクション魔法

①自分フィールド上にモンスターが1体しか存在しない場合、発動できる。相手フィールド上の表側表示のモンスター全ての攻撃力、守備力を、ターンの終わりまで1000ポイントダウンさせる。

風が吹き荒れ、雷が起こり、雨が降る。凄まじい大自然の力の前に、遊華のフィールドのモンスターたちはその嵐により、力を抑えられてしまう。…この規模なら、自分フィールドにも影響が及びそうだが、効果上そうはならない。

TG―ハイパー・ライブラリアン ATK 2400↓1400

輝竜星―シヨウフク DEF 2800↓1800

邪竜星―ガイザー ATK 3100↓2100  
炎竜星―シユンゲイ ATK 1900↓900

「これでTG―ハイパー・ライブリアンの攻撃力は、テムジンの攻撃力を下回った。何もなければ破壊させてもらう！」

「くっ…(このアクシヨンフィールドの中で、一番厄介なカードを…)」  
遊華 LP 2400↓1800

サンダー・ストームは、カードの効果も中々のものだが、それ以外にも厄介なことがある、このカードが発動したら…その風で、アクシヨンカードが吹き飛び、場所が大きく変わってしまうのだ。…デュエルデイスクのカードや手札が吹き飛ばないのが、かなり不思議なことである。

「…カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

輝竜星―シヨウフク DEF 1800↓2800

邪竜星―ガイザー ATK 2100↓3100

炎竜星―シユンゲイ ATK 900↓1900

遊華 手札1 LP 1800

モンスター 輝竜星―シヨウフク×1(守)、邪竜星―ガイザー×1

(攻)、炎竜星―シユンゲイ×1(攻)

魔法・罫 「竜星の具象化」×1、セットカード×2

ターン終了の宣言とともに、嵐が収まる。そして、零児のターンが来る。

「私のターン、ドロ…速攻魔法、サイクロンを発動。右のセットカードを破壊する」

「く…(竜星の凶暴化の発動条件は、相手モンスターと戦闘を行う、ダメージ計算時のみ…)」

「続けて永続魔法、地獄門の契約書を発動し、その効果を発動。デッキから、DDD制覇王カイゼルを手札に加える。そして私は…」

サイクロンにより、セットカードを破壊。そして零児は…手札のカード2枚を、見せる。

「スケール1のDD魔導賢者ガリレイと、スケール10のDD魔導賢者ケプラーで、ペンデュラムスケールをセッティング！」

「！来る！！」

ケプラーと、レンズのようなものが体にあるモンスター、ガリレイが、フィールドに発生した光の柱の中に浮かび、ガリレイに1、ケプラーに10という数字が浮かび上がる。

「これにより私は、レベル2から9のモンスターを、同時に召喚可能！我が魂を揺らす大いなる力！この身に宿り、闇を切り裂く新たな光となれ！ペンデュラム召喚！！」

出現した振り子が、ガリレイ、ケプラーの間を揺れ…そして、紫色の光が、フィールドへと落ちる。

「世界を制覇せし王、DDD制覇王カイゼル！全ての王をも総べる超越神！DDD死偉王ヘル・アーマゲドン！」

現れたのは、これまでに出たDDDモンスターとは違い、鎧を身に纏っていると思われる、赤いマントを纏い、特殊な形状の剣を携えたモンスターと…それこそまさに、振り子のような形状をしたモンスター…その、*“4体”*であった。

DDD制覇王カイゼル ATK 2800

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン×3 ATK 3000

「なっ…で、でもそれなら…トラップ発動！奈落の落とし穴！ペンデュラム召喚は見たところ、同時の特殊召喚！ならこれで、そのモンスターを全て、破壊させてもらいます！」

巨大な穴が開いたかと思うと、その中に…カイゼルのみが、落下した。

「…あれ？」

「君の判断は正しい…だが、DDD死偉王ヘル・アーマゲドンは、このカードを対象としない魔法、罠カードの効果では…破壊されない。奈落の落とし穴は、対象を取らずに破壊し、除外する効果…よって、DDD死偉王ヘル・アーマゲドンのみ、破壊されない」

「な！」

「そして自分フィールドのモンスターが破壊されたことにより、ヘル・アーマゲドンの効果。破壊されたモンスター1体を選択し、そのモンスターは攻撃力を、このモンスターの攻撃力に加える。私が選択する

のは、制覇王カイゼル」

「!カイゼルの攻撃力は、2800…」

「5800…それを全てのヘル・アーマゲドンで行う」

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン×3    ATK    3000↓5800

攻撃力6000が近くもあるモンスターが3体…遊華のライフは1800。このままでは、簡単に遊華のライフは消し飛ぶ。

「では、バトルだ。DDD死偉王ヘル・アーマゲドン1体で、邪竜星―ガイザーを攻撃する」

「えつーと、アクションカードアクションカード…つと、あった!つてのあー!!!」

遊華    LP    1800↓0

防御に使えるカードがない以上、アクションカードに頼るしかなく、探して見つけたのはいいが…一瞬でライフが消し飛び、デュエルが終了した。

「いたたたた…あく負けたく!」

「いいデュエルだった。だが、最初のほうで受けたダメージのことを含めて考えれば、君はまだまだと言えるだろう」

「うう、はい…」

「…ではもう1つ、頼みごとがあるが…」

「はい…え?」

次はどんなことを言われるか…と思っていたら、意外にも頼みごとであった。少し落ち込んでいた遊華も、思わず普通に顔をあげる。

「…これは内密にしてもらいたいことだが…遊勝塾を知っているか?」

「そりやもうはい! 榊遊勝が開いたデュエル塾で、榊遊矢も所属してる塾ですよね!」

「明日、そこにデュエルを挑む。できればそれに参加してもらいたいんだが」

「あ、すみません…明日どうしても外せない用事があって…」

「そうか…ならば仕方ない…時間を取らせてすまなかった」

「いえいえ！社長とデュエルできたのもうすごく楽しかったです！」

遊華のその言葉を聞き、「そうか…」と呟く零児。…そしてすぐ中島さんが来て、次の仕事へと向かった。そして、遊華は時間が時間なので、急いで家路についた。

## 第03話 重なる剣

「フントフンフン♪」

前回、赤馬零児とのデュエルに負けた遊華。だが楽しげに鼻歌を歌い、自転車に乗って自宅へと向かっている。ちなみにLDSの建物から遊華の自宅までは、自転車で10分ほどの距離。そして、遊華の自宅が見えてきた。…それはお店も兼用している家で、看板には「カードシヨップ ゆっくり」とある。

「よつと…」

ブレーキをかけ、自宅前で止まり、家の駐車スペースまで移動後、しっかりとロックをかけてから、家へと入る。

「ただいま〜」

「お帰り遊華」

「父さん、みんな来てる?」

「ああ。今デュエル中だよ」

と、遊華の父親がレジの向こうで座りながらいう。中々人の良さそうな人物である。

「よーし、ガトムズでプレアデスを攻撃だー!」

「フン、ガトムズでのハンデスが始まったときはどうなるかと思ったけど、想定内だ!手札のオネストの効果発動!」

「な!だー!くっそー!負けたー!!」

…卓上デュエルにて、ワイルドな髪形の茶髪の少年…刀堂刃が、北斗七星を模したと思われる飾りを髪に付けた、紫色の髪の少年…志島北斗とデュエルをし、負けた。

「これでボクの連勝記録がまた伸びた」

「くっそ〜!非公式とは言っても悔しく〜!」

「そりゃあ、北斗と刃とのデュエルで、非公式だと北斗のほうが負けた回数、多いものね」

「うぐ…それは言わないでくれ…」

黒髪で、小麦色の肌をした少女…光津真澄にそう言われ、北斗はシヨックを受けたのか、店の隅のほうでいじけ始めた。



「お、みんないらっしやい！」

「遊華！」

「やっと来たわね。何か用事でもあったの？」

「ちよつと急用ができてね」

と、北斗のことはいつものことと放置し、3人で話しをしている。3人はよく一緒にいるようだ。

「それじゃ、いつも通りに詰めデュエル、やってく？」

「おう！」

「ええ、やらせてもらうわ」

どうやら詰めデュエルをやるのがいつものことらしく、さっそくその作業に入る。……途中で北斗が復活したが、詰めデュエルの答えが分からず、また真澄の言葉によりショックを受けるのであった…。

そして、…夕焼けの赤色だった空が、赤よりも青のほうが少し強くなり、星も少し見える時間となった。

「あ、そうだ遊華。デュエルしようぜ！」

「大体うちに寄るときは遅めだけど、いいの？私はいつでもOK！」

「しっかり母ちゃんや父ちゃんのOKももらってるから大丈夫！…まあ、やるのは1回だけだけだな」

真澄と北斗に関してはもう帰っている。真澄に関しては詰めデュエルを1回解いたら帰った。親が宝石商とのことなので、大目には見られているようだ…その際、強制的にかつ無理やり、北斗が連れて行かれたのもいつもの光景となっていた。

…ただし、連こ…連れて行ったことに関しては、デレなど一切存在しない。大事なことなのでもう1回。デレなど、一切存在しない。いつものことだ。

「それじゃあスタンディング？」

「いや。…ちよつと急ぎたいから、テーブルの…ライフは、ハーフル―ル」

「OKもらったけど夕飯までには帰ってきなさいってこと？」

「そうなんだ…」

「でもOK！それじゃあ、時間もあんまりないんだし、始めよ！」

そういつて、二人は準備をし、そして…。

「デュエル！」

刃 手札5 LP 4000

遊華 手札5 LP 4000

「それじゃあじゃんけんでオレが勝ったから、オレの先攻！オレは手札から、XX―セイバー ボガーナイトを召喚！そしてボガーナイトの効果！手札のXX―セイバー フラムナイトを、特殊召喚！さらに！自分フィールドにX―セイバーが2体以上存在することで！XX―セイバー フォルトロールを、手札から特殊召喚！」

「げげ！この状況に、嫌な予感が…」

「行くぜ！レベル4のボガーナイトに、レベル3のフラムナイトをチューニング！シンクロ召喚！レベル7、X―セイバー ソウザ！」

X―セイバー ソウザ ATK 2500

刃の得意なプレイング、ボガーナイトX―セイバーチューナーフォルトロールである。そこからシンクロを行ってから、フォルトロールの効果によってチューナーを呼び出し、またシンクロ…ということをする。…ちなみに、なぜかテールブルでのデュエルだと口上を言わないが…やはり、気分の問題だろう。

「そしてフォルトロールの効果！墓地のフラムナイトを特殊召喚して、レベル6のXX―セイバー フォルトロールに、レベル3のXX―セイバー フラムナイトをチューニング！シンクロ召喚！レベル9、XX―セイバー ガトムズ！今回は運がいいからこいつも！手札から魔法カード、ガトムズの非常招集を発動！墓地のボガーナイトとフォルトロールを、特殊召喚！」

「げげ！」

XX―セイバー ガトムズ ATK 3100

XX―セイバー フォルトロール DEF 0

XX―セイバー ボガーナイト DEF 0

露骨に嫌な表情をする遊華。理由に関しては、XX―セイバー ガ

トムズの効果が、大きく影響している。

「さあ行くぜ、フォルトロールの効果！墓地のフラムナイトを守備表示で特殊召喚して、XX―セイバー ガトムズの効果！フォルトロールとボガーナイトをリリースして、手札2枚を墓地へ！」  
「く…」

XX―セイバー フラムナイト DEF 1000

墓地へ捨てられたカード

竜星の具象化

ジャンク・シンクロン

シンクロを使う低レベルモンスターを使用するデッキには御用達のジャンクシンクロン、そして竜星のサポートの中でも展開に関わる具象化を墓地へ送られたことで、あちやー、となる遊華。

「お、ラッキー。オレはこれで、ターンエンド！」

それに対して刃は、やはり使っている側なので喜ぶ。だがしかし、これで遊華の展開は止まるわけではない…：：：本当なら罨カードが欲しかったであろうが、ないものは仕方がないのである。

刃 手札1 LP 4000

モンスター XX―セイバー ソウザ×1(攻)、XX―セイバー ガトムズ×1(攻)、XX―セイバー フラムナイト×1(守)

魔法・罨 なし

「私のターン、ドロ―…あ、ラッキー。手札から闇竜星―ジヨクトを召喚して、ジヨクトの効果！手札の水竜星―ビシキと炎竜星―シユンゲイを墓地へ送って、デッキから攻撃力が0のビシキと、守備力が0のシユンゲイを、特殊召喚！」

「あ」

闇竜星―ジヨクト ATK 0

水竜星―ビシキ DEF 2000

炎竜星―シユンゲイ ATK 1900

「さあ行くよー！レベル4のシユンゲイと、レベル2のビシキに、レベル2のジヨクトをチューニング！シンクロ召喚！レベル8、輝竜星―シヨウフク！そしてシヨウフクの効果！ソウザ、ガトムズ、フラムナ

イトをデッキにバウンス！」

「うわー！くっそー！」

輝竜星—シヨウフク ATK 2300↓2800

前のターンで出したX—セイバーの中でも主要のシンクロモンスターに加え、一応防御のためと残しておいたフラムナイトまでデッキに戻され、一瞬でこのありさまだ。

「刃、やっぱり展開も大事だけど、こうなったときのアフターケアも考えないと。それじゃあバトル！シヨウフクで、ダイレクトアタック！」

「このダメージはデカイぜ…！」

刃 LP 4000↓1200

ハンデスを行い、遊華の戦術を減らした刃だが、あっさりと状況が逆転。フィールドにカードのない刃が不利な状況になった。

「まあ、私もちよつとまずい状態だけど。これでターンエンド！」

遊華 手札1 LP 4000

モンスター 輝竜星—シヨウフク×1(攻)

魔法・罨 なし

そのまずい状態は刃がハンデスをやったことで、魔法と罨が1枚も伏せられてないこの状況のことを言っているが、手札1枚の刃のほうに不利なのは、明白だ。

「オレのターン、ドロー…！…！よし。こいつがあれば、ちよつとはなんとかできる！」カードを1枚セット！さらにモンスターを1体伏せて、ターンエンド！」

刃 手札0 LP 1200

モンスター セットモンスター×1

魔法・罨 セットカード×1

「私のターン、ドロー…！…！刃、ごめん。手札から魔法カード、大嵐を發動」

「うわあああああ！！！」

まさかの大規模除去により、セイバー・リフレクトがあっさり破壊される。だが、まだチャンスは

「そして手札から風竜星―ホロウを召喚して、シヨウフクの効果！ホロウを破壊し、墓地のジヨクトを特殊召喚！そしてホロウの効果でデッキから、地竜星―ハイカンを特殊召喚！」

「あ」

…どうやら、残ってないようだ。

「レベル3のハイカンに、レベル2のジヨクトをチューニング！シンクロ召喚！TG―ハイパー・ライブラリアン！バトル！シヨウフクで、セットモンスターを攻撃―！」

TG―ハイパー・ライブラリアン ATK 2400

「く…ダークソウルの守備力じゃ太刀打ちできねえ…」

「それじゃあハイパー・ライブラリアンで、ダイレクトアタック―！」

「負けたく―！」

刃 LP 1200↓0

「刃は大量展開が好きかもしれないけど、それだと手札の消費が大きくなって、全体除去への弱さが大きくなるから、手札補充やドロ―カードを入れたほうがいいと思う。後、サーチカードとか」

「やつぱりそうだよな」

「後は、X―セイバー以外も使うこと。レベル7には、ダーク・ダイブ・ボンバーっていうモンスターもいるし」

ダーク・ダイブ・ボンバー…通称DDB。こちらではあの、1ターンの制限のないエラッタ前…ではなく、エラッタ後しかない。つまり、問題なく入れられる…が。

「いや、それでもやつぱり、オレはX―セイバーにまだ拘りたい」

「それなら、とことん拘ってね。…他のカードが必要になったらうちで買って行ってね」

「ちやつかりしてんな、遊華…つと、急がないとヤバイヤバイ…それじゃあな遊華！親父さん！お邪魔しましたー!!」

…どうやら飯がかかっているようだ。刃は急いで片づけると、帰って行った。そして遊華はレジのほうへと向かう。そして、父親と話しをする。

「今日も、中々のデュエルだったね、遊華」

「でも私だってまだまだだよ。今日、赤馬社長とデュエルしたんだけど負けちゃって…」

「赤馬社長っていうと、レオ・コーポレーションの?」

「うん。ほんと社長強かった〜!」

娘の楽しい表情を見て、思わず微笑む父親。でもしつかりと指摘をする。

「まあ遊華は、結構猪突猛進などころがあるからね。デュエルについては…そうところは無くしたほうが、プロになるならそうしたほうがいいよ。刃くんのあのプレイングは、遊華のプレイングに似てるどころがある。君が彼にシンクロについていろいろ教えた分、そういうところも似たんじゃないかな」

「まあ、そうなんだろうけどね…あ、今日のごはん何?」

「それじゃあ、夕飯を食べながら話しをしようか。それとごはんは、シチューだよ」

「やったー!シチュー大好きー!!」

…巳柳遊華…中学生であり、年相応の身長はあるとはいえ、どちらかと言えば童顔であることも相まって、大好きなことで喜んでいるその姿は、ちよつと背の高い小学生に見られても不思議ではない。

………そして翌日…遊華の姿はLDS……ではなく、遊勝塾近くにあった。用事があったはずだが、どうしたのだろうか。

「…(…用事が早めに済んだから来ましたー…って、言ってもね…)」  
どうやら早めに済んだから、何をやっているのか気になってきたようだ。…とりあえず、変装としてサングラスに帽子、マフラー。サングラスと帽子に関してはともかく、マフラーは完全に季節外れ。…零児はマフラーをしているが。

「(…ここが遊勝塾か…)」

と、用事が終わった後に調べた住所を確認して言う。…とは言っても、近所にデュエル塾と思われる建物は他にはないが。

「それじゃあ…!」

中に入ろうとしたが、ドアが開こうとしたのが分かったため、咄嗟

に隠れてしまった。

「(…なんで隠れたんだろ…)」

と思ったが、つい咄嗟に反応しただけであるため、なんとも言えない。…そしてすぐに出てきたのは…。

「(…社長に、理事長…それに刃たち…)」

出てきたのは零児に、LDSの理事長にして零児の母親、赤馬日美香、そして刃、北斗、真澄。それと多分日美香の秘書の人。その全員は、停めてあったリムジンに乗り込み、出発していった。

「…刃達、呼ばれてたんだ…まあ…改めて。お邪魔します」と、遊勝塾に入って行った…ら。

「?君誰?」

「あ…」

水色の髪をした少年と、遭遇した。

「み、見つかった…」

「?…君…怪しいね」

「あ、ちよ、わ、私、決して怪しいものじゃ…」

という発言が、より怪しい感じを出していることに気付かない遊華。そこに…。

「どうしたのそ…だ、誰!?!」

「あ、えーつと、その…」

ピンクの髪、同じ年ぐらいの少女も来て、このままでは状況がよりややこしくなることは、目に見えてきている…そのことは、言うまでもないだろう。

## 第04話 ぬいぐるみ遊び

「それで、君はなんで来たんだ」

「そ、そのー…ここに、デュエルを挑むって社長から聞いていたので、気になって…」

「だったら変装する必要はなからう」

「いやー、用事があるって言うておいて、それが早めに済んだから、気になってきましたー…って言うのもなんだか、気が引けて…」

と、遊勝塾にて取り調べ中の遊華。ちなみにフルネームとLDS所属、ということとは既に言っているため、警戒されている。

「それで、変装をして来たってこと？」

「はい…」

「やはり信用できんな。もしや油断したところを襲い、遊勝塾を襲おうという計画」

「それはないと思うな。それだったらこんなに早くは来ないと思うよ」

「それもそうか…」

と、大男の意見に対して、違うという意見を出す水色の髪の少年。そしてその水色の髪の少年は、遊華に近付き…。

「いろいろ聞くよりもボクは、遊華とデュエルしたいな」

「デュエル？デュエルならいつでもOK！」

「素良！」

「その姉ちゃんは、さっきのヤツらの仲間なんだぞ！」

「うんうん！」

「敵なんだよ！」

「じゃあ敵なら、デュエルで追い出そうってことで。いい塾長」

チビっ子達の言葉を受け、うっという表情をする遊華。そして素良と呼ばれた少年に提案された塾長である男性は…。

「なら、素良が勝ったら君にはここからすぐに出してもらい、負けたらさうだな…どうしようか」

「ボクなら、お菓子もらったらうれしいから、お菓子のプレゼントとか



？」

「私はOK！」

「うーん……あー！いいものが思い浮かばないから仕方ない！君が良いと言うなら、素良が負けたら君にはお菓子をプレゼントだ！」

「お父さん！」

「それじゃあ行こうか」

「うん！レーツツゴー！」

さっきの大人しくなっていたのがウソのようなテンションの遊華。……まさにデュエルバカである。そして、素良と遊華、その二人の勢いについていくしかない、遊勝塾の面々は、塾長とここにいない遊矢を除いて溜め息をついた。

「あれ、人がいる……あ、もしかして、榊遊矢？」

「うん。おい遊矢ー！ちよつとデュエルするから、ちよつと出てー！」

素良についていき、デュエルフィールドに到着……したが、デュエルフィールドには、ゴーグル装着中の遊矢がいる。素良の呼び声に対して、反応がない。ちなみにお互いの自己紹介は、移動している最中に終わった。

「うーん、遊矢がまだいる状態でアクションデュエルするわけにもいかないし……」

「じゃあ私が。……榊遊矢ー！早くデュエルしたいから早く出てー！」

「……じゃあ、このままやっちゃおつか」

「それはさすがにどうかと思うけど」

「ま、そうだよね」

その後、遊矢は力づくで移動させられ、それにより問題なく、アクションデュエルが行われる。

「それじゃあ塾長ー！アクションフィールドよろしくねー！」

「それじゃあ行くぞー！アクションフィールド、スウィーツ・アイランド、発動！」

その塾長の声とともに、デュエルフィールドが変わる。大部分を金

網が覆っていた場所が、巨大なお菓子でできたフィールドへと変わる。

「戦いの殿堂に集いしデュエリストが！」

「モンスターとともに！地を蹴り、宙を舞い！」

「フィールド内を駆け巡る！」

「見よ！これぞデュエルの最強進化系！」

「アクション…！」

「デュエル！」

YUKA 手札5 LP 4000

SORA 手札5 LP 4000

アクションデュエルが始まり、フィールドにアクションカードが散らばる。

「それじゃあ先攻は遊華からでいいよー」

「それじゃあ遠慮なく！私のターン!!…モンスターを1体セットして、カードを1枚セット！ターンエンド！」

遊華 手札3 LP 4000

モンスター セットモンスター×1

魔法・罫 セットカード×1

ターンエンドをすると、速やかにアクションカード検索に入る遊華。そして素良もそれに合わせ、移動を開始。

「それじゃあボクのターン、ドロロー…うん。手札から沼地の魔神王を墓地へ送って、効果…このカードは手札から墓地へ送ることで、デッキから融合を手札に加えられる。ということ、融合を手札に加えるよ。そして永続魔法、トイポットを発動！」

「融合、ってことは融合使いなのかな…」

「まあ、そうだね」

トイポットという永続魔法を発動すると、巨大なガチャガチャが出現する。

「おー…さーてどんな効果かなー」

「それじゃあ遊華の要望に答えてさっそく！トイポットの効果発動！手札を1枚捨てることで、デッキからカードを1枚ドロローして、お互

いに確認する。それがフアーニマルと名のついたモンスターだったら、手札からモンスターを特殊召喚できる!というこことで…」

捨てたカード 融合

「さっそく融合を墓地へ…」

「それじゃあ、ドロロー…:ボクが引いたのは、フアーニマル・ドッグ。フアーニマルと名のついたモンスターだから、トイポットのさらなる効果で、手札のモンスター…:フアーニマル・オウルを特殊召喚!」

トイポットの摘みが回り、中からカプセルが出てくる。そのカプセルからは…:中々かわいらしいフクロウが現れた。

フアーニマル・オウル DEF 1000

「お〜!かわいいフクロウ〜!」

「へへ〜ん。フアーニマル・オウルはかわいいだけじゃないよ。このカードは、手札から召喚、特殊召喚に成功したとき、デッキから融合を1枚、手札に加える。もう1つあるけど、今回はサーチ効果を使って、融合を手札に。さらに!ボクは手札からフアーニマル・ドッグを召喚!」

素良が召喚したモンスターは…:とてもとてもかわいらしい、犬である。…:観戦している女の子二人に遊華は。

フアーニマル・ドッグ ATK 1700

「きゃ〜!そのワンちゃんかわいい〜!」

と、みんな黄色い声。しかしながらこの犬も、只者ではない。

「このフアーニマル・ドッグはかわいいだけじゃなくて、結構強いんだよね。このカードが手札から召喚、特殊召喚に成功した時、デッキからフアーニマル・ドッグ以外のフアーニマルと名のついたモンスターか、エッジインプ・シザーのどちらか1体を手札に加える。ボクが手札に加えるのは、エッジインプ・シザー!」

「オウルと同じで、特殊召喚にも対応してるんだね」

「うん!それじゃあバトル!フアーニマル・ドッグで、そのセットモンスターを攻撃!」

かわいい顔して結構素早く、遊華のセット状態のモンスターに近づく。…:だがその前に。

「それじゃあその攻撃宣言時に永続トラップ、竜星の具象化を発動！このカードがある限り、私がエクストラデッキから特殊召喚できるのはシンクロモンスターだけになるけど、モンスターが戦闘か効果で破壊されたら1ターンに1度だけ、竜星モンスター1体をデッキから特殊召喚する！」

「うーん、防げないや」

そしてセットモンスターは…角の生えた黄色い龍。

「破壊されたヘイカン、それとモンスターが戦闘破壊されたから、具象化、それぞれの効果！ヘイカンは戦闘か効果で破壊され墓地へ送られたとき、デッキから竜星モンスター1体を、特殊召喚する！」

ではここで、ちよつと観戦している人たちのほうへ。

「うへー、破壊したのに、逆にこれじゃしびれるくらい増えるぜ…」

「ああいうのって、リクルーター、っていうのよね」

「ええ、そうよ」

「あの竜星の具象化…制限の効果からして、あの人は多分、シンクロ使い…」

「…あの具象化ってカードを破壊しないと、モンスターが破壊されるたびに、モンスターが増えていく…」

「破壊される度に、それを補うかの如くモンスターが現れる…まさに人海戦術だな」

と、厄介だというのを感じている遊勝塾の塾長以外の面々であった。…ではデュエルフィールドへ。

「さあ来て！光竜星—リフン！水竜星—ビシキ！」

光竜星—リフン DEF 0

水竜星—ビシキ DEF 2000

「増えちゃったなく…それじゃあボクは、カードを2枚伏せて、ターンエンドだよ」

素良 手札3 (融合、エッジインプ・シザー) LP 4000

モンスター ファーニマル・オウル×1 (守)、ファーニマル・ドツ

グ×1 (攻)

魔法・罠 「トイポット」×1、セットカード×2

あれだけやっついて、手札3枚…うち2枚はどんなカードか分かっていないとは言っても、このアドバンテージは結構大きい。だが…。

「私のターン、ドロロー…私は、レベル2のビシキに、レベル1のリフンをチューニング！」

「リフンってチューナーだったんだ…それにしてもレベル3のシンクロか〜！」

リフンが飛び、透明になってから1つの歯車となり、その中にビシキが入り、2つの星になる。

「霞漂う谷より飛来せよ！シンクロ召喚！」

歯車から光が放たれ、現れたのは…緑の大きな怪鳥。

「レベル3、シンクロモンスター、霞鳥クラウソラス！」

霞鳥クラウソラス DEF 2300

「おー！鳥か〜。空飛べるから、アクションカードを探すのにも便利だね」

「クラウソラスはそれだけじゃないけどね〜。あ、それとビシキにはシンクロ素材になったら、素材に使われたシンクロモンスターは、罠カードの効果を受け付けなくなるんだ」

「うわ〜…もしかして、竜星の他のモンスターにも、魔法を受け付けなくしたり、モンスター効果を受け付けなくしたりするモンスターっているの？」

「モンスター効果はないかな…それじゃもう1枚！手札からチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚！」

お手軽にシンクロへとつなげることが可能なモンスター、ジャンク・シンクロン。遊華もお気に入りのお宝である。

「ジャンク・シンクロンは召喚したとき、墓地のレベル2以下のモンスター1体を、効果が無効にして、守備表示で特殊召喚できる！さあ来て、ビシキ！」

「レベル2と3…レベル5のシンクロモンスター…クラウソラスを使うなら、レベル6か8のシンクロモンスターが出せるってことだね」  
「今回は5で！レベル2のビシキに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

ジャンク・シンクロンが透明になり、3つの歯車になり、その中にビシキが入り、2つの星になる。

「数多の英知を集め、その本に全てを記せ！シンクロ召喚！」

この召喚口上、お分かりいただけただけだろうか。歯車から光が放たれ、現れるのは…。

「レベル5、シンクロモンスター、TG―ハイパー・ライブラリアン！」

TG―ハイパー・ライブラリアン ATK 2400

「攻撃力2400…ファーニマル・ドッグとファーニマル・オウル、どっちもやられちゃうか…」

「果たしてそれだけで済むかな？クラウソラスの効果！相手モンスター1体を選択して、その攻撃力をターンの終わりまで0にして、効果を無効にする！私が選ぶのは、ファーニマル・ドッグ！」

では再び、観客のほうへ。

「攻撃力を0にして、効果も無効に?!」

「この男権現坂の超重武者には効果は薄いけど、それでも厄介な効果だ…」

「どんなに攻撃力の高いモンスターでも、あのカードの効果を受けられれば、簡単に倒せちゃうわね…」

「守備表示ってことは、攻撃力は低いっぽいな…」

と、クラウソラスの性能について理解している。…実際、クラウソラスはいい効果を持っているが、単体ではモンスターを除去することができない。…と知っている間にも、クラウソラスはファーニマル・ドッグ目掛け、強烈な風を巻き起こす。その風で、ファーニマル・ドッグは動きを封じられた。

ファーニマル・ドッグ ATK 1700↓0

「うわーこれはちよつとヤバイね…」

「それじゃあバトル！TG―ハイパー・ライブラリアンで、ファーニマル・ドッグを攻撃！ブックアタック！」

「それじゃあ…っと。お、ラッキー。アクションマジック、スポンジケーキを発動！自分が受ける戦闘ダメージを半分にする！」

「へー…でも戦闘ダメージは、半分でも受けてもらうよー！」

「くっ…」

素良 LP 4000↓2800

「それじゃあカードを」

「おっと。スポンジケーキの効果はまだあるよ。バトルフェイズ終了時に、このターン戦闘によって破壊されたモンスター1体を、手札に戻す！」

「げ…もう1回効果が使えるってことか…」

スポンジケーキ アクション魔法

①このカードを発動したターン、自分が受ける戦闘ダメージは全て半分になる。

②このカードを発動したターンのバトルフェイズ終了時、発動できる。このターン戦闘によって破壊されたモンスター1体を、墓地から手札に加える。

「そういうこと」

「うーん…それじゃあ改めて、カードを1枚伏せてターンエンド」

「それじゃあそのエンドフェイズにトラップカード、融合準備を発動！エクストラデッキの、デストロイ・シザー・ベアを選択して、墓地の融合と、デッキの融合素材に指定されている名前のモンスター1体を手札に加える！ボクが手札に加えるのは、ファーニマル・ベア！」  
「うーん、結構厄介な状況かな…」

と、エンドして素良のターンへと移ったのを確認してから、クラウドソラスの足を掴み、空からアクションカードの検索に入った。

遊華 手札2 LP 4000

モンスター 霞鳥クラウドソラス×1(守)、T.G.ハイパー・ライブ  
ラリアン×1(攻)

魔法・罠 「竜星の具象化」×1、セットカード×1

「それじゃ、ボクのターン、ドロー…！それじゃ、トイポットの効果！手札を1枚墓地へ捨てて、ドローするよ」

捨てたカード

## 融合

「また融合を…」

「それじゃ、ドロー…引いたカードは、フアーニマル・ライオ！これでトイポットのさらなる効果で、モンスター1体を特殊召喚できる！というところで、フアーニマル・ベアを特殊召喚！そしてフアーニマル・ベアの効果！このカードをリリースして、墓地の融合を手札に加える！」

「融合が結構行き来してるね…」

2回トイポットの効果で捨てられ、カード効果で2回回収されている…。融合を入れているということは、融合使いのはずだが、容赦がない。

「まあ、確かにそうだね…それじゃあ…手札からフアーニマル・ドッグを召喚して、フアーニマル・ドッグのモンスター効果！デツキから、フアーニマル・ラビットを手札に！」

再びのフアーニマル・ドッグ。これにより、融合素材はさらに増えた。

「そして、フアーニマル・オウルの効果！ライフを500支払い、手札とフィールドのカードで、デストロイモンスターを、融合召喚する！」

「融合の魔法カードなしで融合を…」

「うん。ボクが融合するのは、手札のエッジインプシザーと、フアーニマル・ラビット、フアーニマル・ライオ、フィールドのフアーニマル・ドッグ、フアーニマル・オウル！悪魔の爪よ！鳥獣達の牙と爪と合わせ、新たな力と姿を見せよ！融合召喚！」

素良 LP 2800↓2300

融合の渦の中に、エッジインプシザーとフアーニマル・キャット、フアーニマル・ライオ、フアーニマル・ドッグ、フアーニマル・オウルが飲み込まれる。…そして現れるのは…ズタズタに裂かれて鋏で繋がられた、狼のぬいぐるみであった。口の中に輝く何かの目が、不気味だ。

「現れ出ちゃえ！全てを噛み砕く獰猛なる魔獣、デストロイ・シザー・ウルフー！そしてフアーニマル・ラビットの効果！このカードが融合素



材になって墓地へ送られたとき、墓地からファーニマルと名のついたモンスター1体を、手札に加える！ボクが手札に加えるのは、ファーニマル・ベア！」

「うっひゃー…さっきのかわいいのとは一転して、中々強烈な見た目だね…」

デストーイ・シザー・ウルフ ATK 2000

かわいいのとは一転して怖いになったら子供が泣くであろうこの見た目。

「それじゃあつと…墓地のエッジインプシザーの効果発動！手札1枚をデッキの一番上に戻すことで、墓地から表側守備表示で特殊召喚できる！」

「ゾンビキャリアみたいな効果だね…」

再び現れる、いくつもの鋏が重なったような、横長な鋏を持つ不気味なモンスター。そして手札は…。

「手札から魔法カード、融合を発動！」

「融合、2枚あるもんね…」

「そういうこと。ボクが融合するのは、フィールドのエッジインプシザーと、手札のファーニマル・ベア！悪魔の爪よ！野獣の牙よ！今一つとなりて、新たな力と姿を見せよ！融合召喚！」

エッジインプシザーと、ファーニマル・ベアが融合の渦に飲み込まれ、現れたのは…シザー・ウルフと同じような、ズタズタに裂かれて鋏で繋がられた、クマのぬいぐるみ。シザー・ウルフ同様、不気味に口の中で何かの目が輝く。

「現れ出ちゃえ！全てを引き裂く戦慄のケダモノ！デストーイ・シザー・ベア！」

デストーイ・シザー・ベア ATK 2200

「うーん…強いだろうけど、そのままだと攻撃力は下だよ？」

「うん。それじゃつと…よっ！ほつと……よーし」

と、デストーイ・シザー・ベアも使ってジャンプをし、アクションカードを入手した。…ちなみにアクションカードは、ロールケーキの上にあった。

「アクションマジック、ナナナ！デストロイ・シザー・ウルフの攻撃力を、700ポイントアップさせる！」

「げ…」

デストロイ・シザー・ウルフ ATK 2000↓2700

「バトル！デストロイ・シザー・ウルフで、まずはTG―ハイパー・ライブラリアンを攻撃―！」

「うひゃー！まだ効果使っていないのにくー！」

遊華 LP 4000↓3700

シザー・ウルフが、ライブラリアンをなんと、丸のみにしてしまつた。…呑んだ後、満足そうなゲップをして。

「でも具象化の効果！デツキから、リフンを特殊召喚する！」

光竜星―リフン DEF 0

「へー…でも、デストロイ・シザー・ウルフの効果はね…融合素材にしたモンスターの数だけ、1回のバトルフェイズに攻撃できるんだ―！」

「げげ！えーつと、素材にしたのは…エッジインプシザー、ファーニマル・ラビット、ファーニマル・ライオ、ファーニマル・ドッグ、ファーニマル・オウルの5体だから…」

「合計5回の攻撃ができる！ということ、クラウドソラス、リフンの順番で攻撃―！」

「く…リフンの効果！リフンは戦闘、効果で破壊されたら、デツキから竜星モンスター1体を、特殊召喚できる！きて、地竜星―ハイカン―！」

地竜星―ハイカン DEF 0

もちろん攻撃全て、連続の丸のみ。ただお腹がいっぱいになってきたのか、口の中の目が少々苦しそう。

「…あ、もしかして竜星って、モンスター全部リクルーター？」

「いや、全部が全部そうってわけじゃないけど…」

「でも攻撃しちやお！シザー・ウルフで、ハイカンを攻撃！これで4回目」

「ハイカンの効果！デツキから、炎竜星―シユンゲイを守備表示で特殊召喚―！」

炎竜星―シユンゲイ DEF 0

「そのモンスターもシザー・ウルフで攻撃！ラスト5回目！」

「シユンゲイの効果！魔竜星―トウテツを特殊召喚！」

シユンゲイを丸のみにした辺りで、もう無理と地面にへタレこんだ。完全に満腹になったようだ。

魔竜星―トウテツ DEF 0

「それじゃあそのモンスターを、デストロイ・シザー・ベアを攻撃！」  
「く…トウテツの効果！」

「あ、でもデストロイ・シザー・ベアの効果！破壊して墓地へ送ったモンスターをこのカードに、攻撃力を1000ポイントアップさせるカードとして、装備する！」

「…でも、それは墓地へ送られてから…トウテツの効果も遠慮なく使える！さあ来て、闇竜星―ジヨクト！」

シザー・ベアは、ウルフとは違い、殴り飛ばした後、倒れてるところを丸のみにし、ゲップ。

闇竜星―ジヨクト DEF 2000

デストロイ・シザー・ベア ATK 2200↓3200

「うーん…後5回ぐらい攻撃できれば、モンスター全滅できてたかな」

「どうしてそう思うのかな？」

「ちよつと確認したから」

「なるほど」

そう、竜星モンスターのリクルート効果は、同名モンスターは1ターンに1度だけ。…ただ、平然とデッキの中の竜星のリクルート効果を全部使わせられるようなことができるカードが、少なくとも1枚あるのが事実である。

「まあでも、ファーニマルモンスター9体なんて、簡単にできることじゃないけどね」

「それは安心した」

「うん。…じゃ、これでターンエンド。そしてナナナの効果が終了して、デストロイ・シザー・ウルフの攻撃力は、元に戻るよ」

デストーイ・シザー・ウルフ ATK 2700↓2000

素良 手札2 LP 2300

モンスター デストーイ・シザー・ウルフ×1(攻)、デストーイ・シザー・ベア×1(攻)

魔法・罫 「トイポット」×1、セットカード×1、「魔竜星―トウテツ」×1装備：デストーイ・シザー・ベア

「私のターン、ドロ―!…うん。それじゃあ魔法カード、竜星の輝跡を発動!墓地の竜星モンスター3体をデッキに戻すことで、デッキからカードを2枚ドロ―する!…:というこゝとで、墓地のシユンゲイ、ヘイカン、ビシキをデッキに戻してシャツフル。そして2枚ドロ―!」

「竜星専用の貪欲な壺ってところだね」

「そういうこと。…うん。ジヨクトの効果発動!手札の竜星2体を墓地へ送って、デッキから攻撃力0の竜星と、守備力0の竜星を呼び出す!」

墓地へ送ったカード

秘竜星―セフィラシウゴ

地竜星―ヘイカン

「残しておかない方がよかつたね…!」

「失敗したときが怖いけどね…:それじゃあ…:守備力0のシユンゲイと、攻撃力0のビシキを特殊召喚!」

炎竜星―シユンゲイ ATK 1900

水竜星―ビシキ DEF 2000

「それじゃあ、レベル4のシユンゲイと、レベル2のビシキに、レベル2のジヨクトをチューニング!」

「レベル4と2と2で、8か」

ジヨクトが飛んで透明になり、2つの歯車になり、その歯車の中にシユンゲイとビシキが入り、合計6つの星になる。

「煌めく光を纏い、天空より舞い降りよ!シンクロ召喚!!」

歯車から光が放たれ、現在この小説においてデュエル皆勤賞の、シヨウフクが現れる。

「レベル8、シンクロモンスター!黄金の竜の星、輝竜星―シヨウフク

！そしてシヨウフクの効果！素材にした幻竜族モンスターの数だけ、フィールドのカードをデッキへと戻す！戻すのは、デストーイ・シザー・ウルフト、デストーイ・シザー・ベア、そして残りのセットカード！」

「あー…それは仕方ない（ビシキをシンクロ素材にしたら、罠カードの効果を受け付けない…：スタンダードにしちゃ、やるね）」

と、仕方なく、指定されたカードをデッキに戻した。これで後はダイレクトアタックを受ければ、終わりである…ダイレクトアタックを受ければ。

輝竜星―シヨウフク ATK 2300↓2800

「うん。リバースカード、オープン！トラップカード、強化蘇生！このカードは、墓地のレベル4以下のモンスター1体を、攻撃力、守備力を100ポイントアップさせ、レベルを1つあげて特殊召喚する！さあ来て、ビシキ！」

「なるほど。エクシーズにも使えるようなカードだね」

水竜星―ビシキ DEF 2100

「うーん、確かに。それじゃあ、シヨウフクの効果！自分フィールドのカード1枚と、自分の墓地のレベル4以下のモンスター1体を対象に発動でき、対象にした自分フィールドのカードを破壊し、墓地の対象にしたモンスターを、特殊召喚する！ビシキを破壊して、墓地のシユンゲイを特殊召喚！」

容赦なく破壊されるビシキ、そして呼び戻されるのはさっきのシユンゲイ。そしてモンスターを破壊したので…。

「それじゃあビシキと具象化、後オマケで墓地のリフンの効果！」

「…あれ…：…なるほど。ファーマニマル10体なんて墓地のファーマルを使つて融合をできるカードでもない、無理だね」

「うーん、なんだか似たような感じの聞いたことあるような…ま、いつか。リフンは戦闘、効果で竜星モンスターが破壊されたときに、墓地から特殊召喚できる！それとビシキと具象化の効果で、トウテツとヘイカンを特殊召喚！」

光竜星―リフン DEF 0

魔竜星―トウテツ ATK 2100  
地竜星―ヘイカン ATK 1500

「それじゃあ…レベル5のトウテツと、レベル3のヘイカンに、レベル1のリフンをチューニング！」

リフンが飛んで透明になり、1つの歯車になる。その中にヘイカン、トウテツが入り、8つの星となる。…そう、8つの。

「古より恐れ崇められる、封じられし最強の龍よ…その封印は今解き放たれ、その猛威は世界の全てを飲み込む！シンクロ召喚！」

歯車から光が放たれる……と同時に、なぜか膨大な冷気が放たれる。…現れるのは、氷を思わせるような白い体を持つ、3つの首を持つ…龍。

「レベル9、シンクロモンスター…絶対零度の龍、氷結界の龍 トリシューラー…トリシューラーの効果発動！……へ、ヘクション！」

「…な、なんでこんなに寒くなるの〜！」

「そ、それはね…うん、とりあえず効果は…相手の手札、フィールド、墓地のカードを1枚ずつ、除外する！」

「ええ?!そ、それってつまり…」

「そ、それじゃあフィールドのトイポツ…へ、へ、ヘックション!…と、トイポツト、墓地のエッジインプシザー、手札1枚を、じよ、除外！」

3つの首から同時に、冷気のブレスを放つ。それは素良の手札、フィールド、墓地を凍らせていく。

除外された手札

融合

「うう…そ、そんな〜」

「こ、これが寒い理由…そ、それじゃあバトル！シヨウフクで、だだ、ダイレクトアタック〜！」

「ううう……も、もう寒いのはいいや…」

素良 LP 2300↓0

デュエルが終了し、フィールドに雪が若干積もったスウィーツ・アイランドから、元のフィールドに戻る。

「うう…あく寒かった…やっぱりトリシューラなんて出すんじゃないな

かった…」

「あれはちよつと卑怯だと思う…」

ちなみに言うトリシューラは、その効果以上に、無駄とも言える気温低下により、アクションデュエルで使うには少々気が引けるカード。…なぜかアクションデュエルのみで、気温低下が起こるが、その理由は分からない。

「まあでも、楽しかった〜!」

「ふふふ、ボクも結構楽しかった〜!」

その後、お菓子をもらった遊華は明るく元気よく、家路についた……実はその後を、素良がついていったのを、遊華はまだ、知らない。

## 第05話 動き出した反逆者

…遊勝塾に向かった翌日、LDSロビーにて、いつもの3人…刃、北斗、真澄の3人を見つけた遊華。…だが、その3人の雰囲気は、どこか違う。…いつもはもうちよつと和やかなはずなのに、なんだかピリピリしているような…。

「?…おーいみんなー!」

「あ、遊華!」

「遊華」

「…その様子だと、何も知らないようね」

真澄の言葉に、首をかしげる遊華。何かあった、というのは真澄の言葉で察したようだ。

「何かあったの?」

「…マルコ先生が、襲われたのよ」

「!マルコ先生…って確か、真澄に融合を教えてくださいっていう講師の人?」

「ええ、そうよ」

真澄が不安そうな顔をした。…尊敬していた人が襲われた。不安にならないほうがおかしいだろう。そして、その不安に追い打ちをかけているのが…。

「でも、襲ったヤツのことならともかく、マルコ先生に会わせてくれないうし、今どういう状態なのかも教えてくれないんだ」

「?変だね…会わせてくれないのはともかくとして、状態も教えてくれないってなんでだろ…」

今どういう状態なのか、そして誰がやったのか…誰がやったのかはともかく、今どういう状態なのか、しっかりと教えてくれない…これでは、不安がより大きくなるだけだ。

「マルコ先生、大丈夫かな…」

「分かんねえ…ただ、それでもオレ達ができることはある!」

「できること?」

「ええ。マルコ先生を襲った犯人を見つけて、捕まえるのよ!」



…某少年探偵団がこういうことをやって、結果危ない目に遭うことが多く、そのことから実行すると危ない目に遭うと思うので、やらな  
いほうがいい…が。

「なら、私も一緒にやる！友達の不安そうな顔を見るのは、好きじゃないし」

「ありがとう。それじゃあ話し合いをしたいけど、どこでする？」

「そうだね…食堂はどうだい？」

「そうね。今の時間なら、人がいないはず…」

「それじゃあ食堂へ、レッツゴー」

…この4人は、やる気だ。4人とも静かに、食堂へ向かう。…ただし、会話の内容は聞こえてないけど、中島さんに目撃されているのを、4人は気付いていない。

数時間後、夕方…遊華達4人の姿は、街にあった。なお、遊華のみ、一旦家に帰っているが、その理由に関しては…。

「…それじゃあ、話し合った通りに、お願いね」

「それはいいけど…変装は必要なのかしら」

…現在、遊華は遊勝塾へ行ったときの格好をしている。そう、一旦家に帰った理由は、変装道具を持つてくるためだ。

「一応だよ、一応」

「…一応…ね」

「でもさ、こういう、尾行とか、搜索って、その相手にバレないほうがいいよね」

「逆に目立ちそうだな…」

「でも、襲撃犯がLDSを狙っているなら、逆に目立つほうがいいんじゃないかしら。バッジは見えるようにしておけば、LDSの人間って分かるわ」

「…この恰好って、目立つ？」

という遊華。…しかし。

「マフラーがいらないわね」

「マフラーじゃなくて、フードつきの上着のほうがいいんじゃないか

「？」

「マフラー、季節外れだしな」

「う…でも今、フードつきの上着とか持つてないよ…」

フードつきの上着と言ったものなど、ここにいる全員が今、持つてきているわけがない。方法があるとすれば、どこかで買って来る、ということだが…。

「…とりあえず、遊華はどこかで別の変装用のものを買う。…それじゃ話し合った通りに行くわよ」

「ああ」

「気をつけろ、どこからくるか分からないからな」

「うん！」

と、4人はそれぞれ、別々の方向へと走って行った。…単純に、捜索範囲を広げるため、4人バラバラに動くことにしたようだ。

「うーん…。(襲撃犯…もしかしたら、隠れてるのかな…じゃあ、人気の少ないところとか…でも怖いなく…でも…うん、行こう)」

と、遊華は歩きながら考え…人気のないほうへと、足を向ける。

「…(や、やっぱり怖い…でも、真澄のため…でもやっぱり怖い…でも真澄のため…でも)」

ということを考えながら、人気のない路地を歩く。…こういうところは危ないから、1人である、なんていうことは絶対に避けよう。

「…おーい、襲撃犯さーん、早く出てきてー…出てくるわけないか…」

「…：：：貴様もLDSか！」

「え？…わ!!？」

そう、不審者に見つけられれば、何をされるか分からない…：：：今の遊華も十分不審者な感じはするが。そして遊華は不審者…コートを来て、サングラスにマスクの人物に、声をかけられた。

「いくぞー！」

「え？デユエル？やるやるー！」

…不審者に声をかけられ、驚いてビビッていても、デユエルをする

と分かれれば嬉々と承諾する、マイペースと言えはいいのか、ただのデュエルバカと言えはいいのか……。とりあえず、デュエルする、という事で襲撃犯らしき人物を見つけたら連絡する、というのを決めていたが、そのことを遊華はすっかり忘れていた。…デュエルバカどころか、普通にバカとも思える。

「よーし…デュエル！」

「デュエル！」

…果たしてこのデュエル…いつたい、どうなるのやら。

## 第06話 反逆の翼、広がる

隼 手札5 LP 4000

遊華 手札5 LP 4000

「オレのターン！」

自分のターンを開始する襲撃犯こと、黒咲隼。お互いに名乗ってはいないため、お互いの名前は知らない。しかし隼に関しては、LDSを目の敵にしているため、LDSなら名前など関係ない。

「…オレは手札から、RRーバニシング・レイニアスを召喚！バニシング・レイニアスは召喚、特殊召喚に成功したターン、1度だけ手札からRR1体を、特殊召喚できる！この効果により、手札からRRーバニシング・レイニアスを特殊召喚！」

RRーバニシング・レイニアス×2 ATK 1300

「同じモンスター…ということは一！」

「これにより、もう1度RR1体を手札から、特殊召喚できる！現れる、RRーバニシング・レイニアス…：そして、レベル4のRRーバニシング・レイニアス2体で、オーバーレイ！2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築!!」

フィールドの2体の、機械のような鳥が紫色の光となり、渦へと飛び込む。

「冥府の猛禽よ、闇の眼力で真実をあばき、鋭き鉤爪で栄光をもぎ取れ！エクシーズ召喚！ランク4！RRーフォース・ストリクス！」

RRーフォース・ストリクス DEF 2000

渦から現れたのは、機械のようなフクロウ。

「フォース・ストリクスのモンスター効果。オーバーレイ・ユニットを1つ使い、デッキから、闇属性、鳥獣族、レベル4のモンスター1体を、手札に加える。この効果により、デッキから、RRーミミクリー・レイニアスを手札に加える」

「範囲がかなり限定されているとは言っても、サーチ効果…RRは、レベル4、鳥獣族モンスターのカテゴリで、エクシーズ主体かな」

「…RRーバニシング・レイニアスの効果によりこのターン、さらにも

う1度、RRを特殊召喚できる。この効果により、手札に加えたRR  
—ミミクリー・レイニアスを特殊召喚！」

「無視か…」

RR—ミミクリー・レイニアス ATK 1100

あつさり無視された遊華。表情を変えず（分からないが）デュエル  
を続ける隼。…そして、バニシング・レイニアス、この効果は…召喚、  
特殊召喚されたターンならば…さらに、特殊召喚できる。

「オレは、レベル4のバニシング・レイニアスとミミクリー・レイニア  
スで、オーバーレイ！冥府の猛禽よ、闇の眼力で真実をあばき、鋭き  
鉤爪で栄光をもぎ取れ！エクシーズ召喚！ランク4！RR—フォー  
ス・ストリクス！」

「またそのモンスターか…」

「フォース・ストリクスは、このカード以外の鳥獣族モンスターの数だ  
け、攻撃力を500ポイントアップさせる。

RR—フォース・ストリクス（守）×2 ATK 1000↓60

0

「フォース・ストリンクスの効果。オーバーレイ・ユニットを1つ使  
い、デッキから、ミミクリー・レイニアスを手札に加える。そして、  
オーバーレイ・ユニットとして墓地へ送られたミミクリー・レイニア  
スの効果発動！このカードが墓地へ送られたターンのメインフェイ  
ズ、墓地のこのカードを除外することで、デッキからRRと名のつい  
たカードを手札に加える。オレが手札に加えるのは、RR—ネスト  
！」

「ミミクリー・レイニアスもサーチ効果を…」

「そして永続魔法、RR—ネストを発動！このカードは自分フィール  
ドにRRが2体以上存在するとき、デッキ、または墓地から、RR1  
体を手札に加える。この効果により墓地の、RR—バニシング・レイ  
ニアスを手札に加える。…カードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

隼 手札2（バニシング・レイニアス、ミミクリー・レイニアス）

LP 4000

モンスター RR—フォース・ストリクス×2（守）OU×1

魔法・罨 「RR―ネスト」×1、セットカード×2

手札全てが判明しているとはいえ、これ以上やられると厄介だ。

「それじゃあ私のターン、ドロー！…よし。手札からチューナーモンスター、闇竜星―ジヨクトを召喚して、ジヨクトの効果！手札の風竜星―ホロウと秘竜星―セフィラシウゴを墓地へ送って」

「その効果にチェーンしトラップカード、ブレイクスルー・スキルを、闇竜星―ジヨクトに対して発動する。これにより、闇竜星―ジヨクトの効果は無効になる」

闇竜星―ジヨクト ATK 0

容赦なく、ジヨクトの効果が無効にされた。だが、遊華はこのままにはしない。

「…なら！手札から魔法カード、死者蘇生を発動！墓地のセフィラシウゴを特殊召喚！レベル6のセフィラシウゴに、レベル2のジヨクトをチューニング！煌めく光を纏い、天空より舞い降りよ！シンクロ召喚！」

ジヨクトが飛んで2つの歯車になり、その中にセフィラシウゴが入り、6つの星へと変わる。そして歯車から光が放たれ、シヨウフクが現れる。

「レベル8、シンクロモンスター…黄金の竜の星、輝竜星―シヨウフク！そして、シヨウフクの効果！シンクロ素材にした幻竜族の属性の種類だけ、相手フィールドのカードを手札に戻す！戻すのは…セットカードとフォース・ストリクス1体！」

シヨウフク ATK 2300

「その効果にチェーンし、トラップカード、RR―レディネスを発動する。これによりこのターン、RRは戦闘では破壊されない」

「う…でも、もう1体のフォース・ストリクスは手札に戻してもらおうからね！」

フォース・ストリクスがバウンスされるが…1体は残る。戦闘破壊はできず、遊華の手札には、効果破壊の手段はない。ここは…。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

遊華 手札1 LP 4000

モンスター 輝竜星―シヨウフク×1 (攻)

魔法・罨 セットカード×1

「さあ、君はどんなデュエルをするのかなー?」

「……オレのターン、ドロロー……その程度か?」

「貴様には、鉄の意志も、鋼の強さも感じられない!フォース・ストリクスの効果!オーバーレイ・ユニットを1つ使い、デッキからRR―ミミクリー・レイニアスを手札に加える!」

「え?」

凄まじい気迫の隼……デュエルに鉄の意志も、鋼の強さもいるのかと思うが、これは隼が様々な経験をした上の考え。同じ経験をしていない遊華にそれを求めるのは少し違うと思う。

「手札から魔法カード、エクシーズ・シフトを発動!自分フィールドのエクシーズモンスター1体をリリースし、リリースしたエクシーズモンスターと同じ種族、属性、ランクのエクシーズモンスター1体を、エクストラデッキから特殊召喚し、このカードをエクシーズ素材とする!オレは、ランク4、闇属性、鳥獣族のRR―フォース・ストリクスをリリース!」

「エクシーズモンスターを使って、さらなるエクシーズモンスターを……」

フォース・ストリクスが粒子となり、消えていく……そしてその粒子が、集まっていく。

「雌伏のハヤブサよ、逆境の中で研ぎ澄まされし爪を挙げ、反逆の翼翻せ!!エクシーズ・チェンジ!ランク4!RR―ライズ・ファルコン!!」  
「ライズ・ファルコン……かつこい!!」

RR―ライズ・ファルコン ATK 100

粒子が形となり、姿を現す、機械のハヤブサ。……だが、その攻撃力は。

「でも……攻撃力100……何かあるのかな」

「エクシーズ・シフトの効果で特殊召喚されたモンスターは、エンドフェイズに墓地へ送られる。……RR―ライズ・ファルコンの効果発動

！オーバーレイ・ユニットを1つ使い、相手の、特殊召喚されたモンスター1体の攻撃力を、このモンスターの攻撃力に加える！お前のフィールドの、特殊召喚されたモンスターは1体：輝竜星―シヨウフクだけだ」

RR―ライズ・ファルコン ATK 100↓2400

ライズ・ファルコンが燃え上がるほどのオーラを纏い始めた。：だがこの：鉄の意志も、鋼の強さも感じられないような効果を持つエクシーズモンスターだが：それはあくまで、ライズ・ファルコン単体の場合である。

「げ！：でも、それだけなら、シヨウフクを破壊しても、次のターンは長く凌ぐことができないよ！」

「ならば、このターンで終わらせるまでだ。オレは手札から、RR―バニシング・レイニアスを召喚！バニシング・レイニアスの効果により、手札からRR―ミミクリー・レイニアスを、特殊召喚する！」

また現れる、バニシング・レイニアスとミミクリー・レイニアス。そのレベルは4、エクシーズに関して遊華はあまり詳しいとは言えないが：。

「レベル4が2体で、ランク4：何を出すの？フォース・ストリクス？それともライズ・ファルコン？それとも別のモンスター？」

「ミミクリー・レイニアスの効果。このカードが、召喚、特殊召喚された自分のターンのメインフェイズに1度だけ、自分フィールドの鳥獣族モンスターのレベルを、1つ上げる」

「無視された：って、レベルが1つ上がるってことはレベル5だから：ランク5！」

「オレは、レベル5となったRR―バニシング・レイニアスとRR―ミミクリー・レイニアスで、オーバーレイ！2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚！」

バニシング・レイニアスとミミクリー・レイニアスが、紫色の光になり、渦へと飛び込む。

「その冷たき翼を広げ、目の前の敵を無力化せよ！ランク5、零鳥姫りオート・ハルピュイア！」



零鳥姫リオート・ハルピユイア ATK 2500

ハルピユイア：ハーピイというほうが知れ渡っているだろうが、つまりいうと、ハーピイのことである。冷たく、青白い氷を纏った、角のある青い体を持つモンスター。：羽にあたる部分は、纏っているほうの氷である。

「わあ〜！」

「リオート・ハルピユイアの、モンスター効果。オーバーレイ・ユニットを1つ使い、相手モンスター1体の攻撃力を、0にする。オレは、輝竜星―シヨウフクの攻撃力を0にする！アーム・フリージング！」

「！そ、そんな…うう、寒いく〜」

輝竜星―シヨウフク ATK 2300↓0

リオート・ハルピユイアが放つ冷氣により、シヨウフクが凍りついた。：ライズ・ファルコンの今の攻撃力は、2400、リオート・ハルピユイアは、2500。遊華のライフは、無傷の4000。だが：2体の攻撃を受ければ、0になるのは確定している。

「バトル！リオート・ハルピユイアで、輝竜星―シヨウフクを攻撃！ブリザード・ステップ！」

「！きゃあああああ！！！」

強烈な吹雪が吹き荒れ、シヨウフク、そして：遊華を傷付け、最後にシヨウフクをハルピユイアが華麗なステップで、破壊した。その吹雪と衝撃により、遊華は吹き飛ばされる。

「うう、ううう…」

「これでトドメだ。ライズ・ファルコンで、ダイレク…!!」

強烈な吹雪と衝撃により、遊華が変装に使っていたサングラスに帽子、マフラーが吹き飛び、遊華の顔が完全に露わになる。：その顔を見た途端、隼は目を見開き、驚いた。

「うう…」

「：なぜ、こんなところに：なぜお前がシンクロを」

「おーいー…こっちだよこっちー！」

「！…」

遊華は必至に立ち上がろうとしている。そして隼は、遊華の顔を見

て、かなり動揺しているようだ。攻撃宣言が途中で止まっている。：そして、隼の言葉を遮るように、声が響く。その声で隼は、退くことにしたのかデュエルを終わらせ、その場から素早く移動した。そして、遊華は意識を失った……遅れて、物陰から現れたのは……。

「……さて……なんとなく遊華に、気付かれないようについて行ったら……まさか、あんなの見つけちゃうなんて」

素良である。こっちこっちー！と言ったのも素良である。実際、自分以外誰か来ている訳ではないのだが、追いつくにはちようどいいだろう。

「とりあえずここは、LDSの人にメールしておこうかな……ちよーつと借りるよ」

というと、遊華のデュエルディスクを手取る。そしてメールを送るため、作成を始める。

「あ、メール来てる……この名前……あの3人か。それじゃあこども、失礼して……」

……メールボックスを確認したところ、北斗、真澄、刃の3人からのメールが来ており、そのメールを元に作ったメールを、その3人へと送った。

「まあ、あの3人かLDSの人が来るまでは、傍にいてあげよつと。逃がしてあげたとは言っても、エクシード次元の残党を見つけられたんだし……それにしても……君はどうして、彼女に似ているんだろうね」

と、気絶していることを分かったうえで、返事のこない質問をした素良……数分後、真澄が来ると、聞こえてきた声を頼りに分かった素良は、その場から瞬時に離れ……その少し後、ボロボロで倒れている遊華を、真澄は見つけた。

数時間後、レオ・コーポレーションでは、遊華が襲われたことを、中島さんが報告していた。

「……今回は巳柳遊華か……」

「はい。どうやら、マルコを襲撃した人物を見つけ出そうと、志島北斗、光津真澄、刀堂刃の3人と探していたようです。…おそらく、彼女がデュエルをしたのは、マルコ襲撃犯と、同一人物で間違いないかと…」

「分かった。…彼女の様態は?」

「命に別状はなく、ケガ自体は大したことはないようですが…どうやら、打ち所が悪かったせいかな、意識が未だ戻らないそうです」

「そうか…話しは変わるが…中島、例の、巳柳遊華のペンダントの分析は、どうなっている」

「はい、それが…常に、ペンデュラム召喚の召喚反応に似た反応を、通常の機器では探知ができないほど微弱ながら放っていることや、正体不明のエネルギーを持つていることは、分かったのですが…」

「…謎が深まった…ということか」

遊華の持つペンダント…セフィラの欠片と呼ばれるそのペンダントの分析、おそらく途中結果であろうが…それを報告する中島さん。

「…他に何か、分かったことはあるか?」

「他…いえ、何も…あ!でも、1つだけ…時折、微弱ながら…正体不明のエネルギーを、放出しています。条件については調査中ですが…」

「分かった。…巳柳遊華の意識が戻り次第、ペンダントの分析を終わらせ、彼女にペンダントを返す」

「よろしいのですか社長!」

「元々、できる限り早くに返すと、約束したからな。だが、調査についてはできる限り続行しろ」

「はい!」

どうやらペンダントについては、謎が深まるばかりで、ほとんど分からなかったようだ。…そして、中島さんが社長室を出ると、零児は、考え始めた。

「…(…おそらく、ペンダントは彼女の近くにあったほうが、何かが起こるだろう。…しかし…巳柳遊華…君はいつたい、何者なんだ)」

と、イスに座り、考え込んでいたが…スケジュール上、考え込んで

いる暇はあまりないので、すぐに考えを仕事へと転換した。

…その後遊華は、意識が回復するまで入院することになった……その夜、舞網市に不思議な光が…現れた。

「？……なんだ？」

偶然にもその光を、寝ようとしていたところで見た遊矢だが…もう寝る時間であり、睡魔はすぐそこまで迫っていたこともあり…。

「…ま、いつかく。ふあゝ…」

と、そのまま眠りについた。…そして、その光が収まったら……1人の少女が、そこにいた。すぐ傍には、赤いバイクがある。

「……う……ここは……どこだろう？」

少女の顔は、ヘルメットを被り、目元に関しても、シールドによってよく分からない。

「…どうしよう……よーし、ここは落ち着いて……つと…寝袋、寝袋…」

…どうやら少女は、寝る気満々のようだ。バイクにある収納スペースを探り、寝袋を取り出す。そして、ヘルメットを外す。

「ふう…それじゃ……」

少女は、寝袋に入る……その少女は、赤くきれいな髪で、くせ毛であるのか、ところどころハネている…が、そのハネ方はどこか規則的だ。…そしてその顔は…。

「…スー、スー」

目を除けば、巳柳遊華に、そっくりであった。

## 第07話 現れる光

遊華が襲撃犯とデュエルをし、結果入院することになった日から夜が明け、朝：遊矢は、普通に目を覚ました。

「ふあく……………さっさと着替えよ」

と、遊矢はベッドから出て、着替えを始める。そして下へと行く…が。

「よつと。母さんおは……………え?」

「ここをこうして、ここをこうすれば……………よし。これで動くと思います」

「どれどれ……………お〜! 治った!! ありがとうユーキちゃん!」

「いえ、どういたしまして」

「それじゃあさっそく……………あ、遊矢おはよう!」

「おはよう、母さん……………そっちの子は?」

キッチンの方にいた遊矢の母親、榊洋子、それと謎の赤い髪の少女：遊矢は思わず目が点。

「あ、この子はユーキちゃんよ」

「あ……………どうも始めまして、ユーキです」

「!!み、巳柳遊華……………に……………似てる」

謎の赤い髪の少女：ユーキという少女は、特徴的かつ規則的なくせ毛……………赤なためか、カニにも見えなくない……………をし、顔つきこそは遊華とまったくも言ってもいいほど同じだが、目はネコ目であることから、印象は違う。そして何より……………胸。平である遊華に対し、こちらは巨乳だ。山だ。きれいな形の山だ。

「あ、息子の遊矢よ。遊矢、この子は遊華じゃなくてユーキよ」

「あ、う、うん……………オレ、榊遊矢。よろしく」

「改めて、ユーキです。よろしくです」

「うん、よろしく……………そういえば母さん、朝ごはんは?」

遊矢とユーキ、互いの自己紹介が終わり、そういえばと、遊矢が母、洋子に聞く。……………そしてその言葉に対して出てきた言葉は……………。

「あ。…ちよつとレンジ使おうとしたら動かなくてね…どうしようかって悩んでたらユーキちゃんがあつという間に直しちゃったのよ！」

「ど、どうも…でも、応急処置みたいなものなので、後で業者の人に点検してもらったほうがいいと思います」

「でも助かるわく。ということだから、今からよ」

「今からかよ…」

「ごめんね2人とも。でも、大急ぎで作るわ」

「あ、私のことより、遊矢くんのことを気にしてください…」

「まだできていない。…いつたい、どんな料理を作るのだろうか…とここで…。」

「…母さん、ユーキはなんでうちに？」

「朝の散歩に行ったら偶然会つてね。行く宛がないみたいだから連れてきたのよ」

「どうとう人まで…」

「？」

榊洋子…野良ネコや野良犬をよく拾ってくるが…どうとう、人である。一応、素良が上がり込むことは最近まあまああるが。

そしてある程度時間が経ち、朝食。

「ねえユーキちゃん、行く宛がないのよね？」

「はい…これからどうしたら…」

「なら、うちに住む？」

…うちに住む？…その一言に、遊矢とユーキは、ともに一瞬固まる。…そして、先に口を開けたのは…ユーキだ。

「…え?!そ、そんないいですよ!朝ごはんを食べさせてくれたり、後お風呂にも入らせてもらったりしたのに…」

「いいの、いいの。それに機械が故障したときに、ユーキちゃんがいてくれれば心強いし、何より…」

「?何より?」

「私、娘も欲しかったから」

「男で悪かったね母さん…」

「何言ってるのよ、遊矢！息子と娘どっちもよ。そのほうが賑やかだと思っわ〜！」

「母さん…」

「あ、アハハハハ……考えて、おきますね…」

…そして朝食が終わり、後片付けも終わって…。

「それじゃ遊矢、ユーキちゃんにこの町を案内してあげなさい」

「いや、今から遊勝塾に行くんだけど…」

「えっと…その、お構いなく…」

「何言ってるのよ。どこがどこだか分からなくちやいろいろと不便でしよっ…」

「だ、大丈夫ですから…」

と、遠慮しているユーキ。すると、「あー！」と声を上げ、手をポンと叩く榊洋子。どうやら何かいいアイデアがあるようだ。

「なんなら遊勝塾に連れて行ったらどう？ユーキちゃんもデュエリストみたいだし、どこかの塾にもう入ってるわけじゃないでしょ？」

「？まあ、そうですね…」

「うーん、でも大丈夫かな…」

「？何が」

「いや、ユーキに似ている人がいて、ちよつとあつたからさ…」

「大丈夫よ！その人とは別人なんでしょ？」

「まあ、そうだけど…」

似ている、というのは遊華のことなのは、明らかである。

「大丈夫だって！みんななんだかんだで優しいから！なんだったら私も行くから」

「は、はあ……それなら、ちよつとだけ…」

…こうして、ユーキは遊勝塾へと向かうことになった…。

そして、遊勝塾…その一室に、遊勝塾の全員が集まっている。…遊勝塾の人間ではないが、権現坂昇も。

「えつと………ゆ、ユーキです。よろしく、お願いします」  
「うーん……なんて言ったらいいのかしら……」

「なんだか、巳柳遊華って子に似ているな……」  
「うーん、確かに似てるけど……でも」

「別人だよ。目が違うし」

やはり遊華に似ているのが注目される。……が、もう一つ。

「それに、遊華お姉ちゃんは、胸はあんなにおっきくないよ」

「確か、平だったね」

「えつと……」

胸である。……巨乳であるユーキに対し遊華は……貧乳。年相応の身長は持っているのに、年相応の大きさの胸は持っていない。遊華は、膨らみがあるかすら、怪しいレベルにない。

「……えーつと……遊華という人は、どんな人なんですか？」

「結構似てるっぽいわね、その遊華って子。どんな子？」

「巳柳遊華……LDSの生徒で、なんていうか……」

「うん、元気いっぱいだね！ボクみたいに」

「うむ、素良の言う通りだな。無邪気なところも似ているな」

「いやー、それほどでもないよ」

褒めてはいないが、あまり表情を変えずにその言葉を言う素良。

「……えつと……そういえばみなさん、名前は……」

「あ、いやごめんごめん。オレは柘修造！この遊勝塾の、塾長だー！」

「私は柘柚子。この塾長の娘よ」

……このと言われた塾長。だがあんまり気にはしていないようだ。

「オレ、フトシ！」

「アユです！」

「タツヤです！」

「オレは遊勝塾のものではないが……権現坂道場の、権現坂昇だ。よろしく頼む」

「はい……みなさん、よろしくお願いします」

「そういえばユーキさん、塾は？」

「この子はどこの塾にも入ってないよ」



と、塾長の質問に対して答えたのは本人…ではなく榊洋子。それを聞いた塾長はもちろん。

「ならー！この我が遊勝塾に入ってみないか！」

「え？」

「お父さん…まず、少し説明しないと」

「塾長いつも通りだな…」

柚子の指摘を受けて、塾長は説明をしていく。…ユーキはというと…。

「…あの。お金とかは、どうすれば…私、そんなにないですし…洋子さんから出してもらおうわけには…」

「それならいいアイデアがあるよ。ユーキちゃん機械の修理、すごく上手だからこの機材、いろいろと修理してもらおうっていうのは？」

「機械の…なら、ちよつと頼みたいことがある」

「？はい」

「…実は、最近洗濯機の調子が悪いんだ。ちよつと見てくれないか？」

「いいですけど…」

…その後、ユーキはあっさり、洗濯機を直した。業者に見てもらおうようにとは言っていたが、かなり早い段階で修理が完了した。…そのことから、定期的に機械を見てもらう、という条件がありつつも…。

「…分かりました。遊勝塾に、入ります」

「よしー！」

「これからよろしくね、ユーキ！」

「はい。みなさん、どこまでお力になれるかは分かりませんが、よろしくお願いします」

…そして、デュエルについての授業が始まる。今回は召喚方法。アドバンス召喚と儀式召喚については出たが、融合、シンクロ、エクシーズに関しては…。

「…ということで、融合召喚には、融合カードと融合モンスター、それと融合モンスターのカードに書かれてある融合素材のカードが必要になるんだ。まあ、名前が指定されているものなら、素材モンスター

の代わりになれるモンスターもいるんだ」

「なるほど」

と、素良が教えている。…塾長は融合召喚がちゃんと分かっていないとのことなので、教えることができない。なお、シンクロ、エクシーズに関しては、大体知らないとのこと…ただし素良のみ、お菓子を食べるとのことで知らないかは不明。

「ねえ他の召喚方法はー?」

「すまん、オレもちゃんと分かってないんだ…」

「ここにシンクロ、エクシーズの分かるヤツいるか?」

「?シンクロでしたら、私、分かりますけど…」

と、ユーキが言った途端、全員の視線が集まる。

「…えつと…シンクロ召喚、というのは…必要なカードは、エクストラデッキにシンクロモンスターと、メインデッキに、チューナーモンスター…それと、チューナー以外のモンスターが、必要になります。…そしてシンクロ召喚は、フィールドのチューナーとチューナー以外のモンスターのレベルを足した、その合計と同じレベルのシンクロモンスターを、エクストラデッキから呼び出せる…レベルの足し算による、特殊召喚です」

「足し算か」

「はい。たとえば…このチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンはレベル3です。そして、レベル4のモンスターを素材とすると、呼び出せるシンクロモンスターは?」

「3+4だから…7か」

「そうです」

ユーキが、シンクロについてご教授中。なるべく分かりやすくなるように説明を心掛けている。

「シンクロ召喚には、チューナーは原則1体であって、チューナー以外のモンスターは、呼び出すつもりはシンクロモンスターのレベルの合計と同じになるなら、何体でもOKです」

「何体でも?すげー!」

「とは言っても、シンクロ召喚に使えるのは自分フィールドのモンス

ターだけです。…ただ、カードの効果で自分の手札のモンスターをシンクロ素材にできたり、相手フィールドのモンスターも、シンクロ素材にできたりすることはできます」

「相手フィールドのモンスターも素材にできるの!?!」

「まあ…あまり種類はないですけどね」

と、若干の苦笑いを浮かべるユーキ。…そんなカードがあまりあってもどうかとは思うが。そして、授業後は…。

「…そういえば、ユーキって、どんなデッキ使うんだ?」

「え?…でしたら、デュエルしません?」

「いいわね…ユーキがどれぐらい強いか見てみたい!」

「オレもオレも!」

「私も!」

「ボクも!」

と、遊勝塾のみんなはワクワクしている。…ということだ

「それじゃあ、アクションデュエルだー!」

「?アクション…デュエル?…アクションデュエルって、なんですか?」

「…え?!」

「…ユーキ、アクションデュエル…知らないのか?」

「はい…その、すみません」

その後、アクションデュエルについての説明をある程度受けた後、フィールドへと向かった。

「それじゃあ、始めよう!」

「はい」

遊矢とユーキがフィールドに行き、そして…。

「それじゃあ行くぞー!アクションフィールド、プレイン・プレーン、セット!」

塾長の声とともに、ソリッドヴィジョンが起動。…金網が壁の大部分と天井だった部屋が…広大な草原へと、姿を変える。

「わあ〜！」

「おーい…始めるぞー！」

「…あ！はい！」

ユーキはそれに感激を覚えた…そしてアクションデュエルを始めるわけだが、実はいうと、定番の口上を、ユーキは知らない。

「それじゃあ…戦いの殿堂に集いしデュエリスト達が！」

「え？…え、えーつと…」

「モンスターとともに、地を蹴り！宙を舞い！」

「フィールド内を駆け巡る！」

「見よ！これぞデュエルの最強進化系！」

「二アクション…」

「え？…でゆ、デュエル！」

遊矢、柚子、昇の3人で、アクションデュエルの口上を行い…アクションカードが、フィールドへと散らばる。…いきたい、どのようなデュエルになるかは、次回。

## 第08話 光の使者

「でゆ、デュエル！」

「デュエル！」

遊矢 手札5 LP 4000

ユーキ 手札5 LP 4000

「それじゃ、先攻はどうぞ」

「あ、いえ、お構いなく…榊くんが、先攻でいいですよ」

「え?でも…」

「どうぞ…私は後攻で大丈夫なので」

ユーキのその言葉に、まあいいかと思う遊矢…この言葉の真意については、ユーキは単に、ドロ―したかっただけである。

「…それじゃあ、オレのターン!…オレは手札から、スケール4のオツドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを、ペンデュラムゾーンにセツティング！」

「?スケール?ペンデュラムゾーン?」

青い光の柱が現れ、その中に赤い竜、オツドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンが浮かび上がってきた。その下には、数字の4が浮かび上がっている。…ユーキは、ペンデュラムについてはよく知らない。なので…。

「あ…スケールっていうのは、ペンデュラム召喚に使う数値で、ペンデュラムゾーンは、ペンデュラムカードを置ける場所の1つなんだ」「ペンデュラムカード…って、なんですか?」

…というところで、ペンデュラムについての説明が、始まった…そして、必要なことを説明したところで…。

「…つまり、ペンデュラム召喚には、ペンデュラムゾーンの2か所に、ペンデュラムモンスターを1枚ずつ置く、そして、そのペンデュラムモンスター2枚の、スケールの数値の間にあるレベルのモンスタ―を、手札、そしてエクストラデッキに表側表示であるペンデュラムモンスターを、1ターンに1度特殊召喚できる…そしてペンデュラムモンスターは、フィールドではモンスター、ペンデュラムゾーンでは魔

法として扱い、フィールドから墓地へ送られる代わりに、エクストラデッキに、表側で置かれる…ということですね」

「そういうこと。それじゃあ、オレは手札からEMシルバークロウを召喚！」

EM シルバー・クロウ ATK 1800

「ペンデュラムモンスター…」

現れたのは、EMの中でもかっこいいモンスター、シルバー・クロウ。中々のスピードに高いステータス、アクションデュエルでも普通のデュエルでも、結構活躍できそうだ。

「オレはこれで、ターンエンド！そしてエンドフェイズ、オツドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの、ペンデュラム効果！ペンデュラムゾーンはこのカードを破壊し、デッキから攻撃力1500以下の、ペンデュラムモンスター1体を手札に加える。オレは、時読みの魔術師を手札に加える！さあ、行くぞシルバー・クロウ」

遊矢 手札4（時読みの魔術師） LP 4000 EX 1枚

モンスター EMシルバー・クロウ×1（攻）

魔法・罠 なし

エンド宣言をし、遊矢はサーチ効果を使用後、シルバー・クロウに跨り、アクションカードを探す。そしてユーキのターンだ。

「では、私のターン、ドロー…：手札から魔法カード、ソーラー・エクステンジ！手札のライトロード1体を墓地へ送って、デッキからカードを2枚ドローし、デッキの上からカードを墓地へ送ります」

「?!ら、ライトロード?!」

ライトロード：遊矢達にとっては、衝撃的なカードたちである。デッキの上からカードを墓地へ送る…つまり、ランダム性の高い墓地落とし。このライトロードが出た当初こそはあまりいい評価がなかった…が、その切り札たるモンスターの存在は凄まじいインパクトであり、またこのカードたちはデュエルに変化をもたらした。墓地アドバンテージ…その重要性。

「私は手札のライトロード・ビースト ウォルフを墓地へ送って、2枚をドローし、2枚を墓地へ」

墓地へ送られたカード

ライトロード・モンク エイリン

死者蘇生 ↑

死者蘇生が落ちたことに思いっきり苦い顔をしたユーキ。しかし、もう気にしている暇はない。

「：手札からライトロード・サモナー ルミナスを通常召喚！」

ライトロード・サモナー ルミナス ATK 1000

ユーキが呼び出したのは、召喚師の称号を持つライトロード、ルミナス。金髪で小麦色の肌が特徴の女性だ。

「ライトロード・サモナー ルミナスの効果を発動します！1ターンに1度、手札のカード1枚を墓地へ送り、墓地のレベル4以下のライトロード1体を、特殊召喚します！その効果で手札のライトロード・アサシン ライデンを墓地へ送り、ライトロード・アサシン ライデンを、特殊召喚します！」

「：墓地へ送ったモンスターをすぐに：」

ライトロード・アサシン ライデン ATK 1700

ルミナスの両手に魔法陣が出現し、続いてルミナスの隣に魔法陣が出現する。：ルミナスの隣の魔法陣から光が放たれ、その中から：暗殺者の称号を持つライトロード、ライデンが現れる。ルミナスと同様の小麦色の肌で、黒い髪の男性。ただし上半身裸だ。

「そしてライトロード・アサシン ライデンの効果を発動します！1ターンに1度、デッキの上からカードを2枚墓地へ送り、このときにライトロードが墓地へ送られたら、このカードの攻撃力を、相手のエンドフェイズまで200ポイント上げます！」

ライデンがクルクルと短剣を片手で回し、ユーキ目掛けて投げる。：それが合図なのか、ユーキのデッキの上から2枚が飛び出て、それをユーキは墓地へ送る。短剣に関しては、ユーキに当たらず、近くの地面に刺さる。

墓地へ送られたカード

ライトロード・アーチャー フェリス

裁きの龍

ライトロード・アサシン    ライデン    ATK    1700 ↓ 1900  
「…墓地へ送られたライトロード・アーチャー    フェリスの効果が発動します！このカードがモンスター効果で墓地へ送られた場合、このカードを特殊召喚します！」

ライトロード・アーチャー    フェリス    DEF    2000

続いて現れたのは、緑色の髪に獣の…おそらく、ネコ耳がある、筋肉質の少女が現れる。キリリとした目が、さり気なくシルバー・クロウを睨んでいる。

「ペンデュラムカードは破壊されても、エクストラデッキに表側で置かれ、ペンデュラム召喚時にはスケール幅と合うレベルなら、呼び出せる。それなら…」私は、レベル3のライトロード・サモナー    ルミナスに、レベル4のライトロード・アーチャー    フェリスをチューニング！」

フェリスが駆け出し、高く跳ぶ。そして4つの輪に変わり、その中にルミナスが入り、3つの星に変わる。

「集いし祈りが、光の使者の長を呼び寄せる。光差す道となれ！シンクロ召喚！」

輪から光が放たれ現れたのは…白いドラゴン、裁きの龍。…だが、呼び出したモンスターはこのモンスターではなく…。

「導け、ライトロード・アーク    ミカエル！」

「！あれって確か、ジャッジメント・ドラゴン?！」

ライトロード・アーク    ミカエル    ATK    2600

裁きの龍の頭の上に乗っている天使、ミカエル。黄金の鎧を纏う、健康的な肌を持っている。そのミカエルは、裁きの龍から降り、裁きの龍は雲の間から差す光の中へと、消えていった…。

「あ、本体は天使のほうです」

「え？あ、確かに…」

「それでは、ライトロード・アーク    ミカエルの、モンスター効果！ライフを1000ポイント支払い、相手フィールドのカード1枚を、ゲームから除外します！私が除外するのは、シルバー・クロウ！ライフトオブグロウリー！」



「!?しまった…」

ユーキ LP 4000↓3000

ミカエルが剣を高々と掲げると、剣が光を纏い始め、その剣の切っ先を、シルバー・クロウへと向け…光が、シルバー・クロウを貫く。そしてシルバー・クロウは光に包まれ…消えた。

「!シルバークロウ!!」

「フィールドから墓地へ送られる状況でエクストラデッキに戻るというのなら、除外するまでです。では、バトル!ライトロード・アサシン ライデンで、ダイレクトアタック!」

ライデンは、投げて地面に刺さっている短剣を手早く回収し、遊矢に迫る。

「!アクションカード… (いや、これは…) !ぐ…」

遊矢 LP 4000↓2100

アクションカードを拾った遊矢だが、すぐには使わずに、ライデンの攻撃を受ける。そしてライフはミカエルの攻撃力より下回っている。

「…(先ほど拾ったカード…おそらく、それに何か手が…) ライトロード・アーク ミカエルで、ダイレクトアタック!明光の一閃!」

「それはストップ!アクションマジック、回避!ライトロード・アーク ミカエルの攻撃を、無効にする!よっと!」

回避 アクション魔法

①フィールドのモンスター1体を対象として発動できる。  
そのモンスターの攻撃を無効にする。

ミカエルの渾身の突きを回避する遊矢。衝撃に関しては発生したバリアが吸収して無力化した。

「なるほど…それでは、カードを1枚伏せて、ターンエンドです。そしてこのエンドフェイズ、2体のライトロードの効果。ミカエルは3枚、ライデンは2枚、合計5枚のカードを、デッキの上からカードを墓地へ送ります」

ライトロード最大の特徴にして、デメリットにしてメリットであるこの効果。この効果故に、ライトロードは早期決着を求められるデッキになっっている。

墓地へ送られたカード

ネクロ・ガードナー

ソーラー・エクステンション

ライトロード・ビースト ウォルフ

ライトロード・パラディン ジェイン

ブレイクスルー・スキル

「…墓地に送られた、ライトロード・ビースト ウォルフの、モンスター効果！このカードがデッキから墓地へ送られたとき、このカードを特殊召喚します！」

光とともに現れたのは、白い毛並みに犬の頭を持つ獣人、ウォルフ。かなり心強いライトロードの戦士だ。

ライトロード・ビースト ウォルフ ATK 2100

ユーキ 手札3 LP 3000 EX14 メインデッキ34

枚

モンスター ライトロード・アサシン ライデン×1(攻)、ライト

ロード・アーク ミカエル×1(攻)、ライトロード・ビースト ウォ

ルフ×1(攻)

魔法・罫 セットカード×1

「行くぞ…オレのターン、ドロロー……よし……レディースエーン！  
ジェントルメーン！」

「…え？」

どうやらお目当てのカードを引いた遊矢。そして、いきなりの宣言に思わず呆気にとられるユーキ。

「ただいまより行うのは、まだまだ世にも珍しい召喚。それでは早速まいりましょう！…私は、スケール1の時読みの魔術師と、スケール8の時読みの魔術師を、ペンデュラムゾーンにセッティング！」

青い光の柱が現れ…その中に、白いローブの魔法使い、星読みの魔術師と、黒い服の魔法使い、時読みの魔術師が浮かぶ。星読みの魔術

師の下には1、時読みの魔術師の下には8の文字が浮かぶ。

「これにより、私はレベル2から7のモンスターが、同時に召喚可能となります!...でもその前に。私は手札から、EMソード・フィッシュを召喚! EMソード・フィッシュは、召喚、特殊召喚に成功したとき、相手フィールドの全てのモンスターへの攻撃力、守備力を600ポイントダウンさせます!」

「く... (全体的な攻撃力ダウン... 厄介ですね)」

EMソード・フィッシュ ATK 600

剣のような見た目の魚、ソード・フィッシュ。顔の上にあるのがリーゼントに見え、サングラスもあって結構厳つく見える。そのソード・フィッシュが増える。...その合計、18体。そしてその18体はそれぞれ、ライデン、ミカエル、ウオルフの3体へと、6体ずつで突撃していき、ライデン、ミカエル、ウオルフの3体をそれぞれ囲むように、地面に突き刺さる。

ライトロード・アサシン ライデン ATK 1900↓1300

ライトロード・アーク ミカエル ATK 2600↓2000

ライトロード・ビースト ウオルフ ATK 2100↓1500

「それでは改めて...スケールは1と8、よってレベル2から7のモンスターが、同時に召喚可能となります! 揺れる、魂のペンデュラム! 天空に描け光のアーケ! ペンデュラム召喚! 現れる! オレのモンスターたち! EMヘイタイガー! そしてエクストラデッキより! 世にも珍しき二色の眼を持つ竜、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン!」

青い光の柱、その間に巨大な振り子が現れ、光の柱の間を、揺れる。...そして、ペンデュラムが描いた軌跡が光の穴となり、そこから光がフィールドへと降り立つ。...1体は赤い衣装を纏った、二足歩行のトラ、ヘイタイガー。そして...赤く、胴体は青い球体を覆うように白い部分があり、同じ素材と思われる角らしきものが背中から生えている竜、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン。

EMヘイタイガー ATK 1700

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK 2500

「そしてEMソード・フィッシュの効果発動！このカードがフィールドに存在するときに、自分フィールドに他のモンスターが特殊召喚されたら！相手モンスターの攻撃力、守備力を600ポイント下げます！」

「！（他のモンスターの特殊召喚にも…これは、他にもいろんなことに使えますね…）」

再び同じように、ソード・フィッシュが突撃していった。これにより、ユーキのフィールドのモンスターの攻撃力、守備力は…下級モンスター並になった。

ライトロード・アサシン    ライデン    ATK    1300↓700

ライトロード・アーク    ミカエル    ATK    2000↓1400

ライトロード・ビースト    ウォルフ    ATK    1500↓900

「ではバトル…（ここはライデンを攻撃して、1ターンキルを…いや）EMヘイタイガーで、ミカエルを攻撃！」

「…（ここは…ミカエル、ごめんなさい）」

ヘイタイガーの攻撃により、ミカエルは破壊される。…だが。

ユーキ    LP    3000↓2700

「破壊されたミカエルのモンスター効果！墓地のこのカード以外のライトロードをデッキに戻し、戻した数×300ポイント、ライフを回復します！私は墓地のライトロード・モンク    エイリン、ライトロード・サモナー    ルミナス、ライトロード・アーチャー    フェリス、ライトロード・パラディン    ジェインをデッキに！」

「ライフ回復効果を持っているのか…ならこっちは、EMヘイタイガーの効果発動！モンスターを戦闘破壊したら、デッキからEMのペンデュラムモンスター1体を、手札に加える！オレはEMカレイド・スコープオンを手札に！」

「サーチ効果ですか…戻した枚数は4枚、よって1200ポイント回復します」

ユーキ    LP    2700↓3900

ユーキに光が降り注ぎ、ユーキのライフが回復していく。

「…（ここは…）オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンで、ライトロー

ド・ビースト ウォルフを攻撃！その二色の眼で、捉えた全てを焼き払え！螺旋のストライク・バースト！」

「オッドアイズの効果は……ここは……つと。…アクションマジック、ウインド・シャウト！このカードを発動したターン、自分が受ける戦闘ダメージは半分になり、自分が戦闘ダメージを受ける度に、相手ライフに500ポイントのダメージを与えま……あれ？」

ウインド・シャウト アクション魔法

①このカードを発動したターン、自分が受ける戦闘ダメージは半分になり、自分が戦闘ダメージを受ける度に、相手ライフに500ポイントのダメージを与える。

アクションカードを取り、発動した……が、なぜかエラーがでた。その理由は……

「おっと、申し訳ありません。星読みの魔術師のペンデュラム効果により、魔法を、時読みの魔術師の効果により、罫を、ペンデュラムモンスターの攻撃時にはダメージステップ終了時まで発動できません！さらにオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンは、相手モンスターとの戦闘によって相手に与える戦闘ダメージは、2倍になります！リアクション・フォース！」

「！しまった！」

「オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの攻撃力は2500、そしてライトロード・ビースト ウォルフの攻撃力は、ただいま900！その攻撃力の差は、1600。よって3200のダメージとなります！」

ペンデュラム効果。ユーキは自分が分からないカードについては、カード効果はよく確認するが、ペンデュラムゾーンのカードの効果を確認することを、忘れてしまっていた。…そして、螺旋回転する炎が、ウォルフを襲う……が。

「(仕方ない……)……ダメージステップ開始時、私は手札からオネストを墓地へ送り、効果を発動します！」

「なっ！お、オネスト?!」

金色の棒により、炎が…打ち払われる。そしてウオルフの背中には、白い翼が生えている。

「オネストは、自分の光属性モンスターが戦闘を行うダメージステツプ開始時に手札から墓地へ送ることで、相手モンスターの攻撃力を、戦闘を行う自分のモンスターに加える！」

「く…」

ライトロード・ビースト    ウオルフ    ATK    900↓3400

「迎撃です、ウオルフ！」

「く…オッドアイズ！」

遊矢    LP    2100↓1200

「…でも、ソード・フィッシュで、ライデンを攻撃！…つと、ここでアクションマジック、ウインドジャマー！相手モンスター1体の攻撃力を、500ポイントダウンさせます！この効果により、ライデンの攻撃力を500ポイントダウン！」

ライトロード・アサシン    ライデン    700↓200

ウインドジャマー    アクション魔法

①相手フィールドに表側表示で存在するモンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターの攻撃力を500ポイントダウンさせる。

「っ…う…（ライデン、ごめんなさい）」

風がライデンに纏わりつき、動きを封じる。…そして、ソード・フィッシュがライデンを貫いた。

ユーキ    LP    3900↓3500

「よし…カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

遊矢    手札1（EMカレイド・スコピオン）    LP    1200    E

X    1枚

モンスター    EMソード・フィッシュ×1（攻）、EMヘイタイガー

×1（攻）

魔法・罫 セットカード×1

Pゾーン 星読みの魔術師：1 時読みの魔術師：8

「私のターン、ドロロー！…手札から魔法カード、増援を發動します！その効果でデッキから、レベル4の戦士族、ライトロード・アサシンライデンを手札に加えて…チューナーモンスター、ライトロード・アサシン ライデンを召喚します！」

「…またライデンを…」

再び現れるライデン。無効にできなければ、もう1度デッキからカードを墓地へ送る効果が、發動する。

「ライデンの効果を發動します！デッキの上から2枚を、墓地へ！」

墓地へ送られたカード

ライトロード・ハンター ライコウ

ライトロード・アーチャー フェリス

ライトロード・アサシン ライデン ATK 1700↓1900

「…やった。ライトロード・アーチャー フェリスを特殊召喚！…そしてライトロード・アーチャー フェリスの、もう1つの効果！このカードをリリースし、相手モンスター1体を破壊します！EMヘイタイガーを、破壊！」

「…ヘイタイガーが…」

ライトロード・アーチャー フェリス DEF 2000

フェリスが狙いを定め、矢を放つ。…その矢はきれいに、ヘイタイガーへと突き刺さり、ヘイタイガーを破壊する。…そして、フェリスは光となって消えていく…が。

「そして、デッキの上からカードを3枚、墓地へ送ります」

墓地へ送られたカード

ライトロード・ビースト ウォルフ

光の援軍

ギヤラクシー・サイクロン

「…では、ライトロード・ビースト ウォルフを特殊召喚します。…私は、攻撃力、守備力が下がっているレベル4のライトロード・ウォルフに、レベル4のライトロード・アサシン ライデンをチューニング

！」

ライトロード・ビースト ウォルフ ATK 2100  
ライデンが走り、4つの輪に変わると、その中にウォルフが入り、4つの星となる。

「集いし魂が光となり、星界を切り裂く一筋の閃光となる！光差す道となれ！シンクロ召喚！」

歯車から光が放たれ……現れたのは……白いドラゴン。煌めく光の粒子を纏い、胴体の部分には謎の紋様がある、美しいドラゴン。

「響け、閃珧竜スターダスト！」

閃珧竜スターダスト ATK 2500

「閃珧竜、スターダスト……すごい、こんなモンスター、始めてみたよ！」

「これが私のエースです。……それでは、バトル！ライトロード・ビースト ウォルフで、EMソード・フィッシュを攻撃！」

「つてわああああ!!……アクションカード……たあ!!……よし！アクションマジック、ガスト・リフレクト！このカードを発動したターン、1度だけ自分が受けるあらゆるダメージを、相手に跳ね返す！」

ガスト・リフレクト アクション魔法

①このカードを発動したターンに1度だけ、自分が受ける戦闘ダメージ、もしくは効果ダメージは、代わりに相手を受ける。

「ではここでアクションマジック、ウインド・シャウトを発動します！自分が受ける戦闘ダメージを半分にし、戦闘ダメージを受ける度に、相手ライフに500ポイントのダメージを与えます！」

「あつ……」

遊矢の周りに風の壁が現れる。そして、ウォルフがソード・フィッシュを攻撃した……が、遊矢にダメージはなく、ウォルフに似た風がユークィのところまで飛んでいき……ダメージを与える。

「く……」

ユークィ LP 3500↓2750

「……ウインド・シャウトの効果で、500ポイントのダメージです！」



「っ！くう…」

遊矢 LP 1200↓700

「ガスト・リフレクトの効果は1度だけ、これは跳ね返せません！閃光竜スターダストで、ダイレクトアタック！流星閃撃!!」

「トランプ発動！EMコール！相手モンスターダイレクトアタックを無効にし、デッキから、守備力の合計が攻撃を無効にしたモンスターの攻撃力以下になるように、EM2体を手札に加える！」

「EMを2体も…」

「代わりにオレは次のターン、エクストラデッキからモンスターを特殊召喚できない。閃光竜スターダストの攻撃力は、2500。オレはデッキから手札に加えるのは、守備力1000のEMチアモールと、守備力800のEMヒックリカエル！2体の守備力の合計は、1800。スターダストの攻撃力を下回っている」

スターダストの攻撃は無力化され、遊矢の手札には、さらなるモンスターが手札に加えられた。…エクストラデッキからモンスターが呼び出せなくなるのは、少々辛いですが、それでも中々の効果である。

「私はこれで、ターンエンドです」

ユーキ 手札1 LP 2750

モンスター ライトロード・ビースト ウォルフ×1(攻)、閃光竜スターダスト×1(攻)

魔法・罫 セットカード×1

「…すごいな、ユーキ。すぐにペンデュラムモンスターの弱点を見抜いて、除外してくるなんて…」

「いえ、私もまだまだです。私は…まだまだ、弱いですから」

「そんなことない。ユーキは強い。間違いないよ」

「…でも…私はやっぱり、まだまだです」

遊矢を追い詰めているので、中々の実力を持っているのは確実。しかしユーキは、まだまだと言う。…さらに上を目指しているようだ。「それでも、やっぱり強い。でも、オレも負けてられない！お楽しみは、これからだ!!オレのターン、ドロロー!!!来た…!!それではもう1度!ペンデュラム召喚!現れる、オレのモンスターたち!手札か

ら、EMカレイド・スコープオン、EMチアモールを、特殊召喚！」  
再び振り子が揺れ、2つの光が、フィールドに降り立つ。現れたのは、中々かわいい見た目のサソリ、カレイド・スコープオン。そしてチアガールの恰好をしたモグラ、チアモール。

EMカレイド・スコープオン ATK 100

EMチアモール ATK 600

「？攻撃力の低いモンスターを、攻撃表示で…」

「さらにオレは手札から、EMトランポリンクスを召喚！EMトランポリンクスは召喚に成功したとき、自分か相手のペンデュラムゾーンのカードを1枚、手札に戻す。オレは、星読みの魔術師を手札に加える。そして、手札からスケール3のEMヒツクリカエルを、ペンデュラムゾーンにセッティング！」

EMトランポリンクス ATK 300

星読みの魔術師が消え、代わりにカエルが青い柱の中に浮かび、その下に3の数字が浮かぶ。そして…時読みの魔術師の下の数字が、8から7、6、5となつていき…4で、変化は止まった。

「時読みの魔術師、そして星読みの魔術師は、片方のペンデュラムゾーンのペンデュラムカードが、魔術師かオッドアイズじゃないとき、スケールが4になる」

「スケールが下がった…でも、何を…」

「オレは、EMヒツクリカエルの効果発動！フィールドのモンスター1体の攻撃力、守備力を、入れ替える！オレは、EMカレイド・スコープオンの攻撃力、守備力を入れ替える！」

EMカレイド・スコープオン ATK 100 ↓ ATK 2300

「……なるほど、チアモールの効果ですか」

「ネタバレされちゃったか…オレは、EMチアモールの効果発動！フィールドのモンスター1体の攻撃力を、元々の攻撃力より下なら1000ポイントダウンさせ、上なら1000ポイントアップさせる！EMカレイド・スコープオンを選択！そして攻撃力は、元々の攻撃力より大きい！よって、1000ポイントアップ！」

EMカレイド・スコープイオン ATK 2300↓3300  
「攻撃力3300…」

「さらに、EMカレイド・スコープイオンのモンスター効果！自分フィールドのモンスター1体を選び、そのモンスターはこのターン、相手の特殊召喚された全てのモンスターに攻撃できる！オレは、カレイド・スコープイオンを選択！カレイド・ミラージュー！」

「攻撃力3300で、連続攻撃を…」

「ではバトル！EMカレイド・スコープイオンで、ライトロード・ビースト ウォルフを攻撃！」

「く…(トラップカードと予想して、時読みの魔術師を残した…中々ですわね)」

ユーキ LP 2750↓1550

「続いて！閃光竜スターダストを攻撃！」

「…閃光竜スターダストの、効果発動!!」

カレイド・スコープイオンの攻撃により、土煙が発生する。

「よし…これで後は、残りのモンスターで攻撃すれ…!?な…」

「ふう…」

土煙が晴れたら…そこには、翼で体を覆った、スターダストの姿。

ユーキ LP 1550↓750

「スターダストには、1ターンに1度、フィールドのカード1枚に対し、戦闘及び効果破壊による破壊を無効にする破壊耐性を与えます」  
「なっ!!…オレはこれで…ターンエンド。このエンドフェイズ、ヒックリカエルとチアモールの効果は終了し、カレイド・スコープイオンの攻撃力、守備力は、元に戻る」

EMカレイド・スコープイオン ATK 2300 ↓100

遊矢 手札1 (星読みの魔術師) LP 700 EX 1枚

モンスター EMカレイド・スコープイオン×1 (攻)、EMチアモール×1 (攻)、EMトランポリンクス×1 (攻)

魔法・罫 なし

Pゾーン EMヒックリカエル：3 時読みの魔術師：5

「それでは…私のターン、ドロ…このデュエル、もらいました！」

自分の墓地にライトロードが4種類以上存在することにより、手札からこのカードを特殊召喚できます。……光のかの地より、今光臨せよ、天上の龍！ジャッジメント・ドラグーン裁きの龍!!」

「っ！く……アクションカード……」

……空に、雲が立ち込める。そして雲から光が差し込み始め……一番大規模の光から、降臨する。白く、ドラゴンというよりも獣にも似た姿だ。だが、その巨大な体躯に、それに似合った巨大な翼、そして何より、その体から放たれる威圧感……間違いなく、竜であろう。

裁きの龍 ATK 3000

「バトル！閃光竜スターダストで、EMチアモールを攻撃！」

「！あつた……!!」

現在のフィールドでは、この攻撃を防ぐ手段のない遊矢……頼みの綱であるアクションカードを見つけた……が。

「すみません……でも、終わりです！響け、シューティング・プラスト流星閃撃!!!」

ユーキが、回収した。……飛んでいるスターダストに掴まった状態で、アクションカードを、回収したのだ。……そしてスターダストは、口の中に光を集め……白い光線を、放つ。

「く……うわあああああ！」

遊矢 LP 700↓0

遊矢の敗北により、デュエルが終了。フィールドは草原から、大部分が金網の部屋へと、戻る。

「あー、負けた……」

「すみません……でも、負けたくなかったの……」

「それにしても……よくあんな状態でアクションカード、取れたな」

「あそこ辺りにあることは推測していたので……取れたのは、偶然みたいなものです」

「え？推測してたって、どうやって……」

「最初のときに散らばったアクションカード……その軌道を見て、計算したんです」

「え……」

…このとき遊矢は思った。ユークは、自分が思っていたよりも、もつとすごいのかも、と。

## 第09話　メカニック師匠

…ユーキが遊勝塾へと入塾して数日が経った…遊華はもう目覚めて退院し、いつも通りの日常を過ごしていた…とは、言い切れなかった。

「…はあ…」

「遊華、どうしたんだよ。あの日以来ずっと負けっぱなし。このままじゃ、舞網チャンピオンシップに出られないぜ」

「それに、あなたのデュエルを見ていたけど…何んだか集中できてなかったわ」

「さすがにここまで連敗が続いているのを見てみると、心配だよ」

「はあ…このままじゃ、ダメだよね」

そう、あの日から…デュエルで、勝てなくなった。理由は分からないが、なぜか集中できずにいる。連敗の影響か、いつもの子供っぽい明るさもない。

「…はあ…」

「…うーん…じゃあ、なんか食いに行こうぜ！遊華も一緒に！オレらの奢りで！」

「私はいいけど、あなたたちは？」

「うーん…まあ、ボクは問題ないけど刃、君は大丈夫かい？」

「…なんとか」

どうやら刃の懐事情は中々厳しいようだ。…だが、その刃の提案に対して遊華は…。

「ごめん…気持ちはいれしいけど…今日は、1人でいたいので…それじゃあね」

「あ、お、おい…」

「刃…今日は、そつとしておきましょう」

「あれは重症だね…いったい、あのときに何があったんだろ」

夕焼けがきれいに見える舞網市の河川敷…そこに、遊華は座っていた。自転車は近くに止めてある。

「…はあ……どうしちゃったんだろ、私…」

やはりあのときのデュエルが…不審者こと、黒咲隼とのデュエルの影響が、大きいのだろう。

「…デュエルって、楽しいはずなのに…どうして、楽しくないんだろ」  
だがその答えは返ってこない。……そのはず、だった。

「うーん…飽きたっていうなら分かるけど、遊華はデュエルを飽きるとは思えないし…」

「!?!え……し、師匠?!」

「やあ、遊華」

遊華が師匠と呼んだ人物は……青い髪に、人懐っこい笑顔を浮かべた青年であった。その青年は、遊華の隣に座った。

「…どうしてここが……それに、なんで師匠がここに」

「遊華のお父さんから、最近遊華は調子が悪いみたいだって相談されてね。なんとかできないかなって思ってた。それに、ここならいるんじゃないかって、遊華のお父さんに聞いたし」

「…」

「まあ、何があったとかは聞かないでおくよ。…でも、とりあえずデュエルでもしようか」

「…え?」

そういうと、青年はデュエルディスクにデッキをセットした。

「で、でも…」

「まあいいから、いいから。時間も時間だし、ハーフルールでもいい?」

「…はい…」

遊華もデュエルディスクにデッキをセットして…。

「それじゃあ行くよ…デュエル!」

「デュエル…」

遊華 手札5 LP 4000

? 手札5 LP 4000

「遊華が先攻でいいよ」

「…それじゃあ、私のターン…モンスターを1体セット、カードを1枚

伏せて、ターンエンド」

遊華 手札3 LP 4000 EX 15枚

モンスター セットモンスター×1

魔法・罨 セットカード×1

いつも通りと言ってもいい出だし。竜星ならこうなるのは必然的だろう。

「それじゃあボクのターン、ドロ―。…速攻魔法、サイクロンを発動。そのセットカード、破壊させてもらうよ」

「あつ…」

竜巻が巻き起こり、遊華のセットカード…竜星の具象化が、破壊される。

「それじゃあ…相手フィールド上にモンスターが存在して、自分フィールドにモンスターが存在しないことにより、手札のアンノウ・シンクロンは、デュエル中1度だけ、特殊召喚できる。というところで、チューナーモンスター、アンノウ・シンクロンを特殊召喚するよ」

フィールドに現れたのは…アンモナイトのような姿の、謎の機械。渦巻き模様を中心部分には、目のようなものがある。

アンノウ・シンクロン DEF 0

「そして手札から、レッド・ガジェットを通常召喚。レッド・ガジェットは召喚、特殊召喚に成功したとき、デッキからイエロー・ガジェットを1体、手札に加えるよ」

レッド・ガジェット ATK 1300

フィールドに現れたのは、赤い人型の、歯車のロボット。

「それじゃあ、レベル4のレッド・ガジェットに、レベル1のアンノウ・シンクロンをチューニング。モンスターレベル、調整OK。メイバズ解放。パワーも安定。フラグメントギア、チェック終了つと。それじゃあ行くよ。シンクロ召喚！」

アンノウ・シンクロンが1つの歯車になり、その中にレッド・ガジェットが入り、4つの星に変わる。そして歯車から光が放たれ、現れたのは…。



「レベル5、シンクロモンスター、T G―ハイパー・ライブリアン！」  
T G―ハイパー・ライブリアン A T K 2400  
シンクロ使いにとっては結構欲しい1枚、ハイパー・ライブリアン。

「いきなり、ハイパー・ライブリアン！」

「それじゃあ、ボクがシンクロ召喚に成功したことで、手札のシンクロ・マグネーターは特殊召喚できる」

ハイパー・ライブリアンに引き寄せられるように、手が生えた磁石、シンクロ・マグネーターが現れる。

シンクロ・マグネーター A T K 1000

「そして魔法カード、アイアンコールを発動。自分フィールドに機械族がいるとき、墓地のレベル4以下の機械族を、効果を無効にして特殊召喚する。この効果で、墓地のレッド・ガジェットを特殊召喚するよ」

レッド・ガジェット D E F 1500

フィールドに再び現れたレッド・ガジェット。そして、チューナーがいるこの状況…。

「また来る…」

「それじゃあ、レベル4のレッド・ガジェットに、レベル3のシンクロ・マグネーターをチューニング。モンスターレベル、調整O K。各パーツチェックO K、各動作、チェック終了つと。それじゃあ、シンクロ召喚！」

シンクロ・マグネーターが3つの歯車になり、その中にレッド・ガジェットが入り、4つの星になる。歯車から光が放たれ、現れたのは…機械でできた体、だが近代的なものというより、過去の機械…カラクリと呼ばれたものの体を持つ、将軍。

「レベル7、シンクロモンスター、カラクリ将軍 無零」

カラクリ将軍 無零 A T K 2600

「う、無零…」

「それじゃあ、無零とハイパー・ライブリアンの効果を発動するよ。ハイパー・ライブリアンの効果で1枚ドロ―して、無零はシンクロ

召喚に成功したとき、デツキからカラクリ1体を、特殊召喚できる。  
この効果でデツキから、カラクリ無双 八壱八を、特殊召喚」

無零が軍配を上げると、どこからともなく、武器を携えた僧侶の恰好をしたカラクリが現れる。

カラクリ無双 八壱八 ATK 2200

「く…」

「カラクリ將軍 無零の、もう1つの効果を発動。君のそのセットモンスターの表示形式を変更するよ」

「！…」

無零が軍配を上げると、どこからともなく、カラクリ人形が何体も現れ、遊華のセットモンスターを、ひっくり返す。…そのモンスターは…。

地竜星―ヘイカン ATK 1500

「今回はヘイカンか。…それじゃあ、バトル。無零で、ヘイカンを攻撃するよ。カラクリ零撃！」

「う…」

無零が、軍配を使ってヘイカンを殴る。そう、ただ単に、軍配で殴る、それだけである。

遊華 LP 4000↓2900

「…ヘイカンの効果。デツキから、光竜星―リフンを、特殊召喚…」

光竜星―リフン DEF 0

ヘイカンの後続に現れるリフン。…そしてカラクリには、ある特徴がある。

「うーん…まあでも、どの道八壱八には、攻撃できるなら攻撃しないとイケない効果があるからね。八壱八で、リフンを攻撃するよ」

「…リフンの効果。今度はデツキから…水竜星―ビシキを、特殊召喚します」

水竜星―ビシキ DEF 2000

「うーん…これ以上攻撃して、ジョクトを呼び出されてもね…メインフェイズ2に入って、八壱八の効果。バトルフェイズが終了したら、守備表示になる」

カラクリ無双 八喜八 ATK 2200 ↓ DEF 1100

0 「そしてそうだね…永続魔法、マシンナイズ・フロントライン機甲部隊の最前線を発動してターンエンドだよ」

? 手札2 (イエロー・ガジェット) LP 4000 EX 13  
枚

モンスター T G—ハイパー・ライブラリアン×1 (攻)、カラクリ  
將軍 無零×1 (攻)、カラクリ無双 八喜八×1 (守)

魔法・罫 「機甲部隊の最前線」×1

フィールドの状況が、盤石に近いものになる。シンクロをしたらライブラリアンでドロ―し、マシンナイズ・フロントライン機甲部隊の最前線の効果で、ハイパー・ライブラリアン以外が戦闘破壊されたら、後続のモンスターを呼べる。…突破できる方法は、いくつかあるが。

「私のターン、ドロ―…手札からチューナーモンスター、カメンレオンを召喚！カメンレオンの効果で墓地から、守備力0の地竜星―ヘイカンを、特殊召喚！」

地竜星―ヘイカン ATK 1500

遊華が召喚したのはカメンレオン。とりあえずカメレオンだ。

「レベル3のヘイカン、レベル2のビシキに、レベル4のカメンレオンをチューニング！古より恐れ崇められる、封じられし最強の龍よ…その封印は今解き放たれ、その猛威は世界の全てを飲み込む！シンクロ召喚！」

カメンレオンが4つの歯車に変わり、ヘイカンとビシキがその中に入り、合計5つの星に変わり、直列になる。そして歯車から光が放たれ、現れたのは…3つ首の龍。

「絶対零度の龍、氷結界の龍 トリシューラ！そしてトリシューラの効果を発動！」

「それはちよつと止めさせてもらうよ。手札のエフェクト・ヴェーラーの効果を発動。手札からこのカードを墓地へ送って、トリシューラの効果を、無効にするよ。それと、ハイパー・ライブラリアンの効果で、1枚ドロ―するよ」

氷結界の龍 トリシューラ ATK 2700

あつさりと無効にされてしまいうトリシューラの効果。それに動揺を隠せない遊華。

「…そ、それなら、バトル！トリシューラで、無零を攻撃！」

トリシューラが冷気を放ち、無零を凍らせ、そして3つの首から放たれるブレスによって、粉々に破壊される。…だが。

? LP 4000↓3900

「それじゃあ、マシンナーズ・フロントライン機甲部隊の最前線の効果を発動するよ。破壊されたカラクリ將軍 無零の攻撃力は、2600。よってその攻撃力以下で、同じ属性の機械族、マシンナーズ・フォートレスを特殊召喚するよ」

…ハイパー・ライブラリアンと無零、どちらも厄介だが、無零を残しておくで自分のモンスターをあつさり破壊される可能性があがるため、無零を破壊した…だが、マシンナーズ・フロントライン機甲部隊の最前線がある限り、後続の機械族を1ターンに1度、呼び出せる。そして呼び出されたのは、機械族の中でも強力で召喚しやすいモンスター、マシンナーズ・フォートレス。戦車型のロボットだ。

「…カードを1枚伏せて、ターン、エンドです」

遊華 手札2 LP 2900 EX 14枚

モンスター 氷結界の龍 トリシューラ×1(攻)

魔法・罠 セットカード×1

「それじゃあボクのターン、ドロー。…手札からイエロー・ガジェットを召喚して、イエロー・ガジェットの効果を発動するよ。デッキから、グリーン・ガジェットを手札に加えて、八壺八を攻撃表示にするよ」

イエロー・ガジェット ATK 1200

黄色くて胴体が大きい、人型の歯車ロボット、イエローガジェット。

攻撃力は、1200と高いほうではない。そして八壺八が、防御態勢から攻撃態勢へと変わる。

カラクリ無双 八壺八 DEF 1100 ↓ 2200

「バトル。マシンナーズ・フォートレスで、トリシューラを攻撃するよ」

「！マシンナーズ・フォートレスは、戦闘破壊されたら…」

トリシューラのブレスにより、マシンナーズ・フォートレスが放つ砲撃はあっさり氷漬けにされ、破壊される…が。

? LP 3900↓3700

「そう。トリシューラはヘイカンをシンクロ素材にしているから、戦闘じゃ破壊できない。なら、効果で破壊する。マシンナーズ・フォートレスが戦闘によって破壊されたら、相手フィールドのカード1枚を破壊する。この効果で、トリシューラを破壊するよ。あ、それとマシンナーズ・フロントライン機甲部隊の最前線の効果も発動させて、デッキから攻撃力2500より低い地属性の機械族モンスター…うん、チューナーモンスターの、ブンボーグ001を、特殊召喚するよ」

「トリシューラが…」

フォートレスが氷漬けになる前に放たれた爆弾により、トリシューラが破壊され…後続に呼び出されたのは、小さな人型ロボット。シャープペンシルの芯のケースを模した武器らしきものを持ち、ビーム状の剣も持っている。

「ブンボーグ001は、自分フィールドの機械族の数だけ、攻撃力が500ポイントアップする。フィールドには、イエロー・ガジェット、ハ壱八、そしてブンボーグ001自身も含めて3体。攻撃力は1500ポイントアップするよ」

ブンボーグ001 ATK 500↓2000

「それじゃあ、ハ壱八で、ダイレクトアタックするよ」

「…トラップ発動！強化蘇生！墓地の地竜星―ヘイカンを、守備表示で特殊召喚！」

地竜星―ヘイカン DEF 0 ↓ 100

ヘイカンが現れたことで、攻撃が巻き戻る。…だが、ハ壱八は止まらない。

「それじゃあ、ハ壱八でヘイカンを攻撃」

「ヘイカンの効果でデッキから…炎竜星―シュンゲイを、特殊召喚！」

炎竜星―シュンゲイ DEF 0

「うーん、それじゃあ、ブンボーグ001で、シュンゲイを攻撃」

「シュンゲイの効果でデッキから、闇竜星―ジヨクトを、特殊召喚！」

闇竜星—ジヨクト DEF 2000

「それじゃあメインフェイズ2。八壱八は守備表示になるよ」

カラクリ無双 八壱八 ATK 2200 ↓ DEF 1100

「そして、レベル4の八壱八とイエロー・ガジェットに、レベル1のブ  
ンボーグ001をチューニング」

「レベルは…9!」

ブンボーグ001がジャンプして歯車になり、その中に八壱八とイ  
エロー・ガジェットが入り、8つの星になり、直列になる。

「モンスターレベル、調整OK。封印のロック、解除完了。対象の解  
凍、完了。全行程チェック終了つと。それじゃあ行くよ。シンクロ召  
喚!」

歯車から光が放たれ…現れたのは、三つ首の龍、トリシューラ。

「氷結界の龍 トリシューラ。無効にしておいて悪いけど、トリ  
シューラのモンスター効果発動。フィールドのジヨクト、墓地の…そ  
うだね…リフン、そして手札1枚を除外するよ。あ、そしてハイパー!  
ライブラリアンの効果で1枚ドロ」

「そんな…」

トリシューラの3つの首から放たれた冷気のブレスにより、3枚の  
カードが除外される。…大ピンチだ。

除外されたカード

ジャンク・シンクロン

「…うん。手札のグリーン・ガジェットとイエロー・ガジェットを墓地  
へ送って、マシンナーズ・フォートレスを、特殊召喚するよ」

「また来た…」

マシンナーズ・フォートレス ATK 2500

「これでターンエンドだよ」

? 手札2 LP 3700

モンスター TG—ハイパー・ライブラリアン×1(攻)、氷結界の

龍 トリシューラ×1(攻)、マシンナーズ・フォートレス×1(攻)

魔法・罫 「機甲部隊の最前線」×1

「…」

「…どうしたんだい遊華。もしかして…もう勝てないって、思ってる？」

「…だって、ハイパー・ライブラリアンがいたら、シンクロをするたびに手札が増やされて、呼び出したモンスターも、トリシューラやフォートレスで破壊されて、その2体より攻撃力の高いモンスターも、マシナーズ・フォートレスの効果で、破壊される…勝てるわけなんて」

「…遊華。それは、まだ分からないよ。デュエルは最後まで何が起きるか分からない。最後の最後で、逆転できるかもしれない」  
「そんな奇跡なんて…」

「…そう言いかけた遊華だが、その言葉は…青年の言葉に、止められる。」「…臆病になって、何もしないんじゃないやダメだ。前へ1歩進んで、…今の状況だと、デッキのカードを引いて。…もし負けても、今回のことを反省して、また考えればいい。そして次に生かして、それから勝ちに繋がればいい。…そして、カードを引いて、それで逆転できたらうれしいことだよ」

「…次に生かして」

「うん、それが大切なことだよ。まずはそのカードを引いてから。それからだ」

「……はい…私のターン……ドロー!!」

彼女は引いた、そのカードを……首から下げたペンダントが、僅かながらに、虹色に光る。…そして、可能性が広がる。

「…よし。手札から魔法カード、竜星の軌跡を発動!墓地からシユンゲイ、ハイカン、ビシキをデッキに戻して、2枚ドロー……行くよ、師匠!」

「うん…さあ、どうくるのかな?」

「まずは相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールドにモンスターが存在しないことで、手札の聖刻龍トフェニドラゴンを特殊召喚!」

フィールドに現れたのは、光り輝く黄色い龍。…だが、トフェニド

ラゴン、種族はドラゴン族…竜星デッキとの相性はどうかと思うが…。

聖刻龍トフェニドラゴン ATK 2100

「さらに手札から永続魔法、幻界突破を発動！1ターンに1度、自分フィールドのドラゴン族モンスターを1体リリースすることで、デッキからリリースしたモンスターの元々のレベルと同じレベルの幻竜族モンスター1体を、特殊召喚する！リリースするのはレベル6のトフェニドラゴン！そして呼び出すのは…レベル6の秘竜星―セフィラシウゴ！」

トフェニドラゴンが消え…黒い龍、セフィラシウゴが現れる。

秘竜星―セフィラシウゴ DEF 2600

「そしてトフェニドラゴンのモンスター効果！このカードがリリースされたとき、デッキからドラゴン族通常モンスター1体を、攻撃力、守備力を0にして、特殊召喚する！私はデッキから、レベル1のガード・オブ・フレムベルを特殊召喚！」

フィールドに現れた炎を纏う小柄な竜。…合計レベルは7、そして遊華は通常召喚を行っていない。

ガード・オブ・フレムベル DEF 2000 ↓ 0

「さらに手札から、水竜星―ビシキを召喚！レベル6のセフィラシウゴ、レベル2のビシキに、レベル1のガード・オブ・フレムベルを、チューニング！」

ガード・オブ・フレムベルが1つの歯車に変わり、その中にビシキ、セフィラシウゴの2体が入り、8つの星に変わって直列になる。…レベルの合計は9、だがトリシューラは制限カード。トリシューラでは、ない。

「…数多の星々輝く天より、鮮やかな光を受け取り、具現化せよ！シンクロ召喚!!」

歯車から光が放たれ、現れたのは…細長く、鮮やかな鱗を輝かせる竜。頭の鱗はより鮮やかで、嘴もあつて鳥にも見える。その翼も、鳥のものに近いが…こちらも鮮やかだ。

「レベル9、無数の色に輝く、竜の星…幻竜星―チヨウホウ！」



幻竜星―チョウホウ ATK 2800

「いつの間にこんなモンスターを…でも、ハイパー・ライブラリアンの効果で、1枚ドロ―するよ」

「ええ。…そしてチョウホウの、第1の効―このカードのシンクロ素材にした竜星の属性と、元々の属性が同じ属性の、相手のモンスター効果の発動を、封じます」

「！素材にしたのは、水属性のビシキに、地属性のシウゴ…マシナーズ・フォートレスの効果は、封じられるってわけだね」

「はい。では、バトル！チョウホウで、ハイパー・ライブラリアンを攻撃！彩竜天光流波！」

チョウホウの全身が輝きだし、その光がチョウホウの口に集まる。…そして、チョウホウから放たれたのは、いわゆるブレス攻撃。その攻撃は、ハイパー・ライブラリアンを飲み込み、破壊する。

? LP 3700↓3400

「そしてチョウホウの効果！相手フィールドのモンスターが戦闘、または効果で破壊されたら、デッキから、破壊されたモンスターの元々の属性と同じ属性の幻竜族モンスター1体を、デッキから守備表示で特殊召喚する！ハイパー・ライブラリアンは闇属性、よって闇属性の幻竜族、魔竜星―トウテツを、特殊召喚！」

魔竜星―トウテツ DEF 0

「その判断、ナイスだと思うよ。ハイパー・ライブラリアンがいつまでもいたら、シンクロ召喚をするたびにボクの手札が増えるからね」

「はい。では、ターンエンド！」

遊華 手札0 LP 2900

モンスター 幻竜星―チョウホウ×1(攻)、魔竜星―トウテツ×1(守)

魔法・罫 なし

「それじゃあボクのターン、ドロ―。うーん…地属性モンスターと、ついでに水属性モンスターの効果が発動できないか…」

「これでブリキンギョも使えませんよ」

「でも、安心するのはまだ早いよ。ボクは手札からチューナーモンス

ター、ジャンク・シンクロンを召喚。その効果で墓地から、ブンボーグ001を、特殊召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK 1300

ブンボーグ001 DEF 500

フィールドに現れるジャンク・シンクロン。そしてその効果で呼び出されるブンボーグ001。…そして、この状況…。

「それじゃあボクは、レベル7のマシナーズ・フォートレスに、レベル3のジャンク・シンクロンを、レベル9のトリシューラに、レベル1のブンボーグをチューニング！モンスターレベル、調整OK。神秘のエネルギー、満タン。装備の強度、問題なし。それじゃあ行くよ。シンクロ召喚！」

ジャンク・シンクロンが3つの歯車に、ブンボーグ001が1つの歯車になり、3つの歯車の中にマシナーズ・フォートレスが入り、7つの星に、1つの歯車の中にとりシューラが入り、9つの星になる。そして歯車から光が放たれ…：現れたのは、巨大な獅子。それも、鎧を纏った獅子。

「レベル10、シンクロモンスター、神樹の守護者 牙王！」

「あ」

神樹の守護者 牙王 ATK 3100

「そして装備魔法、メテオ・ストライクを、牙王1体に装備するよ」

…この攻撃力、地属性であるが、これは…終わった。

「バトル。メテオ・ストライクを装備した牙王で、トウテツを攻撃」

「し、師匠の鬼〜！」

遊華 LP 2700↓0

デュエルが終了して、2体の牙王が消える。

「…どう、遊華。元気出た？」

「…負けちゃいましたけど、はい！師匠、ありがとうございました！」  
「うん。遊華は笑顔が一番だと思うよ。…あ、こんな時間…そろそろ戻らないと。それじゃあ遊華、いつでも遊びに来ていいからね」  
「は〜」

そして去っていく、師匠。…だが、ほぼ同時刻…。

「バトルだ！ライズ・ファルコンで、攻撃！全ての敵を引き裂け！！ブレ  
イブ・クロー・レヴオリューション！！！」

「ぎゃあああああ！」

「うわあああああ！」

「ぐあああああ！」

北斗、真澄、刃の3人は、襲撃犯である隼にデュエルを挑み、倒されてきた…が、その事実をユーキは知らず、また今回に限っては知らされておらず、そして3人の記憶が改竄されたため、遊華はその事実を知ることが、難しい。

## 第10話 隼と社長とのお話し

~~~~~ 舞網チャンピオンシップ開幕、数日前 レオ・コーポレーション 指令室 ~~~~~

遊華が師匠とデュエルして1週間近く経ち：舞網チャンピオンシップ前日：司令室にて赤馬零児は座っている。そして、中島さんが零児に話しかける。

「社長、いよいよ明日ですね」

「ああ。……だが、少し気がかりがある」

「？気がかり：ですか」

「黒咲と巳柳遊華だ。巳柳遊華とデュエルをし、デュエルをした結果、彼女がケガをした。その際の相手は黒咲と本人からの証言を得ている」

隼に遊華の写真を見せた結果、本人がそう言った。：なお、黒咲はLDSの講師を襲撃していたが今は取引により、LDS側についている。

「：巳柳遊華と黒咲が会った際、何が起こるかですね…」

「彼女の写真を見せたときに言った黒咲が襲ったといった：巳柳遊華の勝率は、舞網チャンピオンシップ参加の条件を十分満たしている。彼女と黒咲が出会った場合のことを考えると、やはり少し気がかりだ」

「それに、彼女には記憶の改竄を行っていません。巳柳遊華が3人は仲が良く、頻繁に接触している以上、あの3人が違和感を覚え、改竄前の記憶を思い出されれば：やはり、巳柳遊華の記憶も改竄するべきかと…」

「：いや……事情を話そう」

…零児のその言葉に、中島さんは一瞬、硬直する。そして…。

「そ、それは：大丈夫、なんですか？」

「彼女の実力は中々だ。少し前には敗北が続いたものの、最近では連勝続き。このまま成長すれば、より強くなるだろう。となれば、ラン

サーズ候補としても有力だ。早々に事情を話し、こちら側に引き入れよう」

「ですが、彼女が話したことを誰かに…それこそ、あの3人に何等かの形で話す可能性も」

「…むろん手は打つ。…とにかく、巳柳遊華と黒咲をここに連れてきてくれ」

「…分かりました」

そして中島さんは、大体いるであろうデュエルスペースへと向かった。そして案の定、遊華を含めたいつもの4人を見つけた。…ちなみに遊華の調子はというと…

「いつけーチヨウホウ！ダイレクトアタック！

「うわああああ!!」

…絶好調。連戦連勝であり、危うく負けそうになったこともあったが、それでも勝利してきているため、完全に本調子だ。

「ぼ、ボクの連勝記録がさらに縮む…」

「そもそも榊遊矢に負けて、連勝記録途切れてるじゃねえか」

「確かにそうね。結構遊華に負けてるし」

「うう…」

と、さつき遊華とデュエルをして負けた北斗。…そんな中、中島さんは遊華のところへと普通に向かう。

「巳柳遊華」

「あ、中島さん。どうかしました？」

「社長がお前のことをお呼びだ」

「え？社長が、ですか？」

「ああ。とにかく、ついてきてくれ…巳柳遊華だけだぞ」

「はい…それじゃあ北斗、刃、真澄、じゃあね！」

中島さんの案内の元、遊華は北斗、真澄、刃の3人と離れ、司令室へと向かう。…そして、司令室。

「社長、お連れしました」

「来たか」

「…」

「えーっと……ここって、いったい…」

「まずは機密事項と言っておこう。そして、これから話すことも」

司令室には作業中のオペレーターに加え零児、そして隼が待っていた。

「えっと、いったいなんの話しを…」

「ではさっそく、本題に入ろう。…ただし、これから話すことは、全て事実だ」

こうして話し始める零児……今後のためにも、隼が襲撃を行っていたこと、そして別次元のことなどについて話した……ただし隼が北斗、真澄、刃の3人とデュエルしたことを除いて。…そして、全てを話し終えて…。

「…以上だ」

「……えーっと……つまり、その……黒咲さん、でしたっけ……その人が、講師の人を？」

「ああ。おそらく、私と接触することが目的だったのだろう」

「より上へと接触するには、こうするのが手っ取り早い」

「………それで、黒咲さんがここにいるのは、えーっと……融合次元の……アカデミア……でしたっけ。それに対抗するため？」

「ああ。それ以前に、黒咲はレジスタンスとして、融合次元と戦っている。共通する敵と戦うなら、敵対するよりも協力するほうがいいからな」

…目が点の状態の遊華。おそらく、理解が追いついていないのだろう。

「………それで、アカデミアのトップが、社長のお父さん？」

「ああ……融合次元で久しぶりにあったときには、怒りを覚えたが、同時に呆れてしまった」

「……それで、融合次元が、えーっと……エクシード次元を、襲った？」

「その通りだ。ヤツらは突如として、オレ達の街を襲い、戦場にした……今でもあの日の出来事は、昨日のことのように思い出せてしまう……」

零児は眉間にしわを寄せ、黒咲にいたっては表情を強張らせ、怒りを露わにしている。

「…うーん………ほんとに、事実……なんですか？」

「君の気持ちは理解できなくもない。…だがこれは、紛れもない事実だ」

「…信じられない……ですね。いや、疑っているんじゃないやなくて、なんていうか……そんなことは、今までなかったの……」

「オレ達もそうだった。ヤツらが襲ってくる前まで、他の世界があるとは、考えたこともなかった。だが、ヤツらが襲ってきた後、オレ達の常識は、大きく変わった」

「…後、一応、襲撃犯なのに協力して大丈夫なんですか？」

「少なくとも敵対しているよりずっとマシだ」

同じ相手と戦うなら敵対するより協力したほうがいいというのは当たり前だ。なお、黒咲に関しては、今までの目的は達していると言っても過言ではない。

「…その人が、マルコ先生を……それに私にデュエルをして、それで……」

「黒咲、事情についてはともかく、ケガをさせたんだ。謝っておけ」  
「……………」

「…できないとは言わせないぞ」

「…すまなかった」

「…」

だが気まずい空気は変わらない。…その空気を変えようと黒咲が口を開く。本人に空気を変える意図があったかはともかくとして、その発言は空気を変えるには、いろんな意味で十分だった。

「1つ聞きたいことがある。…お前はなぜ、ユーワに似ているんだ」

「え？ゆ、ユーワ？」

「…黒咲、ユーワというのは確か、以前私に話した……」

「ああ。レジスタンスのリーダーで、オレの仲間だ」

「レジスタンスの、リーダー……」

「とは言っても、お前とは雰囲気はかなり違う。だが、その顔はよく似

ている」

ユーワ：…どうやら、遊華とはよく似ているそうだ。…つまり、ユーワは童顔なのだろうか…。隼は話しを続ける。

「あいつ…ユーワはどこか、人を引き付ける不思議な何かを持っている。不思議と人に信用された。その信頼に答えるよう様々なことをやってのけた」

「へー…」

「あいつがいたからこそ、多くのアカデミアのヤツらを何十人も蹴散らし、そして倒してきた。…だがある日、ユーワは突如として、いなくなった」

「え…」

「逃げ出したのか、アカデミアにやられたのか…だがある日、交戦したアカデミアはお前たちのリーダーはやられたと言った。…ユーワは強い、簡単にやられるわけがないと言った」

内容が内容だけに、隼以外に口を開くものはいない。そして、隼は話しを続ける。

「…そしたらヤツらは、シャドーフォースが倒したと言った。…オベリスクフォースと言った部隊名は聞いたが、それはまったく聞いたことのない名前だった」

「その、シャドーフォース…って言うのは？」

「分からない。倒したヤツらも、それだけしか言わなかった」

「おそらく、名前だけは知られている極秘の何か…その可能性が高いな」

「そうだろう。現にいまだ、シャドーフォースについては名前以外の情報がない」

喋ったオベリスクフォースは余程おしゃべりなのだろうか…そんな秘密にしておくべきであろうことを、名前だけでも言ってしまったのだから。だが…

「…そのユーワというのは、どれほど強かった」

「オレ達レジスタンスの中でも一番強かった。…そして、決して諦めなかった。どんな絶望的な状況でも、彼女は立ち向かい、そしていつ



も、道を切り開いて行った」

「…おそらくそのシャドーフォースというのは、アカデミアの中でも、精鋭と言わなければならない。オベリスクフォースの実力がどれほどかとはともかく、レジスタンスの中でも屈指の実力者を倒したと言うほど。…事実かは分からないが」

「だが、現にユーワは見つかっていない。…それはオレ達レジスタンスにとって、大きなダメージとなった」

「大きな、ダメージ…」

…そういうと、隼は、口を閉じた。…おそらく喋りたくないのだろうが、その沈黙が、辛いことがあったということを経験に想像させた。

「…おそらくそのユーワというのは、精神的な支柱だったのだろう。その後のことは、予想できるな」

「…」

「…その…げ、元気出してください。ね…あ！なら、そのユーワさんについての明るい話しとかは…」

「…そうだな。…ユーワは、一言でいえば不思議だ」

不思議…ユーワを一言で表すならその言葉、と隼は口にする。不思議という言葉はあまりにも漠然としている。

「不思議…？」

「ほう…なぜ不思議なんだ？」

「あいつは出会った時から不思議だった。不思議と人から信頼を。何も考えていないように見えて、様々なことを考えている。逆に何かを考えているように悩んでいるときは、案外くだらないことを考えている」

「そ、そうなんだ…」

「だが…さつきも言ったように諦めなかった。…それによくあいつは、かっつとビングという言葉を好んで使った」

「……は？」

零児、遊華ともに、同じタイミングで同じことを言った。…聞いたこともない意味不明な言葉だ。

「……そ、その……かつとビング………というのは？」

「ユーワは、ある人から教えてもらった、諦めない心、チャレンジする精神、そう言った。…そのある人については何も言わなかったがな」  
「何も言わなかったのか…」

「…かつとビング…諦めない心、チャレンジする精神…大切ですね」

「ああ。…彼女だけは、逆境に合うたびに大声で叫んでいた」

…おそらくユーワは、かつとビングという言葉をよく使っていたのだろう。…隼がさり気なく、だけはを強調した辺り、彼女以外叫んではないのだろうか。

「…では、そろそろ話しを終わりにしよう。…巳柳遊華」

「？はい」

「ここで聞いたことは他言無用だ。誰かに話したら、大変なことになる」

「た、大変な、こと…」

「例えが必要か？どんな例えがいい、リクエストは聴こう」

「…いい、いえ…分かりました。誰にもいいません」

おそらく遊華はとんでもないことになるということの、具体的な想像をしてしまい、他言しないよう注意しようと思った。

「…それでいい。それでは今日はここまでとしよう。巳柳遊華、時間を費やさせてすまなかった」

「あ、いい、いえ…」

それから、遊華は帰った。…そして、この事は誰にも言わないように心に誓い、注意した。…何をされるか、分からないからだ。

そして、いよいよ始まる舞網チャンピオンシップ。多くの思惑が渦巻くこの舞台で、一体何が起ころのだろうか…。

## 第11話 開幕！舞網チャンピオンシップ!!

~~~~~ 舞網チャンピオンシップ開幕当日 朝 ~~~~~

「…いよいよ、舞網チャンピオンシップ当日…」

と、起きてカレンダーを見ている遊華。別の次元についての話しを零児と黒咲から聞いて数日が経った。…その数日間、遊華はもちろんのこと、周りもレベルアップを遂げた。それぞれが強くなり、この大会へと望む。後は…それをどう出すか、それで結果が変わってくる。

「…よし、がんばるぞー!!」

「遊華、ちよつといいかい?」

「父さん。いいよー」

と、遊華が返事をした後に部屋に入ってくる遊華の父。その手には箱を持っている。

「父さんどうしたの?まだ開会式には時間はたっぷりあるし…」

「うん。ちよつと渡しておきたいものがあってね」

「渡したいもの?」

「これだよ」

というと、手に持っている箱の蓋をあける。…中には、白いグローブが入っている。

「え…こ、これは…」

「父さんからのプレゼント。デュエル中、しっかりドローできるようにね」

「…うん!ありがとう、父さん!」

その後、朝食をとり、身だしなみを整えた遊華。…そして少しデッキ調整をしていたら…。

「…あ、もう行かないと…」

「ん?…そうか、もう時間か。…できれば直接行って応援したいけど…店のこともある。それに、この足じゃあ…」

「大丈夫。応援なら、テレビ見ながらでもいいから。それじゃ、行ってきます」

そうして家を出て、自転車に乗る遊華。そして真っ直ぐ舞網チャン

ピオンシップの会場へと向かっていく。

家を出てある程度時間が過ぎ、道路を自転車ですべて走っている遊華。その視界には、舞網チャンピオンシップの会場が見えている。

「よし…もう少し！」

と、自転車をこぐ。…その僅か数秒後、聞きなれない音が聞こえたと思うと、赤いバイクが隣を通っていった。

「？…なんだろうあのバイク…エンジン音まったく聞こえなかったような……エンジン音が静かなだけかな」

と自己分析をし、会場へと向かう。…赤いバイクを運転していた人物はヘルメットをしていたため、顔は分からない。

「お、来た来た。おーい遊華ー！」

「みんなお待ちせー！」

ある程度経ち、会場へとついた遊華。そして刃、北斗、真澄の3人と合流する。

「デュエル大好きな遊華にしては、結構遅かったわね」

「大会があるといつもはボクらの中では誰よりも早いのに、今日は一番遅かった…」

「なんかあったのか？」

「ちよつとテツキ調整。でももうちよつと調整したいかなー…」

「まだ終わってないのね」

「うん…大会だから、念入りにしないと…」

と、歩きながら4人で話している。…なお、開会式の間まではまだ余裕があるため、あまり急いでいない。

「遊華、いつもパツパツパツと調整終わらせてること多いよな」

「その後すぐにデュエルが定番だからね」

「今回の大会は、やっぱり大事だからね…プロへの登竜門だし」

「なんなら私も手伝うわよ」

「…ううん。みんなとは友達であって、ライバル。いつデュエルすることになるか分からないから」

そして…開会式。榊遊矢の演説によって盛り上がった会場。…大会の始まりを告げるのは…。

「それではこれより、舞網チャンピオンシップを開幕する！」

零児である。そして対戦相手は専用のカードをセットして運営しているLDSへとデータを送信、その上でランダムに組み合わせられる。…遊華はというと…。

「…えーっと…第8試合で、明日…私の相手は…あの人が」

「私は最初よ。相手は、柊柚子」

「へー…にしてもいいなー二人とも早くて。オレなんてこんな後ろだぜ。多分これ最後だな…」

「ボクだってかなり後だよ。まあでも、それだけデッキ調整に時間をかけられる分には、まあいいかな」

「確かに…よーし、がんばるぞー!!」

そして第1試合…真澄VS柚子。そのデュエルは…。

「ブルーム・ディーヴァー!リフレクト・シャウト!!」

「!きゃあああああ!!」

真澄の敗北で終わった。…最後のダメージを受けた後、真澄は大きく吹き飛び、発動中のアクションフィールド、無限回廊の特徴上…落下する。このままなら大怪我になりかねないところを、柚子のブルーム・ディーヴァーが真澄を助けた。…さり気なく真澄の顔が赤くなっていたが、会場にあるディスプレイにそれは映らず、観客席からは見えない。

「真澄、ドンマイ」

「ええ…」

「?どうしたの?」

「なんか顔赤くないか?」

「熱でもあるんじゃない」

「勝手に触らないで」

デュエル後、観客席へと来て北斗と遊華の間に座る。…さり気なく

顔が赤いのに3人が気づき、心配した北斗が熱を測ろうと真澄の額に手を当てようとしたが、拒絶された。

「えーっと…第4試合が、紫雲院くんと黒咲さんか…」

「紫雲院っていうと、あの遊勝塾にいたデュエルしなかったヤツか」

「…まあ、デュエルしなかったぐらいだ、実力なんて高が知れてるよ。そんなのが黒咲さんに勝てるわけがない」

「でもあんたなら負けそうね」

と、いつものように真澄が北斗に毒を吐き、北斗が沈むこの光景。

…もはやこれはいつも通りの光景になっていた。

「あ！第3試合、権現坂がデュエルするぜ！」

「権現坂…あ、刃が弟子にしたっていう？」

「ああ。あいつ強いからな！しっかりと見ろよお前ら！」

「うん！」

「見る価値は十分ね」

そして来る第3試合。権現坂の相手はかつての同門という暗黒寺。

…だがその態度、性格、そしてデュエルは…。

「なんだよあの態度！それにデッキ！最低だな」

「別にコントロール奪取はいいと思うけど、あの態度はどうかと私も思う」

「カードに罪はないだろうからね」

「北斗にしてはいいこと言うわね。…まあ、やっぱり態度が問題ね」

と、ディスプレイの映像でその行動は見えているため、非常に評価は悪い。別にデッキが悪いわけではない、悪いのは使いほうだ。そして最後は…。

「荒ぶる神よ、千の刃の魂と共に、荒波渦巻く戦場に現れよ!!シンクロ召喚!!レベル10、超重荒神スサノーO!!」

超重荒神スサノーO DEF 3800

「決まったぜ、シンクロ召喚！」

「ようやっとな…」

「チューナーもつと入れたほうがいいんじゃないかな」

そしてそのスサノーOの攻撃により、デュエルは権現坂の勝利で幕

を閉じる。…途中、遊矢と権現坂の友情ドラマがあつたが、それはまた別のところ。…そしてデュエルの組み合わせを見て…。

「…あ。第5試合、沢渡と榊遊矢だ」

「じゃあ榊遊矢が勝つんじゃない？」

「沢渡じゃ無理でしょうね」

「ま沢渡じゃな」

…沢渡に対してのこの反応。北斗はまだショックで立ち直れていないが、立ち直っていたら似たような反応をしていただろう。…少なくとも、遊華達の知っている沢渡は、あまり強くないのだ。そして第4試合…隼VS素良。…このデュエルは、熾烈を極めた。

「速攻魔法、RUMーラプターズ・フォースを発動！自分のRRと名のついたエクシーズモンスターが破壊されたターン、墓地のRRと名のついたエクシーズモンスター1体を特殊召喚し、そのモンスターをエクシーズ素材として、ランクが1つ高いエクシーズモンスターへと、ランクアップさせる！オレは墓地のRRーライズ・ファルコンを特殊召喚し、ライズ・ファルコンをエクシーズ素材として、オーバーレイ！！獯猛なるハヤブサよ。激戦を切り抜けしその翼翻し、寄せ来る敵を打ち破れ！！ランクアップ・エクシーズチェンジ！現れる！！ランク5！RRーブレイズ・ファルコン！！」

「ら、RUM!？」

「すごい…あんな召喚、授業でも習わないよ！」

「あんたとはレベルが違うのよ！」

「いいや、ランクが違うんだよ！」

さり気ないこの発言…北斗には聞かえていないのか、ショックを受けるような感じは見受けられない。…だが、この前後からであろう…このデュエルを…デュエルと呼んでいいのだろうか、思うようになるのは。

「な、何、これは…」

「…これって…デュエル…だよな」

「そ、そのはず…だけど」

「これじゃまるで…戦争じゃない」

…戦争……そう言えるほどに、2人のデュエルは激しくなっていた。

「融合召喚!!現れ出でよ、全ての玩具の結合魔獣!!デストーイ・マッド・キマイラ!!」

巨大でいくつもの人形が繋がった不気味なモンスターが現れ、隼のブレイズ・ファルコンを破壊し、マッド・キマイラの効果でそれを呼び出す。だが…。

「だが、オレ達は決して諦めない。…仲間は、必ず奪い返すつ!!!速攻魔法!RUMーレヴオリューション・フォース!このカードを相手ターンに発動した場合、相手の場の、オーバーレイ・ユニットのないエクシーズモンスター1体のコントロールを奪い、そのモンスターをエクシーズ素材として、ランクアップさせる!オレはブレイズ・ファルコンのコントロールを奪う!」

「……でも、だからどうしたの?どーせランクアップしても、ボクのモンスターを倒すことなんて不可能だ!」

「…そして、ランク5のRRーブレイズ・ファルコンをエクシーズ素材として:オーバーレイ!!誇り高き隼よ。英雄の血潮に染まる翼翻し、革命の道を、突き進め!!ランクアップ・エクシーズチェンジ!!現れるおっ!!ランク6!!RRーレヴオリューション・ファルコン!!!」

ブレイズファルコンが炎に包まれ:姿を変える。そして炎が消え、機械の体を持つ、黒い隼が現れる。…だが。

「…はっ。なんだ。革命とか何とか言って、守備表示:3000なのは驚きだけど、攻撃力は2000:それじゃあボクの攻撃力2800のデストーイ・マッド・キマイラは倒せないよ!」

「…貴様の場に攻撃可能なモンスターは存在しない。さっさとターンエンドしたらどうだ」

「まあそうだね。ボクはこれで、ターンエンド。さてと、そつちもとつとと終わらせてよね」

…完全に余裕ぶっている素良だが、次のターンでは…。

「ま、どうせボクのモンスターを倒すことは無理だろうけどね」

「果たしてそうかな。レヴオリューション・ファルコンの、モンスター



効果！このカードがRRと名のついたエクシードズモンスターをオーバレイとしている場合、相手の場のモンスター1体を破壊し、その攻撃力の半分のダメージを相手に与える！」

「…なっ」

「いけ!!レヴオリューション・ファルコン!!革命の火に焼かれて、散れえ!!!レヴオリューション・フルバースト!!!」

……この結果、レヴオリューション・ファルコンによる爆撃によってアクションフィールド、未来都市ハートランドは完全に火の海となり、その影響かは定かではないが、建物の1つが素良のほうへと倒れ、アクションカードを発動しようとしていた素良の上に、のしかかった……アクションデュエルが終わり、リアルソリッドヴィジョンが解除され……五体満足な素良が倒れた状態にいる。

「…」

「…なんだったのかしら…」

「…す、すごいデュエルだった……っていうのは、よく分かる」

「た、確かにそうだけどよ…」

会場のみんなが、衝撃を受けていた。……そして、次のデュエル……第6試合。沢渡VS遊矢。その二人のデュエルはというと……

「ペンデュラム召喚！烈風纏いしあやかしの長よ。荒ぶるその衣解き放ち、大河を巻き上げ大地をえぐれ！いでよ!!魔妖仙獣 大刃禍是!!」

「え?!沢渡がペンデュラムを?!」

「沢渡がペンデュラム召喚を…」

「いつの間に」

沢渡のペンデュラムに、LDSで彼のことを知る人間は、沢渡の取り巻き達を除き驚いた。……そんな沢渡の取り巻き達は……

「二「沢渡さん、マジ凄すぎつすよ!」二」

こんな感じ……だが、結構嫌な感じがあつて、何度か負けていても、それでも取り巻きが離れないのは、沢渡がなんだかんだで人を引き付ける何かを持っている……ということなのかもしれない。……ただ言えることは……沢渡さんマジ凄いつすよ。

そんな沢渡だが…デュエルの結果は…。

「激動のヘルダイブ・バースト!」

「うわああああ!!!」

遊矢の新たなモンスター、ビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴン…そして、ソード・フィッシュによるステータスダウンにより、遊矢が勝利した。そして会場の全員が、賞賛の拍手を、2人に送った。負けた沢渡の表情は、いままでの彼なら敗北後には浮かべないような、とてもいい表情だった。

## 第12話 咲き誇りし華、そして…

~~~~~ ユース選手権 会場 ~~~~~

「いよいよ私の番…」

遊矢のデュエルが行われる頃…ユース選手権のほうでは、ユーキのデュエルが行われようとしていた。

「…誰か応援してくれるといいですが…時間帯は、遊矢くんのデュエルと被っている…誰もこなくてもまあ…仕方ないですね)」

時間が被っているため、誰かが応援にくる…かは分からない。だが、それでもデュエルフィールドへと、足を進める。応援がないと思うとさみしいが、それはそれで仕方ないと、ユーキは考える。…そして、デュエルフィールドに出る。

「さあ！舞網チャンピオンシップ、ユース選手権第6試合！対戦するのは…遊勝塾所属、ユーキ!!そしてLDS融合コース所属、藻野武!!」

デュエルフィールドにはユーキとともにもう一人…メガネをかけた…なんだかあまりパツとしない、目つきが鋭い少年がいる。こちらが藻野武だろう。

「よろしくお願いしますね…ユーキさん」

「はい、よろしくお願いします」

「ふふふ…ユーキさん、ボクが勝ったらボクと付き合ってくださいませんか？」

「……やめておきます」

普通に付き合ってくださいというのを断るユーキ。…武のことを一切知らないということもあるがそれ以上に、彼から何か、嫌なものを感じた。何か得体のしれない嫌なものを…。

「それではアクションフィールド、深海の海底遺跡、セット！」

リアルソリッドヴィジョンが作動し…フィールドが暗い海中に沈む遺跡に変わった。水中ではあるが、なぜか呼吸はできる…が、感覚は水の中そのものである。

「……まあ、いいでしょう…では始めましょうか。戦いの殿堂に集い

しデュエリストが!」

「モンスターとともに地を蹴り、宙を舞い」

「フィールド内を駆け巡る!」

「見よ、これぞデュエルの最強進化系」

「アクション…」

「デュエル!」

ユーキ 手札5 LP 4000

武 手札5 LP 4000

「ではレディーファーストということ、どうぞ」

「…私のターン!モンスターを1体セット、カードを2枚伏せて、ターンエンド」

ユーキ 手札2 LP 4000

モンスター セットモンスター×1

魔法・罫 セットカード×2

ターンを終えると、すぐにアクションカードを探しに水中を泳ぎ始める。

「ではボクのターン、ドロ。…いいカードだ。ボクは手札から、ヴォルカニック・エッジを通常召喚!」

ヴォルカニック・エッジ ATK 1800

炎とともに白金の体を持つ比較的の小柄な金属質のモンスターが現れる。

「ヴォルカニック・エッジの効果発動!相手ライフに、500ポイントのダメージを与える!」

ユーキ LP 4000↓3500

ヴォルカニック・エッジの口から火の玉が吐き出され、ユーキに迫る。…ギリギリのところかわしたが、火の玉が掠る。…だが。

「っ?!(掠っただけなのに…おかしい、いくらなんでもこの痛みはおかしい)」

「続けますよ。ボクは手札から魔法カード、融合を発動!」

「…さっそくですか…」

紹介に融合コースとあったので融合を使うのは容易に予想できた。

そして案外その発動は早かった。

「ボクが融合するのは、フィールドの炎族、ヴォルカニック・エッジと手札の音響戦士ベーシス！炎の爪よ、音響かせる弦楽器よ！今一つとなりて、大いなる炎を解き放て！融合召喚！現れ出でよ、重爆撃禽ボム・フェネクス!!」

重爆撃禽 ボム・フェネクス ATK 2800

ヴォルカニック・エッジと、ベースに手足が生えたようなモンスター、ベーシスが融合の渦の中に入り：フィールドに、巨大な炎の鳥が現れた。

「！ボム・フェネクス…」

「ボクは永続魔法、強欲なカケラを発動。さらにカードを1枚伏せ、ボム・フェネクスの効果！フィールド上のカードの数×300ポイントのダメージを、相手ライフに与える！ボクのフィールドには、ボム・フェネクス、強欲なカケラ、セットカード、そちらの場にはセットモンスターにセットカード2枚。その合計は6枚、よって1800ポイントのダメージを与える！さあ、燃え尽きろ！不死魔鳥大空襲!!」

「っ！ああああああ!!」

ユーキ LP 3500↓1700

…やはりおかしい、とボム・フェネクスの業火によってもたらされた激痛：火傷はないが、激痛を感じながらそう思った。：500や1800のダメージで、これほどの痛みが生じるはずがない、と。

「これでターンエンド」

武 手札1 LP 4000

モンスター 重爆撃禽 ボム・フェネクス×1(攻)

魔法・罫 永続魔法「強欲なカケラ」×1、セットカード×1

「はあ、はあ…くっ…私のターン…ドロー…：反転召喚、ライトロード・ハンター ライコウ！ライコウの、リバー効果発動！ボム・フェネクスを破壊！」

「残念ですが、トラップ発動、ブレイクスルー・スキル。ライコウの効果が無効にします！」

「なら…魔法カード、ソーラー・エクステンジを発動！手札のライト

ロード・ビースト ウォルフを墓地へ捨てて、デツキからカードを2枚ドロし、2枚を墓地へ！」

デツキから墓地へ送られたカード

ライトロード・ビースト ウォルフ

ライトロード・アサシン ライデン

「よし。ライトロード・ビースト ウォルフの効果！このカードを特殊召喚！さらに手札から魔法カード、光の援軍を発動！デツキの上からカードを3枚墓地へ送り」

墓地へ送られたカード

ブレイクスルー・スキル

くず鉄のかかし

裁きの龍

墓地へくず鉄のかかしと裁きの龍が置かれたのを見て、うつ、と少し表情が強張る。…無論すぐにデュエルを続ける。

「デツキから、ライトロード・サモナー ルミナスを手札に！」

「…なるほど。どうやら、墓地へ行ってもらいたくないカードが墓地へ行ったようですね」

「…ライトロード・サモナー ルミナスを召喚！そしてルミナスの効果！手札1枚を墓地へ送り、墓地のチューナーモンスター、ライトロード・アサシン ライデンを特殊召喚する！」

墓地へ送られたカード

ボルト・ヘッジホッグ

ルミナスがフィールドに現れ、その隣にライデンが現れる。…チューナーがいる以上、シンクロモンスターが出てくる。

「…ですが、どのモンスターもボム・フェネクスを下回っています（それに、例えシンクロモンスターを呼び出しても、これを使えば…）」

「ええ。…でも、関係ないです。まずはライデンの効果発動！デツキの上から、カードを2枚墓地へ送る！」

墓地へ送られたカード

ライトロード・マジシャン ライラ

サイクロン

「ライトロードが墓地へ送られたことで、ライデンの攻撃力は200ポイントアップします！」

「200程度、問題ないですよ」

ライトロード・アサシン   ライデン   AT   1700↓1900

「：レベル3のライトロード・サモナー   ルミナスに、レベル4のライデンをチューニング！集いし歌が、華となり、月明かりの下咲き誇る！光差す道となれ!!シンクロ召喚！」

ライデンが4つの歯車になり、その中にルミナスが入り、3つの光になる。歯車から光が放たれ：赤い翼に赤い体、それらがまるで赤いバラのように見えるドラゴンが、現れた。：翼の上部には、黒い線が引いてある。そしてフィールドには、花びらが舞い始める…：といっても、水中なので漂っているのだが。

「レベル7！月華竜ブラック・ローズ!!」

月華竜ブラック・ローズ   ATK   2400

「月華竜ブラック・ローズ：ですか（まあ問題ないですね）」

「月華竜ブラック・ローズの効果！このカードが特殊召喚、もしくは相手がレベル5以上のモンスターを特殊召喚した場合、相手フィールド上の特殊召喚されたモンスター1体を手札に戻す！ローズ・バラード退華の叙事歌！」

「手札のエフェクト・ヴェーラーの効果発動。手札のこのカードを墓地へ送り、月華竜ブラック・ローズの効果をも、無効にします。残念でしたね。さあ、次のターンで」

「トラップ発動！スキル・プリズナー！月華竜ブラック・ローズを、モンスターを対象にした効果を無効にします！」

「なっ?!そ、それでは…うわああああ!!」

フィールドに赤い花びらが舞い、それが大きな水の流れとなって、ボム・フェネクスへと襲い掛かり、押し流す。そして、ボム・フェネクスはフィールドを離れた。…その水流の勢いに巻き込まれ、武も流される。

「ぼ、ボクのボム・フェネクスが…」

「バトル！ライトロード・ビースト   ウォルフで、ダイレクトアタック！」

「!アクションカード…うわあああああ!」

武 LP 4000↓1900

ビースト ウォルフの攻撃をかわせず、まともにくらい、吹き飛ばされる。…その先にアクションカードは…。

「!あつた、アクションカード…」

「取らせません!月華竜ブラック・ローズで、ダイレクトアタック!  
ローズ・レクイエム  
散華の鎮魂歌!!」

「!う、うわああああ!!」

フィールドに漂っている花びらが一齐に武のほうへと向かい、アクションカードを取ろうとしていた武へと襲い掛かり…ライフを0にした。

武 LP 1900↓0

デュエルが終了し、リアルソリッド・ヴィジョンが消え、フィールドが海底遺跡から、元のフィールドに戻る。

「決まったー!!難しい水中でのデュエルの中、勝利を掴んだのは…  
フィールドの特性を生かした、ユーキ選手ー!」

「…えーっと…生かした覚えは、ないんですが…」

「あ、あり得ない…あり得ない!!このボクが、負けるはずがない!」  
「…」

…ユーキは武のことを少し気にはしたが、やはり嫌なものを感じたため、フィールドから離れた。

…そしてその日の夜…LDSの医療施設の入り口にて集まっている遊矢、柚子、ユーキ、権現坂。…そしてユーキは、素良に何があったかが聞けないでいたため、そのことを聞いた。そして説明を受けた。…それはユーキにとって、衝撃的な内容であった。

「…紫雲院くんがそんなことを」

「ああ…全部本当かは、分からないけど…」

「だが、黒咲と素良が、互いに敵対していることは事実だろう。…おそらく、素良は、元は融合を主体とした塾の所属で、その塾と敵対していた、エクシーズを主体とした塾に、黒咲が所属していた…」



とではないか？」

権現坂の出した意見に対して：遊矢、に柚子、ユーキは疑問を持つ。  
：言っていたことが、そんな規模ではない：という感じの内容であった。

「：いや、なんか、違うような：」

「確かに。敵対塾同士だったから：っていうのは、違う気がする」

「：塾：という規模じゃないと思います。：なんだか、そう：戦争：とか、そういうもつと規模の大きいことだと思います」

「戦争？そんなバカな」

「：でも、あり得ない話じゃないかもしれない：あり得るかは、分からないけど」

「とにかく、素良が起きたら、話を聞きましょう」

柚子がそういうが：そう言った僅か少しして：声が、聞こえてきた。

「いたか?!」

「いえ。しかし、あのケガでいったいどこに：」

「とにかく探せ！あのケガなら、そんなに遠くには行っていないはずだ。それと社長に連絡しろ！紫雲院素良が逃げ出したと！」

「はい！」

：そんな僅かな会話を、がつつり全部聞いてしまった、遊矢、柚子、ユーキ、権現坂。

「：……素良が逃げ出しただって?!」

「まだ安静にしてなきゃいけないのに：」

「とにかく探すぞ。聞きたいこともあるしな」

「はい！私はできる限り、広い範囲を探してみます！」

「じゃあ、オレはあっち！」

「私は向こうを！」

「オレはこつちを探す！とりあえず、定期的に連絡しよう!!」

そしてユーキは、D・ホイールに乗り、町の中を走る……………が……。  
「いない：…いったいどこにいったの」

見つからなかった。すると不意にディスクに通信が入った…権現坂からだ。

「ユーキ、そっちはどうだ！こっちはまだ見つからない!!」

「それがまだ…次は港の辺りに行こうと思ってます」

「いや、港の辺りは人気が少なく危険だ。オレのいる場所から港は近い、オレが行こう！ユーキは、他のところに行こう！」

「……そういえば確か、中央公園のほうには…」

「なら中央公園に向かってくれ！もしかしたら他に誰かいるかもしれないん！」

「はい！」

そしてユーキは方向を変え、中央公園へと向かう。

そのとき、中央公園では…。

「ボクはまだ、アカデミアに戻るわけには、いかないんだああああああ!!!」

その絶叫とともに、素良は融合次元のアカデミアへと、強制的に帰還させられた。遊矢、そして遊矢に似た顔のユートは、それを見ていた。…なお、ただいまデュエル中である。

「…いい、今は…」

「おそらく、アカデミアへ強制帰還させられたんだろう」

「アカデミア…」

「…どうする。このままデュエルを続けるか？」

「…できるわけないだろう！」

遊矢はディスクからデツキを取る。…そしてユートも、ディスクからデツキを取る。それによって、デュエルは強制的に終了となった。

「……聞きたいことがある。いったい、何があったんだ。お前と素良の間に」

「いや、先ほどの彼とオレは、初対面だ。…問題は、彼が所属している組織だ」

「組織？」

「…アカデミア。オレ達の故郷、エクシーズ次元…ハートランドを

侵略してきたヤツらだ」

そしてユートは語り出す。…遊矢の疑問に答える形で。別の次元の存在、エクシード次元へ行われた、融合次元からの侵略戦争、そしてレジスタンス…。

「…そんな…」

「信じられないか？」

「信じられるわけないだろ！そんな、別の世界とか、戦争とか、そんな話し…」

「…世界には、君の知らないところで様々なことが起こっている。…だが、君の気持ちは分かる。オレ達だって、最初は信じられなかった。…だが、現実が起こったんだ。それも、目の前で」

「…」

ユートの話しに、遊矢は言葉が出なかった。…その僅か後、不意に光が現れる。

「！なんだ…」

「うわ！」

そして、光が収まると…電灯の1つが倒れ、近くに…白いバイクに乗った人物が、いた。

「いっつつつ…なんだってこんなところにこんなもんがあるんだよ。つたく…」

バイクに乗った人物は、ヘルメットを取る。…その顔は…。

「え?!オレに、ソックリ…」

「！お前はっ…」

「ん?あ、オメエは！ここであつたが100年目、オレとデュエルしろこの野郎！」

…遊矢にソックリ…?な顔をした少年、であつた。…似ている…のか?

## 第13話 反逆VS翼

前回のあらすじ：遊矢、ユート、そして3人目の遊矢にソックリ：？な、少年がバイク：に乗り、光とともに現れた！何やらユートと3人目は、何か因縁があるようで…。

「…いいだろう、受けてたつ」

「ちよ、ちよつと待てよユート！話しを聞くとか」

「あいつは融合次元の、アカデミアの手先だ」

「え?!」

「てめえ…オレは融合じゃねえ！ユーゴだ!!間違えてんじやねえ!!」

3人目：ユーゴはそう言う…間違えたわけではないが、融合とユーゴ、よく似ているため、間違える…もしくは、間違われることが多いのだろうか…。

「いくぜー!」

「デュエルモード、オートパイロット、スタンヴァーイ!」

「デュエル!」

ユーゴ LP 8000

ユート LP 8000

「行くぜ、先手必勝!オレのターン!」

「え!?バイクに乗りながらデュエルするのか!?!」

遊矢のツツコミは無視され、ユーゴは動く。

「自分フィールドにモンスターが存在しないことで、手札からSRベイゴマックスを特殊召喚!ベイゴマックスは召喚、特殊召喚に成功したとき、デッキからベイゴマックス以外のSRを手札に加える!オレはデッキから、タケトンボークを手札に加える!さらに手札からチューナーモンスター、SR三つ目のダイスを召喚!」

ユーゴのフィールドに、ベイゴマがいくつも連なったモンスターと、三角形の面を4つもつ目のマークがついたモンスターが現れる。…レベル3が2体。だがこの場合は…。

「オレはレベル3のSRベイゴマックスに、レベル3の三つ目のダイ

スをチューニング！」

三つ目のダイスが3つの歯車になり、その中にベイゴマックスが入り、3つの星になる。

「十文字の姿持つ魔剣よ、その力で全ての敵を切り裂け！シンクロ召喚！」

歯車から光が放たれ、けん玉に似た形状のモンスターが現れる。けん玉で言えば下となる部分は鋭くなっており、まさに剣と言える。

「現れる、レベル6、HSR魔剣ダーマ！そして魔剣ダーマの効果！墓地の機械族モンスター1体を除外し、相手に500ポイントのダメージを与える！オレはベイゴマックスを除外して、500ポイントのダメージだ！」

「くっ！」

魔剣ダーマの剣先からエネルギー弾が放たれる。ユートはそれをギリギリのところかわすが、衝撃波を受け流すことはできなかった。…そして、エネルギー弾の着弾地点の地面は、えぐられていた。

ユート LP 8000 ↓ 7500

「どうだ先制パンチの味は！」

「この程度、まだ余裕だ」

「へっ、そうかよ！ カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

ユート 手札3 (SRタケトンボーグ) LP 8000

モンスター HSR魔剣ダーマ×1 (攻)

魔法・罫 セットカード×1

「なあユート、融合の手先ってホントなのか!?融合使わなかったけど…」

「オレはユートだ！」

「ああ。おそらく隠しているだけだ。オレのターン、ドロ！…オレは手札から幻影騎士団ラギッドグローブを召喚！そして自分ワールド上に幻影騎士団が存在することにより、手札から幻影騎士団サイレントブーツを特殊召喚！」

幻影騎士団ラギッドグローブ ATK 1000

幻影騎士団サイレントブーツ DEF 1200

それぞれが青白い炎でできた体を持つモンスター…ラギッドグローブは巨大な腕があり、サイレントブーツは茶色い服に白いズボンをつけている。

「オレはレベル3の幻影騎士団ラギッドグローブとサイレントブーツでオーバードレイ！戦場に倒れし、騎士達の魂よ。今こそ蘇り、闇を引き裂く光となれ！エクシーズ召喚！」

2体が紫色の光になり、フィールドに現れる渦に飛び込む。…渦からは、黒い鎧にも見え体を持つ馬と、同じような体を持つ、頭やいくつかの関節は青白い炎になっているモンスターが現れる。

「現れる、ランク3！幻影騎士団ブレイクソード！そしてエクシーズ素材としたラギッドグローブの効果！このカードをエクシーズ素材にしたモンスターの攻撃力を、エンドフェイズまで1000ポイントアップさせる」

幻影騎士団ブレイクソード ATK 2000↓3000

「バトルだ！ブレイクソードで、魔剣ダーマを攻撃！」

「ちっ…」

ユーゴ LP 8000↓7200

ブレイクソードが、魔剣ダーマを追い、その手に持つ大剣を使って魔剣ダーマを両断、破壊される。

「ち、魔剣ダーマが…」

「…オレはカードを2枚伏せて、ターンエンド。このエンドフェイズ、幻影騎士団ブレイクソードの攻撃力は元に戻る」

幻影騎士団ブレイクソード ATK 3000↓2000

ユート 手札2 LP 7500

モンスター 幻影騎士団ブレイクソード×1 (攻) OU×2

魔法・罠 セットカード×2

「行くぜ、オレのターン、ドロー！…手札から速攻魔法、サイクロンを発動！左のカードを破壊だ！」

「トラップ発動！幻影騎士団シャドーベイル！この効果で、ブレイクソードの攻撃力、守備力を300ポイントアップさせる！」

幻影騎士団ブレイクソード ATK 2000↓2300 DE

F 1000↓1300

「フリーかよったく…オレは墓地の、HSR魔剣ダーマの効果発動！自分フィールドにモンスターが存在しないとき、墓地のこのカードを、特殊召喚できる…ただしこの効果を発動したターン、オレは通常召喚を行えない。もう1度こい、魔剣ダーマ！」

HSR魔剣ダーマ ATK 2200

再び現れる魔剣ダーマ。…なんだかテープみたいなものが貼られているように見える。

「そしてオレのフィールドに風属性モンスターが存在することで、手札からSRタケトンボーグを特殊召喚する！」

タケトンボが変形し、人型の小型ロボットへとなった。だが、タケトンボーグはこれだけでは終わらない。

SRタケトンボーグ DEF 1200

「タケトンボーグの効果…このカードをリリースすることで、デッキからスピードロイドと名のついたチューナー1体を、特殊召喚する！こい！SR赤目のダイス！」

SR赤目のダイス DEF 100

フィールドに黄色い四角…この場合、六面ダイスが現れる。正面には赤い目の模様が1つある。

「ただしこの効果を発動したターン、オレは風属性モンスターしか特殊召喚できない。ま、風属性しか今のところ出してないけどな。そしてHSR魔剣ダーマの効果！タケトンボーグを除外して、500ポイントのダメージだ！」

「ぐっ…」

ユート LP 7500↓7000

地味に削られていくユートのライフ。無論ユートはエネルギー弾をかわし、結果地面をえぐっている。

「さあ行くぜ相棒！オレはレベル6のHSR魔剣ダーマに、レベル1の赤目のダイスをチューニング！」

赤目のダイスが1つの歯車になり、その中に魔剣ダーマが入り、6つの星になる。…と同時に。

「っ！ぐっ…」

「！く…な、なんだ…」

「っう…すぐ出してやるからな…その美しくも雄々しき翼翻し、光の速さで敵を討て！シンクロ召喚!!」

歯車から光が放たれ…光から、白くも洗練された細めの体に、ミントグリーンの翼を持つ機械的な部分を一部に持つ、ドラゴンが現れる。

「現れる！レベル7、クリアウイング・シンクロ・ドラゴン！」

クリアウイング・シンクロ・ドラゴン ATK 2500

その名前をユーゴが叫び、クリアウイングの咆哮が、公園に轟く…と同時に…

「！こいつは…」

「あ！遊矢くん！」

「！ユーキ！」

ユーキがその場に到着した。

「バトルだ！クリアウイング・シンクロ・ドラゴンで、ブレイクソードを攻撃！旋風のヘルダイブ・スラッシュャー!!!」

「！ぐああ！」

ユーゴ LP 7000↓6800

「く…幻影騎士団ブレイクソードの、モンスター効果！オーバーレイユニットを持つこのカードが破壊されたとき、墓地からそのモンスターを全て、特殊召喚する！こい、ラギッドグローブ、サイレントブーツ！」

幻影騎士団ラギッドグローブ 星3↓4 DEF 500

幻影騎士団サイレントブーツ 星3↓4 DEF 1200

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

ユーゴ 手札2 LP 7200

モンスター クリアウイング・シンクロ・ドラゴン×1 (攻)

魔法・罫 セットカード×1

「さあ、オレは相棒を出した、てめえもとつと出しやがれ！」

「いいだろう、オレのターン、ドロー…オレは、レベル4となってい



る幻影騎士団ラギッドグローブとサイレントブーツで、オーバーレイ  
！」

ラギッドグローブとサイレントブーツの2体が、再び紫色の光になり、フィールドに現れた渦の中へと飛び込む。……そして、渦から光が溢れる。

「漆黒の闇より、愚鈍なる力に抗う、反逆の牙！今降臨せよ！エクシズ召喚!!」

そして、現れたのは……暗き闇を纏ったモンスター……黒に紫、灰色に青緑……決して暖色系とは言えない色が体のところどころにある……闇のドラゴン。暗い闇が晴れたときにハッキリとしたその姿は……

「ランク4、ダーク・リベリオン・エクシズ・ドラゴン！」

「！遊矢くんの、オッドアイズに……似ている」

ダーク・リベリオン・エクシズ・ドラゴン ATK 2500

そう、どこことなく、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンに、似ている。……完全に似ている、というわけではないが。

「へっ、出てきやがったっ！ぐ……」

「！ぐ……あつ……」

「っ！ぐ……な、なんだこれ……」

「！遊矢くん、どうかしました？」

……ダーク・リベリオンが出てきて少しして、ユートとユーゴ、2人の様子がおかしくなる。……同時に、遊矢も胸を押さえ苦しい声を出す。……そして、ダーク・リベリオンと、クリアウイングが呼応するかのようになり、咆哮を轟かす。……その少し後に、2人が口を開く……が。

「……破壊する……全てを」

「滅ぼす……世界を」

「……そして、全てを消滅させる!!!」

「!!」

……明らかに、ユートとユーゴが、おかしい。目が光り、いきなり物騒なことを言い始めた。

「ラギッドグローブの効果で、ダーク・リベリオン・エクシズ・ドラゴンの攻撃力は1000ポイントアップする！」

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン ATK 2500 ↓  
3500

「オレはダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンの効果発動！オーバーレイ・ユニットを2つ使い、相手モンスター1体の攻撃力を半分にし、その数値分、ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンの攻撃力をアップさせる！トリーズン・デイスチャージ!!」

「クリアウイング・シンクロ・ドラゴンの効果発動！1ターンに1度、自分フィールドのレベル5以上のモンスター1体を対象にするモンスター効果を無効にし、そのモンスターを破壊する！ダイクロイツク・ミラー!!!」

ダーク・リベリオンの翼が展開し、紫色の雷が迸り、クリアウイングへとその雷が向かうが、クリアウイングの翼に電子基板のような模様が薄く浮かび、光が放たれ：それが、雷を押し返す。：だが。

「トラップ発動！ブレイクスルー・スキル！このカードは相手フィールド上のモンスター1体の効果を対象に、その効果を無効にする！クリアウイング・シンクロ・ドラゴンの効果を無効にする！」

「く…」

クリアウイングに浮かんでいた紋様が消え、光がなくなる。：そして、クリアウイングは、紫の雷によって拘束される。

クリアウイング・シンクロ・ドラゴン ATK 2500 ↓1250

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン ATK 3500 ↓  
4750

「バトル！ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンで、クリアウイング・シンクロ・ドラゴンを攻撃！反逆の、ライトニング・デイスオベイ！」

「トラップ発動！攻撃の無敵化！このカードはバトルフェイズにのみ発動でき、モンスター1体の戦闘破壊を防ぐ、もしくはこのターンの戦闘ダメージを0にする効果のうち、1つを選んで使う！オレはクリアウイングの破壊を防ぐ！」

「だがダメージは受ける！」

「ぐおおおお!!」

ユーゴ LP 7200↓3700

ダーク・リベリオンとクリアウイング、2体の衝突により、凄まじい衝撃波が放たれる。それはデュエルを見ている3人に及ぶ。

「きゃー!」

「うわ!」

その衝撃により、ユーキ、遊矢は尻もちをつく。それほどの衝撃であつた。

「これでターンエンド!このエンドフェイス、ラギッドグローブの効果  
果が終了する」

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン ATK 4750↓  
3750

ユート 手札3 LP 6800

モンスター ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン×1(攻)

魔法・罫 なし

「オレのターン、ドロー!...オレは手札から魔法カード、スピード・リ  
バースを発動!墓地のHSR魔剣ダーマを特殊召喚!」

HSR魔剣ダーマ ATK 2200

3回目の特殊召喚となる魔剣ダーマ...先ほどより明らかにゼロ  
テープのようなものが多い。

「く...こんな...こんななの、デュエルじゃない...このデュエルは...危  
ない...頼む、二人とも...ユートも、ユーゴもやめてくれ!!やめるん  
だ!!!」

「!遊矢くん!!」

遊矢は、ユートとユーゴの間に入る。

「ユート!お前本当は、誰も傷つけないんだろ!!お前、素良との  
デュエルで攻撃したとき、辛い顔をした。それって誰も傷つけない  
ないってことだろ!!」

「!...」

「オレはHSR魔剣ダーマの効果発動!墓地の赤目のダイスを除外  
し、500ポイントのダメージを与える!」

「ユーゴもやめてくれ!!こんなの、お前望んで」

「そしてクリアウイング・シンクロ・ドラゴンの効果!フィールド上のレベル5以上のモンスター効果を発動を無効にし、そのモンスターを破壊する!ダイクロイツク・ミラー!!」

「!ユーゴ、お前…」

「そしてクリアウイングの効果で破壊したモンスターの攻撃力、クリアウイングの攻撃力は、アップする!」

「なんだって!!?」

クリアウイングの翼から放たれる光によって、魔剣ダーマが破壊される:本日3度目の呼び出しで、魔剣ダーマは簡単バラバラになる。:ドンマイ、魔剣ダーマ。

クリアウイング・シンクロ・ドラゴン    A T K    1 2 5 0 ↓ 3 4 5

0

「ユート、ユーゴ!頼むからやめてくれ!!」

「手札からSRシェイブーメランを召喚!」

SRシェイブーメラン    A T K    2 0 0 0

「シェイブーメランの効果発動!このカードを守備表示にすることで、フィールド上のモンスター1体を対象に、その攻撃力を400ポイント下げる!オレは、クリアウイング・シンクロ・ドラゴンを選択!そしてクリアウイングの効果!レベル5以上のモンスターを対象にしたモンスター効果を無効にし、そのカードを破壊する!シェイブーメランの効果を、無効にし、破壊する!ダイクロイツクミラー!!」  
バナナにも見えるブーメラン状のモンスターが現れ、そしてすぐクリアウイングの翼から放たれた光によって破壊される。:そして、その攻撃力は…。

クリアウイング・シンクロ・ドラゴン    A T K    3 4 5 0 ↓ 5 4 5

0

「バトルだ!クリアウイング・シンクロ・ドラゴン!!ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンを、攻撃!!!」

クリアウイングの翼が光を放ち、空へと飛ぶ。

「まずい:遊矢くん!!」

そして…クリアウイングは、風を纏って…回転しながら、急降下する。

「旋風のヘルダイブ・スラッシュャー!!!」

「ユーゴ!!」

「ダメ…ダメー!!!」

…思わず、ユーキが叫ぶ…そして、ダーク・リベリオンとクリアウイング、そしてその間の遊矢、黒と白、2体のドラゴンが接近し、ぶつかる直前…ユーキのデッキから、凄まじい光が、放たれる。

「っ?!」

「うわ?!」

「な、なんだ!?!」

そして光が放たれたと同時に、ダーク・リベリオンとクリアウイングの2体は止まり、共に咆哮をあげる。…そしてその光の中に、ユーキは…1体の、白いドラゴンを見た。

「……………あのドラゴンは…」

## 第14話 話し合い

光の中に見えるドラゴンは、ハッキリとは見えない。…だが、どこで見た…ユーキは、そう感じた。…だが、ドラゴンが消えていくのと同時に、光も弱くなり…完全に消えたときには、光も消えた。

「…今のは…」

「…あれ？オレはいつたい…」

「！オレは…」

「！ユート、ユーゴ…よかった…」

「遊矢…すまない、オレは…」

そしてユート、ユーゴ、遊矢に起きていた異変は…無事収まった。…だが…。

「つてあれ!?なんかデュエル終わってやがる…やいお前!なんかしやがったな!!もう1度勝負だ!」

「…決着をつけたいところだが、今は」

「あーちよつとストップストップ!二人とも落ち着けて!」

「お前はすつこんで…あれ、なんか誰かに似てるような…つてんなこと関係ねえ!」

…ユートとユーゴ、2人の気持ちは、まだまだ収まっではないようだ。…ユートは断るような感じは出してはいるが、ユーゴはそうはいかないようだ。

「え、えつと…ふ、二人ともストップストップ!!まずは話し合いましよう!」

「お前は黙ってる!!」

「だからストップ!二人とも、しっかり落ち着いてください!!まずは落ち着いて、そして話し合ってください!!」

「ユートとユーゴもだからストップ!まずは何でこんな風にいがみ合ってるのかちゃんとオレ達に説明してくれ!!」

「…それもそうだな」

「ちつ…なんで説明しなきゃならないんだ」

「訳が分からないからです!」

「……言われてみりや確かに…しやーない、説明するか」

…怒りが収まったかはともかく、二人とも少しは落ち着いたよう  
だ。

「…それで、二人とも何があったんだ？」

「…こいつは瑠璃をさらったんだ」

「はあ？何言ってるんだてめえ。そんなことより、お前はリンをさらっ  
たんだろーが！」

「…お前こそ何を言っている。オレはそんなことをしていない」

「んだと！」

「落ち着いて、落ち着いて…」

ユーゴは喧嘩っ早い。なので宥めるなり何かしないと、話し合いに  
ならない。

「…とりあえず…：ユートの話したと、ユーゴが瑠璃をさらった…そ  
してユーゴの話したと、ユートがリン…ってという子をさらった…でい  
いんだよな」

「…ん？…：そーいやお前っぽいような気がしてきたな…」

「…」

「…あ！…：なあ、もしかしてそれって…融合次元の」

「融合じゃねえユーゴだ！」

「いやユーゴの名前は言っていないって…」

…人の話しは、やはりしつかり聴く、ということは大それたと思う。  
特に、勘違いを防ぐにはこういうことは大事なはず。

「…そうか。スタンダード、シンクロ、そしてエクシーズ…：3つの次元  
に、顔がソツクリな人物が3人…：ということは確実に、融合次元に  
も…」

「だから融合じゃ」

「だから違う」

「…えーつと…：つ、つまり？」

「どういうことだ？」

「あ…ユーキにユーゴは知らないんだったな…：ユートの説明だと  
…」

と、遊矢はユートから聞いたことをユーキ、ユーゴに話した。……  
どちらも決して物分りが悪いわけではないので……。

「…つまり、あれだろ？世界が4つに分かれてて、そのうちの融合とエクスサイズがなんか、戦ってるってことだろ？」

「どうして戦争を……」

「分からない。…いきなりオレ達の世界は侵略されたんだ」

「…信じらんねえけど……リンが浚われたときだって、正直信じられなかったからな、いきなり人が消えたんだし……にしても、なんか話し聞いたらさ、リンさらったのがもしかしたら、その融合次元？の、オレのソックリなヤツかもしれないねえってことかもな……って思ったんだけど、お前らどう思う？」

「…その可能性は大いにある。…しかし、もし本当にそうだとすると、何故なんだ……？」

と、ユートは悩みだし、同時に他の3人も悩みだした……が。

「…今は、分からないことばかりですね……ん？電話……あ！紫雲院くん探していたの忘れてた!!」

「いや、素良ならもうこの世界にはいない……融合次元に、強制送還されたんだ」

「強制送還……とにかく、急いで2人に知らせないと……あ、2人を急いで連れてきますので、待っててくださいい！」

というと、ユーキはそのままその場を去った。おそらく、D・ホイールを停めてある場所に向かったのだろう。……だがその少し後に……。

「あ、遊矢——！」

「あの声……柚子——！」

……柚子が、こちらに来ている。……そしてすぐに柚子のブレスレットに反応が……。

「！きやあー！」

「えっ……」

……そしてブレスレットの光が収まると……ユート、ユーゴの姿はなかった。

「…あ、あれ……ユートとユーゴは、どこに……」



「……あ、あれ？…遊矢、誰かと一緒にいたみたいだけど…」

「あ、ああ…ユート、それにオレに似たユーゴっていう人と一緒にいたんだけど…」

「え!？」

ユート、ユーゴの2人はいなくなり、残ったのは遊矢と柚子の、2人だけであった…：…：…そして、遊矢達は気付いていない…遊矢を含め、何人かのスタンダードにいたデュエリストに…何かが、入り込んだことに。

くくく？ くくく

とある謎の場所…そこでは、1人の少女が宙に浮いたモニターを見ている。…そのモニターに映し出されているのが何かは分からないが…何やら、いくつかの黒い丸が、点滅している。

「…仕込みが始まったな」

表情こそフードを深く被っているため分からないが、少しだけうれしそうだ。

「せいぜいうまく行くことを願おうか。まあ、問題ないだろう。だがまあ…少しだけ、細工をさせてもらおうか」

そういうと、別のモニターが現れる。それには謎の表示と…柚子、遊矢、そして遊華が映っている。

## 第15話 黒きもの

くくく ? くくく

ハア、ハア、ハア：と、荒い息遣いと、人の走る足音が響く、どこかも分からぬ暗く、黒い空間。その空間で、誰かは逃げていた。どれくらい逃げているのか、どこへ逃げているのか分からない。だが、それでも逃げている誰かには、分かっていることがあった。：自分は、何か恐ろしい存在から逃げているのだ、と。その誰かは、恐ろしい存在から逃げて、逃げて、必死で逃げて：：そして、転んだ。派手に転がり、視界は、今まで背を向けていたほうのものを、映し出す。

：この空間は暗く黒い空間だ。だが：それなのに、その恐ろしい何かが、黒いというのが、分かった。別に白い線があるわけではない。：だが、黒く分かった。その恐ろしい何かが、この空間よりもはるかに黒い何かを放っていたからだ。

：その恐ろしい何かは、逃げていた誰かへと迫る。誰かは恐怖で動けないのか、その視界に少し映る誰かの体はとても震えていた。：：そして

くくく 朝 遊華の部屋 くくく

「ぎゃあああああああ!!!あ、あれ：」

唐突な絶叫と共に目が覚める遊華。おそらく悪夢を見ていたのだろう。汗をかき、息が荒い。

「はあ、はあ：い、今の夢は：」

「ゆ、遊華——！」

「父さん…うう、うええええええん！」

「わっ！つとつとつとあー！」

余程怖かったのか、絶叫を聞き駆けつけた父へと飛びつく。あまりにも唐突だったのか…いや、杖を普段から使うために足が不自由なためなのか、どちらかは分からないが、倒れる。

「うえええええん！」

「いたたたた…ほらほらよしよし」

と、倒れた遊華の父親は頭を撫でている。…そしてすぐに泣き止んだ遊華は父親から離れ…。

「うう…怖い夢を、見て…」

「そうだったのか…いつもなら時間をかけておいしいものを作るけど、今日は舞網チャンピオンシップで遊華のデュエルがある日だ。代わりに何かカードをあげよう」

「！デュエル…そうだった、今日はデュエルだった！」

「慌てない慌てない。遊華の悪い癖は、デュエルになるとすごく元気になって急ぎやすくなることだ」

「う…うん…でも待ちきれなくて…」

そういう座っている遊華に、遊華の父親は頭をなでなでして…。

「急ぐことは、別に悪いことじゃない。でも、遊華は急ぎ過ぎることが多い。そんなに急いでいたら見落とすものもある。焦らず観察する、それも勝利へと繋がるよ」

「…うん！」

「それじゃ朝ごはんはんだ。今日は遊華がデュエルするから、遊華の好きな、オクラ入り納豆だ」

「やったー！」

と、朝食を食べに向かう。…その後、準備を整え、遊華は自転車に乗って会場へと向かう。

くくく 舞網チャンピオンシップ会場 くくく

「さあ〜！舞網チャンピオンシップ2日目!!それではさっそく参りましょー!!」

と、デュエルは進んでいく。無論、遊華は真澄、北斗、刃の3人とともに途中まで観戦。そして自分の番が近付くと席を離れ…。

「では第8試合・LDSシンクロコース所属、巳柳遊華選手!! 対するは、舞網デュエルゼミナル所属、柿沼誠一郎選手―!!」

デュエルフィールドには…遊華と、対戦相手の…無駄にイケメンな風貌の少年が現れる。

「よろしくお願いします」

「よろしくっ! まあせいぜい、ボクのデュエルに花を添えて、ボクの勝利をアシストしてくれたまえっ!」

…この瞬間、遊華は思った。…こいつ、無理。このウザさ、無理…と。あまりのウザに、遊華のやる気は、一気に削がれる。

「それでは行ってみましょう! アクションフィールド、アクロバット・アスレチック、セット!」

リアルソリッドヴィジョン投影機が起動し、フィールドにいくつもの高台と、その高台を繋ぐ木製の吊り橋や滑車などが現れる。

「戦いの殿堂に集いしっ! デュエリスト達がっ!」

「…モンスターとともに、地を蹴り宙を舞い」

「フィールド内を駆け巡るっ!」

「見よ、これぞデュエルの最強進化系」

「アクション…っ!」

「デュエル!」デュエル」

遊華 LP 4000

誠一郎 LP 4000

デュエル開始と同時に、フィールドにアクションカードが散らばる。…先攻はというと…。

「ではレディーファーストだっ。せめて私のデュエルを華やかに、美しくできるようにがんばりたまえっ」

「…私のターン。…手札から永続魔法、補給部隊を発動。カードを1枚伏せ、カードガンナーを召喚。カードガンナーの効果発動。デッキの上から、カードを3枚まで墓地へ送る。私は3枚を墓地へ」

カードガンナー ATK 400

墓地へ送られたカード

ジャンク・シンクロン

炎竜星―シユンゲイ

リビングデットの呼び声

…あまりにうざいため早々テンションが低めの遊華。フィールドにカードガンナーが現れ、その攻撃力を高める。

カードガンナー ATK 400↓1900

「…カードを1枚伏せて、ターンエンド」

遊華 手札2 LP 4000 EX 15

モンスター カードガンナー×1(攻)

魔法・罠 永続魔法「補給部隊」×1、セットカード×1

「已柳遊華選手、出だしは至って慎重、さあ柿沼誠一郎選手のターンです！」

「ふふん、攻撃力400…カードガンナーがまあまあ優秀と言えど、あまりいいとは言えないとは思っ。ではボクのターン、ドロっ！…ほう。素晴らしい、素晴らしい手札だっ！」

「いいからとつと進めてくださーい」  
と、滑車を使って移動をしている遊華は言う。…早く終わらせたいのが本音だろう。

「ふふん、ならばこのボクのっ！華麗でっ！完璧でっ！美しくっ！そして優雅なデュエルをお見せしようっ！ボクは手札から永続魔法、黒い旋風を発動っ！さらに手札からBF―蒼炎のシユラを召喚っ!!」

BF―蒼炎のシユラ ATK 1800

フィールドに青い鳥の頭を持つ鳥人が現れる。…見たことのないカードなのか、遊華は…。

「？BF―蒼炎のシユラ…？」

「安心したまえ、シユラの効果はまだ発動しないっ！だが、こちらを発動させてもらおうっ！黒い旋風の効果っ！自分がBFを通常召喚したら、デッキから召喚したBFより攻撃力の低いBF1体をつ！手札

に加えるっ！この効果でBF―月影のカルートを手札につ！さあバトルだっ！BF―蒼炎のシユラよ、カードガンナーを貫けっ！」

「永続トラップ、竜星の具象化を発動！」

「そんなカード使ったところでどうということはない！やれ、シユラ！」

遊華は高台へとつく直前に具象化を発動する。：無論、攻撃を止めるどころかドンドン来てくださいななカードなため、シユラの攻撃は止まるわけがなく…。

「キヤー！」

遊華 LP 4000↓2600

「…モンスターが破壊されたことで、竜星の具象化の効果！デッキから闇竜星―ジヨクトを守備表示で特殊召喚！」

「ならこちらもしユラの効果！シユラはモンスターを戦闘破壊したとき、デッキから攻撃力1500以下のBF1体を特殊召喚できる！デッキから攻撃力1200のBF―上弦のピナーカを特殊召喚！」

闇竜星―ジヨクト DEF 2000

BF―上弦のピナーカ ATK 1200

「ほほう…ジヨクトは厄介な効果を持っているね。でも、それだけだ。ピナーカでジヨクトを攻撃！そしてダメージステップ、手札からBF―月影のカルートを墓地へ送り、効果！このカードはBFがバトルを行うダメージステップ時に墓地へ送ることで、そのBF1体の攻撃力を1400ポイントアップする！」

BF―上弦のピナーカ ATK 1200↓2600

「げ、攻撃力2600…アクションカードは…ない…」

「残念だったね…ジヨクトは破壊だ！」

ピナーカの放った矢はジヨクトをあっさり貫き、破壊する。…が、竜星なので…。

「ジヨクトの効果！デッキから光竜星―リフンを特殊召喚！」

光竜星―リフン DEF 0

後続は現れる。竜星はペンデュラムを除いて属する全てのモンスターが、なんらかの特殊召喚効果を持っているため、簡単には後続が

尽きることはない。

「ではメインフェイズ2っ！レベル4のBF―蒼炎のシユラに、レベル3のBF―上弦のピナーカをチューニングっ！強固なる鎧纏いてっ！このボクをっ！勝利へと導く翼となれっ！シンクロ召喚！」

ピナーカが飛びたち、3つの歯車に変わり、その中にシユラが入り、4つの光になる。歯車から光が放たれ、現れたのは機械にも見える体を持つ鳥人。これで鳥獣族なのだから少し驚きだ。

「レベル7っ！BF―アーマード・ウイング！」

BF―アーマード・ウイング ATK 2500

「柿沼誠一郎選手、ここでエースのアーマード・ウイングをシンクロ召喚―！このカードは中々強力な効果を持っていますが、それについてはまだ秘密で」

「カードを2枚伏せてっ！ターンエンドっ！エンドフェイズにピナーカの効果発動っ！このカードがフィールドから墓地へ送られたターンのエンドフェイズにっ！デッキからBF―1体を手札に加えるっ！ボクはBF―極北のブリザードを手札に加えるでしょうっ！」

誠一郎 手札3 LP 4000

モンスター BF―アーマード・ウイング×1 (攻)

魔法・罫 「黒い旋風」×1、セットカード×2

「私のターン、ドロー。：手札から魔法カード、マジック・プランターを発動。竜星の具象化を墓地へ送り、2枚ドロー。：手札からスケール5の竜剣士ラスターPとスケール7の秘竜星セフィラシウゴを、ペンデュラムゾーンにセットイング！」

遊華のフィールドに、2本の光の柱が現れ、その中に全身鎧を纏った竜人の剣士と、セフィラシウゴが浮かぶ。

「おっとー！ここでペンデュラムカード！しかしそのスケール幅は5と7、召喚できるのは6だけと非常に狭い！」

さらに言えば、セフィラシウゴの効果でセフィラと竜星以外はペンデュラム召喚できないため、さらに狭い。

「ペンデュラムだどっ!?だが、そのスケール幅で出せるモンスターはレベル6！その程度の数など怖くないっ！」

「ラスターPの効果。自分のもう片方のペンデュラムゾーンのカードを破壊し、破壊したカードと同名のカードを手札に加える。セフィラシウゴを破壊し、デツキからセフィラシウゴを手札に加え、セツティング」

セフィラシウゴが消え、再びセフィラシウゴが浮かび上がる。…そしてこれにより、エクストラデツキにはセフィラシウゴ：レベル6の竜星のモンスターが、そろった。

「これはなんと！ペンデュラム効果によって片方のペンデュラムモンスターを破壊、その上でデツキから同名のカードを手札に加えた！そしてペンデュラムモンスターは破壊されたりするとエクストラデツキへ送られ、そこからペンデュラム召喚によって呼び出せます！」

「これで準備ができたというわけかつ。だが、このボクのっ！美しくもっ！華麗でっ！そして完璧な勝利はっ！揺らぐことはないのだっ！」

「……ペンデュラムスケールは5と7、よってレベル6のモンスターが召喚可能……天に現れし光よ、柱と柱を繋げ、新たな世界の扉を開け放て！ペンデュラム召喚！エクストラデツキからレベル6、秘竜星―セフィラシウゴ！」

残念だがこのスケール幅ではセフィラシウゴ1体が精いっぱい、ペンデュラムの特徴の1つである1度に大量のモンスターを呼び出す、ということとはできない。

秘竜星―セフィラシウゴ DEF 2600

「その程度のモンスター、恐れるに足らないねっ！」

「セフィラシウゴの効果。このカードがペンデュラム召喚、もしくはモンスターゾーンで破壊されたら、デツキから竜星と名のついた魔法、罨カードを手札に加える。デツキから、竜星の輝跡を手札に」

「サーチ効果か…まあまあだ」

…一々その言動に対しイライラをなんとか抑える遊華。そのため普段の元気いっぱいな姿とは違い、淡々としている。ペンデュラム召喚のときにはその淡々さが一旦少しなくなり、代わりにイライラを込



めたのか、元気で明るい、というより少し荒々しいという感じであった。

「…っと、アクションカード」

「アクションカードを手に入れたか…まあいい、ボクは別のものを探すだけだっ」

「手札からチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚。ジャンク・シンクロンの効果で、墓地の闇竜星―ジヨクトを特殊召喚」

ジャンク・シンクロン ATK 1300

闇竜星―ジヨクト DEF 2000

「…ん？さてよ、この状況…いま、まさかっ…」

「レベル6のセフィラシウゴに、レベル2のジヨクトをチューニング！煌めく光を纏い、天空より舞い降りよ！シンクロ召喚!!」

ジヨクトが2つの歯車になり、その中にセフィラシウゴが入り、6つの星になる。…そして歯車から光が放たれ、光からシヨウフクが現れる。

輝竜星―シヨウフク ATK 2300

「レベル8、シンクロモンスター…黄金の竜の星、輝竜星―シヨウフク！そしてシヨウフクの効果！シンクロ召喚に成功したとき、素材にした幻竜族の属性の種類まで、フィールドのカードをデッキに戻す。素材となったのは闇属性のジヨクトと地属性のセフィラシウゴの2種類、セットカード2枚をデッキに」

シヨウフクから放たれる黄金の風が、誠一郎のセットカードを吹き飛ばし、デッキへと戻す。

「[巳柳遊華選手が愛用する竜星のシンクロモンスター、シヨウフク！その風によって多くの障害を取り払い、巳柳選手を勝利へと導いた、頼もしい相棒です！」

「くっ…（ゴットバードアタックを、もっとうれておくべきだったかっ）」

「シヨウフクの効果。リフンを破壊し、墓地の炎竜星―シユンゲイを特殊召喚。そしてリフンの効果により、デッキから風竜星―ホロウを特殊召喚。補給部隊の効果で1枚ドロ」

炎竜星―シユンゲイ ATK 1900

風竜星―ホロウ DEF 1800

フィールドに現れる、炎と風の竜星。…ちなみに先ほどデツキへとバウンスされたのは、デルタクロウ―アンチリバースと聖なるバリア―ミラー・フォース。

「レベル4のシユンゲイに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング」

ジャンクシンクロンが腰辺りにあるレバーを引っ張り、それにより背中のエンジンが作動し、3つの歯車になり、その中にシユンゲイが入り、4つの星になる。

「禍々しい雷を纏い、暗闇より現れろ！シンクロ召喚!!」

歯車から光が放たれ、現れたのは久々に登場した邪竜星―ガイザー。

「レベル7、黒き竜の星、邪竜星―ガイザー!」

邪竜星―ガイザー ATK 2600↓3100

「続いて現れたのは、ショウフクとはまた違った禍々しさを醸し出す竜星のシンクロモンスターだー!」

「そして邪竜星―ガイザーの効果!ホロウとBF―アーマード・ウイングを選択し、その2体を破壊!」

「くっ!…(この場に、スキル・プリズナーがあれば!」

「そして破壊されたホロウの効果で、デツキから魔竜星―トウテツを特殊召喚」

魔竜星―トウテツ ATK 2200

アーマード・ウイングとホロウがガイザーの放つ雷によって破壊され、後続にトウテツが現れる。

「バトル。ショウフク、ガイザーで、ダイレクトアタック!天竜輝翔嵐、牙竜魔雷撃!」

ショウフクが黄金に光り輝く嵐を放ち、ガイザーが体の周囲に禍々しい赤い雷を溜め、それを誠一郎目がけ放つ…だが。

「あ、アクションマジック回避!これでガイザーの攻撃を無効に」

「え？……ガイザーは、相手のカード効果の、対象にならないけど」  
「な、なにい!!」

「…ということ、これで終わり！」

「う、うわああああ!!」

誠一郎 LP 4000↓1700↓0

「決まったー!!勝者は、巳柳遊華選手！ペンデュラム召喚からのシンクロ、名付けてペンデュラムシンクロを決め、勝利を掴んだー!!」

デュエルが終了し、アクションフィールドから元のフィールドへと戻っていく。

「ば、バカな…この完璧なボクが負けるなんて…」

「あー、疲れた」

そして遊華は早々にフィールドを立ち去った。…少しの間残ったのは、項垂れている誠一郎だけであった。

## 第16話 天より降りしもの達

~~~~~ とある空港 ~~~~~

「つ、ついた…なんで今日に限って、向こうの空港近くで竜巻が起きるんですか…」

「自然には敵わない、ということだと思えます。ともかく、予定された時刻より大幅に遅れています。急ぎましょう」

「はい…はあ」

とある空港。…その空港に降り立った女性2人。うち1人は灰色の髪をした少女、もう1人はスーツの似合う大人の女性。

「不幸です…」

「手続きもありますので、早く」

「はい…」

少女の呟きは、空港内の数多の会話の中に、簡単に埋もれる。

~~~~~ 数十分後 舞網チャンピオンシップ会場 ~~~~~

「RCM プリンス・カレーで、ダイレクトアタック！」

「うわああ！」

「決まったー!!おいしそうな匂いが漂うこのデュエルを制したのは…茂古田未知夫選手だっー!」

「あく、なんだかお腹空いてきた」

「あんなうまそうな匂いが漂ってきたから仕方ねえよ。…って、そういやもうそろそろ昼か…」

「確かにそうだね…そして休憩が入るぐらいか」

「そういうえば休憩が入るってあったわね…」

「それじゃ一緒にご飯食べよう！」

「えー、ではただいまより、休憩時間とさせてもらいます。次のデュエルは1時からとなります」

「さーてと、弁当弁当」

「真澄、お弁当多めに作って」

「残念ね、昨日みたいなことにはならないわ」

「…」

「うーん…ドンマイ、北斗」

休憩時間となり、各々弁当を取り出し、昼食をとる遊華達。…ちなみに言えば、昨日真澄は会場辺りにある出店で何か食べ物を買おうとしたが、人が多すぎて辿り着けず、結果として3人から分けてもらったということがあったが…：今回はしつかり用意してもらったようだ。…：重箱持ってきた北斗よ、哀れ。

くくく その頃 とある空港 くくく

「…ダメです、道路は未だ渋滞、電車はトラブル、それぞれ予定の時間には辿り着くのは難しいです」

「う、うそ!!…：船は?」

「そもそもないです」

…とある空港においては、ディスクにて情報をチェックしている女性と、女性と一緒にいる少女。…：どうやら予定があるらしいが、間に合いそうにない条件ばかりが揃っている。

「うう、不幸です…：このままでは遅刻して、兄様に迷惑が…」

「いいえ大丈夫です。私に、いい考えがあります」

「え?それ何か嫌な予感がします…」

「大丈夫です。…陸に海がダメなら、また空です」

「…ヘリコプター?」

「はい。お嬢様の不幸はよく分かっているので、電車はよくてももしかしたらがあるので、呼んでおきました」

「なんだか複雑です…」

だがこのままでは遅刻するのは明白なため、女性と少女はヘリポートへと向かう。…：女性のほうはよく予想できたものだと思う。

くくく 12:59 舞網チャンピオンシップ会場 観客席 くくく

「…もうすぐ13時だけど、相手の…：確か、誰だっけ」

「梁山泊塾の梅杉剣つという人だね」

「そうそう…その人いるけど、もう一人がこないね…名前だって分かんないし…」

「なんだ遅刻か？」

「もしくは怖くなったかの、どれかね…梁山泊はラフプレーで有名。怖がって逃げ出しても無理はないし、それはそれでいい判断だと思うわ」

そう、梁山泊塾は、塾長の方針から過度と言っても過言ではないほどのラフプレーを交えた武闘派デュエルの塾。その厳しさと梁山泊出身でプロデビューしたものが多いため、業界第2位を誇る。…とはいえその教育方針に関しては少し疑問があるが、それはまた別の話し。

「二歩間違えば大変なことに繋がるからね」

「ラフプレーじゃないにしても、榊遊矢に対して、大変なことになりかねないことをしたあんたに言われたくない」

「う…」

「榊遊矢とのデュエルで、危ないタイミングで効果使ったりしたんでしょ？もし次同じようなことやったら絶交」

「だ、だってなんだか調子乗ってそうな感じがあつたし」

「それはあんたも一緒」

「確かに」

「うぐ…」

真澄に加え、今回は遊華まで話しに入ってきた。遊華が入ってきたことはあまり影響していたかはともかくとして、それにより、北斗はいつものように落ち込んだ。…そうこう話しているうちに…。

「えー、ただいま入った連絡によりますと、このデュエルの対戦相手はまだ会場に到着しておらず、少しお待ちください…とのことで…ん？」

進行役のニコ・スマイリーが何かの音を聞いたのと同様に、観客席にいた人達も、何人かが…騒がしい会場にいる中、何か音が聞こえてきた。…低音で、連続した一定の音。…それは徐々に近づいてきて…。

「あ、へりだ！」

「あれ、なんかフィールドのほうに、降りてきてねえか」

「どうやらもう一人…かなり裕福な家庭に生まれ育ったようね」

「真澄ぐらい？」

「そうね」

そして、梅杉含めフィールドにいた人は一旦退去、そしてフィールドにヘリコプターが着陸し、少ししてヘリコプターの扉が開く。…そしてへりからは、1人の少女が…足を踏み外して滑り落ちる形で、フィールドに降り立つ。…その光景に、騒がしかった会場は、一瞬にして静まり返った。

「…」

「…かなり、恥ずかしいだろうな…」

「…そう、ね…」

「ん？どこかで…ああー!!」

フィールドに降り立った灰色の少女の顔を見た遊華は、唐突に叫んだ。

「?!い、いきなりどうしたんだよ遊華」

「あ、アハハハ、失礼しました…シンクロコースの首席の中に、海外へ留学したっていう人がいるの、覚えてる？」

「ん？ああ、確かそいつが留学して、次席の遊華が主席になったんだよな」

「その後筆記の結果の影響が響いて刃に主席持つてからたけどね」

「それは遊華が悪い…でもそんな話をする、ということはまさか…」

「うん…間違いない」

遊華がそこから先の言葉を言う前に…司会進行のニコが、状態を把握し、話し出す。

「えー、お待たせしました！ただいま遅刻していたもう一人の対戦相手が到着いたしましたので、今回の対戦者、両名を紹介いたします！まずは梁山泊塾所属！梅杉剣選手!!そしてもう1人、様々な諸事情が重なったことにより遅刻しましたが無事到着。そしてその名は

……赤馬零奈——!!!」

「赤馬零奈、私の目標で、ライバル」

「…でも妙ね…海外に留学していた人が帰ってくるなんて話しは聴いてない、それに日本での成績は」

「多分、一番最近あったLDS主催のアメリカのほうの規模の大きい大会で優勝したこともあるからじゃないかな…：…つと。…あ、ほら。この大会確か、アメリカ版ジュニアユース選手権だよ」

「なるほど…：…ユースクラスでもいいかもしれないけど、海外の成績はともかく、日本での成績は止まつてるからジュニアユース…」

「うーんそこは分かんないかな…」

遊華達がそんな感じの会話をしている頃、ヘリコプターは零奈、そしてもう一人女性が降りた後に上昇、会場から飛び去った後…梅杉と零奈は、対峙していた。

「遅れてしまい、申し訳ありませんでした…不幸に不幸が重なり、このような結果に…」

「言い訳はどうでもいい。てつきり怖くなり逃げ出したのかと思ったぞ」

「…いいえ、デュエルにおいて、逃げ出すわけにはいきません。…そして、兄様の名にかけてこのデュエル…必ず勝利してみせます」

「いや、このデュエルはオレが勝つ!」

「では参りましょう!アクションフィールド、大発動!」

ニコが宣言し、リアルソリッドヴィジョンの投影機が起動、それによりフィールドは…：…赤茶色で岩が辺りに転がり、所々炎が噴き出すフィールドに変わる。

「行くぞ!戦いの殿堂に集いしデュエリスト達が!」

「モンスターと共に、地を蹴り宙を舞い」

「フィールド内を駆け巡る!」

「見よ、これぞデュエルの最強進化系」

「アクション…」

「デュエル!」



剣 LP 4000

零奈 LP 4000

「先攻はオレだ！オレのターン！ライフを1000ポイント支払うことで、手札から電将星 トドロキを特殊召喚！」

剣 LP 4000↓3000

フィールドに雷鳴が轟き、稲光が落ちる。…そして、フィールドに黄色い装束を着た戦士が現れる。

電将星 トドロキ ATK 2100

電将星 トドロキ 戦士族・効果 光属性 星6 ATK 210

0 DEF 0

①ライフを1000ポイント支払うことで発動できる。このカードを手札から特殊召喚する。

②このカードが破壊された場合、発動できる。墓地からこのカードを特殊召喚する。この効果で特殊召喚されたこのカードがフィールドを離れる場合、代わりにゲームから除外される。

「おおっと梅杉剣選手、いきなり自分で自分のライフを削る！この一手がデュエルにどう影響するのー!!」

「そして手札からモンスターを1体セット、これでターンエンド」

剣 手札2 LP 3000

モンスター 電将星トドロキ×1（攻）、セットモンスター×1

魔法・罠 なし

ターンを終えた梅杉。…そして、移動を始める。零奈のほうはとうと…。

「私のターン…ドロー！」

デュエル開始時からその位置を動いていない。アクションデュエルにおいて動くことは大事だ、動かないことを流儀の1つとするところもある。だが、彼女はLDS所属、LDSにそのようなルールなどない。

「…手札からチューナーモンスター、神秘の代行者 アースを召喚！」

アースは召喚に成功したとき、デッキから代行者1体を手札に加えます。この効果によりデッキから創造の代行者 ヴィーナスを手札に加えます。そして、カードを2枚伏せてターンエンド」

神秘の代行者 アース ATK 1000

フィールドに白い肌をし、銀髪の髪をした少女の天使が現れる。アースの名前からか、翼と服は青と緑が大部分を占める。そしてフィールドに2枚のセットカードが出現し、ターンを終了した。：開始時の位置から多少動いた程度であり、あまり動いてはいない。

零奈 手札4（創造の代行者 ヴィーナス） LP 4000

モンスター 神秘の代行者 アース×1（攻）

魔法・罠 セットカード×2

「ここまで互いに様子を見ている！だが梅杉剣選手のライフは3000、フィールドには攻撃力2100のモンスター1体とセットモンスター1体、それに対し赤馬零奈選手のフィールドには攻撃力1000のモンスター！セットカードは梅杉剣選手より多いとはいえ心細い攻撃力！」

「オレのターン、ドロー！……このタイミングでこのカードか：まあいい。オレは手札の沼地の魔神王を墓地へ捨て、効果発動！沼地の魔神王は手札から墓地へ捨てることで、デッキから融合を手札に加える！」

「ここで融合を手札に加えた梅杉選手！ということとはつまり！」

「さらに反転召喚、曙光の騎士！そしてここで魔法カード、融合を発動！フィールドの電将星 トドロキと、光属性、戦士族の曙光の騎士を融合！轟け電撃！曙とともに現れよ！融合召喚！雷将星ライジン！！」  
特徴的な融合の渦が現れ：梅杉が妙なポーズをとりながら口上を述べ：フィールドに、黄色い鎧を纏った武将が現れる。

雷将星 ライジン ATK 3000

雷将星 ライジン 戦士族・効果／融合 光属性 星10 ATK

3000 DEF 2200

「電将星 トドロキ」＋光属性・戦士族モンスター1体

①このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ戦闘ダメージを与える。

②このカードが破壊された場合、発動できる。フィールド上の表側表示のモンスター1体を破壊する。

「そしてフィールドから墓地へ送られた曙光の戦士の効果！このカードがフィールドから墓地へ送られたとき、デッキから光属性モンスター1体を墓地へ送る。タスケナイトを墓地へ送る！さあバトルだ！雷将星 ライジンで、アースを攻撃！」

「！っ」と

「！そんなところにアクションカード…だが！」

ライジンの攻撃宣言した瞬間、零奈が後ろに軽く退く……零奈の足元の地面には窪みがあり、その中にはアクションカードがあった。…それを取ろうとした零奈、だが…。

「イヤアアアアッ！」

「！よっ、つと…危ないですね」

「だがアクションカードは手に入れ…！これは、アクショントラップ…アクショントラップ、火柱。自分の炎属性モンスター以外のモンスターの攻撃力を、300ポイントダウンさせる…だと！」

火柱 アクション罠

①このカードを発動したターンの終わりまで、自分フィールド上に存在する炎属性モンスター以外のモンスターの攻撃力を、300ポイントダウンさせる。

雷将星 ライジン ATK 3000↓2700

「ぐっ…」

零奈 LP 4000↓2300

「これは痛いダメージ！アクションカードによりダメージは少しだけ軽減したとはいえ、赤馬零奈選手、ライフを半分近く削られたー！」

「…うわー、相変わらずずっとところかな」

「?相変わらず…っていうと?」

零奈がダメージを受けたとき、観客席の遊華はそう呟いた。…無論、その言葉に対して疑問を抱かないわけがない刃、北斗、真澄は…。「いや、零奈…運悪いんだ。パックをいくら買っても欲しいものは当たらず、諦めた直後にパックを買った人が、自分が欲しいカードを当てた、よく犬に吠えられる、大会には遅刻しかける…って感じで。でも、デュエル中はそんな不幸な感じはあんまりないんだよね…:アクションカードを除いて」

「?どうしてアクションカードは除かれるんだ?」

「取ってもほぼアクショントラップで、こつちにとつて嫌な効果しか与えないものばかりだから」

「あー……」

「不幸ねそれは」

「不運だね…」

「そんなことが続いたからか、基本的に自分が取ろうとするアクションカードはアクショントラップだから取らないようにしようっていう考えを持つてるけど…もしかしたら、それを逆手に取ったのがさっきのかも」

「なるほど、それはそれで戦術の1つとしても十分使えるな」

「戦術のために不幸になりたくないわ」

と、そんな会話を遊華達がしているのを知る由もないフィールドの2人。

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ!このエンドフェイズ、ライジンの攻撃力は元の3000に戻る!(さあ攻撃してこい…セットカードは魂の一撃、これで返り討ちだ)」

雷将星 ライジン ATK 2700↓3000

剣 手札2 LP 3000

モンスター 雷将星 ライジン×1(攻)

魔法・罨 セットカード×1

「…では、私のターン…ドロー…手札からヘカテリスを墓地へ送り、効果を発動します。このカードは手札から墓地へ送ること、デッキから神の居城―ヴァルハラを手札に加えられる。そして手札に加えた永続魔法、神の居城―ヴァルハラを発動します！そして神の居城―ヴァルハラは1ターンに1度、自分フィールド上にモンスターが存在しないとき、手札から天使族モンスター1体を特殊召喚できます！創造の代行者 ヴィーナスを特殊召喚します！」

荒れた灼熱のフィールドに、光が差し込む。そして空から光の中を通り、黄色い女型の姿をした天使が現れる。

創造の代行者 ヴィーナス ATK 1600

「創造の代行者 ヴィーナスの効果発動！ライフを500支払うことで、デッキ、手札から神聖なる球体を特殊召喚できます！この効果は、ライフさえあれば1ターンに何度でも発動できます！この効果を合計3回使い、デッキから3体の神聖なる球体を特殊召喚します！」

「！自らライフを…(ここまで削られては、魂の一撃が意味をなさない！)」

零奈 LP 2300↓1800↓1300↓800

ライフを大幅に削り、現れたのは3体の光る球体。レベルは低いが、それでも十分だ。

神聖なる球体×3 DEF 500

「なななんと！赤馬零奈選手、ここで一気にライフを、1500ポイントも自ら削り、3体のモンスターを特殊召喚！同じモンスター、ということ、レベルは同じ！エクシーズ召喚が可能となったー！」  
「だがレベルは2、例えエクシーズ召喚したとしても呼び出せるのは精々ランク2…その程度では倒すことはできない」

「その程度…ですが私は、1度もエクシーズ召喚をするとは、言っていないよ。永続トラップ、強化蘇生を発動します！このカードは墓地のレベル4以下のモンスター1体を、レベルを1つ上げ、攻撃力、守備力を100ポイントあげて特殊召喚します！墓地のチューナーモンスター、神秘の代行者 アースを特殊召喚！」

神秘の代行者 アース ATK 1000↓1100 星2↓3

「おおつと！ここでチューナーモンスターが現れた！ということ  
は、シンクロ召喚なのかー!?」

「！チューナーだと……」

「私は、レベル3のヴィーナスとレベル2の神聖なる球体に、レベル3  
となった神秘の代行者 アースをチューニング！2つに別けられた  
力高め、1つの力となり光迸れ！シンクロ召喚!!」

アースが飛び、3つの歯車になり、その中に神聖なる球体とヴィー  
ナスが入り、5つの星になり、直列となつて……歯車から光が放たれる。  
現れたのは、緑色の宝石がついた金の装飾を纏った、ヘビのように細  
長い白いドラゴン。翼は純白の天使の翼が2対。

「レベル8、ライトエンド・ドラゴン！」

ライトエンド・ドラゴン ATK 2600

「…何を呼び出すかと思えば、2600……それぐらいならば、オレのラ  
イジンのほうがまだ上！」

「まだ終わっていませんよ。……墓地の創造の代行者 ヴィーナスを除  
外して手札から、このモンスターを特殊召喚します。……天空より炎を  
纏い光放て、マスター・ヒュペリオン!!」

再び光が差し込み……いや、光が差し込んでいる……のではなく、光  
を放ちながら……炎の翼をもって羽ばたき現れる、太陽の代行者にし  
て、代行者の長、マスター・ヒュペリオン。

マスター・ヒュペリオン ATK 2700

「それでも2700……まだまだこちらが上！」

「マスター・ヒュペリオンのモンスター効果、発動！墓地の天使族、光  
属性モンスター1体を除外することで、相手フィールド上のカード1  
枚を、破壊する！墓地の神聖なる球体1体を除外し、セットカードを  
破壊します！プロミネンス・フレイム！」

「くっ……」

マスター・ヒュペリオンの翼から、渦を巻く炎が放たれ、剣のセッ  
トカードに直撃、セットカードである魂の一撃を焼き尽くした。

「…セットカードより、ライジンを破壊したほうがよかつたのではな

いのか？」

「私は多少ではありますが臆病なほうでして…分かるほうより、分からないほうが怖いのです。手札から装備魔法、巨大化をライトエンド・ドラゴンに装備します。このカードは自分のライフと相手のライフがどうい状態かによつて、3つの変化をもたらします。今は私のほうが下回っています、よつて攻撃力は元々の2倍となります！」

ライトエンド・ドラゴン ATK 2600↓5200

「！攻撃力、5200だどー！」

「そして私はレベル2の神聖なる球体2体で、オーバーレイ！2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚！」

フィールドに現れた穴に、神聖なる球体が黄色い光になり、その中に飛び込む。そして中からは…岩のような肌色をした、ムキムキな人型モンスターが現れた。

「ランク2、ガチガチガンテツ！」

ガチガチガンテツ DEF 1800

「1ターンの間にシンクロとエクシーズ！これはあまり見られないぞー!!」

「ガチガチガンテツは自身のオーバーレイ・ユニットの数だけ、自分フィールドのモンスターの攻撃力、守備力を200ポイントアップさせます！今のガチガチガンテツのオーバーレイ・ユニットは2つ！よつて400ポイントアップする！」

「くっ…微弱ながら攻撃力を…」

ライトエンド・ドラゴン ATK 5200↓5600

マスター・ヒュペリオン ATK 2700↓3100

ガチガチガンテツ DEF 1800↓2200

「バトル。ライトエンド・ドラゴンで、雷将星 ライジンを攻撃！そして、ライトエンド・ドラゴンの効果発動！」

「やらせて、たまるかあ!!…！アクションマジック、奇跡！自分のモンスターは戦闘では破壊されず、戦闘ダメージは半分となる！」

「ですが、ライトエンド・ドラゴンの効果は、相手モンスターと戦闘を

行う場合、その攻撃宣言時、ライトエンド・ドラゴンの攻撃力、守備力を半分にすることで戦闘を行う相手モンスターの攻撃力、守備力をターンの終わりまで、1500ポイントダウンさせる！ライト・イクスパンション!!」

#### 奇跡 アクション魔法

①自分フィールド上のモンスター1体を対象に発動する。そのモンスターはこのターン、戦闘では破壊されず、戦闘ダメージは半分になる。

ライトエンド・ドラゴンの胴体にある装飾の宝石から光が放たれ、ライトエンド・ドラゴンとライジンを覆う。

ライトエンド・ドラゴン ATK 5600↓5100

雷将星 ライジン ATK 3000↓1500

「シャイニング・サブリメーション!!」

「ぐっ…うおおおー!」

剣 LP 3000↓1200

「はあ、はあ…ライジンの攻撃力は下がったが、戦闘ダメージは半分、このターンは凄いぞ」

「では、マスター・ヒュペリオンで、ライジンを攻撃…!」

「!アクションカードは取らせない!たあ!」

零奈が近くにアクションカードを取ろうとした瞬間、剣が瞬時に石を蹴り飛ばす、投げるといった妨害、その隙にアクションカードを取る。

「…ほう、今回はいいカードだ。アクション魔法、回避!これで攻撃を無効にする!!」

「…ターンエンド。このターンのエンドフェイズ、ライトエンド・ドラゴンの効果は終了、相手モンスターの攻撃力は元に戻ります」

雷将星 ライジン ATK 1500↓3000

零奈 手札1 LP 800

モンスター ライトエンド・ドラゴン×1 (攻)、マスター・ヒュペ



リオン×1（攻）、ガチガチガンテツ×1（守）OU×2

魔法・罫 永続罫「強化蘇生」×1、セツトカード×1、永続魔法

「神の居城―ヴァルハラ」×1

「行くぞ、オレのターン、ドロ―…どうやら、お前の命運もここまでのようだな」

「いいえ、まだ終わりません」

「いいや、これでお前の命運も尽きる！手札から速攻魔法、サイクロンを発動！巨大化を、破壊する！」

「！ライトエンドが…」

ライトエンド・ドラゴン ATK 5100↓2500

「魔法カード、融合回収を発動！墓地の電将星 トドロキと、融合を手札に加える！そして、融合を発動！手札のトドロキとフィールドのライジンを融合！轟け電撃！神雷と共に現れろ！融合召喚！雷将星ライジン！」

雷将星 ライジン ATK 3000

ライジンを融合素材に現れる、ライジン。…融合素材が光属性、戦士なのでこういうことも可能。

「融合モンスターを素材に融合召喚、しかし、いったいこれにどのような意味が…」

「分からないなら今教えよう。手札から魔法カード、死者蘇生を発動！墓地の雷将星 ライジンを特殊召喚する!!」

「…なるほど」

雷将星 ライジン ATK 3000

剣のフィールドに揃う2体のライジン。…そしてライジンは、守備貫通を持っている。

「ここで2体の雷将星 ライジンが、梅杉剣選手のフィールドに並んだ―！」

「バトル！雷将星 ライジンで、ガチガチガンテツを攻撃！ライジンは守備表示モンスターを攻撃するとき、その守備力を攻撃力が上回っていれば、貫通ダメージを与える！くらえええ！」

「…ダメージを受ける際にトラップカード、ガード・ブロックを発動し

ます！この効果で戦闘ダメージを0にし、デッキからカードを1枚ドロ―します」

ライジンの一撃がガチガチガチを貫き、破壊する。……ガチガチガンテツはオーバーレイ・ユニットを取り除くことによって破壊を免れる効果も持っているが、今回はそれを使わずに…。

ライトエンド・ドラゴン ATK 2500↓2100

マスター・ヒュペリオン ATK 3100↓2700

「マスター・ヒュペリオンも攻撃だ!!」

「くっ…」

零奈 LP 800↓500

マスター・ヒュペリオンも失う、という事態になった。だが、ガチガチガンテツが残っていた場合は守備力が下がり、その後にもまた攻撃され、さらなるダメージを受けてしまう。最初の攻撃の時点でジャストキルとなるぐらい。2回目を受けてしまったら…敗北は避けられない。

「赤馬零奈選手大ピンチ！今のライトエンド・ドラゴンの攻撃力では効果を使用しても、僅かなダメージしか与えられない！このまま決まってしまうのかー！」

「これでターンエンドだ。例え次のターン、ライトエンド・ドラゴンで攻撃し効果を発動しても、オレのライフは残る！（例えライフが0になるような攻撃力を出したとしても、墓地のタスケナイトの効果で無効にできる）」

剣 手札0 LP 1200

モンスター 雷将星 ライジン×2（攻）

魔法・罫 なし

「…私のターン、ドロ―…手札から魔法カード、アドバンス・ドロ―を発動します。フィールドのライトエンド・ドラゴンをリリースし、デッキからカードを2枚ドロ―します」

「ライトエンドを…なるほど、ヴァルハラのためと、手札を増やすためか」

「…神の居城―ヴァルハラの効果を発動し、手札からチューナーモン

スター、死の代行者 ウラヌスを特殊召喚します」

光と共に現れたのは、冷たく黒に近い灰色の肌をした、青い髪のア使。その翼は、冷たく暗い青に染まり、容姿や衣服、そして持つ杖からも他の代行者とは明らかに、異質であった。

死の代行者 ウラヌス ATK 2200

「死の代行者 ウラヌスの効果を発動します！デッキから裁きの代行者 サターンを墓地へ送り、ウラヌスのレベルを、サターンのレベルと同じにします！サターンのレベルは6、よってレベルは6となります」

「ほう…レベルの変更か。だがどんなモンスターが来ようと、オレの勝ち揺るがない！」

死の代行者 ウラヌス 星5↓6

「手札から勝利の導き手フレイヤを召喚！フレイヤはフィールドにいるとき、天使族モンスターの攻撃力、守備力を400ポイントアップさせます！」

さらに現れたのは、ボンボンを持った青い髪の、女の天使が現れた。そして応援を始め、ウラヌス、フレイヤに光が纏われる。

勝利の導き手フレイヤ ATK 1000↓500

死の代行者 ウラヌス ATK 2200↓2600

「私はレベル1のフレイヤに、レベル6のウラヌスをチューニング！」  
ウラヌスが飛び6つの歯車に変わり、その中にフレイヤが入り、1つの星になる。

「黒鋼の起動を響かせ、重音を轟かせ戦場に出撃せよ！シンクロ召喚！レベル7、ダーク・ダイブ・ボンバー！」

歯車から光が放たれ、現れたのは…オレンジ色のボディをした爆撃機を模したようなモンスター。

ダーク・ダイブ・ボンバー ATK 2600

「おおっとここで現れたモンスターは、今まで赤馬零奈選手の使っていたモンスターとは打って変わって、機械族、それも戦闘機のような人型ロボットだー！」

そしてこのモンスターを見たシンクロコース所属の刃と遊華は…。

「あ、これ勝ったんじゃね？」

「アクションカード取って、それ次第だね」

「?何、もう勝利確信？」

「あのカード、そんなにすごいのかい？」

「すごいなの…あのカード、一時代を築いたカードなんだ」

「え？」

「一時代…を？」

「ああ。シンクロコースじゃ一時期、あのカードばっか目にした時期があるぐらいだ」

「って言っても、すぐに解決策が出たけどね」

「ダーク・ダイブ・ボンバーの効果！自分のターンのメインフェイズ1に1度、自分フィールドのモンスター1体をリリースすることで、リリースしたモンスターのレベル×200ポイントのダメージを相手に与えます！これにより、ダーク・ダイブ・ボンバー自身をリリース！」

「な、なんだと!!だが、まだ、アクションカードがある!たあ!」

瞬時に近くのアクションカードを取りに行き、そして取った。…だが。

「!くっ…このカードでは…」

「では…これで、終わりです」

ダーク・ダイブ・ボンバーが梅杉に突撃し、自爆。…ダーク・ダイブ・ボンバーのレベルは7、そして梅杉のライフは1200…そして、与えるダメージはリリースしたモンスターのレベル×200ポイント、なので…。

「ぐっ…うおおおおお!!!」

剣 LP 1200↓0

デュエルは終了、そしてそれによりフィールドは灼熱の荒野が通常のフィールドに変わる。

「…き、決まったー!残り僅か500にまで削り削られあわや敗北から逆転勝利を掴んだのは、赤馬零奈選手ー!!」

「ふう、なんとか勝てました…」

「くつ、おのれ…」

「…中々いいデュエルでした。…ですが、デュエルスタイルに関してはかなり荒っぽいですね…でも向こうにも荒っぽいデュエルスタイルの方は大勢いました。そして、あなたより強い人も、何人か」

「…弱いと言いたいのか？」

「そうですね…あなたが強いか弱いかは、もっとデュエルを重ねないと、分かりませんわ。…では、機会があれば、また」

「…いい、零奈はフィールドを後にした。」

「兄様、本日は遅刻してしまい、申し訳ありません」

「お前の不運は今に始まったことではないからな。南、向こうでの零奈はどうだった？」

「大体定期報告通りです。ただ出発前に近くで竜巻が起き、幸い空港に被害はありませんでしたが、出発時刻が大幅にズレました」

デュエル後、零奈は付添である女性…南と呼ばれた女性と共に零児のところに来ている。

「ですが…もっと早く、それでこそ昨日にでもアメリカを出発していればこんなことには…」

「その話しいい。では、さっそくだが零奈…あるデッキを使ってもらいたいんだ」

「…？あるデッキ？」

「どのようなデッキでしょうか…私も気になります」

零奈、南共々どんなデッキか気になる。…どちらもデュエリストであるため、気になるのは当たり前だ。

「ああ…どうだ？」

「構いませんが…ある程度改造はさせてもらいます」

「構わない。…だが、デッキに関しては種族こそ同じだが使い方は大きく違う」

「では、その実物は？」

「また後で渡す」

「分かりました」

## 第17話 次へ向けて

舞網チャンピオンシップは、順調に進んだ。

「いけ、セイクリッド・トレミスM7!」

北斗は余裕を持って勝利。受けたダメージもそれほどなく、圧勝と言っても過言ではないだろう。…もつとも…この圧勝、そしてエクシーズを使ったということ、今このデュエルを見たある少女に目をつけられるとは、このときは誰も思っていなかった。

そして大会1回戦最終日の最後のデュエル…刃の、デュエルである。…相手は梁山泊塾所屬にして、現在トップクラスの實力を持つ闘英雄。その結果は…。

「てりやあああ!」

「うお!」

アクションカードを、荒っぽい方法で取られては適切な場面で消費され…。

「ホワチョー!!」

「わ!のああ!」

そして、最後には…。

「覇将星 イダテンで攻撃!」

「う、うわあああああ!」

結局碌にダメージを与えられず、刃は敗北した。

「刃大丈夫!?!」

「いっつつつ…まあ大丈夫っちゃ大丈夫なほうだけだよ…」

「結構痛そうに見えるけど?」

「直接当たってはいないし、触っていないとは言っても、間接的に転ばせてたからね」

そう、勝鬨に関しては、アクションカードを奪う際もそうだが、それ以外でも、刃を何らかの手段を持って間接的に転ばせる。…相手に触ることに関しては、現在は禁止されており、それに伴いアクション

フィールドにあるものを利用して相手を攻撃することも禁止されている。

「…あいつ許さない…私が必ず倒して、あんなデュエル間違ってるって教えて、そして刃の敵を取る！」

「お、おう…なんだか気合入ってるな」

「それと北斗、今後危ないことをしたら絶交だから」

「え?!なんでいきなり!?!」

「榊遊矢とのデュエル、やり方は違うけどあの勝鬨英雄ってヤツと同じようなこと、やったからじゃない?」

…ちなみに言うと、その勝鬨英雄の対戦相手は…榊遊矢である。

「ぶく…」

「ほら落ち着きなさい遊華。そんなふうにしたって変わらないわよ」

「なんだか納得いかないく!」

そして、勝鬨と対戦することが分かった遊矢はというと…。

「勝鬨、お前のデュエルは間違ってる!明日お前とデュエルして、お前のデュエルが間違っていることを証明する!そして、必ず笑顔にしてみせる!」

…と、宣言した。勝鬨にしっかりと見える範囲で、堂々と。

そしてその日の夜、遊矢の自宅では…。

「…明日は、勝鬨と…」

と、自室で考え事をしている遊矢。明日のことと考えているようだ。

「…笑顔にするって宣言したけど、どうするか…あいつ、そんな簡単に笑顔見せるような感じじゃないからな…:…ギヤグ…蹴られそうだな…顔芸…ダメかな…やっぱり、デュエルでどうにかして笑顔にしないとな…」

…と、試行錯誤。そんな中、ドアをノックする音が聞こえ…ユーキの声が聞こえた。

「遊矢くん、入っていいですか?」

「ん?ああ、大丈夫」



ドアが開き、ユーキが中に入る。

「…遊矢くん、どうです？調子は」

「…少し、悩んでて。明日、勝鬨をどう笑顔にしようか…って」

「笑顔…つまり、エンタメデュエル、ですね」

「ああ。ほら、勝鬨簡単には笑顔にならなそうな感じがあるから…デュエル以外でもって、少し考えたけど、どれも効果が薄いと思って」

「…うーん…でも、エンタメって難しいんですね」

「え？」

ユーキの言葉に、思わず少し驚いた表情をする遊矢。

「だって、人を笑顔にするには、同じことを続けていたら人は厭きるかもしれない、だからドンドン新しいものを考えていく。…きつとエンタメって、研究していくもの…なんでしようね。…あ、もちろん長く愛され続けるものだってあると思いますけど」

「研究していく…」

「はい…私の父が研究者でして、そんな父の話しや過去の活躍を見たり聞いたりしていましたので。…技術を進歩させるには、研究して、新しいものを発見していく。…そういう意味では、遊矢くんは今のエンタメじゃない、別のエンタメを見つけるのもいいかもしれませんね」

「別の？父さんのじゃなくて、別のエンタメデュエルを？」

遊矢は今まで、父親である榊遊勝のエンタメデュエル、それを目指し進んでいた。…それも十分いいだろう。だが…。

「…はい。確かに先人達の残したものは、偉大なものが多いです。様々な研究、それによって得られた成果など、きつと華やかです。…でも、それじゃ、それで止まったらきつと、ダメなんです」

「…それって、父さんのエンタメデュエルが古いつてことか？」  
「それは分かりません。でも…私たちは先人達の残したものが土台となり、今を生きています。そして、今を生きる人達が新しいものを生み出し、それが後生の人達の何らかの形で土台になる。…世界ってきつと、そんな感じで成り立っているんだと思います」

まあ、今考えたんですけどね…と、ユーキは少し笑って付け加え

た。…遊矢はというと、ユーキの言葉に、目を丸くしていた。

「…土台…か」

「…はい。…遊矢くんのお父さんがすごい人で、しっかりとした土台になるなら、遊矢くんはその土台から、さらにしっかりとした土台を作る。そして、より多くの後生の人達が遊矢くんを土台にする…でも、そのためにはまず、遊矢くん自身のエンタメデュエルを考えないと」  
「オレ自身の…か。……父さんのエンタメデュエルを引き継ぐことばかり考えてたから、考えたことなかったな」

「まずは焦らずゆっくり考えましょう。…土台には、遊矢くんのお父さんのエンタメデュエルがあるんです、しっかりと考えればきつとうまくいきます」

「よし…遊華、デツキ調整手伝ってくれないか？」

「いいですよ」

そして、デツキ調整をある程度し、遅くならないうちに2人とも眠りについた。…特に遊矢はその日の一番最初。早めに寝ないと寝坊しかねない。そして、翌日…舞網チャンピオンシップ第2回戦、第1試合…。

「さあ〜舞網チャンピオンシップ第2回戦！第1試合は、榊遊矢選手 VS 勝鬨英雄選手だー！」

フィールドに入場してくる遊矢と勝鬨。そして中央付近まで行く

と  
「…勝鬨、よろしくな」

といい、握手をしようと手を差し出す遊矢。だが…。

「…何の真似だ」

「え？いや、デュエル前に握手しようと思って」

「そんなことは必要ない。自分は馴れ合うために、ここにきたわけではない」

「そ、そうか？……じゃあ、終わった後で握手しような」

遊矢のその言葉に勝鬨は返事をするのではなく、距離を取る。

「…自分は1度、お前にあったことがある」

「え？」

「自分とお前は違う。光を歩んだお前に、闇を歩んできた自分は負けない。負けるわけには、いかない」

「勝鬨…」

「では参りましょう！アクションフィールド、仙界竹林、セット!!」  
リアルソリッドヴィジョン投影機が起動し、フィールドが大きく変わり：竹林が広がる岩場へと変わる。ところどころに小さな霞が生じている。

「行くぞ…戦いの殿堂に集いしデュエリスト達が！」

「モンスターと共に地を蹴り、宙を舞い」

「フィールド内を駆け巡る！」

「見よ、これぞデュエルの最強進化系」

「アクション!!」

「デュエル！」

遊矢 LP 4000

勇雄 LP 4000

「ではさつそく…レディースエーンドジエントルメーン！会場の皆様、本日はご来場ありがとうございます！私のデュエルは、本日は1度きり、それが少し残念ですが…ミスター勝鬨とのデュエル、白熱とした熱さも兼ね備えたエンタメデュエルにしてみせましょう！」

早々に宣言する遊矢。今のところ、まだ自分のエンタメデュエルというものをしっかり見いだせてはいない。だが、それでも前に進む。

「それでは私のターン…カードを2枚セット、さらに手札からスケール4のオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを、ペンデュラムゾーンにセッティング！」

遊矢がオッドアイズを発動し、フィールドに光の柱が現れその中にオッドアイズが浮かぶ。その下には4という数字がでている。

「さらに手札から、カードカー・Dを召喚！」

カードカー ATK 800

遊矢のフィールドに現れたのは…青いラジコンカーであった。それも、通常サイズの。

「攻撃力800…なにを企んでいる」

「エンタメデュエルを続けるには、準備が必要となります。このカードカー・Dは、その準備には打ってつけ！カードカー・Dの効果！このカードをリリースすることで、デッキからカードを2枚ドロウします！」

「何っ、モンスターをリリースするだけで禁止カードの強欲な壺と、同じ効果だど!？」

「ただしこの効果には中々大きなデメリットがあり、この効果を発動した場合、私のターンはその時点で強制的に終了となります。これにてターンエンド。そしてこの瞬間、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの、ペンデュラム効果が発動します！エンドフェイズのこのカードを破壊し、デッキから攻撃力1500以下のペンデュラムモンスター1体を、手札に加えます！私はデッキから、時読みの魔術師を手札に加えます！」

遊矢 手札4 (時読みの魔術師) LP 4000

モンスター なし

魔法・罫 セットカード×2

「…自分のターンを終了させてまで2枚ドロウ…だが構わない。自分のターン、ドロウ…このカードは、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、リリースなしで召喚できる。現れる、天将星 ハヤテ！」

天将星 ハヤテ ATK 2100

天将星 ハヤテ 戦士族・効果 地属性 星5 ATK 2100

DEF 0

①自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードはリリースなしで召喚することができる。

②自分フィールドにこのカード以外のモンスターが存在しない場合、発動できる。1度だけ相手モンスターの攻撃を無効にできる。

藍色の鎧を纏い、狼の頭の部分の毛皮を使ったと思われるフードをつけた戦士が現れる。

「バトル！天将星ハヤテで、ダイレクトアタック！」

「残念ですが、その攻撃を通すわけにはいきません！リバーズカード、オープン！永続トラップ、EMピンチヘルパー！相手のダイレクトアタック宣言時に発動でき、その攻撃を無効にし、デッキからEM1体を、効果を無効にして特殊召喚します！この効果でデッキから、EMシルバー・クロウを特殊召喚！」

EMシルバー・クロウ DEF 700

ハヤテの攻撃が防がれ、シルバー・クロウが呼び出される。

「自分はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

勇雄 手札4 LP 4000

モンスター 天将星ハヤテ×1 (攻)

魔法・罠 セットカード×1

デュエルはまだ始まったばかり…さあ、どうなる。

## 第18話 覇者たる星VS新たな眼

フィールドの状況

アクションフィールド：仙界竹林

遊矢 手札4（時読みの魔術師） LP 4000

モンスター EMシルバー・クロウ×1（守）

魔法・罨 「EMピンチヘルパー」×1、セットカード×1

勇雄 手札4 LP 4000

モンスター 天将星ハヤテ×1（攻）

魔法・罨 セットカード×1

「では参りましょう！私のターン、ドロー！…（あそこにアクションカード…ここは…）」

「ほわちよー！」

「！つとつと…危ない危ない…」

勝鬨が遊矢の視線を追い、アクションカードがあるのを見て瞬時に動き、いつものように相手に対しラフプレーを仕掛ける…が、遊矢はそもそも取る気がなかったのか、あつさり退く。その隙…と言っているのか分からないが、勝鬨はそのアクションカードを手に入れる。

「アクションカードは取られましたが、まだまだこれから！手札からスケール2の法眼の魔術師を、ペンデュラムゾーンにセットイングし、EMドクロバット・ジョーカーを召喚！」

EMドクロバット・ジョーカー ATK 1800

光の柱が現れ、その中に先端が大きな円錐状になっている杖を持つ、屈強な体をした魔術師が浮かび、下に2が現れる。そして遊矢が召喚したのは道化師のようにも見える黒い服を来た魔法使い。継ぎ接ぎのドクロを模したシルクハットを手に持ち降ろし、お辞儀をして再び被る。

「EMドクロバット・ジョーカーは召喚に成功したとき、デッキから

オッドアイズ、魔術師、EMのペンデュラムモンスターを、いずれから1体だけ手札に加えることができる頼もしい仲間！この効果で私はデツキから、EMトランプ・ウィッチを手札に！さらに手札からスケール1の星読みの魔術師を、ペンデュラムゾーンにセツティング！」

もう一つ光の柱が浮かび、その中に星読みが浮かび、下に1が現れる。…これでペンデュラムゾーンには、2枚のカードが揃った。

「ただいまセツティングされているペンデュラムスケールは1と2、これではペンデュラム召喚は行えません…ですが、法眼の魔術師の、ペンデュラム効果！手札のペンデュラムカードを公開し、自分のペンデュラムゾーンにある魔術師ペンデュラムモンスター1体のペンデュラムスケールを、エンドフェイズまで公開したペンデュラムモンスターのペンデュラムスケールと同じにする！私はスケール8の時の読みの魔術師を公開し、法眼の魔術師のスケールを8に！」

法眼の魔術師 Pスケール 2↓8

法眼の魔術師の下の数字が2から上がっていき、8で止まる。

「そしてこれにより、レベル2から7のモンスターが、同時に召喚可能となります！揺れる、魂のペンデュラム！天空に描け光のアーク！ペンデュラム召喚！こい、オレのモンスター達！」

巨大な振り子が、フィールドにある光の柱の間を揺れ…そして、空に穴が開き、その中から…2つの光が、フィールドに落ちる。

「エクストラデツキより、私の現エース！雄々しくも美しき二色の眼、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン！そしてもう1体！手札より、私の元祖エース！元祖世にも珍しき二色の眼を持つ竜、オッドアイズ・ドラゴン！」

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK 2500

オッドアイズ・ドラゴン ATK 2500

フィールドに現れたのはオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン。そしてもう1体…オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンが細くなつた…否、進化前と言うべきか…そういうべきモンスター…そう、オッドアイズ・ドラゴン。ちなみに遊矢はそもそも、オッドアイズ・ドラゴンは2枚持っていたのだが、そのうち1枚がオッドアイズへと変化したのに対し、こちらにはまったく変化がない。

「おっとここで榊選手、ダブルオッドアイズだー！元祖エースのオッドアイズ・ドラゴンに、現エース、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン！ここに2大エースが揃ったー！」

「さらに手札からEMトランプ・ウィッチを召喚！」

EMトランプ・ウィッチ ATK 100

フィールドに現れたのは、少しだけ継ぎ接ぎのある青い服を着た女の子。手には骨が×字に交差したところに、×字の目をしたドクロが重なった装飾が先端についている杖を持っている。

「本来ならばペンデュラム効果のほうにしたいところですが…星読みは片方のペンデュラムゾーンのカードが魔術師でなければ、スケールが変わってしまい、ペンデュラム召喚が難しくなります。ですが今回は、モンスター効果を発動させてもらいます！というわけで、EMトランプ・ウィッチの効果！このカードをリリースすることで、デッキから融合を手札に加えます！」

「融合をサーチ…くるか」

トランプ・ウィッチが消え、遊矢は融合を手札に加える。…トランプ・ウィッチには、フィールド融合を可能とするペンデュラム効果があるのだが、時読み、星読みのデメリットのせいで今回はそれが使えない。…レベル1でペンデュラムモンスターであるが故に再利用は難しい。

「手札から魔法カード、融合を発動！フィールドのドクロバット・ジョーカーとオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを融合！軽やかに舞う道化師よ、龍の眼に宿り新たな力を呼び起こせ！融合召喚！」



融合の渦にドクロバット・ジョーカーとオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンが飲み込まれ、混ざりあう。そして…。

「出でよ、秘術ふるいし魔天の龍、ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン！」

ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK 3000

フィールドに現れたのは、大きなわっかがついたオッドアイズ。鋭利な部分が減り、全体的に丸っこい。また片目は義眼かそれともこれが普通の目かは分からないが、不思議な目をしている。

「さらにフィールドのEMシルバー・クロウと、オッドアイズ・ドラゴンを素材とする！誇り高き銀狼よ、二色の眼持つ竜と一つとなりて新たな力生み出さん！融合召喚！出でよ、野獣の眼光し獰猛なる竜、ビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴン！」

ビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK 3000

不意に融合の渦が現れ、オッドアイズとシルバー・クロウがその中に入り、混ざりあう。そして現れたのは、全身に骨のようにも見える外殻を纏ったオッドアイズが現れる。そして勝鬨は…。

「何?!融合召喚とは、融合、もしくはその系統に含まれる特定のカードを使わなければできないのではないのか?!」

「私のビーストアイズには、素材となる闇属性、ドラゴン族モンスターと獣族モンスターをフィールドから墓地へ送ることで、専用のカードなしで融合召喚が可能となります！」

「なんだと!!」

「では、バトル！ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴンで、天将星ハヤテを攻撃！光輪のシャイニー・バースト！」

ルーンアイズの輪にある三か所ある窪みのうち2つに光の玉が現れ、そのうち一つから光線が放たれる。

「だが…ハヤテの効果…このカード以外のモンスターが自分フィール

ド上に存在しない場合、相手モンスターの攻撃を、無効にする！」

ハヤテがルーンアイズの攻撃をかわそうとした：が。

「ですが、ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴンは、ペンデュラム召喚を行ったフィールドのモンスターを融合素材にしたら、そのターンは相手のカード効果を受け付けない！」

「なんだと?!」

「シャイニー・バースト！」

ルーンアイズの攻撃が早く、まともにその攻撃を受けたハヤテは破壊される

勇雄 LP 4000↓3100

「ぐっ…おのれ…」

「そしてビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴンで、ダイレクトアタック！激動のヘルダイブ・バースト！」

「だが…アクションマジック、回避！この効果で自分は、ビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの攻撃を無効にする！」

ビーストアイズの攻撃を、勝鬨は後ろに飛んで軽やかに回避した。

「それではカードを1枚伏せて、ターンエンド！このエンドフェイズ、法眼の魔術師のペンデュラム効果は切れ、スケールは元の2に戻ります」

法眼の魔術師 Pスケール 8↓2

遊矢 手札1（時読みの魔術師） LP 4000

モンスター ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン×1（攻）、ビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴン×1（攻）

魔法・罠 「EMピンチヘルパー」、セットカード×2

Pゾーン 法眼の魔術師：2 星読みの魔術師：1

「くっ…自分のターン、ドロロー…自分手札から、召喚僧サモン・プリーストを召喚！サモン・プリーストは召喚したとき、守備表示になる」

召喚僧サモン・プリースト ATK 800 ↓ DEF 160

「サモン・プリースト：確か魔法カードを1枚捨てて、レベル4のモンスターを1体、デッキから特殊召喚するカード：でも何を…」

「自分はさらに進化するだけだ。サモン・プリーストの効果！手札1枚を捨てることで、デッキからレベル4のモンスター1体を特殊召喚する。現れる、変将星ヘンゲ！」

墓地へ捨てたカード：融合

変将星 ヘンゲ 戦士族・効果 星4 闇属性 ATK 1500  
DEF 1000

①このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、発動できる。手札から「将星」モンスター1体を特殊召喚する。

②1ターンに1度、属性を1つ宣言して発動できる。このカードの属性は、その属性になる。

③1ターンに1度、墓地の「将星」モンスター1体を対象に発動できる。そのカードをゲームから除外し、このカードの名前を、そのカードと同じにする。

変将星 ヘンゲ ATK 1500

「ヘンゲは特殊召喚時に効果が発動できるが、自分は発動しない。そして自分はトラップカード、融合準備を発動！エクストラデッキの覇将星 イダテンを公開し、融合素材として指定されている天将星 ハヤテを、デッキから手札に加える！」

覇将星 イダテン 戦士族・効果／融合 地属性 星10 ATK 3000 DEF 2200

「天将星 ハヤテ」＋地属性、戦士族モンスター1体

①このカードがこのカードのレベル以下の相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時に発動する。その相手モンスターの攻撃力は、

そのダメージ計算時のみ0になる。

②このカードが破壊された場合、発動できる。自分の墓地から融合モンスター以外の「将星」モンスター1体を特殊召喚できる。

「さらに墓地の融合を1枚、手札に加えることができる」

「これは…どうやら、これはピンチになるかもしれませんがね」

「…そして、ヘンゲの別の効果を発動！属性を1つ宣言することで、その属性となる。自分は地属性を宣言！」

「属性を宣言…これで融合が可能になる、というわけですね」

「その通りだ。手札から魔法カード、融合を発動！手札の天将星 ハヤテと、地属性の戦士族、H・Cサウザンド・ブレードを融合！天駆ける疾風！千の剣と重なり！悠久の覇者たる星と輝け！」

奇妙なポーズをし、融合宣言をする勝鬨。…無論、融合の渦にハヤテと背中に無数の武器を背中に携えた…生えているようにも見えるが…白い服を着ているお坊さん…にも見えなくもないモンスターが入る。え？なんでお坊さんか？モチーフとなった存在が存在だからだ。

「融合召喚！出陣せよ、覇将星 イダテン!!」

覇将星 イダテン ATK 3000

融合の渦から紫の鎧を纏った青いズボンを持つ…三国志をモチーフとするゲームに出てもおおかしくないような覇者たる将軍が、現れる。

「やっと現れたな、イダテン…」

「そして自分のフィールドに地属性の将星と名のついたモンスターが存在することで、手札の地将星テンマを特殊召喚する！」

地将星 テンマ 戦士族・効果 地属性 星5 ATK 2100  
DEF 0

①自分フィールド上に「将星」地属性モンスターが存在する場合、こ

のカードは手札から特殊召喚することができる。

②このカードが特殊召喚された場合、墓地にある「融合」魔法カード、もしくは「フュージョン」魔法カード1枚を対象に発動することができる。そのカードを手札に加える。

「地将星 テンマの効果発動！このカードが特殊召喚された場合、墓地の融合と名のついた魔法カードを1枚、手札に加える。自分は融合を手札に加える！」

「！まさか、もう1度……」

「そうだ。そしてヘンゲのさらなる効果！墓地の将星モンスター1体を除外し、そのモンスターと同じ名前になる！自分はハヤテを除外し、ヘンゲをハヤテにする！」

「！もう1体来る……」

ヘンゲの背後に、半透明のハヤテが浮かぶ……背後霊、というものと思っただろう。どう見ても。

「そして手札から魔法カード、融合を発動！フィールドのハヤテとなっているヘンゲと、地将星 テンマを融合！天駆ける星！地を跳び！今1つとなって悠久の覇者たる星と輝け！融合召喚！出陣せよ、覇将星 イダテン！」

覇将星 イダテン ATK 3000

先ほどと同様のポーズで融合宣言、そしてイダテンが現れる。これでイダテンは2体……遊矢のフィールドのモンスターと、同じになった。

「バトル！覇将星 イダテンで、ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを攻撃！イダテンはバトルするとき、そのモンスターのレベルがこのモンスターのレベル以下なら、その攻撃力を0にする！」

「！くっ……アクションカード……」

「！たあ！」

「つと！」

イダテンがルーンアイズに向かって突撃していく。そして遊矢はアクションカードを見つけるが、勝鬨が瞬時に反応、足元の石を蹴る。当たらないコースにはなっていたが、反射的に遊矢はかわしてしま

う。

「いけ、イダテン！ 覇者天地突き!!」

そしてイダテンが槍を使いルーンアイズを上へと思いつき突き上げ宙に浮かせる。

ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK 3000↓0

そして素早く飛び、ルーンアイズと並び…槍をルーンアイズに叩きつけ、地面へと叩き落とす。衝撃により、土埃が発生する。

「ルーンアイズ！ くっ…：…トラップ発動、ガード・ブロック！ 相手がターンに発生する自分への戦闘ダメージを0にし、デッキからカードを1枚ドロウする！」

衝撃波は遊矢の周りに展開されたバリアによって防がれた…が、モンスター破壊までは防げない。

「もう1体のイダテンで、ビーストアイズを攻撃！ 覇者天地突き！」

「くっ…：EMピンチヘルパーの効果！」

ビーストアイズも、ルーンアイズ同様、イダテンによって突き上げられ、宙に浮かされる。

ビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK 3000↓0

そしてビーストアイズもなすすべもなく…地面へと、叩きつけられ…土埃が発生する。

「これでお前のライフは…ん？」

「…EMピンチヘルパーは、自分のモンスターが相手モンスターと戦闘を行う場合の攻撃宣言時に墓地へ送ることで発動でき、その戦闘で発生するダメージを0にします」

「しづとい…：自分はこれで、ターンエンド」

勇雄 手札1 LP 3100

モンスター 召喚僧サモンプリースト×1(守)、覇将星 イダテン  
×2(攻)

魔法・罨 なし

「オレのターン…ドロー！くっ…法眼の魔術師のペンデュラム効果！  
法眼の魔術師のペンデュラムスケールを、手札の時読みの魔術師と同  
じにする！」

法眼の魔術師 Pスケール 2↓8

「リバースカード、オープン！トラップカード、ペンデュラム・ターン  
！自分のペンデュラムゾーンに2枚のペンデュラムカードがセッ  
ティングされている場合、そのスケールでペンデュラム召喚可能なモ  
ンスターを2体、墓地から手札に加えます！ペンデュラムゾーンのス  
ケールは法眼の魔術師の8、星読みの魔術師の1、2から7のモンス  
ターがペンデュラム召喚可能の範囲となっています。私は墓地の、レベ  
ル2のカードカ・Dとレベル7のオッドアイズ・ドラゴンを手札に加  
えます！そして手札に加えたカードカ・Dを召喚！」

再び現れるカードカ・D。…ここで勝負は1つ、疑問に思った。

「ペンデュラム召喚が可能なら、何故ペンデュラムで出さない？」

「残念ながらカードカ・Dのドロー効果は特殊召喚では発動できず、  
特殊召喚したターンに効果は発動できません。カードカ・Dの効果  
を発動！このカードをリリースし、デッキから2枚ドローする！そし  
て、ターンエンド」

遊矢 手札5(オッドアイズ・ドラゴン、時読みの魔術師) LP

1000

モンスター なし

魔法・罨 セットカード×1

「自分のターン、ドロー…バトル！イダテンで、ダイレクトアタック  
！」

「トラップ発動！ダメージ・ダイエット！このターン受ける全てのダ  
メージを半分にする！」

「くっ…だが、ダメージは受ける！」

「!うわあああ!!」

遊矢 LP 4000↓2500

さすがに突き上げて叩き落とす…というのはダメなのか、地面に槍を叩きつけ、その衝撃波で攻撃した。

「そしてもう1体のイダテンで、ダイレクトアタック!」

「!うあああああ!!」

遊矢 LP 2500↓1000

「これでターンエンド」

勝鬨 手札2 LP 3100

モンスター 召喚僧サモンプリースト×1(守)、覇将星イダテン×

2(攻)

魔法・罠 なし

「くっ…」

「さあ立て。叩きのめしてやる」

「…ぐっ…!っ!!」

不意に遊矢が動きを止める。…遊矢には、奇妙な声が聞こえていた。

『(委ねよ…力に。滅ぼせ、全てを)』

「な、なんなんだいったい…」

「?」

『(力に身を委ね…そして滅ぼせ、壊せ、潰せ)』

謎の声は遊矢にしか聞こえないが…ドンドン、ドンドン大きくなっていく。

「ぐっ…おおお…」

そして遊矢から少しだが…何やら不穏な黒い何かが見える。

「おお…おおおお…」

その不穏な黒い何かは徐々に大きくなる…だが…不意に、ペンデュラムが光り、揺れる。

「…さ…(ハ)は…」



気が付けば、遊矢は不思議な空間にいた。辺りが白く、ところどころに様々な色の光が漂っている空間。

「オレは確か、勝鬨とデュエルしてたはず…でも、なんで…」

疑問に思っていた遊矢の耳に、何かの鳴き声が聞こえる。…よく聴く、鳴き声だ。

「!まさか…オッドアイズ? オッドアイズなのか?!」

…鳴き声が聞こえる。…だが、姿が見えない。

「オッドアイズ…どこだ、どこにいるんだ!」

『…オッドアイズは、まだここにはいません』

どこからともなく、声が聞こえてきた。声の感じから、少女のようだ。

「まだ…いない?」

『はい。でも、もうすぐきます。あなたを頼りに、力を求めて』

「…新たな力を求めて、オレを?」

『はい。…でも、今あなたは力に負け、溺れそうになっている。だから…力に、負けないでください』

「…力に、負けない…」

『そうすればきつと…オッドアイズは進化します。あなたと一緒に』

その声とともに、遊矢の周囲を光が囲う。

「な、なんだ…?」

『大丈夫です。…今、あなたの心によって、オッドアイズが新たな力を得ようとしています。…後は、あなたの心次第』

「オレの…心」

『あなたの心、それが…新たなオッドアイズとなります』

「…オレは…オレは、勝鬨を、笑顔にしたい。方法は…正直分らない。勝鬨のことまったく知らないから、好きなこととかそういうことは分からない。でもそれでも…あいつのことも楽しませたい、笑顔にしたいんだ! だから頼むオッドアイズ、力を貸してくれ!」

オッドアイズの鳴き声が聞こえ…光が炎のように変わる。オレンジ、赤、黄色…燃え上がる炎のように。

「?!…、これは?!」

『オッドアイズがその熱い心によって、力を得て、新たな姿を得ます。…燃え上がる炎の力を』

「燃え上がる炎…」

『さあ行つてください。そして、進んでください』

「…ああ。…でも、いったい誰…ん？うわ?!」

遊矢は光に包まれる。…そして、誰か分からぬ少女の声が聞こえる。

『…よろしくお願いしますね…マスター』

「…ここは…」

気が付いた遊矢は、デュエルフィールドに戻っていた。どれほど時間が経ったかについてだが…まったく時間が経っていない。

「…何かは分からないがお前のターンだ。それとも何もせずに敗北を待つか？」

「(…まだ一分経ってない……よーし…)…皆さま！少々ご心配をかけて申し訳ありません！ですがもう私は大丈夫ですのでご安心を！…ただデュエルの状況については私の不利、おそらくこれが、私の最後のターン…つまり次のドロウがこのデュエルの命運を分けます！このデュエル、どちらが勝つか…」

遊矢がデッキの上のカードに手をかける。…そのカードは不思議と光っているように見えるが…誰もそれは分からない。

「最後まで、観ていてください！ドロウ!!」

カードが光の軌跡を描く。無論気付くものはいない。…そして遊矢はドロウしたカード見て…驚いた。

「!…(このカード…でも、ペンデュラムでもなかったし…それに…いや、今はいい…) さあ行くぞ勝鬨！再び揺れる、魂のペンデュラム！天空に描け光のアーク!!ペンデュラム召喚！こい、オレのモンスター達！手札から世にも珍しき元祖二色の眼、オッドアイズ・ドラゴン！そしてエクストラデッキからEMドクロバット・ジョーカー！EMシルバー・クロウ！そして雄々しくも美しき二色の眼、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン!!」

オッドアイズ・ドラゴン ATK 2500  
EMシルバー・クロウ ATK 1800  
EMドクロバット・ジョーカー ATK 1800  
オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK 2500

フィールドに再び現れる4体。そして遊矢のエクストラデッキは…光っている。

「オレは手札のチューナーモンスター、貴竜の魔術師の効果！フィールドのオッドアイズと名のついたモンスターのレベルを3つ下げ、このカードを手札、墓地から特殊召喚する！オッドアイズ・ドラゴンのレベルを3つ下げ、特殊召喚！」

オッドアイズ・ドラゴン 星7↓4

貴竜の魔術師 DEF 1400

白く大きい帽子に大きめの紫と白のローブを着た少女が現れる。手にはU字磁石のようなものが先端についた、赤い宝玉のついた杖を持っている。

「！チューナーモンスター…ということとは、シンクロ召喚かつ！」

「オレはレベル4のオッドアイズ・ドラゴンに、レベル3の貴竜の魔術師をチューニング！」

貴竜の魔術師が3つの歯車になり、その中にオッドアイズ・ドラゴンが入り、4つの星になる。

「熱き情熱の炎を纏い、今新たな姿を現せ、二色の眼の竜よ！シンクロ召喚！」

歯車から光が放たれ…それが炎になる。そして炎の中から現れるのは…赤い体、胸に青い宝玉を収めたオッドアイズ。その姿はどこか炎の鳥にも見える。

「レベル7、猛き咆哮をあげし、灼熱の竜！オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン!!」

オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン ATK 2500

『ここで新しいオッドアイズ！オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴンだー!!その体はまるで燃え上がる炎のように赤く輝いている!!』

「だがレベルは7、イダテンの敵ではない!」

「イダテンを倒すのは、オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴンではごさいません。オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴンの効果発動!このカードが特殊召喚に成功したとき、自分のペンデュラムゾーンのカード1枚を、特殊召喚する!現れる、法眼の魔術師!そして星読みのスケールは、片方が魔術師でなくなったことで1から4になる!」

法眼の魔術師 DEF 2500

星読みの魔術師 Pスケール 1↓4

光の柱が数字と共に消え、星眼の魔術師がフィールドに降り立つ。そして星読みの魔術師の下にある数字が1から上がっていき、5で止まる。

「…なんの真似だ」

「あるモンスターを呼ぶため…かな。…勝鬨」

「…なんだ」

「お前、デュエル楽しんでるか?」

「…デュエルを楽しむ必要はない」

デュエルを楽しむ必要はないと言う勝鬨。…だが。

「でも勝鬨…お前にだってあったはずだ。デュエルを楽しんでいたときが」

「…」

「そんな顔ばかりしていたら、辛いだけだ。たまには思いっきり楽しんで、笑顔になることも大事だと思う。だから楽しもう、このデュエルだけでも!行くぞ…オレはレベル4のEMドクロバット・ジョー

カーとEMシルバー・クロウで、オーバーレイ！」

フィールドに渦が現れ、その中にドクロバット・ジョーカーとシルバー・クロウが紫の光となり、飛び込む。

「2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築、エクシース召喚！こい、ランク4、ダイガスタ・エメラル！」

渦から現れたのは、緑色の鎧に両手に楯を持った、エメラルドの騎士。背中には硬質な翼を持つ。

ダイガスタ・エメラル ATK 1800

『ここで榊選手、エクシース召喚を行ったー!!これで榊選手はこのデュエル中、ペンデュラム、融合、シンクロ、さらにはエクシース！これら4つを行ったー!!』

「ダイガスタ・エメラルの効果発動！オーバーレイ・ユニットを1つ使い、2つあるうちの効果を1つ使う！1つは、墓地の効果モンスター以外のモンスターを特殊召喚する効果、そしてもう1つは、墓地のモンスター3体をデッキに戻し、その後1枚ドロウする効果！オレはモンスターを3体デッキに戻し、ドロウする効果を選び、墓地のオッドアイズ・ドラゴン、ビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴン、ルーニアイズ・ペンデュラム・ドラゴンをデッキに戻す！」

取り除いたカード EMドクロバット・ジョーカー

墓地のカード3枚をデッキに戻す。うち2枚…融合モンスターである2枚はエクストラデッキへ戻され…遊矢は、シャッフルされたデッキの上のカードに、手をかける。

「…(このドロウ…このドロウで、本当に全てが決まる…オレのデッキに入ってるドロウカードのうち、そのほとんどは…今の状況だとあんまり使えないカード…このドロウであのカードが来ればきつと…)…皆さま！これがこのデュエル、真正銘私の最後のドロウとなります！それでは、参ります！…ドロウ!!!」

ドローが光の軌跡を描き…それを、確認する。

「…来た…オレは自分フィールド上の光属性モンスターの法眼の魔術師をリリースし、デツキからオッドアイズ・ドラゴンを墓地へ送ることで…オッドアイズ・ドラゴンを、進化させる！」

「何…」

「行くぞオッドアイズ！眩しき光を受け、聖なる力を持つて道を切り開け！白銀の剣携えし二色の眼、オッドアイズ・セイバー・ドラゴン！」

法眼の魔術師が光の粒子となって消え、半透明のオッドアイズ・ドラゴンが現れ…光の粒子が、その半透明のオッドアイズに纏わり、強い光を放つ。…光は形を変え、棘々しい形になる。光が弾け、そこには金色で縁取られた白く輝く、棘々しい鎧を纏ったオッドアイズ。背中には大きな剣が2対ついている。

オッドアイズ・セイバー・ドラゴン ATK 2800

「だが攻撃力は2800…それ以前にレベル7、イダテンの前には無力だ！」

「確かにオッドアイズ・セイバーだけじゃ勝てない！でも、たった1枚じゃ敵わなくても、様々なカード1枚1枚が繋がることで、勝利へとつなげる！オレはスケール3のEMヒックリカエルを、セツティング！」

カエルのEM、EMヒックリカエルがペンデュラムゾーンにセツティングされる。

「ではヒックリカエルのイリュージョンをお見せします！EMヒックリカエルのペンデュラム効果！1ターンに1度、相手フィールド上のモンスター1体の攻撃力、守備力を入れ替える！オレは覇将星イダテンの攻撃力、守備力を入れ替える！」

「だが攻撃力と守備力を入れ替えたところで無駄だ！」

覇将星イダテン ATK 3000↓2200

「いいえ、無駄ではありません！手札からEMチアモールを召喚！」

遊矢のフィールドに現れるチアガールの恰好をしたモグラ。ユークィとのデュエルでも登場したこのカードの効果は、タイミンングによっては強力だ。

EMチアモール ATK 600

「EMチアモールの効果！相手の攻撃力が変化したモンスター1体を選び、そのモンスターの攻撃力を1000ポイント、あげるか下げることが出来る！私は攻撃力をさげる効果を選びます！」  
「何っ！」

覇将星イダテン ATK 2200↓1200

「バトル！オッドアイズ・セイバー・ドラゴンで、攻守の入れ替わったイダテンを攻撃！」

「だが、無駄だ！イダテンの効果発動！」

「無駄じゃない！オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴンがフィールドにいるとき、相手はバトルフェイズ中にモンスター効果を発動できない！」

「なんだと?!」

「いけ、オッドアイズ・セイバー・ドラゴン！乱舞無双ストライク・スラッシュ！」

メテオバーストの咆哮が轟き、それにより勝鬨のフィールドのモンスターが全て、耳を抑える。その隙かほとまかくオッドアイズ・セイバー・ドラゴンが攻守の入れ替わったイダテンへと一気に接近し、背中にある剣や爪を使って切り付け、最後には距離を取り、ブレス攻撃を放った。

英雄 LP 3100↓2300

「ぐっ…だが、この程度」

「ここでオッドアイズ・セイバー・ドラゴンの効果！このカードが戦闘によってモンスターを破壊したとき、相手フィールドのモンスター1

体を破壊する！この効果で、イダテンを破壊！必殺のストライクセイバー！」

「！イダテン!!」

オッドアイズ・セイバーが大きく飛び上がり、背中の剣でイダテンを上から一刀両断し、破壊した。

「いけ、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン！勝鬨にダイレクトアタック！その二色の眼で、捕らえた全てを焼き尽くせ！螺旋のストライク・バースト！」

「く…ならば、アクションマジック、回避…?!これは…」

メテオバーストの効果を知らず、事前にとったアクションカードを温存していた。そのカードを使う…が。

「星読みの魔術師のペンデュラム効果は、ペンデュラムモンスターが攻撃するとき、相手は魔法カードを発動できない！ホロスコープディビネーション！」

「なんだと?!」

回避は発動できず、エラー。…そしてオッドアイズが飛びあがり、炎のブレスを放つ。

「ぐっ…ぐああああ!!」

勝鬨 LP 2300↓0

『決まったー！ギリギリの攻防を繰り広げ最後に勝利を手にしたのは…神遊矢選手ー!!』

その声と共にフィールドが元に戻る。そして遊矢は、尻もちをついている勝鬨へと近づく。

「勝鬨」

「…なんのようだ」

遊矢は、勝鬨へと手を差し出した。

「またデュエルしよう。今回はお前を笑顔にできなかったけど、次は笑顔にしてみせる」

「…ふん」

だが勝鬨はその手を取らず、普通に立ち上がり…遊矢の顔目掛け、



拳を突き出す。無論、寸止め。

「わ?!」

「榊遊矢、次は自分が勝つ」

「そういうと後ろを向き、見に来ていた梁山泊塾の面々へと深々と頭を下げ、フィールドを去った。

「……えつと……またデユエルする……ってことで、いいんだよな」

## 第19話 迫る融合次元の影

~~~~~ 舞網チャンピオンシップ会場 ~~~~~

「あゝ私の番まだかな」

「次は権現坂だな…まあ、あいつならなんとかなるな！」

「…それにしても、北斗はどこにいったのかしら」

第1試合が終わった舞網チャンピオンシップ。…そんな会場では遊華、刃、真澄は現在観戦席。…が、いつもは4人のはずだが3人しかいない。…そう、北斗がいない。

「うん…遅いね」

「あいつならもうとつくに來てもおかしくないんだけどな…」

「…胸騒ぎがするわね…探してくるわ」

「うし、オレも行くか！」

「じゃあ私も！」

「遊華はデュエルがあるからダメ」

「う…はい…」

~~~~~ 舞網市 路地 ~~~~~

…舞網チャンピオンシップ第2試合が開始される頃…舞網市のある路地では、北斗が、何者かに追われている。彼はデュエルをしていた…が、1回戦では圧勝と言える結果を残した北斗が手も足も僅かにしか出せずに敗北、そして怯えた北斗は、思わずその場から逃げだした…そして北斗は…路地の行き止まりに來てしまう。

「…し、しまった…」

「やっと追い詰めたぞ。さあ言え！他のエクシードズ使いを！」

そして、北斗を追っていた人物…青い髪の少女ともう1人…鍛えられたガツシリとした体を持つ、眼帯をつけた男。少女のほうに關しては…その顔は、柚子にそっくりであった。

「…って言われても他に結構いるって！ボクエクシードズコースだし」

「だから誰が強いかを言え！」

「いだ!!」

少女は北斗の足を踏みつける。力づくで聞く気マンマンなようだ。

「さあ早く言え！」

「うう…！は、はい！ゆ、ユースの桜樹さんとか、後はボクと同じ、ジュニアユースの黒咲さんとか…」

「そうか…ならもういい」

「！な、何を…」

「もうお前に用はない」

「！ひいいいいいい！」

少女がディスクを操作し、既にパニック状態の北斗はこれから自分の身に何が起るのか分からず、それが余計に怖くて悲鳴をあげる…が。

「はあ、はあ…セレナちゃん待つて！」

ディスクを操作していた少女は、不意に後ろを向いた。…そこには先ほどまでいなかった黄緑の髪の少女がいる。おそらく、追い掛けていて追いついたというところだろう。

「か、カード化なんてダメだよ！」

「何故だ？こいつをこのままにしてもいいことはないぞ」

「でもダメだって！そんな酷いこと！」

「…確か前線に出ていると聞いたが…まさかそのような言葉を言うとは…」

男がそういう。どうやら黄緑の髪の少女は前線というところに出ることがあるようだ。…無論、人間で前線と言えば、戦場ぐらいしか当て嵌まらないだろう。黄緑の髪の少女のその言葉に対し、セレナと呼ばれた少女は…。

「前線に出ているヤツらはこうしていると聞いているぞ。なら…」

「だからダメだって！」

黄緑の髪の少女が、セレナを止めに入る…が、男に制止され、止められない。そしてセレナがディスクを北斗のほうに向けたとき…。

「待て」

静かな声が、聞こえる。全員が一斉に、声が出たほうを向く。…そこには、マスクをつけ、黒いマントに黒い服を着た…少年が一人。

ユートだ。

「お前たち…アカデミアか」

ユートは短いが、確信を持って訊く。…セレナ、そしてもう1人の少女はどちらもアカデミアに所属しているものが着ている服だ。間違えるはずがない。

「…お前がエクシーズの残党か？」

「！君は…そうか…アカデミアから見ればそう見えるだろうな。…そして、そう言うということは、やはりアカデミアか」

「ああ。私はアカデミアのセレナ。お前を、エクシーズの残党を倒しに来た」

「…そうか…だが、オレも黙って倒されるような人間じゃない」

そういい、少年はディスクのプレート部分を展開し、構える。それを見た少女も、同じようにディスクのプレート部分を展開する。

「セレナ様、助太刀は？」

「必要ない」

「…その紫の君…早く逃げろ」

「え？あ、ひ、ひいいいいい！」

情けない声をあげ、北斗は逃げていく。…セレナも、男も、そして黄緑の髪の少女も、追わない。…少なくとも、セレナの目当ては目の前にいる。

「さあ行くぞ！デュエル！」

「デュエル！」

セレナ 手札5 LP 8000

ユート 手札5 LP 8000

「行くぞ、私のターン！手札から魔法カード、融合を発動！手札の

ムーンライト・ブルー・キャット・ムーンライト・パープル・バタフライ  
月光 蒼猫、月光 紫蝶を融合！青き闇を徘徊する猫よ、紫

の毒持つ蝶よ。月の引力により渦巻きて、新たな力と生まれ変わらん！融合召喚！現れいでよ！月明かりに舞い踊る美しき野獣、

ムーンライト・キャット・ダンサー  
月光舞猫姫！

融合の渦に、片側だけの仮面をつけた青い女の猫の獣人と、デザインは違うが同じく片側だけの仮面をつけた、蝶の羽を持つ女の紫の獣

人が入る。そして融合の渦からは融合素材となった2体の仮面を合わせたものに近いデザインの仮面をつけた、赤紫の女の猫の獣人が現れる。服に関しては…大胆な恰好である。

ムーンライト・キャット・ダンサー  
月光舞猫姫 ATK 2500

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ。さあ、お前のターンだ」

セレナ 手札2 LP 8000

モンスター 月光舞猫姫×1 (攻)

魔法・罠 セットカード×1

「…オレのターン、ドロ。手札から速攻魔法、手札断殺を発動。互いのプレイヤーは手札を2枚墓地へ送り、2枚ドロする」

「ちっ…仕方ない」

ユートが墓地へ送ったカード

ファントム・ナイト  
幻影騎士団ラギッドグロブ

ファントム・ナイト  
幻影騎士団シャドーベイル

セレナが墓地へ送ったカード

融合

ギヤラクシー・サイクロン

「さらに魔法カード、ナイト・ショットを発動。相手のセットされた魔法が罠を破壊する。そのセットカード、破壊させてもらう」

「！ナイト・ショットの発動時、選択されたカードは発動できない…おのれ…」

セレナのセットカードが瞬時に撃ち抜かれ、露わとなり破壊される。破壊されたのはスキル・プリズナー…破壊できていいほうだろう。

「そして手札から魔法カード、幻影相対を発動。相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールドモンスターが存在しない場合、

デッキから幻影騎士団1体を、特殊召喚する。現れる！ファンタム・ナイト幻影騎士団グラッシージャケット！」

フィールドには通常の召喚エフェクトは現れず、静かに現れたのは暗い色の迷彩柄のジャケットを着た：青い火の玉。

ファンタム・ナイト幻影騎士団グラッシージャケット DEF 1000

#### 幻影相対 通常魔法

①相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、発動できる。自分のデッキからレベル3の「幻影騎士団」モンスター1体を特殊召喚する。このカードを発動したターン、自分は「幻影騎士団」モンスター以外のモンスターを特殊召喚することができない。

ファンタム・ナイト「幻影騎士団グラッシージャケットの効果！このカードが特殊召喚に成功したとき、自分フィールドに他のモンスターが存在しない場合、自分の墓地か手札からレベル4以下の幻影騎士団1体を特殊召喚する！現れる、幻影騎士団ラギッドグローブ！」  
「これでレベル3が2体…」

ファンタム・ナイト幻影騎士団グラッシージャケット 戦士族・効果 闇属性 星3 A  
TK 300 DEF 1000

「幻影騎士団グラッシージャケット」の①の効果は、1ターンに1度しか発動できない。

①このカードが特殊召喚に成功したとき、自分フィールド上に他のモンスターが存在しない場合、発動できる。自分の墓地、もしくは手札からレベル4以下の「幻影騎士団」モンスター1体を特殊召喚する。

フィールドに現れたのは、巨大な手を持つ青い火の玉が本体と思われるモンスター。こちらは通常の召喚エフェクト付きで現れる。

幻影騎士団ラギッドグローブ DEF 500

「オレはレベル3の幻影騎士団グラツシージャケット、幻影騎士団ラギッドグローブでオーバーレイ！戦場に倒れし騎士たちの魂よ、今こそ蘇り、闇を切り裂く光となれ！エクシース召喚！現れる、ランク3、幻影騎士団ブレイクソード！」

フィールドに現れた穴の中に、グラツシージャケットとラギッドグローブが紫色の光になって飛び込む。そして渦からは馬に跨った人型の青い炎である鎧の騎士、ブレイクソード。手には大剣を持っている。

「ラギッドグローブをエクシース素材とした闇属性エクシースモンスターはエクシース召喚時、自身の攻撃力を1000ポイントアップさせる効果を得る」

幻影騎士団ブレイクソード ATK 2000 ↓ 3000

「カードを1枚伏せて、ブレイクソードの効果発動。オーバーレイ・ユニットを1つ使い、自分フィールドと相手フィールドのカード1枚を破壊する。オレのセットカード1枚と、月光舞猫姫を破壊する！」

「くっ…」

破壊されたセットカード：呪われた棺

セットカードがブレイクソードに吸収され、ブレイクソードの剣に青い炎が纏われ：横に一振り。炎が刃となり月光舞猫姫を破壊する。

「そして破壊した呪われた棺の効果。相手は自分フィールドのモンスターを破壊するか、手札を1枚、ランダムに捨てる」

「破壊か、ハndেসか…か。手札を1枚捨てる。…ちっ」

墓地へ捨てられたカード

月光白兔

「手札からクリバンデットを召喚し、バトルだ！ブレイクソードで、ダイレクトアタック！」

クリバンデット ATK 1000

黄色いバンダナを頭に被った毛玉の悪魔が現れた後、ブレイクソードの乗る馬が駆け、その剣でセレナを攻撃。セレナは剣をかわすが、

その衝撃は大きい。

「くっ…」

セレナ LP 8000↓5000

「続けて、クリバンデットでダイレクトアタック！」

「っ…ちっ…」

セレナ LP 5000↓4000

「カードを1枚伏せて、ターンエンド。この瞬間、クリバンデットの効果発動。このカードをリリースし、デッキから5枚捲る。そしてその中の魔法か罠を1枚手札に加え、残りを墓地へ送る」

捲られたカード

ファントム・ナイツ 幻影騎士団ダステイローブ

ブレイクスルー・スキル

シャツフル・リボーン

ネクロ・ガードナー

ファントム・ナイツ 幻影騎士団シャドーベイル

「この効果により、シャツフル・リボーンを手札に加える」

ユート 手札2 (シャツフル・リボーン) LP 8000

モンスター 幻影騎士団ブレイクスード×1 (攻)

魔法・罠 セットカード×1

「私のターン、ドロー…！手札から魔法カード、融合回収を発動！墓地の融合と、融合素材となった月<sup>ムーンライト・パール</sup>光<sup>バタフライ</sup>紫<sup>蝶</sup>を手札に加える！そして、融合を発動！月<sup>ムーンライト・ブルー</sup>光<sup>キャット</sup>蒼<sup>猫</sup>と、月<sup>ムーンライト・パール</sup>光<sup>バタフライ</sup>紫<sup>蝶</sup>を融合！青き闇を徘徊する猫よ、紫の毒持つ蝶よ。月の引力により渦巻きで、再び新たな力と生まれ変わらん！融合召喚！再び現れいだよ！月明かりに舞い踊る美しき野獣、月<sup>ムーンライト・キャット</sup>光<sup>舞</sup>猫<sup>姫</sup>！」

ムーンライト・キャット・ダンサー 月光舞猫姫 ATK 2400

再び、月光舞猫姫を融合召喚したときと同じような光景で、再び現れるキャットダンサー…。だが今回は、先ほどのようにはやられない。

「パール・バタフライの効果発動！墓地の融合を手札に加える！そ



して魔法カード、月光香を発動！墓地のレベル4の月ムーンライト光ブルー蒼キャット猫を特殊召喚！」

月光香 通常魔法

「月光香」の①、②の効果は、1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。

①自分の墓地のレベル4以下の「月光」モンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターを特殊召喚できる。

②墓地のこのカードと「ムーンライト」融合モンスターをゲームから除外し、墓地の「融合」魔法カードを1枚対象に発動できる。そのカードを手札に加える。

月光蒼猫 DEF 1200

フィールドに現れるブルーキャット。使用していない効果がもう1つあり、その効果は…。

「ブルー・キャットの効果！このカードが特殊召喚に成功したとき、自分フィールドのムーンライトと名のついた融合モンスター1体の攻撃力を、元々の2倍にする！私は月ムーンライト光キャット舞ダンサー猫キャット姫ダンサーを選択！」

「何…！」

月光舞猫姫 ATK 2400↓4800

「さらにキャットダンサーの効果！自分フィールドのムーンライトと名のついたモンスター1体をリリースし、このターン、このモンスターは相手フィールドのモンスター全てに、2回攻撃できる！ただしこのモンスターと戦闘を行うモンスターは1ターンに1度、戦闘では破壊されない！バトル！キャットダンサーで、ブレイクソードを攻撃！フルムーン・クラスター・ファースト！そして攻撃宣言時にキャットダンサーの効果！このカードが攻撃宣言したとき、相手に100ポイントのダメージを与える！」

「…」

ユート LP 8000↓7900

キャットダンサーの短剣が光を帯び、ブレイクソードを切りつけ

る。一気に接近し、しなやかな動きのキャットダンサーに対し、ブレイクソードは重鈍な動き。キャットダンサーの攻撃により、ブレイクソードは破壊され…ない。

「ぐ…ぐあー」

ユート LP 7900↓6100

「そしてキャットダンサーで、もう1度ブレイクソードを攻撃！フルムーン・クラスター・セカンド！」

1回目の攻撃からまだ離れていない状態だったキャットダンサーは、短剣の光を大きな刃にし、一気に突き刺してブレイクソードを破壊する。

「すまないブレイクソード…ぐおー」

ユート LP 6100↓6000↓3200

「く…ブレイクソードの効果！このカードが破壊されたことにより、自分の墓地から、同レベルの幻影騎士団ファンタム・ナイトを2体、レベルを1つあげて特殊召喚する！こい、ダステイローブ！ラギッドグローブ！」

幻影騎士団ファンタム・ナイト ダステイローブ DEF 1000 星3↓4

幻影騎士団ファンタム・ナイト ラギッドグローブ DEF 500 星3↓4

ユートのフィールドに、ローブに入った火の玉と、ラギッドグローブが現れる。…が、キャットダンサーの攻撃は…終わってない。

「なら、その2体に2回連続で攻撃する！順番はラギッドグローブ、ダステイローブの順番だ！フルムーン・クラスター、サード、フォース、ファイブ、シックス！」

「…ラギッドグローブへの2回目の攻撃時、墓地のネクロ・ガードナーを除外することで、その攻撃を無効にする」

ラギッドグローブへの2回目の攻撃時、半透明の人型のモンスターがキャットダンサーとラギッドグローブの間に入り、キャットダンサーの攻撃を受け止めた。

「！（エクシーズモンスターを守らず、特殊召喚されたモンスターを…ランク4でも呼ぶつもりか…）これでターンエンドだ。ブルーキャット

トの効果は切れ、キャットダンサーの攻撃力は元に戻る」

ハイランライト・キャット・ダンサー  
月光舞猫姫 ATK 4800 ↓ 2400

セレナ 手札0 LP 6400

モンスター 月光舞猫姫×1 (攻)

魔法・罠 なし

「オレの、ターン!!…手札からファントム・ナイト幻影騎士団クラック・ヘルムを召喚!」

ファントム・ナイト  
幻影騎士団クラック・ヘルム ATK 1500

フィールドに現れたのは西洋の兜と手だけで、青い炎が本体と言えるモンスター。…効果が残念なのが、一番残念なモンスターだ。

「オレはレベル4のラギッドグローブ、クラック・ヘルムで、オーバーレイ!漆黒の闇より、愚鈍なる力に抗う反逆の牙!今降臨せよ!エクシーズ召喚!ランク4、ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン!!」

フィールドに穴が現れ、その中にクラック・ヘルム、ラギッドグローブが紫色の光になり、飛び込む。…現れるのは、ユートのエース、ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン。

「闇属性のダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンのエクシーズ素材となったことで、ラギッドグローブの効果を発動する。ラギッドグローブをエクシーズ素材としたエクシーズモンスターの攻撃力を、1000ポイントアップさせる」

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン ATK 2500 ↓ 3500

「そしてダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンの効果!オーバーレイ・ユニットを2つ使い、相手フィールドのモンスター1体の攻撃力を半分にし、その攻撃力分、ダーク・リベリオンの攻撃力をあげる!キャットダンサーを選択する!トリイズン・デイスチャージ!」

「墓地のスキル・プリズナーの効果!このカードを除外し、キャットダンサーを守る!」

「ならその効果にチェーンし速攻魔法、禁じられた聖槍をダーク・リベリオンに対し、発動する!」

「!?な…」

月光舞猫姫 ATK 2400↓1200  
ダーク・リベリオン・エクシース・ドラゴン ATK 3500↓  
2700↓3900

ダーク・リベリオンに槍が突き刺さる。…そして、ダーク・リベリオンは背中の翼が展開、そして紫色の電撃を放ち、それでキャットダンサーを縛り上げる。

「…スキル・プリズナーは、対象としたモンスターを、そのモンスターを対象とする効果モンスターの効果から守るカード。だが、スキル・プリズナーの守りを受けたモンスターに対し、禁じられた聖槍を使っても、ただ攻撃力を下げるだけに過ぎない。だが自身のモンスターに禁じられた聖槍を使うことにより、その効果は通る」

「キャットダンサーが…」

これは間違えたら痛手となる。案外知らなかったり、間違えていたりする人もいる…かもしれないこの効果。

「バトルだ！ダーク・リベリオン・エクシース・ドラゴンで、月光舞猫姫を攻撃！そしてこの瞬間、墓地のブレイクスルー・スキルの効果！このカードを除外し、相手フィールドのモンスター1体の効果を、無効にする！オレはキャットダンサーの効果が無効にする！」

「何！そんなカードいつのまに…！クリバンデットか」

「その通りだ。いけ、ダーク・リベリオン！反逆のライトニング・デイスオベイ！」

ダークリベリオンの背中の翼から青い光が放たれ…この場合は宙に浮いた状態でキャットダンサーへとその牙を向け、突撃する。…牙、というより顎の一部にも見える。

「くっ…おのれ…」

衝撃に備えるセレナ。…そして、ダークリベリオンがキャットダンサーを貫き破壊した衝撃は大きく、軽く飛ばされる。

セレナ LP 6400↓4100

「これでターンエンドだ。エンドフェイズ、禁じられた聖槍の効果は

終了し、ダーク・リベリオンの攻撃力は、元に戻る。だが、ダークリベリオンのモンスター効果による上昇は永続効果、下がっていた80分、攻撃力をあげる」

ダーク・リベリオンのエクシーズ・ドラゴン ATK 3900 ↓  
4700

ユート 手札2 (シャッフル・リボーン) LP 3200

モンスター ダーク・リベリオンのエクシーズ・ドラゴン×1 (攻)

魔法・罫 セットカード×1

「私のターン、ドロロー…墓地の月光香の効果！このカードと墓地の月光融合モンスターをゲームから除外することで、デッキから融合と名のつく魔法カードを1枚手札に加える！墓地のキヤットダンサー1体とともに除外し、墓地から融合回収を手札に加え、発動！墓地の融合と月光蒼猫を手札に加える！さらに私は手札から月光白兔を召喚！月光白兔は召喚に成功したとき、墓地からムーンライト1体を、効果を無効にし、守備表示で特殊召喚できる！私は、月光舞猫姫を特殊召喚！」

セレナのフィールドに兎の耳のようなものがある髪の長い少女が現れる。手には杵を持っている。その杵を地面に向かって振り下ろすと、舞猫姫が現れる。

月光白兔 ATK 800

月光舞猫姫 DEF 2000

「さらに魔法カード、融合を発動！フィールドのホワイトラビットとキヤットダンサーを融合！月明かりに舞い踊る美しき野獣よ、月に映え躍動する兎よ、月の引力より渦巻きて、新たな力と生まれ変わらん！融合召喚！現れよ、月光の原野で舞い踊るしなやかなる野獣、月光舞豹姫！」

フィールドに現れた渦の中に、キヤットダンサーとホワイトラビットの2体が入る。そして渦から現れたのは…キヤットダンサーのように大胆な服装の、浅黒い肌を持つ女の獣人。肘には剣のついた腕

輪、毛の生えた手には鋭く長い爪がある。その顔は仮面こそつけてないが、長めの前髪で表情はうかがえない。

月光舞豹姫    ATK    2800

「さらに墓地の月光紫蝶の効果！墓地のこのカードを除外し、手札から月光蒼猫を特殊召喚する！そしてブルーキャットの効果！パンサー・ダンサーを選択！」

「しまった…」

月光蒼猫    DEF    1200

月光舞豹姫    ATK    2800↓5600

「パンサー・ダンサーの効果！自分のメインフェイズに発動でき、相手モンスターはこのターン、それぞれ1度ずつ戦闘では破壊されなくなり、パンサー・ダンサーは相手の全てのモンスターに2回ずつ攻撃できる！バトルだ！いけ、パンサー・ダンサー！ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンを攻撃！」

「ぐああ！」

ユート    LP    3200↓2300

パンサー・ダンサーの鋭い爪で何度か引つかかれるダーク・リベリオン。引つかかれた跡はハッキリと残っており、痛々しい。

「そしてパンサー・ダンサーの、2回目の攻撃！」

「ぐああ！」

パンサー・ダンサーの鋭い爪によりダークリベリオンは貫かれ、破壊される。

ユート    LP    2300↓1400

「パンサー・ダンサーはモンスターを戦闘によって破壊した場合、バトルフェイズ終了時まで、攻撃力が2000ポイントアップする」

月光舞豹姫    ATK    5600↓5800

「これでターンエンド。このエンドフェイズ、ブルーキャットとパン

サー・ダンサーの効果は終了し、パンサー・ダンサーの攻撃力は、元に戻る」

月光舞豹姫 ATK 5800↓2800

セレナ 手札0 LP 4100

モンスター 月光舞豹姫×1(攻)、月光蒼猫×1(守)

魔法・罠 なし

決して少くないダメージ。フィールド、ライフは一気に逆転し、セレナのほうが有利となっている。…が、ユートはまだ手札のほうが多い。その分、まだ勝機はある。ユートはデッキの一番上のカードを指で挟み、そして…。

「…オレの、ターン!!…!!(この、カードは…)」

ユートはドロローしたカードを見て、驚いている。…そして、そのカードを見て、悩む。

「…(このカードを使えば、彼女に勝つこともできる。…だが…)」

「…?(どうしたんだろ…)」

「どうした!…さつさとしろ!」

引いたカードを使うことを躊躇っている…そのように見える。無論、そんなこと知る由もないアカデミア側は、疑問に思ったり、急かしたりだ。そしてユートは…セレナにあることを聞く。

「…君は、どうして戦う」

「どうして?私の実力を、プロフェッサーに認めさせるためだ」

「認めさせるため…どうしてだ」

「戦うためだ、誇り高きデュエル戦士として」

「誇り高き…」

眉間に皺が寄るユート。…自身の知るアカデミアに、誇り高いと言えるものなど一人としていない。突如として現れ、いきなり攻撃をかけ、笑いながら大勢の人たちをカードに変えた。戦つてすらいな相手も、容赦なく。

「君は、アカデミアが何をしてきたか知らないのか」

「何を?決まっている。戦士として正々堂々とエクシード次元へと戦いを挑み」

「そんなヤツは一人もいなかった!!」

「!」

「…」

セレナの言葉に、いきなり怒鳴り声で怒りを表すユート。…目の前で消えて行った…親しい人達、レジスタンスの仲間達。そして…目の前でこそなかったが、カード化されたと言われているレジスタンスのリーダー、ユークワ…様々な顔が、ユートの頭を過る。

「アカデミアは平和なオレ達の町をいきなり攻撃した!そして、まるでゲームでもしているかのように楽しみ、嘲笑いながらエクシーズ次元の、ハートランドの人達を狩り、カード化していった!例え無抵抗でも、例外じゃなかった!そんなヤツらの中に誇り高いヤツなど、1人もいなかった!」

「!出鱈目を言うな!アカデミアの戦士は」

「…出鱈目じゃないよ、セレナちゃん…」

「!楓…」

不意に口を開いた楓。…その表情は、暗い。

「…私は前線拠点に、医療班としていたから…たまに同じ医療班の人や精鋭の人と町を歩いていただけ…抵抗した人達も、たまに無抵抗な人達も…嘲笑いながら、カード化していたのを、何度も見た…私は、何もできなかった、ううん…何も、しなかった。一緒にカード化することも…止めることも」

「…」

信じられない…という表情をしているセレナ。楓の表情は暗い。…何もしなかったことに対し、罪悪感があるのだろう。

「…もう、謝っても謝っても、許してもらえないくらい、酷いことを私たちは、してきたんだ…」

「そうだ…家を、町を、友達を、仲間を…お前たちは、嘲笑いながら壊し、奪っていった!オレは手札から魔法カード、シヤツフル・リポーンを発動!墓地のダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンを、特殊召喚!この効果で特殊召喚されたモンスターの効果は無効になり、エンドフェイズに除外される」



再び現れるダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン。その体はさつきやられた分が残っているのか、所々かけたりしている部分がある。

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン    ATK    2500

「今更攻撃力2500など、怖くはない！」

「……………君、今すぐサレンダーをしてくれ」

ユートは迷った。…今引いたカード、そのカードを使えば…この状況をひっくり返すことなど容易だと、ユート自身がよく分かっている。セレナには、それを妨害できるようなカードはないからだ。…だが、そのカードからは嫌なものを感じている。使うことを、躊躇するようなものを。…できれば使わず、彼女がこのままサレンダーしてくれることを願った。自分が負ける、という手も考えられるが…負けたらきつとカード化されるのは分かりきっている。負けるわけには…  
いかない。だが…

「…何を言っている。まさか、こんな状況で命乞いか？私のフィールドには、攻撃力3200のパンサーダンサー。お前のフィールドには攻撃力2500の、オーバーレイ・ユニットも持たないエクシーズモンスターのダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン。私が不利なときならともかく、私が有利なときサレンダーを進めるとは。だが、私はサレンダーをするつもりはない！」

「……………そうか……………なら」

…サレンダーはしない。その力強くもデユエリストとしてのプライドのある言葉を聞いたユートは……………戦うと決め、カードを手に取り…発動する。

「手札からRUMーバリアンズ・フォースを発動！このカードは、自分フィールドのエクシーズモンスター1体を、同じ種族のCX、CNO。へとランクアップさせる！オレは、ランク4のダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンで、オーバーレイ・ネットワークを再構築！」

「何!!」

ダーク・リベリオンが紫色の光に変わり、上空に現れた穴へと飛び込む。…この際、レオ・コーポレーションのほうでは召喚反応を観測

する計器が、異常なほど大きなエクシース召喚の反応を検知、そして壊れたため大騒ぎになったのは、また別の話し。

「つぐー……うぐ……混沌に染まりし漆黒の牙、より強靱なる力により……強大な壁に大穴を開ける！カオス・エクシース・チェンジ！来い、ランク5：CXーファントム・リベリオン・カオス・ドラゴン！」

そして上空の穴から光が溢れ：フィールドに降り立ったのは、確かにダーク・リベリオンの面影を持つモンスターだが、体中に赤紫色の光を放つ線があり、その姿もダーク・リベリオンの面影を残すだけであり、全体的に鎧を纏っているようにも見える。また、翼に關しては球体状のものにダークリベリオンのものより大きい翼、それと大砲がついている。

CXーファントム・リベリオン・カオス・ドラゴン    ATK    2800

「攻撃力……2800……だが、それだけでは3200のパンサー・ダンサーに勝つには、少し足りないな」

「ぐっ……ファントム・リベリオン・カオス・ドラゴンの、モンスター効果。ダーク・リベリオンをオーバーレイ・ユニットとして持っている場合、オーバーレイ・ユニットを1つ使うことで、相手フィールドのモンスター1体の攻撃力を0にする！」

「なんだと?!」

「オレは、パンサー・ダンサーを選択する！カオス・ルイン・デイスチャージ!!」

CXーファントム・リベリオン・カオス・ドラゴン    ドラゴン族・  
効果／エクシース    闇属性    ランク5    ATK    2800    DEF  
2300

レベル5のモンスター×3

「CXーファントム・リベリオン・カオス・ドラゴン」は、自分フィールドに1体しか存在できず、1ターンに1度しか特殊召喚できない。

①1ターンに1度、このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、発動できる。このカードはもう1度、相手モンスターに攻撃することができる。

②このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、発動できる。そのモンスターの元々の攻撃力の半分のダメージを、相手に与える。

③このカードが「ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン」をX素材としている場合、以下の効果を発動できる。

・このカードのX素材を1つ取り除き、相手フィールド上のモンスター1体を対象に発動できる。そのカードの攻撃力、守備力を0にする。

フロントム・リベリオンの翼が展開し、赤紫色の電撃が放出されパンサー・ダンサーを縛り上げ、さらに大砲がパンサー・ダンサーへと向けられ、赤紫色の電撃を放ちパンサー・ダンサーを傷付ける…その衝撃は、周囲にも影響を及ぼす。

「！きゃああー！」

「！ぐっ…これほどとは…」

「セレナ様！」

ムーンライト・パンサー・ダンサー

月光舞豹姫 ATK 2800↓0

「はあ、はあ…バトル！フロントム・リベリオン・カオス・ドラゴン！」

ムーンライト・パンサー・ダンサー

月光舞豹姫を、こうげ

「いたぞー！こっちだ!!」

いきなり声が響く。ユートの後ろに男性…その服装を見る限り、LDSでも上位の実力を持つという制服組と思われる。その声にユートは攻撃の手を止める。

「…」

「なんだ、どうした。まさかまた情けでもかけるつもりか？」

「…君にとっては不本意かもしれないが…これ以上、傷つけたくない」

「ふざけるな！情けをかけられるぐらいなら死んだほうが」

「例えどれほど憎い相手でも…これ以上、誰かを傷付けるのは…嫌

なんだ」

ユートは攻撃宣言を止めたままであり、ファントム・リベリオンはセレナのほうを睨んでいる。…このままでは人が集まる。…セレナ、バレットはそれぞれ自身の目的があり、それにはあまり目立たないほうがいい。…もう十分目立っているが。

「…頼む。これが、最後だ。……………サレンダー、してくれ」

「断る。まだ、私の敗北が決まったわけじゃない」

「…そうか……ファントム・リベリオン・カオス・ドラゴンで、月光舞豹姫を、攻撃！この一撃で全てを、破壊しろ!!」

ファントム・リベリオンが、待つてましたと言わんばかりの咆哮を轟かせ、効果を使ったときよりも赤紫色の電撃が激しく迸る。大砲から赤紫の電撃が放たれ、舞豹姫に直撃、その電撃はロープのように大砲から繋がっている。無論舞豹姫は、より苦しむ。さらに周りにも影響がでて…。

「…あぎやっ!」

「!このままでは…まずい!」

「オレ達の怒りを、受ける!怒濤のカオス・アンガー・デイスオベイ!!!」

そして全身からさらに赤紫の電撃が迸り、その牙を前に向け、パンサー・ダンサー目掛け突撃していく。…が。

「セレナ様!…ここは退きましょう!」

「!バレット、何を、離せ!!」

「いいえ、ここは撤退です!このままでは、危険です!!」

攻撃が当たる寸前、バレットがセレナを掴み、瞬時にお姫様だっこをすると、素早く周囲の壁を利用し、上へとあがる。…無論その間もデュエルは続いており、舞豹姫は容赦なく、ファントム・リベリオンの牙によって貫かれ、さらには赤紫の電撃をさらに浴びせられ…破壊された。

セレナ LP 4100↓1300

「!ぬおおおお!!」

「!…ここまでの、衝撃…っ!」

衝撃は無論、バレット達にも届いた。…が、鍛えられているためか、

バレットはそのままその場から離脱していった。

「……逃げた……か」

そう言うと、ディスクからデツキを抜いた。…ファントム・リベリオンは消えていったが…勝ち誇ったような咆哮は、完全に消えても、周囲に轟いていた。…そして、そのデュエルを見ていた制服組の人間は…。

「…いい、今は…」

「…オレにも、よく分からない。だが……」

ユートは一枚のカード…ファントム・リベリオンを手に取る。

「…オレ達の知らない、大きな力を持っているのは、確かだ」

「知らない、力……」

「それにRUM―バリエーション・フォース…隼もRUMを持っているが、これは隼の持っているものとは明らかに違う…」

「え?」

「…隼の持っているのは、何の変哲もないカードのように思える。…だがこのバリエーション・フォース…何か、嫌なものを感じる」

…ファントム・リベリオン、そしてバリエーション・フォース…どちらにも言えることはただ一つ…異質なもの。

「…あつーそれよりも彼女…」

「…アカデミアだからと言って、あまり手荒くしないでくれ…ああするつもりはなかった…脱走されないようにしつつ、医務室に」

「は、はい!」

…と、先ほどの気を失って倒れ、さらには置いてかれた楓と呼ばれた少女を、どこか気まずそうな表情で見る、ユートであった…。

「…あの、ユートさん」

「…なんだ?」

「…その恰好、事情を知っているこちらはいいですけど、いや、知らなくともただの不審者です」

「…」

## 第20話 相対する2体の竜

舞網チャンピオンシップ第2回戦…の第2試合が終わり、続く第3回戦…いよいよ遊華の番である。

『2回戦、続いて第3試合！LDSシンクロコース所属、数多の竜星を巧みに操り勝利を掴んだシンクロ使い、巳柳遊華！対するは、第1回戦にて圧倒的な勝利を掴んだドラゴン使い！南雲白選手—!!』

進行役のニコ・スマイリーの声が会場に響き、遊華と、その対戦相手がフィールドに入る。…茶髪の長い髪をした、青い目の少女。中々の美人であり、その胸は…大きいほうだ。

「!!(こ、この人…大きい…)」

思わず見てしまった遊華。…遊華の胸は……まな板。…そう、ない。女なら、それも遊華ぐらいの年ならもうあってもいい膨らみは……ない。なお、赤馬零奈とは貧乳同盟なるものを組んでいるが、それはまた別の話し。

「あんたが相手か……ふふふふ」

「っ…な、何…何よ胸が大きいからってぜ、全然羨ましくないからね—！」

「は？…まあいい。同じドラゴン使い、さあデュエルだ—！」

「……？ドラゴン…使い？同じ？」

「恍けても無駄だ。お前がドラゴン族使っていることはデュエルを見てもう分かっている—さあデュエルだ—！」

「いやデュエルするのはいいんだけど…私が使ってる竜星は、ドラゴン族じゃなくて、幻竜族—！」

「は？」

……どうやら、この南雲白という少女、竜星がドラゴン族であると勘違いしているようだ。…竜星自体、別にドラゴン族であったとしても不思議ではない。無論ドラゴン族だったらいろいろ恐ろしい事態になるのは明白なので、幻竜族でいい。

「いや、竜星はドラゴン族じゃなくて、幻竜族。これ間違えたらダメだから—！」

「どう見ても、ドラゴンだろ？」

「いやドラゴン族っぽいけど、幻竜族っていう別の種族だから」

「は？嘘つけ」

「ああもう…とにかくデュエル！」

『何やらデュエル前から少々白熱していますが、この熱さにも勝る熱さをデュエルでもぜひとも見せてください！それではアクションフィールド、スターリバー・ブリッジ、セット！』

リアルソリッドビジョン投影機が起動し、フィールドが変わり…無数の星が流れ、その上をいくつもの光が架かる。その光の上に2人は立っている。

「さあ行くぜ！戦いの殿堂に集いしデュエリスト達が！」

「モンスターと共に、地を蹴り、宙を舞い！」

「フィールド内を駆け巡る！」

「見よ！これぞデュエルの最強進化系！」

「アクション…！」

「デュエル！」

遊華 LP 4000

白 LP 4000

デュエル開始と共に、フィールドにアクションカードが散らばる。そして先攻は…。

「…それじゃあ私のターン…！手札からマスマティシヤンを召喚！マスマティシヤンは召喚したとき、デッキからレベル4以下のモンスター1体を墓地へ送る！デッキからレベル・ステイラーを墓地へ！」

マスマティシヤン ATK 1500

遊華のフィールドに、小柄で長くて白い髭を蓄えた学者と思われる老人が現れる。そして墓地へ送られたレベル・ステイラー。レベル調整をもってこいのモンスターだ。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

遊華 LP 手札2 LP 4000

モンスター マスマティシヤン×1（攻）

魔法・罨 セットカード×2

「あたしのターンだ！ドロロー！…おつ、さつそく来た！手札からチューナーモンスター、青き眼の乙女を召喚！」

青き眼の乙女 ATK 0

フィールドに現れたのは、長く白い髪に青い目の女性。間違いなく美人に入るのであろうそのモンスター。服装は民族衣装のようである。「チューナー…ってことは、シンクロを」

「それはどうかな。手札から装備魔法、ワンダー・ワンドを乙女に対し、発動！そしてワンダー・ワンドの発動にチェーンして、青き眼の乙女を発動！」

乙女の手には杖が現れるのと同時に、乙女が目を閉じる。…すると、何やら白いオーラが放たれ、白のデッキに吸い込まれている。…ちなみにワンダー・ワンドの効果で乙女の攻撃力が上がっている。

青き眼の乙女 ATK 0↓500

「このタイミングで、効果を…？」

「青き眼の乙女はカードの効果対象になったら、手札、デッキ、墓地から、青眼の白龍を特殊召喚できる効果を持つ！さあ現れろ!!青眼の白龍！」

オーラがフィールドに移り、それにが形になる。…白い輝き、青い眼。それらを併せ持つ龍…伝説、場所によってはそう呼ばれるであろうそのモンスターが、この地に出現した。

青眼の白龍 ATK 3000

「さつそく来ました南雲選手のエースモンスター、青眼の白龍！この雄々しき姿！放たれる威圧感！そして美しさ！とても素晴らしいドラゴンだと思います！」

「い、いきなり攻撃力3000をデッキから…」

「それとワンダー・ワンドの効果で乙女の攻撃力は500ポイント上がっているが…メインはこっちだ！ワンダー・ワンドと装備モンスターを墓地へ送り、デッキからカードを2枚ドロロー！」

「え?!何その効果!!」

「って言っても、装備先は魔法使い限定だけだな」



「…そ、そう…」

そう言ってる間に処理は進み、ワンダー・ワンドの効果で2枚ドロ―した白。…手札を見て、ニヤッと笑う。

「いいカードが来た！手札から魔法カード、トレード・インを発動！手札のレベル8のモンスターを墓地へ送ることで、デッキから2枚ドロ―できる！この効果で手札の、白き霊龍を墓地へ送り、2枚ドロ―！」

「またドロ―…」

「…どうやらまだまだ続くみたいだな。魔法カード、調和の宝札を発動！手札の攻撃力1000以下のドラゴン族チューナーを墓地へ送ることで、デッキからカードを2枚ドロ―できる！手札のドラゴン族チューナー、伝説の白石を墓地へ送って2枚ドロ―！さらに伝説の白石の効果！デッキから、青眼の白龍を手札に！」

「今度はドロ―に加えてサーチ…」

ガンガンデッキが減り、さらに手札を増やす白。…とはいえさすがに打ち止めのようで…。

「…うーん、ここまでか…ならばバトル！青眼の白龍！マスマティシャンを攻撃だー！」

そういつつブルーアイズに飛び乗る白。ブルーアイズの口に光が集まりそして…。

「滅びの爆裂疾風弾!!」

「永続トラップ、竜星の具象化を発動！ターナーに1度、自分フィールドのモンスターが破壊されたら、デッキから竜星と名のつくモンスターを特殊召喚する！」

「げーでも止まらないから仕方ない、やれ！」

ブルーアイズの口からブレスが放たれ、マスマティシャンは一瞬にして破壊され、遊華のライフを削る。

遊華 LP 4000↓2500

「くっ…マスマティシャンと竜星の具象化の効果！マスマティシャンは戦闘で破壊されたときにデッキからカードを1枚ドロ―する！そして具象化の効果でデッキからチューナーモンスター、闇竜星―ジョ

クトを守備表示で特殊召喚！」

闇竜星―ジヨクト DEF 2000

具象化の効果により現れたのは、定番のジヨクト。…そこ、ワンパターンのとか、言わないでください…。

「先にダメージを与えたのは南雲白選手！しかし巳柳遊華選手のフィールドには竜星の補助カードである竜星の具象化と、竜星モンスターの1体、ジヨクトがいる！」

「くっそー、厄介だな…カードを2枚伏せて、ターンエンド。行くぜブルーアイズ！」

白 手札5 (青眼の白龍) LP 4000

モンスター 青眼の白龍×1 (攻)

魔法・罫 セットカード×2

ブルーアイズに乗ってアクションカードを探す白。遊華もアクションカードを探しているが…中々見つからない。

「私のターン、ドロロー…ジヨクトの効果発動！手札の水竜星―ビシキと、魔竜星―トウテツを墓地へ送って、デッキから秘竜星―セフィラシウゴと、チューナーモンスター、光竜星―リフンを特殊召喚！」

秘竜星―セフィラシウゴ DEF 2600

光竜星―リフン DEF 0

ジヨクトの両脇にセフィラシウゴ、リフンが現れる。…だが、まだまだ準備の途中だ。

「手札からチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚！ジャンク・シンクロンの効果！このカードが召喚に成功したとき、墓地からレベル2以下のモンスター1体を、効果を無効にして守備表示で特殊召喚する！墓地のビシキを特殊召喚！」

ジャンク・シンクロンが現れ手をかざし、ビシキがフィールドに現れる。…そして、フィールドが埋まった。

ジャンク・シンクロン ATK 1300

水竜星―ビシキ DEF 2000

「巳柳選手のモンスターゾーンが埋まったー！そしてチューナーは

なんと3体！ここから連続シンクロが来るぞー!!」

「私は、レベル2のビシキに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！数多の英知を集め、その本に全てを記せ！シンクロ召喚！」

ジャンク・シンクロンが腰のレバーを引き、3つの歯車に変わり、その中にビシキが入り2つの星に変わる。歯車から光が放たれ、ハイパー・ライブリアンがフィールドに現れる。

「レベル5、TG―ハイパー・ライブリアン！」

「ちっ、ドラゴンじゃねえのかよ」

「…さらに私は、レベル6のセフィラシウゴに、レベル1のリフンをチューニング！禍々しい雷を纏い、暗闇より現れる！シンクロ召喚!!」

リフンが飛んで1つの歯車に変わり、その中にセフィラシウゴが入り6つの星となる。歯車から光が放たれ、そこから赤い雷と共に、ガイザーが現れる。

「レベル7、黒き竜の星、邪竜星―ガイザー！」

「お、来たなドラゴン！」

「…幻竜族、だからね。…TG―ハイパー・ライブリアンは、このカード以外のシンクロモンスターのシンクロ召喚に成功したとき、デッキからカードを1枚ドロウする。そしてガイザーの効果！自分フィールドの竜星と名のつくカードと、相手フィールドのカードをそれぞれ1枚ずつ破壊する！私は、ガイザーと右のセットカードを選択！」

「んな?!いきなり呼び出したモンスターを!?ってそれよりもチェーンして選択されたカード発動！スキル・プリズナー！こいつは自分フィールドのカード1枚を選んで、そのカードはこのターンの相手、相手の対象を取るモンスター効果の対象になったら、その効果を無効にする！ブルーアイズを選択！」

ブルーアイズに仄かな光が纏われる。ただそれだけだが、ただ破壊されるよりはましだろう。…そしてガイザーは、自らが放った赤い雷により、スキル・プリズナーと共に破壊される。

「巳柳選手、せっかく出したシンクロモンスターを破壊した?! いたい、どのような考えを…」

「答えはこういうこと! 破壊されたガイザーと具象化、リフンの効果! 自分フィールドでガイザーが戦闘か効果で破壊されたら、デッキから幻竜族モンスター1体を特殊召喚できる! さらにリフンは、自分フィールドの竜星と名のつくモンスターが戦闘、効果で破壊されたとき、墓地からこのカードを特殊召喚する! ということで、ガイザーの効果でデッキから幻竜族のチューナーモンスター、タツノオトシオヤを、具象化の効果でセフィラシウゴを、さらにリフンを自身の効果で、それぞれ特殊召喚!」

「んなあ?! さらに3体だってえ!?!」

タツノオトシオヤ ATK 2100

秘竜星―セフィラシウゴ DEF 2600

光竜星―リフン DEF 0

フィールドに現れるセフィラシウゴ、リフン、そしてタツノオトシゴのようなモンスター、タツノオトシオヤが現れる。

「ななななんとお?! 巳柳遊華選手のモンスターゾーンが再び埋め尽くされたー! いったい、何回モンスターゾーンを埋め尽くす気なんだー!!!」

「まだまだあゝ! 私はレベル6のセフィラシウゴに、レベル2の闇竜星―ジヨクトをチューニング! 煌めく光を纏い、天空より舞い降りよ! シンクロ召喚!!」

ジヨクトが飛んで2つの歯車になり、その中にセフィラシウゴが入り6つの星になる。歯車から光が放たれ、黄金の光と共にシヨウフクが現れる。

「レベル8、黄金の竜の星、輝竜星―シヨウフク! そしてシヨウフクの効果! シンクロ素材にした幻竜族モンスターの属性の種類まで、フィールドのカードをデッキに戻す! 残ったセットカードをデッキにバウンス! そしてTG―ハイパー・ライブラリアンの効果で1枚ドロ―!」

「くっそー! ブルーアイズを対象にしないってことは、そいつは対象

を取る効果か」

「そういうこと。そしてさらにさらに！墓地のレベル・ステイラーの効果！ハイパー・ライブラリアンのレベルを1つ下げ、特殊召喚！」

TG—ハイパー・ライブラリアン 星5↓4

レベル・ステイラー DEF 0

ハイパー・ライブラリアンからカードにある星が5つ飛び出し、そのうち1つがテントウムシになってフィールドに現れる。…そのテントウムシを…。

「そしてショウフクの効果！レベル・ステイラーを破壊し、墓地のジョクトを特殊召喚！」

普通に破壊し、再び現れるジョクト。さらなるシンクロを狙う気マンマンだ。

闇竜星—ジョクト DEF 2000

「そしてレベル8のショウフクに、レベル1のリフンをチューニング！」

「さつき出したシンクロモンスターを素材に、さらにシンクロだとお?!」

リフンが飛んで1つの歯車になり、その中にショウフクが入り、8つの星が変わる。

「数多の星々輝く天より、鮮やかな光を受け取り、具現化せよ！シンクロ召喚!!」

歯車から光が放たれ、そこから七色の光とともに現れたのは、鳥のような幻竜、チョウホウ。

「レベル9、無数の色に輝く竜の星、幻竜星—チョウホウ!!」

幻竜星—チョウホウ ATK 2800

「『巳柳遊華選手—ここでシンクロモンスターを素材に、さらなるシンクロ召喚を行ったー!』」

「そしてハイパー・ライブラリアンの効果で1枚ドロ—!それとチョウホウには、シンクロ素材にした竜星と名のつくモンスターの属性と元々の属性が同じ相手モンスターの効果の発動を封じる効果付き!結構ドロ—していたから手札にあるでしょ、オネスト!」

「ギク！な、なんのことかな」

明らかにオネストを手札に握っているであろう反応。…さらに言えば、白のデツキの主力級は光属性がほとんど。…とはいえ、エースの青眼の白龍は通常モンスターで攻撃力は3000、2800のままでは簡単に突破される。

「よ…っと。それじゃあタツノオトシオヤの効果！このカードのレベルを1つ下げ、タツノコトークンを1体特殊召喚する！」

チョウホウに乗った後、タツノオトシオヤの効果を使用した。するとタツノオトシオヤについている袋のようなところから卵のようなものが出てきて、それが成長し、小さなタツノオトシゴになった。

タツノオトシオヤ 星7↓6

タツノコトークン DEF 200

「レベル1のタツノコトークンに、レベル2のジヨクトをチューニング！シンクロ召喚！」

ジヨクトが2つの歯車になり、タツノコトークンが歯車の中に入り、1つの星となる。歯車から光が放たれ、現れたのは…少しドラゴンっぽい、タツノオトシゴ。

「レベル3、シンクロチューナー、たつのこ！」

たつのこ DEF 500

「ハイパー・ライブリアンの効果で1枚ドロ！そしてタツノオトシオヤの効果！レベルを1つ下げてタツノコトークンを特殊召喚！」

タツノオトシオヤ 星6↓5

タツノコトークン DEF 200

「さらにシンクロ召喚したたつのこは、手札のモンスター1体もシンクロ素材にできる！」

「なっ!?手札のモンスターをシンクロ素材にできるだど?!」

「私はフィールドのレベル1のタツノコトークン1体と、手札のレベル4の炎竜星―シュンゲイに、レベル3のたつのこをチューニング！」

たつのこが3つの歯車に変わり、その中にタツノコトークンとシュンゲイが入り、5つの星に変わって直列になる。

「赤き闘志滾らせ、情熱の炎燃やして現れろ！シンクロ召喚！」

歯車から光が放たれ、現れたのは赤い鎧を纏った剣士。腰には緑色のマントをつけている。

「レベル8、赤き情熱の剣士、クリムゾン・ブレード！シユンゲイの効果でクリムゾン・ブレードの攻撃力は500ポイントアップし、ハイパー・ライブリアンの効果で1枚ドロ！」

クリムゾン・ブレード ATK 2800↓3300

「ここまでこのターンで行ったシンクロ召喚は5回を超えています！いったい後何回、シンクロ召喚を行うつもりなんだ〜！」

「次でラストかな…タツノオトシオヤの効果！レベルを1つ下げてタツノコトークンを特殊召喚！」

タツノオトシオヤ 星5↓4

タツノコトークン DEF 200

「おいおい…」

「タツノオトシオヤの効果は1ターンに3回まで、これで打ち切りだけど…私はレベル1のタツノコトークンに、レベル4になったタツノオトシオヤでチューニング！自らの亡骸を糧とし、新たな命を生み出せ！」

タツノオトシオヤが4つの歯車になり、その中にタツノコトークンが入り、1つの光が変わる。歯車から光が放たれ、現れたのはどこか禍々しいオーラを放つ黒い竜。その胸には死者蘇生に使われているアंकと同じ形の模様が浮かんでいる。

「シンクロ召喚！レベル5、転生竜サンサーラ！ハイパー・ライブリアンの効果で1枚ドロ！」

転生竜サンサーラ DEF 2600

「え、えーつと…1、2、3………え?!な、なんと巳柳選手、これで7回！このターンだけで、7回もシンクロ召喚を行っています！恐ろしい！」

「な、何回シンクロしてんだよ！つうかさっさとこっちのターン…あ。アクションカード」

「バトル！クリムゾン・ブレードで、ブルーアイズを攻撃！」

クリムゾン・ブレードは素早くブルーアイズに接近して斬りかろうとする…が。

「アクションマジック、スターシールドをブルーアイズに対して発動！そのモンスターはこのターン、1度だけ戦闘及び効果じゃ破壊されない！」

「！うげ…」

スターシールド アクション魔法

①自分フィールドのモンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターはこのターンの終わりまで、戦闘及びカードの効果では1度だけ破壊されない。

星が1つ飛んできてクリムゾン・ブレードとブルーアイズの間に入り、クリムゾン・ブレードの攻撃が防がれる。そしてスターシールドはその後、その星は星が流れる川へと落ちていき、完全に混じった。

白 LP 4000↓3700

「どうだ！他のモンスターの攻撃力は全部3000より低い！攻撃してきてもいいんだぜ？」

「う…（手札には攻撃力を変える効果のある速攻魔法も手札誘発もない…墓地にも）アクションカード…見当たらない…カードを2枚伏せて、ターンエンド」

遊華 手札4 LP 2500

モンスター TG―ハイパーライブラリアン×1（攻）、幻竜星―  
チョウホウ×1（攻）、クリムゾン・ブレード×1（攻）、転生竜サ  
ンサーラ×1（守）

魔法・罠 「竜星の具象化」×1、セットカード×3

「あたしのターン、ドロ―…へへ、来たぜ来たぜ！手札から魔法カード、滅びの爆裂疾風弾！自分フィールドの青眼の白龍はこのターン攻撃できなくなる代わりに、相手フィールドのモンスターを全て破壊する!!」



「え?!う、うそ?!」

「いっけー!滅びのバースト・ストリーム!!」

ブルーアイズから放たれる光のブレスが、遊華のフィールドのモンスターを破壊する。遊華はすぐに手近の橋に飛び移ったが、その一掃には清々しさも感じる。

「く…:チヨウホウと具象化、サンサーラの効果!チヨウホウはシンクロ召喚されたこのカードが破壊されたとき、デッキからチューナーを1体手札に加える!そしてサンサーラは、相手によって戦闘か効果で破壊されたら、自分か相手の墓地のモンスターを特殊召喚できる!ジャンク・シンクロンを手札に!そして具象化の効果でデッキからヘイカン、サンサーラの効果で墓地からシュンゲイを、守備表示で特殊召喚!」

地竜星―ヘイカン DEF 0

炎竜星―シュンゲイ DEF 0

「一瞬にしてあれほどいた巳柳遊華選手のシンクロモンスターが全滅だー!なんとという強さだ、青眼の白龍!だが巳柳選手も負けてはいない!竜星の具象化により、すぐさま後続を用意したー!」

後続の準備は万全。…さらに言えば、遊華にはセットカードが3枚。迂闊に攻撃をしかけようものなら、簡単に返り討ちだ。

「さらに魔法カード、融合を発動!手札とフィールドの青眼の白龍の2体を融合!」

「えー融合!?!」

シンクロ使い、もしくはチューナーを使うデッキ、そう思っていた遊華は驚かされた。LDS以外での融合、シンクロ、エクシーズ…特にエクシーズに関してはまだまだ普及している、とは言えない。使っているところもあるがやはり数は少ない。

そしてそんな遊華のことはお構いなしに融合の渦が現れ、2体の伝説の龍が入っていく。ブルーアイズに乗っていた白は、ブルーアイズが渦に入る前に高く跳び上がった。

「強靱にして美しき2体の白き伝説よ!その力合わせ新たな伝説となれ!融合召喚!来い、青眼の爆裂双龍!!」

渦から飛び出してきたのは、双頭の青眼の白龍。だがその体には模様のように水色の線が走っているのが分かる。そして白は、その双頭の片方の上に着地した。

青眼の爆裂双龍 ATK 3000

「ここで南雲白選手！融合召喚だー！！2体のブルーアイズが合体した、双頭の龍！いったいどんな力を秘めているー！！」

「あ、出てきたところ悪いけどトラップ発動、激流葬。相手がモンスターを召喚、特殊召喚したらときに発動できて、フィールドのモンスターを全て破壊する」

「な、なにに？！簡単にやらせてたまるか！速攻魔法、禁じられた聖衣を、爆裂双龍に対して発動！このカードは対象モンスターの攻撃力を600下げる代わりに、対象モンスターは効果で破壊されなくなり、カード効果の対象にもならない！そしてこのカードの効果は、ターンの終わりまで持続する！」

「あちやー……」

青眼の爆裂双龍 ATK 3000↓2400

爆裂双龍の前に白い民族衣装のようなものが現れる……が、明らかに大きさを合わせたような大きさで、それを普通に着る。そしてフィールドには通常なら、波が押し寄せるのだが、今回はフィールドがフィールドだからなのか、星が押し寄せてきた。

「とおー……つとつとつとー……と。ふ……破壊されたハイカンとシュンゲイの効果！デツキから……シュンゲイとリフンを特殊召喚ー」

炎竜星―シュンゲイ DEF 0

光竜星―リフン DEF 0

ハイカンとシュンゲイが破壊され、後続にはシュンゲイ、リフンが現れる。ちなみに遊華は、星の波が届かない位置にある橋に飛び乗った……が、危うくバランスを崩して落ちかけた。ギリギリのところ落ちずには済んだ。

「まあともかくだ……こいつで滅びの爆裂疾風弾のデメリットは無視できる！じゃあ行くぜ、バトル！青眼の爆裂双龍で、リフンを攻撃！滅びの双爆裂疾風弾！！そして手札から速攻魔法、ハーフ・シャットを、リ

フンに対して発動！」

「は?!なんで?!」

光竜星―リフン（守備表示） ATK 0↓0

「そいつはな…こういうことだ！爆裂双龍の効果！こいつが相手モンスターを戦闘で破壊できなかつたら、そのモンスターを除外する！」

「え?!ハーフシャットは対象モンスターに戦闘破壊耐性をつけるカード…そして竜星は破壊じゃなきやリクルート効果は使えない!!」

「そういうことだ！思いっきりやれ、爆裂双龍!!」

双頭から放たれる2発分の滅びの爆裂疾風弾、2つが混ざりあつた威力は凄まじいもので、破壊されないはずのシンゲイが、光が消えた後には、いなかった。

「リフン…」

「爆裂双龍は1度のバトルフェイズに2回攻撃できるけど…シンゲイに攻撃しても意味は薄い。このままターンエンド。そしてこの瞬間、禁じられた聖衣の効果は終了する」

青眼の爆裂双龍 ATK 2400↓3000

白 手札2 LP 3700

モンスター 青眼の爆裂双龍×1（攻）

魔法・罫 なし

青眼の爆裂双龍の着ていた服は自然に消え、その双頭から咆哮を轟かせる。

「僅か1ターンで状況が逆転！手札では巳柳遊華選手のほうが有利だが、フィールド、そしてライフでは南雲白選手のほうが有利！このまま南雲白選手がその強さでデュエルを制するのか、それとも巳柳遊華選手が逆転し、勝利を手にするのか!!」

「くっそ…私のターン、ドロー…あ。いけるかも」

「え?」

「手札からチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚！ジャンク・シンクロンの効果！墓地からレベル2のビシキを特殊召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK 1300

フィールドにはジャンクシンクロンとビシキ、そしてシンゲイ。レベル3のジャンク・シンクロンと、レベル2のビシキ、そしてレベル4のシンゲイ……。お分かり、いただけるだろうか。

「私は、レベル4のシンゲイと、レベル2のビシキに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！古より恐れ崇められる、封じられし最強の龍よ…その封印は今解き放たれ、その猛威は世界の全てを飲み込む！シンクロ召喚！」

ジャンク。シンクロンが3つの歯車になり、シンゲイとビシキがその中に入り、6つの星になって直列になる。…そして歯車から光が放たれるのと同時に、膨大な冷気も放たれ……。双頭を越える、三頭の龍が、降臨する。

「へ、ヘクシヨン!!れ、レベル9、絶対零度の龍、氷結界ヘックシヨン！の、龍…ううう…トリシユウラ！」

氷結界の龍 トリシユウラ ATK 2700↓3200

「な、なんだなんっ!?き、さむ!?何?なんで!？」

「ううう…トリシユウラの効果!相手フィールド、手札、墓地のカードをそれぞれ1枚ずつ除外する!」

「はあ?!させるか!そいつにチェインして墓地のスキル・プリズナーを除外して効果!爆裂双龍を守る!」

「トリシユウラの効果は対象には取らない!よって対象を取る効果からヘクシユ!うう…対象を取る効果からカードを守るスキル・プリズナーも、これは防げなヘクシユ!防げない!」

「なんだとお?!ヘクシヨン!」

「私は、手札1枚、フィールドの爆裂双龍ヘクシユ!墓地の青き眼の乙女を選択!」

トリシユウラの3つの頭から放たれた圧倒的冷気がフィールドを飲み込み、白の手札、フィールド、墓地を凍らせる。

除外された手札

オネスト

「なんとということでしょう！フィールドが、一瞬にして氷漬けになりました！さらになんという寒さ！私のところにまで届いてヘクシユ！」

「さっきと終わらせヘクシユ！終わらせる！永続トラップ、強化蘇生を発動ヘクシユ！ぼ、墓地からシユンゲイを特殊召喚！」

炎竜星―シユンゲイ 星4↓5 ATK 1900↓2000  
DEF 0↓100

「バトル！トリシユーラで、ダイレクトアタック！」

観客席の最前列にまで届くこの冷気。…トリシユーラが、3つの頭の口に溜めていき…一気に解き放つ。

「寒すぎだろおおおおお!!」

白 LP 3700↓500

「シユンゲイで、ダイレクトアタヘクシユ！」

最後は、シユンゲイの口から吐き出された炎によつて、白のライフは0になった。

白 LP 500↓0

「うう寒…はっ！け、決着ヘクシユ！最後は一気に巳柳遊華選手が逆転！勝者は巳柳遊華選手だー!!…うう、皆様、風邪をひかないよう、ご注意ください」

デュエルが終了し、フィールドが元に戻る…が、気温まではすぐには戻らない。

「ううう…やっぱりトリシユーラ抜こうかな…」

「つ、つええけどこんなことになるなら、あたしなら使いたくないヘクシユ！」

…この後、LDSのほうから毛布が観客に渡されたり、大勢の人が温かいものを求め出店や売店、自販機へと向かったり、遊華が中島さんから怒られたりしたのは、また別の話し

「あく負けた負けた負けた…ヘクシユ！うう、早いところ体暖めないとな…」

デュエルフィールドから入退場用の通路を通っている白。…その傍らに、半透明の女性が浮かんでいる。

『白、ホントに大丈夫ですか？かなり寒かったですけど…』

「とりあえず体を温めるしかないだろ…」

どうやら半透明の女性と会話をしているようだ。………そしてこの女性、先ほどのデュエルで白が出した…青き眼の乙女そっくりである。

『風邪にはならないように注意してくださいね』

「気にはするけどひくときはひくしな…」

『それにしても、やはり私の扱い酷くはないでしょうか…いつもすぐ墓地へ送られますし…』

「それについては仕方ないって割り切ってくれ…それにしても…

あー、今回もいろいろ出せなかった」

## 第21話 星を司る戦士VS偉大なる英霊と精霊

「えー、では第5試合！デュエルをするのはこの2人！第1回戦を圧倒的な強さで勝利した、LDSエクシースコース所蔵！志島北斗選手！そしてこちらは第1回戦、危なげながらも勝利を掴んだ、LDS所属！赤馬零奈選手ー!!」

第4試合が終わり、第5試合…対戦するのは、北斗と零奈。どちらもLDSだ。

「よろしくお願いします」

「は、はい、よろしくお願いします…」

何やら悪寒を感じている北斗。その悪寒の原因は北斗を睨みつけている、毛布に包まれている遊華である。…そもそもデュエルで負けているいろあつてなんとか逃げ出して安心して間もなく、自身の番が来た。

「では早速参りましょう!!アクションフィールド、伝説の古城、セツト！」

リアルソリッドヴィジョン投影機が起動し、フィールドが広大な古城へと変わる。…ただし北斗と零奈がいるのは、その中にある広い庭。

「では、戦いの殿堂に集いしデュエリストが！」

「モンスターと共に地を蹴り、宙を舞い！」

「フィールド内を駆け巡る！」

「見よ！これぞデュエルの最強進化系！」

「アクション…」

「デュエル！」

北斗 LP 4000

零奈 LP 4000

「それじゃあボクのターン！手札から、セイクリッド・ポルクスを召喚！ポルクスが召喚に成功した場合、このターン、セイクリッドを通常召喚とは別に、1度だけ特殊召喚できる！セイクリッド・カウストを

召喚！」

セイクリッド・ポルクス ATK 1700

セイクリッド・カウスト ATK 1800

身体の半分が真っ白で特に装飾がない戦士と、ケンタウロスの戦士。セイクリッドではカウストが一番重要で、レベル4を2体、揃えるのがセイクリッドの基本戦術だ。

「レベルは…どちらも4、ということとは…」

「いいや、ボクが出すのはランク4じゃあない。カウストの効果発動！自分フィールドのセイクリッド1体のレベルを、1つ上げるか下げる！この効果は1ターンに2回発動でき、この効果でポルクス、カウストのレベルをそれぞれ1つあげる！」

カウストが矢を上に向かって放ち、その矢が光の粒子になってカウスト、ポルクスに降り注ぐ。

セイクリッド・ポルクス 星4↓5

セイクリッド・カウスト 星4↓5

「ボクはレベル5となったポルクス、カウストでオーバーレイ！2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

ポルクスとカウストが黄色い光になり、フィールドに現れた穴へと飛び込む。

「星々の光よ、今大地を震わせ降臨せよ！エクシース召喚！ランク5、セイクリッド・プレアデス！」

穴から現れたのは、白と金の鎧を纏った戦士。手には一振りの剣を持っている。

セイクリッド・プレアデス ATK 2500

「そしてカードを1枚伏せて、ターンエンド」

北斗 手札2 LP 4000

モンスター セイクリッド・プレアデス×1 (攻) OU×2

魔法・罠 セットカード×1

エンドフェイズになり、北斗は移動を開始。アクションカードを探しに行く。それを見た零奈はと言うと……あまり、動かない。この伝説の古城、安全性はしっかり確保されているが罠が仕掛けられてお



り、下手に動いて罠にはまる。…零奈の場合、デュエル以外の要素とアクションカードが絡むと大抵碌なことが起きない。

「志島北斗選手、いきなりエースモンスター、セイクリッド・プレアデスをエクシード召喚！さっそく強力なモンスターだー！」

「私のターン、ドロー…：フィールドにエクストラデッキから特殊召喚されたモンスターが存在することで、手札からEE ウンディーノを特殊召喚！」

EE ウンディーノ 天使族・効果 水属性 星3 ATK 0  
DEF 0

「EE ウンディーノ」の①の方法による特殊召喚は、1ターンに1度しか行えない。

「EE ウンディーノ」の②の効果は、1ターンに1度しか使用できない。

①フィールドにエクストラデッキから特殊召喚されたモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚することができる。

②このカードが特殊召喚に成功した場合、発動できる。自分のデッキからレベル4以下の「EE」Pモンスター1体を手札に加える。

EE ウンディーノ DEF 0

零奈のフィールドに現れたのは…水。その水が姿を変え、人間の女性の姿になった。…全裸、とかではなく服を着ているような感じにはなっている。

「おおっと、前のデュエルではまったくでなかったモンスターだ。いったいどんな効果を秘めているのでしょうか！」

「EE ウンディーノは特殊召喚に成功した場合、デッキからレベル4以下のEEと名のつくペンデュラムモンスター1体を、手札に加えます。この効果でデッキから、EE空の預言者 ウィングを手札に加え、そのまま召喚」

「EE…？」

EE空の預言者 ウイング 天使族・効果／ペンデュラム 光属性  
星1 ATK 0 DEF 0

【Pスケール：赤2／青2】

自分は、「EE」モンスターしかP召喚できない。この効果は、無効にできない。

①自分フィールド上に「EE」カードが存在しない場合、このカードのPスケールは、4になる。

②1ターンに1度、自分のメインフェイズに手札の「EE」儀式モンスターを相手に見せることで発動できる。自分フィールドからレベルの合計が、見せた儀式モンスターのレベル以上になるように自分の手札・フィールドのモンスターをリリースし、その儀式モンスター1体を儀式召喚する。

【モンスター効果】

「EE 空の預言者ウイング」の①の効果は、1ターンに1度しか使用できない。

①このカードが召喚、特殊召喚に成功した場合、発動できる。デッキから「預言書」カード1枚を手札に加える。

EE空の預言者 ウイング ATK 0

続いて零奈のフィールドに現れたのは……羽。舞い落ちる無数の羽。そして天から光が差し込み、フィールドに白い服を来た分厚い本を抱えた女性の天使が現れる。女性は目を閉じ、とても優しくような笑みを浮かべている。

「空の預言者 ウイングは召喚、特殊召喚に成功したらデッキから、預言書を1枚手札に加えます。この効果でデッキから…天の預言書を手札に加えます」

「預言者に預言書…(でも、プレアデスを使うわけにはいかないな。攻撃力は0、それに効果をもう1度使われたりしたら大変だ)」

「それでは…手札からスケール9のEE天の預言者 ブリッツを、ペンデュラムゾーンにセットイング！」

フィールドに光の柱が現れ、その中にウイングと似ている黄色い服

を着て、分厚い本を抱えた女性の天使が昇ってきた。

「スケール9：中々高いスケールですね」

「ええ：手札から天の預言書を発動し、天の預言者 ブリッツの、ペンデュラム効果！このカードは自分フィールドのモンスターを素材に、EE融合モンスター1体を、融合召喚できる。私が融合するのは、EE空の預言者 ウイングと、EE ウンディーノ！」

「！融合を…」

EE 天の預言者 ブリッツ 天使族・効果／ペンデュラム 光属性  
星2 ATK 0 DEF 0

【Pスケール：赤9／青9】

自分は、「EE」モンスターしかP召喚できない。この効果は、無効にできない。

①自分のPゾーンに、このカード以外の「EE」Pカードが存在しない場合、このカードのPスケールは4になる。

②1ターンに1度、自分のメインフェイズに発動できる。自分フィールド・手札から「EE」融合モンスターによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから融合召喚する。

【モンスター効果】

「EE 天の預言者ブリッツ」の①の効果は、1ターンに1度しか使用できない。

①このカードが召喚、特殊召喚に成功した場合、自分フィールド上の「預言書」カード、もしくは「EE」カード1枚を対象に発動できる。そのカードを手札に戻す。

「行きます。空を見つめる神秘の預言者よ、水を司る原始の精霊と交わり、古の英霊をここに呼び出さん！融合召喚！」

ウイングとウンディーノの2体がフィールドに現れた渦へと入り、渦からは…：簡単な作りながらも日本風のしつかりとした鎧を纏い、布の服を鎧の下に着ている男性が現れる。顔は兜の面で隠されてお

り、その手には1本の質素な剣が握られている。

「再臨せよ、太古の若き英霊、E E E英進霊 ヤマト！」

E E E 英進霊 ヤマト ATK 2200

「E E E英進霊 ヤマトの効果！自分フィールドの預言書カード1枚を手札に戻し、デッキからレベル4以下のE E Eモンスター1体を手札に加えます。この効果により、天の預言書を手札に戻し、デッキからE E E アークを手札に加えます。」

「サーチ効果か…でも攻撃力は2200、まだプレアデスのほうが」

「バトル！E E E英進霊 ヤマトで、セイクリッド・プレアデスを攻撃！そしてこの瞬間、E E E英進霊 ヤマトの効果！このカードは自分のターンのバトルフェイズの、このカードの攻撃宣言時に、このカードの攻撃力を500ポイントアップさせます！」

E E E英進霊 ヤマト 天使族・効果／融合 炎属性 星7 A

TK 2200 DEF 1700

「E E E」モンスター×2

①このカードが融合召喚に成功した場合、自分フィールドの「預言書」カード1枚を対象に発動できる。そのカードを手札に戻し、デッキからレベル4以下の「E E E」モンスターを1体手札に加える。

②自分のターンのバトルフェイズ、このカードの攻撃宣言時に発動できる。このカードの攻撃力を500ポイントアップさせる。

③このカードが破壊された場合、自分のエクストラデッキに表側表示で存在する「E E E」カード1枚を対象に発動できる。そのカードを手札に加える。

「へー…それで攻撃力を上げて、プレアデスを破壊する算段だろうか、残念。セイクリッド・プレアデスの効果！オーバレイ・ユニットを1つ使い、相手フィールドのカード1枚を手札に戻す！ヤマトには、手札に戻ってもらおうか」

「…天の預言書を発動。カードを2枚伏せて、ターンエンド」

零奈 手札2 (E E E アーク) LP 4000

モンスター なし

魔法・罨 永続魔法「天の預言書」、セットカード×2

Pゾーン EE天の預言者 ブリッツ：9

「それじゃあボクのターン、ドロロー！…ちっ。手札からセイクリッド・シエラタンを召喚！シエラタンの効果でデッキから、セイクリッド・ソンプレスを手札に！」

セイクリッド・シエラタン ATK 700

北斗のフィールドに、小柄なセイクリッド、シエラタンが現れる。頭には曲がつた角がついている。

「さあバトルだ！セイクリッド・プレアデスでダイレクトアタック!!」  
攻撃宣言を行った北斗。だが、いきなりデイスクから、ブー！という音が聞こえる。これはエラー、ということだ。

「……………え？…プレアデスで、ダイレクトアタック！」

…もう1度攻撃宣言を行うが、結果は同じ。そしてそんな様子を見ていた零奈が…。

「あの…実は、天の預言書の効果はランク4以上、もしくはレベル4以上のモンスターは攻撃できないって効果で…」

「え?!そのカードにそんな効果が?!」

天の預言書 永続魔法

「天の預言書」は、自分フィールドに1枚しか存在できない。

①このカードがフィールドに存在する限り、レベル4以上、もしくはランク4以上のモンスターは攻撃できない。この効果は、自分のフィールドに「EE」カードが存在しない場合、無効になる。

②このカードを発動した3ターン後のスタンバイフェイズ、発動する。このカードを墓地へ送る。

「で、でもセイクリッド・シエラタンのレベルは3！問題なく攻撃できる！シエラタンで、ダイレクトアタック！」

「…」

零奈 LP 4000↓3300

「これでターンエンド！（セットカードはセイクリッドの流星。さあ、攻撃してこい！）」

北斗 手札3 LP 4000

モンスター セイクリッド・プレアデス×1（攻）OU×1、セイクリッド・シエラタン×1（攻）

魔法・罠 セットカード×1

「ではエンドフェイズにリバーカード、オープン！永続トラップ、光の預言書」

「光の預言書…」

「私のターン、ドロー！…スタンバイフェイズに永続トラップ、光の預言書の効果発動！このカードは自分のターンのスタンバイフェイズに1度、デッキからレベル4以下のEE1体を手札に加えます。デッキからEE スターを手札に加えます」

光の預言書 永続罠

「光の預言書」の①の効果は、1ターンに1度しか使用できない。

①自分のターンのスタンバイフェイズに1度、発動できる。デッキからレベル4以下の「EE」モンスター1体を手札に加える。

②このカードを発動してから3ターン後のエンドフェイズに発動する。このカードを墓地へ送る。

「サーチカードか…それで？そこからは？」

「ここからです。EE アークは、フィールドにエクストラデッキから特殊召喚されたモンスターがいる場合、手札から特殊召喚できます。チューナーモンスター、EE アークを特殊召喚！」

「チューナー…ということとは、シンクロを」

EE アーク DEF 100

「EE アークは特殊召喚に成功した場合、EE アーク以外の墓地のレベル4以下のEEモンスター1体を特殊召喚できます。EE ウンディーノを特殊召喚し、ウンディーノの効果を発動します。デッキからEE ダークを手札に加えます」

フィールドに現れたのは光の球体。その球体から青い光が放たれ、その光がEE ウンディーンへと変化した。

EE アーク 天使族・効果／チューナー 光属性 星2 ATK  
100 DEF 100

「EE アーク」の①の方法による特殊召喚は、1ターンに1度しか行えない。

「EE アーク」の②の効果は、1ターンに1度しか使用できない。

①フィールドにエクストラデッキから特殊召喚されたモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚することができる。

②このカードが特殊召喚に成功した場合、自分の墓地に存在する「EE アーク」以外のレベル4以下の「EE」モンスター1体を対象に発動できる。そのカードを特殊召喚する。

EE ウンディーン DEF 0

「そして手札からEE ダークを召喚！EE ダークは召喚、特殊召喚に成功した場合、自分フィールドのEEと名のつくモンスターのレベルを、1つ上げるか下げる！」

「レベルを変化：（その効果でシンクロかエクシーズを決めるつもりか。でも例えそうだとしても、プレアデスの効果を使うまでだ。それに自分自身が発動したカードの効果で、多くのモンスターは攻撃できない）」

「私はEE アークのレベルを1つあげます！」

EE ダーク ATK 1200

EE アーク 星2↓3

EE ダーク 天使族・効果／ペンデュラム 闇属性 星4 AT  
K 1200 DEF 800

【Pスケール：赤5／青5】

①1ターンに1度、自分フィールドの「EE」モンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターの攻撃力を、ターンの終わりまで1

000ポイントアップさせる。

【モンスター効果】

「EE ダーク」のモンスター効果は、1ターンに1度しか使用できない。

①このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、自分フィールドの「EE」モンスター1体を対象に、以下の効果を発動できる。

- ・そのモンスターのレベルを1つ上げる。
- ・そのモンスターのレベルを1つ下げる。

新たに現れたのは、黒に近い紫色の人。ただし形は人型に近いものの、形は時折崩れ、その度に元に戻っている。

「そしてレベル4のEE ダークに、レベル3のEE アークをチューニング！古より伝わる神話の英雄よ、精霊達の力合わさりて、この地に再び降臨せよ！」

アークが3つの歯車になり、その中にダークが入り、4つの光に変わる。そして、歯車から光が放たれる。

「シンクロ召喚！大いなる剣に選ばれた英霊、レベル7、EE英靱霊 シグムンド！」

EE英靱霊 シグムンド ATK 2700

光から現れたのは、白銀の西洋風の鎧を纏い、顔は兜によって隠されている髪の長い騎士が現れる。…細めの体格ではある。その腰には1本の剣が鞘に納められている。

「ジグムントの効果！自分フィールドの預言書を1枚手札に戻すことで、相手フィールドのカード1枚を破壊します！天の預言書を手札に戻して、プレアデスを破壊！」

「なっ！だ、だが相打ちだ！プレアデスの効果！オーバーレイ・ユニットを1つ使い、ジグムントを手札…この場合はエクストラデッキに戻す！」

「させません。チェーンストラップ発動！スキル・プリズナー！モンスター1体を対象とするモンスター効果を無効にします！この効果でジグムントを守ります！」



「な、なにっ!?!」

EE 英靱霊 シグメント 天使族・効果／シンクロ 闇属性 星  
7 ATK 2700 DEF 2000

「EE」チューナー＋チューナー以外の「EE」モンスター1体以上  
①このカードがS召喚に成功した場合、自分フィールドの「預言書」  
カード、もしくは「EE」カード1枚を対象に発動できる。そのカー  
ドを手札に戻し、相手フィールドのカードを1枚破壊する。

②1ターンに1度、相手フィールドのモンスター1体を対象に発動  
できる。そのモンスターの攻撃力を600ポイントダウンさせる。

③このカードが破壊された場合、自分の墓地のレベル6以下の「E  
E」モンスター1体を対象に発動できる。そのカードを特殊召喚す  
る。

プレアデスの周囲を回っていた光がプレアデスの剣に宿り、その剣  
を振ると光が放たれ、ジグメントに迫った…が、その光は掻き消え、  
ジグメントが剣を抜き…プレアデスへ一気に迫り、斬りつけ破壊し  
た。

「!プレアデス!!くっこそ…」

「さらにエクストラデッキから特殊召喚されたモンスターが存在する  
場合、EE スターは手札から特殊召喚できます。手札からEE ス  
ターを特殊召喚! EEスターは手札から特殊召喚された場合、墓地の  
EEと名のつくモンスターを1体手札に加えます。この効果で、EE  
アークを手札に」

EE スター 天使族・効果／チューナー 光属性 星3 ATK  
0 DEF 0

「EE スター」の①の方法による特殊召喚は、1ターンに1度しか行  
えない。

「EE スター」の②の効果は、1ターンに1度しか使用できない。

①フィールドにエクストラデッキから特殊召喚されたモンスター

が存在する場合、このカードは手札から特殊召喚することができる。

②このカードが手札から特殊召喚された場あう、自分の墓地から「EE」モンスター1体を手札に加える。

「天の預言書を発動してレベル3のEE ウンディーネに、レベル3のEE スターをチューニング！古より伝わる神秘の存在よ、精霊達の力と合わさり、再びこの地に降臨せよ！シンクロ召喚！レベル6、輝きを放つ者、EEE 英輝霊スキルニル！」

スターが3つの歯車になり、その中にウンディーネが入り、3つの光になる。そして歯車から光が放たれ、現れたのは：周囲に輝く光球が3つほど浮かんでいる、仮面をつけた白いスーツの男性だ。

「スキルニルの効果！自分フィールドの預言書を2枚手札に戻すことで、デッキからEEと名のつくペンデュラムモンスター1体を手札に加えます！天の預言書、光の預言書の2枚を手札に戻し、デッキからEEE 英剣霊ア－サーを手札に！」

EEE英輝霊スキルニル 天使族・効果／シンクロ 光属性

星6 ATK 1800 DEF 1700

「EE」チューナー+チューナー以外の「EE」モンスター1体以上  
①このカードがS召喚に成功した場合、自分フィールドの「預言書」カード2枚を対象に発動できる。そのカードを手札に戻し、自分のデッキから「EE」Pモンスター1体を手札に加える。この効果でレベル7以上のモンスターを手札に加えた場合、自分はこのターン、「EE」モンスターしか特殊召喚できない。

②このカードが戦闘を行ったダメージ計算終了時、発動できる。このカードと戦闘を行った相手モンスターを破壊できる。

③このカードが破壊された場合、自分の墓地のレベル3以下の「EE」モンスター1体を対象に発動できる。そのカードを特殊召喚する。

「そして手札から魔法カード、EEイリュージョンを発動！自分のエ

クストラデツキから、EEペンデュラムモンスター1体を、直接ペンデュラムゾーンにセッティングします！この効果でエクストラデツキからスケール5のEE ダークを、ペンデュラムゾーンにセッティング！」

EEイリリジョン 通常魔法

「EEイリリジョン」の①、②の効果は1ターンに1度、どちらか1つしか使用できない。

①自分のエクストラデツキに表側表示の「EE」Pモンスター1体を対象に発動できる。そのカードを自分の空いているPゾーンに置く。

②自分の墓地にあるこのカードをゲームから除外し、自分フィールドの「EEE」モンスター1体を対象に発動できる。そのカードをリリースし、自分のデツキからそのモンスターよりレベルが1つ上の「EEE」モンスター1体を特殊召喚する。

フィールドに光の柱がもう1つ現れ、その中にダークが昇ってくる。

「！これで、ペンデュラム召喚が…」

「ええ。スケールはブリッツの9、ダークの5。よって、レベル6から8のモンスターを、同時に召喚可能です……天地の間揺れる神秘の振り子、時を経て語り継がれる英霊を、天よりこの地へと降臨させよ！ペンデュラム召喚！手札からレベル8…最強の聖剣を携え現れよ！EEE英剣霊 アーサー!!」

振り子が現れ、それが2つある光の柱の間を揺れ、上空に空いた穴が出現、その中からは一筋の黄色い光が落ちてきた。…現れたのは、絢爛豪華ながらも実用性に優れた西洋の鎧兜を身に纏い、腰には大きな一振りの剣が、鞘に収まっている。

EEE英剣霊 アーサー ATK 3000

「EEE英剣霊 アーサーの効果！このカードがペンデュラム召喚に成功した場合、相手フィールドの攻撃力1500以下のモンスターを

全て破壊します！」

「なんだとお?! (このままじゃセイクリッドの流星が使えなくなる!）」

「聖剣エクスカリバー・乱舞一撃!!」

EE 英剣霊 アーサー 天使族・効果／ペンデュラム 光属性  
星8 ATK 3000 DEF 2000

【Pスケール：赤8／青8】

①このカードがPゾーンにある場合、自分フィールド上の「EE」モンスターの攻撃力、守備力は700アップする。

【モンスター効果】

①このカードがP召喚に成功した場合、発動できる。相手フィールドの攻撃力1500以下のモンスターを全て破壊する。

②このカードが相手モンスターを戦闘によって破壊した場合、発動できる。そのモンスターの攻撃力分、自分のライフを回復する。

アーサーが鞘に納められた剣を抜く。：黄金の光を放つその剣は、明らかに普通の剣とは違う。そして踏み込み、一閃。聖剣から放たれた斬撃がシエラタンを斬り、一撃で破壊する。

「くっそー!…!アクションカード…よし」

「EE ダークのペンデュラム効果!自分フィールドのEEと名のつくモンスターの攻撃力を、このターンの終わりまで1000ポイントアップさせる!この効果でアーサーの攻撃力を、1000ポイントアップ!」

EE 英剣霊アーサー ATK 3000↓4000  
「攻撃力…4000!」

「バトル!英剣霊アーサーで、ダイレクトアタック!聖剣エクスカリバー・一閃大豪斬!!」

「アクションマジック、回避!これでアーサーの攻撃を無効に!うお!」

アーサーの剣から放たれる黄金の光が強くなり：横に振る。巨大

な黄金の斬撃が放たれるが、北斗にバリアが張られ、その攻撃を防ぐ…が、衝撃波を完全に殺すことはできないため、北斗は後ろに吹っ飛ぶ。

「ぐっ…！アクションカード…」

「スキルニルで、ダイレクトアタック！」

「！うわ！」

北斗 LP 4000↓2200

スキルニルの光球が北斗に当たりかける。それを北斗はかわしつつアクションカードを回収した…が。

「！なっ…アクションマジック、奇跡…モンスターがいなければ、意味がないじゃないか…っ！」

「…何もないなら、これで終わりです！ジグムントで、ダイレクトアタック!!」

「ぐっ…うわああああ!!」

北斗 LP 2200↓0

ジグムントの剣から放たれた衝撃波の直撃により、北斗のライフは0、デュエルが終了し、リアルソリッドヴィジョンが解除されていく。

「決まった…！！最初志島北斗選手の有利かと思いきや、最後には赤馬零奈選手が連続シンクロからのペンデュラムにより圧倒！

勝者は、赤馬零奈選手だ…!!!」

「くっそおっ負けた…」

「あ、あの…か、勝っておいていうのもなんですが…気を落とさないでください」

「…はい…」

それでもやっぱり、気を落としている北斗なのであった…。

## 第22話 勲章おじさん出沒

~~~~~ レオ・コーポレーション 司令室 ~~~~~

「…ん？」

「?どうかなさいました、社長」

「…6番のモニター、観客席の出入り口の辺りを拡大してくれ」

「はい」

舞網チャンピオンシップ真つ最中のあるとき…零児は何かを見つけたのか、モニターの映像の拡大を頼んだところ…。

「!なっ、柊柚子…」

「…いや、彼女はおそらく…」

…6番モニター、拡大したところには…柚子に瓜二つの顔を持つ、青い髪の少女がいる。ちなみにその会場でデュエルをしているのは、桜樹ユウ、相手はユーキである。

~~~~~ ユース選手権 会場 ~~~~~

「ジャッジメント・ドラゴンで、ダイレクトアタック!」

「うわああああ!!!」

ユウ LP 1400↓0

「決まったー!!誰が予想していたでしょうか!!去年のジュニアユース優勝者である桜樹ユウ選手、ここで敗れる!!勝者は今回のユースクラスのダークホース!ユーキ選手——!」

その頃ユーキは、ワンキルしていた。…サーチしたバレバレのセットカードに魔導法皇ハイロンをエクシーズ召喚しただけのフィールドであり、ユーキの手札と墓地肥しの結果、簡単にワンキルできるような状態だったため、こうなった。

「はあ…」

ユース選手権会場の駐車場…桜樹ユウは肩を落とし、歩いていた。…すると…。

「お前が桜樹ユウだな」

「え？…まあ、そうだけど…」

「お前はエクシーズの残党か？」

セレナが、話しかけてきた。それも、後ろにゴツイおっさん、バレットを連れて。…セレナの質問に対し、桜樹ユウは…。

「エクシーズの残党？確かにボクはエクシーズ使いだけど、どういう意味だ？」

「…やはり違うようだな。…どこへでもいけ」

…エクシーズの残党、つまりエクシーズ次元の人間を探しているセレナ。今の彼女にとって、エクシーズの残党と確実に言える人物以外はエクシーズ使いでもあまり気にしない。先程のデュエルを見て桜樹ユウは違うとは思ったが念のために訊きに來ただけだ。

「どこへでも行けって…君ね」

「エクシーズの残党以外のヤツに興味はない。行くぞバレット」  
「はっ」

セレナとバレットは後ろを向き、その場を去ろうとした…が。

「待て」

…その声に、バレットとセレナは止まり、桜樹ユウとともに声のほうを見る。……そこにいたのは、若干息を切らしているように見える零児だ。

「！社長！」

「桜樹、今回は残念だった。だが機会は決して残っていないわけではない。次に生かせ。…とりあえず、今はここから離れてくれ」

「え？は、はい」

特にここに留まる理由もない桜樹ユウは、すぐに離れる。…セレナとバレットもここに留まる理由は

「あなた方は待っていただけですか？アカデミアのお二人」

「少なくとも、こちら側は通すつもりはございません」

…ないが、零奈と南が立ちふさがる。…通す気はないとのこと。

「邪魔をするな。私はエクシーズの残党、そいつに会う」

「会ってどうするつもりだ」

「…そいつに、あのときのあいつの話しが、本当なのかを聞く。…あい

つもエクシーズの残党とはいえ、2人分の証言があったほうが、より信憑性が増す」

「あのときの……君の期待に添えるかは分からないが、私と共に来れば、エクシーズ次元の人間とは話しができるぞ」

「セレナ様、騙されてはなりません。あのように言い、セレナ様を捕らえ、こちらの情報を聞き出すつもりです。緑霊楓の行方も知れず、誘いに乗るのは危険です」

その緑霊楓は絶賛レオ・コーポレーションの医務室にて拘束されディスクを取り上げられているのを、2人は知らない。

「だがここを通るには、私たちを倒してからだ」

「お前のさっきの言葉はいいと思う。だが、私は私の力で探す。邪魔立てするなら……」

といいプレートを展開し、ディスクを構えるセレナ。そして

「セレナ様、数が多い以上お手を煩わせてしまいますが」「構わない」

「では、私は男のほうを、セレナ様は後ろをお願いします。こちらが片付き次第、すぐに加勢します」

「ああ。ならお前が加勢する前に終わらせる」

バレットもディスクを構える。相手は……。

「南、セレナの相手は頼んだ。男のほうは私が相手をする。零奈は他に誰かこないか見張っていてくれ。敵なら相手を頼む」

「了解しました、社長」

「はい、兄様」

零児もディスクを構える。そして南は……何やら両手を開き、掌を見せている。

「……何のつもりだ」

「まあ見ていてください。スリー、ツー……ワン」

ワンと言った後、片手で片手を瞬時に覆う。…そしてその片手を退かすと……そこには、1つのデッキがある。

「……どこから……」

「種も仕掛けもある、いわゆる手品です。では改めて……よろしくお願



「いしますね」

「まあいい…デュエル中でさつきみたいなきことをしたら許さない」

「そんな無粋なことをするつもりはございません」

「では、さつきと始めよう」

「ああ」

「「デュエル！」」

バレット LP 8000

零児 LP 8000

「先んずれば人を制す、私のターン！手札からダーク・センチネルを召喚！ダーク・センチネルは召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキからビーストボグか獣闘機勲章と名のつく魔法か罨を1枚手札に加える。私はデッキから獣闘機融合装置を手札に加える」

ダーク・センチネル ATK 1500

ダーク・センチネル 機械族・効果 闇属性 星4 ATK 1500 DEF 1800

「ダーク・センチネル」の①の効果は、1ターンに1度しか使用できない。

①このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、発動できる。デッキから「ビーストボグ」魔法・罨カードもしくは「獣闘機勲章」魔法・罨カードのどちらか1枚を手札に加える。

②1ターンに1度、相手フィールドのセットされた魔法・罨ゾーンのカード1枚を対象に発動できる。そのカードを確認する。

フィールドに現れたのは、監視カメラが戦闘機つぼくなったような小型の機械。その効果により、手札に加えたのは…名前からして、融合関連と思われる。

「そして永続魔法、ビーストボグ・フュージョナー 獣闘機融合装置を発動！このカードがある限り、

私は通常召喚を行えないが、1ターンに1度、自分の手札、フィールドのモンスターを素材にビーストボグ 獣闘機融合モンスターを融合召喚できる！私は手札の漆黒の豹戦士パンサーウオリアーと、フィールドのダー

ク・センチネルを融合！」

ビーストボグ・フュージョナー  
獣闘機融合装置 永続魔法

①1ターンの1度、自分のフィールド・手札から「ビーストボグ獣闘機」融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体を融合召喚する。

②このカードが魔法・罨ゾーンに表側で存在する限り、自分は通常召喚を行えない。

バレットは、自身が発動した永続魔法により、融合を行う。融合の渦に、ダーク・センチネルと鎧に剣と盾を持つ、紫色の豹の戦士、パンサーウオリアーが入る。

「さっそく融合召喚か」

「ああそうだ。獰猛なる黒豹よ、聖なる闇の番人と混じわり、新たな雄叫びをあげよ！融合召喚！現れ出でよ、ビーストボグ獣闘機・パンサー・プレデター!!」

フィールドに現れたのは…半身がダーク・センチネルと同じ色合いで、ダーク・センチネルと同じようなパーツを使われている機械の体、もう半身はパンサーウオリアーで、剣を持つサイボーグの獣人。

ビーストボグ  
獣闘機・パンサー・プレデター ATK 1600

ビーストボグ  
獣闘機・パンサー・プレデター 機械族・効果／融合 闇属性 星6

ATK 1600 DEF 2000

レベル4・地属性・獣戦士族モンスター+レベル4以下・闇属性・機械族モンスター

①1ターンの1度、自分フィールドの「ビーストボグ獣闘機」モンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える。

②このカードが相手モンスターとの戦闘及び相手のカードの効果で破壊された場合、発動できる。このカードの融合素材としたモンスター1組を自分の墓地から特殊召喚する。

「パンサー・プレデターの効果！1ターンに1度、自分フィールドの<sup>ビーストボク</sup>獣闘機モンスター1体を対象にし、そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを、相手に与える！私のフィールドにいる<sup>ビーストボク</sup>獣闘機は、パンサー・プレデター1体。よってパンサー・プレデターを対象にし、攻撃力1600の半分、800のダメージを与える！」

「っ…」

パンサー・プレデターに赤いオーラが纏われ、そのオーラが剣へと集まり、剣を振り下ろしてそのオーラが零児へと放たれ直撃した。

零児 LP 8000↓7200

「さらにカードを3枚伏せて、ターンエンド」

バレット 手札0 LP 8000

モンスター <sup>ビーストボク</sup>獣闘機・パンサー・プレデター×1 (攻)

魔法・罫 永続魔法 「<sup>ビーストボク</sup>獣闘機融合装置」×1、セットカード×3

「いきなり手札0枚にしてきたか」

「リスクがあろうとも、私は私のやり方をやるだけだ」

「…私のターン、ドロロー。…私はカードを2枚伏せ、永続魔法、地獄門の契約書を発動。地獄門の契約書は1ターンに1度、デッキからDDモンスター1体を手札に加える。私はデッキからDDナイト・ハウリングを手札に加える」

「む、永続魔法のサーチカード…早々に除去しなければ」

「さらに私はクリバンデットを召喚」

クリバンデット ATK 1000

零児がフィールドに呼び出したのは……攻撃力1000の、悪魔族。黄色いバンダナに短い手足のついた毛玉のモンスターだ。

「ほう、クリバンデットとは…墓地アドバンテージが必要なようだな」  
「私は私のやり方をやるだけだ。ターンエンド。エンドフェイズ、クリバンデットの効果発動。このカードをリリースし、5枚をめくる」  
捲られたカード

DDD制覇王カイゼル

DDD壊薙王アビス・ラグナロク

## 魔神王の契約書

ダメージ・ダイエツト

DD魔導賢者コルペニクス

「私は魔神王の契約書を手札に加える。さあ、お前のターンだ」

零児 手札4 (DDナイト・ハウリング、魔神王の契約書) LP

7200

モンスター なし

魔法・罨 セットカード×2、「地獄門の契約書」×1

「だがお前のエンドフェイズにリバースカード、ダブルオープン！リ  
ビングデットの呼び声！そして白瞬の獣闘機勲章！墓地のダーク・セ  
ンチネルを特殊召喚！ダーク・センチネルの効果で、デツキから  
獣闘機融合装置を手札に加える。そして白瞬の獣闘機勲章は自分  
フィールドの獣闘機融合モンスターの攻撃力を、200ポイント  
アップさせる！」

獣闘機パンサー・プレデター ATK 1600↓1800

「ビーストボグ・フュージョナーをさらにもう1枚手札に加えたか」  
「この意味が分かるなら、中々の実力者だ。私のターン！私はビース  
トボグ・フュージョナーの効果を発動し、手札の漆黒の戦士ワーウ  
ルフとフィールドのダーク・センチネルを融合！」

マントをつけた黒い狼の獣戦士と、ケンタウロスとも言える獣人  
と、ダーク・センチネルが融合の渦の中に入る。

「牙向く戦場の狼よ、聖なる闇の番人と1つとなりて、新たな野獣の勇  
者となれ！融合召喚！現れ出でよ、獣闘機ウルフ・ケンプファー!!」  
フィールドに現れたのは：左腕以外の全身が機械になっているよ  
うに見えるサイボグ獣人。右肩には2門の穴が開いた機械：ミサ  
イルランチャーのようなものが取り付けられている。

獣闘機ウルフ・ケンプファー ATK 2200↓2400

「さらにリバースカードオープン！永続トラップ、白刃の獣闘機勲章  
！そして」

「少し待ってもらおう。永続トラップ、戦乙女の契約書を発動。その  
効果で、手札のDD、もしくはは契約書を1枚墓地へ送り、相手ファイ

ルドのカード1枚を破壊する。私は手札のDDバフオメットを墓地へ送り、白瞬の獣闘機勲章を破壊する」

「くっ…白瞬の獣闘機勲章が破壊されたことで、私のフィールドのモンスターは、元に戻る」

|               |     |      |   |      |
|---------------|-----|------|---|------|
| 獣闘機パンサー・プレデター | ATK | 1800 | ↓ | 1600 |
| 獣闘機ウルフ・ケンプファー | ATK | 2400 | ↓ | 2200 |

白瞬の獣闘機勲章 永続罫

「白瞬の獣闘機勲章」の②の効果は、1ターンに1度しか使用できない。

①自分フィールドの「獣闘機」融合モンスターの攻撃力は、200ポイントアップする。

②1ターンに1度、相手が効果ダメージを受けた場合、発動できる。相手が受けたダメージの数値より低い攻撃力を持つレベル4・閻魔性・機械族モンスター、もしくはレベル4の獣戦士族モンスターのどちらか1体を手札に加える。

「確認したところ、白瞬の獣闘機勲章は妙な効果を持っているようだから、破壊させてもらった」

「おのれ…だが仕方ない。パンサー・プレデターの効果！私はウルフ・ケンプファーを対象にし、攻撃力2200の半分、1100のダメージを与える！」

「墓地のダメージ・ダイエットの効果！このカードをゲームから除外することで、このターン、自分が受ける効果ダメージは半分になる！くっ…」

零見 LP 7200↓6650

「何…（白刃の獣闘機勲章の効果は…使わないほうがいいな）」

白刃の獣闘機勲章 永続罫

①1ターンに1度、相手が100ポイント以上の戦闘もしくは効果ダメージを受けた場合、発動できる。そのダメージ100ポイントに

つき、このカードに勳章カウンターを1つ乗せる（最大10個まで）。  
②勳章カウンターが乗っているこのカードを墓地へ送り、自分フィールドの「ビーストボック獣闘機」モンスター1体を対象に発動できる。そのカードの攻撃力を、このカードに乗っていた勳章カウンターの数×100ポイントアップさせる。

今度はウルフ・ケンプファーに赤いオーラが纏われ、パンサー・プレデターの剣にそのオーラが集まり、再び放たれる。今度は先ほどよりも大きかったがダメージダイエットの効果で受けたダメージは軽減される。

「…獣闘機勳章2枚、それにモンスターには獣闘機勳章をサーチする効果を持つモンスターも存在する…よほど勳章が好きなようだな」

「このデツキの特徴だけでなく、勳章は戦果をあげた証、数多の戦場を潜り抜けた歴戦の戦士の証だ。バトル！ビーストボック獣闘機。パンサー・プレデターで、ダイレクトアタック！インダストリアル・スラッシュュー！」

「！ぐお！」

零児 LP 6650↓5050

「そしてウルフ・ケンプファーのモンスター効果！ビーストボック獣闘機が相手に戦闘ダメージを与えたとき、相手に500ポイントのダメージを与える！」

「だがダメージ・ダイエットの効果で、ダメージは半分になる！くっ…」

ビーストボック獣闘機 ウルフ・ケンプファー 機械族・効果／融合 闇属性 星6

ATK 2200 DEF 1500

レベル4・闇属性・獣戦士族モンスター+レベル4以下の闇属性・機械族モンスター

①自分フィールドの「ビーストボック獣闘機」モンスターが相手に戦闘ダメージを与えた場合、発動できる。相手ライフに500ポイントのダメージを与える。

②このカードが相手モンスターとの戦闘及び相手のカードの効果

で破壊された場合、発動できる。このカードの融合素材としたモンスター一組を自分の墓地から特殊召喚する。

ウルフ・ケンプファアの肩にあるランチャーからミサイルが放たれ、零児の足元で爆発し、ダメージを与える。

零児 LP 5050↓4800

「そしてウルフ・ケンプファアでダイレクトアタック！」

「！ぐおっ！」

零児 LP 4800↓2600

「そしてこの瞬間、白刃の獣闘機勲章とウルフ・ケンプファアの効果！白刃の獣闘機勲章は相手がダメージを受けたら、そのダメージ100につき1つ、このカードに勲章カウンターを乗せる！お前が受けたダメージは2200、よって22個：と言いたところだが、白刃の獣闘機勲章に寄せられる勲章カウンターは10個まで、よって白刃の獣闘機勲章に勲章カウンターを10個乗せ、ウルフ・ケンプファアの効果で500の半分、250のダメージだ」

「っ…」

白刃の獣闘機勲章 勲章カウンター 0↓10

零児 LP 2600↓2350

「私は、白刃の獣闘機勲章の効果を発動！このカードを墓地へ送り、自分フィールドの獣闘機<sup>ビーストボーグ</sup>1体の攻撃力を、乗っていた勲章カウンターの数×100ポイントアップさせる！勲章カウンターは10個、よってパンサー・プレデターの攻撃力を1000ポイントアップさせる！  
<r 獣闘機：ビーストボーグ>パンサー・プレデター ATK 1600↓2600

「これでターンエンドだ」

バレット 手札1 <sup>ビーストボーグ・フュージョナー</sup>(獣闘機融合装置) LP 8000

モンスター <sup>ビーストボーグ</sup>獣闘機パンサー・プレデター×1(攻)、<sup>ビーストボーグ</sup>獣闘機ウル

フ・ケンプファア×1(攻)

魔法・罫 <sup>ビーストボーグ・フュージョナー</sup>「獣闘機融合装置」×1、「リビングデッドの呼び声」×

1

「私のターン、ドロー！…スタンバイフェイズ、私は地獄門、戦乙女、ヴァルキリー2枚の契約書の効果で1000ポイントのダメージ、合計2000ポイントのダメージを受ける。まずは、地獄門の契約書のダメージを受ける…！ぐうう…」

零児 LP 2350↓1350

「ほう、リスクを冒して利益を得る。その姿勢、勲章ものだな」

「勲章…？そんなものに興味はない。だが…このリスクを利益へと変えてみせよう。手札のDDD反骨王レオニダスの効果！自分が効果ダメージを受けた場合このカードを特殊召喚し、受けたダメージ分ライフを回復する！」

「何？」

紫色の瘴気により、ダメージを受けた零児のフィールドに唐突に現れた金色の鎧を纏った王。剣と盾という至ってシンプルながらも心強いモンスターだ。そのモンスターの盾から緑色のオーラが放たれ、零児のライフを回復する。

DDD反骨王レオニダス ATK 2600

零児 LP1350↓2350

「だがライフを回復したところで、もう1枚の契約書が」

「レオニダスがフィールドに存在する限り、私への効果ダメージは全て、0になる」

「なんだと?!」

もう1枚の契約書の効果により、零児に紫色の瘴気がまとわりつくが、レオニダスの剣がその瘴気を払った。

「貴様、何故前のお前のターンにそのモンスターを手札に加えなかった！私をバカにしたいのか！」

「パンサー・プレデターの効果は攻撃力を参照にする。そうとなれば、攻撃力を上昇させるカードは必ず入る。たった1度のダメージを凌いでも、その後レオニダスを破壊されては意味がない。…とはいえ、ドローでこなかったらかなり厳しかったがな」

「くっ…」

「(もつともこなくとも、別の手段を使っただけだが)では続けさせて



もらおう。私は地獄門の契約書の効果を発動し、デツキからDDD壊  
薙王アビス・ラグナロクを手札に加える。そしてスケール5のDDD  
壊薙王アビス・ラグナロクを、ペンデュラムゾーンにセッティング」  
零児のフィールドに光の柱が現れ、その中に：椅子に座り、両肩と  
頭に角、体にはいくつものベルトをつけたフードを被る王が昇ってき  
た。

「ほう、それが風の噂に聞いたペンデュラムか」

「…そして手札からチューナーモンスター、DDナイト・ハウリングを  
召喚。DDナイト・ハウリングは召喚に成功したとき、墓地のDDを  
1体、特殊召喚できる。この効果で私は墓地のDD魔導賢者コルペニ  
クスを特殊召喚する」

DDナイト・ハウリング ATK 300

DD魔導賢者コルペニクス ATK 0

フィールドに現れるナイト・ハウリング。この効果により現れたの  
は……中央に炎の球体、その上部に大小様々で様々な色を持つ玉が  
いくつ浮か浮いていたり、輪にセットされたりしている…全体的に見れ  
ば地球儀にも見えるよく分からないモンスターが現れた。

「DD魔導賢者コルペニクスの効果。デツキからDDか契約書を1枚  
墓地へ送る。この効果でデツキからDDネクロ・スライムを墓地へ」  
「おろかな埋葬を内蔵したモンスターか…」

「そして私は、レベル4のDD魔導賢者コルペニクスに、レベル3のD  
Dナイト・ハウリングをチューニング！闇を切り裂く咆哮よ、疾風の  
速さを得て、新たな王の産声とならん！シンクロ召喚！レベル7、D  
DD疾風王アレクサンダー！」

ナイト・ハウリングが3つの歯車になり、その中にコルペニクスが  
入り、4つの光になり、歯車から光が放たれる。現れたのは、疾風王  
アレクサンダーだ。

DDD疾風王アレクサンダー ATK 2500

「そして私は永続魔法、魔神王の契約書を発動し、効果。このカードは  
1ターンに1度、自分の手札、フィールドのモンスターを素材に悪魔  
族モンスター1体を融合召喚する。またこの場合にDD融合モンス

ターを融合召喚する場合、墓地のモンスターを除外し融合素材にできる」

「墓地のモンスターも素材にできるだと…」

「私はフィールドのDDD反骨王レオニダスと、墓地のDDD制覇王カイゼルを融合！勇猛果敢たる軍勢の王よ、世界を制覇せし王と合わさり、新たな世界を切り開け！融合召喚！出現せよ、極限の独裁神、DDD怒濤壊薙王カエサル・ラグナロク!!」

融合の渦の中に、レオニダスと半透明のカイゼルが入り…現れたのは、このデュエルでは出てきていない怒濤王シーザーのような色合いと顔つきではあるものの、アビス・ラグナロクの角全部、ボロボロのマント、そしてベルトのようなものが背中から延びている王が現れる。ちなみにイスに座っていない。

DDD怒濤壊薙王カエサル・ラグナロク ATK 3200

「さらにDDD疾風王アレクサンダーのモンスター効果発動！自分フィールドにDDモンスターが特殊召喚された場合、墓地からレベル4以下のDDモンスター1体を、特殊召喚する！私は墓地のDDバフォメットを特殊召喚！」

アレクサンダーの周りに風が渦巻き、その風に乗って、背中に鳥類の翼、左腕にはコウモリの翼、右腕は2つある悪魔が現れた。

「DDバフォメットのモンスター効果！自分フィールドのDDモンスター1体のレベルを、1から8の間のどれかのレベルに変更する！私はアレクサンダーのレベルを4にする！」

DDD疾風王アレクサンダー 星7↓4

「レベル4が、2体…エクシーズか！」

「その通りだ。私はレベル4となったDDD疾風王アレクサンダーと、レベル4のDDバフォメットで、オーバーレイ！2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！この世の全てを総べるため、今世界の頂に降臨せよ！エクシーズ召喚！生誕せよ、ランク4、DDD怒濤王シーザー！」

DDD怒濤王シーザー ATK 2400

フィールドに空いた穴の中に、アレクサンダーが黄緑、バフォメツ

トが紫色の光になり、飛び込む。：穴からは、怒濤王シューザーが現れる。：カエサル・ラグナロクとシューザーが並んでいると、少し不思議な感じだ。

「そして私はランク4のDDD怒濤王シューザーをエクシーズ素材に、オーバーレイ！」

「何!？」

「英雄の名賜りし者、深淵なる大義もて、この世の全てをいぎ射抜かん！エクシーズ・チェンジ！ランク5、DDD狙撃王テル！」

フィールドに空いた穴の中にシューザーが飛び込み、現れたのは……何やら、上半身、腹から首下にかけてリングのようで、左上がかじられそこから矢の先端が3本飛び出ており、右腕は機械、そしてボウガンを手を持つ緑の髪の王が現れる。

DDD狙撃王テル ATK 2300

「狙撃王テルの効果！自分が効果ダメージを受けたターン、オーバーレイ・ユニットを1つ使い、相手モンスター1体の攻撃力、守備力を1000ポイント下げ、相手ライフに1000ポイントのダメージを与える！…（ここは…）：ウルフ・ケンプファアの攻撃力、守備力を1000ポイント下げる！」

「ぐつ…ぬん」

ビーストボーグ  
獣闘機ウルフ・ケンプファア ATK 2200↓1200

バレット LP 8000↓7000

テルの周囲を回る3つのオーバーレイ・ユニットのうち、水色のオーバーレイ・ユニットがテルのボウガンへと吸収され、エネルギーの矢になる。そして矢が3本放たれ、うち2本はウルフ・ケンプファアに、1本はバレットに刺さる。：自身に刺さった矢を、バレットは引き抜いたが…。

「さらに墓地のDDネクロ・スライムの効果！墓地のこのカードと、フィールドか墓地のモンスターを除外し、DDD融合モンスター1体を融合召喚する！私は墓地のDDD疾風王アレクサンダーとDDネクロ・スライムを融合！」

「融合などを使わず、墓地のみで融合だ?!」

「靈魂と交わり形を変える渦よ、猛き疾風と混ざり合い、新たな王を呼び覚ませ！融合召喚！現れよ、竜を破りし王、DDD剋竜王ベオウルフ!!」

フィールドに現れたネクロ・スライムが渦となり、その中に半透明のアレクサンダーが入る。そして現れたのは…いわゆる、人狼。黒と銅の鎧に赤茶色のズボンを穿いている。また、銅の部分にはトゲが一定間隔でついている。

DDD剋竜王ベオウルフ ATK 3000

「さらにペンデュラムゾーンのDDD壊薙王アビス・ラグナロクのペンデュラム効果！自分フィールドにDDモンスターが特殊召喚された場合、墓地のDDモンスター1体を特殊召喚し、1000ポイントのダメージを受ける！そしてこの効果を発動したターン、相手が受ける戦闘ダメージは半分になる」

「1000ポイントのダメージだと…今お前のフィールドにはレオニダスはいない。タイミングを誤ったな」

「私は墓地の、DDD壊薙王アビス・ラグナロクを特殊召喚し、1000ポイントのダメージを受ける…！ぐうう…」

DDD壊薙王アビス・ラグナロク DEF 3000

零児 LP 2350↓1350

「ぐつ…今特殊召喚したアビス・ラグナロクのモンスター効果！このカードは特殊召喚に成功した場合、墓地のDDD1体を特殊召喚する！私は墓地のDDD怒濤王シーザーを特殊召喚する！」

「！狙撃王テルの召喚に素材にしたモンスター…なるほど、テルの効果を発動したときに…」

「その通りだ。そして私はDDD壊薙王アビス・ラグナロクのもう1つのモンスター効果を発動。自分フィールドのDDモンスター1体をリリースし、相手フィールドのモンスター1体を除外する！私はシーザーをリリースし、パンサー・プレデターを除外！」

「なっ…しまった!!」

アビス・ラグナロクが、シーザーを自身から伸びているベルトで絡めとり吸収、別のベルトがパンサー・プレデター目掛け勢いよく飛ん

でいき貫き、パンサー・プレデターは除外される。

「…さつき、タイミングを誤ったと言ったな？だが、私としてはこれ別に構わない。私はリリースされたDDD怒濤王シーザーの効果を発動。このカードはフィールドから墓地へ送られた場合、デッキから契約書1枚を手札に加える。この効果でデッキから、戦乙女ヴァルキリーの契約書を手札に」

「その効果を発動するためにダメージを甘んじて受けたか。やはり勲章も」

「だから勲章になど興味はない。トラップ発動！リリース・ロンダリング契約洗浄！自分フィールドの表側の契約書を全て破壊し、その数だけデッキからカードをドロウし、ドロウした枚数だけライフを1000回復する！私のフィールドにある契約書は3枚、よってこの3枚を破壊し、3枚ドロウ！そしてライフを3000回復する！」

「3枚もドロウした上で3000も回復するだ?!」

零児 LP 1350↓4350

頼りなかつた零児のライフが、デュエル開始時の半分にまで一気に回復。その上に3枚も手札が増えたのだ。できることはより多くなる。

「…では、始めよう。私はスケール10のDD魔導賢者ケプラーを、ペンデュラムゾーンにセッティング！」

零児のフィールドにもう1つ光の柱が現れ、その中にケプラーが昇ってくる。これで、ペンデュラム召喚が可能になった。

「これで私は、レベル6から9のモンスターを、同時に召喚可能！我が魂を揺らす大いなる力！この身に宿り、闇を引き裂く、新たな力となれ！ペンデュラム召喚！エクストラデッキからレベル7、DDD反骨王レオニダス！」

「これがペンデュラム召喚、というものか…」

2つの光の柱の間に振り子が現れ、柱の間を揺れる。そして天井辺りの空間に穴が開き、穴から紫色の光が落ちてきて…レオニダスが、現れる。

DDD反骨王レオニダス ATK 2600

「さあ、始めよう。バトル！行け、DDD反骨王レオニダス！ウルフ・ケンプファアを攻撃！」

「だが戦闘ダメージは半分となっている！この程度、痛くも痒くもないわ!!」

バレット LP 7000↓6300

ウルフ・ケンプファアがミサイルで迫るレオニダスを攻撃するが、レオニダスは盾によりミサイルを完全ガード、そしてかなり接近したところでウルフ・ケンプファアが爪を振り上げ攻撃するが、それも盾で防ぎ、剣を持ってウルフ・ケンプファアを斬り、破壊。ダメージはアビス・ラグナロクのペンデュラム効果で半減した。

「そしてウルフ・ケンプファアのモンスター効果！このカードが相手モンスターとの戦闘、もしくはは相手のカード効果によって破壊された場合、墓地の融合素材となったモンスター一組を特殊召喚する！墓地の漆黒の戦士 ワーウルフとダーク・センチネルを特殊召喚！」

バレットのフィールドに再び現れる漆黒の戦士 ワーウルフとダーク・センチネル。下手に破壊しても、ビーストボルク獣闘機は後続を残すのが特徴だ。だが…。

漆黒の戦士 ワーウルフ DEF 600

ダーク・センチネル DEF 1800

「…それを待っていた」  
「何?..」

「DDD怒濤壊薙王カエサル・ラグナロクで、漆黒の戦士 ワーウルフを攻撃！そしてこの瞬間、DDD怒濤壊薙王カエサル・ラグナロクのモンスター効果発動！1ターンに1度、このカードが戦闘を行う攻撃宣言時、フィールドのDDカードもしくはは契約書1枚を手札に戻すことで、このカードと戦闘を行うモンスター以外の相手フィールドの表側表示のモンスター1体を、このカードに装備する！そしてその攻撃力分、カエサル・ラグナロクの攻撃力をあげる！私はDD魔導賢者ケプラーを手札に戻し、ダーク・センチネルを吸収！」

「何?だが、それではワーウルフを吸収すれば…！まさか、守備貫通か！」

カエサル・ラグナロクのベルトがダーク・センチネル目掛け勢いよく飛んでいって絡みつき、ダーク・センチネルを吸収した。

「その通り。といつても、貫通効果を持つのは、カエサル・ラグナロクではなく、ベオウルフ。そしてベオウルフがいれば、私のDDモンスターは全て、貫通効果を持つことになる」

「な、なんだと…」

DD D 怒濤壊薙王カエサル・ラグナロク ATK 3200 ↓ 4700

「改めて…ワーウルフを破壊しろ、カエサル・ラグナロク！ジ・エンド・オブ・ジャッジメント!!」

「ぐっ…ぬおおお!!」

バレット LP 6300 ↓ 4250

「残りの攻撃可能なモンスターは、攻撃力2300のテル、攻撃力3000のベオウルフ。お前を倒すにはダメージが足りないのが、残念だ。テル、ベオウルフ、ダイレクトアタックだ！」

「ぬ…ぬぐああああ!!」

バレット LP 4250 ↓ 3100 ↓ 1600

「カードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

零児 手札3 (DD 魔導賢者ケプラー) LP 4350

モンスター D D D 怒濤壊薙王カエサル・ラグナロク×1 (攻)、D D 狙撃王テル×1 (攻)、D D D 剋竜王ベオウルフ×1 (攻)、D D D 壊薙王アビス・ラグナロク×1 (守)、D D D 反骨王レオニダス×1 (攻)

魔法・罠 セットカード×2

「くっ…(私のライフが、たった1ターンで6400も…こいつ、強い!) 私のターン!…くっ (ダメだ、効果ダメージはレオニダスで封じられている、例えモンスターを出しても次のターンには、アビス・ラグナロクで除外される。アビス・ラグナロクを突破するには攻撃力が3000を越える必要がある。例えレオニダスのほうをどうにかしても、1ターンで4000ものライフを削る手段は…この手札に…ない…) : ターン、エンド」

バレット 手札2 (獣闘機融合装置) LP 1600

モンスター なし

魔法・罨 「ビーストボーク・フュージョナー獣闘機融合装置」×1、「リビングデッドの呼び声」×

1

「…諦めたか。だが、私は遠慮も容赦もしない。私のターン、ドロ―！スタンバイフェイズ、DDD剋竜王ベオウルフの効果！フィールドの魔法・罨ゾーンのカードを全て破壊する！やれ、ベオウルフ！」  
「!!ぬう…」

ベオウルフが息を吸い、吸い、どんどん吸い…吐き出すと同時に凄まじい咆哮を轟かせる。その咆哮により、バレット、零児のカードが全て吹き飛ばされる。

零児の破壊されたセットカード

ヴァルキリー戦乙女の契約書

誤封の契約書

DDD怒濤壊薙王カエサル・ラグナロク ATK 4700↓32  
00

「では、バトル。やれ、カエサル・ラグナロク！ジ・エンド・オブ・ジャツジメント!!」

「ぐ…ぬおおおおおおおおお!!!」

バレット LP 1600↓0 !!!!!!

カエサル・ラグナロクの攻撃による衝撃でバレットは吹っ飛ばす。そして…零児が、勝利した。



## 第23話 融合次元

時間は少し巻戻り、零児とバレットとのデュエルが始まったとき……それと同時に同時に始まったもう1つのデュエル……。南……こと、南香対 セレナのデュエル。

香 LP 8000

セレナ LP 8000

「……では私のターン。私はカードを2枚セット、そして手札からクリバンデットを召喚」

クリバンデット ATK 1000

フィールドに現れたクリバンデット。……早々に現れたこのモンスターを見て、セレナは眉をひそめる。

「早々にクリバンデット……仕方ない」

「では、ターンエンド。エンドフェイズ、クリバンデットの効果発動。このカードをリリースし、デッキの上から5枚を捲ります」

捲られたカード

融合

ムーンライト・クリムゾン・フォックス

月光 紅 狐

ムーンライト・パール・バタフライ

月光 紫 蝶

ムーンライト・ホワイト・ラビット

月光 白 兎

ムーンライト・ウルフ

月光 狼

「では融合をて「なっ!?む、ムーンライトだと!?」……融合を手札に加えます」

香 手札4 (融合) LP 8000

モンスター なし

魔法・罫 セットカード×2

「くっ……まさかムーンライトの使い手が他にいるとは……私のターン、ドロロー……だが、同じデッキの使い手でも、私のほうが強い!私は手札から魔法カード、融合を発動!手札の月光 紅 狐と

ムーンライト・パール・バタフライ

月光 紫 蝶を融合!数多を化かす赤き獣よ、紫の毒持つ蝶よ、月

の引力により渦巻きて、新たな力と生まれ変わらん!融合召喚!現れ

出でよ、ムーンライト・キャット・ダンサー月光舞猫姫！」

融合の渦に、赤い女の狐の獣人と、パープル・バタフライが入り、渦からキャット・ダンサーが現れる。

ムーンライト・キャット・ダンサー月光舞猫姫 ATK 2500

「さらに墓地のパープル・バタフライの効果発動！このカードを除外し、手札のムーンライト1体を特殊召喚する！現れる、ムーンライト・ブルー・キャット月光蒼猫！」

そしてブルー・キャットの効果発動！自分フィールドのムーンライトの攻撃力を、2倍にする！キャット・ダンサーの

攻撃力を、2倍に！」

ムーンライト・ブルー・キャット月光蒼猫 ATK 1600

ムーンライト・キャット・ダンサー月光舞猫姫 ATK 2500↓5000

セレナのフィールドにブルー・キャットが現れ、キャット・ダンサーの攻撃力を大幅にあげる。：攻撃力5000、圧倒的だ。

「バトルだ！いけ、キャット・ダンサー！フルムーン・クラストー!!そしてキャット・ダンサーの効果で100ポイントのダメージだ！」

「残念ながら、簡単に通すわけにはいきません。永続トラップ、リビングデッドの呼び声を発動。墓地のブルー・キャットを特殊召喚。ブルー・キャットの効果でブルー・キャットの攻撃力を2倍にしたいところですが、それは制限により叶わないので、使いません」

香 LP 8000↓7900

ムーンライト・ブルー・キャット月光蒼猫 ATK 1600

「ふん、ならブルー・キャットを攻撃だ！フルムーン・クラストー！」  
「！くうううっ！」

香 LP 7900↓4500

強い衝撃が南に襲い掛かる。これほどのダメージを受ける機会は早々あつても困るのが事実。：ムーンライトの場合、こんなダメージがヘタをすれば2回以上飛んで来る。

「ブルー・キャットの効果にチェーンしトラップ発動！」  
ムーンライト・リンカーネーション・ダンス月光輪廻舞踊！

自分フィールドのモンスターが破壊されたとき、デッキからムーンライトモンスター2体を手札に加えます。

ムーンライト・ウルフ  
ムーンライト・ブラック・シープ  
デツキから月光狼、月光黒羊を手札に加え、ブルー・キャット  
の効果でブルー・キャットを特殊召喚！」

ムーンライト・ブルー・キャット  
月光蒼猫 ATK 1600

「(ブルー・キャットとブルー・キャットでバトルしてもいいが…あまりメリットがあるとは、言えないな…) 私はこれで、ターンエンドだ」

セレナ 手札2 LP 8000

ムーンライト・キャット・ダンサー  
ムーンライト・ブルー・キャット  
モンスター 月光舞猫 姫×1(攻)、月光蒼猫×1(攻)

魔法・罨 なし

「南さん、大丈夫ですか？」

「…大丈夫です。衝撃は大きかったですけど、問題はありません。それに…このターンで、決めるつもりですから」

「なんだと？」

「では私のターン、ドロロー。…手札からスケール5の月光虎と竜剣士ラスターPを、ペンデュラムゾーンにセッティング」

「!?私の知らない…ムーンライト…だと？」

香のフィールドに光の柱が2つ現れ、その中に、片方には虎の少女の獣人、もう片方にはラスターPが昇ってきた。

ムーンライト・タイガー  
「では、月光虎のペンデュラム効果。1ターンに1度、自分の墓地

の月光1体を、効果を無効にして特殊召喚する。この効果で墓地か

ムーンライト・クリムゾン・フォックス  
ら月光紅狐を特殊召喚」

「!蘇生効果…」

ムーンライト・クリムゾン・フォックス  
月光紅狐 DEF 600

「さらにラスターPのペンデュラム効果。もう片方の自分のペンデュラムゾーンのカードを破壊し、デツキからそれと同名のカードを手札に加えます。この効果で月光虎を破壊し、月光虎を手札に加

ムーンライト・タイガー  
え、月光虎のモンスター効果。このカードがフィールドで戦闘、

効果で破壊された場合、墓地の月光1体を特殊召喚します。墓地の

ムーンライト・ウルフ  
月光狼を特殊召喚」

ムーンライト・ウルフ  
月光狼 ATK 2000

フィールドに現れる紅狐と、狼の女の獣人。ウルフのほうは、なんだか遊華が見たら睨みつけそうだ。

「また私の知らないムーンライト…」

「破壊されたペンデュラムカードは、エクストラデッキに表側で送られます。では、再び月<sup>ムーンライト・タイガー</sup>光<sup>タイガー</sup>虎をペンデュラムゾーンにセッティング」  
とりあえず…ムーンライト・タイガーのモンスター効果考えたヤツ誰だ、ヒグルミで学習しろ。

「さらに手札から魔法カード、サイクロンを発動。その効果で…ラスターPを破壊」

「自分のカードを破壊だと…何を意味のない行為を」

「ええ…ちよūdいカードがなかったので、今回は代用です。では…手札からスケール1の月<sup>ムーンライト・ウルフ</sup>光<sup>ウルフ</sup>狼を、ペンデュラムゾーンにセッティング」

消えた光の柱が再び現れ、その中にムーンライト・ウルフが昇ってくる。

「これにより私は、レベル2から4のムーンライトを同時に召喚可能となりました」

「どういうことだ？」

「今私のペンデュラムゾーンには、スケール5のムーンライト・タイガー、スケール1のムーンライト・ウルフが存在します。1と5の間は、2、3、4、つまりこれらが今1体以上を同時に召喚可能。これをペンデュラム召喚と言います。もつとも制限により、ムーンライト以外をペンデュラム召喚はできません」

「…よ、よく分からない…」

「そしてペンデュラム召喚は、エクストラデッキに表側で存在するペンデュラムモンスターも、ペンデュラム召喚時に呼び出せます。ではさっさと済ませましょう。ペンデュラム召喚！エクストラデッキから、月<sup>ムーンライト・タイガー</sup>光<sup>タイガー</sup>虎を特殊召喚！」

月<sup>ムーンライト・タイガー</sup>光<sup>タイガー</sup>虎 DEF 800

「融合を使わず、エクストラデッキからもモンスターを特殊召喚だど…」

「ええ。では手札から魔法カード、融合を発動。フィールドのムーンライト・タイガー、クリムゾン・フォックスの2体を融合。融合召喚

ムーンライト・キヤット・ダンサー  
！月光舞猫姫！

融合の渦の中に、ムーンライト・タイガー、クリムゾン・フォックスの2体が入り、キヤット・ダンサーが現れる。

ムーンライト・キヤット・ダンサー  
月光舞猫姫 ATK 2500

「そしてクリムゾン・フォックスの効果。キヤット・ダンサーの攻撃力を0にします」

「キヤット・ダンサーまでも使うのか！だがそれは対象を取る効果！こちらは墓地のクリムゾン・フォックスの効果！自分フィールドのムーンライト1体を対象にするカード効果を無効にし破壊！そして互いのライフを10000ポイント回復させる！」

「少し嬉しいですね」

香 LP 4500↓5500

セレナ LP 8000↓9000

「では、手札の月光黒羊の効果発動。このカードを墓地へ送り、デッキから融合、もしくは墓地から同名以外のムーンライト1体を手札に加えます。この効果でデッキから融合を手札に加え、さらに手札から月光白兎を召喚。ホワイト・ラビットのモンスター効果。墓地のブラック・シープを特殊召喚します」

「ま、まだモンスターを呼ぶというのか」

ムーンライト・ホワイト・ラビット  
月光白兎 ATK 800

ムーンライト・ブラック・シープ  
月光黒羊 DEF 600

香のフィールドに現れるホワイト・ラビットと羊の女の獣人。…この2枚はセットで使えば中々の強さを誇る。そして黒羊はさらに言えば、ムーンライト・タイガーともいい相性だ。

「では手札から魔法カード、融合を発動。フィールドの黒羊と舞猫姫を融合。融合召喚！月光舞猫姫！」

キヤット・ダンサー、ブラック・シープの2体が融合の渦に入り、現れるパンサー・ダンサー。さあ次は…

ムーンライト・パンサー・ダンサー  
月光舞豹姫 ATK 2800

「今度はパンサー・ダンサー…くっ…」

「そしてブラック・シープのモンスター効果。墓地のブルー・キヤット

を手札に。さらに魔法カード、ダーク・バーストを発動。墓地のブラック・シープを手札に加え、ブラック・シープを墓地へ送りデッキから融合を手札に」

「また融合……まさか……」

「その前に一手間……ムーンライト・タイガーのペンデュラム効果。墓地のクリムゾン・フォックスを特殊召喚します」

ムーンライト・クリムゾン・フォックス  
月光 紅 狐 DEF 600

再び現れた、現れてしまったモンスター、クリムゾン・フォックス。……そして手札には……融合。

「！またクリムゾン・フォックス……」

「では、手札から魔法カード、融合を発動。フィールドのパンサー・ダンサー、ホワイト・ラビット、クリムゾン・フォックスを融合。融合召喚！月光舞獅子姫!!」

ムーンライト・ライオ・ダンサー

「1ターンで、キャット・ダンサー、パンサー・ダンサー、ライオ・ダンサーの3体を融合召喚しただと……!」

パンサー・ダンサー、クリムゾン・フォックス、ホワイト・ラビットが渦に入り、現れたのは……これまた露出度の高い衣装を纏い、頭にはムーンライトのうち何体かがつけている仮面の一部をつけた、紫色の肌をした獅子の女の獣人。その手に持つ剣が鋭い光を放つ。

ムーンライト・ライオ・ダンサー

月光舞獅子姫 ATK 3500

「……1ターンでライオ・ダンサーまで繋げるとは……」

「もっと少ないカード消費でも呼び出せる方法がありますよ。……では、融合素材としたクリムゾン・フォックスの効果。キャット・ダンサーの攻撃力を0に」

「っ……!」

ムーンライト・キャット・ダンサー

月光舞猫姫 ATK 2500↓0

ムーンライト・ウルフ

「さらに、月光狼のペンデュラム効果!フィールド、墓地のモンスターを除外し、それらを素材にムーンライト融合モンスター1体を融合召喚する。墓地のキャット・ダンサー、ホワイト・ラビットをゲームから除外、融合召喚!月光舞豹姫!」

ムーンライト・パンサー・ダンサー

「なんだと?!」

容赦なく再び現れるパンサー・ダンサー。…確実に、1キルできる状況ができてつつある。

ムーンライト・パンサー・ダンサー  
月光舞豹姫 ATK 2800

「では墓地のパープル・バタフライの効果。手札のブルー・キヤットを特殊召喚します。そしてブルー・キヤットの効果で、パンサー・ダンサーの攻撃力を2倍に」

「!!…」

ムーンライト・ブルー・キヤット  
月光蒼猫 ATK 1600

ムーンライト・パンサー・ダンサー  
月光舞豹姫 ATK 2800↓5600

確実に殺意マンマンのフィールドが出来上がった。そう、容易く1キルできるフィールドが揃った。

「では、パンサー・ダンサーの効果発動。これによりこのターン、パンサー・ダンサーは相手フィールドの全てのモンスターに2回ずつ攻撃可能となり、相手モンスターは1ターンに1度、戦闘では破壊されなくなります」

「…やるならや」

「ではバトル。パンサー・ダンサーで、キヤット・ダンサーを2回攻撃」

香 LP 5500↓5400↓5300

セレナ LP 9000↓4200↓600

「ぐっ…うわああああ!!」

キヤット・ダンサーの効果が発動するが、ダメージとしてはまったく意味のない数値のダメージであるためまったく気にしない南。そして容赦のないパンサー・ダンサーの攻撃がキヤット・ダンサーに炸裂し、セレナのライフを0にした…が

「続けてパンサー・ダンサーで、ブルー・キヤットを攻撃」

「…なん…だ…!…きやああ!!」

セレナ LP 600↓5400↓10200

「うう…や、やめ…」

「パンサー・ダンサーは自身の効果で攻撃力を200ポイントアップさせ、次にブルー・キヤットで、キヤット・ダンサーを攻撃」

「!あぐう…」

△「ライオ・ダンサー」

月光舞豹姫 ATK 4800↓5000

香 LP 5300↓5200

セレナ LP 10200↓11800

「…あ、え、えつと南さん、もう決着はついて」

「続けてライオ・ダンサーで、キャット・ダンサーを攻撃」

「！あぐああ!!」

香 LP 5200↓5100

セレナ LP 11800↓15300

「ライオ・ダンサーの効果。このカードがモンスターを攻撃したダメージステップ終了時、相手の特殊召喚されたモンスターを全て破壊します。これにより、キャット・ダンサーを破壊。そしてライオ・ダンサーで」

「ストップストップストップ!!やめてください南さんダメですこれ以上は！死んでしまいますよいくらなんでも!!」

「……………そう…ですね。…お仕置きは、このぐらいで十分でしょう…  
…いともたやすく行われた、えげつない行為…ダメージ、1枚を超えるオーバーキル。それもただでさえ1回を除いて1撃1撃が3000以上。それによりセレナは…意識を失っていた。」

「十分って…やり過ぎですよ…」  
「とりあえず、彼女を保護するとして…社長は…まだ終わっていないようですね」

「だ、大丈夫でしょうか」

「状況は……………問題はないと思います。現在、社長は相手を圧倒している状況です…あ、ターンが社長に移りました。このターンで決まりですね」

そして南がセレナをお姫様抱っこした間に、零児はバレットを倒した。

「ぬおおおおお!!!」

「…社長、お疲れ様です。意外とかかりましたね」

「相手は中々の手練れだった…まあ、少し手間取ったのは事実だ。そちらは私よりも早く終わっていたようだが…」



「相手ターンも含め3ターン、1ターンキルに特化したデツキだったので、準備さえ整えば問題ないです」

「……………なるほどな」

…全てを知らないほうがきつと、幸せだろう。…何やら零児がセレナに申し訳ないというような視線を向けているような気もするが…気のせい…だと思う。だがそうしている間にバレットは…。

「ぐ…本来ならば、このような手段をするつもりはなかったが…止むを得ん」

「何…」

倒れているバレットがディスクを操作した。…すると、バレットのディスクが赤く点滅し始める。

「これで私はアカデミアへと強制送還される。セレナ様と共に帰れないのが残念だが…手土産は、十分だ」

「なんだと」

そう言った零児を見て、不吉な笑みを浮かべるバレット。そしてバレットは、アカデミアへと強制送還されていった。

「…手土産…」

「いったい何をして手土産となるのかは分かりませんが…今は、この子を医務室に」

「ああ…それに、あの男が強制送還されたとなると、アカデミアが明日にも、セレナを連れ戻しに来るかもしれない。対策を立てる必要がある」

「ええ…」

…そして数時間後、舞網チャンピオンシップのジュニアユース2回戦が終了し、ユース選手権のベスト8が出そろった。そしてこの数時間間に、対アカデミアへの対抗手段の案は、出ていた。…それは…。「…なるほど、ジュニアユース選手権を、3回戦からはサバイバルにする…」

「はい。アカデミアがどれほどの戦力で来るかは分かりませんが、数は多い方がいいでしょう（…デュエリストとしては、やはり心苦しい

な…）」

「そしてそこには、ユース選手権ベスト8の8人も、アカデミアを確認でき次第投入、アカデミアの迎撃に当たらせる…とてもいい作戦だと思いますよ零児さん」

社長室には現在、零児とその母、日美香に加え、零奈と南、後黒咲がいる。

「それでユースのベスト8のほうに連絡は？」

「LDS所属の木葉純一、加藤義正、鬼童輪助、並びに遊勝塾のユーキ、梁山泊塾の東堂葉佩、霧隠れ料理スクールの天道貴作、海野占い塾の青衣幹樹、そして南雲玉碎塾という塾のイーリス・イーリヤと連絡がとれ、こちらに向かうよう伝え、本人、塾共に了承をとつてあります」

「さすが零児さん、対応が早いですね」

ユース選手権ベスト8、全員に連絡してここレオ・コーポレーションに来るよう伝えてある。後は到着次第中島の案内でここに来る。

…そして1時間もすれば全員が揃う…はず…だったのだが…

「…零児さん、今いないのは誰ですか？」

「…天道貴作と…イーリス・イーリヤです」

「社長さんに理事長さーん、オレらはいつまで待てばいいんですかー」

2時間経過して6名が揃った。LDS所属の3名はすぐに、続けてユーキが、その次に葉佩、さらにその5名よりも遅れて青衣幹樹が到着した…が、残りの2人が来ない。現在いる5人の中で遅れてきた藍色の髪の少年、青衣幹樹が文句を言う。なお、黒咲に関してはただ今席を外している。なんでもここで待つているよりはマシだ、とのと。

「この中では一番遅くに来たお主に、それを言う権利はないと思うでござる」

「そうかもしれないけどよお、さすがにここまで待つなんてなく」

「お前以外はもっと待つてることを忘れるなよな」

「ま、まあまあ落ち着いて…」

社長室とはいえ待ち過ぎてイライラが溜まってきているみんな。

：デュエルをしたいところだがユース選手権のベスト8、今度戦うかもしれない相手に簡単にデツキを見せるような真似はしたくない。：いつイライラが爆発するか分からないところで…。

「失礼します！やつと、やつと来ました！天道貴作と、イーリス・イーリヤ！」

「：2人に遅いとは？」

「とつくに言っています！」

中島さんが来た。そしてその中島さんの後から、銀色の髪にコートを着た少年と、金髪赤眼で完全に白人系外国人の顔の少女が来た。

「ここがレオ・コーポレーションの社長ルームデースカー！」

「家で料理を作っていたら遅れた」

：天道貴作と、イーリス・イーリヤ。大幅に遅れてきたこの2人の姿を見て、2人を除くそこにいる全員は…

「「「「「「遅い!!!」」」」」」

「うわあ！サプライズ…」

「：すみませんでした」

一斉に言う。こう言われても仕方ないぐらい遅れている。だが怒っても話しが進むわけではないため…

「：散々待たせて申し訳ない。ではさっそく君たちにここへ集まってもらった理由について、説明しよう。実は…」

そして零児、時折日美香や零奈が説明をする。ここに集まってもらった理由、そして何をしてもらいたいかなどを。その途中で黒咲が社長室に入ってきた。

「アカデミア…」

「ああ。：とはいえ黒咲達エクシーズ次元からの情報によれば、ここスタンダードを格下に見ているという話しを聞いたそうだ。それにエクシーズ次元にもアカデミアと戦っているもの達がいる。そのことを考えると、こちらに大戦力を送るとは限らない」

「それにおそらく、アカデミアの目的はこちら側が保護したセレナという少女の奪還と、そのセレナによく似た柊柚子の確保と思われま

す」

「！柚子さんの!?!」

同じ塾に所属するユーキは驚く。遊矢と同じ顔の人物がいるのは知っているが、柚子とよく似た人物がいるのは知らなかった。

「それで、オレ達にはそのアカデミアが出てきたらそいつらを倒せと?」

「断られても仕方ないことだと私は考えている。だがやってくれるならばそれなりのものを渡そう」

「それなりの…?」

「まずは君たちのデッキの強化に使えられるカードを5枚に絞った。それを提供しよう。そして正式にランサーズのメンバーになったのなら、キミたちにペンデュラムカードを渡そう。そして将来プロデュエリストになる場合、支援をしよう」

「！ペンデュラム…榊遊矢が最初に使った、あの」

「ああ。…君たちの意見は尊重しよう。この戦いに参加するかしないかは、自由だ」

全員、真剣な顔で悩む。…アカデミア、未知の力を持つ敵と戦うのだ。悩む

「やるやるやりマース！」

「オレも参加するか」

「…もう少し考えてみたらどうだ」

……イーリヤと幹樹の2人が速攻で答えを出した。あまり悩んでいる様子は見えなかった。

「要するに、デュエルして勝てばいい。そういうことだろ、社長さん」

「デュエルをウォーズに使う輩を許すわけにはいきませーん！」

「…まあ、そうだが…」

「それにその…イーリヤだっけ？オレも気持ちは同じ。まあ、応戦するためにこつちもそうしなきゃまずいんだよな…それを終わらせるには、アカデミアをどうにかする必要がある。そうだろう?」

「ああ、そうだ。…だが、単純な話しでは」

「やること分かりや、オレはそれでいい」

「難しいよりイージーなのほうがいいデース」

…今の発言で、この2人はあまり頭がいいとは、言えないかもしれないと思う人は、結構いる。

「…アカデミアは、強いのか？」

「大多数は大したことはない。だがあいつらが得意とするのは数で攻めること。…数がもつと少なければ、オレ達レジスタンスもより被害を減らせた」

「ほとんどがザコか。…だが、強いヤツと戦う機会があるというなら…参加しても、いい」

「ふん、せいぜいやられないようにな」

「そこら辺のザコにも負けるようなら、オレはその程度のザコということだ」

黒咲に挑発されながらも、貴作も参加。そしてLDSの3人が参加を表明。そして葉佩は、というと…

「悪は倒す。ただそれだけでござる」

「それはつまり参加ということか？」

「無論でござる」

悩みこそしたがあっさりと参加。…ユーキは…。

「…私は…：やっぱり、デュエルを戦争の道具にするなんて、許せません。…でも、そのために私たちも戦争をするなんて…」

「そんな考えは早々に捨てておけ。アカデミアが本格的に攻めてくれれば、どの道こちらもそういう手段を使うしかない」

「…：避けるのは…難しそう、ですね…分かりました。やります」

「…君たちに、感謝する」

~~~~~ 融合次元 アカデミア ~~~~~

対策会議をしている頃、融合次元のアカデミアでは…。

「…バレットの勝手な行いにより、セレナの逃亡を許したが、代わりにセレナ、そしてもう1人…スタンダード次元の柊柚子、その2人の居場所を感知できるようデュエルディスクに細工をしたと報告を受けた。そこで君達にはセレナ、そして柊柚子、見つけたほうの確保を任

せる。やってくれるね、ユーリ…ユーハ」

「了解しました、プロフェッサー」

「ああ分かった。しかしスタンダード…あそこにはボク好みの強いヤツはいるかな…今から楽しみだ」

…頭に妙な機械を取り付けたハゲ…プロフェッサー、赤馬零王。そしてその前にいる2人の人物…もう片方は、遊矢ととても良く似た顔の、紫色の髪の人物、ユーリ。そしてもう1人は…黒い髪に紫の鋭い瞳を持つ…遊華に良く似た顔の少女、ユーハ。

「二応保険として、オベリスクフォース第3、第4小隊と紫雲院素良を派遣する」

「…ん？どうしてですかプロフェッサー。ボクの仕事なのに…」

プロフェッサーの言葉に対して質問をするユーリ。プロフェッサーの命は絶対…だが、少なからず疑問は持つ。そしてプロフェッサーの答えは…。

「今回は確実に来ることが知られている。エクシード次元のときはそもそも若干の混乱に乗じて、シンクロ次元のときは極秘に行ったが今回は違う。ユーリ、ユーハ、君達がいっても確実に2人を確保できるかは分からない。それに…」

「それに？」

「定期的に報告があるとはいえ、今のスタンダードの強さを測るためにも、十分だ」

「なるほど。そこから今後の方針を決めるってことか」

「そうだ。…それとユーハ、頼まれていたものは出来上がった。気が向いたら第4研究開発室に行ってくれ」

「話が終わったらすぐに行く」

「いったい、何ができたのだろうか…すぐに行くと言っていたことから、より期待していたものだろうか…」

「…では準備ができ次第出発してくれ」

「はい」

「分かった」

そしてユーハとユーリは部屋を出た。…各々、準備を始める。

## 第24話 生き残れ！舞網バトルシテイを！

くくく 舞網チャンピオンシップ3回戦当日 くくく

昨日アカデミアへの対策を話し合っていたのを知らない人達は、普通に舞網チャンピオンシップを進めていく。

「さあ〜！舞網チャンピオンシップも3回戦目に突入！なお、今回は急遽ルールを変更して、町全体を舞台としたバトルロイヤルを行います！」

「バトルロイヤル…」

「バトルロイヤル開始は今日午前11時！そして終了は明日の午前11時！またバトルロイヤル中の食事に関しては、各自で用意する、もしくはLDSが用意した施設の利用、就寝はこちらもLDSが用意した施設がございますので安心を！そしてここからが大事！今回のバトルロイヤルについては、なんとなんと！LDS製のペンデュラムカードを使うのです！」

「！LDS製の、ペンデュラムカード!?!」

「はい！街の至るところにLDS製のペンデュラムカード、ペンデュラム・スタチューが隠されています！このペンデュラム・スタチューのカードを2枚以上持っている場合のみデュエルを行えます！そしてペンデュラム・スタチューは必ずデュエル前に1枚以上賭けなくてはならず、敗北した場合は勝利したほうへと賭けたペンデュラム・スタチューを渡し、明日の午後1時の時点でペンデュラム・スタチューを多く持っている選手上位8名が決勝トーナメントに出場できます！」

「上位8名か…」

そう。最大1枚以上ペンデュラム・スタチューのカードを賭けなくてはならないため、2枚だけ持っている場合の敗者はまたペンデュラム・スタチューを1枚探す必要がある。そのため、今回はどれだけ早くペンデュラム・スタチューのカードを、より多く見つけられるかも重要となる。

「さらに…このバトルロイヤルには、3人、1回戦、2回戦で敗北し

たデュエリストが敗者復活枠として参加します！」

「敗者復活…いつたい、誰が」

「ではさっそく発表しましょう！ここで復活するのは…梁山泊塾所属！勝鬨勇雄！・LDS所属！沢渡シンゴ！南雲玉碎塾所属！南雲白——！」

その3人の名前が呼ばれ、3人がフィールドに入ってくる…が。

「おいおいなんで沢渡シンゴがく？」

「デュエルは確かに良かったけどなんで？」

「まさか親のコネじゃないだろうな」

というブーイング。…だがそんなブーイング気にもせず、手を振っている沢渡。…もちろん沢渡の敗者復活に疑問を持った遊華は…。

「…沢渡、あんたなんでいんの？」

「え？なんでって…それは…もちろん、このオレが選ばれているからに決まってるだろ？」

「…」

どうやら何か隠しているような感じがすると思う遊華。沢渡の場合、結構素直だ。嘘をつく場合はすぐにその場で考えて言うため、間が開くことが多々ある。

「えーなお、敗者復活枠の人物に関しては、ペンデュラム・スタチューを4枚以上集めないとデュエルはできず、最初のデュエルのみペンデュラム・スタチューのカードを全て賭けなければなりません！」

「はあ?!そんなの聞いてねえぞ！」

「まあ敗者復活戦とかやった覚えなんてないからいいハンデじゃない？」

「くっそー…赤馬零児め…」

「そしてバトルロイヤル中のデッキ改造は、デュエル中を除いて手持ちのカードを使って可能です。ではみなさん！もうすぐ午後1時！いよいよはじまりますよー!!」

12時58分…カウントダウンには早いが、あと少しで、3回戦が始まる。



「…(ペンデュラムカード…か)」

遊華は少し前のことを思い出す。3回戦、デュエルフィールドに行く前に中島さんから、ペンデュラムカードをもらっていた。しかも、自分のデツキと相性がいいよう調整されていた。

「(ペンデュラム・スタチュー、どんなカードかな)」

「ではカウントダウン！10！9！8！」

遊華が考え事をしている間にもカウントダウンまで経過。それを聞いた遊華は慌てて意識を現実に向ける。そして7、6、5、4となり

「3！2！1！第3回戦、開始く！！」

そして全員が、舞網市の街中へと走り出していった。…その途中、勝鬨が…。

「榊遊矢」

「ん？」

「今度は自分が勝つ」

「勝鬨…オレだつて負ける気はないからな！」

といい、遊矢と勝鬨は別の方向へと走って行った。…そして、3回戦が始まって数分経過し…司令室では。

「…そろそろ良いだろう。アクションフィールド、ザ・シックス・ワールドの発動を」

「はっ！各システム、オールグリーン！アクションフィールド、発動！」

アクションフィールドの発動を宣言し、街の至る所に設置されたりアルソリッドヴィジョン投影機が起動、街の姿を変えていく。…ザ・シックス・ワールド、このアクションフィールド最大の特徴は…6つの区画が存在し、それぞれ拾えるアクションカードの種類も少し変わることだ。灼熱の火山エリア、木々が溢れるジャングルエリア、一面氷の世界の凍土エリア、遺跡がいくつも並ぶ遺跡エリア、巨大でいくつものルートがあるブリッジエリア、そして荒れた比較的低い岩山が連なる山脈エリア。なお、今回はリアルソリッドヴィジョンで作られた宿泊設備が備わっており、そこで休むことも可能。

そして遊華が出たフィールドは…。

「…うつひゃー、見てるだけで凍えそう」

凍土フィールドだ。なお、今回は気温の変化は起きてはいないため、ご心配なく…とはいえ見ているだけでも寒そうな場所であることに変わりはない。

「さーてとペンデュラムカード、ペンデュラムカード…つと。あつた！」

早速1枚のペンデュラムカードを見つけた遊華。…氷塊の、中に。

「…これ、どうやってとればいいんだろ…うーん…触ったら溶ける…なんてことは…あ、砕けた」

触った結果、氷塊が砕けてペンデュラムカードが手に入った。手に入ったのはP S—グリーン・バード。スケールは1だ。

ペンデュラム・スタチュー

P S —グリーン・バード 鳥獣族・効果／ペンデュラム 風  
属性 星6 ATK 0 DEF 2000

【Pスケール：赤1／青1】

①自分フィールドの風属性モンスターの攻撃力・守備力は300ポイントアップする。

【モンスター効果】

「P S—グリーン・バード」のモンスター効果は、1ターンに1度しか使用できない。

①このカードがP召喚に成功した場合、発動できる。デッキから「P S」カード1枚を手札に加える。

「よーし、この調子で集めるぞー！」

そして遊華は、他のペンデュラムカードを探す。…十数分後…。

「…うん、結構集まったかな。さーて他には…ん？」

3枚を集めた遊華。さらに他のペンデュラムカードを見つけるため辺りをよく見渡すと…人が見えた。座り込んでいるように見える。

「何してるんだろ…」

もちろん気になった遊華。その人に近付く…近付くにつれ、その人

物がはつきり見えてくる。どうやら、絵を描いているようだ。その人物は、髪はきれいな長い金髪纏め、頭にキャスケットを被り、ワンピースを着たカバンを側に置いてある少女。：胸に関しては、普通のように見える。

「(絵を描いてる?こんなときに:)」

どんどん近付く遊華と、まったく気が付く様子のない少女。：遊華は、少女が描いている絵を後ろから覗いてみた。

「:(:うーん:絵、だね:途中の)」

絵は:この凍土フィールドの一面を、鉛筆で描いたものの途中。凍りついたビルと道路が途中だがしつかりと描かれている。

「:?:?:あなたは何?」

「!あ、ご、ごめんなさい、何してるのかなーって思ってた:あ、私は巳柳遊華です」

「巳柳:ああ、あの童星を使っていた:私は、シャルロット・レイモンです。フランスから来ました」

「フランスから:日本語、上手ですね」  
「勉強しました」

シャルロット・レイモン:きれいな眠そうな青い目をした少女。ちなみに目の下にクマはない。

「絵、とつても上手ですね」

「将来は画家を目指しています。いずれは世界中を巡っているんな絵を描く、それが夢です」

「?じゃあ、なんでこの大会に?」

「?ダメですか?出場資格が得られて、旅費と言った様々な費用もレオ・コーポレーションが出してくれるとのことだったので、日本の建物、特にお寺、有名などころには独特の風情があり、1度は描いてみたかったですし、日本の方とも交流できるいい機会だと思っただので」  
「え?つ、つまり、絵を描くために、この大会に出場したってことですか?」

「??デュエルの大会なんですから、デュエルするためですよ。でも今はバトルロイヤルという特殊な状況下、それも、こんな風景が広がっ

ています、2度とこの風景を描くチャンスはないと思いましたので  
「あ、そう…」

話しながらも絵を描き続けるシャルロット。…結構マイペースな  
ようだ。

「…あれ？じゃあ、ペンデュラムカードは？」

「？…ああ…確か、拾えるんでしたね。絵のことを考えていて、忘れ  
ていました」

「…」

「今描いている絵を描き終えたら次の場所に移動しつつ探してみます  
ね」

と言っている間にも、消したり描いたりを繰り返していた。

「…えつと…じゃあ、集まってまた会ったら、デュエルしましょうね」  
「ええ、いいですよ」

そして遊華はシャルロットと別れる。かなり変わった人だった。

「(デュエルより絵を優先するなんて…分からない)」

デュエル大好き遊華にとっては、あまり分からないのであった…だ  
が絵が大好きなシャルロットとデュエル大好きな遊華は、同類だろ  
う。間違いない。

遊華が奇妙な出会いをしていた頃、遊矢は…。

「！あったー！これで2枚目…」

2枚目のペンデュラム・スタチューをゲット。場所はジャングルエ  
リアだ。これで遊矢はデュエル可能となった。

「よーし…これでデュエル出来る。さっそく相手を」

「それじゃあボクとデュエルしないかい？」

と言う声が聞こえ、声が出たほうを遊矢が見ると…ギザギザのオレ  
ンジの髪をした緑の瞳の少年だ。

「えーつと…君は？」

「デニス・マックフィールド。よろしく」

「よろしく。…オレは」

「榊遊矢。君のことはよく知ってるよ。あ、デュエル前に1つお願い

があるんだけど……」

「え？な、何？」

デニス は懐に手を入れると……サインペンと色紙が出てきた。

「サインくださいー！」

「…え？」

「いやー、ボク、キミのお父さんの榊遊勝や、キミのファンなんだよねー！その影響で、エンタメデュエリストを志しているんだ！」

「あ、う、うん。オレのサインでよかったら……」

と、サインペンと色紙を受け取り、サインを書く遊矢。…ただ、サインなんて求められたことはほとんどなく、とりあえず有名人が書いているサインを思い浮かべ、それを真似して書いていく。

「ごめん、サインなんて、ほとんど欲しいって言われたことなく……」  
「ううん！君のサインをもらえただけで十分うれしいよ！それじゃあさっそくデュエルをしよう！ペンデュラム・スタチュー、2枚あるんだよね？」

「ああ。デニスは？」

「ボクも2枚さ。それじゃあ何枚賭ける？ボクは、1枚」

「それじゃあ、オレも1枚」

「じゃあ始めよう！」

そーういーいーデイスクを構えるデニス。

「ああ！もちろん！」

そして遊矢も構える。…一方、観客席のほうでは…。

「おーっと！どうやらジャングルエリアのほうでデュエルだー！対戦するのは…榊遊矢と、デニス・マックフィールド!!」

というと、6つのエリアを映していた大型モニターの映像が切り替わり、遊矢とデニスの顔が出てきた。

「じゃあ行くぞ！戦いの殿堂に集いしデュエリスト達が！」

「モンスターと共に！地を蹴り宙を舞い！」

「フィールド内を駆け巡る！」

「見よ、これぞデュエルの最強進化系！」

「アクション…」

「デュエル！」

デニス LP 4000

遊矢 LP 4000

いつもの口上から始まる遊矢とデニスのデュエル。先攻は…デニスから。

「お。どうやらボクの先攻だね。ボクのターン！ボクは手札から魔法カード、火炎地獄を発動！相手に1000ポイントのダメージを与えて、自分は500ポイントのダメージを受ける！」

「！火炎地獄…バーンデツキ！」

「ノンノン。それは違うよ。自分へ効果ダメージを与える効果が発動した場合、手札のE m エンタメイジ フレイム・イーターは特殊召喚でき、その自分へのダメージを0にできる！カモン！フレイム・イーター！」

火炎地獄の炎がデニスに迫るが、その炎が突如として現れた黒い球体に食べられる。…そして、黒い球体は炎を吐き出す。

E m エンタメイジ フレイム・イーター DEF 1600

遊矢 LP 4000↓3000↓2500

デニス LP 4000↓3500

「あっちこっち！な、なんでダメージが500増えて…」

「フレイム・イーターは、ダメージを食べてくれるのはいんだけど、召喚、特殊召喚したら互いに500ポイントのダメージを受けるって効果があってね…」

「そ、そうなんだ…」

「じゃあ次に…手札からアステル・ドローンを通常召喚！」

続いて現れたのは、プニプニしていそうな人型のかわいらしいモンスター。手に持つ杖で五芒星を描く。

アステル・ドローン ATK 1600

「…ん？レベル4が、2体…」

「それじゃあさっそく行ってみよう！ボクはレベル4の魔法使い族、エンタメイジ

E m フレイム・イーターとアステル・ドローンでオーバーレイ！2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

フレイム・イーターが赤い光に、アステル・ドローンが黒い光になり、フィールドに現れた穴の中へと飛び込む。

「ショーマストゴーオン!! 天空の奇術師よ、華やかに舞台を駆け巡れ! エクシーズ召喚! ランク4、E m <sup>エンタメイジ</sup>トラピーズ・マジシャン!」

穴から現れたのは…勢いよく空中ブランコに掴まっているピエロにも、奇術師にも見えるモンスター。笑顔に見えるが、仮面により真の表情は窺えない。

E m <sup>エンタメイジ</sup>トラピーズ・マジシャン ATK 2500

「そしてトラピーズ・マジシャンのオーバーレイ・ユニットにしたアステル・ドロンの効果発動! このカードがエクシーズ素材となった場合、このカードをエクシーズ素材にしたモンスターに、エクシーズ召喚したとき、デッキからカードを1枚ドローする効果を与える! ということで、1枚ドロー!」

「トラピーズ・マジシャン…!」

「ボクのエースモンスターさ。それじゃあカードを2枚伏せて、ターンエンド」

デニス 手札1 LP 3500

モンスター E m <sup>エンタメイジ</sup>トラピーズ・マジシャン×1 (攻)

魔法・罫 セットカード×2

「行くぞ…オレのターン、ドロー! …それじゃあ…レディースエーン、ジェントルメーン!」

「お、始まった」

「それではこれより、私、榊遊矢のエンタメデュエル、始まります! …とはいえまだ準備も何もできてないので、準備から始めさせてもらいます。手札からスケール4のオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを、ペンデュラムゾーンにセッティング!」

光の柱が現れ、その中にオッドアイズが昇ってくる。

「さらにカードを2枚伏せ、手札からE M <sup>エンタメイジ</sup>ソード・フィッシュを召喚!」

E M <sup>エンタメイジ</sup>ソード・フィッシュ ATK 600

フィールドに現れるソード・フィッシュ。さっそく分身してトラ

ピース・マジシャンへと突撃。

「ソード・フィッシュはこのカード自身、もしくは自分の他のモンスターが召喚、特殊召喚に成功した場合、相手フィールドのモンスターの攻撃力を、600ポイント下げる！」

「おつ、そう来たか」

エンタメイジ  
E m トラピース・マジシャン ATK 2500 ↓ 1900

「カードを2枚伏せて、ターンエンド。エンドフェイズにオッドアイズのペンデュラム効果！このカードを破壊し、デッキからPSパープル・ソードを手札に！」

「ペンデュラム・スタチューをサーチしてきたか…」

遊矢 手札3 (PSパープル・ソード) LP 2500

モンスター エンタメイジ E M ソード・フィッシュ×1 (攻)

魔法・罠 セットカード×2

「それじゃあボクのターン！ドロー！…それじゃあそろそろ、本格的に動くかな」

「え？」

「トラップ発動！デステニー・デストロイ！デッキの上からカードを3枚墓地へ送る！」

「え!?!たしかもつといい、針虫の巣窟ってカードが…」

「んー、そのほうが確かに強いよ。でも、虫っていうのがね…やっぱり演出上、こっちのほうがボクはいいかなって思ってるよ」

「そ、そう…」

「それじゃあ3枚を墓地へ」

墓地へ送られたカード

エンタメイジ  
E m ダメージ・ジャグラー

エンタメイジ  
ブレイクスルー・スキル

エンタメイジ  
E m ハットトリッカー

「おつと、トラップが1枚あったから、デステニー・デストロイの効果で1000ポイントのダメージを受ける…んだけど、ここでトラピース・マジシャンの効果」

「え？」



「トラピーズ・マジシャンがモンスターゾーンにいる限り、トラピーズ・マジシャンの攻撃力以下の自分が受ける戦闘と効果ダメージを0にできるんだ」

「！そんな効果が…」

「そういうことで、ダメージは0。いやー、でも結構危なかつたかな…さてそれじゃあ、墓地のダメージ・ジャグラーの効果！メインフェイズにこのカードを除外することで、デッキからE m エンタメイジ ハットトリツカーを手札に！そして手札から、ライトロード・マジシャン ライラを召喚！」

「！ライトロード…」

ライトロード・マジシャン ライラ ATK 1700

「？どうかしたの？」

「あ、いや…知り合いに、ライトロード使ってる人がいて…」

「なるほど。それじゃあライラの効果。このカードを守備表示にして、相手のマジック、トラップを1枚破壊する。ということで、右のほうのカード、破壊させてもらうよ」

ライラ ATK 1700 ↓ DEF 800

ライラが守備表示になり、その杖から光が放たれ、遊矢のセットカード1枚を貫く。

破壊されたカード

E M エンタメイジ ピンチヘルパー

「くっ…」

「それじゃあ自分フィールドにモンスターが2体以上存在することで、手札からE m エンタメイジ ハットトリツカーを特殊召喚！」

E m エンタメイジ ハットトリツカー DEF 1100

フィールドに現れたのは…とんがり帽子にメガネ、マント、白い手袋…のみのモンスター。…それらだけでできているモンスターだ。

「それじゃあレベル4のハットトリツカーとライラでオーバーレイ！エクシーズ召喚！聖なる光で舞台を照らす可憐なる乙女！ランク4、ライトロード・セイント ミネルバ！」

ハットトリツカーが黒い光に、ライラが黄色い光に変わり、穴の中

へと飛び込む。そして現れたのは…白いローブに翼、杖を持つ少女。肩にはフクロウが停まっている。

ライトロード・セイント ミネルバ ATK 2000

「ライトロード・セイント ミネルバの効果！オーバーレイ・ユニットを1つ使い、デッキの上からカードを3枚墓地へ送り、その中にあるライトロードの数だけ、デッキからカードをドローする！ということ、3枚を墓地へ！」

墓地へ送られたカード

エンタメイジ  
Emトリック・クラウン

ライトロード・アーチャー フェリス

ソーラー・エクステンジ

「1枚以外は、ライトロードのカード…」

「ボクのデッキには、ライトロードのギミックも組み込んであるんだ。それじゃあ1枚ドローして、墓地へ送られたEmトリック・クラウン、ライトロード・アーチャー フェリスの効果！トリック・クラウンはこのカードが墓地へ送られたら、自分の墓地のEm1体を特殊召喚し、ボクは1000ポイントのダメージを受け、アーチャー フェリスは、デッキから墓地へ送られたらこのカードを特殊召喚する！ということ、トリック・クラウンとアーチャー フェリスを特殊召喚！1000ポイントのダメージは、トラピーズ・マジシャンの効果で0！」

ライトロード・アーチャー フェリス DEF 2000

エンタメイジ  
Emトリック・クラウン ATK 1600

フィールドに現れたのは、フェリスと、小さな玉に片手で乗るピエル。…このトリック・クラウンはかなり厄介であることは、間違いない。

「またレベル4が、2体…」

「さらにフェリスの効果！このカードをリリースし、相手フィールドのモンスター1体を破壊して、その後、デッキの上からカードを3枚墓地へ送る。ソード・フィッシュを破壊！」

「！ソード・フィッシュ!!！」

アーチャー フェリスが、自慢の弓矢でソード・フィッシュを狙い撃ち、破壊。そして自らも消える。

墓地へ送られたカード

エンタメイジ  
E m テクニシャン・ハンド

トリック・ボックス

光の援軍

「うーんよくはないかな…トリピード・マジシャンの効果！オーバーレイ・ユニットを1つ使い、フィールドのモンスター1体はこのターンのバトルフェイズ、2回攻撃できる！この効果で、ライトロード・セイント ミネルバを選択！」

「に、2回攻撃!?!」

「さあバトル！まずはトリック・クラウンで、ダイレクトアタック！」  
トリック・クラウンが華麗にバランスを取りながら遊矢に迫る…が。

「ならトラップ発動！ピンポイント・ガード！相手モンスターの攻撃宣言時に発動でき、墓地のレベル4以下のモンスターを、守備表示で特殊召喚します！墓地のソード・フィッシュを特殊召喚！そしてソード・フィッシュの効果！」

エンタメイジ  
E M ソード・フィッシュ DEF 600

トリック・クラウンの前にソード・フィッシュが現れ再び分身、デニスのフィールドのモンスター全てへと突撃し、その力を弱める。

エンタメイジ  
E m トラピーズ・マジシャン ATK 1900↓1300

エンタメイジ  
E m トラロード・セイント ミネルバ ATK 2000↓1400  
E m トリック・クラウン ATK 1600↓1000

「！でも、攻撃は止めないよ！」

「ピンポイント・ガードの効果で特殊召喚されたモンスターは、戦闘、及びカードの効果では破壊されない！」

「うーん、これ以上は無理か…バトルフェイズ終了時にトラピーズ・マジシャンの効果によりミネルバは破壊される。ここでミネルバは退場だ。ありがとう、そしてごめんね」

トラピーズ・マジシャンの効果により、光になって消えていくミネ

ルバ。さり気なくデニスに手を振る。

「それじゃあちよつとバスターイム。永続魔法、バリア・バブルを発動！自分のE m、E Mはそれぞれ、1ターンに1度だけ戦闘では破壊されず、それらのモンスターでの戦闘ダメージを0にする」

「！戦闘破壊できなくなる上に、ダメージも0：」

「それでは、一応トラピーズ・マジシャンを守備表示にして、ターンエンド」

E m <sup>エンタメイト</sup>トラピーズ・マジシャン ATK 1300 ↓ DEF 800

デニス 手札1 LP 3500

モンスター E m <sup>エンタメイト</sup>トラピーズ・マジシャン×1 (守)、E m <sup>エンタメイト</sup>ト

リック・クラウン×1 (攻)

魔法・罠 永続魔法「バリア・バブル」×1

「：オレのターン、ドロロー！行くぞ：オレはスケール11のペンデュラム・スタチューP S パープル・ソードと、スケール2のE M <sup>エンタメイト</sup>ドラミングコングを、ペンデュラムゾーンにセッティング！」

光の柱が2つ現れ、片方に紫の結晶が、もう片方には胸がドラム、肩にシンバル、手がオレンジのボール状になっているゴリラが昇ってきた。パープルソードの下に11、ドラミング・コングの下には2の数字が浮かび上がる。

「お、来たねペンデュラム！」

「では参ります！揺れる、魂のペンデュラム！天空に描け光のアーキ！ペンデュラム召喚！来い、オレのモンスター達！レベル7、雄々しくも美しく輝く二色の眼！オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン！手札からレベル4、E M <sup>エンタメイト</sup>ペンデュラム・マジシャン！」

光の柱の間に巨大な振り子が現れ、それが揺れる。そして上に穴が開き、そこから光が落ちてくる。そして光はオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンと、小さな振り子を持つシルクハットを被った男性が現れた。

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK 2500

E M <sup>エンタメイト</sup>ペンデュラム・マジシャン ATK 1500

「ワーオ！ やつぱりすごいねペンデュラム！」

「ペンデュラム・マジシヤンの、モンスター効果発動！ このカードが特殊召喚に成功したとき、自分フィールドのカードを2枚まで破壊して、破壊した枚数分、デッキからE Mを破壊した枚数分、手札に加えます！ さらにモンスターが特殊召喚されたことでソード・フィッシュの効果が発動します！」

エンタメイト  
E m トライプーズ・マジシヤン ATK 1300 ↓ 700

エンタメイト  
E m トリック・クラウン ATK 1000 ↓ 400

「うわー、攻撃力が3ケタまで下がっちゃった…」

「それではペンデュラム・マジシヤンの効果で、パープル・ソードとペンデュラム・マジシヤンを破壊し、デッキからE Mジンライノと、

エンタメイト  
E M スライハンド・マジシヤンを手札に加えます！そして、自分

フィールドのペンデュラムモンスター以外のE Mをリリースするこ

とで、手札のE M エンタメイトスライハンド・マジシヤンは、手札から特殊召喚

できます！ソード・フィッシュをリリースして、スライハンド・マジ

シヤンを特殊召喚！」

ソード・フィッシュが消え、代わりに現れたのは赤いスーツを着て仮面をつけたモンスター。上半身こそ人であるが、下半身は青い結晶だ。

エンタメイト  
E M スライハンド・マジシヤン ATK 2500

「ではスライハンド・マジシヤンの効果！ 手札を1枚墓地へ送り、相手フィールドの表側のカード1枚を破壊します！ この効果で、バリア・バブルを破壊！」

「うわー！ あちやー…お、ラッキー」

スライハンド・マジシヤンの持つ杖から雷が放たれ、容赦なくバリア・バブルが破壊される。…ついでにアクションカードを見つけたデニス。

「バトル！ オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンで、E m エンタメイトトリック・クラウンを攻撃！ 螺旋のストライク・バースト！」

「おっとストップ。ボクは手札からアクションマジック、回避を発動！ オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの攻撃を無効にするよ！」

「でもスライハンド・マジシヤンの攻撃は止められない！スライハンド・マジシヤンで、トリック・クラウンを攻撃！そしてこの瞬間、ドラミングゴングのペンデュラム効果！スライハンド・マジシヤンの攻撃力を、600ポイントアップする！」

エンタメイト  
EMスライハンド・マジシヤン ATK 2500↓3100

「うわあつとつと！」

デニス LP 3500↓800

「これでターンエンド。バトルフェイズが終了したことで、スライハンド・マジシヤンの攻撃力は、元に戻る」

エンタメイト  
EMスライハンド・マジシヤン ATK 3100↓2500

遊矢 手札0 LP 2500

エンタメイト  
モンスター オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン×1(攻)、

エンタメイト  
EMスライハンド・マジシヤン×1(攻)

魔法・罫 なし

エンタメイト  
Pゾーン EMドラミング・ゴング

「ふう。それじゃあボクのターン、ドロー！…うん。中々だ」

「？なんだ…」

「それじゃあ手札から魔法カード、エクシーズ・シフトを発動！このカードは自分フィールドのエクシーズモンスターを、同じ種族、属性、ランクの別のエクシーズモンスターへと変える！では…3、2、1！トラピーズ・マジシヤン！」

トラピーズ・マジシヤンが布に覆われる。中でもぞもぞ動いている。…そして数秒で、布がバツと投げられる。…トラピーズ・マジシヤンは、操り人形を操るピエロのような恰好をした人形遣いに変わっていた。

「トラピーズ・マジシヤンを、チェンジ！さあ出番だよ、人形師ドール・マイスターへと変える！」

「エクシーズ召喚をしないで、別のエクシーズモンスターを呼び出した…」

エンタメイト  
Em 人形師ドール・マイスター 魔法使い族・効果／エクシーズ

光属性 ランク4 ATK 1700 DEF 2700

レベル4の魔法使い族モンスター×3

「E<sup>エンタメイジ</sup>m 人形師ドール・マイスター」の①、②の効果はそれぞれ1ターンの1度しか使用できない。

①1ターンに1度、このカードのX素材を1つ使い、自分の墓地に存在するレベル4以下の「E<sup>エンタメイジ</sup>m」モンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターを自分フィールドに表側守備表示で特殊召喚する。

②1ターンに1度、自分フィールドのこのカード以外の「E<sup>エンタメイジ</sup>m」モンスター1体と相手フィールドのモンスター1体を対象に発動できる。その自分のモンスターの攻撃力分、その相手モンスターの攻撃力を、このターンの終わりまで下げる。

③このカードがフィールドから墓地へ送られた場合、発動できる。次の自分のスタンバイフェイズまで、自分は戦闘及び効果ダメージを受けない。

E<sup>エンタメイジ</sup>m 人形師ドール・マイスター ATK 1700

「そしてエクシーズ・シフトはこの効果で特殊召喚したモンスターのオーバーレイ・ユニットになる。そしてドール・マイスターの効果発動！このカードのオーバーレイ・ユニットを1つ使い、墓地のレベル4以下のE<sup>エンタメイジ</sup>m1体を復活させる！さあ甦れ、E<sup>エンタメイジ</sup>mトリック・クラウン！」

E<sup>エンタメイジ</sup>m トリック・クラウン DEF 1200

ドール・マイスターがフィールドに現れた穴に糸を垂らす。そして糸を引き上げトリック・クラウンが現れる。

「そしてドール・マイスターの効果発動！自分フィールドのE<sup>エンタメイジ</sup>m1体の攻撃力分、相手モンスター1体の攻撃力を、エンドフェイズまで下げる！この効果でトリック・クラウンの攻撃力、1600の分だけスライハンド・マジシャンの攻撃力を下げる！」

「！スライハンド・マジシャン！」

E<sup>エンタメイジ</sup>M スライハンド・マジシャン ATK 2500↓900

ドール・マイスターの指から糸が放たれ、スライハンド・マジシャンの体に張り付き、その糸は指から離れ、地面に固定され身動きがとれない。

「バトル！E m エンタメイト人形師ドール・マイスターで、スライハンド・マジシャンを攻撃！」

「！くっ…ですがここから！墓地のE M エンタメイトジンライノの効果！ジンライノ以外のE M エンタメイトが戦闘か効果で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードをゲームから除外する！」

遊矢 LP 2500↓1700

ドール・マイスターが鋭い糸を放ちスライハンド・マジシャンを貫こうとする…が、それはスライハンド・マジシャンの前に現れた半透明のジンライノによって弾かれ、ジンライノは消える。

「あー、なるほど…うーん…それじゃあターンエンド。エンドフェイズにエクシーズ・シフトの効果で特殊召喚されたモンスターは、エンドフェイズに墓地へ送られる。…でも、ただじゃ墓地へ送られないよ」

「え？」

「墓地へ送られたドール・マイスターの効果！このカードが墓地へ送られた場合、次の自分のスタンバイフェイズまで、戦闘と効果ダメージを受けなくなる！」

「次のターンまで倒せないってことか…」

「これでエンタメデュエルはまだまだ続けられるってことだね」

デニス 手札1 LP 800

モンスター E m エンタメイトトリック・クラウン×1 (守)

魔法・罫 なし

「…まあ、そうだな。…それでは私のターン、ドロー……さて…(…このスケールじゃあペンデュラム召喚は難しい、…けど、ちょうどいい！)手札からスケール4のE M エンタメイトトランプ・ガールを、セッティング！そしてトランプ・ガールのペンデュラム効果！このカードは、自分フィールドのモンスターを素材に融合召喚を行える！」

「！融合……そうくるかい」



デニスとは始めてあったばかりの遊矢はデニスのことをよく知らないため、彼の裏に隠れているものについては知らない。…が、それでもこの状況を偶然にも作り出す。

「様々な技術を持つ奇術師よ、眩き光となりて龍のまなこに宿らん！融合召喚！現れる、秘術ふるいし魔天の龍、ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン！」

融合の渦の中にスライハンドとオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンが入る。そしてルーンアイズがフィールドに姿を現す。

ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK 3000

「さあバトル！ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴンで、トリック・クラウンを攻撃！光輪のシャイニー・バースト!!」

「おつと…それじゃあトリック・クラウンのモンスター効果！破壊されたことで、墓地からトラピース・マジシャンを特殊召喚！」

エンタメイジ  
Em トラピース・マジシャン DEF 2000

「ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴンは、融合素材にした魔法使い族モンスターのレベルに応じて攻撃回数が変わります！融合素材にしたのはレベル7のスライハンド・マジシャン、この場合は3回モンスターに攻撃できます！ということでもう1度攻撃！連撃のシャイニー・バースト！」

「ごめん、トラピース・マジシャン…でもトラピース・マジシャンの効果！このカードは相手によって戦闘、もしくはカード効果で破壊されたら、デッキからEm 1体を特殊召喚できる！デッキからEm スエンタメイジティルツ・シューターを特殊召喚！」

エンタメイジ  
Em スティルツ・シューター DEF 0

新たにフィールドに現れたのは、竹馬のように長い棒に乗ったモンスター。しっかりとバランスを取り、まったく落ちる気配がない。

「…ターンエンド」

遊矢 手札0 LP 1700

モンスター ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン×1 (攻)

魔法・罫 なし

Pゾーン EMドラミング・コング (2)、EMトランプ・ウィッチ

(4)

「それじゃあボクのターン、ドロロー！…うん、いいカード。ボクはステイルツ・シユーターをリリース！エンタメイジ E m サプライズ・イリユージョナーをアドバンス召喚！つとアクションカードゲット」

エンタメイジ E m サプライズ・イリユージョナー ATK 2000

ステイルツ・シユーターが消え、代わりに現れたのは何やらカラフルですごくハデな恰好をしたピエロ。手にはステッキ、シルクハットはビックリ箱のようにバネがついていて顔が飛び出している。

「それではサプライズ・イリユージョナーの…サプライズ！サプライズ・イリユージョナー以外の

エンタメイジ E m 1体を特殊召喚できる！カモン！エンタメイジ E m トリック・クラウン！」

エンタメイジ E m サプライズ・イリユージョナー 魔法使い族・効果 光属性

星5 ATK 2000 DEF 1800

エンタメイジ 「E m サプライズ・イリユージョナー」の①、②の効果は、それぞれ1ターンに1度しか使用できない。

①このモンスターが召喚に成功した場合、自分の墓地の「エンタメイジ E m サプライズ・イリユージョン」以外の「エンタメイジ E m」モンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターを特殊召喚する。

②このモンスターが特殊召喚に成功した場合、発動できる。自分の除外されている「エンタメイジ E m」モンスター1体を特殊召喚する。

エンタメイジ E m トリック・クラウン ATK 1600

サプライズ・イリユージョナーが自分のシルクハットを手に持ち、ステッキで軽く叩くと、明らかに質量を無視してトリック・クラウンが飛び出してきた。

「なるほど…でもレベル5とレベル4、それじゃあエクシーズはできない！」

「大丈夫大丈夫、問題ないよ。自分フィールドにモンスターが2体以

上存在することで、E m <sup>エンタメイジ</sup>ハットトリツカーを特殊召喚！」

E m <sup>エンタメイジ</sup>ハットトリツカー ATK 1100

「レベル4が2体…」

「ノンノン…レベル5が、3体になるよ。墓地のE m <sup>エンタメイジ</sup>テクニシャン・ハンドの効果！墓地のこのカードをゲームから除外し、自分フィールドのレベル4以下のE m <sup>エンタメイジ</sup>のレベルを1つ上げる！」

「！ということは…」

E m <sup>エンタメイジ</sup>テクニシャン・ハンド 魔法使い族・効果 闇属性 星5 A  
TK 1600 DEF 2000

「E m <sup>エンタメイジ</sup>テクニシャン・ハンド」の①、②の効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。

①自分が効果ダメージを受けた場合、発動できる。墓地からこのカードを特殊召喚する。

②墓地のこのカードをゲームから除外することで発動できる。自分フィールドのレベル4以下の表側のモンスター全てのレベルを、1つ上げる。

何やら巨大な手が2つ現れると、トリック・クラウンとハットトリツカーに包まれる。…そして解放される。特に変化はない。

E m <sup>エンタメイジ</sup>トリック・クラウン 星4 ↓5

E m <sup>エンタメイジ</sup>ハットトリツカー 星4 ↓5

「それじゃあ行くよ！ボクはレベル5のサプライズ・イリュージョナーとトリック・クラウン、ハットトリツカーでオーバーレイ！3体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！降りたて魔界の芸術家！エクシーズ召喚！」

フィールドに現れた穴の中にトリック・クラウンが黄色、ハットトリツカーが黒、サプライズ・イリュージョナーが紫の光になり飛び込む。そしてそこから現れたのは…影。だがそれが立ち上がり…帽子、仮面、蝶ネクタイをつけ、手には大きなハサミを持つモンスターが現れる。

「ランク5、E m 影絵師シャドー・メイカー！」  
E m 影絵師シャドー・メイカー ATK 2600  
「攻撃力2600…（でもデニスはさつき、アクションカードを拾った。…そのカードによつては…）」  
「さあそれじゃあ、シャドー・メイカーの力を発揮してみようか！ボクは手札からアクションマジック、ターザンアタックを発動！このターンの終わりまで、ボクのモンスター1体の攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

#### ターザンアタック アクション魔法

①自分フィールドのモンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターの攻撃力を、このターンの終わりまで1000ポイントアップさせる。

「さらにシャドー・メイカーの効果発動！このカードがカード効果の対象になったら、オーバーレイ・ユニットを1つ使うことで、エクストラデッキからシャドー・メイカー1体を特殊召喚できる！」

「え?!またエクシーズ召喚せずにエクシーズモンスターを!?（黒咲がRUMってカードを使ってたけど、他にもいろいろあるのか…）」

「まあ、いろいろあるってことだよ。ということ、カモン！シャドー・メイカー！」

E m 影絵師シャドー・メイカー 魔法使い族・効果/エクシーズ  
閥属性 ランク5 ATK 2600 DEF 1000  
レベル5の魔法使い族モンスター×3

①このカードがカードの効果の対象になった場合、1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ使うことで発動できる。自分のエクストラデッキから「E m 影絵師シャドー・メイカー」を特殊召喚する。

エンタメイジ  
Em 影絵師シャドー・メイカー ATK 2600↓3600  
エンタメイジ  
Em 影絵師シャドー・メイカー ATK 2600

シャドー・メイカーが自身の影を切り取る。するとその影はもう1体のシャドー・メイカーへと変わった。なお、切り取った部分は影だからか、すぐに再生した。

「！シャドー・メイカー2体…」

「さあバトル！攻撃力のあがったシャドー・メイカーで、ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを攻撃！」

「ドラミング・コングのペンデュラム効果！ルーンアイズの攻撃力を、600ポイントアップさせる」

ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK 3000↓3600

「それじゃあ相打ちだ！」

「つとつと…アクションカード…」

ルーンアイズはシャドー・メイカーの持つハサミにより真つ二つに切られ、シャドー・メイカーはルーンアイズの放つ光線によって破壊される。なお、ルーンアイズは光線を放った直後に紙のように薄くなり、その上で真つ二つに着られた。

「さて、これが通ればボクの勝ち。もう1体のシャドー・メイカーで、ダイレクトアタック！」

「いいやまだまだ！アクションマジック、大地の恵み！自分のライフを500ポイント回復し、このターン受ける戦闘ダメージを半分にする！くっ…」

大地の恵み アクション魔法

①自分のライフを500ポイント回復する。この効果を発動したターン、自分が受ける戦闘ダメージは半分になる。

遊矢 LP 1500↓2000↓700

「いいねいいね！そう来なくっちゃ！ボクはこれでターンエンド！そ

してこの瞬間、ターザンアタックの効果は終了、シャドー・メイカーの攻撃力は元に戻る」

エンタメイト  
E m 影絵師シャドー・メイカー ATK 3200↓2600

デニス 手札0 LP 800

モンスター エンタメイト E m 影絵師シャドー・メイカー×1 (攻)

魔法・罨 なし

「行くぞ…オレのターン、ドロロー…:あ」

「ん?どうかしたのかい?」

「…いいや、な、なんでもない…(ど、どうしよう…こんな状況で…:エンタメ・バンド・ハリケーン…)」

エンタメ・バンド・ハリケーン、自分フィールドのエンタメイトの数だけ相手フィールドのカードを手札に戻す、強力な除去カードの1枚だ。ペンデュラム召喚によって大量展開した後はこのカードを使えば相手フィールドのカードも大量にバウンス可能…だが、手札はこれだけ、ペンデュラムはできそうにない、アクションカードは…近くには、見えない。

「…よし、ここはもう、最後の最後までがんばるしかない…」カードを1枚伏せて、ターン、エンド」

遊矢 手札0 LP 700

モンスター なし

魔法・罨 セットカード×1

Pゾーン エンタメイト E M ドラミング・コング

「…あれ?…セットカードだけ?」

「ああ。さあどうくるデニス!」

「じゃあボクのターン、ドロロー。…うーん、そうだね…バトル!シャドー・メイカーでダイレクトアタック!」

「…やつぱりそうくるよな…」

遊矢 LP 700↓0

シャドー・メイカーの攻撃により遊矢のライフは、0になった。

「うん、ボクの勝ち!いやー結構危なかった。そういえば、セットカー

ドってなんだったの？」

「あの状況じゃあ使えないカード。オレのフィールドにモンスターがいないと使えないカードだったんだ」

「そうだったのか……」

「まあ、とりあえず……はい、ペンデュラム・スタチュー P S」

「うん、ありがとう」

## 第25話 ある意味の師弟対決！弟子の弟子はつまり弟子…？

「…それにしても、すごいなー(こ)」

氷河エリアからさらに移動し、ブリッジエリアに来ている遊華。移動の途中で ペンデュラム・スタチュ P S のカードをいくつか見つけており、デュエルに困ることはない。

「さて…何かないかな」

「む…お前は巳柳遊華！」

「ん？…あ、確か…権現坂昇！刃の弟子の」

「まあ、そうだ」

そこで出会ったのは権現坂。刃にシンクロを教わったため、弟子ということで間違っではない。そしてその刃は…。

「それにしても、刃にも弟子か…刃の弟子なら、刃の師匠の私にとっても、ゴンくんは弟子ってことか」

「ご、ゴンくん?!ぬう…けしからん！オレは権現坂昇だ！」

「いや、権現坂よりゴンくんのほうがやっぱり言いやすいし…いきなり名前っていうのもね」

「いきなりニックネームもどうかと思うぞ」

刃は遊華の弟子である。刃が遊華に弟子入りするときには遊華がシンクロコースの首席で、今は刃のほうがシンクロコースの首席である。実技のほうでは遊華のほうが上だが総合的な面を見れば刃のほうが上である。特に筆記。

「まあともかく…今ここで会ったなら…デュエルしよう！」

「…そうだな。オレは2枚の ペンデュラム・スタチュ P S を賭ける」

「それじゃあ私も2枚！ということ、始めよう！戦いの殿堂に集いしデュエリスト達が！」

「モンスターと共に地を蹴り、宙を舞い！」

「フィールド内を駆け巡る！」



「見よ、これぞデュエルの最強進化系！」

「アクション…」

「デュエル！」

昇 LP 4000

遊華 LP 4000

「行くぞ、オレのターン！自分の墓地にマジック、トラップが存在しないことで、オレは手札から超重武者ビッグワラーGを特殊召喚！」

超重武者ビッグワラーG DEF 1800

権現坂が出したのは草鞋に近い見た目をした機械族モンスター。だが草鞋、というにはかなり分厚い。

「そしてビッグワラーGは特殊召喚したターン、超重武者しか特殊召喚できず、機械族モンスターをアドバンス召喚する場合、このカードは2体分のリリースにできる！オレはビッグワラーGをリリース！動かざること山の如し！不動の姿、今見せん！超重武者ビッグベーンK！そしてビッグベーンKは召喚、特殊召喚された場合、守備表示にできる！」

超重武者ビッグベーンK ATK 1000 ↓ DEF 3500

「これでターンエンドだ！」

昇 手札3 LP 4000

モンスター 超重武者ビッグベーンK×1 (守)

魔法・罠 なし

「それじゃあ行くよー、私のターン、ドロー！…うん。手札からカード・ガンナーを召喚！」

カードガンナー ATK 400

「そしてカード・ガンナーの効果！デッキの上からカードを3枚まで墓地へ送って、その数だけ攻撃力が500ポイントアップさせる！3枚墓地へ送って、1500ポイントアップ！」

墓地へ送られたカード

レベル・ステイラー

竜星の輝跡

カメンレオン

カード・ガンナー ATK 400↓1900

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！そしてエンドフェイズにカード・ガンナーの効果は終了して、攻撃力は元に戻る」

カード・ガンナー ATK 1900↓400

攻撃力の低いカード・ガンナーが攻撃表示、その状況に眉を潜める権現坂。この場合、結構な場合に何かを狙っている、というのが確実。

遊華 手札3 LP 4000

モンスター カード・ガンナー×1（攻）

魔法・罨 セットカード×2

「むっ、攻撃力の低いカードをそのまま…だが、容赦はせん！オレのターン、ドロロー…行くぞ、バトルだ！ビッグベン1Kで、カード・ガンナーを攻撃！」

「それじゃあ永続トラップ、竜星の具象化発動！そしてダメージを受ける前にトラップ発動！ガード・ブロック！自分への戦闘ダメージを0にして、デッキからカードを1枚ドロロー！そして具象化の効果！モンスターが破壊されたら、デッキから竜星1体を特殊召喚できる！さあ来て、闇竜星—ジヨクト！」

闇竜星—ジヨクト DEF 2000

「そしてカード・ガンナーが破壊されたら、デッキからカードを1枚ドロローする」

「む、そうくるか…ならばオレは、モンスターを1体セット、ターンエンドだ」

昇 手札3 LP 4000

モンスター 超重武者ビッグベン1K×1（守）、セットモンスター×1

魔法・罨 なし

手札を補充し、着実に準備を整えている遊華。定番とはいえ、着実に攻める手立てを作り上げる。

「それじゃあ私のターン、ドロロー…うん。ジヨクトの効果！手札の炎竜星—シユンゲイ、地竜星—ハイカンのコストにデッキから、秘竜

星―セフィラシウゴ、光竜星―リフンを特殊召喚！」

秘竜星―セフィラシウゴ DEF 2600

光竜星―リフン DEF 0

フィールドに現れるセフィラシウゴ、リフン。シユンゲイとビシキの 패턴のほうが多いが、今回のパターンは珍しい。

「む、ペンデュラムモンスターか…」

「うん。ということで、レベル6のセフィラシウゴに、レベル1のリフンをチューニング！禍々しい雷を纏い、暗闇より現れる！シンクロ召喚!!」

リフンが1つの歯車になり、その中にセフィラシウゴが入り、6つの星になる。そして歯車から光が放たれ、中からガイザーが現れる。

「レベル7、黒き竜の星、邪竜星―ガイザー！そしてガイザーの効果！ガイザーと…セットモンスターを選択して破壊！」

「む、自分のモンスターを破壊して、さらに展開するつもりか」

邪竜星―ガイザー ATK 2600

ガイザーの放った雷により、ガイザー自身とセットモンスターである、赤い鎧兜のロボ、超重武者ソード―999が破壊される。

「…なるほど。破壊して正解かな。それじゃあガイザーと具象化の効果！ガイザーは破壊されたら、デッキから幻竜族モンスター1体を特殊召喚できる！ということで、ガイザーの効果でタツノオトシオヤを、具象化の効果で魔竜星―トウテツを特殊召喚！」

タツノオトシオヤ ATK 2100

魔竜星―トウテツ ATK 2200

「確かもう片方は前のデュエルで…」

「それじゃあ行くよー！それじゃあタツノオトシオヤの効果！レベルを1つ下げて、タツノコトクンを特殊召喚！この効果でレベルを合計2つ下げて、タツノコトクンを2体特殊召喚！」

タツノオトシオヤ 星7↓6↓5

タツノコトクン×2 DEF 200

トークンにより、フィールドを埋めていく遊華。なお、現在通常召喚を一切行っていない。

「続けて魔法カード、トランススターンを発動！このカードは自分フィールドのモンスター1体を墓地へ送ることで、そのモンスターと同じ種族、属性でレベルが1つ上のモンスター1体を、デッキから特殊召喚できる！ということ、レベルが5に下がっているタツノオトシオヤを墓地へ送って、デッキからレベル6の竜宮のツガイを特殊召喚！」

「条件が厳しいとはいえ、さらにモンスターを展開するだも！だが、トークンをもう1体精製できるのに、いったいなぜ…」

竜宮のツガイ ATK 2000

…赤と青、2体のリュウグウノツカイにも似たモンスターが現れる。…すぐくラブラブで、今もイチャイチャしている。

「…うん。それじゃあ手札のモンスターを1体墓地へ送ることで、竜宮のツガイの効果！デッキからレベル4以下の幻竜族モンスター1体を特殊召喚できる！ということ、来て！リフィン！」

墓地へ送られたカード

レベル・ステイラー

光竜星―リフィン DEF 0

これにより、フィールドが埋め尽くされる。…内心遊華は、もつとモンスターを出せばいいのに…と思っていた。

「む、モンスターが5体…」

「それじゃあ行くよ…レベル6の竜宮のツガイと、レベル1のタツノコトクンに、レベル1のリフィンをチューニング！煌めく光を纏い、天空より舞い降りよ！シンクロ召喚！！レベル8、黄金に輝く竜の星、輝竜星―ショウフク！」

輝竜星―ショウフク ATK 2300

リフィンが1つの歯車になり、その中に竜宮のツガイとタツノコトクンが入り、合計7つの星になる。そしてショウフクが現れる。

「ショウフクの効果！シンクロ素材にした幻竜族の属性は、光と水！よって2枚までバウンス！ということ、ビッグベン―Kをバウンス！」

「ぬっ、しまった…」

「さらにシヨウフクの効果！トウテツを破壊して、墓地からジヨクトを特殊召喚！」

闇竜星—ジヨクト DEF 2000

「さらにトウテツの効果！テツキからセフィラシウゴを特殊召喚！そして、レベル6のセフィラシウゴと、レベル1のタツノコトクンに、レベル2の闇竜星—ジヨクトをチューニング！「数多の星々輝く天よ、鮮やかな光を受け取り、具現化せよ！シンクロ召喚！！レベル9、無数の色に輝く竜の星、幻竜星—チヨウホウ！」

幻竜星—チヨウホウ ATK 2700

「チヨウホウがフィールドにすることで、シンクロ素材にした竜星モンスターと同じ属性のモンスターは、効果を発動できない！シンクロ素材にしたのは、地属性のセフィラシウゴと、闇属性のジヨクト！」

「何…（オレの超重武者は、ほとんどが地属性…まずい）」  
「バトル！シヨウフク、チヨウホウでダイレクトアタック！天竜輝翔嵐！」

「ぐっ…ぬうん！」

昇 LP 4000→1700

黄金のつむじ風が権現坂を飲み込むが、踏ん張り、耐え抜く権現坂。だが…。

「でもこれは防げるかな？チヨウホウでダイレクトアタック！彩竜天光流波！」

「だがこれしき！手札の超重武者装留—ストームシールドの効果発動！相手モンスターのダイレクトアタック宣言時に発動でき、このカードを特殊召喚し、さらにダイレクトアタックしてきたモンスターを裏側守備表示にする！」

「え?!うーん防がれちゃったか…」

超重武者装留—ストームシールド DEF 1100

権現坂の目の前に、黄緑色の円形の盾が現れ、そこから突風が吹き、チヨウホウがその風の勢いに負け、裏守備表示になる

超重武者装留—ストームシールド 機械族・効果 風属性 星4

ATK 800 DEF 1100

「超重武者装留―ストームシールド」の②の効果は、1ターンに1度しか使用できない。

①自分のメインフェイズに自分フィールドの「超重武者」モンスター1体を対象に発動できる。自分の手札・フィールドから、このモンスターを装備カード扱いとして、そのモンスターに装備する。装備モンスターは1ターンに1度、戦闘では破壊されない。

②墓地に「超重武者」モンスターが存在し、相手が直接攻撃宣言を行った場合、そのモンスター1体を対象に発動できる。このカードを特殊召喚し、そのモンスターを裏側守備表示にする。

「うーん…うん。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

遊華 手札1 LP 4000

モンスター 輝竜星―ショウフク×1(攻)、セットモンスター×1  
(幻竜星―チョウホウ)

魔法・罫 「竜星の具象化」×1、セットカード×1

なお、一切通常召喚を行っていない。…そして前のデュエルで見せた、大展開はない。…自重しているのか…？

「行くぞ、オレのターン、ドロ―…オレの墓地にマジック、トラップが存在しないことで、手札からチューナーモンスター、超重武者ホラガーEを特殊召喚！」

超重武者ホラガーE DEF 600

フィールドに現れたのは、笠を頭に被り、ホラ貝のような機械を持つロボット。そして、チューナーである。

「ホラガーEが自身の効果で特殊召喚された場合、オレはこのターン、超重武者以外を特殊召喚できないが、それで構わん！オレはレベル4のストームシールドに、レベル2のホラガーEをチューニング！雄叫びをあげよ、神々しき鬼よ！多くの道を繋ぐ戦場に！シンクロ召喚！」

ホラガーEが2つの歯車になり、その中にストームシールドが入り、4つの星になる。歯車から光が放たれ、そこから赤い鬼を模した

ロボットが現れる。手には棍棒を持っている。

「いざ出陣！レベル6、超重神鬼シュテンドウG！」

超重神鬼シュテンドウG DEF 2500

「シュテンドウGの効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功したときに、オレの墓地にマジック、トラップがなければ、相手フィールドのマジック、トラップを全て破壊する！」

「うげーフルモン限定だからって、ハーピィの羽箒と同じ効果って…」

破壊されたカード

竜星の具象化

竜星の極み

シュテンドウGが棍棒を思いっきり振り、それによる衝撃波により、遊華の魔法、罫は全て破壊される。

「そしてチューナーモンスター、超重武者タマーCを召喚！」

超重武者タマーC ATK 100

権現坂のフィールドに現れたのは、丸っこくかわいらしい機械のモンスター。とても、かわいらしい。

「タマーCの効果発動！オレの墓地のマジック、トラップがなく、自分フィールドに超重武者以外のモンスターが存在しない場合、相手フィールドのモンスターとこのカードを墓地へ送り、2体のレベルの合計と同じレベルの超重武者シンクロモンスター1体を、シンクロ召喚する！オレはレベル8のシヨウフクを選択！」

「げっ！」

「行くぞー！荒ぶる神よ、千の刃の咆哮と共に、多くの道を繋ぐ戦場に現れよ！シンクロ召喚！」

タマーCが2つの歯車になり、シヨウフクを飲み込み、シヨウフクが8つの光になる。そして歯車から光が放たれ、そこから、鎧兜を身に纏った大柄なロボットが現れる。手にはその身の丈にあう薙刀と思われる武器を握っている。

「いざ出陣、レベル10！超重荒神スサノオ！」

超重荒神スサノオ DEF 3800

「さあバトルだ！行け、シュテンドウG！セットモンスターを攻撃

！シュテンドウーGは守備表示のまま攻撃でき、守備力を攻撃力として扱う！」

「守備力2500、そしてチョウホウの守備力は2200…300足りない…でもまだまだ！破壊されたチョウホウの効果！シンクロ召喚したチョウホウが戦闘か効果で破壊された場合、デッキからチューナー1体を手札に加える！ということ、カメンレオンを手札に！さらに墓地の光竜星ーリフンの効果！リフンを守備表示で特殊召喚！」

光竜星ーリフン DEF 0

モンスターが破壊されたことで、リフンをフィールドに呼び出した遊華。竜星はやはり、壁が固い。

「ぬっ…ならスサノーOでリフンを攻撃！クサナギソード・斬!!」

リフンとスサノーO、その力の差は圧倒的。容易く破壊する。…とはいえ守備表示のため、ダメージはない。

「ふー…つと、アクションカードだ」

「ぬ…ならスサノーOの効果！オレの墓地にマジック、トラップがないとき、相手の墓地のマジック、トラップを1枚セットする！竜星の極みをセット！」

「うわー、そんな効果まで…」

「これでオレは、ターンエンドだ」

昇 手札1 LP 1700

モンスター 超重神鬼シュテンドウーG×1 (守)、超重荒神スサノーO×1 (守)

魔法・罫 セットカード×1

「それじゃあ私のターン、ドロー！さてと…うん。手札からチューナーモンスター、カメンレオンを召喚！」

カメンレオン ATK 1600

フィールドに現れたのはカメレオン。時折周囲の色に合わせているのか見えなくなるが、すぐにまた見えるようになる。

「カメンレオンが召喚に成功したとき、墓地の守備力0のモンスター1体を特殊召喚できる！墓地の地竜星ーハイカンを特殊召喚！」

地竜星ーハイカン DEF 0



「レベル3のヘイカンに、レベル4のカメンレオンをチューニング！  
禍々しい雷を纏い、暗闇より現れる！シンクロ召喚！レベル7、もう  
1度邪竜星―ガイザー！」

邪竜星―ガイザー ATK 2600

「そしてバトル！ガイザーでシユテンドウーGを攻撃！」

「ぬう…シユテンドウーGは守備表示、故にオレへのダメージはない」

「うーん…じゃあカードを1枚伏せてターンエンド」

遊華 手札1 LP 4000

モンスター 邪竜星―ガイザー×1（攻）

魔法・罠 セットカード×1

「オレのターン、ドロ―…お前がどんな対策をしているかは分からないが、行くぞ！オレは手札から超重武者装留ダブル・ホーンを、ス  
サノーOに装備！ダブルホーンを装備しているモンスターは1度の  
バトルフェイズに2回攻撃できる！」

「げげー」

スサノーOにダブルホーンである陣羽織が装備される。肩の部分  
には大きな角がついている。

「さあバトルだ！スサノーOで、ガイザーを攻撃！」

「ストップストップ！アクションマジック、ハーフダウン！このター  
ン自分が受けるダメージを半分にする！」

ハーフダウン アクション魔法

①このカードを発動したターンの終わりまで、自分が受ける戦闘及  
び効果ダメージは半分になる。

「ダメージは受けるんだな…ならオレは手札の超重武者装留―バス  
ター・ガントレットを墓地へ送り、効果発動！これによりスサノーO  
の守備力を、ターンの終わりまで元々の2倍にする！」

「え?!」

超重荒神スサノーO DEF 3800↓7600

「クサナギソード―斬！」

「うわああ!!」

遊華 LP 4000↓1500

「ガイザーは幻竜族モンスターをデッキから特殊召喚する効果を持つが、それはハイカンの効果により戦闘破壊されなくなっている！」

「うっ…（セットカードは具象化…アクションカードは…!）あつた！」

「させん！スサノーOはダブルホーンの効果によりもう1度攻撃できる！スサノーOでガイザーをもう1度攻撃！クサナギソード―斬！」

「！わああああ!!」

遊華

LP 1500↓0

アクションカードを見つけ、取りに行つた…だがそのアクションカードがあるのはそれなりに距離がある場所、行かせないとすぐにスサノーOで攻撃を仕掛けた権現坂。…結果としては、遊華はアクションカードを取る寸前で攻撃を受け、ライフが0になった。そしてデュエルが終了し、モンスターが消える。

「あいたたた…あく負けたく」

「オレも負ける訳にはいかないからな。…では、ペンデュラムカードを」

「うん…はい、2枚」

「うむ。…しかし、いつも同じような感じだな、巳柳遊華、お前のデュエルは」

「え？」

「前のデュエル、そして今回のデュエル、連続シンクロには驚かされるが、常にジョクトと言うモンスターが基礎になっているように見える」

「まあ、ジョクトは竜星を2体特殊召喚するからね」

ジョクトは手札の竜星2枚を墓地へ送ることにより、デッキから竜星を2体特殊召喚するモンスター。だが…。

「だが手札コストは2枚、その効果を無効にされた場合は一気に不利になる」

「う…まあ、そうだけど…でもどうしてそういうこと言ってくれるの？」

「いつまでも同じでいられんということと言っただけだ」

「そ、  
そう…」

## 第26話 不穏な影

舞網チャンピオンシップ3回戦のバトルロイヤル。様々なところで様々なデュエルが行われている。たとえば

「融合召喚！出陣せよ、覇将星 イダテン！そして手札1枚を墓地へ送り装備魔法、閃光の双剣―トリスをイダテンに装備！バトルだ！イダテンで、魔界劇団ビッグスターとファンキー・ルーキーを攻撃！」  
「え、ちよ、待って、うつそーん！」

勝鬨が2回攻撃を決め、あっさり沢渡に勝利、そして別のところでは…。

「拙者は、黄昏の中忍―ニチリンで、攻撃！」

「うわああああ!!」

風魔デュエル塾の日影がデュエルで勝利する。…そして…。

「ユート…なんでそんな恰好でここにいるんだ？」

「アカデミアの襲撃があるというところで、警備員としている」

……ユートが、よく見る警備員の制服を着て、サングラスに帽子をつけた姿で、遺跡エリアにいた。…そして、黒咲がそれを見つけた。

「そうか。…アカデミア、来ても必ず返り討ちにしてやる」

「隼、深追いはするなよ」

「分かっている」

そう、アカデミアが来る、その可能性はかなり高いだろう。…セレナをアカデミアに連れ戻すため、そしておそらく…柚子を攫うためにも。

「とにかくどこからくるか分からない。隼、気を付けてくれ」

「もちろんだ。だがユート、お前も気を付け…っ！来たぞ…」

「！…今、来たみたいだな…」

黒咲は視界に映ったもの…次元転移特有の光を見て、すぐにその方向を向き、ユートにも伝えた。…そしてユートが見た頃には光は収まり…白と紫色のジャケットを着て、紫色のスカートを穿いた紫色の短い髪にマントをつけた人物の後ろ姿が見えた。

「…ん、ん…ここがスタンダード…別の次元はエクシードズ以外行っ

たことなかったけど、スタンダードってこういうところなんだ。…それで…その君達、君達は、デュエリストかな」

「!!なっ…」

「お前はっ！」

そして紫色の髪の毛の人物が、振り向く。…その顔は…黒咲、ユート、2人にとって大切な人物と…ユークと、よく似ているだ。

「ゆ、ユークと…似ている…」

「誰だ貴様は!!何故ユークと似ている!!」

「ユーク…あー、あのときのあの…なるほど…となると君達は、エクスサイズ次元、それもレジスタンスの人かな? 大方自分達だけの力じゃ勝てないから、別の次元の力を借りるために来た、ってところかな」

「っ…そんなことはどうでもいい。それより、お前は一体、誰だ」

「おっと失礼、訊かれているなら自己紹介しないと。ボクはユーク。以後、よろしく」

「ユーク…」

「至急、至急、こちらユート、遺跡エリアC地区にて、アカデミアと思われるデュエリストを確認」

ユートは自分の持つ無線を使い零児達のいる司令室へと連絡する。その間に、ユークは少しこちらに近付いてきた。

「…うん。君達は中々強そうだね。そして、人がさらに来るみたいだ…大勢来たら面倒だ。だからさ…二人纏めて、ボクとデュエルしてくれないかな?」

そういうと、先ほどの無表情に近い顔が、禍々しい笑顔へと変わり、プレートを展開させデュエルディスクを構える。その瞬間、ユート、黒咲は感じた。

「っ!!…ユート…」

「ああ。…間違いなく、こいつは…」

強い…2人とも、まったく同じことを思った。…彼女から感じるのは、強さと、そして…禍々しさ。

「…いいだろう。お前を倒す!」

「少なくとも、お前を逃がすわけにはいかない」

「それじゃあルールはバトルロイヤル。フィールド、ライフ、墓地、共に非共有でいいかな」

「っ！…舐めているのか？」

「舐めている？うーんそうかもしれないね…でも、君達強いかもしれないけど、それぐらいしないといいデュエルにならないかもしれないからね…」

「なんだと…」

「隼、落ち着け。…いいだろう。だが、後で後悔しても遅い」

黒咲、ユートもプレートを展開し、デュエルディスクを構えた。

「でもボク、こう見えて後悔したことないんだ。それじゃあ…始めようか」

「『デュエル！』」

ユーハ LP 4000

ユート LP 4000

隼 LP 4000

「…ん？…まあいいや…とりあえず、さすがに先攻後攻は好きなほうをもらおうよ。というところでボクのターン！…ボクは手札からシャドル・ファルコンを通常召喚」

シャドル・ファルコン ATK 600

ユーハがモンスターを出した…が、普通のモンスターの召喚エフェクトとは違った。…フィールドの一角に影が現れ…そこから影が浮かび上がり、球体状に変化する。そして球体が下から上へと消えていくのと同時に、中の何かが見え…影の球体が消えた後には、紫色の鳥がいる。

「…（融合は手札のカードも使える…なのになぜ、通常召喚した？）」

「それじゃあ手札から装備魔法、魂写しの同化を、シャドル・ファ

ルコンに装備。この魂写しネフェシャドル・フュージョンの同化は属性を宣言し、装備モンスターをその属性に変更できる。…まあ別に闇でいいけどね」

「！フュージョン…まさか」

「魂写しネフェシャドル・フュージョンの同化には、装備モンスターと手札かフィールドのモンスターを融合素材に融合召喚を行える。ボクは、シャドル・ファルコ

ンと手札のシャドール・ビーストを融合！模られし魂に導かれた、影に蠢く古に眠りし魂よ、鳥と獣合わせり混ざり合い、1つとなり、影より大いなる使者を呼び出さん！融合召喚！さあ現れる、深淵の探究者、エルシャドール・ミドラーシュ!!」

シャドール・ファルコンと、岩のような体に紫色の結晶がついた獣が暗い渦に入る。…そして渦から影が伸び、影が浮かび上がり、徐々に形が変わる。…そして影に色がつき、実体になった。…それは、奇妙な生物（…竜？）の上に、人形のような関節を持つ少女が乗ったモンスター、エルシャドール・ミドラーシュ。

エルシャドール・ミドラーシュ ATK 2200

「そして融合素材にしたシャドール・ファルコン、シャドール・ビーストの効果発動。この2体には効果で墓地へ送られたら発動する効果があつてね…シャドール・ビーストの場合はデッキからカードを1枚ドロ―し、シャドール・ファルコンは自分フィールドに裏守備表示でセットする」

「…融合素材になつた上で効果を発動した…厄介な」

「…シャドール2体に同じような効果…他にシャドールモンスターがいれば、全部に同じように効果で墓地へ送られた場合に発動する効果があるともて、いいだろうな…」

「まあ、大体そうかな。…それじゃあ、カードを1枚伏せて、ターンエンド」

ユーハ 手札2 LP 4000

モンスター エルシャドール・ミドラーシュ×1（攻）、セットモンスター×1

魔法・罫 セットカード×1

「…（攻撃力は2200…セットカードが1枚…）オレのターン、ドロ―！オレは手札からR レイドラブラーズ R―バニシング・レイニアスを召喚！」

R R―バニシング・レイニアス ATK 1400

「バニシング・レイニアスの効果発動！このカードが召喚、特殊召喚に成功したターンのメインフェイズに、手札からレベル4以下の

レイドラブラーズ R R 1体を、特殊召喚する！こい！R レイドラブラーズ R―ミミクリー・レイニ

アス！」

レイドラブラリーズ

R ミミクリー・レイニアス ATK 1000

フィールドに同レベルのバニシング・レイニアスとミミクリー・レイニアスの2体が揃う。これはもうエクシーズ召喚しかない。

「オレはレベル4のバニシング・レイニアスとミミクリー・レイニアスで、オーバーレイ!! 2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築! 冥府の猛禽よ、闇の眼力で真実をあばき、鋭き鉤爪で栄光をもぎ取れ! エクシーズ召喚! ランク4、レイドラブラリーズ R | フォース・ストリクス:?! な、何?!」

「! なっ: : え、エラー?」

黒咲がエクシーズモンスターをディスクに置いたら: : なぜか、エラーが出た。: : そして黒咲のモンスターに影が絡み、そのせいなのかエクシーズ召喚のときに現れる穴に飛び込めずにいる。

「残念だけど、エルシャドール・ミドラーシュがいる限り、特殊召喚は1ターンの1度しか行えないんだ」

「つ!? な、なんだと: : くっ、おのれ: : オレはカードを2枚セット、ターンエンド」

黒咲 手札2 LP 4000

モンスター R | レイドラブラリーズ バニシング・レイニアス×1(攻)、レイドラブラリーズ R | R

| ミミクリー・レイニアス×1(攻)

魔法・罫 セットカード×2

「(エルシャドール・ミドラーシュがいる限り、特殊召喚は1ターンに1度: : なら) オレのターン、ドロ! : : オレは手札からファントムナイト幻影騎士団ダスティローブを召喚! そしてオレのフィールドにファントムナイト幻影騎士団がいることにより、手札からファントムナイト幻影騎士団サイレントブーツを特殊召喚!」

ファントムナイト幻影騎士団ダスティローブ ATK 800

ファントムナイト幻影騎士団サイレントブーツ ATK 200

フィールドに現れたダスティローブとサイレントブーツ。いつもならここからエクシーズ召喚につながるが、1回特殊召喚をしたため、ミドラーシュによって封じられている。

「: : 1回特殊召喚しちゃったけど、よかったの?」



「ああ。ダステイローブの効果発動！オレのフィールドの闇属性モンスター1体の攻撃力を800ポイントアップさせ、このカードを守備表示にする！オレはサイレントブーツの攻撃力を800ポイントアップさせる！」

幻影騎士団ダステイローブ ATK 800 ↓ DEF 100

0

幻影騎士団サイレントブーツ ATK 200 ↓ 1000

「さらに手札から魔法カード、一騎加勢を発動！サイレントブーツの攻撃力を、1500ポイントアップさせる！」

幻影騎士団サイレントブーツ ATK 1000 ↓ 2500

「へえ、ミドラーシユの攻撃力を上回ってきたか……」

「バトルだ！いけ、サイレントブーツ！ミドラーシユを攻撃！」

サイレントブーツがミドラーシユに一気に迫り、思いっきりロキックを叩き込み……ミドラーシユを破壊した。

ユーハ LP 4000 ↓ 3700

「……それじゃあ、ミドラーシユが墓地へ送られたことで、ミドラーシユの効果発動。ミドラーシユは墓地へ送られたら、墓地のシャドールと名のつく魔法、罫カードを1枚、手札に加える。ボクは魂写しの同化を手札に加える」

「そんな効果が……だが、これでミドラーシユはもういない。オレはレベル3の幻影騎士団ダステイローブと幻影騎士団サイレントブーツでオーバーレイ！2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！戦場に倒れし騎士たちの魂よ。今こそ蘇り、闇を斬り裂く光となれ！エクシーズ召喚！ランク3、幻影騎士団ブレイクソード！」

幻影騎士団ブレイクソード ATK 2000

フィールドに空いた穴にダステイローブとサイレントブーツが飛び込み、穴からはブレイクソードが現れる。ミドラーシユがなければ、これが早々に召喚されていただろう。

「オレはブレイクソードの効果発動！オーバーレイ・ユニットを1つ使い、自分と相手フィールドのカードを、1枚ずつ破壊する！ブレイクソードと、左のセットカードを選択！」

「へー。でもそれは却下。手札のエフェクト・ヴェーラーを墓地へ送り、効果。ブレイクソードの効果を無効にする」

「なっ！」

不意にブレイクソードに光がぶつかり、オーバーレイ・ユニットを取り込んでいた剣が弾かれる。

「くっ…カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「おっと。そのエンドフェイズにトラップ発動！堕ち影の蠢き！デッキからシャドールモンスター1体を墓地へ送り、自分フィールドの裏側モンスターを表側守備表示にし、その数だけ相手モンスターを裏守備表示にする。ボクはデッキからシャドール・ドラゴンを墓地へ送り、セツトモンスターのシャドール・ファルコンを表側守備表示に変更、そしてR<sup>レイドラフターズ</sup> R バニシング・レイニアスを裏守備表示に」

「なっ!？」

シャドール・ファルコン DEF 1400

「そして墓地へ送られたシャドール・ドラゴン、そして裏側から表側になったことでシャドール・ファルコンのリバース効果。シャドール・ファルコンはリバースしたとき、墓地のシャドールモンスター1体を、裏守備表示で特殊召喚する。そしてシャドール・ドラゴンは効果で墓地へ送られたら、フィールドのマジック、トラップを1枚破壊する。…そうだね…そっちの鳥使いの右のセットカードを破壊して、シャドール・ビーストをセット」

「くっ…」

破壊されたセットカード

リビングデッドの呼び声

ユート 手札2 LP 4000

モンスター 幻影騎士団ブレイク・ソード×1 (攻) O U × 1

魔法・罫 セットカード×1

「貴様…なぜミドラーシュが破壊されるときにさっきのカードを使わなかった!」

「んー、キミの疑問も分かるよ。でも、理由は簡単さ。ミドラーシュはボクの特異召喚も制限してしまうんでね…このターンで2体以上特

殊召喚したいからさ。ボクのターン、ドロ―！反転召喚、シャドール・ビースト。そしてシャドール・ビーストの効果！このカードがリバーしたとき、デッキからカードを2枚ドロ―し、手札1枚を墓地へ送る。ということ、2枚ドロ―して…1枚を墓地へ」

墓地へ送ったカード

シャドール・ヘッジホッグ

「墓地へ送ったシャドール・ヘッジホッグの効果。このカードがカードの効果で墓地へ送られた場合、デッキからシャドールモンスター1体を手札に加える。デッキからシャドール・ファルコンを手札に加える。そして…レベル5のシャドール・ビーストに、レベル2のシャドール・ファルコンをチューニング！」

「何っ?!」

「シンクロ…っ」

シャドール・ファルコンが歯車になり、その中にシャドール・ビーストが入り、5つの星になる。

「ボクは強いのが好きだからね。強くあるために出来ることは、なんでもするつもりさ…シンクロ召喚！レベル7、アーカナイト・マジシャン!!」

アーカナイト・マジシャン DEF 1800

歯車から光が放たれ、光から白いローブを纏った魔法使いが現れる。…だがそのカードで攻める気はないのか、守備表示だ。

「アーカナイト・マジシャンの効果発動。このカードがシンクロ召喚に成功したとき、アーカナイト・マジシャン自身に魔力カウンターを2つ乗せる。そして攻撃力は、自身に乗っている魔力カウンターの数の、1000倍になる」

「1000倍…2個乗るから2000アップか」

「だが守備表示ではその効果は生かせない。…それでも、何を考えている」

アーカナイト・マジシャン MC 0↓2 ATK 400↓2400

「焦らない、焦らない。アーカナイト・マジシャンの効果発動。この

カードに乗っている魔力カウンター1つを取り除くことで、相手フィールドのカード1枚を破壊する。ということで、2個取り除いて君達のセットカード2枚、破壊しようか」

「トラップ発動！RRーレディネス！このターン、オレのRRは戦闘では破壊されない！」

「オレもただやられるつもりはない。トラップ発動！幻影騎士団ダーク・ガントレット！このカードはデッキから、ファントムと名のつくマジック、トラップを墓地へ送る。デッキから幻影死槍を墓地へ！」

アーカナイト・マジシャン MC 2↓1↓0 ATK 2400  
↓1400↓400

アーカナイト・マジシャンの杖が光りだし、そこから2つの光弾がセットカード目掛け放たれたが、どちらもフリーチェイン、使わせただけに終わった。

「うーん…まあいいか。手札からシャドール・ファルコンを通常召喚。そして装備魔法、魂写しの同化をシャドール・ファルコンに装備。その効果で、属性を炎に変更」

シャドール・ファルコン ATK 600 闇属性 ↓ 炎属性

再び現れるシャドール・ファルコン。そして装備魔法が装備された途端、その体から炎のようなオーラが少し出始める。

「そして魂写しの同化の効果。シャドール・ファルコンと、手札のシャドール・ハウンドを融合。模られし魂に導かれた、影に蠢く古に眠りし魂よ、鳥と獣合わせり混ざり合い、1つとなり、影より偽りの神を呼び覚ませ！融合召喚！さあ現れる、灼熱の監視者、エルシャドール・エグリスタ!!」

暗い渦にシャドール・ファルコンと、黒い体に黄色のパーツを持つ犬のようなモンスターが入る。そして渦から影が伸び、それが形になり：燃え上がる。現れたのは、関節に様々な色に変化する球体を持つ、赤い無数の糸が翼のように伸びた、燃え上がる甲冑。：そのモンスターはジェムナイト・クリスタに似ているが、2人は知らない。

エルシャドール・エグリスタ ATK 2450

「それじゃあシャドール・ファルコンの効果で、墓地から裏守備表示で特殊召喚。シャドール・ハウンドの効果もあるけど…今はいいかな。それよりも…ボクは、レベル7のアーカナイト・マジシャンとエルシャドール・エグリスタで、オーバーレイ！」

「何!？」

「アカデミアが、エクシーズ召喚…だと…」

「言ったよね、強くなるためならボク、なんでもするって…エクシーズ召喚！ランク7、幻獣機ドラゴサック！」

フィールドに現れた穴の中にアーカナイト・マジシャンが黄色い光に、エグリスタが赤黒い光になって飛び込む。そして穴からは…巨大な、ドラゴンを模した超大型輸送機。…大型なだけあり、かなりデカイ

幻獣機ドラゴサック ATK 2700

「ドラゴサックの効果発動。オーバーレイ・ユニットを1つ使い、ボクのフィールドに幻獣機トークンを2体、特殊召喚する」

幻獣機トークン DEF 0

ドラゴサックの周囲を回っている光の1つがドラゴサックに取り込まれると、ドラゴサックに酷似した半透明な幻が現れる。そして、そのうち1体が、ドラゴサックへと吸収される。

「そしてドラゴサックの効果。自分フィールドの幻獣機1体をリリースすることで、相手フィールドのカード1枚を、破壊する。ミミックリーレイニアスを破壊」

「くっ…」

そしてドラゴサックからミサイルが放たれて、ミミックリーレイニアスが焼き尽くされる。…そしてその光景が過ぎると…ユーハは、あるカードを発動させる。

「そして魔法カード、ミラクルシンクロフュージョンを発動。このカードはフィールドと墓地から、シンクロモンスターを融合素材に指定する融合モンスターの素材を除外し、融合召喚を行う。ボクはアーカナイト・マジシャンと、エフェクト・ヴェーラーを除外し、融合」

「！シンクロから融合…」

「じゃあ行くよ。神秘の魔術師よ、能力を隠すものと交わり、新たな姿へと生まれ変わらん。融合召喚！さあ現れる、頂点たる神秘の魔術師、覇魔導師アーカナイト・マジシャン！そしてこのモンスターにも、アーカナイト・マジシャンと同じ、魔力カウンターを2つ乗せる効果を持つ」

融合の渦に、アーカナイト・マジシャンとエフェクト・ヴェーラーが入り、そこから…青い鎧とローブが一体になったものを着ている、アーカナイト・マジシャンが現れる。

覇魔導師アーカナイト・マジシャン MC 0↓2 ATK 14  
00↓3400

「そして魔法カード、影依融合を発動！このカードはシャドールと名のつく融合モンスターを融合召喚する効果を持つ…けど、この影依融合は、普通の融合とは違ってね…」

「どういうことだ」

「このカードは手札とフィールドのカードで融合するんだけど…相手フィールドにエクストラデッキから特殊召喚されたモンスターがいれば、素材を自分のデッキから墓地へ送れる。君達のフィールドには、エクシーズ召喚したブレイク・ソードが1体いる。よって…条件は、成立」

「！それを狙っていたのか…」

「うん。ということ…デッキからシャドール・ドラゴンと地属性のペロペロケルペロスを融合。影に蠢く古に眠りし竜の魂よ、三つ首の番犬と合わさり混ざり合い、1つとなり、安息の地獄を生み出せ。融合召喚！さあ現れる、エルシャドール・シエキナーガ!!」

暗い渦の中にシャドール・ドラゴンと3つ首の何やらかわいのかそうじゃないのかよく分からない犬が入り…暗い渦から延びる影が形になる。…それは、何やら女性の姿をした人形に、4つの足を持つ巨大な機械…そして人形に絡みつき、機械を絡めている紫色の糸、それらで構成されたよく分からないモンスターが姿を現す。

エルシャドール・シエキナーガ ATK 2800

「バトル。覇魔導師アーカナイト・マジシャンで、ブレイクソードを攻

撃。ハイマジック・ノヴァ！」

「！（こ）は…いや、使わないでおこう）ぐう…」

ユート LP 4000↓2600

アーカナイト・マジシャンが放つ無数の光弾に曝されたブレイクソードは何とか馬を走らせるも徐々に被弾し、そしていくつもの光弾が直撃していく。

「だが、ブレイクソードの効果発動！エクシーズ召喚されたこのカードが破壊されたとき、墓地から同レベルの幻影騎士団を2体特殊召喚し、そのレベルを1つあげる！墓地のサイレントブーツとダステイローブを特殊召喚！」

幻影騎士団ダステイローブ 星3↓4 DEF 1000

幻影騎士団サイレントブーツ 星3↓4 DEF 1200

ブレイクソードは破壊されたが、ブレイクソードの体を構成していた炎や、砕け散った鎧が集まり、ダステイローブとサイレントブーツに変化した。

「へー…きつきの効果はブレイクソードを破壊して、レベル4のモンスターを2体呼び出し、そこからランク4のエクシーズモンスターを呼び出す…ってところか。…それじゃあ、シエキナーガで、ダステイローブを攻撃！シャドーブレイク・スタンプ！」

不意にダステイローブが何かに縛られたようになり、そしてシエキナーガにある足の1つがダステイローブ目掛け振り下ろされ、破壊する。

「（今のは…）」

「ドラゴサックは破壊効果を使用したターン、攻撃できない。…じゃあこっちの効果が発動しようかな。覇魔導師アーカナイト・マジシャンの効果発動。1ターンに1度、魔力カウンターを1つ取り除くことで、相手フィールドのカードを破壊するか、デッキからカードを1枚ドロウする効果、どちらかを使える。そうだね…じゃあ手札が欲しいから、1枚ドロウ」

覇魔導師アーカナイト・マジシャン ATK 3400↓2400

「カードを1枚伏せて、ターンエンド。さあ、まだまだ楽しもう」

ユーハ 手札2 LP 4000

モンスター セットモンスター×1、幻獣機ドラゴサック×1(攻)

O U×1、幻獣機トークン×1(守)、覇魔導師アーカナイト・マジシヤ

ン×1(攻) MC×1、エルシャドル・シエキナーガ×1(攻)

魔法・罫 セットカード×1



## 第27話恐怖の恵み

フィールドの状況

ユート 手札2 LP 4000

モンスター 幻影騎士団サイレント・ブーツ×1 (守)

魔法・罠 なし

隼 手札2 LP 4000

モンスター セットモンスター×1 (RRーバニシング・レイニアス)

魔法・罠 なし

ユーハ 手札3 LP 4000

モンスター アーカナイト・マジシャン×1 (守)、幻獣機ドラゴ

サック×1 (攻) OU×2

魔法・罠 なし

ユーハ 手札2 LP 4000

モンスター セットモンスター×1、幻獣機ドラゴサック×1 (攻)

OU×1、幻獣機トークン×1 (守)、覇魔導師アーカナイト・マジシャン×1 (攻) MC×1、エルシャドール・シエキナーガ×1 (攻)

魔法・罠 セットカード×1

現在のターン：ユーハのエンドフェイズ終了、隼のドローフェイズ「…オレのモンスターを残したか。なら、それを後悔させてやる！オレのターン、ドロロー！オレは裏側のバニシング・レイニアスを反転召喚、そしてオレのフィールドにRRがいることで、RRーファジー・レイニアスは1ターンに1度、手札から特殊召喚できる！こい！RRーファジー・レイニアス！」

RRーバニシング・レイニアス ATK 1400

RRーファジー・レイニアス DEF 1500

隼が呼び出したのは、紫色の機械の鳥。このモンスターにはデメリットがあるが、RRであれば別段問題ない。

「そして速攻魔法、スワローズ・ネストを発動！自分フィールドの鳥獣族モンスター1体をリリースし、同じレベルの鳥獣族モンスター1体

を、特殊召喚する！レベル4のファジー・レイニアスをリリースし、デッキからレベル4のバニシング・レイニアスを特殊召喚！」

RR―バニシング・レイニアス ATK 1400

「そしてリリースしたファジー・レイニアスの効果発動！このカードは墓地へ送られた場合、1ターンに1度だけ、デッキから同名カードを手札に加える！ファジー・レイニアスを手札に加え、バニシング・レイニアスの効果でファジー・レイニアスを特殊召喚！」

RR―バニシング・レイニアス ATK 1400

RR―ファジー・レイニアス DEF 1500

「いけ、隼！」

「オレはレベル4のバニシング・レイニアス2体とファジー・レイニアスで、オーバーレイ！3体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！雌伏のハヤブサよ、逆境の中で研ぎ澄まされし爪を挙げ、反逆の翼、翻せ！エクシース召喚！現れるお！ランク4！RR―ライズ・ファルコン!!」

フィールドに空いた穴の中に4体のRRが紫色の光になって飛び込み、穴からは勢いよくライズ・ファルコンが飛び出してきた。

RR―ライズ・ファルコン ATK 1000

「ライズ・ファルコンの、モンスター効果！オーバーレイ・ユニットを1つ使い、相手フィールドの特殊召喚されたモンスター1体の攻撃力を、このカードの攻撃力に加える！」

「おっと、それはいけないね…ボクはエルシャドール・シエキナーガの効果発動。相手の特殊召喚されたモンスターが効果を発動したら、その発動を無効にし、破壊する。ブービー・エフェクト！」

「！なんだと…」

ライズ・ファルコンの体が炎に包まれた瞬間、ライズ・ファルコンに紫色の糸が巻き付いたのが見えると、それによってライズ・ファルコンは切り刻まれてしまった。

「…なるほど、さっきの攻撃はこうやって縛ったわけか」

「まあそういうことじゃないかな。そしてこの効果を使用したらその後、手札のシャドールと名のつくマジック、トラップを1枚墓地へ送

る。ボクは影依シャドールーツの原核を墓地へ送る。そして影依シャドールーツの原核の効果。このカードがカード効果で墓地へ送られたら、墓地のシャドールと名のつくマジック、トラップを1枚手札に加える。ボクは墓地の影依融シャドール・フュージョン合を手札に加える」

「…だが、これで終わると思うな！何度でも、オレ達は立ち上がる！速攻魔法！RUMーラプターズ・フォース！RRと名のつくエクシーズモンスターが破壊されたターンに発動でき、そのモンスターを特殊召喚し、さらにそのモンスターをエクシーズ素材とし、ランクが1つ上のRRに、ランクアップさせる！オレはランク4のライズ・ファルコンを特殊召喚し、オーバーレイ!!」

「ーランクアップ…」

ライズ・ファルコンが現れ、すぐに紫色の光に変わると、フィールドに空いた穴の中へと飛び込む。

「凜猛なるハヤブサよ、激戦を切り抜けし翼翻し、寄せ来る敵を討ち破れ！ランクアップ・エクシーズ・チェンジ！現れろお！ランク5！RRーブレイズ・ファルコン!!」

穴から光が溢れ、炎に包まれながらモンスターが現れる。そして炎が払われ、真紅の体を持つ機械の鳥が現れる。

RRーブレイズ・ファルコン AT 1000

「ブレイズ・ファルコンの、モンスター効果！オーバーレイ・ユニットを1つ使い、相手フィールドのモンスターを全て破壊し、その数×500ポイントのダメージを、相手に与える！オールレンジ・デストロイ！」

「ーなっ…」

ブレイズ・ファルコンから小型の浮遊砲台がいくつも飛び出し、ユーハのモンスターを殲滅し、その爆風によりユーハはダメージを受ける。…無事なのは、その爆風の中に居ても平然としているドラゴサックぐらいだ。

ユーハ LP 4000↓2000

「これはすごいね…破壊されたシャドール・ファルコン、シエキナーガ、そして相手によるダメージを受けたことで、ペロペロケルペロス

の効果発動。シャドール・ファルコンを自身の効果で特殊召喚し、シエキナーガは墓地へ送られたら、墓地のシャドールと名のつくマジック、トラップを1枚手札に加える。影依シャドールマジックの原核を手札に。そしてペロペロケルペロスは、戦闘か相手による効果ダメージを受けたら、墓地のこのカードを除外し、相手フィールドのカードを破壊する。サイレントブーツを破壊しようかな」

「!…なっ…」

「サイレントブーツ…」

ペロペロケルペロスがいきなりサイレントブーツの近くに現れ、飛びかかる。それでもみ合っているうちにサイレントブーツが破壊され、役目を終えたケルペロスは消える。

「ここでブレイズ・ファルコンを破壊してもね…それなら、相手の動きを邪魔したほうがいいかなーって」

「くっ…すまない、ユート…これで、ターンエンド」

隼 手札0 LP 4000

モンスター ブレイズ・ファルコン×1(攻)

魔法・罠 なし

「構わない。オレが決める。オレのターン、ドロー!オレは墓地のサイレントブーツとダステイローブの効果発動!互いに墓地から除外することで、デッキからサイレントブーツはファントムと名のつくマジック、トラップを、ダステイローブはファントムと名のつくカードを、それぞれ1枚手札に加える。オレはダステイローブの効果で幻影騎士団ダークティショルダー、サイレントブーツの効果でRUM―ファントム・フォースを手札に加える」

「!ユート、それは…」

「君も使うのかい、RUMを」

「…ああ。オレは手札から幻影騎士団ダークティショルダーを召喚!そしてオレの場に幻影騎士団がいることで、幻影騎士団サイレントブーツを特殊召喚!」

ユートのフィールドに、青い炎の体にボロボロだがそれでもしっかりとしたシヨルダーを着たモンスターが現れる。

幻影騎士団ダーティシヨルダー ATK 1000

幻影騎士団サイレントブーツ DEF 1200

「ダーティシヨルダーの、モンスター効果。1ターンに1度、オレの場の幻影騎士団1体のレベルを1つ上げる、または下げることができ。オレはサイレントブーツのレベルを、1つあげる！」

幻影騎士団ダーティシヨルダー 戦士族・効果 闇属性 星4 A

TK 1000 DEF 800

①1ターンに1度、自分フィールド上の「幻影騎士団」モンスター1体を対象に、以下の効果を選択して発動できる。

・そのモンスターのレベルを、1つあげる。

・そのモンスターのレベルを、1つ下げる。

幻影騎士団サイレントブーツ 星3↓4

「これでレベル4が2体…」

「オレはレベル4の幻影騎士団ダーティシヨルダーと幻影騎士団サイレントブーツで、オーバーレイ！2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！漆黒の闇より、愚鈍なる力に抗う反逆の牙！今降臨せよ！エクシーズ召喚！ランク4、ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン!!」

ダーティシヨルダーとサイレントブーツの2体が紫色の光になり、穴へと飛び込む。そして穴からはダーク・リベリオンが、フィールドに現れる。

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン ATK 2500

「そしてRUM―ファントム・フォースを発動！自分フィールドの闇属性モンスター1体を、同じ種族でランクが1つ上の闇属性エクシーズモンスターに、ランクアップさせる！オレはランク4のダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンで、オーバーレイ・ネットワークを再構築！…！ぐっ…くっ…くっ…混沌に染まりし漆黒の牙、より強靱なる力により…強大な壁に大穴を開ける！カオス・エクシーズ・チェンジ！来い、ランク5…CX―ファントム・リベリオン・カオス・ドラゴン！」

ダーク・リベリオンが紫色の光になり、穴へと飛び込む。そして：再びあのドラゴン、ファントム・リベリオンが姿を現す。

RUM―ファントム・フォース 通常魔法

①自分フィールドの闇属性Xモンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターと同じ種族でランクが1つ高い闇属性Xモンスター1体を、そのモンスターの上に重ねてエクストラデッキからエクシード召喚扱いで特殊召喚する。

②自分フィールドの闇属性Xモンスターが戦闘によって破壊される場合、発動できる。代わりにこのカードをゲームから除外する。

CX―ファントム・リベリオン・カオス・ドラゴン ATK 2800

「つぐ：ファントム・リベリオンの、効果発動！このカードがダーク・リベリオンをエクシード素材としている場合、オーバーレイ・ユニットを1つ使うことで、相手フィールドのモンスターの攻撃力、守備力を0にする！ドラゴサックの攻撃力を0にする！カオス・ルイン・デイスチャージ!!」

幻獣機―ドラゴサック ATK 2700↓0

「バトルだ！ファントム・リベリオン・カオス・ドラゴンで、ドラゴサックを攻撃！怒濤のアンガー・カオス・デイスオベイ!!」

「…」

赤紫の光により拘束されたドラゴサックに迫るファントム・リベリオンの顎。そして：直撃：する前に、ドラゴサックが消える。

「！これは…」

「…融合か」

ドラゴサックが消えたのを見て、瞬時に何があつたか予想をするユート。…そして、ユーハは不気味な笑みを浮かべつつ、1枚のカードを発動している。

「いやー、今のは、中々だよ…当たればね。でも残念だけどボクは速攻魔法、エルシャドール・フュージョン神の写し身との接触を発動したんだ。このカードは、フィール

ドと手札のモンスターを墓地へ送ることで、条件に合うシャドール融合モンスター1体を融合召喚するカード。この効果で、フィールドの風属性、ドラゴサックと手札のシャドール・ビーストを融合。大いなる使徒の力により、影に蠢く古に眠りし獣の魂よ、獣の力宿す機械と合わさり混ざり合い、1つとなり、影より風の僕たる精霊を呼び出せ！融合召喚！さあ現れる、エルシャドール・ウエンディゴ！」

エルシャドール・ウエンディゴ DEF 2800

そう、ドラゴサックはフィールドに現れた影の渦に飲まれたのだ。そして影が形になり、紫のイルカらしき姿の人形？と、少女の姿をした人形が現れる。

「ということ、シャドール・ビーストの効果で1枚ドロウするよ」

「くっ…(守備力2800…フロントム・リベリオンの攻撃力は2800…ダーク・レクイエムだったら…シャドール・ファルコンが効果を使ったのは前のターン…ここは攻撃するよりも…)…カードを1枚伏せて、ターンエンド」

ユート 手札1 LP 2600

モンスター CX | フロントム・リベリオン・カオス・ドラゴン×1 (攻) OUX1

魔法・罫 セットカード×1

「それじゃあボクのターン、ドロウ。…それじゃあ反転召喚、シャドール・ファルコン。その効果で墓地からシャドール・リザードをセット」  
シャドール・ファルコン ATK 600

「そして魔法カード、影依融合を発動！エクストラデッキから特殊召喚されたモンスターが相手フィールドにいるため、デッキからシャドール・ドラゴンと超電磁タートルを融合。影に蠢く古に眠りし竜の魂よ、大いなる電磁の盾と合わさり混ざり合い、1つとなり、影より光をもたらせ！融合召喚！さあ現れる、神の子たる光の巨人、エルシャドール・ネフィリム!!」

エルシャドール・ネフィリム ATK 2800

シャドール・ドラゴンと、機械でできたカメが影の渦に入り、渦からは影…ではなく、直接形になったものが現れる。…それは、シエキ

ナーガにもいた、女性の人形。違うのは背中から延びる、翼のような無数の糸だろうか。

「こいつ、さつきもいた…」

「ああ…別のモンスターだったのか」

「うん、そうだよ。それじゃあネフィリムの効果。このカードが特殊召喚に成功したら、デッキからシャドールと名のつくカード1枚を墓地へ送る。…それと同時にシャドール・ドラゴンの効果も発動。そっちの、ドラゴンを使っている君のセットカードを破壊するよ」

「残念だが読めている。トラップ発動！ファントムナイト幻影騎士団シャドー・ベイル！オレのフィールドのモンスター1体の攻撃力を、400ポイントアップさせる！この効果で、ファントム・リベリオンの攻撃力を400アップ！」

CX—ファントム・リベリオン・カオス・ドラゴン ATK 28  
00↓3200

再びシャドールモンスターの効果によりセットカードを破壊されそうになる…が、フリーチエーンのカードであったため、あつさり発動を許す。

「うーん、まいつか。ネフィリムの効果で、デッキから影依シャドールの原核を墓地へ送り、その効果を発動。墓地から神エルの写し身との接触フュージョンを手札に加える。そして…レベル6のエルシャドール・ウエンディゴに、レベル2のシャドール・ファルコンをチューニング、シンクロ召喚。レベル8、メンタルスファイア・デーモン」

シャドール・ファルコンが飛んで2つの歯車になり、その中にウエンディゴが入り6つの光に変わる。そして光が放たれ、現れたのは骸骨のように見える悪魔。ただし肉はちゃんとしている。

メンタルスファイア・デーモン ATK 2700

「それじゃあいくよ、バトル。メンタルスファイア・デーモンで、ブレイズ・ファルコンを攻撃！」

「(ここは…)ぐっ！」

隼 LP 4000↓2300

「大丈夫か、隼」



「この程度、まだまだ余裕だ」

「へー：それじゃあメンタルスファイア・デーモンの効果。相手モンスターを戦闘破壊したら、その攻撃力分、ライフを回復する」

ユーハ LP 2000↓3000

「それじゃあ、エルシャドール・ネフィリムで、ファントム・リベリオン・カオス・ドラゴンを攻撃！裁きを受けよ、デイストピア・エクスキューション！」

「！攻撃力が高くなっているファントム・リベリオンに攻撃だと…」

「どんな効果を」

「ネフィリムの効果。特殊召喚されたモンスターと戦闘を行う場合、そのモンスターを、戦闘を行わず、破壊する」

「！くっ…（ファントム・フォースは戦闘破壊以外には対応していない…）」

ネフィリムが手と手の間に紫色の玉を作り出すと、それをファントム・リベリオン目掛け放つ。そしてそれはファントム・リベリオンに直撃し、影が現れその中へと飲み込まれる。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド。さあどうするかな？」

ユーハ 手札2 LP 3000

モンスター セットモンスター×1、エルシャドール・ネフィリム×1（攻）、メンタルスファイア・デーモン×1（攻）

魔法・罠 セットカード×2

「オレのターン、ドロロー…くっ（ブレイクスルー・スキル…仕方ない）カードを1枚伏せて、ターンエンド」

隼 手札0 LP 2300

モンスター なし

魔法・罠 セットカード×1

「オレのターン、ドロロー…（RUM―幻影騎士団ラウンチ…よし）オレは手札から魔法カード、死者蘇生を発動！墓地からダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンを特殊召喚！」

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン ATK 2500

「…で？どうするの？そのモンスターじゃあ、どのモンスターを上回

ることはできないよ」

「まだまだ！オレは手札から速攻魔法、RUM―ファントムナイツ幻影騎士団ラウンチを発動！このカードは、自分フィールドのオーバーレイ・ユニットを持たない闇属性エクシーズモンスター1体を、ランクが1つ上の闇属性エクシーズモンスターに、ランクアップさせる！」

「またランクアップか」

「オレはランク4のダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンを素材に、オーバーレイ・ネットワークを再構築！煉獄の底より、未だ静まらぬ魂に捧げる反逆の歌！永遠に響かせ現れる！ランクアップ・エクシーズ・チェンジ！いでよ！ランク5、ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴン！」

フィールドに現れた穴に、ダーク・リベリオンが紫色の光に変わり飛び込む。そして現れたのは：ダーク・リベリオンに、胴体と脚、翼の一部に骨のようなものがまとわりついた、ダーク・リベリオンだった。

ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴン ATK 3000

ファントムナイツ「幻影騎士団ラウンチは、特殊召喚したモンスター1体のオーバーレイ・ユニットとなる」

「じゃあすつごく嫌な予感するから、永続トラップ発動、シャドールーツ影依の原核。このカードは攻撃力1450、守備力1950の闇属性モンスターとして、ボクのフィールドに特殊召喚される」

シャドールーツ影依の原核 DEF 1950

「なら、ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴンの、効果発動！このカードのオーバーレイ・ユニットにダーク・リベリオンがあるとき、1ターンに1度、このカードのオーバーレイ・ユニットを1つ使うことで、相手フィールドのモンスターの攻撃力を0にし、そのモンスターの元々の攻撃力分、このカードの攻撃力をあげる！この効果で、メンタルスフィアデーモンを選択！レクイエム・サルベージョン!!」

ダーク・レクイエムの翼にある球体から黒い闇が放たれ、メンタル・スフィア・デーモンを拘束する。

メンタル・スフィア・デーモン ATK 2700↓0

ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴン ATK 3000 ↓  
5700

「これでトドメだ！ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴンで、メ  
ンタル・スフィア・デーモンを攻撃!!」

不意に雲と共に神々しい光が出てきて、ダーク・レクイエムが飛ぶ。  
：そして、翼から膜が展開していく。：それは、ステンドグラスのよ  
うになっており、それが光と合わさり、とても美しい。そして、ダー  
ク・リベリオンから引き継いでいる顎の牙に、光が纏われる。

「鎮魂のデイススター・デイスオベイ!!」

「やだ。墓地の超電磁タートルの効果。超電磁タートルはデュエル中  
1度だけ、墓地から自身を除外することで、バトルフェイズを強制的  
に終了させる」

「やはりそうくるか…」

ダーク・レクイエムの攻撃は、不意に現れた超電磁タートルの甲羅  
によって完全に防がれてしまう。

「…これでターンエンド」

ユート 手札1 LP 2600

モンスター ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴン×1 (攻)

OU×1

魔法・罫 なし

「…超電磁タートルを使わせただけいいが…」

「やはり厄介だな…」

「うーん、元に戻らないのか…それじゃあ厄介なボクのターン、ド  
ロー。：それじゃ、反転召喚シャドール・リザード。そのリバース効  
果で、相手フィールドのモンスター1体を破壊する。もちろん、ダー  
ク・レクイエムを破壊」

「墓地の幻影<sup>ファンタム・デス・スピア</sup>死 槍の効果！自分の闇属性モンスターが破壊される  
場合、代わりに墓地のこのカードを、ゲームから除外できる！」

「あらら」

シャドール・リザード ATK 1900

フィールドに現れた金色の金具と影の体を持つ謎のモンスターに

より、ダーク・レクイエムは影に浸食されかけたが、地面から現れた槍により、リザードとレクイエムの間にある影が切れ、浸食も収まる。「それじゃあ…レベル8のネフィリムとメンタル・スフィア・デーモンでオーバーレイ。エクシーズ召喚！ランク8、森羅の守神アルセイ！」

フィールドに現れた穴の中にネフィリムが黄色い光に、メンタル・スフィア・デーモンが紫色の光になり飛び込み、穴からは…大きく、苔やら葉っぱが生えているヤギのようなモンスター。だが鈴にしめ縄など、何やら神聖な感じがするモンスターである。

森羅の守神アルセイ ATK 2300

「そしてアルセイの効果。1ターンに1度、カード名を1つ宣言し、デッキの一番上のカードを捲る。そのカードが宣言通りのカードだったら手札に加え、違ったら墓地へ送る。そうだね…じゃあそっちの人が使ったカード、RUMファントム・フォースでも宣言しておこうかな」

「…（確かアルセイは…）トラップ発動！ブレイクスルー・スキル！アルセイの効果は無効にする！」

「うーん、そうきたか…それじゃあバトル。アルセイとシャドール・リザードで、そっちの鳥使いの君にダイレクトアタック」

「（おそらくヤツの伏せカードはさっきの速攻魔法…そしてこの状況）墓地のRRレディネスの効果！墓地のこのカードを除外し、このターンのダメージを0にする！」

「へ…カードを1枚伏せて、ターンエンド」

ユーハ 手札2 LP 3000

モンスター シャドール・リザード×1(攻)、シャドール影依の原核×1(守)、

森羅の守神アルセイ×1(攻) OUX1

魔法・罫 セットカード×2

「済まない隼、助かった」

「気にするな。オレの、ターン…！（来たか）オレは手札からRUMーソウル・シエイプ・フォースを発動！ライフを半分にし、墓地のRRと名のつくエクシーズモンスター1体を特殊召喚し、そのモンス

ターを素材とし、ランクが2つ上のエクシードズモンスター1体へとランクアップさせる！」

隼 LP 2300↓1150

「オレはライズ・ファルコンを特殊召喚し、オーバーレイネットワークを再構築!!誇り高き隼よ、英雄の血潮に染まる翼翻し、革命の道を、突き進め!!ランクアップ・エクシードズ・チェンジ!!現れるお!!ランク6!RRレヴオリュション・ファルコン!!!」

RRレヴオリュション・ファルコン ATK 2000

フィールドに空いた穴に、紫色の光が飛び込み、穴からは…黒い姿をした、機械の鳥。足と呼べるものは見えず、その姿はどこか、RRを表すマークに似ている。

「レヴオリュション・ファルコンの効果発動!オーバーレイ・ユニットを1つ使い、このターン、レヴオリュション・ファルコンは、相手フィールドに特殊召喚されたモンスター全てに1度ずつ、攻撃できる!そしてレヴオリュション・ファルコンは特殊召喚されたモンスターと戦闘を行うとき、そのモンスターの攻撃力を、0にする!」  
「ワーオ、すごいね」

「やれ!レヴオリュション・ファルコン!!敗れた者たちの意志を受け継ぎ、全ての敵を殲滅しろ!!レヴオリュシヨナル・エアレイド!!」  
上昇に合わせ排出される蒸気、その勢いと高熱により力を一時的に失うユーハのモンスター。そして…レヴオリュション・ファルコンの胸部?が開き、そこから爆撃をする…が。

「でも負けるのは嫌だからな…:速攻魔法、エルシャドール・フュージョン神の写し身との接触を発動。フィールドの影依シャドールーツの原核を水属性の融合素材として扱い、シャドール・リザードと融合!大いなる使徒の力により、影に蠢く古に眠りし蜥蜴の魂、そして影の魂の源と合わさり混ざり合い、極寒の墮天使を使役せよ。融合召喚!さあ現れる、エルシャドール・アノマリリス!」

影の渦に2枚のカードが入り、影が形になり、ネフィリムに凍りついた何かが巻き付いたモンスターが、フィールドに降り立つ。言うまでもないが、デカイ。

エルシャドール・アノマリリス DEF 2000

「くっ…だが、アルセイは破壊させてもらう!!」

森羅の守神アルセイ ATK 2300↓0

ユーハ LP 3000↓1000

「うーん、まあしようがない」

「…ターンエンドだ」

隼 手札0 LP 1150

モンスター RR―レヴオリューション・ファルコン×1(攻)

魔法・罠 なし

「(セツトカードが分からないが…一気に決める!)オレの、ターン!手札からファントムナイツ幻影騎士団ラギットグローブを召喚!そしてオレのフィールドにファントムナイツ幻影騎士団が存在することで、手札からファントムナイツ幻影騎士団サイレントブーツを特殊召喚!」

ファントムナイツ幻影騎士団ラギットグローブ ATK 1000

ファントムナイツ幻影騎士団サイレントブーツ DEF 1200

「オレはレベル3のラギットグローブとサイレントブーツでオーバーレイ!2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築。戦場で散りし無念の魂よ、今再び姿なきものとなり現れる!エクシーズ召喚!ランク3、ファントムナイツ幻影騎士団ゴーストスピア!そして闇属性エクシーズモンスターのエクシーズ召喚に使用されたことで、ラギットグローブの効果!ゴーストスピアの攻撃力を、1000ポイントアップさせる!」

ファントムナイツ幻影騎士団ゴーストスピア ATK 1400↓2400

フィールドに空いた穴の中にラギットグローブとサイレントブーツが紫色の光に変わり飛び込み、現れたのは…布を被った人型と思われるモンスター…手には、大きな槍を持っている。

「ゴーストスピアの効果発動!オーバーレイ・ユニットを1つ使い、このターン、ゴーストスピアは相手に直接攻撃できる!」

「そっくくるか…」

幻影騎士団ゴーストスピア 戦士族・効果/エクシーズ 闇属性

ランク3 ATK 1400 DEF 500

レベル3の「幻影騎士団」モンスター×2

①1ターンに1度、このカードのX素材を1つ使うことで発動できる。このターンのバトルフェイズ中、このカードは相手プレイヤーに直接攻撃することができる。

②このカードが墓地へ送られた場合、墓地、もしくは除外されている「幻影騎士団」モンスター1体を対象に発動できる。そのカードを手札に加える。

「バトルだ！ゴーストスピアで、ダイレクトアタック！」

不意にゴーストスピアが消える。そして…ユーハの背後にすぐゴーストスピアが現れ、槍で貫こうとする…が

「見え見えだよ。永続トラップ、強制終了を発動。このカードは自分フィールドのモンスター1体をリリースすることで、バトルフェイズを強制的に終了させる。ということで、アノマリリスをリリース」

「くっ…」

ユーハがカードを発動し、アノマリリスが消えると…ユーハに当たる寸前で、ゴーストスピアの動きが止まり、そしてゴーストスピアが消え、ユートの元へと戻る。

「アノマリリスが墓地へ送られたことで、墓地から影依融合シャドールフュージョンを手札に加える」

「…なら、ゴーストスピアのオーバーレイ・ユニットとして墓地へ送つた、幻影騎士団サイレントブーツの効果！墓地からこのカードを除外し、デッキから幻影霧剣ファンタム・フォッグ・ブレイドを手札に加える。…カードを1枚伏せて、ターンエンド」

ユート 手札0 LP 2600

モンスター ダーク・レイク・エクシース・ドラゴン×1 (攻)

OU×1、幻影騎士団ゴーストスピア×1 (攻) OU×1

魔法・罫 セットカード×1

隼のフィールドには、他にカードも手札もないが、特殊召喚されたモンスターとの戦闘においては無敵の強さを誇るレヴオリューション

ン・ファルコン、ユートのフィールドには先ほど手札に加えられセツトされた攻撃を封じる幻影霧剣、自身が対象になったらその効果を無効にでき、さらにモンスターを呼び出せるダーク・レクイエム、そしてオーバレイ・ユニットを1つ使うことで、相手にダイレクトアタックできるゴーストスピア。：非常に、強固なフィールドと言える。だが、それでも…。

「結構ピンチだなー…まあ、しようがない…ちよつと気合い入れないとね。ボクのターン、ドロー！」

ユートと隼の不安は、収まるどころか、ドンドン大きくなっていった。

「手札から魔法カード、マジック・プランターを発動！強制終了を墓地へ送り、2枚ドロー…：そして魔法カード、影依融合を発動。相手フィールドにエクストラデッキから特殊召喚されたモンスターがいるから、ボクはデッキからシャドール・ビーストと、ペロペロケルペロス融合。1回やったから省略して融合召喚！さあ現れる、エルシャドール・シエキナーガ！」

エルシャドール・シエキナーガ ATK 2600

再び現れるシエキナーガ。：省略して…いいの、だろうか。

「だからどうした」

「その攻撃力、変化しないならオレのゴーストスピアしか倒せないぞ」「まあまあ慌てない。ボクの目的はこっちさ。シャドール・ビーストの効果。デッキから、カードを1枚ドローする。…ふふふ、ふふふふ…アツハハハハハ!!」

「?なんだ…」

「いきなり、どうした…」

「やつと、やつと来たよ。やっぱり2枚入れようかな…でもボクあんまり使っていないしな…どうしようかな」

いきなり高笑いを始めたかと思うと、独り言を始めるユーハ。…どうやら求めていたカードが来たようだが…。

「でもまあ、楽しい時間はもうお終い、ここからは…恐怖の時間だよ。ボクは手札から魔法カード、ドラゴンズ・ミラー龍の鏡を、発動!!」



「!? 龍の鏡だと?!」

「確かあのカードは、アカデミアが使っていた、ドラゴン族の融合モンスターを、融合召喚するカード…」

ドラゴンズ・ミラー  
龍の鏡…このカードを発動した途端、一気にユーハから放たれる禍々しさが、大きくなった。そしてフィールドに現れる鏡からも、邪悪で恐ろしいオーラが放たれている。

「そうさ、このカードはフィールドと墓地のカードの融合素材となるモンスターを除外し、ドラゴン族融合モンスターを、融合召喚する。墓地の、6種類のエルシャドール達よ、今こそ大いなる存在を呼び起こす糧となれ! ネフィリム、ミドラーシユ、シエキナーガ、ウエンディゴ、エグリスタ、アノマリリスを除外!!! 深淵の探究者よ! 安息の地獄よ! 灼熱の監視者よ! 神の子たる光の巨人よ! 風の僕たる精霊よ! 極寒の墮天使よ! 今一つとなり、この地に黒き恐怖を空より齎せ!!」

鏡から黒い霧が飛び出すと、それが空に広がり…ドス黒い雲になる。その雲は広範囲に広がり、多くの人物の目に入る。…そして、地面が濡れる。降ってくるのはドス黒い雨。色こそつかないが、その雨粒に触れたものは、何かに…恐怖を抱いた。

「融合召喚! 現れ出でよ、大地に降り注ぐ恐怖の恵み、ブラックテラー・レイン・ドラゴン!!」

そしてそれは、雲から現れ、フィールドにゆっくりと、降りてくる。…それは、1体のドラゴン。ドス黒い1体の、ドラゴン。角、黒く、細くはなく太くもない体、強靱な四肢、鋭い尾、そして巨大な翼。全身が、ドス黒い、シンプルなドラゴン。

「ブラックテラー・レイン・ドラゴンは、融合素材にしたモンスターの属性が6種類以上なら、攻撃力が1000ポイントアップする!」

ブラックテラー・レイン・ドラゴン ATK 2500 ↓3500  
「…攻撃力3500…」

「6種類以上、ということとは…5種類以上の場合にも、何かあるのか?」

「5種類以上? いいや、もつとあるさ。使うときまで、内緒だけどね」  
「! まだ効果を持つのか…」

「それじゃあ、バトル。ブラックテラー・レイン・ドラゴンで、レヴオリューション・ファルコンを、攻撃！」

「何!?レヴオリューション・ファルコンは、特殊召喚されたモンスターと」

「それさつき聞いた。それじゃあさつそく…水属性モンスターを融合素材としたブラックテラー・レイン・ドラゴンの効果!相手の対象を取らないカードの効果を、受け付けない。テラー・アクア!」

「なんだと!?!」

レヴオリューション・ファルコンが上昇し、蒸気を放つが、ブラックテラーが全身から黒いオーラを放つことで、完全に無力化され…そしてさらに黒いオーラが大きくなる。

「ということ…消えろ。テラーズ・マッド・ストリーム!」

「させるか!ブラックテラー・レイン・ドラゴンを対象にトラップカード、ファントム・フォッグ・ソード幻影霧 剣を発動!対象モンスターにこのカードを装備し、そのモンスターは攻撃できず、攻撃対象にならず、効果は無効に」

「それじゃあ風属性を融合モンスターにしたことで、ブラックテラー・レイン・ドラゴンの効果発動!1ターンに1度、このカードを対象にしたマジック、トラップの効果と発動を無効にし、破壊する!テラー・ウインド!」

ブラックテラーの周りに霧が立ち込める…が、ブラックテラーが放つ黒いオーラに飲み込まれ、無力化されてしまう。

「!な、なんだと…」

「というわけで…これで、君おーわり」

「!!ぐ、ああああああああ!!!」

「!隼!!!」

隼 LP 1150↓0

「次は君だ。シエキナーガで、ゴーストスピアを攻撃!シャドーブレイク・スタンプ!」

「墓地のRUM―ファントム・フォースの効果!闇属性エクシーズモンスターが戦闘破壊される場合、代わりにゲームから除外する!」

ユート LP 2600↓2400

ゴーストスピアが縛られ、シエキナーガの巨大な足がゴーストスピアに迫る…が、ゴーストスピアは瞬時に消え、破壊を免れる。

「へー…じゃあボクは速攻魔法、次元融ば」

「そこまでだ!!」

「!…やつときたか」

「ん?…あー、来ちゃったか、キミ達のお仲間」

…ランサーズ候補であるユースチームが、今到着した。ドラゴサツク、シエキナーガ、ネフィリム、アノマリリス…巨大なモンスターを4体も出したのだ、居場所はすっかり分かる。

「ちえ、まだ続けたいのに…もつとやるために影の糸で妨害していたのに…さすがに、これだけいたらボクも厳しい。何より捕まるという面倒だ。…ということで、グッバイ」

ユーハが何かを発動すると、ユーハを中心にドス黒い闇が発生し、姿が見えなくなる。

「!待て!!」

「次会うときにもつと強くなつてつたら1対1でやろーねー」

ユートが闇へと突っ込む…が、途端に闇は晴れ、そこには誰もおらず、ドス黒い雲も雨も、消えていた。

「…くっそ!!」

「とにかく、彼を医務室へ」

「大口叩いてた割にやられるなんてな…」

「…隼は強い、十分に。…だがそれ以上に、ヤツは恐ろしい…」

「…へー、それで逃げてきたってわけ?」

「ボクのデッキは下手に複数相手にすると負けちゃうからね。ボクが強くて、デッキのほう相性悪くちゃやられるよ」

一方ユーハはというと…別のエリアへと移動していた。そして、誰かと話している。

「ウソつかないでよ。君、アカデミアじゃ1度に何人かかかってきて」

普通に倒してたじゃん」

「本気のデツキじゃなかったからさ。あっちのほうで、より複数に対応できる」

「うーんなんかよく分かんないな。…まあともかく、任務のほう、どう？」

「そうだね…ユーリやオベリスクフォース、後ついてきたヤツと、キミに任せるよ…デニス」

「いや人に任せてないで君もやってよ」

…そう、ユーハと話していたのは…デニス。…エクシード使いの、デニスである。

「気が向いたらね。ということ、後よろしく」

「はあ。まあしょうがない、それが君だからね…ユーハ」

## 第28話 強襲！オベリスクフォー

~~~~ ジャングルエリア ~~~~

「あ、止んだ。なんだったんだろ、さっきの雨」

ユート&隼VSユーハのデュエルが中断に終わった頃、そんなことが起きているなんてまったく知らない遊華はジャングルエリアにいた。

「お、ペンデュラムカード…これでさっきの…えーつと…大漁旗…だったかな…そいつからの分と合わせて、12枚か」

…少し前、5枚のペンデュラムカードを要求した大漁旗に対し、普通に5枚を出した遊華、それに対して大漁旗も5枚を賭け、その結果、大量展開の末遊華が勝利、大量のペンデュラムスタチューを手に入れたのであった。

「これだけあれば上位間違いなし…うへへへへ」

「ん？あ！巳柳遊華！」

「ん？…あ。確かえーつと…柊柚子ちゃん！」

…偶然にも、柚子と出会った遊華。だがこれが…彼女のちよつとした不幸の、始まりであった。

「なんか今、変な笑い声出してなかった？」

「ペンデュラムカードいっぱいだからつい嬉しくて…うへへへへ」

「へー…それじゃあ、私とデュエルしましょう！私は3枚賭けるわ」

「うん！それじゃあ私は」

「そこのお前、柊柚子だな」

不意に声をかけられた2人。声がしたほうを見ると…青い服に変な仮面をつけた、明らかに怪しい3人組が、そこにいる。

「…何その変なお面」

「なっ、何っ…これは我らオベリスクフォーにのみ支給される特別な代物！精鋭の証だ!!それを変なお面などと…」

「いや変だし。後誰？」

「…そうか、我らのことを知らないからこの仮面の素晴らしさが分からないか。我らはオベリスクフォー！アカデミア精鋭、つまりそこ

ら辺のヤツとは違うんだよ！」

「?アカデミア:!!融合次元:」

「え?」

一瞬アカデミアという言葉にピンとこなかった様子の言葉だが: どうやらあのときに聴いたことをすぐに思い出せたようだ。

「まあともかく、柊柚子、一緒に来てもらおうか」

「ゆっちゃん、こいつら悪くて怪しいヤツらだからね」

「ゆ、ゆっちゃん:?:?ってちよつと!」

唐突に柚子のあだ名だろう呼び方で柚子を呼ぶと、柚子の手を掴んで走り出す。:が。

「残念だが拒否権はない」

「柊柚子を渡すつもりがないというのなら:」

遊華の前に立ちふさがり、オベリスクフォース3人はデュエルデスクを展開し構える。

「:ゆっちゃん、下がってて」

「え、でも」

「あいつらはゆっちゃんが目当てみたい。それに見たよね、さっきの動き」

「:その前にいい?ゆっちゃんはやめて」

「:デュエル!」

「:デュエル!」

「(あ、今無視した:)」

遊華 LP 4000

オベリスクフォースA LP 4000

オベリスクフォースB LP 4000

オベリスクフォースC LP 4000

「私のターン!手札からカードガンナーを召喚!カードガンナーの効果で、デッキの上から3枚を墓地へ送って、墓地へ送った枚数×50ポイントアップさせる!3枚だから1500!」

カードガンナー ATK 400↓1900

墓地へ送られたカード

闇竜星―ジヨクト

竜星の輝跡

魔竜星―トウテツ

フィールドにカードガンナーが現れ、攻撃力を高める。そして…。「カードを2枚伏せて、永続魔法、補給部隊を発動。これでターンエンド。エンドフェイズ、カードガンナーの効果は終了して、攻撃力は元に戻る」

カードガンナー ATK 1900↓400

遊華 手札1 LP 4000

モンスター カードガンナー×1(攻)

魔法・罨 セットカード×2、永続魔法「補給部隊」×1

…よく見るいつもの展開である。

「たった攻撃力400を攻撃表示？攻撃力上昇効果だつてそのターンの終わりまで、なんだそりや残念過ぎるだろハッハ！見せてやるよ本当のデュエルつてヤツを！オレのターン、ドロ―！」

「低攻撃力を舐めてると痛い目みるよー」

「お前がな！手札から、アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ古代の機械猟犬を召喚！」

アンテイクギア・ハウンド・ドッグ古代の機械猟犬 ATK 1000

オベリスクフォースが呼び出したのは…古い機械やら何やらで作られている猟犬。…それと、攻撃力1000。

「…カードガンナーバカにしておいて攻撃力1000か…」

「こいつとそいつじゃ違うんだよ。アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ古代の機械猟犬の効果発動！

1ターンに1度、相手フィールドにモンスターがいるとき、相手ライフに600ポイントのダメージを与える！」

アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ古代の機械猟犬 機械族・効果 地属性 星3 ATK 100

0 DEF 1000

「古代の機械猟犬の③の効果は、1ターンに1度しか使用できない。」

①このカードが攻撃する場合のダメージステップ終了時まで、相手は魔法・罨カードを発動できない。

②1ターンに1度、相手フィールドにモンスターが存在する場合に発動できる。相手ライフに600ポイントのダメージを与える。

③自分フィールドにこのカード以外の「アンテイク・ギア」カードがある場合に発動できる。自分の手札・フィールドからこのカードを含む「アンテイク・ギア」融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体を融合召喚する。

「あつっ！…げ、何この効果…」

遊華 LP 4000↓3400

「さらに手札から魔法カード、融合を発動！フィールドと手札の、アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ古代の機械猟犬2体を融合！古の魂受け継がれし、機械仕掛けの猟犬どもよ！対をなし混じり合い、新たな力と共に生まれ変わらん！融合召喚！現れる！—古代の機械双頭猟犬《アンテイク・ギア・ダブルバイト・ハウンド・ドッグ》！」

融合の渦の中に、2体の猟犬が入り、現れたのは…頭が2つになった、アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ古代の機械猟犬。

アンテイク・ギア・ダブルバイト・ハウンド・ドッグ古代の機械双頭猟犬 ATK 1400

「攻撃力1400…低攻撃力バカにしてた割に、控えめな攻撃力のモンスター出してきたね」

「お前と我々とじゃ違うんだ。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

オベリスクフオースA 手札2 LP 4000

モンスター アンテイク・ギア・ダブルバイト・ハウンド・ドッグ古代の機械双頭猟犬×1(攻)

魔法・罠 セットカード×1

「それじゃあ私の」

「オレのターン、ドロー！アンテイク・ギア・キャッスル永続魔法、アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ古代の機械城を発動し、

アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ古代の機械猟犬を召喚！アンテイク・ギア・キャッスル古代の機械城は、自分フィールドのアンテイク・ギアモンスターの攻撃力を300ポイントアップさせ、さらに通常召喚する度に、このカードにカウンターを1つ乗せる」

アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ古代の機械猟犬 ATK 1000↓1300

アンテイク・ギア・キャッスル古代の機械城 カウンター(以後、C) 0↓1



「そしてハウンド・ドッグ効果！600ポイントのダメージだ！」

「ま、また〜」

遊華 LP 3400↓2800

そう、またである。

「そしてフィールドにハウンド・ドッグ以外のアンティーク・ギアカードがあることで、アンティーク・ギア・ハウンド・ドッグ古代の機械猟犬の効果発動！このカードは、手札とフィールドのモンスターを素材に、アンティーク・ギア融合モンスターを融合召喚する！オレはフィールドのハウンド・ドッグと手札の古代の機械騎士を融合！古の魂受け継がれし猟犬よ、騎士よ！隊列を組み混じり合い、新たな力と共に生まれ変わらん！融合召喚！現れる！アンティーク・ギア・デビル古代の機械魔神！」

融合の渦の中にハウンド・ドッグと、槍を持つ歯車と錆びた胴体の騎士が入り、歯車のついた羽、歯車に砲塔がついた腕、足、そしてコードの尻尾…名前言われなければ、すぐにはどんな分からないモンスターが現れる。

アンティーク・ギア・デビル古代の機械魔神 DEF 1800

「そして装備魔法、静寂のロッド―ケーストを、アンティーク・ギア・デビルに装備！ケーストの効果で、守備力が500ポイントアップ！」

アンティーク・ギア・デビル古代の機械悪魔 DEF 1800↓2300

「そして古代の機械魔神の効果発動！1ターンに1度、自分フィールドの表側のマジックカードの数×1000ポイントのダメージを、相手に与える！オレのフィールドには古代のアンティーク・ギア・キャッスル機械城と静寂のロッド―ケーストがある！よつて2000ポイントのダメージだ！」

アンティーク・ギア・デビル古代の機械魔神 機械族・効果／融合 閥属性 星8 ATK 1

500 DEF 1800

「アンティーク・ギア」モンスター×2

「古代の機械悪魔」の②の効果は、1ターンに1度しか使用できない。

①このカードに装備魔法が装備されている場合、このカードは相手の対象を取らないカードの効果を受け付けず、このカードに装備され

ている装備カードは、破壊されない。

②1ターンに1度、発動できる。自分フィールドに表側で存在する魔法カードの数×1000ポイントのダメージを相手に与える。

「え?!ちよ、ま、きやああああ!!…あ。アクションカード」

遊華 LP 2800↓800

「ちよ、ちよつと大丈夫なの?!」

「な、なんとか…」

「これでターンエンドだ!そしてギア・デビルに装備魔法が装備されている場合、このカードは対象を取らないカードの効果を受け付けず、装備されている装備カードは破壊されない、さらに静寂のロッドケースは、静寂のロッドケース以外の装備モンスターを対象にした魔法カードの効果が無効にし破壊する効果がある!」

オベリスクフオースB 手札2 LP 4000

モンスター アンテイク・ギア・デビル 古代の機械魔神×1(守)

魔法・罟 永続魔法「古代の機械城」×1C×1、装備魔法「静寂のロッドケース」×1装備対象：古代の機械悪魔

「よ、よーしわた」

「私のターン、ドロー!手札から古代の機械猟犬を召喚!」

「あんたもく」

「モンスターが通常召喚されたことで、古代の機械城にカウンターが1つ乗る!」

古代の機械城 C 1↓2

「そして歴史は繰り返される。古代の機械猟犬の効果!相手ライフに600のダメージだ!」

「きやあ!」

遊華 LP 800↓200

「ではバトル」

「その前に永続トラップ発動!竜星の具象化!さらに手札からアクションマジック、ダメージシールド!このターンの戦闘ダメージを無効にする!」

ダメージシールド アクション魔法

①このカードを発動したターン、自分が受ける戦闘ダメージは0になる。

「?!拾ったカードを、発動した…」

「おそらくこれがこのデュエルなんだろう。だがやることは変わらない。アンティーク・ギア・ハウンド・ドッグ 古代の機械猟犬で、カードガンナーを攻撃!そしてハウ

ンド・ドッグが攻撃する場合、相手はマジック、トラップを発動できない」

「でもダメージシールドの効果で、戦闘ダメージは0!それとカードガンナー、補給部隊、竜星の具象化の効果!カードガンナーは自身が破壊されたら、補給部隊は自分フィールドのモンスターが破壊されたら、デッキから1枚ドロウする、そして具象化は自分フィールドのモンスターが破壊されたらデッキから1ターンに1度だけ、竜星モンスター1体を特殊召喚する!ということで、デッキから闇竜星―ジヨクトを特殊召喚!」

闇竜星―ジヨクト DEF 2000

「そんなカードばかりだったのか…ちつ。カードを3枚伏せて、ターンエンド」

「おいおい融合しないのか?」

「できないときはしない(それにセットカードはミラーフォース、リビングデッドの呼び声、リミッター解除、守りとしてはいいだろう)」

オベリスクフォースC 手札2 LP 4000

モンスター アンティーク・ギア・ハウンド・ドッグ 古代の機械猟犬×1 (攻)

魔法・罫 セットカード×3

「ねえちよつと、大丈夫なの?!ライフもう風前の灯じゃない!」

「なんとかする。私のターン、ドロウ!ジヨクトの効果発動!フィールドに他のモンスターがないとき、手札の竜星を2枚墓地へ送ることで、デッキから攻撃力0と守備力0の竜星を1体ずつ、合計2体特殊召喚する!ということで、手札の風竜星―ホロウと宝竜星―セフィ

ラフウシを墓地へ送って、デッキから攻守0の光竜星―リフン、攻撃力0の秘竜星―セフィラシウゴを特殊召喚！」

光竜星―リフン ATK 0

秘竜星―セフィラシウゴ ATK 0

ジヨクトの効果により、いつものように2体の竜星が現れる。そう、いつものように

「レベル6のセフィラシウゴに、レベル1のリフンをチューニング！ 禍々しい雷を纏い、暗闇より現れる！シンクロ召喚！レベル7、黒き竜の星、邪竜星―ガイザー！」

邪竜星―ガイザー ATK 2700

「相手フィールドにモンスターが特殊召喚されたことで、ダブルバイト・ハウンド・ドッグの効果発動！そのモンスターに、ギア・アシッドカウンターを1つ乗せる！」

アンティーク・ギア・ダブルバイト・ハウンド・ドッグ

古代の機械 双頭 猟犬 機械族・効果／融合 地属性 星5 A

TK 1400 DEF 1000

「古代の機械猟犬」＋「アンティーク・ギア」モンスター×1

①このカードが攻撃する場合のダメージステップ終了時まで、相手は魔法・罠カードを発動できない。

②1ターンに1度、相手フィールドにモンスターが召喚、特殊召喚された場合に発動できる。そのモンスターにギア・アシッドカウンターを1つ置く（最大1つまで）。

③ギア・アシッドカウンターが置かれているモンスターが戦闘を行うダメージステップ開始時に発動できる。そのモンスターを破壊する。

邪竜星―ガイザー ギア・アシッド・カウンター（以後、GAC）

0↓1

「へー。ガイザーの効果発動！自分フィールドの竜星と、相手フィールドのカード1枚を破壊する！ガイザーと…そっちの人のセットカードを破壊！」

「なっ！」

破壊されたセットカード

リビングデッドの呼び声

「そしてガイザーと竜星の具象化と補給部隊の効果！ガイザーは破壊されたら、デツキから幻竜族モンスター1体を特殊召喚できる！ガイザーの効果で、タツノオトシオヤを、具象化の効果で炎竜星―シユンゲイを特殊召喚！それと補給部隊の効果でドロー！」

タツノオトシオヤ ATK 2100

炎竜星―シユンゲイ ATK 1900

フィールドに現れたのは、タツノオトシオヤと、シユンゲイ。…よく見る光景だ。

「タツノオトシオヤの効果発動！このカードのレベルを1つ下げることと、タツノコトークンを1体特殊召喚する！」

タツノオトシオヤ 星7↓6

タツノコトークン DEF 200

「さらにトラップ発動！リミット・リバーズ！墓地からホロウを特殊召喚！」

風竜星―ホロウ ATK 0

遊華がさらに呼び出したのは、墓地から特殊召喚されることがそれなりにある、ホロウだ。

「レベル4のシユンゲイと、レベル1のタツノコトークンとホロウに、レベル2の闇竜星―ジヨクトをチューニング！煌めく光を纏い、天空より舞い降りよ！シンクロ召喚！レベル8、黄金の竜の星、輝竜星―シヨウフク！そしてシンクロ素材になったシユンゲイの効果で、シヨウフクの攻撃力と守備力は500ポイントアップし、シヨウフクの効果！シンクロ素材につかった幻竜族モンスターの元々の属性の種類だけ、フィールドのカードをデツキに戻す！素材になったのは炎属性のシユンゲイ、水属性のタツノコトークン、風属性のホロウ、闇属性のジヨクト、合計4種類！ということで、そっちの人のセットカード全部と、デビルをバウンス！」

「なっ!?!させるか！速攻魔法、リミッター解除！機械族の

アンティーク・ギア・ハウンド・ドッグ  
古代の機械猟犬の攻撃力を2倍にする！」

輝竜星―シヨウフク ATK 2300↓2800

アンティーク・ギア・ハウンド・ドッグ  
古代の機械猟犬 ATK 1000↓2000

遊華のデツキの主軸の1体、シヨウフクも現れる。…なお、通常召喚はこれから。

「それじゃあドンドンいくよー！手札からジャンク・シンクロンを召喚！効果で墓地から、ホロウを守備表示で特殊召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK 1300

風竜星―ホロウ DEF 1800

アンティーク・ギアキャッスル  
古代の機械城 C 2↓3

「シヨウフクの効果発動！ホロウを破壊して、墓地からシンクゲイを特殊召喚！そしてホロウとリフンの効果！ホロウは破壊されたらデツキから同名以外の竜星モンスター1体を攻撃表示で特殊召喚して、リフンは自分フィールドのモンスターが効果破壊されたら、墓地からこのカードを特殊召喚する！ということまでホロウの効果でビシキを、リフンの効果でリフン自身を特殊召喚！」

水竜星―ビシキ ATK 0

光竜星―リフン ATK 0

「レベル4のシンクゲイとレベル2のビシキに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！古より恐れ崇められる、封じられし最強の龍よ…その封印は今解き放たれ、その猛威は世界の全てを飲み込む！シンクロ召喚！」

…3つの歯車と6つの星が合わさり、光と共に膨大な冷気が放たれる。…そう、トリシューラである。

「へ、ヘックション！れ、レベル9、絶対零度の龍、ヘックション！氷結界の、龍 トリシューヘックション！トリシューラ！そして、トリシューラの効果ヘックション！このカードがシンクロ召喚に成功したら、相手のフィールド、手札ヘックション！墓地のカードを1枚ずつ、除外する！」

「なんだとヘックション！」

「うう、寒〜」

「うう…そそ、それじゃあ、フィールドのハウンドドッグと、ダブルバイトの人の墓地のハウンドドッグ、それとデビル出した人の手札をバウンズ！」

氷結界の龍 トリシューラ ATK 2700↓3200

除外された手札

古代の機械兵士

吹き荒れる猛吹雪と冷気により、近くの気温は一気に下がる。…これがあってもなお、使うのである。

「うう…タツノオトシオヤの効果！トークン1体を、特殊召喚ヘクシュ！」

タツノオトシオヤ 星6↓5

タツノコトクン DEF 200

「れ、レベル1のタツノコトクンに、レベル5のタツノオトシオヤを、ヘクシュ！チューニング！へ、ヘクシュシンクロ召喚！れ、レベル6、スターダスト・チャージ・ウオリアーヘクシュ！」

スターダスト・チャージ・ウオリアー ATK 2000

タツノオトシオヤが5つの歯車になり、その中にタツノコトクンが入り、1つの光が変わる。歯車から光が放たれ、中から…いわゆる、スターダストに似た顔を持つ、戦士。腰からは何かの細長い機械があり、さらに別の機械が左右3つ、合計6つついている。

「す、スターダスト・チャージ・ウオリアーがシンクロ召喚に成功ヘクシュ！したとき、デッキからカードを1枚ドロウするヘクシュ！」

そしてドロウしたカードを見た遊華は…少しうれしそうな表情をする。

「よ、よーし…魔法カード、マジック・プランターを発動ヘクシュ！具象化を墓地へ送って2枚ドロウ…私は、スケール1の咆竜星―テンコウト、スケール7の眩竜星―シフラを、ペンデュヘクシュ！ペンデュラムゾーンヘクシュ！に、セッティング！」

「は?!ヘクシュ！」

遊華がペンデュラムゾーンにカードをセットすると、黄緑の細長い東洋風に近い竜のようなモンスターと、体は細長い四肢がしっかり

としている、無駄に光っている竜のようなモンスターが、光の柱の中から上ってくる。

「な、なんヘクシユ！なんだこれは…」

「こ、これで、レベル2から6、そ、それとテンコウのペンデュラム効果で、もう片方のペンデュラムヘクシユ！ペンデュラムゾーンに竜星カードがあれば、レベル1の竜星もヘクシユ！ペンデュラム召喚できるヘクシユ！」

「い、意味が分からない」

「天に現れし光よ、柱と柱を繋げ、新たな世界の扉を開け放て！ペンデュラム召喚！エクストラデッキからレベル6、秘竜星―セフィラシウゴ―」

「エクストラデッキからだどヘクシユ！」

秘竜星―セフィラシウゴ DEF 2600

「せ、セフィラシウゴの効果！このカードがペンデュラム召喚されたヘクシユ！モンスターゾーンで破壊されたら、デッキから竜星と名のつくマジック、トラップを1枚ヘクシユ！手札に加える！デッキから、竜星の極みを手札に加えヘクシユン！うう、加える…そ、そして、シフラのペンデュラム効果！1ターンに2回までヘクシユ！自分フィールドの、竜星モンスターのレベルを1つ上げる！この効果を2回とも、リフンのヘクシユ！に対してヘクシユ！使ってズピー…うう…レベルを、2つあげる！」

眩竜星―シフラ 幻竜族・効果／チューナー／ペンデュラム 星1

光属性 ATK 0 DEF 0

【Pスケール：赤7／青7】

「眩竜星―シフラ」のP効果は、1ターンに2回まで使用できる。

①自分フィールドの「竜星」モンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターのレベルを1つ上げる。

【モンスター効果】

「眩竜星―シフラ」のモンスター効果は、1ターンに1度しか使用できない。



①このカードが特殊召喚に成功した場合、自分の墓地の「竜星」モンスター2体を対象に発動できる。そのモンスターをデッキに戻し、デッキからカードを1枚ドロウする。

シフラが無駄に光を強くし、その光にリフンが驚き地面に激突、目を回し、そのときに出た星2つが、リフンの中へと入った…：どういう処理だ。

光竜星―リフン 星1↓3

「れ、レベル6のセフィラシウゴに、レベル3のリフンをチューニング！数多の星々輝く天より、鮮やかな光を受け取り、具現化せよ！シンクロ召喚!!」

リフンが目を回しながら3つの歯車になると、その中にセフィラシウゴが入り、6つの光が変わる。そして光が放たれ…：チヨウホウが現れる。

「れ、レベルヘクシヨン！レベル9、無数の色に輝く竜の星、幻竜星―チヨウホウヘクシユ！」

幻竜星―チヨウホウ ATK 2800

「…すごい…展開」

「ううう…ば、バトル！スターダスト・チャージ・ウオリアーで、一古代の機械双頭獵犬《アンテイク・ギア・ダブルバイト・ハウンド・ドッグ》を攻撃！乱れ撃てー!!」

スターダスト・チャージの細長い機械についている棒状の機械6つが宙に浮き、それがダブルバイト・ハウンド・ドッグに向かって飛んでいき、そしてビームを放ち攻撃、あっさり破壊する。

「ぐっ…」

オベリスクフオースA LP 4000↓3400

「続けてシヨウフクとトリシユウラで、さつきライフを減らしたほうへダイレクトアタック！天竜輝翔嵐！アブソリユート・コールド！」

「…ぐああああ!!」

オベリスクフオースA LP 3400↓0

黄金の風と凄まじい冷気により、オベリスクフオースAのライフは

一気に削られる。…そして、次は

「そしてヘクシユ！チョウホウで、アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ 古代の機械猟犬を攻撃！彩竜  
天光流波！」

「ぐっ、だがこのぐらい…」

オベリスクフオースC LP 4000↓3300

「ううう…そ、それじゃあ相手フィールドのモンスターが破壊されヘクシユ！破壊されたから、チョウホウの効果！デッキから、破壊されたヘクシユ！モンスターと、同じ属性のモンスターを、特殊召喚するヘクシユ！地属性の、宝竜星―セフィラフウシを特殊召喚！セフィラフウシはペンデュラム召喚かデッキから特殊召喚されたら、自分フィールドの竜星かセフィラー1体をチューナーにするヘクシユ！フウシを、チューナーに！」

宝竜星―セフィラフウシ DEF 0

…現在、まともに出番のないフウシにようやっと訪れた出番。そしてチューナーとなった、ということとは…。

「私は、レベル6のヘクシユ！スターダスト・チャージ・ウオリアーヘクシユ！に、ううう…レベル3のフウシをチューニング！以下省略！シンクロ召喚！レベル9、無数の色に輝く竜の星、幻竜星―チョウホウ！」

幻竜星―チョウホウ ATK 2800

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

遊華 手札1 LP 200

モンスター 輝竜星―シヨウフク×1(攻)、氷結界の龍トリシユラ×1(攻)、幻竜星―チョウホウ×2(攻)

魔法・罫 「補給部隊」×1、永続罫 「リミット・リバーズ」×1、セットカード×2

「さっきの展開はすごいがヘクシユ！…トドメをさせなかつたことを後悔して敗北するがいい！オレのターン、ドロー！オレは手札から、アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ 古代の機械猟犬を召喚し、効果…!?え、エラー…」

アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ 古代の機械猟犬 ATK 1000↓1300

アンテイク・ギア・キヤッスル 古代の機械城 C 3↓4

「ズピー…チョウホウには、素材にした竜星モンスターの属性と元々の属性が同じ相手モンスターの効果発動を封じる効果がある。1体は地属性のシウゴ、光属性のリフン、もう1体には地属性のフウシを使ったから、地属性、おまけで光属性の効果は発動できないよ」

「くっ…た、ターン」その前にトラップ発動！竜星の極み！相手の攻撃可能なモンスターは、攻撃しなくてはならないヘクシュ！」な、なんだと?!」

…竜星の補助カードの中でも、攻撃と防御両面で使え尚且つ、竜星の特性を引き出すカード、それがこのカード。…攻撃を強制するカード、竜星なら、展開する前ならさらなる展開、展開して大型のモンスターがいるなら…お分かりだろう。

「へ、ヘクシュ…：ということで、さあ攻撃してね」

「く、くっそ！シヨウフクを攻撃…うわあああ!!」

オベリスクフオースB LP 4000↓2700

「くっそ、エンドだ」

オベリスクフオースB 手札1 LP 2600

モンスター なし

魔法・罨 アンティーク・ギアキャッスル 古代の機械城×1C×4

「私のターン、ドロロー…：（禁じられた聖杯…これで1体分無効にできても、もう1体が無効にできない…くっそ！）…モンスターを1体セット、ターンエンド」

オベリスクフオースC 手札2 LP 3300

モンスター セットモンスター×1

魔法・罨 なし

「私のターンヘクシュ…ドロロー…：え、永続魔法、竜星の気脈を、発動！このカードは、墓地の竜星の種類に応じて得る効果があつて、2種類以上なら竜星モンスターの攻撃力を、500ポイントアップさせるヘクシュ！」

輝竜星—シヨウフク ATK 2800↓3300

幻竜星—チヨウホウ×2 ATK 2800↓3300

「ば、バトル！シヨウフクで、ダイレクトアタック！天竜輝翔嵐!!」

「く、くっそおおお!!」

オベリスクフオースB LP 2700↓0

「そしてチョウホウでセットモンスターを、攻撃!ヘクシユ!彩竜天光流波!!」

「くっ…」

そして破壊される、古びた機械の兵士。…そしてその属性は、地。

「ヘクシヨン!うう…チョウホウの効果!デツキからハイカンを特殊召喚!」

地竜星—ハイカン DEF 0

「もう1体の、チョウホウでダイレクトアタック!!彩竜天光流波!!」

「く、ぐああああ!!」

オベリスクフオースC LP 3300↓0

これで3人とも倒した。デュエルが終了したことで、遊華のモンスターが消え、冷気も収まる。…そして、オベリスクフオースは…光に包まれたかと思うと、消えた。

「?!き、消えた…」

「き、消えた…ど、どこに…」

「さ、さあ…と、とにかく、今はここから離れよう、ゆっちゃん!」

「ストップ、私ってあなたからあだ名で呼ばれるぐらいの仲だけ」

「いや、あだ名のほうがさらに仲良くなれるかなーって。あ、私のことは好きに呼んでいいからね」

「はあ…」

## 第29話 怒りの共鳴

…遊華がオベリスクフオーズと遭遇し、倒して柚子と一緒にその場を離れた頃…ザ・シックス・ワールドの範囲内に、オベリスクフオーズが数小隊現れ、参加者にデュエルを挑む、どこかへと移動するといったことをしていた。そしてその頃、遊矢は…。

「…よし、ペンデュラムカード。これで5枚か…もつと集めないと」  
遺跡エリアだ。まだオベリスクフオーズには遭遇しておらず、ペンデュラムスタチューを探していた。…が。

「う、うわあああああ!!」

「!? な、なんだ!？」

突如として悲鳴が聞こえ、聞こえたほうへ向かうと…。

「や、やめ、やめろ! やめろ! や」

「! ひ、ひいいいい!!」

「?!」

…オベリスクフオーズが、ディスクを向け、光を当て…人が消えた。そしてオベリスクフオーズは、ディスクから出てきた何かを手に取ると、地面に放る。…それは、カードだった。

「!? (い、今は…)」

「ああ、あああ…う、うわあああ!!」

「おいおい逃げられると思ってるのか?」

「さっさとカードになれよおら!」

「うぐー!」

「ははは、さっきの威勢の良さはどうしたんだよ。ほら、大人しくカードになつてろ!」

「うわ、うわ、うわああああ!!」

「!!」

…再び先ほどと同じようなことをし…ディスクから出てきたカードを、オベリスクフオーズは手に取る。…そのカードの絵を見た遊矢は、驚いた。…ついさっき光を当てられた人物の、恐怖に歪む表情が写ったカードだった。

「ひ、人を…!?ぐっ…な、なんだ…」

…それを見たとき、遊矢の頭の中に、何かがの光景が広がる。…燃え上がる町、瓦礫となる建物、逃げ惑う人々…そして、そんな人たちが、光とともにカードになっていく姿。

「な、なんだこれ、うぐ、ぐ、ぐああ…」

遊矢がつけているペンデュラムが怪しく光り、遊矢の中には、凄まじい感情が湧き上がってくる。…それは、怒り、憎しみ。奴等を、アカデミアを、融合次元を、敵を滅ぼせ、という破壊衝動。

「ぐ、ぐあああ…ああ…」

そして同じころ、遺跡エリアの遊矢からそう遠くない位置にいるユートにも…同じような現象が、起きていた。

「な、なんだ、ぐっ、きゅ、急に…」

「お、おい大丈夫か…?」

「いったい、何が…」

そして…2人の頭の中に、声が響く。憎め、壊せ、憎め、壊せ、壊せ、壊せ…という、不気味で低い声が響く。…そして…。

「ぐ、ぐあああああああああ!!!」

「ん?」

遊矢が叫び声をあげ…それに、オベリススクフォースが気づき、遊矢を見つめる……が、そこにいるのは…。

「……さない…」

「え?」

「お、おいなんだあれ…」

「ん?……なっ?!」

「許さない…アカデミアを…融合次元を…お前達を…」

……髪が逆立ち、明らかに異様で禍々しい黒いオーラを放ち、恐ろしい形相になっている…遊矢だった。

「な、なんだよおいおい…聞いてねえぞ!」

「ならとつとやっちまおうぜ!3人なら勝てるさ!」

「ああそうだ！とつととやつちまおう！」

というと、オベリスクフオース3人は、ディスクを展開する。…それを見た遊矢もディスクを構え、そして…。

「『デュエル！』」

オベリスクフオースA LP 4000

オベリスクフオースB LP 4000

オベリスクフオースC LP 4000

遊矢 LP 4000

「オレのターン！フィールド魔法、ブラック・ガーデンを発動！」

オベリスクフオースがフィールド魔法を発動すると、周囲が鋭い棘のついた茨で覆われる。

「そして手札から、アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ 古代の機械猟犬を召喚！そしてモンスターが

召喚されたことで、ブラック・ガーデンの効果発動！ブラック・ガーデンの効果以外でモンスターが召喚、特殊召喚された場合、そのモンスターの攻撃力を半分にし、相手フィールドにローズ・トークン1体を特殊召喚する！」

アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ 古代の機械猟犬 ATK 1000↓500

ローズ・トークン ATK 800

ハウンド・ドッグに茨が絡みつき、遊矢のフィールドに薔薇が一輪咲いた。…そして、ハウンド・ドッグの効果は…。

「アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ さらに古代の機械猟犬の効果発動！相手フィールドにモンスターがいることで、相手ライフに600ポイントのダメージを与える！くらえ！」

「…」

遊矢 LP 4000↓3400

ハウンド・ドッグが火の玉を吐き、それが遊矢に直撃し、吹っ飛ばす。

…だが、吹っ飛んだのに、遊矢は表情を一切変えず、普通に立ち上がり、平然としている。

「オレは手札からマジックカード、融合を発動！その効果で、フィールドのハウンド・ドッグと、手札のアンテイク・ギア・ナイト 古代の機械騎士を融合！古の魂受け継がれし、機械仕掛けの猟犬と騎士よ！対をなし混じり合い、新たな

る力と共に生まれ変わらん！融合召喚！現れる！古代の機械  
アンテイク・ギア、  
ダブルバイト：ハウンド・ドッグ

双頭 獵犬!!そしてブラック・ガーデンの効果!」

古代の機械 双頭 獵犬 ATK 1400↓700  
アンテイク・ギア・ダブルバイト：ハウンド・ドッグ

ローズ・トークン ATK 800

「オレはこれで、ターンエンド」

オベリスクフオースA 手札2 LP 4000  
アンテイク・ギア・ダブルバイト：ハウンド・ドッグ

モンスター 古代の機械 双頭 獵犬×1(攻)

魔法・罫 なし

フィールド魔法 「ブラック・ガーデン」

「オレのターン、ドロロー！オレも手札から、古代の機械獵犬を召喚  
アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ

！ブラック・ガーデンの効果でローズ・トークンを特殊召喚!」

古代の機械獵犬 ATK 1000↓500  
アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ

ローズ・トークン ATK 800

「そして古代の機械獵犬の効果発動！相手ライフに600ポイント

のダメージだ!」

「…」

遊矢 LP 3400↓2800

「これで終わりだと思うなよ？手札からマジックカード、機械複製術  
を発動！こいつは自分フィールドの攻撃力500以下の機械族モン  
スター1体と同じ名前のモンスターを、デッキから2体まで特殊召喚  
できるカード。普通なら攻撃力1000の古代の機械双頭獵犬には  
アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ

使えないが、ブラック・ガーデンの効果で攻撃力が半減している今な  
ら使える！さあこい！2体の古代の機械双頭獵犬!!そしてブラック・  
アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ

ガーデンの効果だ!」

古代の機械獵犬×2 ATK 1000↓500  
アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ

ローズ・トークン ATK 800

すでにいる1体に続いて、さらに2体の古代の機械獵犬が現れ、  
アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ  
ローズ・トークンも同時に増える。：同じ効果を持つモンスターが、  
増えたということは…。

「そして古代の機械獵犬2体の効果！合計1200のダメージだ  
アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ  
!!」



「…」

遊矢 LP 2800↓2200↓1600

…先ほどに続いて合計1200のダメージを受けた遊矢…だが、前  
のときと同じように、表情を一切変えず、平然と立ち上がる。…その  
姿は明らかに異様で、不気味だ。

「…お、おいおい…だ、だが容赦はしない！アンティーク・ギア・ハウンド・ドッグ古代の機械猟犬の効果  
発動！自分フィールドに他のアンティーク・ギアと名のつくカードが  
あれば、フィールドと手札のカードを素材に、アンティーク・ギア融  
合モンスターを、融合召喚できる！オレはフィールドの3体の  
アンティーク・ギア・ハウンド・ドッグ古代の機械猟犬を融合！古の魂受け継がれし、機械仕掛けの猟犬  
どもよ！対をなし混じり合い、新たな力と共に生まれ変わらん！融  
合召喚！現れる！アンティーク・ギア・トリプルバイト・ハウンド・ドッグ古代の機械参頭 猟犬！そして、ブラック・  
ガーデンの効果！」

融合の渦の中に、3体のハウンド・ドッグが入り、現れたのは…2  
つの頭には、3つの頭のハウンド・ドッグ。その姿は、3つの  
頭を持つと言われる伝説の番犬、ケルベロスを彷彿とさせる。多分。

アンティーク・ギア・トリプルバイト・ハウンド・ドッグ古代の機械参頭 猟犬 ATK 1800↓900

ローズ・トークン ATK 800

「さらに永続魔法、マシン・デペロツパーを発動！こいつは自分フィー  
ルドの機械族モンスターの攻撃力を200ポイントアップさせる！  
そして一古代の機械参頭猟犬《アンティーク・ギア・トリプルバイト・  
ハウンド・ドッグ》は、1度のバトルフェイズに3回モンスターに攻  
撃できる！」

アンティーク・ギア・トリプルバイト・ハウンド・ドッグ古代の機械参頭 猟犬 ATK 900↓1100

アンティーク・ギア・トリプルバイト・ハウンド・ドッグ古代の機械参頭 猟犬 機械族・効果／融合 地属性 星7

ATK 1800 DEF 1000

「古代の機械猟犬」+「アンティーク・ギア」モンスター×2

①このカードが攻撃する場合のダメージステップ終了時まで、相手  
は魔法・罠カードを発動できない。

②このカードは1度のバトルフェイズに3回まで、モンスターに攻

撃することができる。

③1ターンに1度、このカードが墓地にある場合、発動できる。このカードを含む「アンティーク・ギア」融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地から除外して、その融合モンスター1体を融合召喚する。

「バトルだ！アンティーク・ギア・トリプルバイト・ハウンド・ドッグ古代の機械 参 頭 猫 犬で、ローズ・トークン3体に攻撃！」

「…」

遊矢 LP 1600↓1300↓1000↓700

…相当な衝撃波が来て、吹っ飛んだ遊矢。だが、それでも遊矢は…平然としている。後さり気なく、吹っ飛ばされた先にあったアクシオンカードを取った。

「！……お、オレはこれで、ターンエンド…」

オベリスクフオースB 手札3 LP 4000

モンスター アンティーク・ギア・トリプルバイト・ハウンド・ドッグ古代の機械 参 頭 猫 犬×1(攻)

魔法・罫 永続魔法「マシン・デペロツパー」×1

「！お、オレのターン、ドロー！……(くっそー！融合なしかよ！)オレは手札から、アンティーク・ギア・ハウンド・ドッグ古代の機械猫犬を召喚！そしてブラック・ガーデンの効果！」

アンティーク・ギア・ハウンド・ドッグ古代の機械猫犬 ATK 1000↓500

ローズ・トークン ATK 800

「そして古代の機械猫犬の効果だ！とつとくたばれ!!」  
「…」

遊矢 LP 700↓100

…そしてとうとう、遊矢のライフが…たったの、100に。…そこまでのダメージを受けたはずの遊矢は、平然としている。

「?!…か、カードを1枚伏せて、オレはこれで、ターンエンド…」

「おいおい融合してくれよ頼むから！」

「うるせえ！」

オベリスクフオースC 手札4 LP 4000

モンスター 古代の機械猟犬×1 (攻)

アンティーク・ギア・ハウンド・ドッグ

魔法・罠 セットカード×1

…そして、ここからが、逆襲の始まりだ。

「…オレの、ターン!!…オレは、スケール3の相克の魔術師と、スケール8の竜穴の魔術師を、ペンデュラムゾーンにセッティング!」

フィールドに光の柱が現れ、その中に…なんだか昔の中国の武将が  
していそうな格好をした魔術師と、それなりに年老いた男性の魔術師  
が昇ってくる。

「これでレベル4から7のモンスターが同時に召喚可能。揺れる、魂  
のペンデュラム! 天空に描け光のアーケ! ペンデュラム召喚! 出で  
よ、我が下部のモンスター達よ! 手札から、レベル4のEMペンデュ  
ラム・マジシャン!」

「だ、だがブラック・ガーデンの効果だ!」

「…EMペンデュラム・マジシャンが特殊召喚に成功したことにより、  
効果発動。自分フィールドのカードを2枚まで破壊し、破壊した数だ  
けデッキから、EMを手札に加える。オレは、フィールドのローズ・  
トークンと、ペンデュラム・マジシャンを破壊し、デッキからEMド  
クロバット・ジョーカー、EMヘルプリンセスを手札に加える」

ブラック・ガーデンのトークン精製は、モンスターが破壊されても  
行われる。これにより、オベリスクフォースのフィールドにトークン  
が現れる。

ローズ・トークン ATK 800

「…手札からEMドクロバット・ジョーカーを召喚、ドクロバット・  
ジョーカーの効果が発動するとともに、手札のEMヘルプリンセスの  
効果。ドクロバット・ジョーカーは召喚に成功したとき、デッキから  
ドクロバットジョーカー以外のEM、魔術師ペンデュラムモンス  
ター、オッドアイズモンスター1体を手札に加え、ヘルプリンセスは  
オレがEMを召喚・特殊召喚したら、手札からこのカードを特殊召喚  
できる。ドクロバット・ジョーカーの効果で、デッキからオッドアイ  
ズ・ペンデュラム・ドラゴンを手札に加え、ヘルプリンセスを特殊召

喚

「だ、だが、ブラック・ガーデンの効果だ！」

EMドクロバット・ジョーカー ATK 1800↓900

EMヘルプリンセス ATK 1200↓600

ローズ・トークン×2 ATK 800

「：オレはレベル4のEMドクロバット・ジョーカーとEMヘルプリンセスで、オーバーレイ！エクシーズ召喚！ランク4、竜魔人クイーン・ドラグーン！」

「！お、オレは一古代の機械双頭猟犬〈アンテイク・ギア・ダブルバイト・ハウンド・ドッグ〉の効果も発動！相手フィールドにモンスターが特殊召喚されたら、そのモンスターにギア・アシッド・カウンターを1つ乗せる！」

フィールドに空いた穴の中に、ドクロバットジョーカーとヘルプリンセスが紫色の光になり飛び込む。そしてフィールドに現れたのは：下半身が炎でできた獣の胴体に翼が生えたようなものになっている、金髪の女性。露出度もそれなりにある。：そして、瞬時に茨が絡みつく。：：何も言う必要は、あるまい。

竜魔人クイーン・ドラグーン ATK 2200↓1100 GA

C O↓1

ローズ・トークン ATK 800

「竜穴の魔術師の、ペンデュラム効果。手札のペンデュラムモンスター1体を墓地へ送り、相手フィールドのマジック、トラップを1枚破壊する。この効果で、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを墓地へ送り、ブラック・ガーデンを破壊する」

「！しまった！」

竜穴の魔術師が青い光をフィールドに蔓延る茨へ放つと、茨が青い光に包まれ消えていき：消滅する。これで、ブラック・ガーデンの効果は消え、モンスターも解放される。：が、攻撃力は元に戻らない。だがそれでも：今の遊矢には、充分だ。

「竜魔人クイーン・ドラグーンの、モンスター効果！1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ使い、墓地からレベル5以上のドラゴ

ン族モンスター1体を、効果を無効にして特殊召喚する！現れる！  
オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン！」

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK 2500

先ほど墓地へ送られたオッドアイズが復活する。…だが効果は無効になっているため、その力は発揮できない。

「そして手札から速攻魔法、ダブルサイクロンを発動。オレのフィールドの竜穴の魔術師と、お前のフィールドのセットカードを破壊する」

「！神風のバリアーエア・フォースが…」

「さらにオレは、スケール8の相生の魔術師を、ペンデュラムゾーンにセツティング」

1度消えた光の柱が再び現れ、今度は眼帯をつけ、フードを被り、弓を持つ女性が昇ってくる。

「対立を見定める相克の魔術師よ！その鋭利なる力で異なる星を1つにせよ！相克の魔術師の、ペンデュラム効果！1ターンに1度、自分フィールドのエクシーズモンスター1体を選択し、そのモンスターはこのターン、そのランクと同じ数値のレベルを持つモンスターとして、エクシーズ素材にできる！和合を見定める相生の魔術師よ！その神秘の力で、天空高く星を掲げよ！相生の魔術師の、ペンデュラム効果！1ターンに1度、自分フィールドのエクシーズモンスターと、レベル5以上のモンスターを選択し、エクシーズモンスターのランクを、選択したレベル5以上のモンスターと、同じにする！この2つの効果で、竜魔人クイーン・ドラグーンを、ランク7とし、同じ数値のエクシーズモンスターの、エクシーズ素材にできる！」

「な、なんだと!？」

竜魔人クイーン・ドラグーン ランク4↓7

相克の魔術師の効果により、光がクイーン・ドラグーンへと宿り、相生の魔術師の効果により矢が放たれ、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンと、クイーン・ドラグーンを光で包む。…これにより、ランク7となったクイーン・ドラゴンが、ランク7のエクシーズモンスターのエクシーズ召喚に、使えるようになった。

「オレは、レベル7扱いの竜魔人クイーン・ドラグーンと、レベル7のオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンで、オーバーレイ！2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

フィールドに空いた穴の中に、クイーン・ドラグーンとオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンが、紫色の光になり、飛び込む。：そして、黒い光が、穴から溢れる。

「二色の眼の竜よ！その黒き逆鱗を震わせ、刃向う敵を殲滅せよ！エクシーズ召喚！蹂躞しろ、ランク7、怒りの眼輝けし霸王黒竜オッドアイズ・リベリオン・ドラゴン!!」

：フィールドに現れたのは……胸に顔のようなものこそあるが、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン、そして：ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン、その2体が合わさったような：黒い、ドラゴン。

霸王黒竜オッドアイズ・リベリオン・ドラゴン ATK 3000

「オッドアイズ・リベリオン・ドラゴンの、モンスター効果！このカードがドラゴン族エクシーズモンスターをエクシーズ素材としてエクシーズ召喚したとき、敵のフィールドに存在するレベル7以下のモンスター全てを破壊し、その数×1000ポイントのダメージを、敵に与える！」

「：な、なんだと！」

「刃向う雑兵共を薙ぎ払え!!オーバーロード・ハウリング!!」

「：ぐ、ぐああああああ!!!」

オベリスクフオースA LP 4000↓0

オベリスクフオースB LP 4000↓3000

オベリスクフオースC LP 4000↓3000

「そしてこの効果を発動したターン、オッドアイズ・リベリオン・ドラゴンは、3回攻撃できる！よって残った貴様ら全員に、ダイレクトアタックを仕掛ける！」

「な、ああ、あああ……」

「う、うそだ……」

「バトルだ！オッドアイズ・リベリオン・ドラゴンで、ダイレクトア

タツク！反旗の逆鱗ストライク・デイスオベイ!!」

オツドアイズ・リベリオンの翼に紫色の雷が流れだし、それにより翼が展開、そして宙に浮き始め…その顎と一体化した牙を地面へと突き立て、猛スピードでオベリスクフォースへと迫り…その牙を、オベリスクフォース目掛け突き上げる。

「う、うわああああ!!」

オベリスクフォースB LP 3000↓0

オベリスクフォースC LP 3000↓0

…デュエルが終了し、オツドアイズ・リベリオンが消える。そして、オベリスクフォースも、消える。

「……………今、何が…」

デュエルが終了したからかは分からないが、遊矢から出ていたオーラが消え、髪が元に戻り、遊矢の表情もかなり和らぐ。

「…確か、人がカードになって、それで…デュエルをして……………このカードは、いった…?!…これは…ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン?!」

先ほど出したカード、霸王黒竜オツドアイズ・リベリオン・ドラゴンを確認し、念のためエクストラデッキを確認したところ…もう一枚、デッキに入っていなかったカード…否、そもそも持っていないカード、ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンがあった。…そんなダーク・リベリオンを持っているユートはと言うと…デュエル開始時点で様子がおかしく、デュエルが終了した途端に倒れたため、へりで黒咲と共に運ばれた。

「いったい、どうして…」

「…どうやら共鳴が途切れたようだな」

…そんな様子を、遺跡エリアの高い位置で見ている、謎の人物。…ローブにフードなど、その素顔や体は隠され、誰なのかは分からない。…声は高めなため、女性の可能性はある。

「まあいい。因子は十分発現した、共鳴がなくとも勝手に覚醒するだろう。…さあ、次だ」

そういうと、謎の人物の近くに赤紫色の渦が現れる。

「精々その時まで、因子を高め合うがいい……」

…そして、一瞬見えたその目は……青と赤紫、2の色に、怪しく光った。



### 第30話 人を怒らせると碌なことにならない

…オベリスクフォースが現れ、柚子、セレナの搜索をしている。…  
そんな中…。

「…おい、おい！おいその貴様!!」

「……………？…なんですか？」

「貴様デュエリストだな？デュエリストならデュエルしてもらおう」

「…すみません、今いいところなのでまた後でもよろしいでしょうか」

…シャルロット・レイモンは、オベリスクフォースに話しかけられ  
ても、平然と絵を描き続ける。ここは火山エリア、自然現象の中でも  
これほど近くに見て絵を描くことが難しいマグマが流れる。…そんな  
状況ではシャルロットにとってデュエルよりも絵が優先だ。

「何？」

「おい貴様！」

「絵なんか描いてる暇があるなら、オレ達とデュエルしろこの！」

…そしてオベリスクフォースの1人が、シャルロットの持つスケツ  
チブックを叩き落とす。…スケッチブックは、マグマの中へと沈む  
(無事です)。…ちょうどそのとき…。

「ん？変な仮面…そうかお前らがオベリスクフォースか！」

「な?!変な仮面…これは精鋭の証！そこら辺のものとは格が違う！」

沢渡が、来た。ちなみに沢渡がオベリスクフォースのことを知って  
いる理由は、赤馬零児からアカデミアについての情報を聴いたこと  
と、遊華から送られてきた不審者と評されたオベリスクフォースの画  
像を見たからだ。そして沢渡の後ろに、勝鬨が来ている。

「お前達が、赤馬零児が言っていたアカデミアか。倒させてもらう」

「はあ？スタンダードのザコが何人かかろうとオレ達にはっ?!」

「ん？どうし…?!」

「…え、え？」

「ん？なんだなんだ？このオレにおじけ…」

「！なんだこの凄まじい気迫は…」

…そして、そこにいる全員が気が付いた。…そこにいる少女が、明  
シャルロット

らかに異様なオーラを放っているのを。そういうのに疎そうな沢渡ですら、分かる程度のだ。

シャルロット「……お前達、あのスケッチブックが何なのか、分かるか？」

「え？な、何言ってるんだあいつ」

「…沢渡シンゴ、彼女はいったい…」

「た、多分フランス語だろうな…習ったことはあるが、全然分かんねえ…」

…スケッチブックがないことを除けば、スケッチブックに絵を描いていた体勢のまま固まっていた…そして、異様なオーラを放ちながら、えんぴつを仕舞いつつ立ち上がる。…あ、髪の毛逆立った。

シャルロット「あれは私が、この大会の前に参加した大会で優勝したときにもらった新しいスケッチブック…それを、それをよくも、よくも、よくも…このクソ野郎ども…何が何でも、絶対に潰す！」

「な、なんか分からないけど、と、とにかくやるぞ！」

「あ、ああ。そっちも3人こっちも3人だ！」

「さ、さすがに3人なら勝てるだろ！」

「い、いいだろう3人だ、3人でやるぞ！」

「無論だ、行くぞ！」

「」「」「デュエル!!」「」「」

シャルロット LP 4000

オベリスクフォースA LP 4000

シンゴ LP 4000

オベリスクフォースB LP 4000

勇雄 LP 4000

シャルロット「私のターン！手札から幻獣機メガラプターを召喚」

幻獣機メガラプター ATK 1900

シャルロットがフィールドに呼び出したのは、軍用機。アメリカにあるステルス機をモチーフとしたモンスターだ。

シャルロット「魔法カード、ワンフォー・ワンを発動！手札の幻獣機オライオンを墓地へ送り、デッキからチューナーモンスター、グ

ローアップ・バルブを特殊召喚！」

「ま、まだフランス語っぽいな…」

「デュエルディスクにカード用の自動翻訳があつて助かった…」

グローアップ・バルブ DEF 100

幻獣機トークン DEF 0

さらにフィールドに現れたのは、華が咲いた種に目が開いているようなちよつと不気味なモンスターと…半透明の、衛星のようにも見えるモンスター。

シャルロット「そして墓地へ送つたオライオンの効果。オライオンは墓地へ送られたら、幻獣機トークン1体を特殊召喚できる」

「…ああ、オライオンの効果か…」

「なるほど…」

「な、何言つてるのか全然分からない…」

シャルロット「そしてメガラプターのモンスター効果！このカードは幻獣機トークンのレベル分レベルがあがり、さらにトークンが特殊召喚された場合、幻獣機トークンを1体特殊召喚する！」

幻獣機メガラプター 星7↓10

幻獣機トークン DEF 0

次に現れたトークンは、メガラプターと同じ姿をしている。…そしていつの間にか、フィールドにいたもう片方のトークンもメガラプターと同じ姿になっている。

シャルロット「メガラプターの効果発動！自分フィールドのトークンをリリースすることで、デッキから幻獣機と名のつくモンスターを1体、手札に加える！幻獣機トークン1体をリリースし、デッキから幻獣機エアロスバードを手札に加える。そして、トークンが減つたことで、メガラプターのレベルが下げる」

幻獣機メガラプター 星10↓7

シャルロット「レベル7のメガラプターに、レベル1のグローアップ・バルブをチューニング！シンクロ召喚！レベル8、ブラッド・メフィスト！」

「こいつシンクロ使うのかよ…」

「オライオンはチューナーだったぞ」

グローアップ・バルブが1つの歯車になり、その中にメガラプターが入り、7つの星が変わる。歯車から光が放たれ、現れたのはボロボロのマントに黒いシルクハット、先端にドクロのある杖を持つ悪魔であった。

ブラッド・メフィスト ATK 2800

シャルロット「カードを2枚セット、ターンエンド」

シャルロット 手札2 LP 4000

モンスター ブラッド・メフィスト×1(攻)、幻獣機トークン×1(守)

魔法・罠 セットカード×2

「お、オレのターン、ドロロー！オレは手札から永続魔法、

古代の機械城を発動し、アンティーク・ギア・ハウンド・ドッグ古代の機械猟犬を召喚！そして

古代の機械城は、モンスターが召喚されたらこのカードにカウンターを置き、さらに自分のアンティーク・ギアモンスターの攻撃力、守備力を、300ポイントアップさせる！」

古代の機械猟犬 ATK 1000↓1300

古代の機械城 C 0↓1

さつそく呼び出された猟犬。このカードの存在により、さらに展開することが可能になる。

「そしてアンティーク・ギア・ハウンド・ドッグのモンスター効果！相手フィールドにモンスターがいるとき、相手ライフに600ポイントのダメージを与える！くらえ！」

シャルロット「つ…」

シャルロット LP 4000↓3400

「古代の機械猟犬の効果発動！自分フィールドに他のアンティーク・ギアと名のつくカードがある場合、このカードを含む手札とフィールドのカードを素材に、アンティーク・ギア融合モンスターを融合召喚する！手札の古代の機械猟犬を融合！古の魂受け継がれし、機械仕掛けの猟犬どもよ！対をなし混じり合い、新たな力とともに生まれ変わらん！融合召喚！現れる、古代の機械

ダブルバイト：ハウンド・ドッグ  
双頭 猫 犬！

アンティーク・ギア：ダブルバイト：ハウンド・ドッグ  
古代の機械 双頭 猫 犬

ATK 1400↓1700

「さらにカードを2枚伏せて」

シャルロット「この瞬間、ブラッド・メフィストのモンスター効果発動！相手がマジック、トラップをセットしたとき、相手ライフに300のダメージを与える！2枚伏せる、つまり2回伏せるから600ダメージ！」

「え？な、何うお?!」

オベリスクフオースA LP 4000↓3700↓3400

オベリスクフオースがカードをセットした途端、ブラッド・メフィストの効果が発動し、ハウンド・ドッグと似たような火の玉により、ダメージを受けるオベリスクフオース。それも2回。

「こ、今度こそ、ターンエンド！」

オベリスクフオースA 手札1 LP 3400

モンスター アンティーク・ギア：ダブルバイト：ハウンド・ドッグ 双頭 猫 犬×1（攻）

魔法・罠 セットカード×2

「ブラッド・メフィスト：バトルロイヤルだからこっちにも影響が出るから気を付けねえとな…オレのターン、ドロ…！…へっ、幸先良いぜ。オレはスケール8の魔界劇団―ファンキー・コメディアンと、スケール3の魔界劇団―パッション・マッスルを、ペンデュラムゾーンにセッティング！」

「いきなりペンデュラムか…」

「その通り！」

光の柱が昇ってきて、片方に太った4本の腕を持つ、仮面のような小さな顔の悪魔と、対照的にゴリマッチョな体を強調するかのようポーズを取る仮面のような小さな顔の悪魔が昇ってきた。

「これでオレは、レベル4から7のモンスターが同時に召喚可能！ペンデュラム召喚！さあこい！レベル4、魔界劇団―サツシー・ルキー！そしてレベル7！颯爽かつ華麗に！主・役・登・場！魔界劇団―ビッグ・スター！」

振り子が揺れ、上空に穴が開き、そこから2つの光が降り立つ。1

つはアフロにツナギを着て、目玉が両膝、掌、それと通常の部分についている人型のモンスターと、異様に腰が細い、人形にも見えなくもないモンスターになる。

魔界劇団―サツシー・ルーキー DEF 1000

魔界劇団―ビッグ・スター ATK 2500

「ペ、ペンデュラム召喚…？だが、古代の機械アンティーク・ギア・ダブルバインド・ハウンド・ドッグ 双頭 猫 犬の効果！

ビッグ・スターにギア・アシッド・カウンターを1つ乗せる！」

魔界劇団―ビッグ・スター ギア・アシッド・カウンター 0↓1

「なんだ？…まあ、ペンデュラムについて教えてやりたいところだが、今回はパスだ！ビッグ・スターの、効果発動！1ターンに1度だけ、デッキの魔界台本を1枚セットする。オレはこの効果で、魔界台本「オープンング・セレモニー」をセット、そして面倒だが、ブラッド・メフィストの効果で300のダメージを受ける」

シンゴ LP 4000↓3700

「そして魔界台本「オープンング・セレモニー」を発動！こいつはオレのフィールドの魔界劇団と名のつくモンスターの数×500ポイントのライフを回復する！」

「お前のフィールドには、ビッグ・スターとサツシー・ルーキー…」

「つまり2体、1000ポイント回復だ」

シンゴ LP 3700↓4700

「(さーて…今はバトルロイヤル。ここで下手にカードを伏せれば、ブラッド・メフィストの効果で小さいがダメージが来る。後、ブラッド・メフィストにはさらに別のがな…ここは…) これでターンエンド」

シンゴ 手札1 LP 4700

モンスター 魔界劇団―サツシー・ルーキー×1(守)、魔界劇団―ビッグ・スター×1(攻) ギア・アシッド・カウンター×1

魔法・罫 なし

Pゾーン 魔界劇団―ファンキー・コメディアン：8、魔界劇団―パッション・マッスル：3

「くっそ！オレのターン、ドロロー…！へへへ。いい手札。オレは手札アンティーク・ギア・ソルジャーから魔法カード、融合を発動！その効果で、手札の古代の機械兵士2

体を融合！古の魂受け継がれし兵隊よ！隊列を組み混じり合い、新たな力と共に生まれ変わらん！融合召喚！現れろ！古代の機械魔神！」  
アンティーク・ギア・デビル  
古代の機械魔神 DEF 1800

「そして装備魔法、ミスト・ボディを古代の機械魔神に装備！これで古代の機械魔神は戦闘では破壊されない！そしてギア・デビルの効果！ギア・デビルに装備カードが装備されている場合、自分フィールドの表側の魔法カードの数だけ相手ライフに1000ポイントのダメージを与える！オレのフィールドには、ミスト・ボディの1枚。：そっちの女にダメージだ！」

シャルロット「っ…このクソが…」

シャルロット LP 3400↓2400

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

シャルロット「セットしたことで、ブラッド・メフィストの効果で300のダメージ！」

オベリスクフォースB LP 4000↓3700

「ちっ…今度こそターンエンド」

オベリスクフォースB 手札2 LP 3700

モンスター アンティーク・ギア・デビル 古代の機械魔神×1 (守)

魔法・罫 装備魔法「ミスト・ボディ」×1 装備対象：  
アンティーク・ギア・デビル  
古代の機械魔神、セットカード×1

「自分のターン、ドロー！手札から魔法カード、融合徴兵を発動！エクストラデッキの嵐将星 フウジンを公開し、デッキから融合素材に指定されている嵐将星 アラシを手札に加える！」

「ほう、お前も融合使いか」

「ならば我々とともに」

「断る！手札から魔法カード、融合を発動！手札のアラシと、旋将星 ツムジを融合！吹けよ風！荒れよ嵐！現れる逆巻く破壊神！融合召喚！嵐将星 フウジン！」

三国志にできそうな格好のモンスター2体が融合の渦に入り、勝鬨が独特なポーズをしながら融合召喚、現れたのは…雷神風神でお馴染みの風神、それに似た姿で、細見の武将が現れる。

嵐将星 フウジン ATK 3000

「ならフウジンの召喚時、アンティーク・ギア・ダブルバイト! ハウンド・ドッグ古代の機械 双頭 猟犬の効果発動! フウジンに、ギア・アシッド・カウンターを1つ乗せる!」

嵐将星 フウジン ギア・アシッド・カウンター 0↓1

「カードを1枚伏せ、ブラッド・メフィストの効果で自分は3000のダメージを受ける」

英雄 LP 4000↓3700

「自分はこれで、ターンエンド。そしてこのエンドフェイズ、フウジンの効果発動! エンドフェイズに、フィールドの戦士族の数だけ、相手に800のダメージを与える! フィールドの戦士族はフウジン1体、そうだな…最初にターンの回ったお前だ」

「!ぐつ…だがそのエンドフェイズ、トラップ発動! リバース・リユース! 自分の墓地のモンスター2体を、相手フィールドに表側守備表示か、裏側守備表示で特殊召喚する! 受け取れ、2体のハウンド・ドッグを!」

「へへへ、ありがとうな」

オベリスクフォースA LP 4000↓3200

アンティーク・ギア・ハウンド・ドッグ古代の機械 猟犬×2 DEF 600

嵐将星 フウジン 戦士族・効果/融合 風属性 星10 ATK

3000 DEF 2200

「風将星 アラシ」+風属性・戦士族モンスター1体

①ターンの終わりに発動できる。フィールドの戦士族モンスターの数×800ポイントのダメージを相手に与える。この効果は、相手ターンにも発動できる。

②このカードが破壊された場合、発動できる。フィールドの魔法、罠カードを1枚破壊する。

英雄 手札1 LP 3700

モンスター 嵐将星 フウジン×1 (攻) GAC×1

魔法・罠 セットカード×1

「オレのターン、ドロロー! へへへ、オレはフィールドの2体の



アンティーク・ギア・ハウンド・ドッグ  
古代の機械猟犬の効果発動！女、お前に600のダメージを2回  
だ！」

シャルロット「きゃあ!!」

シャルロット LP 2400↓1800↓1200

「そしてオレは手札から魔法カード、フェイク・フュージョンを発動！  
自分フィールドのモンスターが2体以上で、尚且つ属性と種族が同じ  
の場合、相手フィールドの融合モンスター1体を選択し、それよりも  
レベルの低い、自分フィールドのモンスターと同じ種族、属性の融合  
モンスター1体を融合召喚扱いで特殊召喚する！ハウンド・ドッグは  
地属性、機械族のモンスター。そしてフウジンのレベルは10、よっ  
て最大レベル9までの地属性、機械族の融合モンスターが特殊召喚で  
きる！さあ現れる！古代の機械参頭 猟犬！」

アンティーク・ギア・トリプルバイト・ハウンド・ドッグ  
古代の機械参頭 猟犬 ATK 1700

モノクロの融合の渦が現れ、そこからモノクロのトリプルバイト・  
ハウンド・ドッグが現れた。

「ただしこの効果で特殊召喚されたモンスターの効果は無効になり、  
エンドフェイズに破壊される」

フェイク・フュージョン 通常魔法

「フェイク・フュージョン」の効果は、1ターンに1度しか使用できな  
い。

①自分フィールドに同じ種族・属性のモンスターのみが2体以上表  
側表示で存在する場合、相手フィールドの融合モンスター1体を対象  
に発動できる。その融合モンスターよりレベルの低い、自分フィール  
ドのモンスターと同じ種族・属性の融合モンスター1体を融合召喚扱  
いで特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無  
効化され、ターンの終わりに破壊される。このカードを発動したター  
ン、自分は融合モンスター以外のモンスターを特殊召喚できない。

「さらに！手札から古代の機械複合核を召喚！こいつは召喚、特殊召  
喚に成功したら、デッキからレベル4以下のアンティーク・ギアを手  
札に加えられる！この効果で、デッキから古代の機械猟犬を手札

に加える！」

アンティーク・ギア・ユニオン・コア  
古代の機械複合核

ATK 1200

オベリスクフォースが召喚したのは…複数の光球体と歯車が見える小さい箱型の機械。歯車は外側にもついており、飛び出ている歯車と噛みあっている。

「そして手札から魔法カード、融合を発動！フィールドの古代の機械  
トリプルバット・ハウンド・ドッグ アンティーク・ギア・ハウンド・ドッグ  
参頭 猟犬と、手札の古代の機械猟犬を融合！古の魂受け継ぎし、機械仕掛けの猟犬どもよ！対をなし混じり合い、新たな力と生まれ変わらん！融合召喚！さあ現れる!! 古代の機械  
メット・ハウンド・ドッグ  
究極猟犬!!」

アンティーク・ギア・アルティメット・ハウンド・ドッグ  
古代の機械究極猟犬

ATK 2800

「古代の機械究極猟犬の効果！こいつが融合召喚に成功した場合、相手ライフを半分にする！さあて…その金髪、お前だ！」  
「え？うぐおおお!!」

シンゴ LP 4700 ↓ 2350

アンティーク・ギア・アルティメット・ハウンド・ドッグ  
古代の機械究極猟犬

機械族・効果／融合 地属性 星9

ATK 2800 DEF 2000

アンティーク・ギア・トリプルバット・ハウンド・ドッグ  
「古代の機械参頭 猟犬」

アンティーク・ギア・ハウンド・ドッグ  
「古代の機械猟犬」×1

①このカードが融合召喚に成功した場合、発動できる。相手のライフを半分にする。

②このカードは1度のバトルフェイズに3回攻撃することができる。

③このカードが攻撃する場合のダメージステップ終了時まで、相手は魔法・罠カードを発動できない。

アルティメット・ハウンド・ドッグの咆哮が轟き、凄まじい衝撃が沢渡を襲う。…だが、このオベリスク・フォースはまだ止まらない。

「そして手札から魔法カード、融合回収を発動！墓地の融合と、  
アンティーク・ギア・ハウンド・ドッグ フュージョン・リカバリー  
アンティーク・ギア・ユニオン・コア  
古代の機械猟犬を手札に！そして古代の機械複合核の効果！墓

地のアンテイク・ギア1体を除外し、このカードをそのモンスターと同じ名前にする！オレは古代の機械参頭 獵犬を除外！」

アンテイク・ギア・ユニオン・コア  
古代の機械複合核 機械族・効果 地属性 星4 ATK 120  
0 DEF 1000

「古代の機械複合核」の①、②の効果は、それぞれ1ターンに1度しか使用できない。

①このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、発動できる。デッキからレベル4以下の「古代の機械」モンスター1体を手札に加える。  
②1ターンに1度、自分の墓地に存在する「アンテイク・ギア」モンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターをゲームから除外し、このカードの名前を、このターンの終わりまでそのモンスターと同じにする。

アンテイク・ギア・ユニオン・コア アンテイク・ギア・トリプルバイト・ハウンド・ドッグ  
古代の機械複合核↓古代の機械参頭 獵犬

ユニオン・コアが浮き上がり、周りにパーツがくっついていき…3つの頭を持つ機械の獵犬へと姿を変える。

アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ  
「そして古代の機械獵犬の効果発動！古代の機械参頭 獵犬になっっているユニオン・コアと、ハウンド・ドッグ自身を融合！融合召喚！古代の機械究極 獵犬!!」

アンテイク・ギア・アルティメット・ハウンド・ドッグ  
古代の機械究極 獵犬 ATK 2800

アンテイク・ギア・アルティメット・ハウンド・ドッグ  
「古代の機械究極 獵犬の効果発動！今度はお前だ！」

「！ぐおおお!!」

勇雄 LP 3700↓1850

もう1体現れたアルティメット・ハウンド・ドッグの咆哮により、今度は勝鬨が強い衝撃波を受ける。

「そして手札から魔法カード、融合を発動！フィールドのハウンド・ドッグと、手札の古代の機械騎士を融合！融合召喚！古代の機械

ダブルバイト・ハウンド・ドッグ  
双頭 獵犬！」

アンテイク・ギア・ダブルバイト・ハウンド・ドッグ  
古代の機械 双頭 獵犬 ATK 1400

「そして手札から永続魔法、一族の結束を発動！こいつは自分の墓地の種族が1種類の場合、オレのフィールドの同じ種族のモンスターの攻撃力を、800ポイントアップさせるカードだ！」

「なっ!?」

「このタイミングで、全体強化を…」

アンテイク・ギア・アルティメット・ハウンド・ドッグ

古代の機械究極猟犬×2 ATK 2800↓3600

アンテイク・ギア・ダブルバイト・ハウンド・ドッグ

古代の機械双頭猟犬 ATK 1400↓2200

アンテイク・ギア・アルティメット・ハウンド・ドッグ

「そして何より、古代の機械究極猟犬は、1度のバトルフェイズに3回攻撃が行える！」

「！おいおい…」

「つまり、攻撃力3600の3回攻撃できるモンスターが2体、このままでは…」

「オレが最後、つまりオレは攻撃できる！さあバトルだ！やれア」

「…トラップ発動！威嚇する咆哮！これによりこのターン、攻撃は行えませんが…」

…絶望的ともいえる状況、だがその状況をシャルロットが発動したカードによって、覆す。威嚇する咆哮により響く咆哮でオベリスクフォースのモンスターは怯む。

「！なっ…ちっ…ターンエンド」

オベリスクフォースC 手札2 LP 4000

アンテイク・ギア・アルティメット・ハウンド・ドッグ

モンスター 古代の機械究極猟犬×2 (攻)、古代の機械

ダブルバイト・ハウンド・ドッグ

双頭猟犬×1 (攻)

魔法・罨 永続魔法「一族の結束」×1

「よ、よしナイスだナイス」

「助かった」

「……………気を抜くのは、まだですよ。私のターン、ドロー！」

怒りが大分収まったのか、冷静に日本語になるシャルロット。…だが表情はいつもの無気力感というか無表情というか、それとは違い、明らかに怒っている。そしてシャルロットは、ドローしたカードと手札を見て…。

「…手札から幻獣機エアロスバードを召喚！エアロスバードは1ター

ンに1度、墓地の幻獣機1体をゲームから除外することで、幻獣機トークン1体を特殊召喚します！メガラプターを除外し、幻獣機トークンを特殊召喚！」

幻獣機エアロスバード ATK 1600 星3↓6↓9

幻獣機トークン DEF 0

シャルロットが召喚したのは、ペンギンをモチーフとした飛行船。その効果によりトークンが生成され、トークン2体はエアロスバードと同じ形になる。

「さらに墓地のオライオンは、ゲームから除外することで幻獣機1体を、通常召喚とは別に召喚できます。この効果で、幻獣機レイステルスを召喚！」

幻獣機レイステルス ATK 100 星3↓9

呼び出されたのは、エイの姿を似せたステルス機。ホントにエイに良く似た機体である。

「私はレイステルスの効果を発動！レイステルスは自分フィールドのトークン1体をリリースすることで、相手フィールドのマジック、トラップを1枚破壊します。この効果で、そちらのセットカードを破壊」

「ちっ、ミラーフォースが…」

幻獣機エアロスバード 星9↓6

幻獣機レイステルス 星9↓6

レイステルスがトークンの1体を吸収し、衝撃波を放ちオベリスクフォースのセットカード1枚を、破壊する。

「そしてリバースカードオープン！エアリアル・チャージ 永続トラップ、空中補給！このカードは1ターンに1度、幻獣機トークン1体を特殊召喚できます！ただしターンの終わりに、幻獣機1体をリリースしなければなりません。…では、この効果で幻獣機トークン1体を特殊召喚します」

幻獣機トークン DEF 0

幻獣機エアロスバード 星6↓9

幻獣機レイステルス 星6↓9

「レベル9となったエアロスバード、レイステルスの2体で、オーバー

レイ！2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚！さあ姿を現しなさい、ランク9！ミラージユ・フオートレス幻子力空母エンタープラズニル！」

ミラージユ・フオートレス幻子力空母エンタープラズニル ATK 2900

フィールドに現れた渦に、エアロスバードとレイステルスが黄緑の光になり飛び込む。そして……不意に、辺りが暗くなる。そして上を見ると……大型の船のようなものが、浮かんでいる。

「なつ、で、デカイ……けどそれだけだ！アンティーク・ギア・ダブルバイト・ハウンド・ドッグ古代の機械 双頭 猫 犬の効果！エンタープラズニルに、ギア・アシッド・カウンターを1つ乗せる！」

ミラージユ・フオートレス幻子力空母エンタープラズニル ギア・アシッド・カウンター 0

↓1

「まずは……ミラージユ・フオートレス幻子力空母エンタープラズニルの効果発動！オーバーレイ・ユニットを1つ使い、複数ある効果のうち1つを使えます！そのうち、相手フィールドのカード1枚を除外する効果を使い、一族の結束を除外！」

「なつ！」

取り除いたカード：幻獣機エアロスバード

アンティーク・ギア・アルティメット・ハウンド・ドッグ古代の機械 究極 猫 犬×2 ATK 3600↓2800

アンティーク・ギア・ダブルバイト・ハウンド・ドッグ古代の機械 双頭 猫 犬 ATK 2200↓1400

「さらに手札からマジックカード、マジック・プランターを発動！自分フィールドの永続トラップ1枚を墓地へ送り、2枚ドロウします！……墓地のグローアップ・バルブの効果！デッキトップ1枚を墓地へ送り、墓地からこのカードを特殊召喚します！」

墓地へ送られたカード：スクランブル緊急発進

「……レベル3の幻獣機トークン2体に、レベル1のグローアップ・バルブをチューニング！シンクロ召喚！レベル7、サイPSYフレームロード・Z！」

グローアップ・バルブが1つの歯車になり、その中にトークン2体が入り、合計6つの光が変わる。歯車から光が放たれ、人型のトゲトゲが複数つき、黒い特性スーツを着て、白い仮面をつけた人型のモン

スター。ちなみに仁王立ちのまま現れた。

PSY<sup>サイ</sup>フレームロード・Z ATK 2500

「それじゃあこっちの古代の機械双頭猫 犬の効果！そのモンスターにもカウンターを乗せる！」

PSY<sup>サイ</sup>フレームロード・Z ギア・アシッド・カウンター 0→1

「それではバトル。まずはブラッド・メフィストで、最初のほうに出されたダブルバイト・ハウンド・ドッグを攻撃！」

「ぐっ…」

オベリスクフォースA LP 3400↓2000

「そしてエンター・プラズニルで、アルティメット・ハウンド・ドッグを攻撃！」

「クッソ…」

ブラッド・メフィストの黒く鋭い無数の欠片による攻撃の後に、エンター・プラズニルからビームが発射され、一瞬でアルティメット・ハウンド・ドッグを焼き尽くし、破壊した。

オベリスクフォースC LP 4000↓3900

「それでは、PSY<sup>サイ</sup>フレームロード・Zで、ダイレクトアタック！」

「ぐっ、ぐああああ!!」

オベリスクフォースA LP 2000↓0

Zが片手で電撃を放ち、オベリスクフォースの1人のライフを0にする。そして…。

「…それではメインフェイズ2、PSY<sup>サイ</sup>フレームロード・Zの効果発動！相手フィールドの特殊召喚された表側攻撃表示のモンスターを、このカードと共に除外します！この効果で、古代の機械魔神を除外！」

「！そんな効果を…」

Zがアンテイク・ギア・デビルに組み付き、一瞬にして共に消えた。…とはいえ、この効果は一時的だ。だが、デビルには効果的だ。「そして除外したモンスターが戻ってくるのは、次の自分のスタンバイフェイズです。…ではカードを1枚伏せて、ターンエンド」

シャルロット 手札2 LP 1200

モンスター ブラッド・メフィスト×1 (攻)、ミラーージュ・フォートレス 幻子力空母エン

タープラズニル×1 (攻) ギア・アシッド・カウンター×1

魔法・罠 セットカード×1

「…確か、お前らのほうで最初にターンが回ったのは、さつき倒したヤツ、そして今回はバトルロイヤル。ということでオレのターン、ドロ―!」

「…あの、すみません…ブラッド・メフィストの効果で、相手のスタンバイフェイズに、相手フィールドのカードの数×300のダメージを相手に与える効果があります…」

「そんなこと分かって…ん?ぎゃあああ!!」

シンゴ LP 2350↓1150

ブラッド・メフィストが沢渡の背後に回り、抱きつく。そして電気を流してダメージを与える。…バトルロイヤルルール、それは自分以外、相手プレイヤー。例え味方側だとしても、同じ。

「いてて…くっそー…だが、いいカードを引いた。…というわけでさっそくビッグ・スターの効果発動! デツキから魔界台本「オープニング・セレモニー」をセット! …それとダメージだ」

シンゴ LP 1150↓850

「すみません…ダメージを与えるなら、これがいいかと思つて」

「へっ、だったら見とけよ、オレのエンタメデュエルを! オレはペンデュラムゾーンの魔界劇団―ファンキー・コメディアンのペンデュラム効果! 1ターンに1度、オレのフィールドの魔界劇団ペンデュラムモンスター1体をリリースし、そのモンスターの攻撃力を、オレのフィールドのモンスター1体に加える。この効果でビッグ・スターをリリースし、サツキー・ルーキーの攻撃力に加える! その攻撃力は、1700に2500を加えて、3200だ!」

「さ、3200だと?!」

魔界劇団―サツシー・ルーキー ATK 1700↓3200

「そしてそして! さあ行くぜ野郎ども! スケールは3と8、さつきと同じくレベル4から7のモンスターをペンデュラム召喚できる! ペンデュラム召喚! さあ来い! 手札からレベル4! 魔界劇団―プリティ・ヒロイン! そしてエクストラデツキと手札からレベル7! 颯爽



かつ華麗に主役登場！魔界劇団―ビッグ・スター2体！

魔界劇団―プリティ・ヒロイン ATK 1500

魔界劇団―ビッグ・スター×2 ATK 2500

フィールドに3つの光が降り立ち…魔女のような帽子をかぶった可愛らしいビッグ・スターと同じ肌の色を持つ少女と、2体のビッグ・スターが現れる、そう2体の。

「?!さ、3体…ど、どういうことだ…」

「ペンデュラムモンスターはな、フィールドから墓地へ送られる代わりにエクストラデッキに表側で置かれ、さらにペンデュラム召喚はそうやってエクストラデッキに表側で置かれたペンデュラムモンスターも呼び出せる！ということでモンスターが増えたところでオレは事前にセットしたオープニング・セレモニーを発動！今度は4体、よって2000だ！」

「え、エクストラデッキからもだと…」

「あ、ありがよ…」

シンゴ LP 850↓2850

「さあさあどんどん行くぜ！2体のビッグ・スターの効果！魔界台本「アクロバット・パイレーツ」、魔界台本「ファニー・パレード」をセット！」

「?!ビッグ・スターの効果は、1ターンに1度じゃないのか?!」

「同名の発動制限はないんでな…いいで！」

シンゴ LP 2850↓23550↓2250

「…やつぱりそいつどうにかできねえか？」

「無理です」

「だよな…まあいい。それじゃあどんどん行くか！オレはアクロバット・パイレーツと、ファニー・パレードを発動！アクロバット・パイレーツは、オレのフィールドの魔界劇団モンスター1体限定だが2回攻撃を与え、ファニー・パレードは、オレのフィールドの魔界劇団の攻撃力を、魔界劇団モンスターの数だけ100アップさせる！ファニー・パレードの効果により、4体だから400、そしてアクロバット・パイレーツの効果で、サッシー・ルーキーに2回攻撃を与える！」

「…一族の結束があつても、アルティメット・ハウンド・ドッグの攻撃力を上回ったか」

|                |     |           |
|----------------|-----|-----------|
| 魔界劇団―サッシー・ルーキー | ATK | 3200↓3600 |
| 魔界劇団―プリティ・ヒロイン | ATK | 1500↓1900 |
| 魔界劇団―ビッグ・スター×2 | ATK | 2500↓2900 |

魔界台本「アクロバット・パイレーツ」 通常魔法

「魔界台本「アクロバット・パイレーツ」の①、②の効果は、1ターンの1度、いずれか1つしか使用できない。

①自分フィールドの「魔界劇団」モンスター1体を対象として発動できる。このターンのバトルフェイズ、そのモンスターは相手モンスターに2回攻撃することができる。

②エクストラデッキに表側の「魔界劇団」Pモンスターがあり、セツトされたこのカードが相手のカード効果によって破壊された場合、発動できる。相手ライフに2000ポイントのダメージを与える。

魔界台本「ファニー・パレード」 通常魔法

「魔界台本「ファニー・パレード」の①、②の効果は、1ターンの1度、いずれか1つしか使用できない。

①このカードを発動したターンの終わりまで、自分フィールドの「魔界劇団」モンスターの攻撃力は、自分フィールドの「魔界劇団」モンスターの数×100ポイントアップする。

②エクストラデッキに表側の「魔界劇団」Pモンスターがあり、セツトされたこのカードが相手のカード効果によって破壊された場合、自分フィールドの「魔界劇団」モンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターの攻撃力を、このターンの終わりまで2倍にする。

サッシー・ルーキーが、なぜか海賊のキャプテンのような恰好になり、さらに他の魔界劇団の攻撃力がアップする。…たかがと侮れるレベルだが、プリティ・ヒロイン、このモンスターがいる限り、たかかと侮れない。

「一族の結束はさつき除外されたから、余裕で倒せるよな…」

「ひ、ひいいい…」

「サツシー・ルーキーを攻撃表示にしてバトルだ！サツシー・ルーキーで、ダブルバイト・ハウンド・ドッグを攻撃い！」

魔界劇団―サツシー・ルーキー DEF 1000↓ ATK 3600

「う、うわああああ!!」

オベリスクフォースC LP 4000↓1800

サツシー・ルーキーが懐からなぜか爆弾を取り出し、それを放り投げアルティメット・ハウンド・ドッグを爆殺、するとプリティ・ヒロインが動きだし…。

「そしてプリティ・ヒロインのモンスター効果！1ターンに1度、自分か相手が戦闘ダメージを受けたとき、相手フィールドのモンスター1体の攻撃力を、発動したときに発生したダメージ分下げる！起きたダメージは2200、その分アルティメット・ハウンド・ドッグの攻撃力を下げる！」

プリティ・ヒロインがウインクすると、特大の紫色のハートが3つ現れ、それがアルティメット・ハウンド・ドッグ目掛け飛んでいき…飲み込む。それにより目がハートになったアルティメット・ハウンド・ドッグは、その力を大きく下げてしまう。

アンティーク・ギア・アルティメット・ハウンド・ドッグ  
古代の機械究極猟犬 ATK 2800↓600

「あ、あああ…」

「さーてトドメと行くか。サツシー・ルーキーで、攻撃力の下がったアルティメット・ハウンド・ドッグを攻撃！」

「う、うわああああ!!」

オベリスクフォースC LP 1800↓0

「ば、バカな…、こんなことがつ…」

「それじゃあ悪いが、こいつらで終わらせてやるよ！プリティ・ヒロインとビッグ・スターで、ダイレクトアタック!!」

「う、うわああああ!!」

オベリスクフォースB LP 3700↓1800↓0

デュエルが終了し、モンスターが消える…そして、オベリスク

フオースも消えた。

「?!消えた…」

「え?!な、なんで消えたんだ?!」

「…分からない。だが、次元移動が可能ということなら、負けたら強制的に帰還できるような細工がしてあったとしても不思議じゃない」

「…次元、移動?…あ。スケッチブックスケッチブック…」

「ん?おいおいマグマ熱いだろ」

「温度までは再現されていない。本物並の温度なら、自分達はとつくに汗まみれだ」

「あ、そっぴや確かに」

…デュエルが終わったため、オベリスクフオースに叩き落とされたスケッチブックを取りに行くシャルロット。：無論、マグマ（安全です）の中の。そして、マグマの中に平然と手をつ込み（安全です）、スケッチブックを探す。

「確かこの辺りに…あ、あつた!よかつた」

「スケッチブック…」

「どんぐらい大事なんだよ」

「とてもとても大切です。…ところで、さっきの人達はいつたい」

「ああ、それについてだが詳しくはオレも…っ?!」

「…っ!なんだこの気配は…」

「??」

無事スケッチブックを見つけ、大事そうに抱えるシャルロット（念のためにもう1度、無事です）。安心したところでオベリスクフオースについて聞こうとしたとき…：沢渡、そして勝鬨は…：強い悪寒を感じた。

「へー、オベリスクフオース倒せるぐらいには、君達強いんだ…3対3で人数は互角、複数戦に慣れているオベリスクフオースを倒すなんて、君達相手なら…それなりに遊べそうだ」

「…だ、誰だ…!?え…」

「!お前は確か…」

「…?…っ!…巳柳遊華さんに、似てる…けど、絶対違う…」

…そこにいたのは、紫のワンピースに紫のマントの姿の…：巳柳遊華に良く似た顔の人物、ユーハ。…顔こそそっくりだが、そこから読み取れるのは禍々しさ。遊華が良く見せる顔とは、正反対だ。

「…こいつは、遊華じゃない…お前誰だ!!」

「こいつは、巳柳遊華じゃないのか?」

「顔は似てる。けどこんな嫌な気配放つようなヤツじゃねえ。絶対に違う」

「私も、そう思います。…1回しか会ってないけど、絶対にこの人と彼女は、別人です」

「遊華…なるほど、そのバカそうな君と、そっちの表情が読み取れない君は、その遊華って人と知り合いなのか」

徐々に近付いていくユーハ。…そして、ディスクを展開する。

「さーて、君達は…どれぐらい長くボクと遊んでくれるのかな? さっき邪魔されちゃってね…少し遊び足りないんだ」

「っ! ……お前、名前は?」

「え?…シャルロット・レイモンです」

「じゃあシャルロット、勝負と一緒に誰か呼んで来い。…このオレ様でも正直、勝てるかどうか分からねえ」

「! いいえ、私も戦います。1人より、2人のほうが」

「なら自分も戦う。アカデミアなら、融合使いならより通用する手段がある」

「なら3人で」

「3人より、4人だろ」

「人は多い方がいい。さあ、早く!」

「…分かりました…気を付けて」

そういうと、シャルロットは走り出した。…それをユーハはただ見ている。

「…追わなくてもいいのか?」

「別に。少しの楽しみが減ったぐらいさ、気にする必要はないよ。それじゃあさっそく…始めようか」

### 第31話 恐怖の機械軍団

「うひゃー…すごいところ来たね」

「マグマなんてこんな近くで見える機会なんて早々ないからね…しかもこれだけ安全に」

「下手に近付いたら火傷じゃ済まないもんね」

…シャルロットが人を連れてくるために走り出して少しして、遊華と柚子は火山エリアに来ていた。

「とりあえず見つからないうちにどこかに」

「あ！遊華さん!!」

「?…あ！シャルロット・レイモンさん！デュエルしよー！」

「はあ、はあ、いやそれどころじゃなくて…とにかく来てください！」

「え?え、え?!」

「あ、ま、待って!!」

シャルロットが走ってきて、遊華に説明する間もなく遊華の腕を掴んで走り出す。…なお、スケッチブックは脇に挟んで。そして走りだす2人を、柚子は追う。

「ねえ何どうしたの?!」

「とにかく急いでください！急がないと…」

シャルロットの言葉が途切れる。大きな音が聞こえる。

「…！急がないと…」

「え?!な、何?!」

急いで音が聞こえたほうへと走り…見えてきた。…何か大きな、モンスター。

「！あれは…」

「急がないと…」

そして急いでそのモンスターの見えたところまで行くと…。

「ぐあああああ!!!」

シンゴ LP 2400↓0

「！間に合わなかった…」

「ぎ、沢渡大丈夫?!」

沢渡が吹っ飛ばされる。…そしてその大きなモンスタ―は消える。…そしてデュエルしていたもう1人…ユ―ハは、倒れている沢渡、そして勝鬨のほうへと近づく…前に、遊華が沢渡のほうへ駆け寄る。どうやら二人とも気絶しているようだ。

「ん?…:…:へー。そつか…なるほど、君が…まあ、別にいいや」

そういうと、ユ―ハはディスクを勝鬨のほうに向ける。…:…:…:…:…:それを見た遊華には、それがスローモーションのように、見えた。…:…:何か、見たくないものを見ているような…:…:そして脳内に、何か映像が映り、声も響く。…:声言っているのはただ一言…:…:許さない。ただそれだけを、何度も。そしてその声には強い怒りや憎しみが込められているような声だ。そして映像は今と同じような状況で…:ディスクから光が出て、その光に当たった人は消え…:カードになる。その映像が映る中で遊華は…:

「っ!やめろ!!」

「つと…:セーフつと」

ユ―ハ目掛け突っ込もうとするが、余裕でかわされた。遊華の表情は歪んでいる。…:おそらく、怒り…:そして、聞こえてくる怒りと憎しみが込められているような声に耐えている苦痛。

「はあ、はあ…:つ…:」

「ゆ、遊華さん大丈夫ですか?」

「だ、大丈夫なの?」

「大丈夫…:それより、こいつを…:倒さない」と

そういうと、遊華はディスクを構える。そしてシャルロット、柚子も。

「3人…:か。うーん…:こつちのほうがいいかな。それじゃあボク一番最後でいいや。攻撃できるし」

「デュエル!」

「え、ちよつと…:もう。デュエル!」

「行きます…:デュエル!」

「それじゃあ、デュエル!」

遊華 LP 4000  
柚子 LP 4000  
シャルロット LP 4000  
ユーハ LP 4000

「私のターン！手札からカードガンナーを召喚！そしてカードガンナーの効果！デッキの上からカードを3枚墓地へ！」

カードガンナー ATK 4000↓1900

墓地へ送られたカード

闇竜星―ジヨクト

地竜星―ハイカン

レベル・ステイラー

さつそく遊華はカードガンナーを召喚し、デッキからカードを墓地へ送る。1枚目に墓地へ送られたカードを見て、少し眉間に皺が寄る。

「…カードを2枚伏せて、永続魔法、補給部隊を発動してターンエンド。エンドフェイズ、カード・ガンナーの攻撃力は元に戻る」

カードガンナー ATK 1900↓400

遊華 手札1 LP 4000

モンスター カードガンナー×1（攻）

魔法・罨 セットカード×2、永続魔法「補給部隊」×1

「次は私が行くわ！私のターン、ドロー！手札からクリスタル・ローズを召喚！そしてクリスタル・ローズは、ジエムナイトか幻奏と名のつくモンスターを墓地へ送ることで、そのモンスターと同じ名前になる！私はデッキから幻奏の音女タムタムを墓地へ送り、クリスタル・ローズをタムタムに！」

クリスタル・ローズ ↓ 幻奏の音女タムタム ATK 500

柚子のフィールドに水晶でできたバラが現れ、その花の中に、小さな半透明の中華風な少女が見える。

「そして魔法カード、独奏の第2楽章を発動！自分フィールドに幻奏モンスターがいることで、墓地のレベル4以下の幻奏モンスター1体を特殊召喚する！幻奏の音女タムタムを特殊召喚！」



## 独奏の第2楽章 通常魔法

「独奏の第2楽章」は、1ターンに1度しか使用できない。

①自分フィールドに「幻奏」モンスターがいる場合、墓地のレベル4以下の「幻奏」モンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターを特殊召喚する。この効果を発動したターン、自分は天使族モンスターしか特殊召喚できない。

柚子のフィールドに、クリスタル・ローズの中に見えた少女が現れる。そしてその少女は、自身の名前の由来である楽器、タムタムを持っている。

幻奏の音女タムタム ATK 1000

「自分フィールドに幻奏モンスターがいるときにタムタムが特殊召喚に成功した場合、デッキから融合を手札に加える！そして、融合を発動！手札の幻奏の音姫プロデッジャー・モーツァルトと、タムタムを融合！至高の天才よ！魂の響きよ！タクトの導きにより、力重ねよ！融合召喚！今こそ舞台に、勝利の華を！幻奏の華歌聖ブルーム・ディーヴァー！」

幻奏の華歌聖ブルーム・ディーヴァ ATK 1000

タムタムと赤い服を着た女性の天使が融合の渦に入り、そこから花の台に乗る、妖精のようにも見える可憐な少女が現れる。：後、なぜか近くに半透明のタムタムがいるが…。

「タムタムは融合素材になったとき、自分フィールドの幻奏モンスター1体の攻撃力を500ポイント下げること、相手ライフに500ポイントのダメージを与える！ブルーム・ディーヴァの攻撃力を下げる！」

「…うーん、それなりだね」

幻奏の華歌聖ブルーム・ディーヴァ ATK 1000↓500

ユーハ LP 4000↓3500

「そして魔法カード、融合回収を発動！墓地の融合とタムタムを手札に加えて、融合を発動！フィールドのタムタム扱いのクリスタル・

ローズと、手札のタムタムを融合！2つの魂の響きよ！タクトの導きにより、力重ねよ！融合召喚！今こそ舞台へ！幻奏の音姫マイスターン・シューベルト！」

幻奏の音姫マイスターン・シューベルト ATK 2400

タムタムとクリスタル・ローズが渦に入り、そこからオレンジ色の髪的女性が現れる。スカート部分には、赤と黒の五線譜がある。

「そして融合素材になったタムタムの効果で、ブルーム・ディーヴァの攻撃力を500ポイント下げて、500ポイントのダメージを与える！」

「…」

ユーハ LP 3500↓3000

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

柚子 手札1 LP 4000

モンスター 幻奏の華歌聖ブルーム・ディーヴァ×1(攻)、幻奏の音姫マイスターン・シューベルト×1(攻)

魔法・罠 セットカード×1

「行きます…私のターン、ドロ…手札から幻獣機メガラプターを召喚！」

幻獣機メガラプター ATK 1900

上空からジェット機が飛んできて、一定の高さで止まる。

「さらに魔法カード、愚かな埋葬を発動！デッキから幻獣機オライオンを墓地へ送り、オライオンの効果！幻獣機トークン1体を特殊召喚します！そしてメガラプターの効果！幻獣機トークンを、さらに特殊召喚します！そして幻獣機メガラプターは、フィールドの幻獣機トークンのレベル分、レベルがあがる！」

幻獣機トークン×2 DEF 0

幻獣機メガラプター 星4↓7↓10

フィールドに2体のデコイが現れる。最初に出ていた1体はライオンにも似た姿だったが、メガラプターが現れた途端、メガラプターと同じ形になる。

「そしてメガラプターの効果！トークン1体をリリースして、デッキ

から幻獣機1体を手札に加えます！幻獣機テザールフを手札に！」  
幻獣機メガラプター 星10↓7

「そして墓地のオライオンを除外することで、幻獣機を1度だけ、通常召喚とは別に召喚できます！幻獣機テザールフを召喚！テザールフが召喚に成功したとき、幻獣機トークン1体を特殊召喚！」

幻獣機テザールフ 星4↓7↓10 ATK 1700

幻獣機メガラプター 星7↓10

幻獣機トークン DEF 0

「一気にいきます！レベル10となったメガラプター、テザールフでオーバーレイ！2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚！轟音轟かせ到着します！ランク10、超弩級砲塔列車グスタフ・マックス!!」

フィールドに空いた穴の中に、メガラプターとテザールフが飛び込む。：ただし今回の穴はなぜかかなり巨大でかなり後方で、穴から鉄道のレールが2つ伸びてきた。そして：穴から列車が現れる。それには巨大な砲塔がついた、巨大な列車だ。

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス ATK 3000

「グスタフ・マックスのモンスター効果！オーバーレイ・ユニットを1つ使い、相手ライフに2000ポイントのダメージを与えます！トレインキャノン！」

「！うおお！……、これはかなり効くね……」

ユーハ LP 3000↓1000

さすがに2000という衝撃はきついのか、グスタフ・マックスの砲塔から放たれた強力な砲撃により吹っ飛ばす。さすがに痛そう。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

シャルロット 手札2 LP 4000

モンスター 幻獣機トークン×2 (守)、超弩級砲塔列車グスタフ・マックス×1 (攻) O U × 1

魔法・罫 セットカード×2

：遊華以外のフィールドが、かなり豪華になっている。柚子は特殊召喚されたモンスターに対し無敵の効果を持つブルーム・デュー

ヴァ、墓地のカードを除外できるマイスタリン・シューベルト。シャルロットのフィールドにはトークン2体に相手ライフに2000のダメージを与えられる、攻撃力3000、ランク10のモンスター。そしてセツトカードが2枚…かなり豪華だ。

「これもうボクのターン間に挟んだほうがよかつたかな…まあ、いつか。それじゃあボクのターン、ドロー。…うーん…まあいいや。手札からフィールド魔法、ギア・タウン 歯車街を発動」

フィールドが歯車だらけの機械でできた街の一面へと変化する。ギア・タウン、名前と見た目から、アンティーク・ギアの補助カードと分かるだろう。アンティーク・ギアをすっかり知っていれば。

「フィールド魔法…」

「いったいどんな効果を…」

「そして手札から魔法カード、アンティーク・ギア・カタバルト 古代の機械射出機を発動。自分フィールドにモンスターがない場合、自分フィールドの表側のカード1枚を破壊し、デッキからアンティーク・ギア1体を、召喚条件を無視して特殊召喚する。ギア・タウンを破壊！そして現れる！」

古代の機械熱核竜！」

アンティーク・ギア・リアクター・ドラゴン  
アンティーク・ギア・リアクター・ドラゴン  
古代の機械熱核竜 ATK 3000

ユーハの背後に大型の砲台が現れ、ギア・タウンのエネルギーを吸い出す。そして…砲台の背後にいつの間にかいる胸部に何やら明らかに真新しい機械が取り付けられた古びた機械の竜にエネルギーを送ると、胸部の機械がピンクに光り、続いて目に光が灯り、飛び始める。

「！攻撃力、3000…」

「こんなに簡単に…」

「そしてギア・タウンが破壊されたら、デッキからアンティーク・ギア1体を特殊召喚できる。さあ来なよ、アンティーク・ギア・ハウンド・ドッグ 古代の機械獵犬！」

アンティーク・ギア・ハウンド・ドッグ  
古代の機械獵犬 ATK 1000

「そして、ハウンドドッグの特殊召喚に対して速攻魔法、地獄の暴走召喚を発動。君達も暴走召喚できるけど…君達が出したのは、1人を除いてエクストラデッキから特殊召喚されたモンスターやトークン。

…つまり、そっちの君のカードガンナー以外は無理、ってことかな」

「…カードガンナーを守備表示で1体、特殊召喚」

アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグ  
古代の機械猟犬×2 ATK 1000

カードガンナー DEF 400

「そして、ハウンド・ドッグ3体の効果。そうだねここは……うん。遊華に1回、そっちの君に2回だね」

「っ…あつ…」

「くっ…」

遊華 LP 4000↓3400

シャルロット LP 4000↓3400↓2800

「そしてハウンド・ドッグ1体のモンスター効果。フィールドにアンテイク・ギアカードがあることで、このカードと手札、フィールドのモンスターを素材にアンテイク・ギア融合モンスター1体を融合召喚する。ボクが融合するのは、フィールドのリアクター・ドラゴン、そしてハウンド・ドッグ1体、そして手札の古代の機械合成竜！アンテイク・ギア・ヒドラ古の力宿す機械の竜よ、獣よ、魔竜よ。混ざり合い1つとなりて、全てを打ち砕く機械竜を呼び起こせ！融合召喚！さあ現れる、

アンテイク・ギア・アームズ・ドラゴン  
古代の機械武装竜！！」

アンテイク・ギア・アームズ・ドラゴン  
古代の機械武装竜 ATK 4000

融合の渦の中にリアクター・ドラゴンとハウンド・ドッグ、そして複数の首を持つ機械竜が入る。そして渦からは…古びた機械でできた巨大なドラゴン。一對の翼に大砲やガトリング砲、尻尾にビーム砲、さらにはミサイルなど、数多の重火器を搭載したドラゴンだ。

「…こ、攻撃力、4000…」

「3体も素材にして、一体どんな効果を…」

「アームズ・ドラゴンの効果は特殊だね…特定のモンスターを融合素材にすることで効果を得るんだ。得られる効果は最大3つ、そのうち今回は2つまでしか満たしてないけどね。リアクター・ドラゴンを素材にしたら特殊召喚されたモンスター全てに攻撃でき、ヒドラを素材にすれば、戦闘を行う相手モンスターの効果を、無効にする」

「…全体攻撃に、効果無効って…」

「ゆっちゃんのブルーム・ディーヴァの効果が無効になっちゃったら……」

「(…手札にオネストがある。このカードがあればまだ…)」

…そう。ブルーム・ディーヴァ、その効果は凶悪そのものだが…だからこそ、効果を無効にされれば、一気に無力化されてしまう。攻撃力の低く、攻撃表示で使われることが多いモンスターの宿命、とも言える。しかしブルーム・ディーヴァは光属性、だからこそオネストという手段がとれる。…だが…。

「それじゃあ手札から、アンティーク・ギア・ガジェット古代の歯車機械を召喚。このカードが召喚に成功したら、カードの種類を1つ宣言することで、このターンボクのモンスターが攻撃する場合、宣言した種類のカードを、相手はダメージステップ終了時まで発動できない。宣言するのは、モンスター」

「うそ?！」

アンティーク・ギア・ガジェット古代の歯車機械 ATK 500

大きな歯車を背負うロボットが現れ、背中の歯車がオレンジ色に光り、回り始めた。…これにより、モンスター効果は封じられる。

「じゃあ、始めよう。バトル！」

「なら…マイスタリン・シューベルトの効果発動!相手の墓地のカードを3枚まで、除外する!私が除外するのは、アンティーク・ギア・カタバルト古代の機械射出機、アンティーク・ギア・リアクター・ドラゴン古代の機械熱核竜、アンティーク・ギア・ハウンド・ドッグ古代の機械猟犬!そしてマイスタリン・シューベルトの攻撃力は、除外したカードの数×200ポイントアップする!コーラス・ブレイク!」

幻奏の音姫マイスタリン・シューベルト ATK 2400↓3000

マイスタリン・シューベルトの効果が発動する。…だが、それでは意味はない…それでも、時間稼ぎには十分。遊華とシャルロットは近くにあったアクションカードを手取る。…遊華のほうは顔をしかめたが、シャルロットのほうは目当てのカードだったようだ。

「アクションマジック、フレイム・チェーン!アンティーク・ギア・アームズ・ドラゴンの攻撃力を、400ポイントダウンさせます!」

フレイム・チェーン アクション魔法

①フィールドのモンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターの攻撃力を、400ポイントダウンさせる。

アンティーク・ギア・アームズ・ドラゴン  
古代の機械武装竜 ATK 4000↓3600

「ちっ…でも攻撃はできる。アンティーク・ギア・アームズ・ドラゴンで、ブルーム・ディーヴァを攻撃!」

アンティーク・ギア・アームズ・ドラゴン  
古代の機械武装竜 機械族・効果／融合 地属性 星11 AT

K 4000 DEF 3600

「古代の機械巨竜」もしくは「古代の機械熱核竜」もしくは「古代の機械合成竜」のいずれか1体+「アンティーク・ギア」モンスター×2  
①このカードは、融合素材にしたモンスターによって、以下の効果を得る。

・古代の機械巨竜：自分の「アンティーク・ギア」モンスターが相手の守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ戦闘ダメージを与える。

・古代の機械熱核竜：このカードは、相手フィールドの特殊召喚されたモンスター全てに1度ずつ攻撃できる。

・古代の機械合成竜：このカードが攻撃する場合、戦闘を行う相手モンスターの効果は無効になる。

②このカードが攻撃する場合のダメージステップ終了時まで、相手は魔法・罠カードを発動できない。

③このカードが相手によって破壊された場合、墓地の「アンティーク・ギア」モンスター1体を対象に発動できる。そのモンスター1体を特殊召喚する。

「っ…きゃあああああ!!!」

「ゆっちゃん!」

攻撃力を下げても、その差は圧倒的。ブルーム・ディーヴァは様々な重火器による容赦ない攻撃で破壊され、その衝撃で柚子は後ろへ吹っ飛ばすもつともこの攻撃では、生き残れたが。

柚子 LP 4000↓400

「っ！アクションカード……よし。アクションマジック、奇跡！マイスターリン・シューベルトは戦闘破壊されず、ダメージは半分になる！」

「じゃあマイスターリン・シューベルトを」

「少し待ってください。アクションマジック、ヒートチャージ！マイスターリン・シューベルトの攻撃力、守備力を600ポイントアップさせます！」

00 幻奏の音姫マイスターリン・シューベルト ATK 3000↓3600

ヒートチャージ アクション魔法

①フィールドのモンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターの攻撃力・守備力は、このターンの終わりまで600ポイントアップさせる。

「…アンテイク・ギア・アームズ・ドラゴンでマイスターリン・シューベルトを攻撃」

「うう…」

00 幻奏の音姫マイスターリン・シューベルト ATK 3600↓3000

柚子 LP 4000↓100

攻撃力の差は少なくなったがそれでも低い。奇跡のおかげで破壊されず、ダメージ自体は少ないものの、前の時点で風前の灯、生き残れたことこそが奇跡と言える。

「続いて、グスタフマックス、幻獣機トークン2体を攻撃」

「！攻撃前に速攻魔法、ドロー・マッスルを発動！トークン1体はこのターン、戦闘では破壊されない。そして私は、1枚ドローします！つきやあ…グスタフマックスが…」



シャルロット LP 2800↓2200

巨大な砲塔列車も、様々な重火器による攻撃には耐えきれずに破壊、トークンも1体を残し、破壊されていく。そして残りは…。

「じゃあ次はカード・ガンナー2体を攻撃」

「!（こんなときに回避じゃなかったら…）きやあああ!!」

遊華 LP 3400↓200

容赦ない攻撃がカードガンナーと遊華を襲う。…こちらのライフも、風前の灯となった。

「それじゃあこれで終わりかな…古代の歯車機械で、遊華にダイレクトアタック」

「攻撃前にトラップ発動!ピンポイント・ガード!墓地の闇竜星—ジヨクトを守備表示で特殊召喚!」

闇竜星—ジヨクト DEF 2000

アンティーク・ギア・ガジェットが攻撃をしかけようとしたが、ジヨクトの登場でそれは防がれることになる。…こうなってはもう攻められない。

「…しようがないね。ボクはカードを1枚伏せて、ターンエンド」

ユーハ 手札1 LP 1000

モンスター アンティーク・ギア・ハウンド・ドッグ 機械猟犬×2 (攻)、アンティーク・ギア・アームズ・ドラゴン 古代の機械武装竜

×1 (攻)、アンティーク・ギア・ガジェット 古代の歯車機械×1 (攻)

魔法・罫 セットカード×1

「私のターン、ドロ—闇竜星—ジヨクトの効果!手札の光竜星—リフンと地竜星—ヘイカンを墓地へ送り、デッキから水竜星—ビシキと炎竜星—シユンゲイを?!」

ジヨクトの効果を使い、モンスターを呼び出そうとしたその時…遊華目掛け火の玉が飛んできて、かわす間もなく直撃した。

遊華 LP 200↓0

「え、な、何が…」

「ごめんね—。厄介そうだからさ、拾ったカード使っていないみたいだから使ってみたよ」

「!あのカードは…」

…そういうユーハのフィールドに発動しているのは…アクションマジック、フレイム・ボール。相手ライフに200ポイントのダメージを与えるカードだ。

フレイム・ボール アクション魔法

①相手ライフに200ポイントのダメージを与える。

「フレイム・ボール…まさかこのタイミングで…」

「で、でもいつの間にアクションカードを」

「それは秘密。さあ、次は君の番でしょ？ 柊柚子さん」

「くっ…私のターン、ドロロー！ 手札から魔法カード、強欲で貪欲な壺を発動！ テッキの上からカード10枚を裏側で除外して、2枚ドロロー！ …攻撃力の低さが仇になったわね！ バトル！ マイスタリン・シューベルトで、アンテイク・ギア・ハウンド・ドッグを攻撃！ ウェーブ・オブ・ザ・グレイト！」

マイスタリン・シューベルトの攻撃が、ハウンド・ドッグに容赦なく迫る。…だが…。

「永續トラップ、強制終了。ガジェットをコストに、バトルフェイズを終了するよ」

「…………カードを1枚伏せて、ターン、エンド」

柚子 手札2 LP 100

モンスター 幻奏の音姫マイスタリン・シューベルト×1 (攻)

魔法・罫 セットカード×2

「…(セットカードはリビングデッドの呼び声と強制脱出装置…これでアームズ・ドラゴンをバウンスすれば…)」

「行きます。私のターン、ドロロー…手札から幻獣機テザールフを召喚！ テザールフは召喚に成功したとき、トークンを1体特殊召喚します！」

幻獣機テザールフ ATK 1700 星4↓7↓10

幻獣機トークン DEF 0

「そして手札から速攻魔法、サイクロンを発動！ 強制終了を破壊！」

「あらら」

発生した小規模な嵐により、強制終了は吹き飛ばされ破壊。そしてテザールフの効果を考えれば、この攻撃が通れば勝てるだろう。

「バトル！テザールフで、ハウンド・ドッグを攻撃！そして」

「ごめんちよつと待って。手札の工作列車シグナル・レッドの効果。相手モンスターの攻撃宣言時、手札からこのカードを特殊召喚し、攻撃をこのモンスターに誘導させる」

工作列車シグナル・レッド DEF 1300

テザールフの攻撃は、突如として現れた赤い列車、シグナル・レッドのほうに誘導され、攻撃自体はまったくきいていない。

「そしてシグナル・レッドはこの効果で特殊召喚されたターン、戦闘じゃ破壊できない」

「！…ターンエンド」

「じゃあそのエンドフェイズにトラップ発動！強制脱出装置！  
アンテイク・ギア・アームズ・ドラゴン  
古代の機械武装竜をバウンス！」

「…ちえ。じゃあエクストラデッキに戻すよ」

シャルロット 手札2 LP 2200

モンスター 幻獣機トークン×2 (守)、幻獣機テザールフ×1

(攻)

魔法・罟 セットカード×1

「それじゃあまたボクのターン、ドロ。ハウンド・ドッグの効果でま  
ずは柘柚子、君に」

「手札のハネワタを墓地へ送って、効果！このターン自分が受ける効  
果ダメージを0にする！」

「…じゃあそつちの君にもう1体のハウンドドッグの効果でダメー  
ジ」

「！くう…」

シャルロット LP 2200↓1600

「…うん。これならいいかな…手札から古代の機械飛竜を召喚。こ  
アンテイク・ギア・ワイバーン

のカードは召喚、特殊召喚に成功した場合、デッキからアンテイク・  
ギアのカード1枚を手札に加える。デッキから古代の機械箱を手  
アンテイク・ギア・ボックス

札に加えて、アンティーク・ギア・ボックスの機械箱の効果。このカードはドロワー以外でデッキか墓地から手札に加わったら、デッキから攻撃力か守備力、どちらかが500の地属性の機械族1体を手札に加える。ということ、アンティーク・ギア・キャンソンの古代の機械砲台を手札に加える。と言っても、今このカードは問題じゃないんだ」

「二人とも気を付けて、何か来る！」

「止められないなら遅いさ。ハウンド・ドッグのモンスター効果。手札のボックス、フィールドのハウンド・ドッグ2体、ワイバーン、合計4体のアンティーク・ギアを融合！機械仕掛けの竜よ、未知なる箱よ、猟犬どもよ、今1つとなり、いざ呼び出さん大いなる魔人！融合召喚！さあ現れる、アンティーク・ギア・カオス・ジャイアントの古代の機械混沌巨人！！」

アンティーク・ギア・カオス・ジャイアント  
古代の機械混沌巨人 ATK 4500

ハウンド・ドッグ2体、ギア・ボックス、そしてワイバーンが融合の渦に飲み込まれ…地面が揺れる。それは機械の巨人。獣の意匠がとどこころにある、機械の巨人。その冷酷なモノアイは、3人を見下ろす。

「こ、攻撃力、4500!?!」

「なんて攻撃力…」

「だ、大丈夫ですよ！（セットカードはエネミー・コントローラー。これで守備表示にすれば、まだ逆転の可能性がある！）」

「…うん。それじゃあバトル。カオス・ジャイアントは相手フィールドのモンスター全てに1度ずつ攻撃でき、さらに守備表示のモンスターを攻撃したら、貫通ダメージを与えるって効果があるんだよね」  
「!?な、なんですって?!」

「ということ…終柚子、君のマイスタリン・シューベルトに攻撃」

「させません！速攻魔法、エネミー・コントローラーを発動！これでカオス・ジャイアントを守備表示に!!」

巨人目掛け、フィールドに現れた巨大コントローラーのコードが伸び、繋がる。そしてコマンドが入力され…止まらない。

「…!?あれ、どうして…」

「残念。カオス・ジャイアントは魔法と罠の効果を受け付けられないんだ」

「そ、そんな…」

「ということ、バイバイ」

「いいえ、それはあなたよ！手札のオネストの効果！相手モンスターの攻撃力を、マイスタリン・シューベルトに…!?え、なんでエラーに…!?」

「！まさか、モンスター効果を封じる効果が」

「うん。モンスター効果の発動を封じちゃうんだ。まあ、悪あがきはこれで、おーしまい」

カオス・ジャイアントの腕から放たれたレーザーはマイスタリン・シューベルトへと真っ直ぐ進む。無論、柚子もその範囲内に入っている。だが…。

「ゆっちゃん！」

「え？きやあ！」

遊華のタックルにより、柚子は吹っ飛ばされ、範囲内から逃れる。そしてレーザーがマイスタリン・シューベルトに直撃し、衝撃を辺りへまき散らす。

「きやああああ!!」

「柚子さん！遊華さん！きやあ！」

柚子 LP 100↓0

シャルロットは元の位置からは少し離れた位置に、遊華、柚子はレーザーからはなんとか逃れられていたものの、衝撃を間近で受け、より離れたところに飛ばされ、遊華は柚子に覆いかぶさるように気絶している。幸いにも勝鬨と沢渡は攻撃の範囲からは外れていた。だが衝撃はもろに受けたので…。

「んが?!イデデ…い、いったいなんだ…」

「ぬお?!…、これは…」

吹っ飛ばされ、ともに体の一部を強く打ったためか、意識が戻った。

「ゆ、柚子さん…」

「うーん、微妙。まあそこそこ楽しめたかな…これで終わりかな。カオス・ジャイアントで、トークンを攻撃！」

「！きやああああ!!」

再びレーザーが放たれ、今度はシャルロットのフィールド、そしてシャルロット自身を飲み込む。…そして、デュエルが終了する。

シャルロット LP 1600↓0

### 第32話 輝きを放つ竜と全てを飲み込む者

…大きなダメージは、確かに与えられた。…だがしかし、それ以上にユーハによって発生したダメージは大きい。柚子を庇った遊華、庇われた柚子は共に気絶、シャルロットはレーザーによる一撃を受け、大きく吹っ飛んで気絶している。…今意識があるのは、痛みで意識が戻った沢渡と勝鬨だ。そしてそんな遊華と柚子のところに、ユーハはゆっくりと向かう。

「くっそ、待ちやがれ…」

「も、もう1度、勝負だ…」

「えー…ヤダよ。金髪の君は中々面白かった、もう1人のほうもそれなりだったけどさ、正直ねー、ボクもつと強い人とデュエルしたいんだ。君達邪魔だよ」

というと、沢渡と勝鬨を無視し、柚子たちのところへと向かう。沢渡と勝鬨は受けたダメージの影響で立つので精一杯。とてもじゃないが間に合わないだろう。

「くっそ、待ってっていったら…!」

「やーだね。さて…ついでにこっちも送ろつと」

そういうと、ユーハはデュエルディスクを弄り始める。沢渡、勝鬨は共に、なんか分からないけどまずいと思ったため動くが、ボロボロのためまともに動けない。だが…。

「…この音は…?」

キーン、という甲高い音が聞こえてきて…そして。

「待てやゴラア!!」

近くの高台から、何かが飛び出してきた。…それは、明らかにバイク：D・ホイール。そしてそれに乗る少年だ。バイクに：D・ホイールが着地すると、まっすぐユーハのところへ突っ込む。

「おっと…危ないじゃないか」

「へ、てめえは…あれ?…いや違うか…まあどーせアカデミアだろ?ならばっ飛ばすだけだ!」

「酷いなあ、せめてデュエルでぶっ飛ばしてよ」

さり気なく柚子と遊華の近くに停車。近づけさせない作戦のようだ。そしてもう1つ同じような音が聞こえそして：こちらは高台ではなく、普通に地面を走ってきた。赤いD・ホイールに二人乗り。1人はこのD・ホイールの持ち主、ユーキ。そしてもう1人は…。

「安全運転でしたけど、なんとか間に合った…」

「かたじけないでござる」

東堂葉佩だ。D・ホイールは沢渡達の近くで停車する。それともう1人：唐突にユーキ達の近くに赤いマスクをつけた忍者、日影が現れる。

「さあ、大丈夫でござるか」

「へっ、このぐらい…イデデデデ…」

「：自分も同じようなものだ。骨は折れてはいないと思うが：申し訳ない、事実上たった一撃でこれだ…」

「ならば急いで離れるのが賢明。日影殿、そちらのうちどちらか2人を頼むでござる。ユーキ殿はこちらの2人を」

「：いや、拙者は十分運べる故、心配なさらず」

「：分かった。急ごう」

そういうと、葉佩は勝鬨と沢渡をどうにか立たせ、ユーキの乗るD・ホイールに乗せ、シャルロットは葉佩自身がおんぶして運び、日影は遊華と柚子の両方を脇に抱えている。

「できればそういうことさせたくないけど：どうも君、逃がしてくれなさそうだね…」

「へっ、誰が逃がすか！とにかくさっさと他のヤツら連れて逃げろ！ある程度したらオレも逃げる！」

「：気を付けて」

ユーキがそういうと、D・ホイールを発進させ、葉佩、日影がその後を追う。無論、ユーキはそれを追おうとするが：すぐにユーキがD・ホイールでその進路を塞ぐ。

「逃がさねえって言ったろ。てめえも逃げられねえって自覚してたみたいだしな！」

「正直スピードじゃ君のほうに部があるからね。さすがに機械には勝



てないよ」

お手上げと言いたげなポーズをするユーハ。そりやそうだ。D・ホイールに追いつく人間なんていたらそれを多分人間とは呼ばない。

「…まあそれはともかく…デュエルするならいいよね？君、いい感じがするよ」

「へっ、とつととブツ倒してやるぜ！」

「ちよつと待ったー!!」

「…ん？」

駆け足の音からすぐズザーという音とともに乱入者が一人。…南雲白である。

「そっちの黒の…んあ？遊華？」

「あ、遊華は別人だよ。ボクはユーハ」

「…確かに違うな」

「誰だお前？」

「そっちこそ誰？あたしは南雲白」

「ユーゴだ。とりあえず、あいつブツ倒すでいいんだよな」

「もちろん。それに…」

南雲白も零児から話しは聞いていたため、アカデミアなどについては知っている。そして何より…。

「あんなヤバそうなヤツ、逃がしてたまるか」

「同感だ！」

「うーん…2人か…どっちもいい感じがするし、あんまり悠長に遊べそうにないからな…うん、こっちのデツキにしようかな」

そういうと、先ほどのデツキを仕舞い、それとは違うデツキを取り出し、ディスクにセットする。

「さてと、君達はいいい練習相手になってくれるかな」

「練習相手だと…上等だ。練習もさせねえぐらい速攻で決めてやらあ！」

「練習ならあんた一人でやれ!!」

白はディスクを構え、ユーゴは…。

「デュエルモード、マニユアル」

「行くぜ！」

「…え？それに乗ったまま？」

Dホイールに乗ったまま、デュエルである。

「デュエル！」

「でゆ、デュエル！」

ユーハ LP 4000

ユーゴ LP 4000

白 LP 4000

「数多いから先攻後攻はこっちが決めさせてもらおうかな。というこ  
とでボクのターン。手札からカードを2枚セット、さらにクリバン  
デットを召喚」

クリバンデット ATK 1000

フィールドに現れたのは、いわゆるクリボーが眼帯と黄色いバンダ  
ナをつけた、悪そうな感じのするモンスター。事実、融合とは相性の  
いい効果だ。

「そしてターンエンド。エンドフェイズ、クリバンデットのモンス  
ター効果を発動。このカードはエンドフェイズに、このカード自身を  
リリースし、デッキの上からカードを5枚捲り、魔法や罠1枚を選ん  
で、それ以外を墓地へ送る」

「おいおい…一気に4枚も…」

捲られたカード

シャドール・ハウンド

シャドール・ビースト

シャドール・ファルコン

シャドール・フュージョン

影依融合

ネフエシャドール・フュージョン

魂写しの同化

シャドール・フュージョン

「うーん落ちはまだまあか。影依融合を手札に加えて…墓地へ送  
られたシャドール・ビースト、シャドール・ファルコンのモンスター  
効果」

「なっ!? 2体とも効果発動だ?!」

「条件が合えばハウンドのほうも使えたんだけどね」

「げ……つまりシャドールは、墓地へ送られれば効果が発動できるってことか?!」

「正解。正確に言えば、カードの効果で墓地へ送られたら、だね。ファルコンの効果は、墓地から裏守備表示で自身を特殊召喚し、ビーストは、デッキからカードを1枚ドロウする」

特に、ユーハの使うシャドールとは相性がいい。カード効果で墓地へ送られればその効果を発動するシャドール、そしてカードを捲り、魔法か罨を1枚手札に加え、残りを墓地へ送るクリバンデット。効果を発動しつつ、欲しいカードを手札に引き込みやすくする。

「ということで、ファルコンをセットして1枚ドロウ。これでターンは終わりだよ」

ユーハ 手札4 (影依融合) LP 4000

モンスター セットモンスター×1 (シャドール・ファルコン)

魔法・罨 セットカード×2

「行くぜ、オレのターン、ドロウ！オレは手札から」

「ちよつと待つてもらおうかな。リバースカードオープン。速攻魔法、神の写し身との接触。エルシャドール・フュージョンこのカードは手札とフィールドのシャドールを融合召喚する。この効果で、手札のシャドール・ヘッジホッグと、ホドシャドール・キューブを融合。大いなる使徒の力により、影に蠢く古に眠りし魂よ、獣と機械合わせり混ざり合い、1つとなりて大いなる使者を呼び出さん。融合召喚！さあ現れる、深淵の探究者、エルシャドール・ミドラーシュ！」

暗い渦の中に、紫の針鼠ともう1体……紫の四角いモンスターが入る。そして渦からは影から出て、それがミドラーシュへと変化した。

エルシャドール・ミドラーシュ ATK 2200

「シャドール・ヘッジホッグとホドシャドール・キューブのモンスター効果。カード効果で墓地へ送られたら、ヘッジホッグはデッキから同名以外のシャドールを手札に加える。ホドシャドール・キューブはカード効果で墓地へ送られたら、自分の空いているペンデュラムゾーンに、このカードを置く」

「！おいおい、なんかそれ、ペンデュラムだろ?!エクストラデッキへ送

られるんじゃないかったのか？」

「さあね。いろいろ実験した結果で作られたカードだもん。ボクよく知らないし。それじゃあへっジホッグの効果で、サアシャドル・ドレイクを手札に」

「…へっ、よく知らねえがそれがどうした！攻撃力2200、その程度じゃオレを止められないぜ！オレは手札からスピードロイドS R バンブー・ホースを召喚！こいつは召喚に成功したとき、手札からレベル4以下のスピードロイド1体を特殊召喚する！こい！三つ目のダイス！」

ユーハのフィールド現れた光の柱に、先ほど融合素材となったホドシャドル・キューブが昇ってきた。その下には、1とある。そしてユーゴはというと、足が2本だが竹馬のようになっていて馬が現れ、すぐ後に三角に目の模様が入ったモンスターが現れる。

スピードロイド  
S R バンブー・ホース ATK 1100

スピードロイド  
S R 三つ目のダイス DEF 1500

「さあ行くぜ！レベル4のバンブー・ホースに、レベル3の三つ目のダイスをチューニング！その美しくも、雄々しき翼翻し」

「エラー発生！エラー発生！」

「んな?!はあ?!」

「エラーって…おいおいまさかその融合モンスターって…」

「大体察してるだろうけど、ミドラーシュがフィールドに居る限り、全てのプレイヤーは1ターンに1度しか特殊召喚を行えないんだ」

ユーゴにとって、ミドラーシュはよく突き刺さる。何せ特殊召喚を制限されるのだ。1回許されても、2回目ができなければ意味がない。特にスピードロイドは特殊召喚に優れているシンクロデッキ。単純に特殊召喚できないよりもつらい。

「だあくっつそー！カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

ユーゴ 手札3 LP 4000

モンスター スピードロイドS R バンブー・ホース×1 (攻)、 スピードロイドS R 三つ目のダイス×1 (守)

魔法・罫 セットカード×1

「あたしのターン、ドロー！ならあたしがとつと倒してやる！手札

から魔法カード、ドラゴン・目覚めの旋律を発動！手札1枚を墓地へ送って、デッキから青眼ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴンの白龍とブルーアイズ・カオスMAX・ドラゴンを手札に加える！そして墓地へ送った伝説の白石の效果！デッキから青眼ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴンの白龍を手札に加える！そして魔法カード、融合を発動！さつき手札に加えた2体の青眼ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴンの白龍を融合！

「へー、融合使うんだ」

「強靱にして美しき2体の白き伝説よ！その力合わせ新たな伝説となれ！融合召喚！来い、青眼ブルーアイズ・ツインバースト・ドラゴンの爆裂双龍！！」

2体のブルーアイズが融合の渦の中に入り、中から首が2つになったブルーアイズが姿を現した。

ブルーアイズ・ツインバースト・ドラゴン  
青眼の爆裂双龍 ATK 3000

「さあバトルだ！いけ、ツインバースト・ドラゴン！ミドラーシユを攻撃しろ！！」

「速攻魔法、皆既日蝕の書。フィールドの全てのモンスターを、裏守備表示にする」

「なにい!？」

「裏守備じゃあツインバーストの2回攻撃も意味ねえ！」

ユーハのフィールドに不思議な書物が現れ、それによりフィールドのモンスターは一気に姿を隠し、裏守備表示に変わった。

「くっそー…カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「このエンドフェイズ、皆既日蝕の書の効果で、相手フィールドのモンスターは全て表側守備表示になり、さらに表側守備表示になったモンスターの数だけ、相手はドローできる」

「こいつがあるからまだマシだな…オレは2枚だ」

「あたしは1枚」

S R バンブー・ホース DEF 1100

S R 三つ目のダイス DEF 1500

ブルーアイズ・ツインバースト・ドラゴン  
青眼の爆裂双龍 DEF 2500

白 手札4 (ブルーアイズ・カオス・MAX・ドラゴン) LP 4  
000

モンスター 青眼の爆裂双龍×1 (守)

魔法・罨 セットカード×1

「それじゃあボクのターン、ドロロー。反転召喚、シャドール・ファルコン。そしてシャドール・ファルコンのリバース効果。墓地のシャドール・ビーストをセットするよ」

「リバース効果…」

「…よく見たら他のヤツにもついてるみたいだな…」

シャドール・ファルコン ATK 600

シャドール・ファルコンの隣にカードが裏側で現れる。…そしてユーハはもう1枚、カードを発動する。

「そして手札から、スケール7のサアシャドール・ドレイクをセツティング」

光の柱が現れ、その中に細長い紫のドラゴンが現れる。そして下には7の数字が浮かぶ。

「そしてサアシャドール・ドレイクのペンデュラム効果。サアシャドール・ドレイクはペンデュラムゾーンにある場合、1ターンに1度、フィールドのモンスター1体を、表側守備表示にする。ボクは自分のセットモンスター、シャドール・ビーストを表側守備表示に」

サアシャドール・ドレイク 魔法使い族・効果／リバース／ペンデュラム 星6 闇属性 ATK 1900 DEF 1000

【Pスケール：赤7／青7】

「サアシャドール・ワイバーン」のP効果は、1ターンに1度しか使用できない。

このカードがPゾーンにある限り、自分は「シャドール」モンスターしかP召喚できない。

①1ターンに1度、フィールドのモンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターを表側守備表示にする。この効果は、相手ターンにも発動できる。

【モンスター効果】

「サアシャドール・ドレイク」の①の効果は、1ターンに1度しか使用できない。

①このカードがリバースした場合、自分フィールドの「シャドール」モンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターの攻撃力・守備力を、このターンの終わりまで1000ポイントアップさせる。

②このカードがカードの効果で墓地へ送られた場合、発動できる。このカードを自分の空いているPゾーンに置く。

光の柱から風が吹き、裏側のカードが露わになる。それは紫の獣、シャドール・ビーストだ。

シャドール・ビースト DEF 1700

「シャドール・ビーストのリバース効果。カードを2枚ドロウしてその後、1枚を墓地へ送る。というわけで2枚ドロウして…うん。シャドール・ドラゴンを墓地へ送り、シャドール・ドラゴンのモンスター効果。このカードが墓地へ送られたら、フィールドの魔法か罠1枚を破壊する。そうだね…ちよつと悩むな…よし、決めた。そっちのドラゴン使いの君のセットカード、破壊させてもらおうかな」  
「げ、ミラーフォースが…」

半透明の紫のドラゴンが放つブレス攻撃が、白のセットカードを容赦なく破壊する。破壊されたのは攻撃反応系の中でも有名な1枚、聖なるバリアーミラーフォースだ。

「そして、レベル5のシャドール・ビーストに、レベル2のシャドール・ファルコンをチューニング、シンクロ召喚！レベル7、アーカナイト・マジシャン！このカードがシンクロ召喚に成功したとき、このカード自身に魔力カウンターを2つ乗せ、その数だけ攻撃力を1000ポイントアップさせるよ」

アーカナイト・マジシャン DEF 2400 MC 0↓2

…隼とユートとのデュエルのとくと同じ形でアーカナイト・マジシャンが現れる。魔力カウンターはもちろん2つ、そして破壊するのは…。

「アーカナイト・マジシャンの効果。魔力カウンター1つを取り除くことで、相手のカード1枚を破壊する。2つ使って、そっちの青眼の双爆裂竜と、君のセットカードを破壊させてもらう」

「!ブルーアイズ!!」

「!ちつ、ダイスロール・バトルが…」

アーカナイトから放たれた光弾は容赦なく2人のフィールドのカードを破壊した。ツインバースト・ドラゴンには戦闘破壊耐性があるかなり強力なモンスター。だが効果破壊に対しては無力である。

「それじゃあ行こうか。えーつと…ボクのペンデュラムゾーンには、スケール1のホドシャドール・キューブ、そしてスケール7のサアシャドール・ドレイク。……えーつと…えーつと」

「…?何してるんだあいつ」

「…多分、ペンデュラム召喚しようとしてるんじゃないのか?」

「…うん……間違ってるよな。…それじゃあ1と7だから、レベルが2から6のモンスターがペンデュラム召喚できる。そしてホドシャドール・キューブとサアシャドール・ドレイクがペンデュラムゾーンにある限り、ボクはシャドールしかペンデュラム召喚できない。そしてホドシャドール・キューブのもう一つの効果により、もう片方のペンデュラムゾーンにシャドールがあることで、裏側守備表示でペンデュラム召喚を行える」

「んな?!」

「リバース効果持ち全部裏側で一編に出せるってことか?!」

ホドシャドール・キューブ 魔法使い族・効果/リバース/ペンデュラム 星3 闇属性 ATK 1000 DEF 1000

【Pスケール：赤1/青1】

このカードがPゾーンにある限り、自分は「シャドール」モンスターしかP召喚できない。

①自分のもう片方のPゾーンに「シャドール」Pモンスターが置かれている場合、自分がP召喚を行う場合、表側表示でP召喚する代わりに裏側守備表示でP召喚することができる。

【モンスター効果】

「ホドシャドール・キューブ」の①の効果は、1ターンに1度しか使用できない。



①このカードがリバーパスした場合、自分の墓地の「シャドール」モンスター2枚までを対象に発動できる。そのカードをデッキに戻す。  
②このカードが破壊される場合、発動できる。このカードを自分の空いているPゾーンに置く。

「というわけで、手札からペンデュラム召喚つと。1体だよ」

柱の間に現れた穴からは、黒い光が1つ降りてきた。本来なら属性に応じた色が出てくるのだが、黒はどれにも当てはまらない。裏側だからそうなっているのだろうか。

「そして手札からチューナー・モンスター、ヨコチユナ横綱犬を召喚。ヨコチユナ横綱犬は召喚に成功したとき、墓地のチューナーを1体、効果を無効にして特殊召喚できる。ということと墓地からシャドール・ファルコンを特殊召喚するよ」

ヨコチユナ横綱犬 ATK 800

シャドール・ファルコン DEF 1400

ユーハが召喚したのは……今まで出してきたモンスターとはまったく違い、化粧まわしをつけた犬、それも土佐犬と思われる犬だ。

「…犬?」

ヨコチユナ横綱犬つて…あれ使い方考えないと使いづらいんだよな」

「それじゃあレベル7のアーカナイト・マジシャンに、レベル1のヨコチユナ横綱犬をチューニング。シンクロ召喚!レベル8、スクラップ・ドラゴン!」

「げっ!スクドラだとお?!」

ヨコチユナ横綱犬が四股を踏み1つの歯車になり、その中にアーカナイト・マジシャンが入り、7つの星になり直列になる。歯車から光が放たれ、現れたのは廃材でできたドラゴン。脆そうな見た目だが、その目からは力強い光が放たれ、排気パイプから出される蒸気も力強い。そしてスクラップ・ドラゴンと言えは…。

スクラップ・ドラゴン ATK 2800

「お前あのボロそうなドラゴンのこと知ってるのか?」

「知ってるも何も、あいつはトップス連中があんな見た目でもよく使

う厄介なモンスターなんだ！」

「トップス？」

「とりあえずスクラップ・ドラゴンの効果。このカードは自分と相手フィールドのカードを1枚ずつ、破壊する。ボクが破壊するのはホドシャドール・キューブ、そしてそっちの君のフィールドの、SR三つ目のダイスを破壊」

スクラップ・ドラゴンの近くに廃材が浮かび、それが1つの塊に集まる。そして蒸気がより強く噴射。その蒸気がホドシャドール・キューブを破壊すると、廃材の塊が発射され、三つ目のダイスに直撃して粉々に碎き破壊した。

「ちっ、ダメージ狙いか…」

「まあそうだねー。ということで反転召喚、エルシャドール・ミドラーシュ」

エルシャドール・ミドラーシュ ATK 2200

ミドラーシュが再び表側になったことで、また特殊召喚に制限がかかった。ユーハの使うシャドールデッキはこのように展開することが多いため、ミドラーシュの扱いについては実は困っていたりする。「それじゃあバトル。スクラップ・ドラゴンで、バンブーホースを攻撃」

「ぐっ…ぐあー！」

ユーゴ LP 4000↓2300

スクラップ・ドラゴンから放たれた容赦ない蒸気のブレスがバンブー・ホースをあつさりとは吹き飛ばし、ユーゴにダメージを与える。そして

「ミドラーシュで、ドラゴン使いの君にダイレクトアタック」

「ちよつと待ったー！手札のSRメンコートの効果！相手のダイレクトアタック宣言時、手札からこいつを特殊召喚し、相手フィールドのモンスターを全て、表側守備表示にする！」

勢いよくユーゴのフィールドに巨大な薄い機械の板が飛んできて強風を起こしながら着地、同時にユーハのフィールドにいたモンスター全てを守備表示にしまった。

エルシャドール・ミドラーシユ ATK 2200 ↓ DEF 800

スクラップ・ドラゴン ATK 2800 ↓ DEF 2000  
SRメンコート ATK 1000

「…ちえー。しょうがない。スケール3のイトウシャドール・サラマ  
ンダーをセツテイニング。ターンエンド」

ユーハ 手札1 LP 4000

モンスター エルシャドール・ミドラーシユ×1(守)、シャドール・  
ファルコン×1(守)、スクラップ・ドラゴン×1(守)、セツトモン  
スター×1

魔法・罫 なし

Pゾーン サアシャドール・ドレイク(7) イトウシャドール・サ  
ラマンダー(3)

再び光の柱が現れ、その中に紫色の炎を纏った手の生えた海竜……  
そう、チエインと言えれば分かるだろうか。そのモンスターとよく似た  
モンスターが昇ってきた。

「よっしやー！ミドリだかクロだか知らねーが、こっからが本番だ！  
オレのターン、ドロー！オレは手札からチューナーモンスター、SR  
電々大公を召喚！」

SR電々大公 ATK 1000

ユーゴが召喚したのは、稲妻の意匠が所々にある貴族のような恰好  
をしたモンスター。手には大きなでんでん太鼓を持っている。

「オレはレベル4のSRメンコートに、レベル3のSR電々大公を  
チューニング！その美しくも雄々しき翼翻し、光の速さで敵を討て！  
シンクロ召喚！現れる、レベル7！クリアウイング・シンクロ・ドラ  
ゴン！」

電々大公が3つの歯車になり、その中にメンコートが入り、4つの  
星になる。歯車から光が放たれ、中からクリアウイング・シンクロ・  
ドラゴンが現れる。

クリアウイング・シンクロ・ドラゴン ATK 2500

「バトルだ！クリアウイング・シンクロ・ドラゴンで、エルシャドール・

ミドラーシユを攻撃!!旋風のヘルダイブ・スラツシャー!」

「うーん…やーだ。サアシャドール・ドレイクの効果。クリアウイング・シンクロ・ドラゴンを守備表示にする。あ、これ相手ターンでも使えるんだよねー」

「へっ、それがどうした!クリアウイング・シンクロ・ドラゴンの効果!レベル5以上のモンスターを対象にしたモンスター効果を、無効にする!ダイクロイツクミラー……あれ?」

クリアウイング・シンクロ・ドラゴン ATK 2500 ↓ DEF 2000

クリアウイングのモンスター効果の発動を宣言したが、ペンデュラムゾーンにあるペンデュラムモンスターはモンスターではなく魔法として扱われるため、ペンデュラム効果も魔法カードの効果。対象を取る効果でもモンスター効果でなければ無効にできないクリアウイングでは、止められるわけもなく守備表示になった。

「へ?なんで?なんでクリアウイングの効果が発動しないんだ?」

「確かペンデュラムモンスターは、ペンデュラムゾーンにあればモンスターじゃなくて魔法として扱われるから、効果も魔法の効果。そいつの効果、無効にできるのモンスター効果だろ?魔法は無効にできない」

「…あ…あーマジかよウソだろおい…カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「あ、じゃあそのエンドフェイズ、イトウシャドール・サラマンダーの効果。1ターンに1度、自分フィールドのモンスター1体を裏守備にする。こつちも相手ターンに発動できるからね。まあこの効果で、シャドール・ファルコンを裏守備表示に」

イトウシャドール・サラマンダー 魔法使い族・効果/リバーズ/ペンデュラム 星4 闇属性 ATK 1100 DEF 600

【Pスケール：赤3/青3】

このカードがPゾーンにある限り、自分は「シャドール」モンスターしかP召喚できない。

①1ターンに1度、自分フィールドのモンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターを裏側守備表示にする。この効果は、相手ターンにも発動できる。

【モンスター効果】

「マロシャドール・サンダーバード」の①の効果は、1ターンに1度しか使用できない。

①このカードがリバースした場合、発動できる。自分のデッキの上からカードを3枚捲り、相手はその中にある「シャドール」カード1枚を選び、その1枚を墓地へ送り、残りをデッキの一番下に戻す。

②このカードがカードの効果で墓地へ送られた場合、発動できる。このカードを自分の空いているPゾーンに置く。

ユーゴ 手札2 LP 2300

モンスター クリアウイング・シンクロ・ドラゴン×1 (守)

魔法・罫 セットカード×1

「あたしのターン、ドロロー……(サアシャドール・ドレイクの効果で、攻撃しても守備表示にされて防がれる。…だがこの状況、好都合だ!) ユーゴ、あんたのおかげでいける!」

「え?」

「手札から儀式魔法、カオス・フォームを発動!こいつは手札かフィールドのモンスターをリリース、もしくは青<sup>ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン</sup>眼の白龍かブラック・

マジシャンを墓地から除外して、同じレベルのカオスと名のつく儀式モンスターを、儀式召喚する!墓地のレベル8、青<sup>ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン</sup>眼の白龍を除

外して、儀式を執り行う!白き力、黒き力と交わり極限までその力を高めよ!儀式召喚!ブルーアイズ・カオス・MAX・ドラゴン!!」

ブルーアイズ・カオス・MAX・ドラゴン ATK 4000

フィールドが渦を巻くようにドームで覆われ、その渦に合わせるよう5つの機械が伸び、その先端にエネルギーが集約され、それが黒いモヤとなって集まる。そしてモヤが先端部分も含め大きく広がると、それが一気に晴れる。モヤが晴れた後にいたのは…1体のドラゴン。<sup>ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン</sup>青眼の白龍にも似ているが、それよりもさらに大きく、かつ機械

的な感じもする。

「…え!?こ、この効果は…」

「へっ、見たな? だけど念のため教えておくが、こいつは相手のカード効果の対象にならず、効果破壊もされない。そして何より…守備モンスターを攻撃したら、2倍の貫通ダメージを相手に与える!」

「そんな…ボクのどのモンスターに攻撃されても、ボクのライフは残らないじゃないか!」

「うおマジかスツゲー!! よーし、やっちまえ!!」

「もちろん! バトルだ! ブルーアイズ・カオス・MAX・ドラゴン!! エルシャドール・ミドラーシュを、あいつごと焼き尽くせ!! 混沌のマキシマム・バースト!!」

カオス・MAX・ドラゴンの全身が光りだし、その口に膨大なまでの白と黒のエネルギーが溜められ、そして一気に灰色の光線が叩き込まれる。…だが。

「…なーんてね。ねえ、拾ったカードって普通に使って、大丈夫なんだよね。…つまり、これもいいんだよね?」

「げ! そんなところにアクションカード…」

「んな?! 拾ったカード使うとかありかよ?!」

ユーハはしやがむと…足を退け、踏んでいたカードを拾った。…どうやらデュエル開始前に確認したようだ。

「というわけで…:…ん? 何これ、トラップなんてあるの?…えーつと何々…火山乱弾、自分フィールドのカード全てを破壊し、破壊したカードの数×300ポイントのダメージを、プレイヤーは受ける…え?!」

「…なんだアクショントラップかよ」

「え?…なんだどうした?」

#### 火山乱弾 アクション罠

①自分フィールドにカードが存在する場合、発動する。自分フィールドのカード全てを破壊し、破壊したカードの数×300ポイントのダメージを自分が受ける。

：アクションカードには、フィールドにもよるがトラップもある。そのトラップは大体が自分にデメリットしかないであろう効果のみ。そしてこの火山乱弾は…上空から火山弾がいくつも降ってきて、そのうちいくつかがユーハのモンスターとペンデュラムゾーンにいるモンスターに直撃する。ミドラーシユのみなんとか避けているが…。

「うわああああ!!熱い熱い熱いって!」

ユーハ LP 4000↓2500

合計5枚は破壊され、1500のダメージと熱によるダメージを受ける。

「へっ、数が減ったけど攻撃対象……ん?」

エルシャドール・ミドラーシユ DEF 800 ↓ ATK 200

…そしてなぜかミドラーシユが、攻撃表示になっている。その理由は…。

「ラツキーなのかアンラツキーなのか…破壊されたモンスターに最初のターンにも墓地へ送られていたシャドール・ハウンドがいてね…シャドール・ハウンドが墓地へ送られたら、フィールドのモンスター1体の表示形式を、変更するって効果なんだ。…カオス・MAXの2倍貫通は、あくまで守備表示のモンスターを攻撃したら。…攻撃表示なら、ダメージは減るよね」

「でも虫の息にはできるな…というわけで、混沌のマキシマム・バースト!!」

「うわああああ!!」

ユーハ LP 2500↓700

容赦ないマキシマムバーストがミドラーシユを直撃、あつという間に破壊されユーハのライフは虫の息。

「くっ…破壊されたミドラーシユの効果で、墓地のエルシャドール・フュージョン神の写し身との接触を手札に」

「後少し…カードを1枚伏せて、ターンエンド!」

白 手札2 LP 4000

モンスター ブルーアイズ・カオス・MAX・ドラゴン×1（攻）  
魔法・罠 セットカード×1

「…ククク」

「…ん？どうした？」

「へっ、とつとどドローしやがれ！そんなでもって、オレ達がお前をブツ倒してやらあ！」

「…クククク…アハ、アツハハハハハハハ!!アハ、アハハハハハハハハ!!ああ楽しい、楽しい楽しい楽しい楽しい！楽しいなあ！」

「…え？」

「な、なんだこいつ？こ、壊れたか？」

「レジスタンスの2人とのデュエルも楽しかったけどさ、ここまで、それも自滅に近い形で追い詰められるなんて滅多にないしさあ。いいね面白くなってきたよ。…さあ、もつとボクを楽しませて！もつともつともつともつと！ボクの、ターン!!」

勢いよくカードを引くユーハ。その表情は…まさに、狂気を宿した凶悪な笑顔。豹変した様子にユーゴと白はどちらもドン引きしつつ恐怖を感じる。

「ボクはマジックカード、貪欲な壺を発動！墓地のミドラーシユ、スクラップ・ドラゴン、シャドール・ハウンド、シャドール・ビースト、シャドール・ヘッジホッグをデッキに戻し、2枚ドロオー!!…いいねえいいねえ。ボクは手札からフィールド魔法、影牢の呪縛を発動！」

ユーハがフィールド魔法を発動すると…：…ユーハの影がドンドン広がっていき…最終的にはユーゴ、白の影も飲み込み、巨大な影の円になった。

「な、なんだこのフィールド魔法…」

「それはこれからのお楽しみ。魔法カード、シャドール・フュージョン影依融合を発動！このカードは手札とフィールドのモンスターを素材に、シャドール融合モンスターを融合召喚する。そして相手フィールドにエクストラデッキから特殊召喚されたモンスターがいる場合、代わりにデッキから融合素材を墓地へ送れる」



「なんだと?!」

「デツキから融合素材を墓地へ?!」

「ボクはデツキから、シャドール・リザードとシャドール・ヘッジホッグ、そしてシャドール・ドラゴンを融合！影に蠢く古に眠りし魂よ、獣と蜥蜴と竜合わさり混ざり合い、1つとなりて、その命を刈り取れ！融合召喚！さあ現れる!!死の救世主、エルシャドール・マウエツタメシア!!」

影の渦に3体のモンスターが入り…渦から影が伸びる。そして影が形になり、そのまま色がつき、実体になる。…それはそう…北斗の使うセイクリッド・プレアデスの体に、トレミスの頭と翼、尻尾をつけた異様な、全体的に黒いモンスターが現れる。そして手には、鎌のようなものを持っている。

エルシャドール・マウエツタメシア DEF 2200

「な、なんだこりゃ…」

「…しゅ、守備?」

「うん。マウエツタメシアの攻撃力は、墓地にあるシャドールモンスターの数だけ、300ポイントアップする。ボクの墓地にはさつき墓地へ送った3体、シャドール・ファルコン、シャドール・ハウンドがいるから900なんだ」

エルシャドール・マウエツタメシア(守備表示) ATK ?↓60

0

「それと影牢の呪縛は、シャドールモンスターが効果で墓地へ送られる度に、1体につき1つ、魔石カウンターを乗せる。今墓地へ送られたのは3枚だから3つ乗せる」

影牢の呪縛 魔石カウンター 0↓3

「そして、墓地へ送ったシャドール・リザード、シャドール・ヘッジホッグ、シャドール・ドラゴンの効果。シャドール・リザードは効果で墓地へ送られたら、デツキからシャドールカード1枚を墓地へ送る。ということヘッジホッグの効果でデツキからシャドール・ファルコンを手札に加え、シャドール・リザードの効果でシャドール・ビーストを墓地へ送り、効果!デツキからカードを1枚ドロロー!シャドール・

ドラゴンの効果で、そっちのシンクロ使いの君のセットカードを破壊  
！」

「トラップ発動！リサイコロ！こいつは墓地のスピードロイドの  
チューナー1体を、効果を無効にして特殊召喚する！こい、電々大公  
！そしてサイコロを振り、特殊召喚したモンスターレベルを、サイ  
コロの目と同じにする！」

電々大公 DEF 1000

影牢の呪縛 魔石カウンター 3↓4

「行くぜ、ダイスロール!!」

フィールドに巨大なダイスが現れそれが落下し、転がる。…そし  
て、回転が停止し、出た目が光る。

「出たのは4、よって電々大公のレベルを4に変更！」

電々大公 星3↓4

「なら速攻魔法、神の写し身との接触を発動！そしてここで、影牢の呪  
縛の効果！このカードに乗っている魔石カウンターを1つ取り除く  
ことで、相手フィールドのモンスターも融合素材にできる！」

「なんだと?!」

「自分も?!」

「ボクは、シャドール・ヘッジホッグの効果で手札に加えたシャドー  
ル・ファルコンと、君のフィールドのクリアウイング・シンクロ・ド  
ラゴンを融合！」

「！クリアウイング!!」

影牢の呪縛 魔石カウンター 4↓1

足元に広がっていた影から手のようなものがクリアウイングに向  
かって伸びる。抵抗するクリアウイングだが、手は1つ、2つ、3つ  
とドンドン増えていき…最後は全体を飲み込まれ、クリアウイングは  
影へと沈んだ。

「大いなる使徒の力により、影に蠢く古に眠りし鳥の魂よ、透明な翼持  
つ竜と交わり1つとなり、影より風の僕たる精霊を呼び出せ！融合召  
喚！さあ現れる、エルシャドール・ウエンディゴ！」

影牢の呪縛 魔石カウンター 1↓2

エルシャドール・ウエンディゴ DEF 2600

影の渦より、エルシャドール・ウエンディゴが現れる。：無論、このカードだけで倒せるわけではない。

「融合素材にしたシャドール・ファルコンの効果で、シャドール・ファルコンをセット」

「ちくしょー！オレのクリアウイング返せ！」

「うーん、やだ。マウエツタメシアの効果発動。自分フィールドのシャドール1体を墓地へ送り、ボクの墓地の融合モンスター以外のシャドール1体を、攻撃表示か裏守備表示で特殊召喚する。ウエンディゴを墓地へ送り、シャドール・ビーストを攻撃表示で特殊召喚」

エルシャドール・マウエツタメシア 戦士族・効果／融合 星8

光属性 ATK ? DEF 2200

「シャドール」モンスター×3

①このカードの攻撃力は、自分の墓地の「シャドール」モンスターの数×300ポイントアップする。

②1ターンに1度、自分フィールドの「シャドール」モンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターを墓地へ送り、自分の墓地から融合モンスター以外の「シャドール」モンスター1体を、自分フィールドに表側攻撃表示か裏側守備表示で特殊召喚する。

③このカードが、このカードの効果以外で墓地へ送られた場合、自分の墓地の「シャドール」カード1枚を対象に発動できる。そのカードを手札に加える。

影牢の呪縛 魔石カウンター 2↓3

シャドール・ビースト ATK 2200

「そしてウエンディゴの効果。墓地から神の写し身との接触を手札に加える」

「またそれかよ…」

「げ、あたしのカオスMAXも融合素材にするつもりかよ…」

「うん。それじゃあバトル。シャドール・ビーストで、電々大公を攻

撃」

「くっ…」

シャドール・ビーストが電々大公を引き裂き、容易く破壊される。…速攻魔法であるエルシャドール・フュージョン、そして専用のフィールド魔法である影牢の呪縛。この存在を考えると、状況はユーゴと白にとつて圧倒的に不利だ。

「ということ、カードを3枚伏せてターンエンド」

ユーハ 手札1 LP 700

モンスター エルシャドール・マウエツタメシア×1（守）、シャドール・ビースト×1（攻）、セットモンスター×1

魔法・罫 フィールド魔法「影牢の呪縛」×1 魔石カウンター×3、セットカード×3

「だーもうやるしかねえ！オレのターン、ドロロー！」

「この瞬間に速攻魔法、エルシャドール・フュージョン神の写し身との接触を発動！フィールドのシャドール・ビーストと、影牢の呪縛に乗っているカウンター3つを取り除き、カオスMAXドラゴンを融合！」

「だー！カオスMAXがっ！」

影牢の呪縛 魔石カウンター 3↓0

カオスMAXには対象にならず、効果破壊されないという強力な対性を持つ。…だが、その耐性があつたとしても、対象にせず、効果破壊もしない融合の前では無力だ。

「1回やったから省略して、融合召喚！エルシャドール・ミドラーシュ！」

エルシャドール・ミドラーシュ ATK 2200

影牢の呪縛 魔石カウンター 0↓1

影の渦からまたしても現れたミドラーシュ。その姿に白は苛立ちを隠せず、ユーゴは…ドローカードを見て笑みを浮かべる。

「それとシャドール・ビーストの効果で1枚ドローするよー」

「あたしのカオスMAXまで奪いやがってっ！」

「へっ、だったらこいつだ！速攻魔法、禁じられた聖杯！こいつでミドラーシュの効果は無効にする！」

「あらら」

エルシャドール・ミドラーシユ ATK 2200↓2600

ミドラーシユの上に聖杯が現れて傾き、中身が零れミドラーシユにかかる。これにより、効果が無効になったようだ。

「どんどん行くぜ！墓地の電々大公の効果！こいつを除外し、墓地のSR三つ目のダイスを特殊召喚！」

SR三つ目のダイス DEF 1500

「そしてこいつだ！SRビードルマントを召喚！」

ユーゴが三つ目のダイスの後に呼び出したのは…様々な色をした、マントをつけた4体ほどの丸い丸いダルマだ。そう、ダルマ。

SRビードルマント ATK 400↓300

「…何それ？」

「聞いておどろけ！こいつは召喚に成功したら、除外されてるスピードロイド1体を特殊召喚できる！こい！SR電々大公！」

SRビードルマント 機械族・効果 風属性 星2 ATK 40

0 DEF 100

①このカードが召喚に成功した場合、除外されている「スピードロイド」モンスター1体を対象に発動できる。そのモンスター1体を特殊召喚する。

SR電々大公 DEF 1000

「行くぜ、オレはレベル2のビードルマントに、レベル3の電々大公のダイスをチューニング！双翼抱くきらめくボディ、その翼で天空に跳ね上がれ！シンクロ召喚！来い、レベル5、HSRマツハゴローイター！」

三つ目のダイスが3つの歯車になり、その中にビードルマントが入り、2つの星になる。歯車から光が放たれ、羽子板を模したジェット機が現れる。周囲には羽根突きで使われる羽根を元にした小機が飛んでいる。

HSRマツハゴローイター DEF 1000

「…シンクロ召喚したはいいけど、守備表示…いいや、さらなるシンクロ、かな」

「もちろんだ！オレはレベル5のマツハゴ―イータに、レベル3の電々大公をチューニング！神聖なる光蓄えし翼煌めかせ、その輝きで敵を討て！シンクロ召喚！突き抜け！レベル8！クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン!!」

電々大公が3つの歯車になり、その中にマツハゴ―イータが入り、5つの星が変わる。歯車から光が放たれ、1体のモンスターが飛び出す。それは、水晶の装甲を纏ったクリアウイング。体の様相こそ大きく変わっているが、面影は大きく残っている。

クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン ATK 3000 ↓2900

「行くぜ、バトルだ！クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン！あのウゼエミドラーシュを攻撃！烈風のクリスタロス・エツジ!!」

「よっしやー！いけユーゴ!!」

クリスタルウイングが大きく上昇し、翼に光が集まる。

「クリスタルウイングが特殊召喚されたモンスターと戦闘を行う場合、そのモンスターの攻撃力を、クリスタルウイングに加える!!」

クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン ATK 2900 ↓5500

「すごいねそのモンスター！まあ通したくないな…：トラップ発動。落ち影の蠢き。デッキからサアシャドル・ドレイクを墓地へ送り、セットモンスター、シャドル・ファルコンを表側守備表示に変更し、クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴンを裏守備表示に！」

「げー」

シャドル・ファルコン DEF 1400

影牢の呪縛 魔石カウンター 1 ↓2

足元の影から腕が伸び、急降下してきていたクリスタルウイングを拘束し地面に叩き落とす。そして裏守備表示へと強制的に変えた。

「サアシャドル・ドレイクの効果でこのカードをペンデュラムゾーンに置き、シャドル・ファルコンの効果で墓地のシャドル・ビー

ストをセット」

「だくもううぜー!!墓地のバンブー・ホースの効果!除外してデッキから、SR三つ目のダイスを墓地へ!これでターンエンド!」

エルシャドール・ミドラーシュ ATK 2600↓2200

ユーゴ 手札1 LP 2300

モンスター セットモンスター×1

魔法・罫 なし

「あたしのターン、ドロロー…行くぜ、手札からエクリプス・ワイバーンを召喚!」

エクリプス・ワイバーン ATK 1700↓1500

現れたのは、半身が白、もう半身が赤い模様がある黒のドラゴン。黒のほうは模様が赤く光り、禍々しい。

「それから?」

「へっ、行くぜ。手札から魔法カード、おろかな埋葬を発動!デッキから青き眼の祭司を墓地へ送って、青き眼の祭司の効果発動!墓地のこいつをデッキに戻し、自分フィールドの効果モンスター1体を墓地へ送り、墓地のブルーアイズ1体を特殊召喚する!エクリプス・ワイバーンを墓地へ送り、墓地の青眼の双爆裂龍を特殊召喚!」

青眼の双爆裂龍 ATK 300↓2900

エクリプス・ワイバーンが消え、影の地面から光が溢れ、ツインバーストが地面ごと影を突き破って現れる。

「また来ちゃったか」

「へっ、これだけだと思ったら大間違い!墓地へ送ったエクリプス・ワイバーンの効果!こいつが墓地へ送られたら、デッキから闇属性か光属性でレベル8以上のドラゴン族1体を除外する!ディープアイズ・ホワイト・ドラゴンを除外!さあバトルだ!ツインバーストで、ミドラーシュを攻撃!!」

「サアシャドール・ドレイクの効果!セットモンスター、シャドール・ビーストを表側守備表示にし、効果!2枚ドロローして、1枚を墓地へ」

シャドール・ビースト DEF 1200

墓地へ送ったカード

## 超電磁タートル

「げ、そいつってことは」

「うん。超電磁タートルの効果。墓地から除外して、バトルフェイズを終わらせるよ」

機械の亀が現れ、ツインバーストが放った2つの光線をあつさり防ぎきってしまう。

「だーくツソー！ターニンエンドー！」

白 手札1 LP 4000

モンスター ブルーアイズ・ツインバースト・ドラゴン 青眼の双爆裂龍×1 (攻)

魔法・罠 なし

「大ピンチだけどやっぱり楽しいなあ…ということとでボクのターン、ドロロー！…リバーズカードオープン。闇霊術―「欲」。自分フィールドの闇属性モンスター1体をリリースして、デッキからカードを2枚ドロローする。もつとも、相手は手札の魔法を見せることでこれ無効にできるけど…どうする？ちなみにリリースするのは、シャドル・ビーストだよ」

「だったらオレは、手札のスピードリフトを見せて、そいつを無効だ！」

「OK、じゃあシャドル・ビーストの効果で1枚ドロロー。…うーん、このタイミングか…まあいいか。手札からスケール1のイエシヤドール―セフィラナーガをセッティング」

影牢の呪縛 魔石カウンター 1↓2

光の柱が現れ、その中に黒と赤の下半身、腰とその上は白く胸には黄色く縁取られた黒い装甲がつき、それには鏡のようなものもついている。そして、禍々しさも感じるその体の中では翼は異様で、あり、清らかな白い光を放っている。

「スケール1ってことはあれか？レベル2から6が行けるってことか？」

「ペンデュラムってエクストラデッキからも呼べるからね…ということとで、ペンデュラム召喚。エクストラデッキからレベル6、サアシャドール・ドレイク」



サアシャドール・ドレイク DEF 1000

再び現れたペンデュラムの穴からは、紫色の光が飛び出してきて、サアシャドール・ドレイクへと変化した。

「へっ、確かにペンデュラムは怖いけど、裏守備じゃなけりやそうでもねえし、てめえは特殊召喚を1回したからもう特殊召喚はできねえぜ！」

「いや、まだなんかありそうだな」

「うん、正解かな。ボクは、エルシャドール・ミドラーシユとサアシャドール・ドレイクをリリース！その名を奪い支配せよ、アドバンス召喚！The suppression PLUTO！」

影牢の呪縛 魔石カウンター 2↓3

The suppression PLUTO ATK 2600

ユーハが呼び出したのは…まさしく悪魔、そう呼べるモンスター。不気味な角を持つ白い頭、強靱な爪、尻尾、そして鋭利な先端を持つ触手。

「中々面白そうだから借りたけど、このタイミングに来てよかったほうかな。The suppression PLUTOのモンスター効果。カード名を1つ宣言し、そのカードが相手の手札にあれば、相手フィールドの好きなカード1枚をボクの手元における。スピードリフトを選択」

「げ！あんときのはそういうことかよ…」

「ちっ、見せなくても3枚ドロ、見せても1枚ドロとコントロールを奪えるって算段か」

「結果的にそうなったね。君さつき見せたよね、スピードリフト。ということ奪わせてもらうよ、クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴン」

「くっそ〜！オレのクリスタルウィング返せ!!」

ユーゴの手札、スピードリフトが確認され、The suppression PLUTO《ザ・サプレッション・プルト》の触手がセット状態のクリスタルウィングに突き刺さる。…表側ならクリスタルウィングの効果で無効にできる。だが効果を発動できない裏

守備なら…余裕だ。

「それじゃあ反転召喚、クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴン」

クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴン ATK 3000

裏側から表側になったクリスタルウィングの体は少し黒ずんでおり、美しいと言えた先ほどの状態とは一変している。

「くっそー、クリスタルウィングが…」

「これってかなりヤバイだろ!？」

「マウエツタメシアの効果発動。シャドール・ファルコンを墓地へ送り、墓地のミドラーシュを表側攻撃表示で特殊召喚!」

「またかよしつけーよ!!」

「これで3回目の登場かよ…」

しつこいようだがミドラーシュ3回目。…心なしか少し疲れたような表情をしているのは、気のせいだろうか…。

エルシャドール・ミドラーシュ ATK 2200

「便利で不便だからね。バトル!クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴンで、ブルーアイズ・カオスMAX・ドラゴンを攻撃!烈風のクリスタロス・エツジ!そしてクリスタルウィングの効果で、ツインバーストの攻撃力がクリスタルウィングに加算される!」

「げっ!アクションカード…ってなんで影が絡みつくんだよ!!」

「え?…うおマジか!動かせねえ!」

クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴン ATK 3000↓6000

ユーゴのD・ホイールと白の足に影が絡みつき、動きを封じる。別に引きずり込むとかそういうことはない。

「そのドラゴンは光属性…オネストあるかい?」

「ぐ…のああああ!!」

「あ、ないんだ」

白 LP 4000↓1000

クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴン ATK 6000↓3000

クリスタルウィングの翼によってツインバーストは破壊され…ず、

白は衝撃により思いっきり吹っ飛ぶ。：が、影が逃さない、と言わんばかりに先回りして全身に絡みつき、強制的に元の位置に戻し立たせた。

「：な、なんだよこの影、気持ちわりい：」

「反応良すぎだろおい：」

「うーん、思ったより反応すごいな：あれ、破壊されてない：」

「へっ：ツインバーストは戦闘じゃ破壊されねえ。攻撃したら発動する効果もあるけど、攻撃してねえから使えねえ」

「へー：じゃあ、プルートとミドラーシュで、そっちのバイク乗りの君に、ダイレクトアタック」

「ーげ、や、やべえ：」

ミドラーシュの杖に、プルートの両手の間に黒いエネルギーが集まり、球体状になって白に目掛け放たれた。：が、その瞬間

「乱入ペナルティ、2000ポイント」

「へ？」

唐突に、機械音声が流れる。：乱入ペナルティ、それは今回のサバイバルルールにおいて課せられる制限。後から入れば有利なのは後の場合もある。そのため、一気にライフを半分にするというものだ。そして乱入者は：。

幹樹 LP 4000↓2000

「悪いが邪魔させてもらうぜ。アクショントラップ、一時停戦！フィールドの全てのモンスターを守備表示にする！」

一時停戦 アクション罠

①フィールドにモンスターが存在する場合、発動する。フィールドの表側攻撃憑依のモンスター全てを表側守備表示にする。

クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴン ATK 3000 ↓

DEF 2500

エルシャドール・ミドラーシュ ATK 2200 ↓ DEF

800

The suppressions PLUTO ATK 2600  
↓ DEF 2000

：放たれていた黒い球体は、2体の表示形式が変化してコントロールが乱れたせいか消え、ダメージはなくなった。

「あんたは確か…」

「青衣幹樹。3回戦開始前にあったな、確か名前は…南雲白。でももう1人誰だ?」

「へっ、オレはユーゴだ」

「融合?」

「ユーゴだっけって言ってんだろ!!」

唐突に現れたのは藍色の髪の人物、青衣幹樹。海野占い塾所属のデューエリストだ。

「…ねえ、君何?いきなり横入りして」

「だから悪いって言ったろ?邪魔するって。ホントならもっと早いほうがよかっただろうが、まあいいか。こっちだって簡単に戦力減らされるわけにはいかないんでな」

「ちっ…しようがない。ターンエンド」

ユーハ 手札3 LP 700

モンスター エルシャドール・マウエツタメシア×1(守)、  
The suppressions PLUTO×1(守)、セットモン  
スター×1、エルシャドール・ミドラーシユ×1(守)、クリスタル・  
ウイング・シンクロ・ドラゴン×1(守)

魔法・罫 「影牢の呪縛」×1魔石カウンター×3

Pゾーン サアシャドール・ドレイク イエシャドール・セフィラ  
ナーガ

ちなみに乱入したからといって、すぐに乱入者のターンになるわけではない。ある程度は乱入者が決められる。もともと、相手ターン中に乱入が基本のため、乱入したら次のターンには乱入者のターンに、というのがよくあるパターンだ。

「あんたのターンはどうする?」

「あー、そうだな…じゃ、オレのターン、ドロー!…お、ラッキー。速

攻魔法、ツインツイスターを発動！手札1枚をコストに、フィールドの魔法と罫を2枚破壊する！……ということ、フィールド魔法とサアシャドール・ドレイクを破壊だ」

「いきなりか……」

墓地へ送ったカード

儀式魔人リリーサー

幹樹の発動したカードにより、足元に広がっていた影は元に戻り、光の柱にいたサアシャドール・ドレイクが消え、光の柱も消える。

「さて、こうなったからには面倒なのがそのクリスタルウイングってモンスターだ。融合使いばっかっていうアカデミアがシンクロ使うってというのは意外だが」

「あいつは確かにシンクロ使ってたけど、クリスタルウイングはオレのだ！」

「なるほど、奪われたって性質か。じゃ、オレは手札からマンジユゴツドを召喚！」

マンジユゴツド ATK 1400

召喚されたのは体の至る所に無数の手を持つ人型のモンスター。そしてこのカードを召喚した、ということ

「マンジユゴツドの効果。こいつは召喚に成功したとき、デッキから儀式モンスターか儀式魔法を1枚手札に加える」

「うーん……まあ、いいよ」

「じゃデッキからクラウソラスの影<sup>ネクロス</sup>霊衣を手札に加え、たった今手札に加えたクラウソラスの影<sup>ネクロス</sup>霊衣を墓地へ送り効果。デッキから影<sup>ネクロス</sup>霊衣と名のついた魔法か罫を1枚、手札に加える」

「それはちよつと問題だね……クリスタルウイングの効果。このカード以外のモンスター効果を無効にして破壊する。ということ、そのカードの効果、無効にさせてもらうよ」

そういうと、クリスタルウイングの翼が強い光を放ち、クラウソラスの影<sup>ネクロス</sup>霊衣の効果を無力化する。……攻撃力をあげる効果も発動するが、守備表示のため、その効果は意味をなさない。そして……

「そうくるか。だが、想定内。オレは手札から儀式魔法、影<sup>ネクロス</sup>霊衣の降魔

鏡を発動！こいつは手札とフィールドから影霊衣ネクロスの儀式モンスター1体のレベルと同じになるようリリースし、儀式召喚を行う！そして影霊衣ネクロスの術士シュリットは、影霊衣ネクロスの儀式モンスターを儀式召喚する場合、こいつでそれ1体分として扱える！」

「へー、そうくるの」

「ああ。シュリットをリリースし、儀式を執り行う！儀式召喚！レベル9、トリシューラの影霊衣ネクロス！」

鏡が現れ、その鏡から青白い光が出てきて、シュリットに纏われる。……そして、強烈な冷気が、フィールドを覆う。…光は鎧へと形を変え。そう、トリシューラを横した、鎧に。

トリシューラの影霊衣ネクロス ATK 2700

「うお!?なんださみい!?!」

「と、トリシューラってマジかよ…」

「え?何?なんか寒いんだけど」

「オリジナルに比べたら全然だ。トリシューラの影霊衣ネクロスの効果と、リリースされたシュリットの効果！トリシューラの影霊衣ネクロスが儀式召喚に成功したら、相手の手札、フィールド、墓地からカードを1枚ずつ除外する！フィールドのミドラーシュ、墓地の影依シャドール・フュージョン融合、そして手札を除外だ！」

「!そんな…」

除外された手札

シャドール・ヘッジホッグ

トリシューラの鎧によって得た膨大な冷気により、ユーハの手札、フィールド、墓地のカードが凍りつき、除外される。

「さ、さみい…」

「確かにマジだな…」

「だろ?そして飛ばしてたシュリットの効果。こいつはカード効果でリリースされたら、デッキから戦士族の影霊衣ネクロスの儀式モンスター1体を手札に加える！デッキからブリューナクの影霊衣ネクロスを手札に！バトルだ！トリシューラの影霊衣ネクロスで、クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴンを攻撃！」

トリシューラの影<sup>ネクロス</sup>霊衣の剣に冷気が集まり、クリスタルウイングに迫り、一気に突き刺す。そしてクリスタルウイングは刺されたところから一気に凍りつき、砕け散った。

「くっそー、わりいクリスタルウイング…」

「ずっと相手のフィールドにいるよりマシだろ？そんなじや次に：ブリューナクの影<sup>ネクロス</sup>霊衣の効果。手札からこいつを墓地へ送ることで、デッキからヴァルキュルスの影<sup>ネクロス</sup>霊衣を手札に加える。これでターンエンドだ」

幹樹 手札1 (ヴァルキュルスの影<sup>ネクロス</sup>霊衣) LP 2000

モンスター マンジユゴッド×1 (攻)、トリシューラの影<sup>ネクロス</sup>霊衣×1 (攻)

魔法・罠 なし

「今まで邪魔されてた分、思いっきりガンガン行かせてもらうぜ！オレのターン、ドロー！大暴れしてやるぜ！オレは墓地のSR電々大公を除外！さあ来い！SR三つ目のダイス！」

SR三つ目のダイス DEF 1400

「うわー、まずいなこれ…」

「イライラの分思いっきりやらせてもらうぜ！オレは手札から速攻魔法、スピードリフトを発動！こいつはオレのフィールドのモンスターがチューナーのみの場合に発動でき、デッキからスピードロイド1体を特殊召喚できる！こい、SRベイゴマックス！」

SRベイゴマックス DEF 600

ユーゴのフィールドに、いくつも連なったベイゴマが現れ、高速で動き始める。

「ベイゴマックスの効果！こいつが召喚、特殊召喚されたら、デッキからスピードロイド1体を手札に加える！SRビーダルマントを手札に加える！そしてビーダルマントを召喚！ビーダルマントの効果で、除外されているSR電々大公を特殊召喚！」

SRビーダルマント ATK 400

SR電々大公 DEF 1000

再び現れたビーダルマントの効果により、電々大公が再び現れる。

「レベル3のベイゴマックスに、レベル3の電々大公をチューニング！十文字の魔剣よ！その力で、全ての敵を引き裂け！シンクロ召喚！さあ来い！レベル6、HSR魔剣ダーマ！」

HSR魔剣ダーマ ATK 2200

電々大公が3つの歯車になり、その中にベイゴマックスが入り、3つの星になる。光が放たれ、魔剣ダーマが現れる。：別に修復跡とかはない。

「魔剣ダーマの効果！墓地の機械族、ベイゴマックスを除外して、500ポイントのダメージだ！」

「くっ…」

ユーハ LP 800↓300

魔剣ダーマが切っ先からエネルギー弾を発射され、ユーハはダメージを受けた。そして…。

「レベル2のSRビードルマントに、レベル3の三つ目のダイスをチューニング！その躍動する剣劇の魂、ここに刻め！シンクロ召喚！刃をぶつけ合え！レベル5、HSRチャンブライダー！」

三つ目のダイスが3つの歯車になり、その中にビードルマントが入り、2つの光が変わる。歯車から光が放たれ、現れたのは刀のような巨大な機械に下半身を埋めた人型のロボット。両手も鋭い刃になっている。

HSRチャンブライダー ATK 2000

「…攻撃力、2000…片方は2200、それでどうするんだい？」

「へっ、こいつで終わりだ！手札から魔法カード、ハイ・スピード・リレベルを発動！墓地のHSRマツハゴ・イータを除外し、HSR魔剣ダーマを対象にする！こいつの効果は、墓地のスピードロイド1体を除外し、対象にした自分フィールドのシンクロモンスターのレベルをそのモンスターと同じにし、攻撃力を、除外したモンスターのレベル×500ポイント、アップさせる！マツハゴ・イータのレベルは5、よって魔剣ダーマのレベルは5になり、攻撃力は2500アップの、4700だ！」

HSR魔剣ダーマ 星6↓5 ATK 2200↓4700



「そして魔剣ダーマには、守備モンスターを攻撃したら貫通ダメージを与える効果がある！」

「…あれ、さっきの500ダメージは？」

「ただの憂さ晴らしだ!!バトル!魔剣ダーマで、エルシャドール・マウエツタメシアを攻撃!!吹っ飛べー!!」

魔剣ダーマがマウエツタメシアへ突撃、そしてその体を一突きし破壊。そして貫通ダメージにより、ユーハのライフは0になる。

ユーハ LP 300↓0

「…はあ…興奮めだよ。じゃあね」

「あ、コラ待て!!」

「今度は1対1でやろうねー」

デュエルが終わると同時にユーハはディスクを操作した。白は逃げるつもりと感じ、ユーハのところへと一気に走る。…だがそれよりも早く、ユーハの姿は消えた。

「ちっ、逃がしたか…」

「くっそー!あの野郎…次会ったらぜってー逃がさねえ!」

「落ち着け。今はとりあえず、他のヤツと合流が先だ」

「とにかく先にいったヤツらに合流しないと」

「っわけだバイク乗り、3人乗り行けるか？」

「オレはユーゴだ!っかできるか!!」

### 第33話 貪り喰らうものVS光の使者

ユーゴ、白VSユーハとのデュエルが行われている頃、先に行ったユーキ達はどうと…

「ジャッジメント・ドラグーン裁きの龍の効果発動！ライフを1000ポイント支払い、このカード以外のフィールドのカード全てを破壊します！ファイナル・ジャッジメント！」

「うわああああ!!」

ユーキ LP 1500↓500

オベリスクフォースA LP 3000↓0

オベリスクフォースB LP 4000↓2600

オベリスクフォースC LP 3000↓0

オベリスク・フォース3人を相手に、1キルしていた。理由は、相手フィールドのカードにある。

アンテイク・ハルマゲドン・ギア古代の破滅機械 永続魔法

このカードは、自分フィールドに「アンテイク・ギア」モンスターが存在しない場合、発動できない。

①フィールドのモンスターが破壊された場合、発動する。そのモンスターのコントローラーは、破壊されたモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける。

②各ターンのスタンバイフェイズ、自分フィールドの「アンテイク・ギア」カード1枚を破壊する、もしくは破壊せずこのカードを破壊する。

そう、このカードを使ったこと。オベリスクフォースCが使ったのだが、B以外の2人は簡易融合インスタント・フュージョンを使ったため、ライフは3000。Aのフィールドには攻撃力1400の古代の機械・双頭獵犬アンテイク・ギアダブルバイト・ハウンド・ドッグ、さらにブラック・ガーデンを発動していたためにローズ・トークンが4体。Cは攻撃力1800の古代の機械・参頭獵犬アンテイク・ギアトリプルバイト・ハウンド・ドッグとダブル

バイト1体。Bはダブルバイト1体のみだったので生き残っている。普通なら、ジャッジメント・ドラグーンの効果で丸ごと除去されているところだが、相手フィールドに発動している表側の魔法カードが多かったことから、魔力の泉によって大量ドローと魔法と罠に破壊耐性を持たされたことでジャッジメント・ドラグーンでも除去できず、このような状況になった。

「そしてジャッジメント・ドラグーンをリリース！ライトロード・ドラゴン グラゴニスアドバンス召喚！墓地のライトロードは4種類、よって攻撃力は1200アップ、ブラック・ガーデンの効果でその分半減です」

ライトロード・ドラゴン グラゴニス ATK 2000↓320  
0↓1600

「へ、へへ…攻撃力1600…残念だったな！オレのライフを0にできないで！」

ちなみにブラック・ガーデンは、Bが発動した。…そしてそんな余裕は、一瞬で崩れ去る。

「手札から魔法カード、手札抹殺を発動！私の手札は7枚、よって7枚を墓地へ！」

「…お、オレは0だ…」

墓地へ捨てられたカード

ブレイクスルー・スキル

ライトロード・ビースト ウォルフ

ライトロード・パラディン ジェイン

ライトロード・プリースト ジェニス

ライトロード・ウォリアー ガロス

ライトロード・エンジェル ケルビム

見事なまでのライトロード。追加されたのは5枚、そのうちウォルフは被っているが、それでも4種類追加され…。

0  
ライトロード・ドラゴン グラゴニス ATK 1600↓280

「お、おのれえ！」

「バトル！グラゴニスで、ダイレクトアタック!!」

「ぐああああ!!」

オベリスクフォースB LP 2600↓0

1ターンスリーキール…運が良かったとはいえ、どこかの誰かさんを彷彿とさせる光景だ。そしてやられたオベリスクフォースBが強制帰還し、辺りに人はいなくなる。

「ふう…急いで合流しないと」

なお、日影、葉佩達とはオベリスクフォースと遭遇した段階でユーキが足止めとして残った。なお、沢渡、勝鬨はもう歩けると言っているのはいたものの、結構ふらふら、合流するにしてもD・ホイールに乗るユーキならすぐに追いつけるだろう。

「急がないと」

「そんなに急いでどこへ行くのかな？」

「っ！誰ですか!!」

ユーキが声のしたほうを見ると、そこには…紫色の服を着た、紫の髪の少年…その顔は、遊矢とよく似た顔だ。

「!……いいや違う…誰ですか、あなたは」

「君こそ誰？ユーハとなんだか似てる気はするけど、まったく別人って分かるレベルだし」

「…ユーキです」

「ボクはユーリ。まあともかくさ、君、どこに行くのかな？ボクもちよーつと用事があったね…そのバイク、貸してもらえるかな？」

「嫌です」

「まあだよ。なら自分で行くしかないか…」

そういうと、ユーリは…葉佩達が逃げて行った方向へと足を向けた。

「!行かせない!!」

「おっと…いきなり来てどうしたの。というか君、邪魔なんだけど」

「…狙いはなんですか」

「教えなきやダメ？」

「言いなさい!」

「ヤダ…って言っても、その感じじや何か知ってそうだね…じやあ言っちゃうと、柊柚子とセレナの確保、かな」

「!やっぱり…」

アカデミアの今回の目的は、セレナと柚子の生け捕り。2人のカード化は絶対禁止とまで言われている。…そして何より、2人のデュエルディスクには細工が施され、アカデミア側から位置が把握できるようにされた。…とはいえ、柚子のほうは確認していないため推測に過ぎない。

「とりあえず今は柊柚子のほうの確保を優先してるんだけどさ、君邪魔だから」

「先に行きたいなら、私とデュエルしなさい!」

そういうと、D・ホイールからディスクを分離させ、D・ホイールから降りる。

「まあいつか。デュエルして君倒せばいいんだし」

そしてユーリもディスクを展開し構える。

「デュエル!」

ユーリ LP 4000

ユーキ LP 4000

「…うん、どうやらボクの先攻だね。ボクのターン。ボクは手札から

ブレデター・フランツ  
捕食植物スキッド・ドロセーラを召喚!」

ブレデター・フランツ  
捕食植物スキッド・ドロセーラ ATK 800

ユーリが呼んだのは…不気味な植物。ドロセーラはモウセンゴケ属という食虫植物。だがこのモンスターの葉と呼べる部分は、鋭い牙の生えた下顎及び上顎に人間の舌があるという、これモウセンゴケか?と言われてもいまいいような不気味さだ。おまけに茎には目がある。

「さらにカードを2枚伏せて、ターンエンド」

ユーリ 手札2 LP 4000

ブレデター・フランツ  
モンスター 捕食植物スキッド・ドロセーラ×1 (攻)

魔法・罫 セットカード×2

「私のターン、ドロ!手札から速攻魔法、サイクロンを発動!右のセットカードを破壊します!」

「じゃあボクは選択されたカードをオープン！トラップカード、ナイトメア・デーモンズ！スキッド・ドロセーラをリリースし、相手フィールドにナイトメア・デーモン・トークン3体を、攻撃表示で特殊召喚する！」

スキッド・ドロセーラが消え、ユークのフィールドにヒヨロヒヨロの悪魔が3体、現れる。そしてその体の一部に：小さな植物が、噛み付いている。

ナイトメア・デーモン・トークン×3    ATK    2000    捕食力  
ウンター 0↓1    星6↓1

「そしてスキッド・ドロセーラが表側でフィールドを離れたら、相手フィールドの特殊召喚されたモンスター全てに、捕食力ウンターを1つ置く」

「捕食力ウンター？」

「うん。この捕食力ウンターを置かれたモンスターのレベルは全て、1になる」

この効果はエクシーズとシンクロの使い手には地味に痛い。タイミングによっては呼び出したモンスターとは別のモンスターを呼びぶしか方法がなくなる、もしくは他のモンスターを呼べない、ということに繋がる。…あくまで、タイミングによってはだが。

「確かこのトークンは、破壊されたら800ポイントのダメージを受ける…」手札から魔法カード、光の援軍を発動！デツキトツプ3枚を墓地へ送り、デツキからレベル4以下のライトロード1体を手札に加える！」

墓地へ送られたカード

ライトロード・パラディン    ジェイン

閃光のイリユージュオン

ソーラー・エクステンション

「デツキからライトロード・アサシン    ライデンを手札に加え、手札からライトロード・サモナー    ルミナスを召喚！」

ライトロード・サモナー    ルミナス    ATK    1000

「サモナー    ルミナスの効果！手札1枚を墓地へ送り、墓地のレベル

4以下のライトロードを特殊召喚します！手札のライデンを墓地へ送り、チューナーモンスター、ライトロード・アサシン ライデンを特殊召喚します！」

「へー、さつき手札に加えて墓地へ送ったモンスターを特殊召喚、そしてチューナー…まあ、シンクロ召喚だろうね」

「レベル1となつているナイトメア・デーモン・トークン3体に、レベル4のライトロード・アサシン ライデンをチューニング！集いし力を纏い、神出鬼没に現れる！シンクロ召喚！レベル7、PSYフレームロード・Z！」

PSYフレームロード・Z ATK 2500

ライデンが4つの歯車になり、その中に3体のナイトメア・デーモン・トークンが入り、3つの星になり直列になる。歯車から光が放たれ、現れたのは黒い服を着た人型のモンスター。腰にある前掛けにはイナズママークがあり、体の至る所に突起がつき、それが電気を放っている。

「バトル！PSYフレームロード・Zで、ダイレクトアタック！」

「うーん、ダメージは防ぎたいね…トラップカード、オープン。ピンポイント・ガード。墓地のスキッド・ドロセーラを守備表示で特殊召喚。この効果で特殊召喚されたモンスターはこのターン、破壊されないから要注意」

「くっ…」

スキッド・ドロセーラ DEF 400

再び現れたスキッド・ドロセーラ。破壊されないので、攻撃を中止する。

「…カードを2枚伏せて、ターンエンド。エンドフェイズ、ライトロード・サモナー ルミナスの効果で、デッキの上からカードを3枚墓地へ送る」

墓地へ送られたカード

ライトロード・ハンター ライコウ

ライトロード・ビースト ウオリフ

聖なるバリアーミラーフォース

「墓地へ送られたウォルフの効果！ウォルフがデッキから墓地へ送られたら、自身を特殊召喚できる！改めて、ターンエンド」

ライトロード・ビースト ウォルフ ATK 2100

ユーキ 手札1 LP 4000

モンスター ライトロード・サモナー ルミナス×1(攻)、PSY  
フレイムロード・Z×1(攻)、ライトロード・ビースト ウォルフ×  
1(攻)

魔法・罫 セットカード×2

「じゃあボクのターン、ドロロー。…うーんいい手札。手札から魔法カード、超栄養太陽を発動。スキッド・ドロセラをリリースし、デッキからレベル3のローンファイア・ブロッサムを特殊召喚」

「！ローンファイア・ブロッサム…」

ローンファイア・ブロッサム DEF 1400

PSYフレイムロード・Z 捕食カウンター 0↓1 星7↓1

ライトロード・ビースト ウォルフ 捕食カウンター 0↓1 星

4↓1

スキッド・ドロセラが消え、代わりに地面から蔦の先端が膨らんだ植物が現れる。今にも破裂しそうだ。そしてそのモンスターを見て、ユーキの表情は険しくなる。

「ローンファイア・ブロッサムの効果。このカードをリリースし、デッキから…そうだね…うん。イービル・ソーンを特殊召喚、守備表示」  
「！そのモンスターまで…」

イービル・ソーン ATK 100

ユーリが召喚したのは1体の植物。片方にはピンク色の花が、もう片方には…トゲトゲな種。

「イービル・ソーンのモンスター効果。このカードをリリースし、相手ライフに300ポイントのダメージを与え、デッキから同名モンスター2体を攻撃表示で特殊召喚する」

「！っ…」

ユーキ LP 4000↓3700

イービル・ソーン×2 ATK 100



イービル・ソーンの種が爆発、トゲトゲがユーキ目掛け飛んでいく。刺さりこそしないものの、すごく怖い光景だ。

「さらに魔法カード、フレグランス・ストームを発動。植物族のイービル・ソーンを破壊し、1枚ドロウ。そのモンスターが植物族なら、さらにもう1枚ドロウできる。…ボクがドロウしたのは、捕食植物サブレデター・プランツンデウ・キンジー、植物族。よってもう1枚ドロウ」

ユーキは素早く公開されたカードを確認し、眉間に皺を寄せる。…厄介な効果を持っている、それがこのモンスターだ。

「そして手札から、サンデウ・キンジーを召喚。そして、サンデウ・キンジーのモンスター効果。このカードは自分の手札とフィールド、及び相手の捕食カウンターが置かれたモンスターとこのカードを素材に、闇属性融合モンスター1体を融合召喚できる」

「させません！PSYフレイムロード・Zの効果！サンデウ・キンジーと共に、このカードを除外します！」

ブレデター・プランツ  
捕食植物サンデウ・キンジー ATK 600

ユーリが呼び出したのは…モウセンゴケの特徴である繊毛状のものが生えた緑色のエリマキトカゲ。そしてその効果を発動しようとした矢先、その背後にPSYフレイムロード・Zが瞬時に現れる。だが…。

「カウンタートラップ、拘束捕食！ボクのフィールドに捕食植物がブレデター・プランツいるときに相手がモンスター効果を発動したら、その発動とそのモンスターの効果を無効にし、相手フィールドのモンスター1体に捕食カウンターを1つ乗せる。PSYフレイムロード・Zの効果発動とその効果を無効！さらにライトロード・サモナー ルミナスに、捕食カウンターを1つ乗せる！」

ライトロード・サモナー ルミナス 星3↓1

拘束捕食 カウンター罠

「拘束捕食」の②の効果は、1ターンに1度しか使用できない。

①自分フィールドに「捕食植物」が存在するときに相手がモンス

ター効果を発動した場合、発動する。その発動とそのモンスターの効果を無効にし、その後、相手フィールドの表側のモンスター1体に「捕食カウンター」を1つ乗せる。捕食カウンターが置かれたレベル2以上のモンスターのレベルは、1になる。

②相手の「捕食カウンター」が置かれたモンスターがモンスター効果を発動した場合、墓地のこのカードをゲームから除外することで発動できる。その効果を無効にし、破壊する。その後、自分はデッキからカードを1枚ドロウする。この効果は、墓地へ送られたターンには発動できない。

一瞬戸惑うユーキだが、そのままPSYフレイムロード・Zが無数の蔓で拘束されたのを、険しい表情で見ていた。

「…ふーん…まあとりあえず…ボクは、そっちのフィールドのPSYフレイムロード・Zと、サンデウ・キンジーを融合。魅惑の香で虫を誘う一輪の美しき花よ、香に誘われし者と1つとなり、凄まじき巨大な香をここに咲かせよ！」

サンデウ・キンジーがピンク色のオーラを出し、PSYフレイムロード・Zを覆い、無理やり融合の渦へと引きずり込む。そして…手と手を合わせ、いただきますのポーズを取る。

「融合召喚！現れよ、巨大な美しき花、捕食植物キメラフレシア！！」  
捕食植物キメラフレシア ATK 2500

…現れたのはそう、巨大な花、ラフレシア。蔦があり、鋭い牙を持つ口のようなものがついている。

「ら、ラフレシア…」

「それじゃあキメラフレシアの効果！このカードのレベル以下の相手モンスター1体を除外する！キメラフレシアのレベルは7、そっちのフィールドに残っているのはレベル1になっているルミナス。除外させてもらうよ」

「ルミナスが…」

キメラフレシアが蔦によってルミナスを巻き取り、それを花の部分へと放り込む。

「もしかして、何かいいカードでも持ってた？ だったららごめんね。まあ容赦はしないけど。バトル！ キメラフレシアで、ライトロード・ビースト ウォルフ！ 紫炎の棘！」サポート・ソーン

「トラップ発動！ くず鉄のかかし！ キメラフレシアの攻撃を無効にし、このカードを再セット！」

キメラフレシアが蔓を伸ばしウォルフに叩きつけようとするが、それを廃材のかかしが防ぎ、かかしが倒れる。

「残念…カードを1枚伏せて、ターンエンド」

ユーリ 手札0 LP 4000

モンスター 捕食植物キメラフレシア×1(攻)、イービル・ソーン×1(攻)

魔法・罠 セットカード×1

「私のターン、ドロー！ 手札から魔法カード、ソーラー・エクステンジを発動！ 手札のライトロード・ウォリアー ガロス墓地へ送り、デッキから2枚を墓地へ送り、2枚ドロー！」

「じゃあそれにチェーンしてトラップカード、闇霊術―「欲」を発動。闇属性のキメラフレシアをリリースして2枚ドローできる。ただし、この効果に対して相手は魔法カードを見せることで無効にできるけど…手札0じゃあ、無理だね。ということで2枚ドローしまーす！」

「くっ…(除去されることを見越してのリリースといったところでしようか)」

デッキから墓地へ送ったカード

ライトロード・アーチャー フェリス

エクリプス・ドラゴン

闇霊術―「欲」は使いどころを考える必要がある分、効果としては闇属性1体と引き換えに2枚ドロー…無効にされる可能性があるならそれを減らす、もしくははなくす。今回は確実に無効にされない状況を選んだ、ということだ。そしてキメラフレシアの効果を考えて、アドバンテージは大きい。

「墓地へ送られたアーチャー フェリス、エクリプス・ドラゴンのモン

スター効果！アーチャー フェリスがデツキから墓地へ送られたらこのカードを特殊召喚でき、エクリプス・ドラゴンが墓地へ送られたことでデツキから、ジャッジメント・ドラグーン裁きの龍を除外します！」

ライトロード・アーチャー フェリス DEF 2000

アーチャー フェリスが現れ、鋭い目つきでユーリを睨みつける。

「そして手札から魔法カード、戦士の生還を発動！墓地のジャンク・シンクロンを手札に加え、召喚！ジャンク・シンクロンは召喚に成功した時、墓地のレベル2以下のモンスター1体を特殊召喚できる！ライトロード・ハンター ライコウを特殊召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK 1300

ライトロード・ハンター ライコウ DEF 200

ジャンク・シンクロンが現れ、その隣に白い毛並みに白い鎧の犬が現れる。：本来ならウォルフがレベル4なのだが、捕食カウンターが置かれているので、レベルは1となっている。：そう。

「私は、レベル1となっているライトロード・ビースト ウォルフと、レベル2のライトロード・ハンター ライコウに、レベル4のライトロード・アーチャー フェリスをチューニング！集いし祈りが、光の使者の長を呼び寄せる。光差す道となれ！シンクロ召喚！」

フェリスが駆けだして飛びあがり、空中回転しながら4つの歯車になり、その中にウォルフ、ライコウが入り合計3つの星になる。そして光が放たれ：ジャッチメント・ドラグーン裁きの龍と共に、ライトロード・アーク ミカエルが現れる。

「導け、レベル7！ライトロード・アーク ミカエル！」

ライトロード・アーク ミカエル ATK 2600

「バトル！ミカエルで、イービル・ソーンを攻撃！閃光の一閃！」

「！ぐううう！今のは、痛かったよ…」

ユーリ LP 4000↓1500

ミカエルの放った渾身の突きによってイービル・ソーンは貫かれその衝撃がユーリにまで届く。そして、フィールドががら空きなので…

「ジャンク・シンクロンで、ダイレクトアタック!!」

「うーん…ただじゃイヤだね…ボクは手札の捕食植物セラセニアンプレデター・プランツ

トの効果。相手のダイレクトアタック宣言時、手札からこのカードを特殊召喚できる」

捕食植物セラセニアント DEF 600  
プレデター・プランツ

現れたのはサラセニアと思われるウツボカズラの仲間の植物を生やした、蟻によく似たモンスター…本当に蟻なのか、もしかしたら動物型の植物なのかもしれない。

「なら、ジャンク・シンクロンでセラセニアントを攻撃！」

「来ると思った…セラセニアントのモンスター効果！相手モンスターと戦闘を行ったダメージ計算終了後、その相手モンスターを破壊する！つまり、ジャンク・シンクロンは破壊される！」

「…そんな効果が…」

ジャンク・シンクロンのパンチを受けたセラセニアント…だが、植物の部分が動き始め、ジャンク・シンクロンに食らいつき、そして…食べていく。

「?!じゃ、ジャンク・シンクロン!!」

「うーんここから先はちゃんとご飯食べたいからなしで」

素晴らしいディスクを操作し、リアル・ソリッド・ヴィジョンによる処理を終了させる。…そして食べられていたというのを見ていたユーキは動揺した…そして、ユーリは効果処理を続ける。

「それとセラセニアントは効果で墓地へ送られた、もしくは戦闘で破壊されたら、デツキから同名以外のプレデターカード1枚を手札に加えることができる。デツキから、プレデター・プランターを手札に加えるよ」

「…これで、ターンエンド。エンドフェイズ、ミカエルの効果で、デツキトップ3枚を墓地へ」

墓地へ送られたカード

ライトロード・マジシャン ライラ

サイクロン

ボルト・ヘツジホッグ

さり気なく墓地で効果が発動するカードが送られた。…だが、まだ

どうなるかは…分からない。

ユーキ 手札0 LP 3700

モンスター ライトロード・アーク ミカエル×1(攻)

魔法・罨 セットカード×2(くず鉄のかかし×1)

「あー危ない。でも厄介なの残っちゃったな…それじゃあ…ボクのターン、ドロー。そしてこのスタンバイフェイズ、前のターンにリリースされたキメラフレイアの効果。デッキから、置換融合を手札に加える」

「痴漢…?」

「何か違う気がするね…まあいいか。このまま融合召喚!…と行きたいところだけど準備しないと。永続魔法、プレデター・プランターを発動!このカードは1ターンに1度、手札か墓地から捕食植物1体プレデター・プランツを特殊召喚できる!墓地から捕食植物セラセニアントを特殊召喚!  
!」

捕食植物セラセニアント DEF 600

地面から生えてくるセラセニアント。…おそらく、穴でも掘って出てきたところだろうか。

「さらにボクは永続魔法、増草剤を発動!この効果で墓地の捕食植物キメラフレシアを特殊召喚する!」  
捕食植物キメラフレシア ATK 2500

さらにさつき消えていったキメラフレシアが復活してきた。

「それじゃあキメラフレシアの効果。このカードのレベル以下…つまり、同じレベル7のミカエルをゲームから除外する」

「チェーンしてトラップ発動!スキル・プリズナー!この効果で、ミカエルを対象と取るモンスター効果から守ります!」

「うーん、失敗か…」

キメラフレシアの蔦がミカエルに向かって伸びていったが、ミカエルの周囲にバリアが現れ、弾かれる。

「でもまあいつか。ボクは手札から魔法カード、置換融合を発動!このカードは自分フィールドのモンスターを素材に、融合召喚を行う!ボクは融合モンスターのキメラフレシアと、闇属性モンスターのセラ

セニアントを融合！凄まじき香放つ美しき巨大な花よ、奈落へ誘う香しき花と1つとなり、死肉を食らい狂い咲け！融合召喚！」

キメラフレシアとセラセニアントが融合の渦に入る。そしていただきますのポーズを取る。…融合の渦から現れたのは…いわゆる、ドラゴン。人型に近いものの、様々なところに植物を思わせる部分がある。

「現れ出でよ！死臭放つ断絶の竜花！ブレデター・プランツ捕食植物ドラゴスタペリア

！」

ブレデター・プランツ捕食植物ドラゴスタペリア ATK 2700

「ど、ドラゴン…?」

「キメラフレシアがいなくなったことで増草剤は墓地へ送られ、さらにセラセニアントの効果。ブレデター・グラフトデツキから捕食接ぎ木を手札に加え、発

動。このカードは墓地の捕食植物1体を特殊召喚し、そのモンス

ターに装備する。ボクはキメラフレシアを特殊召喚し、装備！」

ブレデター・プランツ捕食植物キメラフレシア ATK 2500

再び現れるキメラフレシア。…どちらもモンスターを対象にする効果を持つ。…だが、今それは関係ない。

「またキメラフレシアが…」

「そう、まただよ。それにさ、どうせ攻撃してもさっきのトラップで防いじやうだろうし、だったらやつちやえばいいかなーって。…つていうことでバトル！ドラゴスタペリア！ミカエルを攻撃！フレグランデス・ブレス死臭の息吹！」

「！くっ…」

ユーキ LP 3700↓3600

黒っぽい紫の煙がドラゴスタペリアの口から吐き出され、ミカエルを飲み込む。そしてその毒に蝕まれ、破壊される。だが…。

「ミカエルの効果！墓地のこのカード以外のライトロードをデツキに戻し、戻した数×300ポイント、ライフを回復する！アーチャーフェリス、ハンター ライコウ、マジシャン ライラ、をデツキに戻し、900回復！」

ユーキ LP 3600↓4500

「じゃあキメラフレッシュアでダイレクトアタック」

「トラップ発動！くず鉄のかかし！キメラフレッシュアの攻撃を無効に！」

キメラフレッシュアの鳶は、くず鉄のかかしによって防がれる。

「まあ、そうくるよね。…カードを1枚伏せて、これでターンエンド」

ユーリ 手札0 LP 1500

モンスター プレデター・プランツ 捕食植物ドラゴスタペリア×1(攻)、プレデター・プランツ 捕食植物キ

メラフレッシュア×1(攻)

魔法・罨 永続魔法「プレデター・プランター」×1、セットカード×1

ライフを回復されてでもミカエルを除去したユーリ。…正確には、ミカエル以外の別のカードを警戒してのこと。使われたらまずいカードが何枚かある。

「私のターン、ドロー…！来た」

「何か来たところ悪いけど、キメラフレッシュアは1度墓地へ送られているから効果。デッキから融合を手札に」

「…墓地の光属性、エクリップス・ドラゴンを除外し、暗黒竜 コプラサーペントを特殊召喚します！」

暗黒竜 コプラサーペント DEF 1700

黒とオレンジの体を持つ細長いドラゴンが現れる。…そして、エクリップス・ドラゴンが除外されたことで、ユーキはさらに行動する。

「さらにエクリップス・ドラゴンは除外された場合、この効果で除外したモンスターを手札に加える！序愛されているジャッジメント・ドラグーン裁きの龍を手札に

加える！そして私の墓地には、ライトロード・アサシン ライデン、ライトロード・ウオリアー ガロス、ライトロード・ビースト ウォルフ、ライトロード・アーク ミカエル、この4種類のライトロードが

いることで、ジャッジメント・ドラグーン裁きの龍を特殊召喚！」  
裁きの龍 ATK 3000

ジャッジメント・ドラグーン 神々しい光と共に降臨する裁きの龍。その体が光り始める。

「裁きの龍のモンスター効果！ライフを1000ポイント支払い、このカード以外のフィールドのカードを全て破壊する！ファイナ



ル・ジャツジメント!!」

ユーキ LP 4500↓3500

「じゃあボクは捕食植物ドラゴスタペリアのモンスター効果!1ターンの1度、相手フィールドのモンスター1体に、捕食カウンターを1つ乗せる!裁きの龍を選択!そして捕食カウンターが置かれたモンスターの効果は、ドラゴスタペリアがいる限り無効化される!」

「墓地のスキル・プリズナーを除外し、効果!裁きの龍をこのターンの、対象を取るモンスター効果から守る!」

「ならさらにチェインして速攻魔法、捕食花粉!自分フィールドの捕食植物であるキメラフレシアをリリースし、相手モンスター1体に、リリースしたモンスターのレベルの数だけ、捕食カウンターを乗せる!」

プレデター・ポレン  
捕食花粉 速攻魔法

「捕食花粉」は、1ターンの1度しか使用できない。

①自分フィールドの「捕食植物」モンスター1体をリリースし、相手フィールドのモンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターに、リリースしたモンスターのレベルと同じ数、「捕食カウンター」を乗せる。この効果で「捕食カウンター」が置かれたモンスターは、「捕食カウンター」が置かれている限り、攻撃できない。「捕食カウンター」が置かれたレベル2以上のモンスターのレベルは、レベル1になる。

ジャツジメント・ドラグーン  
裁きの龍 捕食カウンター 0↓7 星8↓1

全力で花粉を飛ばし始めるキメラフレシア。そして飛ばされた花粉を、ドラゴスタペリアが羽を使って裁きの龍へと送る。:そして、届いた瞬間、裁きの龍は、光が一気に収まり目を回して倒れた:余程、臭かったのか、それとも別の要因だろうか:。そして全力を出したキメラフレシアは枯れた。

「そして捕食カウンターが置かれていることで、ドラゴスタペリアの

効果により、ジャッジメント・ドラグーン裁きの龍の効果は無効になる」

「な、なら裁きの龍で、ドラゴスタペリアを攻撃！」

「残念！捕食花粉の効果で捕食カウンターが置かれたモンスターは、捕食カウンターが置かれている限り攻撃できないんだ」

「！そんな……ターン、エンド」

ユーキ 手札0 LP 3500

モンスター ジャッジメント・ドラグーン裁きの龍×1（攻）捕食カウンター×7、暗黒竜

コプラサーペント×1（守）

魔法・罟 セットカード×1（くず鉄のかかし）

ドラゴスタペリアと捕食花粉の効果により、ジャッジメント・ドラグーン裁きの龍は動きを封じられた。除去されるからとコプラサーペントを守備表示にしているものの、どこまで耐えられるか…。

「それじゃあボクのターン、ドロー！スタンバイフェイズ、キメラフレ

シアの効果でデッキから、フュージョン・リカバリ融合回収を手札に加える！それとプレ

デター・プランターの効果で、ライフを800ポイント支払うよ」

ユーリ LP 1500↓700

「そしてボクは墓地の置換融合の効果発動！墓地のこのカードを除外し、さらに墓地の融合モンスター、キメラフレシアをエクストラデッキに戻すことで、デッキからカードを1枚ドローする！…へー…ボクはプレデター・プラントの効果で、墓地のセラセニアントを特殊召喚

！」  
プレデター・プランツ捕食植物セラセニアント DEF 600

「そして魔法カード、融合を発動！フィールドのドラゴスタペリアと、セラセニアントを融合！」

「!?ど、ドラゴスタペリアを?!」

「うん。もう別にいいからね。…死肉食らう竜花よ！奈落に誘う香しき花よ！今ひとつとなり、花卉の奥の地獄から、新たな脅威を生み出せ！融合召喚！」

2体の閻属性が融合の渦に入り…現れる。両肩には捕食部分と思われる口があり、涎を垂らす。細長い体と長い尻尾、不気味に赤く光る目のような球体。そして…頭にある、巨大な角、もしくは牙。その

体は毒々しい紫…ドラゴンとはまた別の怪物にも見える。

「さあ飲み込め！ 飢えた牙持つ毒竜！ スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン!!」

スターヴ・ヴェノム・フュージョン ドラゴン ATK 2800

「セラセニアントと、スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンの効果発動！ まずスターヴ・ヴェノムは、このカードが融合召喚に成功したとき、相手フィールドのモンスター1体の攻撃力を、このカードの攻撃力に加える！ ボクは、ジャッジメント・ドラグーン裁きの龍を選択！ キャプチャー・パワー・イート!!」

スターヴ・ヴェノム・フュージョン ドラゴン ATK 2800

↓5800

スターヴにある触手が伸び、ジャッジメント・ドラグーン裁きの龍に噛み付く。触手が脈動するように光を放ち始める。

「攻撃力、5800…(…まだくず鉄のかかしがある。それに…すぐ近くに、アクションカード。あのカードがいいカードなら…)」

「何考えてるかはなんとなく分かるよ。そのトラップで攻撃防いで逆転…とかなんとか考えちゃってるかもしれないけどさ…そうはいかないよ。セラセニアントの効果で、デッキからプレデター・ドレイン捕食吸収を手札に加え、発動！ このカードは相手フィールドの捕食カウンターを全て取り除き、その数だけライフを300ポイント回復する！」

プレデター・ドレイン捕食吸収 通常魔法

「捕食吸収」の②の効果は、1ターンに1度しか使用できない。

①相手フィールドの「捕食カウンター」を全て取り除いて発動できる。取り除いた「捕食カウンター」の数×300ポイント、自分のライフを回復する。

②墓地のこのカードをゲームから除外し、相手フィールドのモンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターに「捕食カウンター」を1つ乗せる。「捕食カウンター」が置かれたレベル2以上のモンスターのレベルは1になる。

ジャッジメント・ドラグーン  
裁きの龍についていた捕食カウンターがスターヴ・ヴェノムの触手に集まり、その養分を吸収して捕食カウンターは枯れてなくなる。  
ジャッジメント・ドラグーン  
裁きの龍 捕食カウンター 6↓0 星1↓8

ユーリ LP 700↓2500

「ライフが2500に…でも、それがどうしたんですか」

「ライフが2500だからこそ、意味があるのさ。そしてレベルにも。スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンのモンスター効果！1ターンに1度、相手フィールドのレベル5以上のモンスター1体の名前と効果を得る！」

「名前と効果を?!」

「そう。スターヴ・ヴェノムはこの効果により、ジャッジメント・ドラグーン裁きの龍となる！」

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン+ジャッジメント・ドラグーン裁きの龍

裁きの龍に噛み付いていた触手が赤く光り始めると、裁きの龍が苦しみ始める。そして触手が離れる。…その先端には赤い液体が滴っている。

「さて…ジャッジメント・ドラグーン裁きの龍の効果は…君が一番よく知ってるよねえ！ということで、効果発動!!」

「くっ…たあ!!…よし！アクションマジック、フレイム・ガード！自分フィールドのモンスター1体はこのターン、カード効果で破壊されない！この効果で…コプラサーペントを守る!!」

ユーリ LP 2500↓1500

フレイム・ガード アクション魔法

①自分フィールドのモンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターはこのターン、カードの効果では破壊されない。

スターヴ・ヴェノムがジャッジメント・ドラグーン裁きの龍のように眩い光を放つ。その直前にコプラサーペントの目の前に炎の盾が現れる。無数の触手状の光が放たれるとそれに当たったジャッジメント・ドラグーン裁きの龍が破壊される。…そしてコプラサーペントは、炎の盾に守られる。

「…へえ…守備表示のコプラサーペントで、少しでも凌ぐ作戦、つてこ  
とかな…でもまあ、無駄だよ」

「…いいえ、無駄じゃ」

「無駄なんだよ！墓地の捕食吸収は、墓地から除外することで相手  
フィールドのモンスター1体に捕食カウンターを1つ乗せる!!」

暗黒竜 コプラサーペント 捕食カウンター 0↓1 星4↓1

「さらに魔法カード、融合回収を発動!!このカードは、融合召喚の  
素材になったモンスター1体を、墓地の融合と共に手札に加える！ボ  
クは墓地の融合と、捕食植物サンデウ・キンジーを手札に加える！」

「！確かそれは、最初にキメラフレッシュを呼び出したときに…」

「そう、このカードの効果で融合素材にしたモンスターさ…そして、召  
喚！」

捕食植物サンデウ・キンジー ATK 600

再び現れるサンデウ・キンジー。…そして、サンデウ・キンジーの  
効果は、条件が合えば相手フィールドのモンスターも融合素材にでき  
る。…そう、今条件が合うのだ。

「サンデウ・キンジーの効果！捕食カウンターの乗ったコプラサーペ  
ントと、サンデウ・キンジーを融合！魅惑の香で虫を誘う一輪の美し  
き花よ、香に誘われし者と1つとなり、凄まじき巨大な香をここに咲  
かせよ！融合召喚！再び現れよ、巨大な美しき花！捕食植物キメラ  
フレッシュ!!」

捕食植物キメラフレッシュ ATK 2500

コプラサーペントが無理やり融合の渦へと引き込まれ、サンデウ・  
キンジーも入り、渦からキメラフレッシュが現れる。

「くっ…（他にカードは…）」

「バトル！スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンで、ダイレク  
トアタック！」

スターヴの背中から赤い光が線のように広がり、所々に青白く光る  
球体が浮かぶ。

「（アクシオンカードは…！あつた…）…っ！しまった…」

「悪いけどさ、さつきみたいなのは無しにしてもらいたんだよね」

キメラフレッシュアが薦と自身の体を使いユーキの行く手を阻む。：そして、その赤い光は強くなり…。

「食らい尽くせ！猛毒のデス・ポイズン・バイト!!」

赤い光と球体がユーキへ目掛け飛んでいく。赤い光はユーキを囲うように広がり、球体はユーキ目掛け真っ直ぐに飛んでいく。

「!っああああああ!!」

ユーキ LP 3500↓0

「さーて勝ったわけだし、お楽しみの時間だ」

というと、ユーキへと近づく。デュエルが終了したためスターヴもキメラフレッシュアも消えている。ユーキは1度に5000以上のダメージを受けたためか、倒れ、起き上がれずにいる。

「ぐっ…うう（こ、このままじゃ…）」

「それじゃあ…!?これは…」

ユーキに近付き、ディスクを操作しようとしたユーリだがその直後、どこからともなく半透明の鎖が伸び、ユーリのディスクに絡みつき、プレート部分が展開される。

「…我々が作ったデュエルアンカーだ。それは、デュエルが終わらなければならぬ」

「…ねえ、せつかくいいところだったのにさ、なんで邪魔したの?」

そして鎖の根本には…ディスクを構えた、零児が立っている。

「彼女を失うのは惜しい。それに…お前達の野望、達成させるわけにはいかない」

「ならしようがないね…」

そういうと、ユーリと零児は近付く。

「行くぞ!」

「さっさと終わらせようか」

「デュエル!!」

### 第34話 引き裂いた絆

「いったい何が起こっているんだ…」

フィールド内にオベリスクフォースが現れて、ユーキとユーリのデュエルが終わった頃の遊矢は…ジャングルエリアにいた。

「…変な仮面はいるし、オレ自身にもよく分からないことが起きてるし…もうなんなんだ…」

オベフォとのデュエルだったり、霸王黒竜だったり、ダーク・リベリオンだったり、謎の現象が起きている。今はそれを考えても仕方がないので…。

「とにかく、柚子と合流しないと」

そういい、ジャングルエリアを走る。だがその途中で…。

「どこだ、どこだ黒咲隼!!ボクは認めない!!!ボクと戦え!黒咲!!!」

「!この声…素良!!」

すぐ近くに聞き覚えのある友の声…素良の声が、聞こえた。そしてすぐ聞こえたほうへと駆け出し…

「でっ?!」

…衝突した。どうやら意外と側にいたらしく、すぐにこうなった。

「イタタタタ…!遊矢…なんのようさ」

「イテテ…!素良…」

素良は遊矢に対して鋭い視線を向け、それを分かった遊矢は思わずひいてしまう。

「邪魔だよ!ボクはあいつを、黒咲隼を倒すんだ!」

「素良落ち着け!落ち着けて!」

「うるさい!遊矢には分からないさ!ボクはアカデミアなんだ!そしてヤツはエクシーズのヤツだ!他の仲間がエクシーズのヤツを何人も倒してるのに、このボクが倒せないなんてありえない!もう1度デュエルをして、今度こそ倒すんだ!!」

「だったらその前にオレとデュエルをしろ、素良!」

…遊矢の言葉に、素良は一瞬、唾然としたような表情になる…だが

表情は再び険しくなり。

「…なんで遊矢とデュエルしなくちゃいけないのさ」

「お前を止めるためだ」

「はあ？なんのため？」

「友達だからだ！素良、アカデミアのやっていることは間違っている！デュエルは戦争の道具じゃない！みんながみんな楽しむものなんだ！」

「アカデミアのやっていることは正しい！次元を統一するっていう目的のために戦ってるんだ!!それにボクは十分楽しいよ！だから邪魔しないでよ！邪魔するなら遊矢だからって容赦はしない！」

「…なら、とことん邪魔してやる！とにかく、オレは素良、お前を止める！」

「やれるもんならやってみろ！」

「さういい、素良はディスクを構え、遊矢も構える。…素良は遊矢に強い敵意を向け、それを向けられた遊矢は少し怯えたが、素良を止めるためにも立ちほだかる。」

「デュエル!!」

素良 LP 4000

遊矢 LP 4000

「ボクのターン、ドロー！手札のファアーニマル・ベアを墓地へ送り、効果！手札から墓地へ送ることで、デツキからトイポットをセットし、そのままトイポットを発動！」

素良の後ろに巨大なガチャガチャが現れる。そして素良は手札を1枚墓地へ送ると、巨大なコインが現れ、投入口へと入る。

墓地へ送ったカード

・ファアーニマル・ウイング

「トイポットの効果発動！手札1枚を墓地へ送り、デツキからカードを1枚ドローする！そしてそれがファアーニマルモンスターなら、手札のモンスターを特殊召喚する！ドロー！…ボクが引いたのはファアーニマル・ドッグ！これによって今引いたファアーニマル・ドッグを特殊召喚！」



フアーニマル・ドッグ ATK 1700

ガチャガチャから出てきたカプセルから、フアーニマル・ドッグが出てきたのを見て遊矢は警戒する。このカードについてはよく知っている。…素良とデュエルしていて、ほぼ毎回出ていたからだ。

「フアーニマル・ドッグのモンスター効果！このカードが手札から召喚、特殊召喚されたら、デッキからエッジインプ・シザーかフアーニマルモンスター1体を手札に加える！デッキからフアーニマル・ラビットを手札に加える！さらに墓地のフアーニマル・ウイングの効果！墓地のフアーニマルモンスターとともにこのカードを除外し、デッキから1枚ドロウする！そしてフィールドのトイポットを墓地へ送ることで、さらにドロウ！」

「トイポットを墓地へ送った、ということとは…」

「トイポットはいつも使っていたからよく分かってるよね。トイポットの効果！このカードが墓地へ送られたら、デッキからエッジインプ・シザーかフアーニマルモンスターを手札に加える！フアーニマル・キャットを手札に！」

巨大なガチャガチャが消え、素良の手札は一気に3枚増えた。…3枚…トイポットを使うためにフアーニマル・ベアを墓地へ送り、さらにトイポットのコストで1枚、効果で特殊召喚されたことで1枚…トイポットの効果でドロウした分も考えると消費された分1枚おまけで増えた上に、フアーニマル・ドッグの効果によって手札が1枚増えている。つまり、5枚だったのが7枚になっている。

「あれだけやって、手札7枚…」

「さらに手札から簡易融合インスタント・フュージョンを発動！エクストラデッキから、レベル5以下の融合モンスター1体を融合召喚扱いで特殊召喚する！融合召喚！現れ出ちゃえ！全てを封じる鎖のケダモノ！デストーイ・チエーン・シープ！」

素良 LP 4000↓3000

デストーイ・チエーン・シープ ATK 2000

素良が呼び出したのは、黒咲とのデュエルでも呼び出した鎖の巻き付いた羊のぬいぐるみ。…フアーニマル・シープと違い、また他のデ

ストーリーとも違って怖い、というより不気味な感じを出している。

「融合素材なしで融合モンスターを…」

「まだまだ！手札から永続魔法、デストーイ・ファクトリーを発動！このカードは墓地の融合かフュージョンと名のつくカードを除外し、手札とフィールドのカードを素材にデストーイモンスターを融合召喚する！墓地の簡易融合を除外し、手札のエッジインプ・チェーンとフィールドのファーニマル・ドッグ、デストーイ・チェーン・シープを融合！」

融合の渦が現れ、その中に不気味な目が除く鎖とファーニマル・ドッグ、デストーイ・チェーン・シープが入る。

「悪魔の駆動鳴らす鎖よ、忠実なる獣よ、鎖のケダモノよ！今一つとなり新たな力と姿を見せよ！融合召喚！現れ出ちやえ！全てに牙向く魔獣！デストーイ・サーベル・タイガー！！」

デストーイ・サーベル・タイガー ATK 2400↓2800

現れたのは…体中から剣の刃が飛び出て、おしりの辺りには剣そのものが突き刺さったような形になっている虎の人形が現れる。…そして口の中からは不気味な目が覗く。

「デストーイ・サーベル・タイガーとエッジインプ・チェーンの効果！デストーイ・サーベル・タイガーは融合召喚に成功した時、墓地のデストーイ融合モンスター1体を特殊召喚し、エッジインプ・チェーンは手札かフィールドから墓地へ送られたらデッキから、デストーイカードを手札に加える！エッジインプ・チェーンの効果で<sup>デストーイ・パッチワーク</sup>魔玩具補綴を手札に加え、サーベル・タイガーの効果でデストーイ・チェーン・シープを特殊召喚！」

「！（融合による消費を、より抑えた上にモンスターが2体…いや…多分もつとくる）」

デストーイ・チェーン・シープ ATK 2000↓2400

「そしてサーベル・タイガーの効果で、デストーイモンスターの攻撃力は400アップする！さらに手札に加えた<sup>デストーイ・パッチワーク</sup>魔玩具補綴を発動！デッキからエッジインプモンスターと融合を手札に加える！エッジインプ・シザーと融合を手札に加える！」

「くっ…やっぱり…」

「そして融合を発動！手札のエッジインプ・シザーとファアーニマル・キャットを融合！悪魔の爪よ！気ままな野獣よ！今1つとなりて、新たな力と姿を見せよ！融合召喚！現れ出ちゃえ！全てを薙ぎ払う悪魔の人形！デストロイ・デアデビル！」

デストロイ・デアデビル ATK 3000↓3400

次に現れたのは、おそらく何かのぬいぐるみ。見た目から考えるに悪魔のぬいぐるみ。手には三又の槍を持っている。

「今度は3400…」

「ファアーニマル・キャットの効果！このカードが融合素材になったら、墓地の融合を手札に加えられる！カードを2枚伏せて、ターンエンド」

素良 手札2 (ファアーニマル・ラビット、融合) LP 3000

モンスター デストロイ・サーベル・タイガー×1 (攻)、デストロイ・チェーン・シープ×1 (攻)、デストロイ・デアデビル×1 (攻)

魔法・罫 「デストロイ・ファクトリー」×1、セットカード×2  
攻撃力2800、2400、そして3400のモンスター…うち1体は破壊されたら攻撃力2800になって戻ってくる。サーベル・タイガーの上昇効果を合わせると3200だ。そしてセットカードが2枚。

「行くぞ…オレのターン、ドロー！オレは手札から魔法カード、ペンデュラム・コールを発動！手札1枚を墓地へ送り、デツキから魔術師2体を手札に加える！」

墓地へ送ったカード

・貴竜の魔術師

「デツキから降竜の魔術師と、星読みの魔術師を手札に加え、スケール2の降竜の魔術師と、スケール7のEM<sup>エンタメイト</sup>キングベアーを、ペンデュラムゾーンにセッティング！」

光の柱が昇り、その中に仮面をつけ、刺々しい帽子をかぶった魔術師と、王冠にマント姿のクマが昇ってきた。魔術師の下には2が、クマの下には7の数字が浮かぶ。

「これでレベル3から6のモンスターが、同時に召喚可能！」

「3から6：オッドアイズを呼ぶってわけじゃなさそうだね」

「揺れる、魂のペンデュラム！天空に描け光のアーク！ペンデュラム召喚！現れる、オレのモンスター達！手札からレベル4、エンタメイト E M ボツ

トアイズ・リザード！エンタメイト E M セカンドンキー！」

エンタメイト E M ボットアイズ・リザード DEF 1200

エンタメイト E M セカンドンキー DEF 2000

フィールドに現れたのは、茶色いドンキー、紫色の体のトカゲ。どちらも守備表示だ。

「…全部守備って…つまり守りに徹するってこと？」

「まさか！ボットアイズ・リザードと、セカンドンキーの効果！ボットアイズ・リザードは召喚、特殊召喚に成功したら、デッキからオッドアイズ1体を墓地へ送り、墓地へ送ったモンスターと同じ名前になる！そしてセカンドンキーは、エンタメイト E M 1体を墓地へ送れ、自

分のペンデュラムゾーンにカードが2枚あれば、代わりに手札に加えられる！ボットアイズ・リザードの効果でデッキからオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを墓地へ送り、セカンドンキーの効果で、エンタメイト E M トランプ・ウィッチを手札に加える！」

エンタメイト E M ボットアイズ・リザード ↓オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン

ボットアイズ・リザードにオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの幻が纏われる。…これでボットアイズは、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンとなった。

「そして降竜の魔術師のペンデュラム効果！相手フィールドのモンスター1体を、ドラゴン族にする！デストロイ・サーベル・タイガーをドラゴン族に」

「カウンタートラップ、デストロイ・マーチ！自分フィールドのデストロイモンスターを対象とするカード効果を無効にし破壊！そして対象になったデストロイモンスターを墓地へ送り、エクストラデッキからレベル8以上のデストロイモンスターを融合召喚する！サーベル・タイガーを墓地へ送り、融合召喚！現れ出ちゃえ！全ての玩具の

結合魔獣！デストロイ・マッド・キマイラ!!」

「何!？」

デストロイ・マッド・キマイラ ATK 2800

デストロイ・チェーン・シープ ATK 2400↓2000

デストロイ・デアデビル ATK 3400↓3000

降竜の魔術師が破壊され、デアデビルも消える。…その後に素良のフィールドに新しく現れたのは…下が台になり、そこからわたの飛び出たピンクのクマのぬいぐるみ、細長い機械についたわたの飛び出たサルのぬいぐるみのあたま、そしてこちらも細長い機械についた…おそらく、シカと思われる布の頭。…少し不気味だ。

「…そんな…」

「そういう効果を使うんだ、どうせ何か企んでたんだろ？残念だったね失敗して!」

「…いやまだだ!手札からスケール1の星読みの魔術師をセッティング!星読みの魔術師のペンデュラム効果により、スケールは4になる!」

星読みの魔術師 Pスケール1↓4

「…それがどうしたのさ。次からレベル5と6しか出せなくなるだけじゃないか」

「まだだ!オレは墓地の貴竜の魔術師の効果発動!このカードは、自分フィールドのオッドアイズのレベルを3つ下げること、手札か墓地から特殊召喚できる!」

「何言ってるのさ、オッドアイズなんて君のフィールドに…!そうか、ボットアイズ・リザード!」

「そう!ボットアイズは今、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンとして扱う!よってボットアイズのレベルを3つ下げ、特殊召喚!」

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン  
ボットアイズ・リザード 星4↓1

貴竜の魔術師 DEF 1400

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン  
ボットアイズ・リザードのレベルを下げ、現れる貴竜の魔術師。…そしてフィールドには、貴竜の魔術師以外にはレベル1とレベル4、この2体が揃っている。

「オレはレベル4のセカンドンキーに、レベル3の貴竜の魔術師をチューニング！そして貴竜の魔術師は、オッドアイズ以外のモンスターと一緒にシンクロ素材になった場合、エクストラデッキへは置かれず、デッキの一番下に置かれる！熱き情熱の炎纏い、今新たな姿を現せ、二色の眼の竜よ！」

貴竜の魔術師が3つの歯車になり、その中にセカンドンキーが入り、4つの星が変わる。そして光が放たれ、オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴンが現れる。

「シンクロ召喚！レベル7、猛き咆哮をあげし、灼熱の竜！オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン!!」

オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン DEF 2000

「メテオバーストの効果！このカードが特殊召喚に成功したとき、自分のペンデュラムゾーンのパンデュラムモンスターを特殊召喚する！来い、星読みの魔術師！」

星読みの魔術師 DEF 2400

メテオバーストが咆哮をあげると、光の柱が消え、星読みの魔術師がフィールドへ降りてくる。

「そして手札からスケール4のEエンタメイトMトランプ・ウィッチをセツティングし、トランプ・ウィッチのパンデュラム効果！自分フィールドのモンスターを素材に、融合を行う！オレは星読みの魔術師と、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンとなっているボツドアイズ・リザードを融合！神秘の力操りし者、まばゆき光となりて龍の眼に宿らん！融合召喚！出でよ、秘術ふるいし魔天の龍！ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン!!」

ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK 3000

ボツドアイズ・リザードと星読みの魔術師が融合の渦へと入り、そこからルーンアイズが呼び出される。

「バトル！ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴンで、デストーイ・チェーン・シープを攻撃！光輪のシャイニー・バースト!!」

「ぐう…チェーン・シープの効果！破壊されたら、墓地からこのカードを特殊召喚し、攻撃力を800ポイントアップさせる！」

素良 LP 3000↓2000

デストロイ・チェーン・シープ（守備表示） ATK 2000↓800 DEF 2000

ルーンアイズから放たれた光線に貫かれ破壊されるも、再び現れる。…だが。

「ならもう1度チェーン・シープを攻撃！連撃のシャイニー・バースト！！」

「くっ…」

「そしてデストロイ・マッド・キマイラを攻撃！連撃のシャイニー・バースト！」

「っ…マッド・キマイラも…」

素良 LP 2000↓1800

素良のフィールドのモンスター2体を一気に破壊し、有利になる遊矢。だが素良のフィールドには攻撃力3000のデアデビル。遊矢のフィールドには攻撃力3000のルーンアイズ、そして攻撃力2500、守備力2000で守備表示のメテオバースト。今の遊矢に除去カードはないので…。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！そしてこのエンドフェイズ、ペンデュラムゾーンのキングベアーの効果！このカードを破壊し、エクストラデッキか墓地の、レベル7以下のペンデュラムモンスターを手札に加える！墓地のオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを手札に！」

遊矢が墓地からオッドアイズを手札に加えた。…だが素良は伏せていたカードを発動する。

「ならそのエンドフェイズにトラップ発動！融合死円舞曲！フュージョン・デス・ワルツ自分フィールドのデストロイ融合モンスターと相手フィールドの融合モンスター1体を選択し、それ以外のモンスターを全て破壊！そして破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを、そのモンスターのコントローラーに与える！デアデビルとルーンアイズを選択！」

「!?なっ…ぐああああ!!」

遊矢 LP 4000↓1500

デアデビルが、ルーンアイズにダンスを強要し、無理やりダンス。それも、ワルツ。そして踊りながら、デアデビルはさり気なくメテオバーストを破壊する。：アクションカードを取りに行こうとしている遊矢はその衝撃をかわすことができず、もろに受ける。

遊矢 手札1 (オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン) LP 1  
500

モンスター ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン×1 (攻)

魔法・罫 セットカード×1

Pゾーン 「E Mトランプ・ウィッチ」  
エンタメイト

「くっ…どうしてそんなカードを…」

「念のためさ。融合モンスターを使うヤツと戦うかもしれないからね。：それに使わないならそれはそれでブラフになるさ。ボクのターン、ドロロー！ボクは墓地のエッジインプ・シザーの効果発動！手札1枚をデッキトップに置き、墓地のこのカードを特殊召喚！」

エッジインプ・シザー ATK 1200

エッジインプ・シザーが現れる。：この状況でシザー・ウルフを出されるときついのは明白だ。

「(…セットカードはくず鉄のかかし…シザー・ウルフは、融合素材になったモンスターの数だけ攻撃できる。素良の手札には、融合とファーニマル・ラビットぐらい…つまり、少なくとも2回攻撃できる。このカードで1回は防げても、もう1回が防げない…)」

「さらに魔法カード、融合を発動！フィールドのエッジインプ・シザーと、手札のファーニマル・ラビットを融合！悪魔の爪よ、飛びまわる獣よ！今1つとなりて、新たな力と姿を見せよ！融合召喚！現れ出ちやええ！全てを引き裂く密林の魔獣！デストロイ・シザー・タイガー！」

デストロイ・シザー・タイガー ATK 1900↓2500

デストロイ・デアデビル ATK 3000↓3600

：素良が呼び出したのは、シザー・ウルフではなく、ハサミがついた虎のぬいぐるみ。：サーベル・タイガーとは色が違い、あちらが紺色系統に対し、こちらは水色だ。



「！シザー・ウルフじゃない…」

「そつちでもいいけど、こつちのほうが確実だからね…シザー・タイガーとファーニマル・ラビットの効果！ファーニマル・ラビットは融合素材になったとき、墓地のエッジインプ・シザーかファーニマル1体を手札に加え、シザー・タイガーは、融合素材にしたモンスターの数だけ、フィールドのカードを破壊する！」

「なんだって?!」

「ボクはラビットの効果で、ファーニマル・ドッグを手札に加え、シザー・タイガーの効果で、ルーンアイスとセットカードを破壊する!!」

シザー・タイガーの腹にあるハサミの刃が伸びルーンアイスとセットカードを1回で切り、破壊する。…遊矢のフィールドは、一気にがら空きとなる。

「くっ…ルーンアイスどころか、くず鉄のかかしも…」

「シザー・タイガーの効果で、ボクのデストーイモンスターの攻撃力は、フィールドのデストーイ、ファーニマルモンスターの数×300アップする。2体だから、600アップしている！バトルだ！いけ、デアデビル！遊矢にダイレクトアタック!!」

デアデビルが遊矢に迫る。…だがその途中で、遊矢はアクションカードを茂みの上に見つけた。

「！あつた…たあ！……無いよりまし！アクションマジック、密林の鼓動！墓地の獣族、獣戦士族、鳥獣族、植物族モンスター1体を特殊召喚する！こい、E Mセカンドンキー!!」

### 密林の鼓動 アクション魔法

①相手の攻撃宣言時、自分の墓地から、レベル4以下の獣族、獣戦士族、鳥獣族、植物族モンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターを特殊召喚する。この効果で特殊召喚されたモンスターは、このターンの終わりにデッキに戻る。

エンタメイト  
E Mセカンドンキー DEF 2000

「セカンドンキーの効果！デッキからE Mジンライノを墓地へ！」

「だからどうしたのさ！そのまま攻撃!!」

「墓地のジンライノの効果！自分フィールドのエンタメイトが破壊される場合、墓地からこのカードを除外し、破壊を無効にする！」

セカンドンキーの前に小柄なサイが現れ、デアデビルの槍を角で受け止める。何度もデアデビルは槍で攻撃するが、全てジンライノが受け止めている。

「ちっ…でも所詮その場のぎ！シザー・タイガーでセカンドンキーを攻撃!!」

「くっ…」

シザー・タイガーの強靱な爪に引き裂かれ、セカンドンキーは破壊される。…このターンは凌げたが、次のターンもしのげる保障は…ない。

「このターンで決めるつもりだったのに…運がよかったね。それじゃあバトルフェイズを終わらせて、ボクは手札からファイニマル・ドッグを召喚！その効果でデッキから、ファイニマル・オクトを手札に加える！」

ファイニマル・ドッグ ATK 1700

デストーイ・デアデビル ATK 3600↓3900

デストーイ・シザー・タイガー ATK 2500↓2800

ファイニマル・ドッグが召喚されたことで、攻撃力を確実にあげていった。といってもファイニマル・ドッグの攻撃力はそのままでが。「これでターンエンド！さあかかってきなよ遊矢!!…おっと、アクションカードだ」

素良 手札1 (ファイニマル・オクト) LP 2000

モンスター デストーイ・デアデビル×1 (攻)、デストーイ・シザー・タイガー×1 (攻)、ファイニマル・ドッグ×1 (攻)

魔法・罠 「デストーイ・ファクトリー」×1

「くっ…(多分、素良が油断したおかげでなんとかライフが残ったけど…次は無い…)」

素良の油断によって運よく防ぎきれた。素良がファイニマル・ドッグを召喚していれば、ほとんど他のアクションカードの見当たらない

現状では負けていただろう。特に素良がさつき取ったアクションカードは、素良のほうが近い。…つまり、これは事実上情けをかけられたターンだ。

「…(運よく生き残れたとは言っても、このターンで決められなくちや、オレは負ける…) …行くぞ…オレのターン、ドロー!!」

勢いよくカードを引き抜き、確認する。…そのカードは…。

「っ(…このカードは…いいいや、ここは迷ってる場合じゃない!) オレは手札から魔法カード、七星の宝刀を発動! 手札のレベル7のオツドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを除外し、2枚ドロー!」

「自らエースを手放すなんてね」

…レベル7のモンスター自らのエースを含むのモンスターを除外し、ドローするカード。意外とレベル7がいるためというのとユーキの意見から入れてみたが、今回エースを除外することになってしまった。…だが使わなければ、敗北は避けられない。

「…オレはスケール6のE Mギタートルと、E Mリザードローをペンデュラムゾーンにセッティング! そしてギタートルのペンデュラム効果! 自分のペンデュラムゾーンにE Mが置かれたとき、デッキからカードを1枚ドローする! さらにリザードローのペンデュラム効果! ペンデュラムゾーンのリザードローを破壊し、1枚ドローする。この効果で、2枚ドロー!」

光の柱が現れ、胴体がギターになっているカメとタキシードを着たトカゲが現れる。そしてトカゲはすぐ消える。

「連続でドローしたってムダムダ!」

「…いいや、無駄じゃない! オレは魔法カード、金満な壺を発動! エクストラデッキのリザードロー、キングベアー、降竜の魔術師をデッキに戻し、2枚ドロー!」

「ちっ…またか」

ここにきて連続のドロー。…とはいえ、それでも手札は3枚。…さすがに、もうドローできない。だが…。

「オレは、スケール2のE Mペンデュラム・マジシャンをセッティング! そして速攻魔法、ペンデュラム・ターンを発動! このカードは、自

分フィールドのペンデュラムゾーンのスケールを、1から10の間の、好きな数字に変更できる！ギタートルのスケールを10に！」

「！スケール10…つまり、3から9か」

エンタメイト  
E Mギタートル Pスケール 6↓10

「これでオレは、レベル3から9のモンスターが同時に召喚可能！もう1度揺れる、魂のペンデュラム！天空に描け光のアーキ！ペンデュラム召喚！！頼む、力を貸してくれみんな！！エクストラデツキから、レベル5の星読みの魔術師！そして手札からレベル8、E Mエンタメイトラフメイカー！！」

星読みの魔術師 DEF 2400

エンタメイト  
E Mラフメイカー ATK 2500

現れたのは、星読みの魔術師、そしてもう1体…黄色い服に黄色いどんがり帽子姿の魔法使い、ラフメイカーが現れる。

「そしてペンデュラム・マジシャンのペンデュラム効果！ペンデュラム召喚したとき、自分フィールドのエンタメイトの攻撃力を1000ポイントアップさせる！！」

エンタメイト  
E Mラフメイカー ATK 2500↓3500

「攻撃力3500…デアデビル以外には十分だけど、それで？」

「デアデビルを倒すのさ！バトル！ラフメイカーで、デアデビルを攻撃！」

「！ホントにデアデビルを…でもデアデビルの攻撃力は、ラフメイカーより400ポイント上だよ！」

「ラフメイカーの効果！…このカードの攻撃宣言時、このカードと相手フィールドの元々の攻撃力よりも攻撃力の高いモンスターの数だけ、このカードの攻撃力を1000ポイントアップさせる！！」

「！なあ?!ボクのフィールドには、攻撃力3900になっているデアデビルと、2800のシザー・タイガー…」

「そして3500のラフメイカー自身、合計3体！よって3000ポイントアップだ！」

エンタメイト  
E Mラフメイカー ATK 3500↓6500

ラフメイカーが杖を腰に収めると、その手にトランプが一束。そし

てその中のカード1枚を引き抜き、自分には見えないように見せる。  
…それはスペードの3。そしてそれをラフメイカーはシャツフルし  
…高く放り投げる。…そしてランプが舞い落ちる中、素早く杖を手  
に取り1枚のカードを貫く。…貫いたのは、スペードの3。思わず  
素良のフィールドのモンスターは拍手をする。…さり気なく星読み  
の魔術師も。その拍手にラフメイカーの気持ちが高まり、力が上が  
る。

「いっけええええ!!」

そしてラフメイカーの杖から黄色い光が放たれ、デアデビルへと一  
直線に進む。

「その効果には驚きだよ。でもさ…無駄だよ!アクションマジック、  
回避!」

「!!なっ…」

「君ならよく知ってるよね。このカードは、相手の攻撃を無効にする  
!」

大慌てで光をかわすデアデビル。…その光景に驚くラフメイカー  
と、遊矢。今の遊矢には、追加攻撃の手段も、回避を無効にする手段  
も…ない。

「君の手札は0。ラフメイカーは攻撃力が6500だけど、そんな効  
果だ、きつとエンドフェイズには効果が終わる。さあ、ターンエンド  
しなよ」

「…素良…くっ…ターン、エンド。エンドフェイズ、ペンデュラム・  
ターンとペンデュラム・マジシャン、ラフメイカーの効果が終了し、ギ  
タートルのスケールと、ラフメイカーの攻撃力は…元に、戻る」

エンタメイト  
EMギタートル Pスケール 10↓6

エンタメイト  
EMラフメイカー ATK 6500↓2500

遊矢 手札0 LP 1500

エンタメイト  
モンスター EMラフメイカー×1 (攻)、星読みの魔術師×1

(守)

魔法・罨 なし

Pゾーン エンタメイト EMギタートル エンタメイト EMペンデュラム・マジシャン

「それじゃあ行くよ、ボクのターン、ドロー！ボクは手札から、フアーニマル・オクトを召喚！フアーニマル・オクトが召喚に成功したとき、墓地のエッジインプ1体を手札に加える！ボクはエッジインプ・チェーンを手札に加える！」

フアーニマル・オクト ATK 800

デストーイ・シザー・タイガー ATK 2800↓3100

デストーイ・デアデビル ATK 3900↓4200

素良が呼び出したのは、可愛らしいタコ。…だがその効果は、侮れば簡単にやられるだろう。

「デストーイ・ファクトリーの効果！フュージョン・デス・ウルツ融合死円舞曲を除外し、手札のエッジインプ・チェーンと、フィールドのフアーニマル・オクトを融合！悪魔の駆動鳴らす鎖よ！悪魔の使徒よ！今一つとなり、新たな力と姿を見せよ！融合召喚！！現れ出ちゃえ！全てを縛る鎖のケダモノ！デストーイ・チェーン・シープ！！」

「っ…！」

デストーイ・チェーン・シープ ATK 2000↓2900

チェーン・シープ…発動を封じることと確実に倒すつもりだ、というところが容易に分かった。…だが、まだ終わりではない。

「さらにエッジインプ・チェーンの効果で、デストーイ・フュージョンデツキから魔玩具融合を手札に加え、発動！墓地のエッジインプ・シザーとフアーニマル・キヤット、ラビット、オクトを除外！悪魔の爪よ、気ままな獣よ、躍動する獣よ、悪魔の使徒よ！今一つとなり、新たな力と姿を見せよ！融合召喚！！現れ出ちゃえ！全てに牙向く獰猛な獣！デストーイ・シザー・ウルフ！！」

デストーイ・シザー・ウルフ ATK 2000↓3200

デストーイ・シザー・タイガー ATK 3100↓3400

デストーイ・デアデビル ATK 4200↓4600

デストーイ・チェーン・シープ ATK 2900↓3200

ここに来て、ダメ押しと言わんばかりにシザー・ウルフを呼び出す素良。融合素材となったのは4体…つまり、4回攻撃が可能。さらにモンスターは全て3000オーバー、うち1体に至っては4600と

いう数値。さつきそれ以上の数値を叩き出したラフメイカーがいる  
とはいえ今、その攻撃力はない。

「そ、そんな…」

「一思いに一撃倒してあげるよ遊矢！バトル！デストロイ・デアデビル！ラフメイカーを破壊しろ!!」

デアデビルがラフメイカーに向かって突撃する。…ラフメイカーの攻撃力上昇効果は自身の攻撃宣言時のみ。…もはや、打つ手はない。

「ぐっ…ああああああ!!」

遊矢 LP 1500↓0

デアデビルがラフメイカーを槍の一突きで破壊、その瞬間にアクションカードを見つけたが…もはや、手遅れだった。攻撃力4600対2500、その差2100の衝撃波は遊矢にすぐ届き、体を大きく吹き飛ばす。そして、遊矢、素良のフィールドから、カードが消える。「これで分かったら？君はボクより弱い。それがこの結果だ。君はボクの邪魔なんてできない」

「くっ…ま、まだだ…何度でも…お前を、止める！」

「……………そうかい。……………じゃあ、仕方がないね」

吹き飛ばされてなお立ち上がる遊矢を見て素良は、今までの気持ちの高まりが一気に冷めたような声を出し、自身のディスクを操作する。

「……………ボクはアカデミアの兵士だ。…ボクの邪魔をするっていうなら、遊矢でも、容赦はしない」

「！素良…」

「そう、ボクはアカデミアなんだ。…例え、遊矢だって」

…時折手を止めながらも、簡単な手順のためすぐに準備が整った様子。…だが、その手順の最後で一瞬だが止まる。…その一瞬で。

「ぬおおおおお!!」

「!!」

「この声…！」

けたたましい大声と共に現れたのは…白い学ラン、リーゼントに赤

いハチマキ…そして、中学生には見えないその顔。

「権現坂！」

「ゴンちゃん…っ！」

「遊矢、素良、何があった。素良の声が聞こえて気になって来たが…  
いったいなんなんだ」

「…ゴンちゃんもボクの邪魔をするの…？」

「まずは話を聞いてから…」

「邪魔しないでよ！ボクはアカデミアなんだ！ボクはその中でも特進  
クラスなんだ！強いんだ！！だから邪魔するなよ！！」

少し裏返った叫び声をあげ、ディスクのプレートを展開させる。

「落ち着け素良！」

「素良、落ち着けっ…」

「邪魔するなら倒してやる！！」

必死の形相となり、声を荒げる素良。

「なら、オレがっ…」

「無理はするな遊矢。ここはオレがやる」

「！でも…」

「少し休んでおけ。…今のままではきついはずだ」

「…分かった」

遊矢は大人しく引き下がり、近くの木に背中を預け座る。…そして  
権現坂はディスクを構える。

「行くぞ、素良！」

「ゴンちゃんだからって手加減はしない！！」

「ゴデュエル！！」



### 第35話 終息する戦い

…時間は少し遡り、ユーキとユーリがデュエルをしている頃…氷河エリアでは、LDSのユースベスト8、加藤義正が逃げている。…オベリスクフォースに追われている。

「はあ、はあ…」

他のLDSメンバーも含め、ユースのベスト8はオベリスクフォースと戦った。…が、1人脱落してカード化されたのを見て、腰が引けた。そのときはなんとかオベリスクフォースを倒したものの、すっかり戦う気力を失った義正はその場から逃げだし、ここまで来た。…が、道中オベリスクフォースに見つかり、さらに連鎖的に見つかった結果、合計9人のオベリスクフォースに追われている…が。

「はあ、はあ…っ!!」

「どうやらここまでのようだな」

…遊びで義正を追い詰めていたオベリスクフォース。それも終わりを告げる。…義正は、オベリスクフォースに囲まれた。

「い、嫌だ…嫌だ…た、頼む、頼むからやめてくれ!」

「へっ、嫌よ嫌よも好きのうち、ってか?」

「誰がやる?こいつ全然やる気ないぜ?」

「お前ら気を引き締めろ!任務中だぞ!」

「ちっ、お前はホント真面目だなく…ジャンケンで決めるか?」

「まずはデュエルをしてから」

…軽く仲間割れをしているものの、視線はしっかりと義正を捕らえている。…逃げることは無理だ。

「ああ…お、終わりだ。嫌だ、誰か、誰か助けて…だ、誰か…」

「…やらないのなら私がやるぞ」

「へーへーお好きに」

「決まらないならまあいいか」

「まったく…恨むなら恨め、これも任務だ」

「あああ…い、嫌だ…」

そういうと、オベリスクフオーズの1人が近寄り、ディスクを操作し、構える。…一連の動作を見て全てを察し、絶望している義正は、もはや動けない。だがそこに…。

「…そいつのことはどうでもいいが、それ以上先をやらせるわけにはいかない」

「え…」

「!誰だ!!」

…現れたのは、銀色の髪にコートを着た人物：天道貴作だ。既にプレートを展開したディスクを構えている。

「へえ、お前はやる気があるみたいだな…」

「あんな腰抜けよりこっちやろうぜ!」

「デュエルもする気がないヤツに用などないからな」

そういうと、義正を眼中から外したオベリスクフオーズ全員がディスクを構える。

「全員で来るか。まあこの程度でないと、楽しめないだろうからな…」

「ほざけ!」

「」「」「」「デュエル!」「」「」

「デュエル!」

…だが僅か数十秒後、このデュエルに参戦したオベリスクフオーズ全員が、後悔した。……………いろんな意味で。それはまた別の話である。…そしてここから時間を戻し、権現坂と素良のデュエルが行われている頃…。

「ねえ、今どう思ってる?」

「…」

零児 手札0 LP 5000

モンスター DDD壊薙王アビス・ラグナロク×1(守)、DDD信託王ダルク×1(攻) 捕食カウンター×1、DDD死偉王ヘル・アーマゲドン×1(攻)

魔法・罫 永続魔法「地獄門の契約書」×1、セットカード×1

Pゾーン DDD壊薙王アビス・ラグナロク

ユーリ 手札2 LP 2200

モンスター プレデター・プランツ 捕食植物スピノ・ディオネア×1 (攻)、プレデター・プランツ 捕食植物  
プテロペンテス

魔法・罨 なし

ユーリはコーデイセツプスという自身のモンスターの効果により、スピノサウルス、及びプテラノドンにも似た植物型のモンスターを呼び出した。…そしてスピノ・ディオネアの効果により信託王ダルクにカウンターを1つ乗せている。

「おそらく、何か仕掛けてくるつもりだろうと思っっている」

「そう考えてるんだ。まあ、正解。プテロペンテスの効果！このカードのレベル以下のレベルを持つ相手モンスター1体のコントロールを得る！捕食カウンターが置かれたモンスターのレベルは1になるから、捕食カウンターの乗ってるダルクをもらおうよ」

「っ…」

プテロテンペスが鳶を伸ばすと、それに呼応するようにダルクについている捕食カウンターが伸び、ダルクを拘束、ダルクはなすすべもなくユーリのフィールドに移る。

「そしてボクは手札から魔法カード、融合を発動！」

「！来るか…」

「フィールドのスピノ・ディオネアとプテロペンテスを融合！太古の姿映す刺激的な2輪の花よ！今1つとなりて、花卉の奥の地獄から、新たな脅威を生み出せ!!融合召喚!!さあ飲み込め！飢えた牙持つ毒竜！スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン!!」

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン ATK 2800

融合により現れたユーリのエース、スターヴ・ヴェノム。攻撃力は2800だ。

「…攻撃力2800…どうするつもりだ」

「まあ焦らない焦らない。スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンの効果！このカードが融合召喚に成功したら、相手フィールドの特殊召喚されたモンスター1体の攻撃力を、このカードの攻撃力に加える！ヘル・アーマゲドンの攻撃力、頂くよ！キャプチャー・パワー・

イトー！」

「何…」

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン ATK 2800  
↓5800

「さらにもう一つ、スターヴ・ヴェノムの効果！相手フィールドのレベル5以上のモンスターの効果と名前を得る！そうだね…ヘル・アーマゲドンもいいけど、ここはちょうどDDがいるんだし、アビス・ラグナロクにしちやおつと！」

「ほう…」

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン+DDD壊薙王アビス・ラグナロク

「さらに装備魔法、ブレデター・グラフ捕食接ぎ木を発動。墓地のブレデター・プランツ捕食植物キメラフレ

シアを特殊召喚！」

ブレデター・プランツ捕食植物キメラフレシア ATK 2500

「…」

「えー、反応なし？つまんない。…じゃあ思いつきやってあげるよ。バトル！スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンで、ヘル・アーマゲドンを攻撃！猛毒のデス・ポイズン・バイト!!!」

無数の光がスターヴの背後に現れ、ヘル・アーマゲドン目掛け鋭くなり突撃していく。…そして…

そんなことが起こっている中で始まった権現坂と素良のデュエル。…先攻は素良だ。

「ボクのターン!!ボクは手札から魔法カード、インスタント・フュージョン簡易融合を発動！ライフを1000払い、融合召喚！現れ出でよ、全てを縛る鎖のケダモノ！デストロイ・チェーン・シープ!!」

素良 LP 4000↓3000

デストロイ・チェーン・シープ ATK 2000

「そして手札から、ファーニマル・オウルを召喚！ファーニマル・オウルの効果で、デッキから融合を手札に加える！そして永続魔法、デス

トリー・ファクトリーを発動！その効果で、墓地の簡易融合を除外し、フィールドのファーニマル・オウル、デストロイ・チェーン・シープ、手札のエッジインプ・チェーンを融合！鎖のケダモノよ！煉獄の眼よ！悪魔の駆動鳴らす鎖よ！今一つとなり新たな力と姿を見せよ！融合召喚！現れ出ちやえ！全てに牙向く魔獣！デストロイ・サーベル・タイガー！！」

デストロイ・サーベル・タイガー ATK 2400↓2800

融合の渦に3体のモンスターが入り、渦からサーベル・タイガーが現れる。

「サーベル・タイガーを融合召喚したとき、墓地からデストロイ1体を特殊召喚する！もう一度来い！デストロイ・チェーン・シープ！」

「融合素材にしたモンスターを再び呼び出す…無駄がないな…」

デストロイ・チェーン・シープ ATK 2000↓2400

「さらに融合素材として墓地へ送ったエッジインプ・チェーンの効果で、魔玩具補綴デストロイ・バッチワックを手札に加え発動！デッキからエッジインプ・シザーと融合を手札に加え発動！手札のエッジインプ・シザーとファーニマル・ラビットを融合！悪魔の爪よ！躍動する獣よ！今一つとなり新たな力と姿を見せよ！融合召喚！現れ出ちやえ！自由を奪い闇に引き込む海の悪魔！デストロイ・ハーケン・クラークン！！」

「！さっきのデュエルじゃ出さなかったモンスター…！気をつける権現坂！」

「無論だ！」

デストロイ・ハーケン・クラークン DEF 3000

融合により素良が呼び出したのは、巨大なイカ…クラークンというヤツだ。その腕には鋭い刃物がついている。

「ファーニマル・ラビットの効果！墓地のファーニマル・オウルを手札に加える！！これでターンエンド！」

素良 手札2（融合、ファーニマル・オウル） LP 3000

モンスター デストロイ・サーベル・タイガー×1（攻）、デストロイ・チェーン・シープ×1（攻）、デストロイ・ハーケン・クラークン

×1（守）

魔法・罾 永続魔法「デストロイ・ファクトリー」×1

フィールドは手札があまり宜しくなかったものの、固めの陣営だ。攻めるにしても意外と突破はしにくい。……だが…。

「融合モンスター3体…だが、それでもオレは勝たねばならん！オレの、ターン!!」

権現坂は怯まない。…それに加え、素良の手札があまり宜しくないのに対しこちらは……素晴らしい状態だ。

「オレは手札から、超重武者ジシャ―Qを召喚！ジシャ―Qが召喚に成功したとき、手札から超重武者1体を特殊召喚し、このモンスターを守備表示にする！超重武者タマ―Cを特殊召喚！」

超重武者ジシャ―Q ATK 900↓1900

超重武者タマ―C DEF 800

フィールドに現れたのは、手にプラスとマイナスのボルトがつき、肩にU字磁石を乗せたロボットが現れ、その後小さな丸いモンスターが現れる。…そう、タマ―Cが。

「超重武者タマ―Cの効果！このカードと、相手モンスターをリリースし、そのレベルと合計が同じ超重武者シンクロモンスター1体を、シンクロ召喚扱いで特殊召喚する！オレは、レベル8のサーベル・タイガーに、レベル2のタマ―Cをリリース！」

「な、なんだって?!」

…タマ―Cは、耐性なんて無視して墓地へ送れてモンスターも呼び出せる強力な除去モンスター。そして合計レベルは、10だ。

「荒ぶる神よ、千の刃の咆哮と共に、緑生い茂る戦場に現れよ！シンクロ召喚！いざ出陣！レベル10！超重荒神スサノ―O!!」

デストロイ・チェーン・シープ ATK 2400↓2000

超重荒神スサノ―O DEF 3800

タマ―Cが歯車になり、サーベル・タイガーが歯車に囲まれ8つの星になる。歯車から光が放たれ、日本の甲冑を纏い、ナギナタを持つ巨大なロボが現れ、胡坐をかいた。

「さらに自分の墓地に魔法・罾が存在しないことにより、手札から超重武者ホラガーEを特殊召喚！」

超重武者ホラガーE DEF 800

「オレはレベル4のジシャ―Qに、レベル2のホラガーEをチューニング！雄叫びをあげよ、神々しき鬼よ！見参せよ、緑生い茂る戦場に！シンクロ召喚！レベル6、超重神鬼シュテンドウ―G！」

ホラガーEがホラ貝を吹くと2つの歯車になり、その中にジシャ―Qが入り、4つの星に変わる。そして歯車から光が放たれ、赤い巨体に大きな金棒を持った、鬼を模したロボが現れる。

超重神鬼シュテンドウ―G DEF 2500

「シュテンドウ―Gの効果！このカードがシンクロ召喚に成功したとき、相手フィールドの魔法、罫カードを破壊する！」

「ぐっ…」

「さらに手札から超重武者装留―ダブル・ホーンをスサノ―Oに装備！ダブル・ホーンを装備したモンスターは、1度のバトルフェイズに2回攻撃を行える！」

スサノ―Oの両肩に巨大な角が装着される。…肩パットの派生形とでもいふべきだろうか。

「バトルだ！シュテンドウ―Gで、デストロイ・チェーン・シープを攻撃!!」

「ぐっ…チェーン・シープの効果！このカードが破壊されたら、墓地からこのカードの攻撃力を800ポイントアップさせ、特殊召喚できる！」

素良 LP 4000↓3500

デストロイ・チェーン・シープ DEF 2000

チェーン・シープの厄介なところはこの復活効果。…だが、今攻撃表示で出しても大ダメージは避けられない。権現坂のほうは、守備力2500のシュテンドウ―Gでは2800になったチェーン・シープを破壊できない。この状況を打破するには、この順番で攻撃するしかない。

「そしてスサノ―Oで、チェーン・シープとハーケン・クラークンを攻撃！クサナギソード斬!!」

「くっ…！っ。…！ちっ、こんなときに…」

アクションカードを手に入れた素良だが、どうやら求めていたカードではなく、スサノオの持つ薙刀により、2体とも破壊される。

「これでターンエンドだ！」

権現坂 手札2 LP 4000

モンスター 超重荒神スサノオ×1(守)、超重神鬼シユテンドウ

—G×1(守)

魔法・罨 「超重武者装留ダブル・ホーン」×1装備モンスター：超重荒神スサノオ

「くっそ…ボクのターン！…ボクは手札から魔法カード、貪欲な壺を発動！デストロイ・サーベル・タイガー、デストロイ・チェーン・シップ、デストロイ・ハーケン・クラークン、エツジインプ・チェーン、ファーニマル・ラビットをデッキに戻し、2枚ドロロー！！…手札からファーニマル・オウルを召喚！その効果でデッキから、融合を手札に加える！」

ファーニマル・オウル ATK 1000

フクロウのぬいぐるみが現れる。この効果により融合を手札に加えた素良がすることは…1つ

「そして融合を発動！フィールドのファーニマル・オウル、手札のエツジインプ・シザーを融合！悪魔の爪よ！煉獄の眼よ！今神秘の渦で1つとなりて、新たな力と姿を見せよ！融合召喚！現れ出ちやえ！全てを引き裂く密林の魔獣！デストロイ・シザー・タイガー！」

デストロイ・シザー・タイガー ATK 1900↓2200

ハサミがいくつも連なった不気味な目が浮かぶモンスターとファーニマル・オウルが融合の渦に入り、渦から空色の虎のぬいぐるみが現れる。腹には巨大な罅がある。

「シザー・タイガーのモンスター効果！融合素材にしたモンスターの数だけ、相手フィールドのカードを破壊する！融合素材にしたのはエツジインプ・シザーとファーニマル・オウルの2体！よって、その2体を破壊する！」

「…なんだと！」

シザー・タイガーの腹にあるハサミの刃が伸び、スサノオとシユ



テンドウーGを横に切り、破壊する。

「そして魔法カード、デストロイ・フュージョン魔法玩具融合を発動！墓地のエツジインプ・シザーと、フアーニマル・オウルを除外し融合！悪魔の爪よ！煉獄の眼よ！今神秘の渦で1つとなりて、新たな力と姿を見せよ！融合召喚！現れ出ちやえ！全てに牙向く獰猛な獣！デストロイ・シザー・ウルフ！！」

デストロイ・シザー・タイガー ATK 2200↓2500

デストロイ・シザー・ウルフ ATK 2000↓2600

再び現れた融合の渦に、先ほどと同じ組み合わせのモンスターが入り、シザー・ウルフが現れる。

「シザー・ウルフの効果は知ってるよね？融合素材にしたモンスターは2体だから、2回攻撃可能！」

「！権現坂！！」

「安心しろ遊矢！この程度、オレはまだ倒れん！」

「いくら虚勢を張っても無駄だよ！バトル！！デストロイ・シザー・ウルフで、2回攻撃い！！これで終わりだ権ちゃん！！」

「ぐっ…ぬおおおお！！だ、だがオレはダメージを受けたことで、手札の超重武者ココログマーAの効果！自分の墓地に魔法、罫が存在しないときに戦闘ダメージを受けたとき、手札からこのカードを特殊召喚する！現れよ、ココログマーA！！」

権現坂 LP 4000↓1400

1回目の攻撃が直撃し、倒れず吹き飛ばされず、大きく後退させられた権現坂。だが2回目は…現れた緑色のロボに、攻撃を防ぎ受け止める。

超重武者ココログマーA DEF 2100

「そしてこの効果で特殊召喚されたこのカードはこのターン、破壊されない！！」

「！くそお！！ターンエンド！！」

素良 手札1（融合） LP 3000

モンスター デストロイ・シザー・タイガー×1（攻）、デストロイ・シザー・ウルフ×1（攻）

魔法・罨 なし

：明らかに、ミスをしている。権現坂はそう確信している。権現坂はタマーCのときに素良のモンスターをテキストを確認している。：その中であつたデストーイ・ハーケン・クラーケン：あのモンスターなら、素材数的にも効果を考えても、攻めるにも守るにもいい形になるだろう。特にココトガマーAは破壊されないが、ハーケン・クラーケンの効果は墓地へ送る、耐性の範囲外だ。何よりライフを考えればハーケン・クラーケンのほうがいい。1枚しかないのなら仕方ないが。

「(素良：これは油断ではなく、焦りか？だが：攻めるしかない!) オレのターン!! オレは手札から超重武者テンB―Nを召喚! テンB―Nが召喚、特殊召喚に成功したとき、墓地からレベル4以下の超重武者1体を特殊召喚する! オレは超重武者ホラガーEを特殊召喚する!」

超重武者テンB―N ATK 800

超重武者ホラガーE DEF 800

緑色の甲冑にも似た、天秤に桶もしくはタライをぶら下げたロボが現れる。そしてそのすぐ近くにホラガーEが現れる。

「レベル4のテンB―Nと、レベル3のココロガマーAに、レベル2のホラガーEをチューニング! 動かざること山の如し! 大岩に宿りし魂、今、そびえ立つ砦となれ! シンクロ召喚! いでよ! レベル9! 超重魔獣キユウ―B!」

ホラガーEが2つの歯車になり、その中にテンB―NとココロガマーAが入り、合計7つの星が変わる。歯車から光が放たれ、いわゆるケンタウロスのような下半身が獣、上半身が人型という形の白いロボットが現れる。手には巨大な杖を持ち、そして頭とおしりのほうにあるパイプからはエネルギーが放出され、それが耳と尻尾のようになっている。

「キユウ―Bは相手フィールドの特殊召喚されたモンスターの数だけ、守備力が900ポイントアップする! お前のフィールドには2体、よって1800ポイントアップする!」

超重魔獣キュウーB DEF 2500↓4300

モンスター効果に内蔵されている永続効果としては高めの900。  
侮れないだろう。

「守備力4300!？」

「キュウーBにも、守備表示のまま攻撃でき、守備力を攻撃力として扱う効果がある！バトルだ！行け、超重魔獣キュウーB！デストロイ・シザー・タイガーを攻撃!!」

「ぐっ…アクションマジック、樹海の呪い！キュウーBの攻撃力を1000ポイントダウンさせる！うあああ!!」

樹海の呪い アクション魔法

①相手フィールドのモンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターの攻撃力を1000ポイントダウンさせる。

素良 LP 3000↓1200

デストロイ・シザー・ウルフ ATK 2600↓2000

パイプから放射されるエネルギーが一気に増え、シザー・タイガーに急接近し、その杖で一気に両断する。叩き斬る、といった感じだ。

「これでターンエンドだ!」

権現坂 手札1 LP 1400

モンスター 超重魔獣キュウーB×1(守)

魔法・罫 なし

「ぐっそ…ボクのターン!!魔法カード、おろかな副葬を発動!デッキからトイポットを墓地へ送る!そして墓地へ送られたトイポットの効果!デッキから、ファーニマル・ドッグを手札に加え召喚!!その効果でデッキからエツジインプ・シザーを手札に加える!」

「(エツジインプ・シザー…ということは来るのか?)」

ファーニマル・ドッグ ATK 1700

ファーニマル・ドッグが現れ、エツジインプ・シザーが手札に加わる。そして、素良はカードを発動する。…融合を。

「そして手札から魔法カード、融合を発動!エツジインプ・シザーと

フアーニマル・ドッグを融合！悪魔の爪よ！忠実なる獣よ！今神祕の渦で1つとなりて、新たな力と姿を見せよ！融合召喚！現れ出ちやえ！自由を奪い闇に引き込む海の悪魔！デストーイ・ハーケン・クラークン！！」

エッジインプ・シザーとフアーニマル・ドッグの2体が融合され、デストーイ・ハーケン・クラークンが現れる。…さっきはウルフよりこちらを出したほうがよかった。そして今回はシザー・タイガーという選択肢もあつたが…どちらがいいかは分からない。

デストーイ・ハーケン・クラークン ATK 2200

「ハーケン・クラークンの効果！キュウーBを墓地へ送る！」

「くっ…キュウーB…」

「そんな…このままじゃ…」

「バトルだ！今度こそ終わりだ！！デストーイ・シザー・ウルフで、ダイレクトアタック！！」

「権現坂！！」

「なんのこれしき！オレは手札の速攻のかかしを墓地へ送り効果！ダイレクトアタックのときに墓地へ送ることで、バトルフェイズを終了させる！！」

「！！なっ…」

「！よかった…」

シザー・ウルフが権現坂に迫るも、不意に鉄製のもののでできたかかしがブースターを噴かせ突撃、攻撃を防ぎさらに残りのハーケン・クラークン目掛けウルフごと突っ込んだ。

「くっそ…くっそ、くっそおおおおお！！これでターンエンド！！」

素良 手札0 LP 1200

モンスター デストーイ・シザー・ウルフ×1 (攻)、デストーイ・ハーケン・クラークン×1 (攻)

魔法・罫 なし

「…このターンで、逆転できなければ…頼む…」オレのターン！！…！これは…行くぞ！オレは手札から、超重武者ダイー8を」

「帰還命令！帰還命令！総員、強制帰還！」

「「え？」」

権現坂がモンスターを特殊召喚しようとしたところ…素良のデユエルディスクからこんな音声が流れた。

「なっ?!ふ、ふぎけるな!!なんで、ボクは負けてない!!まだ途中だ!おいやめろ、ボクはまだ、まだああああ!!」

「!素良!!」

素良が絶叫をあげ、粒子に包まれ…消えた。音声からして、アカデミアへと帰還したのだろう…。

### 第36話 新たな兆し

前回、素良が帰還させられた。何があったかと言うと、それは少し前に遡る。

「い、いけ！古代の機械参頭 獵犬！」  
アンティーク・ギアトリプルバイト・ハウンド・ドッグ

「ぐああああ!!」

貴作 LP 48600↓47300

：10ターン目、そう：10ターン目でこうなっている。天道貴作 VS オベリススクフォース×9：なぜこうなったかと言えば、遡る事1ターン目：貴作のターンだ。

「オレは手札から魔法カード、デュアル・サモン二重召喚を発動。これによりこのターン、オレは2回通常召喚を行える。そして永続魔法、次元の裂け目と魂吸収を発動」

「次元の裂け目に、魂吸収：除外デッキか？」

「カイザー・シーホースを召喚。そしてこのカードは、光属性モンスターをアドバンス召喚するとき、1体で2体分となる！カイザー・シーホースをリリース！轟雷帝ザボルグをアドバンス召喚！」

轟雷帝ザボルグ ATK 2800

貴作 LP 4000↓4800

：現れたのは、アフロの戦士、ザボルグ。しかも轟雷帝だ。そして…この轟雷帝を、光属性をリリースしてアドバンス召喚を行った。お分かり頂けるだろうか。

「ぎ、ザボルグだつて?!しかも轟雷帝!!」

「お、落ち着け！こっちはまだターンすら回ってないんだ！ヤツが破壊できるモンスターなんて…」

「ま、待て：ザボルグつて：自分のフィールドのモンスターも、対象にできるよな…?」

「あ…ということとは…」

「ザボルグの効果！ザボルグ自身を破壊する！」

ザボルグが自身の放つ雷に打たれ、破壊される。…そして、轟雷帝ザボルグの効果は…。

貴作 LP 4800↓5600

「ザボルグの効果！光属性モンスターを破壊したら、そのレベルからランクの数だけ、互いのプレイヤーはエクストラデッキからカードを墓地へ送る！アドバンス召喚のときにリリースしたのが光属性モンスターの場合、相手が墓地へ送るカードはオレが決められる！このザボルグのレベルは8、よって8枚を墓地へ送る。次元の裂け目の効果で墓地へ送られるモンスターは除外される！さあ見させてもらおうか：お前達のエクストラデッキを」

「う、うわああああああああああ!!!」

：結果、貴作は適当に手に入れた格安なエクストラデッキのモンスター合計8体、オベリスクフォースはカオス・ジャイアントとギアデビルの2体が3枚ずつ、ダブルバイト・ハウンド・ドッグが2体ずつ墓地へ：次元の裂け目の効果で除外し、貴作は桁外れのライフ、正確に言えば：69600ものライフを得た。だがそれだけならまだよかった。いや、オベリスクフォースの精神衛生上よくないが。だがそれ以上に恐ろしいのが…。

「な、なんで：なんであいつ、まだ笑って立ってるんだよ!!!」

そう：貴作が不気味な笑みを浮かべて立ち上がることに：それも、もう10000以上ものダメージを受けている上で、だ。いくら一撃一撃が弱くとも、合計10000以上ともなると相当なものだ。ハーフルライフルールで2回以上、ノーマルライフルールで1回は負けている計算になる。いくら1度に大幅に回復したとはいえ、実体化した衝撃を10000ポイント分以上受けてなお不気味な笑みを浮かべ立ち上がる、なんていうことはオベリスクフォースどころかアカデミア内でもできるものはいないし、そんな相手今までいなかった。

「ははは：ははははははは：この程度か？：この程度じゃ、オレはまだ満たされない。さあ、もつとこい！オレを倒すにはまだまだ足りないぞ!!」

「な、なんで笑ってられるんだよ：なんで、なんで!!」

「も、もう嫌だ：嫌だ嫌だ!!うわああああ!!」

「お、おい！：!?ば、バカ！それ総員帰還じゃないか!!」

「え？…あ」

…オベリスクフォースの1人が発狂し、帰還しようとしたが…使ったのは通常の帰還ではなく、総員帰還というもの。それは…参加している作戦の登録されているデュエルディスクを持つもの全員を、強制的に帰還させるといふ代物だ。

「帰還命令！帰還命令！総員、強制帰還！」

「お前何してんだよおおおおお!!」

「おかげで作戦失敗じゃねえかああああ!!」

「ごめんなさいいいいいいい!!」

こうして、オベリスクフォース+素良が、強制帰還された。残された貴作はというと…。

「…なんだもう終わりか。つまらん」

笑顔はなくなり、平然とした表情でそう呟く。こいつの体、どれだけ丈夫なんだ…。

そして同じくアカデミアのユーリはというと…。

「…へー。ダメージ・ダイエツトでダメージを半減させたんだ」

「ぐ…」

零児 LP 5000↓3600

「…うーん…それじゃあ、バトルフェイズを終わらせてアビス・ラグナロクになったスターヴ・ヴェノムの効果！ダルクをリリースして、アビス・ラグナロクを除外！」

「！アビス・ラグナロクを…」

ダルクがスターヴ・ヴェノムの触手の1つに飲まれると、スターヴ・ヴェノムのもう片方の触手からなぜかコードが伸び、それがアビス・ラグナロクを貫き…粒子なり消えた。

「これでターンエンド。さ、どうする？」

ユーリ 手札0 LP 2200

モンスター スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン×1

（攻）、捕食植物キメラフレッシュア×1（攻）

魔法・罠 なし



「私のターン！スタンバイフェイズ、地獄門の契約書の効果により1000ポイントのダメージを受ける！ぐうううう…」

零児 LP 3600↓2600

「まだまだ余裕だね」

「ああ。…もつとも、ライフのほうは充実させるつもりだ」

「え？」

「私は地獄門の契約書の効果を使い、デッキからDD魔導賢者ニユートンを手札に加え、ペンデュラムゾーンにセッティング！」

光の柱が現れその中から錆びた銅色のモンスターが現れる。…三日月にも似た姿だ。

「これにより、レベル6から9のモンスターが同時に召喚可能！我が魂を揺らす大いなる力！この身に宿り、闇を引き裂く新たな力となれ！ペンデュラム召喚！出現せよ、私のモンスター達よ！エクストラデッキより甦れ！レベル8、DDD死偉王ヘル・アーマゲドン！」

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン ATK 3000

再び現れるヘル・アーマゲドン。そしてペンデュラムゾーンのアビス・ラグナロクのペンデュラム効果は…。

「そしてアビス・ラグナロクのペンデュラム効果！墓地より、DDD神託王ダルクを特殊召喚！そしてアビス・ラグナロクのペンデュラム効果により1000ポイントの効果ダメージを受けるが…ダルクの効果により、回復となる」

零児 LP 2600↓3600

「…それでどうするの？」

「こうする。私は手札から魔法カード、ペンデュラム・フュージョンを発動！このカードは自分フィールドのモンスターを素材に融合召喚を行うカード。そしてその際、自分のペンデュラムゾーンにカードが2枚あれば、ペンデュラムゾーンのカードも融合素材にできる！」

「…ペンデュラムゾーンのカードも？」

「私は、DDD死偉王ヘル・アーマゲドンとペンデュラムゾーンのDDD壊薙王アビス・ラグナロクを融合！神々の黄昏を乗り越え、数多の王を超越し、新たな世界を切り開け！融合召喚！出現せよ、極限の独

裁神！DDD怒濤壊薙王カエサル・ラグナロク!!」

DDD怒濤壊薙王カエサル・ラグナロク ATK 3200

レオ・コーポレーションによつて研究されたペンデュラムカード及びそれを利用するカード：中でもペンデュラム・フュージョンは、比較的最近に作られたペンデュラムを使うカード。：ペンデュラムゾーンのカードをも融合する、という代物だ。これにより、ペンデュラムの可能性は大幅に広がる。

「バトルだ！カエサル・ラグナロクで、キメラフレシアを攻撃！この瞬間、カエサル・ラグナロクの効果発動！自分フィールドのDDカードか契約書1枚を手札に戻し、戦闘を行うモンスター以外の相手モンスターを、このカードに装備、その攻撃力分このモンスターの攻撃力をアップさせる！私は地獄門の契約書を手札に戻し、スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンを吸収！」

「っ！キメラフレシアの効果！キメラフレシアの攻撃力を1000ポイントアップさせ、相手モンスターの攻撃力を1000ポイントダウンさせる！」

DDD怒濤壊薙王カエサル・ラグナロク ATK 3200↓22

00↓5000

ブレデター・プランツ

捕食植物キメラフレシア ATK 2500↓3500

「やれ、カエサル・ラグナロク!!ジ・エンド・オブ・ジャッジメント!!」  
「ぐうっ…!!」

ユーリ LP 2200↓1750

「ダルクでダイレクトアタック！オラクル・チャージ！」

「っぐあ！」

ユーリ LP 1750↓350

「これでターンエンドだ」

零児 手札1 (地獄門の契約書) LP 3600

モンスター DDD信託王ダルク×1(攻)、DDD怒濤壊薙王カエサル・ラグナロク×1(攻)

魔法・罫 「スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン」×1装

備対象：DDD怒濤壊薙王カエサル・ラグナロク

Pゾーン 「DDD壊薙王アビス・ラグナロク」 「DD魔導賢者  
ニユートン」

「…ちっ…あーもうむかつくな…もうしょうがない。思いつきりやつてやるよ。ボクの」

「強制帰還命令が発令されました。帰還しますか?」

「…は?え?...うーん.....ドロー。...ちっ、しょうがない。...今回はボクの負けでいいけどさ.....次あったら潰す」

「!待て!!」

ユーリ ライフ 350↓0

零児が止める間もなく、サレンダーした直後にユーリは転移をし、融合次元へと帰還した。...それを見た零児は、すぐさま中島へと連絡を始める。

「...逃がしたか。中島、状況は?」

「はい。天道貴作からの報告によれば、オベリスクフォーソース9人が、何やら総員帰還やら、強制帰還がどうのとなつて、消えた...と」

「...総員帰還...強制帰還...つまり、強制的に帰還させられたわけか。」

「...これより、大会は中止。事情の説明を行う」

「分かりました。スタジアムのほうに伝えておきます」

「頼んだ...立てるか?」

「少し休んだおかげで、なんとか...」

...こうして、戦いは終息した。...だが、これはまだ始まりに過ぎない。...本当の戦いは、これからだ。

そしてしばらくし...零児は舞網スタジアムへと向かい...アカデミアについて、アカデミアが行っている次元戦争について、そしてその脅威がこの次元にも迫っていること、それに際しランサーズ...正式にはLance Defense Soldierズを結成することを発表した。ランサーズメンバーはまだ候補段階だが、全員の顔写真が大型ディスプレイに表示された。...全員、といっても零児が候補に入れている者全員、というわけではないが。

「私達は勝たなくてはならない!そのためにはこの世界の人々の力が

必要になる！次はあなたたちがランサーズとなる番だ!!」

…批判がないわけではない。だが分かっていることは…戦う必要がある。会場にいるものたちの多くが、賛同した。というのも、アカデミアとのデュエル中の映像…最初は敗北したりカード化したりしたところを、その後には…勝利する、撤退するときの映像を流した。…最後の辺り、貴作が1人で9人倒したように見えるが、倒したのではなく1人発狂して総員撤退をってしまったからだ…勝ったように見れば、問題ない。後、素良が（強制）撤退する様子も映った。

そしてランサーズの発表は、点在するLDSの施設にて休んでいる者達も見た。…意識のないものを除いて。

「お、オレ達が、ランサーズって…そんな…」

「…勝手にそうなったのでは、あまりいい気はせんな」

勝手にさせられたというのではあまりいい気がしないがしない。遊矢、権現坂はそう感じている。当たり前だ、遊矢は多少なりとも知っていたとはいえ、いつの間にか戦う羽目になった。…そして何より…。

「…柚子…」

「連絡がついたとはいえ、まだ意識が戻らないそうだからな…」

柚子、遊華、シャルロット、後沢渡と勝鬨はすぐに医療施設のほうへと運ばれた。もっともみんな大したけがではなく、沢渡に勝鬨はそもそも意識があり、シャルロットも意識が戻っている。…が、柚子、そして遊華の意識はまだ戻っていない。

「…赤馬零児と、話しをつけてくる」

「オレも行くぞ、遊矢」

そしてそんな中、柚子はというと…不思議な夢を見ていた。夢なのか？と思うほど鮮明ではあるが。…夢の内容とは…瓦礫となった町と思われる場所で、誰かからカードを奪い、その人物がこられないようにしてから何故か階段状になっている浮遊している岩を登り…巨大な怪物…ドラゴンであろうか。そのモンスターの前に出る。…そ

してそのドラゴンの胸元辺りには…2人の人影が見える。

「――！あなたの思い通りにはさせない！！」

【っ！お前は…】

『小娘如きが、我を止められるものか!!』

そうして先ほど誰かから奪ったと思われるカードを発動させると、眩い光が放たれ、色鮮やかな無数の花が、力強く羽ばたく無数の鳥が、優しく心地よい風が、神秘的で美しい月の光が現れ、ドラゴンが苦しみます。

『ぐああああ!!お、おのれ…おのれ小娘がああああ!!』

【…ありがとう…】

ドラゴンは目の前でいくつかの別のドラゴンらしきシルエットに別れ、そして自分も…。

「…っ！…い、今の…あれ、ここって」

そして目が覚めた。そこは病室のようで、日の光がオレンジを含み始めている。そしてそこで寝かされている。なお、個室だ。

「…なんなの、今の」

その頃の遊華はというと…柚子と似たような夢を見ていた。ただ…視点が違う。…謎のドラゴンのモンスターとデュエルをしている。視点的にはそうだ。だが…何か人の上半身のようなものが見える。…そして、自分の視点が動き、後ろへ下がったと分かる。

【ぐっ…】

『はははは！その程度か！その程度で我に逆らうとは…いくらお前でも無謀だな』

【いいや…まだ!!】

『！それは…ぐっ！…しまった…っ！』

そして走りだし、腰にあった剣を抜くと、モンスターにある人の上半身へと突き刺した。

【ズ――！あなたはここで、倒す！】

『ぐっ…ふざけるな！我は大いなる力の権化！神をも超えた存在!!我はこの世界を壊す!!お前になど、邪魔はさせぬ!!』

「ぐっ…ぐうう…」

「！ーア——！あなたの思い通りにはさせない！！」

「！あなたは…」

『小娘如きが、我を止められるものか!!』

そしてやってきたツインテールの少女が、4枚のカードを発動させると…花、鳥、風、月が現れ、ドラゴンが苦しみだし、そして…自分とともに、いくつかに別れた。

「わあああああ!!あ、あれここは…」

そして病室で目を覚ました。時間帯としては柚子より後で、日の光は完全にオレンジ色に染まっている。

「私確か…っ！………」

遊華はすぐ思い出す。…3人で挑み、何もできず、自分と顔のよく似た少女に一方的にやられたことを。…自分に至っては最初に、それも反撃すらできずやられたことを。

「……………」

…それを確実に思い出した遊華の表情は、暗い。

…そして時間が流れ、ランサーズ結成などの緊急会見やら後始末やら何やらが終わったのは夜の9時を回ったところだった。そして零児は、LDSのセンターコートへと向かっている。…現在のランサーズ候補をそこに呼び出しているのだ。

「…二人とも、用意は？」

「万全です」

「間違いないでしょう…しかし、少々ストレートなのは」

「確証はあっても、ヤツがスパイなら情報を易々と吐かないだろう。捕縛できればいいが…」

「確実に無理でしょうね」

「私もそう思う」

そして、センターコートへと出る。…そこには遊矢、権現坂、沢渡、デニス、柚子、ユーキがいる。

「！赤馬零児!!」

「待たせてすまない。会見が少し長引いてしまった」

「オレはさつき来たばかりだから気にしてないぜ」

「それはお前だけだ」

「ホントに付き合いさつき来たばかりでしたからね」

「約東通りの時間に来なかったくせに」

…ランサーズ候補全員ではなく、あまり多くはない。さすがに時間が時間だ。むしろ目当ての人物以外にここまで集まったことに感謝しなくてはいけない。

「さてここに来たのは…デニス・マックフィールドに対し、スパイ容疑がかかっていることだ」

「！…へえ」

「え?!デニスが、スパイ?!」

「アカデミアの…だ」

「…ボク、君らに疑われるようなことをした覚えなんてないんだけどね…」

「まあ、知らぬ存ぜんを通すのも容易いだろう…ではさっそくだが本題に移ろう。中島、例のものを」

「はい。…こちらは、3回戦の最中に撮られたものです」

「ん?…なっ?!」

再び中島はタブレットを操作し、ある画像を見せる。…そこに  
は、街の一面にて…誰かと誰かが話しをしている様子が映っていた。

「そしてこれが、拡大、鮮明化したものです」

「！こ、これって…デニス?!」

「誰かと話している…誰だこいつは」

「アカデミアのユーリという人物…いわゆる、ユートと同様、榊遊矢、キミによく似た人物だ。ちなみに彼とデュエルしてアカデミアであるということは、ユーキ、そして私自身も相手をしたからよく知っている」

「！あ、アカデミア…」

全体的に紫色の人物…後ろ姿からして、零児はデュエルしたユーリ

と判断した。零児が見たユーリとその特徴がしつかりと一致しているのだ。

「…これでもまだ、言い逃れをするのか？」

「…まさかそんな証拠があるなんてね」

「デニス、お前…なんでアカデミアなんかに！」

「それは…つと！」

不意にデニスが飛び退くと、デニスがいた場所にデュエルアンカーが飛んできて、地面へと激突、消えた。そして…センターコート観客席のほうから、黒咲が飛び降りてきた。

「ちっ、外したか」

「多分さっさと動揺させて捕まえようとする計画だったんだろうけど、すぐに予想できたよ。デュエルアンカーを撃ち込むなら、デュエルディスクを狙う。驚いたけどすぐに予想はついたよ」

「!…高い推理力だな」

「まあこれでもエンターティナーだからね。こういう能力だって不要なわけじゃないさ」

零児が関心するが、黒咲は強い殺気をデニスに向け、もう1度ディスクを構える。

「次は外さない!!絶対に逃がしはしないぞ!!」

「悪いけど、こんな状況でバレたんなら、逃げるが勝ちだよ。…それと遊矢」

「!え、な、なんだ」

「…ボクはエンタメデュエリストでありそして…アカデミア。それが答えだよ」

そういうとデニスは素早くディスクを操作し、光に包まれ消えていった。

「…くっそ!!」

「…まさかアカデミアが…」

「ここに来る前、改めて彼の経歴を調べてもらっていたが…1学年に2人から3人はいそうなものになっていた」

「その経歴って…」



「真偽まで調べられる時間はなかったが、少なくともこのスタンダードでは嘘なのが間違いない」

真偽はともかく…融合次元の経歴を、さもこのスタンダード次元の経歴かのように偽ったのかもしれない。…スタンダードにおいては嘘でしかないが。

「…デニス…」

「遊矢…」

…デニスがアカデミアであった。そのことについては少し衝撃を受けているものもいたものの、1人を除いてそうでもない。…だが、遊矢は違う。同じエンタメデュエリストとして、エンターテイナーとしてすごい、素直にそう思えた。…そのデニスが、アカデミア…信じがたい事実だろう。

「…ちっ…オレはもう戻るぞ」

「ああ、すまなかった」

とても機嫌の悪そうな顔をした隼は、そのままさっさと帰ってしまった。…今回の出番はこれだけである。

「…さて…榊遊矢、私に対し、何か言う事はあるか？」

「…赤馬零児！オレを、オレ達を勝手にランサーズに入れるな！」

「キミなら、今後の伸び次第でより強くなる。ただこのスタンダードにいるより、他の次元でのデュエルを経験したほうがデュエリストとしても成長するだろう」

「そういう問題じゃない！」

「そうだな。勝手にランサーズ候補に入れてすまない。だが、別に断っても構わないぞ」

「え？」

…別に断っても構わない。零児はそう言った。まあ普通に考えれば当然だろう、勝手に候補に入れられたのだ、零児にとっては断られても仕方がないだろう。もっとも、遊矢は強制参加、というふうにごか考えていたが。

「だが断る前に少し、やってもらいたいことがある」

「やってもらいたいこと…？」

「それは…デュエルだ」

「デュエル…」

「そうだ。そして相手は私だ。…あのときの続きとはいかないが、あの時のデュエルの決着をつけよう」

「そういうと、零児はディスクのプレートを展開し、構える。…対する遊矢はというと…」

「…いや、なんでデュエルなんかを…」

「実力を確かめるためだ。さあ、どうする？私の挑戦を受けるか、それとも受けずに逃げるか…」

「…分かった。やろう」

「ではその前に、このカードを受け取れ」

「そういうと、零児は一枚のカードを遊矢に投げ渡す。それをしっかりと受け取った遊矢。そしてそのカードは…ペンデュラム・フュージョン。」

「…何のつもりだ」

「ペンデュラムに関するカードで君の持たないカードも、私は多数持っているだろう。そのアドバンテージを少しでも埋めるためだ…それがあれば、よりペンデュラムの幅が広がり、君をより強くするだろう」

「…つまり、オレが弱いつて言いたいのか？」

「現状ではまだ分からない。だから君の実力を見たいんだ。そのカードを手にいれた上での君の強さを」

「…分かった」

「そういうと遊矢はデッキに、ペンデュラム・フュージョンを入れ、ディスクを構えプレートを展開する。」

「…ではデュエルを始めよう。その前に1つ言っておくことがある」

「なんだ？」

「デュエル形式はアクションデュエル、ライフは8000で行く」

「…はあ!？」

「ライフ8000、つまりノーマルルールでのライフだ。本来アクションデュエルは、リアルソリッドヴィジョンを使うという性質上、

体への負担を考えライフポイント4000からスタートするハーフルールで行われている。…それを、通常の8000で行うというのだ。

「ライフ4000ではいくらアクションデュエルとは言え、早々に終わってしまうだろう。何より…君と私の実力差を計るには、ちょうどいい」

「ちょうどいいって…」

「ライフ差が近ければ近いほど実力差は近くなり、遠ければ遠い程…その分、実力差も開く。もつとも、私のデッキだとそうはいかないかもしれないがな」

そうでない場合もあるが、そうである場合もある。ライフが減っていれば、その分攻撃が通った、ということにも繋がる…零児のデッキのDDは自らダメージを受けに行くタイプのデッキだが。

「では始めよう。アクションフィールド、未来都市ハートランド発動！」

「え、ちよつと！」

零児、遊矢以外が観客席に移動したのを確認した零児は、アクションフィールドを発動する。それは…隼と素良が戦ったアクションフィールド、未来都市ハートランド。…隼達の故郷、エクシーズ次元のハートランドをイメージして作り上げたアクションフィールドだ。

「…分かった。戦いの殿堂に集いしデュエリスト達が！」

「モンスターと共に地を蹴り、宙を舞い！」

「フィールド内を駆け巡る！」

「見よ！これぞデュエルの最強進化系！」

「アクション…」

「デュエル!!」

零児 LP 8000

遊矢 LP 8000

### 第37話 対決 遊矢VS零児 前編

零児 LP 8000

遊矢 LP 8000

フィールドにアクションカードが飛び散り、デュエルが始まる。先攻は…零児だ。

「…では私の先攻だ。私は手札から永続魔法、地獄門の契約書を発動。1度使ったから、これは分かるな？」

「1ターンに1度、デッキからDD1体を手札に加える…」

「そして私のスタンバイフェイズに、私は1000ポイントのダメージを受ける。ではさっそく、地獄門の契約書の効果でデッキから、DD魔導賢者コルペニクスを手札に加え…手札のDDスワラル・スライムの効果。このカードを含む融合素材を手札から墓地へ送り、DDD融合モンスターを融合召喚する。この効果でスワラル・スライムと、先ほど手札に加えたDD魔導賢者コルペニクスを融合」

「DDが2体…まさかこれって」

緑色に目玉のついたスライムと、太陽のような球体を内包する賢者が現れ、混ざり合う。

「自在に形を変える神秘の渦よ、天の動きを説いた賢者よ！今1つとなり、新たな王を生み出さん！融合召喚！生誕せよ、DDD烈火王テムジン！」

DDD烈火王テムジン ATK 2000

フィールドに現れたのは、遊矢が以前見た炎を操る王。…そして、予想が正しければこの後は…。

「さらに手札からチューナーモンスター、DDナイト・ハウリングを通常召喚！」

「！やっぱり来る…」

「DDナイト・ハウリングのモンスター効果。墓地に存在するDD魔導賢者コルペニクスを特殊召喚する！」

DDナイト・ハウリング ATK 300

DD魔導賢者コルペニクス DEF 0

零児のフィールドに口だけのモンスターが現れ、咆哮をあげる。そしてその隣に、先ほど墓地へ送られたコルペニクスが現れる。

「コルペニクスのモンスター効果。1ターンに1度、このカードが召喚、特殊召喚された場合、デッキからDDか契約書、どちらか一方を墓地へ送る。私はデッキから、DDバフオメットを墓地へ送る。そして：レベル4のDD魔導賢者コルペニクスに、レベル3のDDナイト・ハウリングをチューニング！闇を切り裂く咆哮よ、疾風の速さを得て、新たな王の産声となれ！シンクロ召喚！生誕せよ、レベル7！DD疾風王アレクサンダー！」

DD疾風王アレクサンダー ATK 2500

ナイト・ハウリングが3つの歯車になり、その中にコルペニクスが入り、4つの星が変わる。歯車から光が放たれ、風を操る王が現れる。「：墓地にはスワラル・スライムと、ナイト・ハウリング、そしてさつき墓地へ送られたバフオメット：スワラル・スライムはレベル2、ナイト・ハウリングは3：：ということは、バフオメットに何か秘密があるに違いない！」

「では疾風王アレクサンダーを特殊召喚したことにより、烈火王テムジンのモンスター効果発動。墓地から、DDバフオメットを特殊召喚。そしてバフオメットが特殊召喚されたことで、疾風王アレクサンダーの効果発動。墓地のスワラル・スライムを特殊召喚する」

DDバフオメット DEF 1800

DDスワラル・スライム DEF 200

零児が呼び出したのは左腕がコウモリの羽になっており、右腕は2本ある山羊の角と鳥の羽を持つ悪魔、そしてスワラル・スライムが現れる。

「DDバフオメットの効果発動！1ターンに1度、バフオメット以外の自分フィールドのDDモンスター1体のレベルを、1から8任意の数値に変更する。私はスワラル・スライムを選択し、レベルを4にする！」

「この展開、あのときとほぼ同じ」

DDスワラル・スライム 星2↓4

「私は、レベル4のDDスワラル・スライムとDDバフォメットで、オーバーレイ！この世の全てを総べるため、今世界の頂に君臨せよ！エクシーズ召喚！生誕せよ、ランク4！DD怒濤王シーザー！」  
DD怒濤王シーザー ATK 2400

フィールドに現れた穴にバフォメットとスワラル・スライムが紫の光になって飛びこみ：以前見た怒濤王シーザーが現れる。

「…そして私は、カードを2枚セットし、ターンエンド」

零児 手札0 LP 8000

モンスター DDD烈火王テムジン×1(攻)、DDD疾風王アレクサンダー×1(攻)、DDD怒濤王シーザー×1(攻) OU×2

魔法・罠 永続魔法「地獄門の契約書」×1、セットカード×2

「この状況：前するときとほぼ同じだな…」

「ええ：違うところもあるけど、よく似てる…」

「ん？なんだ、どういうことだ？」

「あ、確か前にデュエルしたことがあるんですけど…」

観客席では：以前の状況をよく覚えている柚子、権現坂とそのときの状況を知らない沢渡、そして話だけは聴いたことにあるユーキだ。

「前に赤馬零児とデュエルしたとき、今の状況とほぼ同じ状況だったのよ」

「召喚順も同じ、違うのはテムジンとシーザーの召喚手順だな」

「へー…んでそのときは？」

「確か、途中で中止になったんですけど…」

「ああ…」

「…でも、遊矢大丈夫かな…赤馬零児も、あるときよりも強くなっているみたいだし…」

…このフィールド：以前行った零児とのデュエルによく似ている。違うのはフィールドとライフ、そして召喚までの一部手順だろうか。ならば…。

「(超えてやる…あのときのオレを!!)オレのターン、ドロロー!…さつそくあんたから貰ったカード、使わせてもらう!」

「ほう…」

「でもその前に…オレは手札からEMドクロバット・ジョーカーを召喚!ドクロバット・ジョーカーが召喚に成功したとき、デッキからEM、オッドアイズ、魔術師のいずれかのモンスターを手札に加える!オレはオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを手札に加える!」

EMドクロバット・ジョーカー ATK 1800

ドクロバット・ジョーカーが現れ、オッドアイズが手札に加えられた。そして次は…。

「オレは、スケール8の時読みの魔術師と、スケール5の慧眼の魔術師で、ペンデュラムスケールをセッティング!」

光の柱が2つ現れ、片方に時読みの魔術師、もう片方に慧眼の魔術師が昇ってきた。

「本質を見極める、慧眼の魔術師よ!その誠実なる力で、正しき道をここに記せ!慧眼の魔術師のペンデュラム効果!自分のもう片方のペンデュラムゾーンに魔術師かEMがいるときにこのカードを破壊し、デッキから同名以外の魔術師をペンデュラムゾーンにセッティングする!オレは、スケール2の降竜の魔術師をセッティング!」

慧眼の魔術師が破壊され、代わりに降竜の魔術師が昇ってくる。

「…レベル3から7か」

「そうだ!これでレベル3から7のモンスターを同時に召喚可能!揺れる、魂のペンデュラム!天空に描け光のアーク!!ペンデュラム召喚!さあ現れる!オレのモンスター達!エクストラデッキからレベル4の慧眼の魔術師!手札から、雄々しくも美しく輝く二色の眼!オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン!!」

慧眼の魔術師 ATK 1500

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK 2500

オッドアイズと慧眼の魔術師がフィールドに降り立つ。そして、レベル4が2体。

「オレはレベル4の慧眼の魔術師と、ドクロバット・ジョーカーでオー

バーレイ！2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！漆黒の闇より、愚鈍なる力に抗う反逆の牙！今降臨せよ！エクシーズ召喚！穿て、ランク4！ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン!!」

「！ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン…」

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン ATK 2500

慧眼の魔術師が黄色、ドクロバット・ジョーカーが紫の光に変わり、フィールドに現れた渦に飛びこむ。そして渦からは霧と共に…ダーク・リベリオンが現れた。

「ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンのモンスター効果！1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ使い、相手フィールドのモンスターの攻撃力を半分にし、その数値分、ダーク・リベリオンの攻撃力をアップさせる！オレは、アレクサンダーの攻撃力を半分にする！トリーズン・デイスチャージ!!」

DDD疾風王アレクサンダー ATK 2500↓1250

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン ATK 2500↓3750

ダーク・リベリオンから放たれた雷がアレクサンダーを拘束し、その力を弱め、その上でダーク・リベリオンの力をあげる。

「…竜の魂宿す、降竜の魔術師よ！雄々しきその力で相手を喰らえ！降竜の魔術師のペンデュラム効果！相手フィールドのモンスター1体の種族を、ターンの終わりまでドラゴン族にする！オレは、アレクサンダーを…（…いや、待て…赤馬零児には、戦乙女ヴァルキリーの契約書がある。…それを使われたら、ルーンアイズじゃテムジンと相打ちになる。…それなら…）いや、テムジンを選択する!!」

DDD烈火王テムジン 悪魔族↓ドラゴン族

「ドラゴン族に…ということとは、何かあるのか？」

「ああ、行くぞ！オレは手札から魔法カード、ペンデュラム・フュージョンを発動！このカードは自分フィールドのモンスターを素材に融合召喚を行い、ペンデュラムゾーンにカードが2枚あれば、ペンデュラムゾーンのカードも素材にできる！オレはオッドアイズ・ペン



デュラム・ドラゴンと、ペンデュラムゾーンの降竜の魔術師を融合！  
大いなる龍を宿す者、眩き光となりて龍の眼にいざ宿らん！融合召喚  
！秘術振るいし魔天の龍！ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン！！」  
ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK 3000

時読みの魔術師 Pスケール 8↓5

降竜の魔術師とオッドアイズがフィールドに現れた渦の中に入り、  
そこからルーンアイズが現れる。

「バトルだ！ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴンで、疾風王アレク  
サンダーを攻撃！光輪のシャイニー・バースト！！」

「リバースカードオープン！永続トラップ、戦乙女ヴァルキリーの契約書！私のD  
Dモンスターの攻撃力を、1000ポイントアップさせる！！」

DDD 烈火王テムジン ATK 2000↓3000

DDD 疾風王アレクサンダー ATK 1250↓2250

DDD 怒濤王シーザー ATK 2400↓3400

「だけどこっちのほうが上だ！」

「なら甘んじて受けよう」

零児 LP 8000↓7250

アレクサンダーが破壊されるも、ダメージは軽減され750。だが  
本命は…こっちではない。そして零児はというと、アクションカード  
を捜しに向かった。

「次にテムジンを攻撃！そして降竜の魔術師を融合素材としたこと  
で、ルーンアイズはドラゴン族と戦闘を行うときに攻撃力が2倍にな  
る効果を得ている！」

「2倍だと!?!」

ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK 3000↓60

00

「連撃のシャイニー・バースト!!」

「ぐあああ！」

零児 LP 7250↓4250

ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK 6000↓30

00

衝撃によって零児は吹き飛ばされる。…が、吹っ飛んだ先でアクションカードを発見、さり気なく回収した。そしてルーンアイズの攻撃力は、ドラゴン族以外との戦闘ではそのままのため、3400になったシーザーは倒せない。

「そしてダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンで、怒濤王シーザーを攻撃！ 反逆のライトニング・デイスオベイ!!」

「ぐあああー!」

ダーク・リベリオンが突撃していき、シーザーにその牙を突き立て破壊した。

零児 LP 4250↓3900

「ぐっ…だが、破壊されたシーザーの効果で、デッキから契約書である魔神王の契約書を手札に加える」

「カードを1枚伏せて、ターンエンド!」

遊矢 手札2 LP 8000

モンスター ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン×1 (攻)、  
ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン×1 (攻)

魔法・罫 セットカード×1

Pゾーン 時読みの魔術師

零児がいくら先攻とはいえ、いきなりライフは3900…何もしなければ次のスタンバイフェイズには1900になる。そしてターンを終えた遊矢は、アクションカードを探しに走る。

「では私のターン、ドロ。スタンバイフェイズ、地獄門、戦乙女<sup>ヴァルキリー</sup>2枚の効果で、合計2000のダメージを受ける…つぐううう…」

零児 LP 3900↓2900↓1900

「ライフ1900…後少し!」

「そうだな…だが、まだだ! 私は地獄門の契約書の効果により、デッキからDDD壊薙王アビス・ラグナロクを手札に加え、スケール5のアビス・ラグナロクをセッティング! そして永続魔法、魔神王の契約書を発動。そして、魔神王の契約書の効果を発動。手札のDDヴァイス・テュポーンと墓地のDDスワラル・スライムを融合! スワラル・スライムは墓地のため、除外する! 数多の怪物の頂点に立つ者よ、自

在に形を変える神秘の渦と混ざり合い、さらなる高みへ上がれ！」

下半身と片腕がへび、特に腕のほうは頭のついたメドゥーサのようなモンスターとスワラル・スライムが融合の渦に入る。渦からは：手が4本になり、剣の数もさらに増えて背後の炎のような剣もより強大になり：同時にさらなる力を得たテムジンが現れる。

「融合召喚！生誕せよ、DDD烈火大王エグゼクティブ・テムジン！」  
エグゼクティブ・テムジン ATK 2800

「さらにDDD壊薙王アビス・ラグナロクのペンデュラム効果！DDモンスターが特殊召喚に成功したとき、墓地のDD1体を特殊召喚でき、その後、1000ポイントのダメージを受ける！DDD烈火王テムジンを特殊召喚！ぐうう…」

零児 LP 1900↓900  
DDD烈火王テムジン DEF 1500

「攻撃力2800：でもライフは900、後少し…」

「そう思うか？ではトラップ発動、契約洗淨<sup>リース・ロンダリング</sup>。私のフィールドの契約書を全て破壊し、その数だけデッキからカードをドロージ、さらに破壊した数×1000ポイントのライフを回復する。私のフィールドには地獄門、戦乙女<sup>ヴァルキリー</sup>、魔神王の3枚の契約書がある。よって、3枚ドロージ、3000回復する」

「うっ…：そ、そうくるよな」

零児 LP 900↓3900

「…ではまずは：魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動！手札のDDネクロ・スライムを墓地へ送り、デッキからDDラミアを特殊召喚する！」

DDラミア DEF 1900

3枚のドロージとライフを3000回復した零児が呼び出したのは、下半身がへび、頭髮と手が花のように見える少しかわいらしいモンスターが現れる。ヴァイス・テュポーンとは大違いだ。

「そしてDDが特殊召喚されたことで、テムジンのモンスター効果！墓地のDDヴァイス・テュポーンを特殊召喚する！そしてその特殊召喚に対しエグゼクティブ・テムジンのモンスター効果！墓地からDD

ナイト・ハウリングを特殊召喚！」

「チューナー…ということはつまり、またシンクロを」

DDヴァイス・テュポーン DEF 2800

DDナイト・ハウリング DEF 600

「私はDDヴァイス・テュポーンの効果発動。自分フィールドのDD1体をリリースし、デッキからレベル7のDDD1体を特殊召喚する！テムジンをリリースし、デッキからレベル7のDDD制覇王カイゼルを特殊召喚する！」

「…何をするつもりだ」

DDD制覇王カイゼル ATK 2800

ヴァイス・テュポーンの効果で現れるカイゼル。ペンデュラム召喚されたときの効果は厄介だが、ペンデュラム召喚されなければそのままではない。…問題なのは、レベルだろう。

「そして、レベル7のDDヴァイス・テュポーンに、レベル3のDDナイト・ハウリングをチューニング！疾風宿す王者よ、高見へと至る暴風をその身に宿し、さらなる王の呼び声となれ！」

ナイト・ハウリングが3つの歯車になり、その中にヴァイス・テュポーンが入り、7つの星になる。歯車から光が放たれ、そこから重厚になった鎧を纏うアレクサンダーが現れる。背中のマントは2対の翼にも見えるマントになりそして剣は…波打つ刃の大剣へ変わっていた。

「シンクロ召喚！生誕せよ、レベル10！DDD疾風大王エグゼクティブ・アレクサンダー！！エグゼクティブ・アレクサンダーは、自分フィールドにこのカードを含むDDDが3体以上存在するとき、攻撃力は2倍となる！」

「に、2倍!？」

「そう、3000の2倍…6000だ」

DDD疾風大王エグゼクティブ・アレクサンダー ATK 300

0↓6000

「そしてさらにレベル7のDDD制覇王カイゼルに、レベル1のDDRミアをチューニング！紅に染められし剣を掲げ、英雄達の屍を越え

ていけ！」

DDDラミアが1つの歯車になり、その中に制覇王カイゼルが入り、7つの星になって直列に並ぶ。歯車から光が放たれ、長い白髪を靡かせ、黒い鎧を纏った身の丈ほどある大剣を持つ王が現れる。

「シンクロ召喚！生誕せよ、レベル8！DDD呪血王サイフリート！」

DDD呪血王サイフリート ATK 2800

「そしてエグゼクティブ・アレクサンダーの効果発動！そうだな…エグゼクティブ・テムジンと同じ特殊召喚効果、と言えはいいか？」

「！また墓地からDDを1体、特殊召喚する…」

「ああ。この効果で墓地から、DDD怒濤王シーザーを特殊召喚する！」

DDD怒濤王シーザー ATK 2400

「さらにランク4のDDD怒濤王シーザーを使い、オーバーレイ・ネットワークを再構築！英雄の名賜りし者、深遠なる大義もて、この世の全てをいざ射抜かん！エクシーズ・チェンジ！生誕せよ、ランク5！DDD狙撃王テル!!」

DDD狙撃王テル ATK 2300

「攻撃力、2300…（狙いは…）」

「狙撃王テルのモンスター効果！自分が効果ダメージを受けたターンに1度、このカードのオーバーレイ・ユニットを1つ使うことで、相手フィールドのモンスター1体の攻撃力を1000ポイントダウンさせ、相手ライフに1000ポイントのダメージを与える！私はルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを選択する！ピアシング・アロー！」

「！ぐっ…」

ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK 3000↓2000

遊矢 LP 8000↓7000

テムジンが放った矢は正確にルーンアイズと遊矢に直撃。遊矢に直撃したほうはすぐに消えたが、ルーンアイズのほうはそのまま突き刺さり、ルーンアイズが苦しげな声をあげる。

「そして手札から永続魔法、昇格の契約書を発動。このカードは、自分フィールドのDDDエクシーズモンスター1体を、ランクが1つ上のDDDエクシーズモンスターに、ランクアップさせる。私はランク5のDDD狙撃王テルで、オーバーレイ・ネットワークを再構築―」  
「連続ランクアップだって?!」

#### 昇格の契約書 永続魔法

「昇格の契約書」の②の効果は、1ターンに1度しか使用できない。

①自分のターンのスタンバイフェイズに発動する。自分は2000ポイントのダメージを受ける。

②1ターンに1度、自分フィールドの「DDD」モンスター1体を対象に、以下の効果を1つ選択して発動できる。この効果を発動するターン、自分は「DD」モンスターしか特殊召喚できない。

・そのモンスターをリリースし、そのモンスターよりレベルが1つ上の「DDD」モンスター1体をデッキから特殊召喚する。

・そのモンスターのランクより1つ上の「DDD」Xモンスター1体を、そのモンスターの上に重ねてエクストラデッキからX召喚扱いで特殊召喚する。

テルがフィールドに現れた渦に飛びこみ：そこから、少し重厚感のマシタシーザーが現れる。剣の先端は3つの突起状になり、突起部分を通過するように輪がついている。

「強大なる瀑布の力その身に宿し、世界の全てを頂点より見下ろせ！ランクアップ・エクシーズ・チェンジ！生誕せよ、ランク6！DDD怒濤大王エグゼクティブ・シーザー!!」

DDD怒濤大王エグゼクティブ・シーザー ATK 2800

「そして墓地のDDヴァイス・テュポーンの効果。このカードが墓地へ送られたターン、このカードを融合素材にレベル8以上のDDD融合モンスター1体を、融合召喚する。この際、融合素材となるモンスターは除外される。私はヴァイス・テュポーンとDDD制覇王カイゼルを融合！全てを制する王よ、数多の怪物の頂点に立つものの血を吸

い、竜を打ち倒す勇者となれ！融合召喚！生誕せよ、DDD剋竜王ベオウルフ！」

DDD剋竜王ベオウルフ ATK 3000

渦からベオウルフも現れ、吼える。…これで、5体だ。

「DDDが、5体…」

「アビス・ラグナロクの効果で戦闘ダメージが半減している以上は、このターンで決着はつかない…だが、これを乗り越えられるか？ 榊遊矢」

### 第38話 対決 遊矢VS零児 後編

フィールドの状況

遊矢 手札2 LP 7000

モンスター ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン×1(攻)、  
ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン×1(攻)

魔法・罫 セットカード×1  
Pゾーン 時読みの魔術師

零児 手札0 LP 3900

モンスター DDD烈火大王エクゼクティブ・テムジン×1(攻)、  
DDD疾風大王エクゼクティブ・アレクサンダー×1(攻)、DDD呪  
血王サイフリート×1(攻)、DDD怒濤大王エクゼクティブ・シー  
ザー×1(攻)、DDD剋竜王ベオウルフ×1(攻)

魔法・罫 永続魔法「昇格の契約書」×1  
Pゾーン 「DDD壊薙王アビス・ラグナロク」  
ターン状況：零児のメインフェイズ1

「!くっ…やってやるさ!」

「では…バトルだ!DDD疾風大王エクゼクティブ・アレクサンダー  
で、ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンを攻撃!」

「アクションマジック、奇跡!戦闘破壊を」

「エクゼクティブ・テムジンのモンスター効果!自分のターンに1度、  
相手の発動した魔法、罫カードの効果を無効にする!」

「!な…ぐあ!!」

遊矢 LP 7000↓6775

半減しているとはいえ、突風が遊矢を襲い、一気に吹き飛ばす。ダ  
メージが半減されているため、ライフが中途半端なことになってい  
る。

「続いて、DDD剋竜王ベオウルフでルーンアイズ・ペンデュラム・ド



ラゴンを攻撃！」

「させるか！…っ…アクションマジック、飛翔！ルーンアイズの攻撃力を、600ポイントアップさせる！」

「だがベオウルフの攻撃力を上回ることはできない！」

「ぐう…」

飛翔 アクション魔法

①相手ターンのバトルフェイズに自分フィールドのモンスター1体を対象に発動できる。そのモンスターの攻撃力・守備力を、このターンの終わりまで600ポイントアップさせる。

ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK 2000↓2600

遊矢 LP 6775↓6575

「では…エクゼクティブ・シーザーで、ダイレクトアタック！」

「永続トラップ、E M エンタメイトピンチヘルパーを発動！ダイレクトアタックを無効にし、デッキからE M エンタメイトを…」

「エクゼクティブ・シーザーのモンスター効果！モンスターを特殊召喚する効果を含む効果が発動した場合、オーバーレイ・ユニットを1つ使うことでその効果を無効にし、破壊する。その後、このカードとこのカード以外のDDモンスター1体の攻撃力を、ターン終了時まで1800ポイントアップさせる！」

「なっ?!そ、そんな効果を?!」

DDD怒濤大王エクゼクティブ・シーザー OU 1↓0

エクゼクティブ・シーザーの剣にオーバーレイ・ユニットが飛びこみ、その状態で剣を地面に突き立てるエクゼクティブ・シーザー。するとピンチヘルパーのカードをちようど貫くように水の柱が地面から吹き上がり、E M エンタメイトピンチヘルパーのカードを破壊する。

「そしてエクゼクティブ・シーザーの効果により、エクゼクティブ・シーザーと、エクゼクティブ・テムジンの攻撃力を、1800アップさせる」

DDD怒濤大王エクゼクティブ・シーザー ATK 2800↓4600

DDD烈火大王エクゼクティブ・テムジン ATK 2800↓4600

「やれ、エクゼクティブ・シーザー！」

「!ぐあああ!!…っ！」

遊矢 LP 6575↓4275

エクゼクティブ・シーザーが剣を地面に叩きつけ、そこから一気に水が吹き出し、激流となつて遊矢を押し流す。…途中、流されたアクションカードの1枚を遊矢は獲得するものの、ダメージは大きい。

「続けてエクゼクティブ・テムジン、サイフリースの順でダイレクトアタック!!」

「!アクションマジック、回避!攻撃を」

「DDD呪血王サイフリースのモンスター効果!1ターンに1度、相手の表側の魔法もしくは罠カードの効果も、次のスタンバイフェイズまで無効にする!そしてこの効果は、相手ターンにも使用できる!」

「!!そんなっ…がああああ!!」

遊矢 LP 6275↓1975↓575  
エクゼクティブ・テムジンの炎が、サイフリースの黒い斬撃が、遊矢を襲う。半減しているとはいえ2体の攻撃によるダメージは3700、遊矢は大きく吹っ飛ぶ。

「これでターンエンド。このエンドフェイズ、エクゼクティブ・シーザーの効果は終了し、2体の攻撃力は元に戻る。さあどうする、榊遊矢。私の手札は0、伏せカードもない。逆転は容易いぞ?」

DDD怒濤大王エクゼクティブ・シーザー ATK 4600↓2800

DDD烈火大王エクゼクティブ・テムジン ATK 4600↓2800

零児 手札0 LP 3900

モンスター DDD烈火大王エクゼクティブ・テムジン×1(攻)、

DDD疾風大王エクゼクティブ・アレクサンダー×1(攻)、DDD呪

血王サイフリート×1（攻）、DDD怒濤大王エクゼクティブ・シーザー×1（攻）、DDD剋竜王ベオウルフ×1（攻）

魔法・罫 永続魔法「昇格の契約書」×1

Pゾーン 「DDD壊薙王アビス・ラグナロク」

「…いくら赤馬零児の手札がないからって…魔法か罫を無効にできるモンスターが2体も…」

「いいえ、エクゼクティブ・テムジンは相手ターンには効果を使用できないので、1体です」

「だがそれでも1回は無効にされる…」

「手札なし、伏せカードもないので突破は楽な方だと思えますが…まずは手札でそれが可能かどうか、ですね」

「アクションカード次第か…」

零児の言う通り、判明済みの手札1枚、伏せカードなしなら、逆転は可能だろう。…もつとも、それはちゃんと手札にそれが可能なカードがある場合だが。…そして今の遊矢の手札では、無理だろう。ドローカード次第で変わるが。

「ああ…まだ、終わってない！オレの、ターン!!…オレはスケール1の星読みの魔術師を、ペンデュラムゾーンにセッティング！これでレベル2から7のモンスターが同時に召喚可能！」

星読みの魔術師が光の柱の中から昇ってくる。そしてその下に、1の数字が浮かび上がる。

「再び揺れる、魂のペンデュラム！天空に描け光のアーキ！ペンデュラム召喚！エクストラデッキからレベル7、降竜の魔術師！雄々しくも美しい二色の眼、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン！そして手札から、レベル2、EMソード・フィッシュ！レベル4、EMセカンドンキー！」

降竜の魔術師 ATK 2200

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK 2500

EMソード・フィッシュ DEF 800

エンタメイト  
E Mセカンドンキー ATK 1000

空に空いた穴から紫の光が2つとオレンジの光が1つフィールドに降り立ち、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンと、降竜の魔術師、そしてこげ茶色のロバ、セカンドンキーとソード・フィッシュが現れ：ソード・フィッシュが増える。

「ソード・フィッシュの効果！このカードが召喚、特殊召喚に成功したとき、相手フィールドのモンスターの攻撃力、守備力を600ポイントダウンさせる！さらにチェーンしてセカンドンキーのモンスター効果！このカードが召喚、特殊召喚に成功した場合、自分のデッキからE M1体を墓地へ送る！そして自分のペンデュラムゾーンにカードが2枚あれば、墓地へ送る代わりに手札に加える！デッキからE Mコンを手札に加える！」

DDD烈火大王エクゼクティブ・テムジン ATK 2800↓2200

DDD疾風大王エクゼクティブ・アレクサンダー ATK 6000↓5400

DDD呪血王サイフリート ATK 2800↓2200

DDD怒濤大王エクゼクティブ・シーザー ATK 2800↓2200

DDD克竜王ベオウルフ ATK 3000↓2400

ソード・フィッシュが無数：おそらく、1体につき6体なので、30体ほどいると思われる。それら全てが相手モンスターへと突撃していく。

「：厄介なモンスターが現れたか」

エンタメイト  
「さらにE Mコンを召喚！」

エンタメイト  
E Mコン ATK 600

遊矢が呼び出したのは：額に角の生えた胸の大きい少女。全体的に青っぽい。そしてちやっかり胸を強調している。：観客席のほうで約1名うるさいのがいるが、気にしないでおこう。

エンタメイト  
「E Mコンの効果！このカードと共に、攻撃力1000以下のE M1体を守備表示にすることで、デッキからオッドアイズ1体を手札に

加える！攻撃力1000のセカンドンキーを守備表示にし、デッキからオッドアイズ・セイバー・ドラゴンを手札に加える！」

エンタメイト

E Mコン ATK 600 ↓DEF 1200

エンタメイト

E Mセカンドンキー ATK 1000 ↓DEF 2000

エンタメイト

「そして光属性のE Mコンを墓地へ送り、デッキからオッドアイズ・ドラゴンを墓地へ送ることで、このカードは特殊召喚できる！眩しき光を受け、聖なる力を持つて道を切り開け！現れる、白銀の剣携えし二色の眼、オッドアイズ・セイバー・ドラゴン！そしてソード・フィッシュの効果！自分フィールドに他のモンスターが特殊召喚されたことで、相手フィールドのモンスターの攻撃力、守備力を600ポイントダウンさせる！」

オッドアイズ・セイバー・ドラゴン ATK 2800

DDD 烈火大王エクゼクティブ・テムジン ATK 2200 ↓1600

DDD 疾風大王エクゼクティブ・アレクサンダー ATK 5400 ↓4800

DDD 呪血王サイフリート ATK 2200 ↓1600

DDD 怒濤大王エクゼクティブ・シーザー ATK 2200 ↓1600

DDD 克竜王ベオウルフ ATK 2400 ↓1800

コンが消え、剣を携えたオッドアイズがフィールドに降り立ち、ソード・フィッシュが相手モンスター目掛け飛んでいく。そして次に：オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンと、セカンドンキーの後ろに融合の渦が現れる。

「さらに闇属性、ドラゴン族のオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンと、獣族のセカンドンキーをリリース！このカードは、融合素材となるモンスターを自分フィールドからリリースすることで、特殊召喚できる！仲間呼ぶ獣よ、二色の眼の竜と一つとなりて新たな力生み出さん！融合召喚！出でよ、野獣の眼光し獰猛なる竜、ビーストアイズ・

ペンデュラム・ドラゴン！」

ビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK 3000

DDD 烈火大王エクゼクティブ・テムジン ATK 1600↓1000

DDD 疾風大王エクゼクティブ・アレクサンダー ATK 4800↓4200

DDD 呪血王サイフリート ATK 1600↓1000

DDD 怒濤大王エクゼクティブ・シーザー ATK 1600↓1000

DDD 克竜王ベオウルフ ATK 2400↓1800

2体が融合の渦に入り、一番大きな渦から咆哮を轟かせ、ビーストアイズが現れる。そしてソード・フィッシュが発射され、相手モンスターへの攻撃力は、エクゼクティブ・アレクサンダー以外は悲惨だ。…もつとも、効果が切れればエクゼクティブ・アレクサンダーの攻撃力も悲惨になるだろう。

「バトル！まずはオッドアイズ・セイバー・ドラゴンで、DDD 烈火大王エクゼクティブ・テムジンを攻撃！剣撃無双ストライク・ソード！」  
「ぐっ……」

零児 LP 3900↓2100

「さらにセイバー・ドラゴンがモンスターを戦闘破壊したことで、効果発動！相手フィールドのモンスター1体を、破壊する！エクゼクティブ・アレクサンダーを破壊！」

「破壊されたか…」

オッドアイズ・セイバー・ドラゴンがエクゼクティブ・テムジンに一気に迫り、背中の刃や手の爪で切り付ける。テムジンのほうは剣や盾で防ぐものの、何度も切り付け剣や盾をボロボロにし、最後はブレス攻撃を放って破壊する。さらに今度は素早くエクゼクティブ・アレクサンダーに迫り、回転しながら背中の剣で斬りつけ破壊する。

「さらにビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴンで、ベオウルフを攻

撃!!激動のヘルダイブ・バースト!!」

「アクションマジック、シエルター・シャッター!自分が既にダメージを受けている場合に発動でき、発動後の戦闘ダメージを0にする!」

シエルター・シャッター アクション魔法

①自分がこのターン、戦闘もしくは効果ダメージを受けている場合、発動できる。互いのプレイヤーはこのカードの発動後、ターン終了時まで戦闘ダメージを受けない。

手にしたアクションカードをすぐに使った零児。だが…。

「ならビーストアイズの効果!融合素材に使用した獣族モンスター:今回は特殊召喚時にリリースしたセカンドンキーの攻撃力分のダメージを相手に与える!セカンドンキーの攻撃力は1000!よつて、1000ポイントのダメージを与える!」

「ぐっ…」

零児 LP 2100↓1100

「そして降竜の魔術師でサイフリートを攻撃!」

「ここまで迫るか…破壊されたサイフリートの効果!このカードが破壊された場合、フィールドの契約書の数×1000ポイント、ライフを回復する!」

降竜の魔術師の魔術により、サイフリートが破壊される。だがサイフリートも置き土産と零児のライフを僅かに回復させる。

零児 LP 1100↓2100

「降竜の魔術師のモンスター効果!このカードの種族をドラゴン族に変更する!そしてオレは、レベル7のドラゴン族、オッドアイズ・セイバー・ドラゴンと、降竜の魔術師で、オーバーレイ!」

降竜の魔術師 魔法使い族↓ドラゴン族

オッドアイズ・セイバー・ドラゴンと降竜の魔術師、2体のモンスターが黄色と紫の光に変わってフィールドに現れた穴の中へと飛び込む。

「2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築!二色の眼

の竜よ、その黒き逆鱗を震わせ、刃向う敵を殲滅しろ！エクシーズ召喚！ランク7、怒りの眼輝けし霸王黒竜！オッドアイズ・リベリオン・ドラゴン!!」

霸王黒竜オッドアイズ・リベリオン・ドラゴン ATK 3000

DDD怒濤大王エクゼクティブ・シーザー ATK 1000↓400

フィールドに現れた穴からは黒い霧と共に、オッドアイズ・リベリオンが現れ、遊矢が名前を叫ぶと霧を咆哮によつて払う。…もつとも、その咆哮にはモンスターを破壊するほどの力はないが。

「…これで、ターンエンド!」

遊矢 手札0 LP 575

モンスター エンタメイト EMソード・フィッシュ×1(守)、ビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴン×1(攻)、霸王黒竜オッドアイズ・リベリオン・ドラゴン×1(攻) OU×2

魔法・罫 なし

Pゾーン 星読みの魔術師 時読みの魔術師

「…凄まじい猛攻だな。あまり悠長なことを言っている暇は、ないようだ」

「…今までも手加減していたのか」

「手加減と言っても、最初だけだ。もつとも本気ではあるが全力かどうかと言われれば、微妙だろう…それでは私のターン、ドロウ。スタンバイフェイズ、昇格の契約書の効果で、私は2000ポイントのダメージを受ける…つぐううう!!」

零児 LP 2100↓100

1度に受けるダメージは今までの契約書よりも大きい。ダメージを回復に変換、もしくはは無効にできるカードがあればよかったが、そんなカードは今手元にはない。

「ぐっ…では行かせて、もらおうか。…私は永続魔法、地獄門の契約書を発動し、効果を発動!デッキから、DDD運命王ゼロ・ラプラスを手札に加える!そして私は、エグゼクティブ・シーザーをリリース



「！来る…」

「時の闇に潜むパラダイム、不可視の領域より必然の存在が、因果律の悪魔を呼び覚ます」

…不意に、フィールドに闇が現れる。それは霧であり黒い水のようなであり、影であった。そしてその闇の中心、零児の前に巨大な穴が開いた。

「…さあ、具現せよ！DDD運命王ゼロ・ラプラス!!」

DDD運命王ゼロ・ラプラス ATK ? (0)

…闇の穴から、それは現れた。闇そのものであったそれは形となり、色がつく。…山羊の頭蓋骨を模した存在…まさしく、悪魔とも呼ぶべき、恐ろしい存在。

「…ここ、攻撃力が…決まっていない?」

「そう、このカードの存在が、私を勝利へと導く。…そしてリリースしたエグゼクティブ・シーザーの効果。エグゼクティブ・シーザーが墓地へ送られたら、デッキから契約書を手札に加えられる。これによりデッキから魔神王の契約書を手札に加え、発動!その効果により私は墓地に存在する…DDD疾風王アレクサンダーと、DDD狙撃王テルを除外し融合!疾風宿す王者よ、全てを射抜く狩人と混ざり合い、真の王と生まれ変わらん!融合召喚!生誕せよ、神の威光伝えし王!DDD神託王ダルク!」

DDD神託王ダルク ATK 2800

2体の王が混ざりあい、そこからダルクが現れる。…これより、DDDの本領が発揮される。

「そして私はペンデュラムゾーンのDDD壊薙王アビス・ラグナロクのペンデュラム効果!墓地のDDD烈火大王エグゼクティブ・テムジンを特殊召喚し、1000ポイントのダメージを受ける…が、神託王ダルクは、私が受ける効果ダメージを全て同じ数値の回復に変換する」

「ダメージを変換…ここまで来て…」

零児 LP 100↓1100

DDD 烈火大王エグゼクティブ・テムジン ATK 2800

ダルクの隣にエグゼクティブ・テムジンが現れ、ペンデュラムゾー  
ンのアビス・ラグナロクから紫色のオーラが零児目掛け放たれるが：  
それはダルクによって白い光に変換され零児のライフが回復する。

「そして、昇格の契約書の効果発動。自分フィールドのダルクをリ  
リースし、ダルクよりレベルが1つ上のDDD1体を、デッキから特  
殊召喚する。この場合はダルクのレベルは7、つまりレベル8のDD  
D壊薙王アビス・ラグナロクを特殊召喚！そしてアビス・ラグナロク  
が特殊召喚された場合、墓地のDDD1体を特殊召喚できる！甦れ！  
DDD呪血王サイフリート!!さらにDDが特殊召喚されたことによ  
り、エグゼクティブ・テムジンの効果！墓地の神託王ダルクを特殊召  
喚する！」

DDD 壊薙王アビス・ラグナロク DEF 2800

DDD 呪血王サイフリート ATK 2800

DDD 神託王ダルク ATK 2800

ダルクが消え、同じ場所にアビス・ラグナロクが現れすぐに地面に  
穴が開き、そこ目掛けアビス・ラグナロクのコードが伸び、サイフリ  
ートが雁字搦めの状態で引っ張り上げられ、フィールドに降り立ち、開  
放される。そのすぐ後にエグゼクティブ・テムジンが剣を掲げ、炎が  
吹き上がると共にフィールドの一面から火柱が昇り、その中からダ  
ルクが現れる。…名前元のことを考えると少し複雑だ。

「…そんな…」

だがこの状況…効果ダメージは回復へと変換、魔法と罫を無効にで  
きるカードが2枚…そして未知のモンスターが1体。攻撃力では上  
回っているが、零児はそんな状況下でここまで展開するわけがない。  
「では…バトルだ！DDD運命王ゼロ・ラプラスで、霸王黒竜オツドア  
イズ・リベリオン・ドラゴンを攻撃！そしてこの瞬間、運命王ゼロ・  
ラプラスの効果発動！このカードの攻撃力は、戦闘を行う相手モン  
スターの攻撃力の、2倍となる！」

「に、2倍だって?!」

DDD 運命王ゼロ・ラプラス ATK ? ↓6000

ゼロ・ラプラスが周囲にある闇を集め球体状にしている。…近くにアクションカードがあっても、1枚だけ…手元にもない。…チエツクメイト、だろう。

「では…トドメだ」

「ぐあああああ!!」

遊矢 LP 575↓0

ゼロ・ラプラスが周囲の闇を集めて放つ闇のエネルギー球がオツドアイズ・リベリオンに直撃し、破壊され…遊矢のライフは、0になる。

「遊矢―!!」

デュエルが終了したことで、リアル・ソリッドヴィジョンが解除される。そして柚子と権現坂は一目散に遊矢のところへと駆け寄る。

「……はあ……負け、か…」

「遊矢、大丈夫?」

「…いや、大丈夫じゃない」

「そうか…だが、最後までよくがんばった」

「榊遊矢、気持ちはどうだ?」

零児も近づく。その頃には軽く駆け足だったユーキも近くに来ており、その後ろから南が、さらに後ろをノロノロと沢渡が歩いてきている。

「……悔しい…結局、オレじゃ勝てなかった」

「そう、君はまだまだ弱い。…何より、ランサーズ候補全員が、先ほどの結果を踏まえずとも私含めまだ強くなれるという基準で選んだだけであって、強いわけではない」

「な、なんだと!このオレ様が弱いつてのか!」

「実際負けているだろう。私とてアカデミアには一歩間違えば負けていたであろう相手がいる…それを踏まえれば、アカデミアに対抗するにはまだまだ力不足だ」

「!じゃあ、どうするんだよ!!」

「それについては、これから説明します。…では社長、どうぞ」

「ああ。…ランサーズ候補はこれより、合宿を行う」

え？と、その場にいる零児と南以外は驚いた声を漏らした。